史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ

越堂たたら跡

―発掘調査と文献調査・文書目録―

2022

出雲市教育委員会

（表紙）

塙団右衛門の家紋
（中輪に抱き柏）

櫻井家の家紋
（丸に立ち梶の葉）

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ

越堂たたら跡

―発掘調査と文献調査・文書目録―

2022

出雲市教育委員会

序

田儀櫻井家は，出雲市多伎町奥田儀を本拠地として江戸時代初期から約250年間にわたりたたら製鉄を営み，最盛期には出雲地方で一二を争うほどの生産量を誇る鉄師にまで成長を遂げました。また，製鉄業だけではなく田畑の開墾や道路の開削などにも尽力し，地域経済の発展にも大きく貢献しました。現在，田儀櫻井家のたたら製鉄遺跡は，地元の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会の協力によって良好な状態で保たれ，調査研究が進んでいます。

2003年11月，旧多伎町が開始した総合調査は，2005年3月の市町村合併後も出雲市に継承され，田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の発掘調査と史料調査を両輪として研究が進められてきました。これらの成果によって遺跡の歴史的価値が認められ，2006年1月に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡が国指定史跡となり，さらに2009年2月には越堂たたら跡と聖谷たたら跡が追加指定を受けました。現在では史跡や関連遺跡の調査研究のほか，史跡の整備や活用にも積極的に取り組んでいます。

本書は，2013年度から着手した越堂たたら跡の発掘調査および文献調査の成果などをまとめたものです。田儀櫻井家の基幹的なたたら場として製鉄経営を支えた重要な越堂鈩について，発掘調査や文献調査などから多角的に検討をすることで，歴史的な評価を具体的に明らかにするとともに，今後の調査研究や史跡整備に資する内容としてまとめることができました。本書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として，学術ならびに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後になりましたが，ご指導やご協力をいただきました田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会の委員の方々，文化庁，島根県教育庁文化財課や関係者の皆様に対して心より謝意を表するとともに，普段から遺跡の保存・維持活動および調査研究にご協力いただいている地元の方々や保存会の皆様に深く感謝いたします。

2022年3月

出雲市教育委員会
教育長　　杉谷　学

例　言

1．本書は史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の越堂たたら跡（島根県出雲市多伎町口田儀 910 番 51 外）における調査成果をまとめた報告書である。

2．本書で報告する調査内容の実施年度は下記のとおりである。

発掘調査　　2013（平成 25）～ 2017（平成 29）年度

報告書作成　2021（令和 3）年度（整理作業は 2013 年度から継続して実施）

3．調査は以下の体制で実施した。

出雲市文化環境部　2013・2014，市民文化部　2015 ～ 2021（数字は年度）

調査体制　事務局　　花谷　浩（学芸調整官　2013 ～ 2016）
木村　亨（次長兼文化財課課長　2018・2019）
片寄友子（次長兼文化財課課長　2020・2021）
玉木良夫（文化財課課長　2013 ～ 2015．6）
佐藤隆夫（　同　　課長　2015．7 ～ 2017）
大梶智徳（　同　　課長補佐　2017 ～ 2019，主査　2020・2021）
野坂俊之（　同　　係長　2013，課長補佐　2014 ～ 2016）
宍道年弘（　同　　課長補佐　2013 ～ 2017）
景山真二（　同　　係長　2013 ～ 2015，課長補佐　2018 ～ 2020）
原　俊二（　同　　係長　2016 ～ 2019，課長補佐　2020・2021）
須賀照隆（　同　　係長　2021）

調査員　　石原　聡（　同　　主任　2013）
幡中光輔（　同　　主事　2013 ～ 2020，主任　2021）
黒田祐介（　同　　主事　2020）

史料調査員　八幡一寛（　同　　嘱託員　2013 ～ 2015）
中山玄貴（　同　　嘱託員　2016 ～ 2019，会計年度任用職員　2020）
藤原雄高（　同　　嘱託員　2019）
春日　瞳（　同　　会計年度任用職員　2020・2021）
荒川英里（　同　　会計年度任用職員　2021）

調査補助員　今若豊実，宇畑豪志，加藤章三，小松原智明，長岡伸幸，吉村香織（五十音順）（　同　　臨時職員・会計年度任用職員）

発掘作業員　伊藤　伸，大輝正人，金森光雄，川上晴夫，柳楽　晃，花田増男，星野篤史（五十音順）

整理作業員　荒木恵理子，石原和子，鵜口令子，妹尾順子，中島和恵，吹野初子，前島浩子（五十音順）

4．本書の作成にあたって，下記の方々から玉稿を賜った（敬称略，順不同）。

角田徳幸（島根県教育庁古代文化センター），中山玄貴，渡辺正巳・奥中亮太（文化財調査コンサルタント株式会社），鈴木瑞穂（日鉄テクノロジー株式会社九州事業所）

5．本書の編集は，職員の協力を得て幡中が行った。各章の執筆者については，文末及び下記に記す。

第1～4章・第7章第1・2節・第8章（幡中），第5章第1節（渡辺），第5章第2・3節（奥中），第5章第4節（鈴木），第6章第1節（春日），第6章第2・3節・文献解題（中山），第7章第3節（角田）

6．事業の実施および本書の刊行にあたり，史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会（2010年1月設置）において，下記の委員の方々からご指導を賜った（敬称略，所属・役職は2021年度現在）。

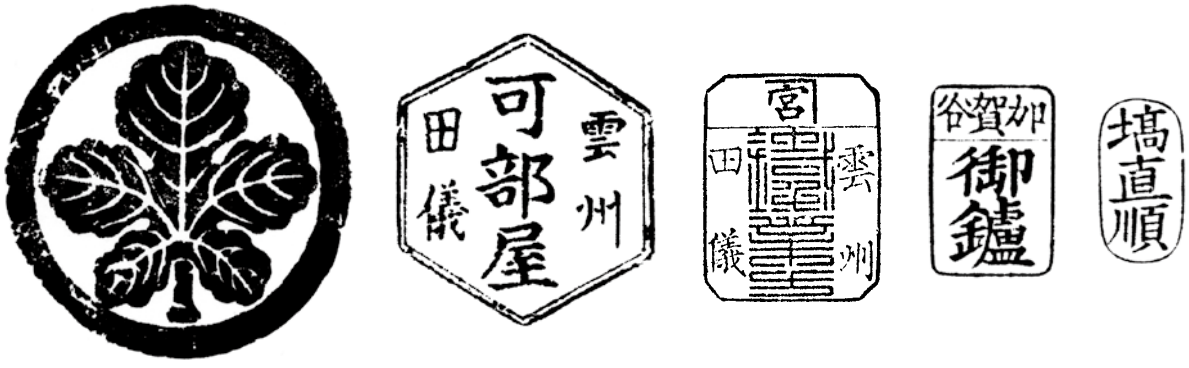
専　門　　坂井秀弥（公益財団法人大阪府文化財センター理事長，元 奈良大学文学部教授，委員長）
田中義昭（元 島根大学法文学部教授）
和田嘉宥（米子工業高等専門学校名誉教授）
角田徳幸（島根県教育庁古代文化センター長）

地　元　　河上　清（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会副会長）
玉川惠一（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会理事，元 多伎地域土木委員会会長）
梶谷宗克（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会理事，元 田儀地区連合自治会会長）
山崎幸一（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会会長，副委員長）

7．発掘調査や遺物整理にあたって，次の方々および機関からご指導，ご協力をいただいた。記して感謝申しあげます（敬称略，所属は当時，順不同）。

文化庁，島根県教育庁文化財課，島根県教育庁古代文化センター，島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，島根県立古代出雲歴史博物館，出雲市立海辺の多伎図書館，多伎文化伝習館，
多伎コミュニティセンター，手引ヶ丘公園　風の子楽習館，田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会
内田和伸・市原富士夫・山下信一郎・柴田伊廣（文化庁文化財部記念物課），中井將胤（文化庁文化資源活用課），永井ふみ（文化庁文化財第二課），崔煐珉（韓神大學校博物館），上原眞人（京都大学大学院文学研究科），作野広和・辻本　彰（島根大学），大久保徹也（徳島文理大学），高橋克壽（花園大学），小寺智津子（国士舘大学），鳥谷智文（松江工業高等専門学校），上栁　武（岡山県古代吉備文化財センター），渡邊朋和（新潟市文化財センター），穴澤義功（たたら研究会）
椿　真治・深田　浩・勝部智明・守岡利栄・仁木　聡・稲田陽介・渡部麻生（島根県教育庁文化財課），松尾充晶・東山信治（島根県教育庁古代文化センター），廣江耕史・熱田貴保・守岡正司・
吉松優希（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター），澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館），
的野克之（島根県芸術文化センターグラントワ），中村唯史（島根県立三瓶自然館），西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課），高尾昭浩・宍戸俊悟（奥出雲町教育委員会），伊藤　創・持田直人（江津市教育委員会），榊原博英（浜田市教育委員会），曽田俊彦・永瀬　学（出雲市市民文化部，元委員），
北脇正巳（出雲市都市建設部，元委員），石飛幸治・周藤　努（出雲市都市建設部道路建設課，元委員），
田中正實（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会，元副委員長）

8．発掘調査で実施した３次元レーザー測量と写真測量は，株式会社トーワエンジニアリングおよびコンピュータ・システム株式会社に委託した。
9．空中写真撮影および動画撮影は，株式会社テクノシステムに委託して実施した。
10. 本書で使用したオルソ画像の作成は，株式会社テクノシステムおよびコンピュータ・システム株式会社に委託し，３次元ハンディスキャナーによる解析や図面作成は，TDM テックの協力を得た。
11. 自然科学分析において，AMS 年代測定・樹種同定および磁鉄鉱形態・化学組成分析については，文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。製鉄関連遺物の金属学的分析は，日鉄テクノロジー株式会社九州事業所に委託して実施した。なお，磁鉄鉱形態・化学組成分析については，JSRS 科研費 JP18K03760 の成果の一部を援用している。
12. 床釣りの東小舟南側の土層立体剥ぎ取りは，株式会社スタジオ三十三に委託し，床釣り下部の下床釣りの地中レーダー探査は，文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した。
13. 本書に掲載している遺構・遺物の実測図は，調査員および調査補助員が作成した。
14. 本書の図版などに掲載した遺構・遺物の写真は，職員の協力を得て幡中が撮影した。
15. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり，方位は座標北，レベルは海抜高を示す。
16. 本書に掲載した製鉄関連具（第４章第１節）は，川上家の所蔵である。また，越堂鈩山内における如来坐像（第４章第２節）は，森山裕司氏が所有・管理している。発掘調査で出土した遺物や，実測図および写真については，出雲市教育委員会にて保管している。
17. 本書の文書目録に掲載した鳥屋尾家新出文書は，出雲市文化財課が所蔵している。



商取引などの際に文書に使用された印。家紋や屋号，たたら場の名前のほか，
田儀櫻井家の 11 代目当主運右衛門直順が祖先の姓「塙」を名乗った印もある。
（可部屋櫻井家の祖は大坂夏の陣で活躍した塙団右衛門直之といわれている）

田儀櫻井家が使用した印判

凡　例

1．本書での「たたら」に関する表記について，固有名詞（遺跡以外）に用いる場合は「鈩」（ex. 越堂鈩）を使用し，遺跡を指す場合は「たたら跡」（ex. 越堂たたら跡），普通名詞として使用する場合については「たたら」（ex. たたら製鉄）とする。

2．本書の陶磁器・ガラス瓶の分類や器種認定，炉壁・鉄滓の分類は下記の書籍・報告書を参照した。

石原　聡編 2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―』出雲市の文化財報告 12　出雲市教育委員会

伊藤徳広編 2002『御崎谷Ⅱ遺跡―海軍望楼の官舎跡の調査―』隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書第３冊　島根県教育委員会

江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

九州近世陶磁学会事務局編 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』九州近世陶磁学会

桜井準也 2019『増補　ガラス瓶の考古学』六一書房

濵本利幸・坂本嘉和編 2013『下市築地ノ峯東通第２遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 49　鳥取県埋蔵文化財センター

原田敏照編 2001『御崎谷遺跡・大床遺跡―明治の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査―』隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書第１冊　島根県教育委員会

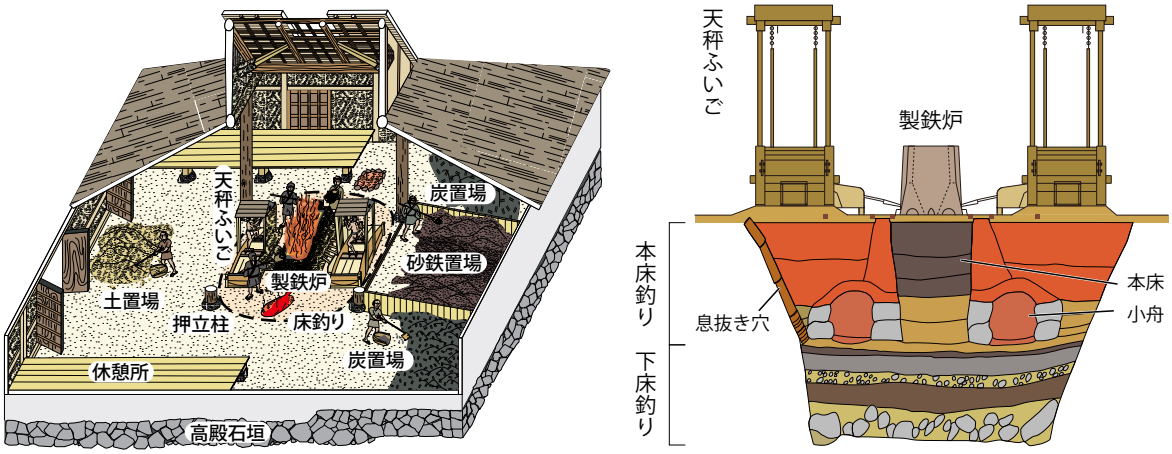
深田　浩編 2000『下山遺跡（１）―製鉄関連遺構の調査―』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　島根県教育委員会

松尾充晶編 2009『大志戸Ⅱ鈩跡　鉄関連遺物篇』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 17　島根県教育委員会

山本信夫ほか編 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』太宰府の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会

3．本書での磁器碗は，原田編（2001）を参照し，大形（口径 10㎝以上），中形（口径 10 ～８㎝程度），小形（口径８㎝以下），筒形（器高≧口径）の基準で分類した。

4．本書で使用する高殿と製鉄炉地下構造である床釣りの部位名称は，下図のとおりである。



本書で使用する高殿（左）・床釣り（右）の各部位の名称

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の経過……7
第２章　遺跡の位置と環境……13
第１節　地理的環境……13
第２節　歴史的環境……14
第３章　発掘調査の成果……23
第１節　発掘調査の概要……23
第２節　操業時期と遺構の年代……26
第３節　高殿内とその周辺の調査……31
第４節　越堂鈩山内の調査……64
第５節　出土遺物……72
第６節　小結……105
第４章　製鉄関連具・石造物の調査成果……123
第１節　製鉄関連具……123
第２節　越堂鈩山内の石造物……127
第５章　自然科学分析……129
第１節　越堂たたら跡出土炭化物の AMS 年代測定・樹種同定……129
第２節　越堂たたら跡出土砂鉄の磁鉄鉱形態・化学組成分析……139
第３節　越堂たたら跡床釣りの地中レーダー探査……151
第４節　越堂たたら跡出土製鉄関連遺物の金属学的分析……157
第６章　文献史料の調査成果……167
第１節　明治初期の越堂・宮本の景観復元とたたら経営について……167
第２節　19 世紀の出雲国における砂鉄輸送の展開―神門郡を事例として―…178
第３節　明治初期における稲扱の流通と廻船……189
第７章　総　括……201
第１節　長期間操業にみる越堂鈩の改修とその背景……201
第２節　越堂たたら跡出土砂鉄の時期的変遷と砂鉄流通の展望……211
第３節　田儀櫻井家のたたら経営と越堂鈩……217
第８章　結　語……233

文献解題（鳥屋尾家新出文書）……239

文書目録……241

図　版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　越堂たたら跡周辺の遠景（左：南から　右：北から）…1
第 2 図　田儀櫻井家の系譜……2
第 3 図　『田儀村誌』掲載の越堂釻山内建物配置図……3
第 4 図　田儀川沿いの水路（左：西から）と金屋子神社が
存在した権現山（右：北から）……3
第 5 図　2006 年度発掘調査の調査区と遺構平面図（左）・
完掘状況（右上：南東から）と本床（右下：北から）……4
第 6 図　越堂たたら跡の史跡指定範囲……4
第 7 図　発掘調査の調査区（2013 ～ 2017 年度）（左）と
遺構全体図（オルソ画像）（右）……8
第 8 図　発掘調査状況（2013 年度）……8
第 9 図　発掘調査状況（2014 年度）……8
第 10 図　発掘調査状況（2015 年度）……9
第 11 図　床釣り土層立体剥ぎ取り状況（2016 年度）……9
第 12 図　床釣り地中レーダー探査状況（2017 年度）……9
第 13 図　田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺主要遺跡
位置図……15
第 14 図　田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布……21
第 15 図　調査前状況（住宅撤去後，北西から）（2013 年度）…23
第 16 図　遺構全景（北西から）（2017 年度）……23
第 17 図　『田儀村誌』掲載の越堂釻山内建物配置図にみる
高殿東側の山内通路……24
第 18 図　越堂たたら跡の史跡指定範囲と隣接地……25
第 19 図　越堂たたら跡の調査区配置図……27
第 20 図　越堂たたら跡の遺構配置図……28
第 21 図　高殿東西ベルト北壁土層図……29
第 22 図　高殿石垣立面図（北面・東面・南面）（上）・
オルソ画像（下）……32
第 23 図　高殿周辺における土層図・立面図・断面図
（第 24 ～ 29 図）の位置……35
第 24 図　高殿東西ベルト南壁土層図……35
第 25 図　高殿南北ベルト土層図（1）……36
第 26 図　高殿南 1 トレンチ東壁土層図・2 トレンチ断面図
（上）と 2 トレンチ東壁立面図（下）……37
第 27 図　高殿南 1 トレンチ西壁（左）・東壁（右）立面図…38
第 28 図　高殿南 4 トレンチ西壁土層図……38
第 29 図　B 区北側トレンチ北壁・C 区 1 トレンチ南壁
土層図……38
第 30 図　暗渠施設（1 期）平面図・立面図・断面図……39
第 31 図　砂鉄置場・炭置場（北側）（2 期）平面図・土層図…42
第 32 図　礎石列（2 期）平面図・断面図……43
第 33 図　高殿南面石垣対向石列（2 期）平面図・
立面図・オルソ画像……44
第 34 図　束柱礎石列（上）・押立柱 1 ～ 4（下）（3・4 期）
平面図・断面図……45
第 35 図　囲炉裏跡（3・4 期）周辺平面図・土層図……46
第 36 図　東小舟南側（左）・北側（右）（3・4 期）
オルソ画像……48
第 37 図　跡坪（4 期）周辺（上）・湯溜まり（4 期）周辺（下）
平面図・土層図……49
第 38 図　高殿南北ベルト土層図（2）・本床断面図……50
第 39 図　東小舟（4 期）内部西側石壁・東側石壁
立面図（上）・オルソ画像（下）……51
第 40 図　西小舟（4 期）内部煙道小口立面図……52
第 41 図　地中レーダー探査による下床釣りの推定……53
第 42 図　越堂釻山内の礎石列（上）とオルソ画像（下）……65
第 43 図　高殿南面石垣対向石列・里道石垣 1 ～ 3・
住宅跡背面石垣立面図・オルソ画像……67
第 44 図　住宅跡背面石垣（左）と里道石垣（右）（西から）…69
第 45 図　山内北側石垣（北西から）……69
第 46 図　試掘確認調査のトレンチ位置（上）と
土層堆積柱状図（中）・土層堆積状況（下）……70
第 47 図　明治初年頃の口田儀村の絵図にみる越堂釻周辺…71
第 48 図　出土磁器（1）……73
第 49 図　出土陶器（1）……75
第 50 図　出土陶器（2）……77
第 51 図　出土陶器（3）・土師質土器……79
第 52 図　出土瓦・煉瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品……81
第 53 図　出土手水鉢……83
第 54 図　製鉄関連遺物の分類図……84
第 55 図　出土炉壁（1）（上段・中段）……87
第 56 図　出土炉壁（2）（中段・下段）……88
第 57 図　出土炉壁（3）（下段）……89
第 58 図　出土炉壁（4）（下段）……90
第 59 図　出土炉壁（5）（下段）……91
第 60 図　出土炉壁（6）（下段）……92
第 61 図　出土鉄滓類（1）（炉外滓）……95
第 62 図　出土鉄滓類（2）（炉外滓）……96
第 63 図　出土鉄滓類（3）（炉内滓）……98
第 64 図　出土鉄滓類（4）（炉内滓）……99
第 65 図　出土鉄滓類（5）（炉内滓）……100
第 66 図　出土鉄滓類（6）（炉内滓）……101
第 67 図　出土鉄滓類（7）（鉄塊系遺物）……102
第 68 図　出土砂鉄・木炭……103
第 69 図　各時期の操業面・盛土・埋土・床釣り出土の
土器・瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品……109
第 70 図　土器・瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品の
時期的変遷……110
第 71 図　製鉄関連遺物（炉壁）の時期的変遷……113
第 72 図　製鉄関連遺物（鉄滓類）の時期的変遷……114

第 73 図　製鉄関連具（1）……124
第 74 図　製鉄関連具（2）……125
第 75 図　越堂鈩山内の如来坐像……127
第 76 図　越堂たたら跡の遺構配置図と炭化物・樹木試料採取地点……129
第 77 図　越堂たたら跡の炭化物・樹木試料採取地点（土層）……131
第 78 図　暦年較正結果……133
第 79 図　暦年較正結果の分布……134
第 80 図　解析結果の分布……135
第 81 図　樹種同定顕微鏡写真（1）……137
第 82 図　樹種同定顕微鏡写真（2）……138
第 83 図　越堂たたら跡の砂鉄試料採取地点（平面）……139
第 84 図　越堂たたら跡の砂鉄試料採取地点（土層）……140
第 85 図　形状分類（公文・立石編 1998 より）……140
第 86 図　比較試料採取位置図（20 万分の 1 日本シームレス地質図・DamMaps-日本全国 web 地図でダムめぐりに加筆）……141
第 87 図　比較試料の化学組成分析結果（平均値）……145
第 88 図　三角ダイアグラム（越堂たたら跡試料：No. 1 ～ 17　朝日たたら跡試料：No.18・19）……146
第 89 図　三角ダイアグラム（比較試料 1）……147
第 90 図　三角ダイアグラム（比較試料 2）……148
第 91 図　越堂たたら跡の地中レーダー探査範囲……151
第 92 図　地中レーダー探査の測定方法及び概念……152
第 93 図　電磁波の波長と振動数（自然科学研究機構国立天文台編 2015 に加筆）……152
第 94 図　局所的な異常（埋設管や空洞など）による双曲線状の反射波の重なり（左）と反射波の振幅（右）……153
第 95 図　地中レーダー探査測線（測線 1 ～ 8）と強い反射面の位置（No. 1 ～ 14）および集中範囲……154
第 96 図　地中レーダー解析結果図および解釈……155
第 97 図　FeO-TiO_3 二元平衡状態図……163
第 98 図　出雲市内の中世～近世製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成分析結果……163
第 99 図　遺跡出土鉄塊系遺物の断面金属組織観察結果……163
第 100 図　鉄塊系遺物（銑鉄塊）（KED-1）・製錬滓（含鉄）（KED-2）の顕微鏡組織……164
第 101 図　製錬滓（含鉄）（KED-3）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……165
第 102 図　製錬滓（含鉄）（KED-4）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……166
第 103 図　越堂全体の地番……168
第 104 図　調野帳から復元した 910 番地の地目……168
第 105 図　宮本山内の土地利用状況……169
第 106 図　田儀櫻井家本宅の見取り図……171
第 107 図　越堂鈩の高殿・床釣りの改修状況……202
第 108 図　越堂鈩・恵口鈩・宇根鈩の位置……207
第 109 図　恵口鈩の本鈩・添鈩の想定配置図（榊原 2014 をもとに作成）……207
第 110 図　宇根鈩の床釣りの改修状況（杉原編 1996 をもとに作成）……208
第 111 図　越堂たたら跡の砂鉄置場と砂鉄採取地点……211
第 112 図　磁鉄鉱の 3 成分の三角ダイアグラム……212
第 113 図　朝日たたら跡の砂鉄試料 No.18（左）・No.19（右）……213
第 114 図　越堂たたら跡・朝日たたら跡の磁鉄鉱成分の三角ダイアグラムと時期的変遷……215
第 115 図　田儀櫻井家が経営した鈩の位置……218
第 116 図　田儀櫻井家が経営した鈩と大鍛冶場の稼働期間……220
第 117 図　たたら経営者 1 箇年の平均操業代銀（嘉永 3 ～安政元年）……221
第 118 図　文政・天保期の田儀櫻井家鈩生産状況……222
第 119 図　天保期の田儀櫻井家鍛冶屋生産状況……222
第 120 図　明治時代初期の田儀櫻井家鈩生産状況……223
第 121 図　越堂鈩の生産量……223
第 122 図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類生産量……224
第 123 図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類販売量……224
第 124 図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類販売状況……224
第 125 図　田儀櫻井家経営鈩の押立柱と床釣り構造（本書第 21・34 図および各報告書から作成）……227
第 126 図　高殿たたら地下構造の分類（角田 2014 より）……229
第 127 図　高殿たたら盛行期の地下構造に見られる地域性（角田 2014 より）……229

挿表目次

第 1 表　越堂たたら跡の発掘調査経過一覧……11
第 2 表　越堂たたら跡の現地整備一覧……11
第 3 表　越堂たたら跡発掘調査に係る自然科学分析一覧……11
第 4 表　越堂たたら跡発掘調査に係る調査指導・現地視察および整備検討委員会一覧……12
第 5 表　越堂たたら跡発掘調査に係る見学会・体験学習・展示・講座など……12
第 6 表　歴史的環境の参考文献一覧……21・22
第 7 表　越堂鈩操業時期と推定年代・AMS 年代測定試料……29
第 8 表　土層観察表……56 ～ 63
第 9 表　製鉄関連遺物の出土地点と種類別重量一覧……85
第 10 表　越堂鈩の操業時期と遺構一覧……105
第 11 表　越堂鈩操業 4 期の高殿と床釣りの規模・法量一覧……105

第 12 表　製鉄関連遺物の時期別重量一覧……112
第 13 表　出土遺物観察表……117 ～ 122
第 14 表　AMS 年代測定試料一覧（測定結果）……132
第 15 表　樹種同定試料一覧……132
第 16 表　AMS 年代解析結果……135
第 17 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄試料一覧…139
第 18 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料の磁鉄鉱形態分析結果一覧……142
第 19 表　比較試料の磁鉄鉱形態分析結果一覧……143
第 20 表　磁鉄鉱形態分析による各河川の特徴……143
第 21 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡（上）と比較試料（下）の磁鉄鉱の化学組成分析結果一覧（平均値）……144
第 22 表　化学組成分析による各河川の分類……148
第 23 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料の分析結果一覧……149
第 24 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料と比較試料との共通性……149
第 25 表　物質の導電率（σ）と比誘電率（ε γ）・速度（V）…152
第 26 表　強い反射面（もしくは傾斜する反射面）の分布一覧……156
第 27 表　供試材の履歴と調査項目……162
第 28 表　供試材の化学組成……162
第 29 表　建物表記相対表（奥田儀村 427 番地）……170
第 30 表　明治 13 年の鈩・鍛冶場の稼働状況……172
第 31 表　文化年間の鷺浦における砂鉄積載廻船の入港状況……180
第 32 表　奈良屋文書所収の稲扱関係史料……190
第 33 表　越堂鈩操業 1 ～ 4 期における高殿・床釣り改修の推定時期と改修内容……201
第 34 表　宇根鈩の床釣り改修の特徴と推定時期（杉原編 1996 をもとに作成）……208
第 35 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄採取地点…211
第 36 表　砂鉄試料の推定時期……212
第 37 表　田儀櫻井家が経営した鈩の構造……227
第 38 表　湯溜まり規模の比較……229

図版目次

図版 1　遺跡遠景
図版 2　遺跡全景（1）
図版 3　遺跡全景（2）
図版 4　遺跡周辺全体図
図版 5　遺構全体図
図版 6　高殿石垣
図版 7　高殿石垣裏込め・土層堆積状況
図版 8　暗渠施設（1）
図版 9　暗渠施設（2）・高殿南面石垣対向石列
図版 10　砂鉄置場・炭置場・礎石列（1）
図版 11　砂鉄置場・炭置場・礎石列（2）
図版 12　押立柱
図版 13　湯溜まり・束柱礎石列・囲炉裏跡
図版 14　床釣り（1）
図版 15　床釣り（2）
図版 16　床釣り（3）
図版 17　越堂鈩山内
図版 18　製鉄関連具（1）
図版 19　製鉄関連具（2）・出土遺物（1）
図版 20　出土遺物（2）
図版 21　出土遺物（3）
図版 22　出土遺物（4）
図版 23　出土遺物（5）
図版 24　出土遺物（6）
図版 25　出土遺物（7）
図版 26　出土遺物（8）
図版 27　出土遺物（9）
図版 28　出土遺物（10）
図版 29　出土遺物（11）
図版 30　出土遺物（12）
図版 31　出土遺物（13）
図版 32　出土遺物（14）
図版 33　出土遺物（15）
図版 34　出土遺物（16）
図版 35　出土遺物（17）
図版 36　出土遺物（18）
図版 37　出土遺物（19）
図版 38　出土遺物（20）
図版 39　出土遺物（21）
図版 40　出土遺物（22）
図版 41　出土遺物（23）・製鉄関連具（3）
図版 42　出土遺物（24）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

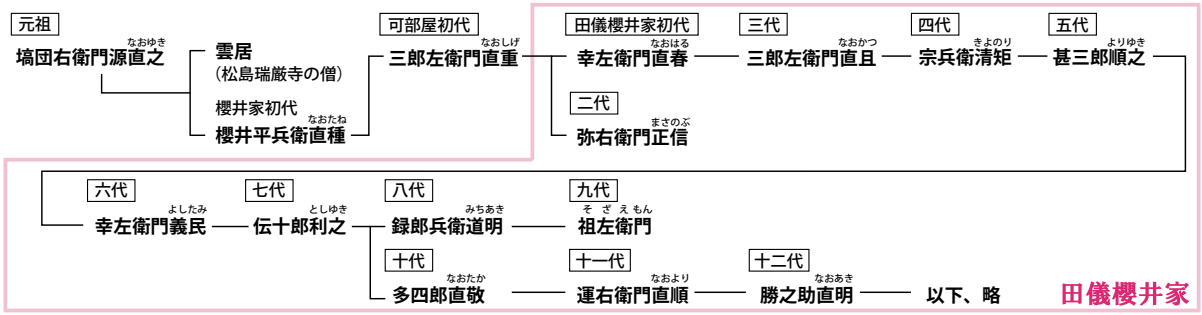
１　田儀櫻井家と越堂釛（第１・２図，図版１・４）

越堂たたら跡は，田儀櫻井家たたら製鉄遺跡のなかで日本海沿岸部に位置するたたら場跡であり，出雲市多伎町口田儀（当時の神門郡口田儀村）に所在する（第１図）。田儀櫻井家は仁多郡奥出雲町（当時の仁多郡上阿井村）を中心にたたら製鉄業を営んだ櫻井家の分家であり，櫻井家の３代目当主で可部屋櫻井家[1]の初代である櫻井三郎左衛門直重が，近世初期に出雲市多伎町奥田儀（当時の神門郡奥田儀村）で居宅を構えて鉄山を開発したことに始まる。直重の嫡男である幸左衛門直春が 1665 年から 1678 年頃（寛文中期から延宝期）に可部屋家から分家して田儀櫻井家の初代当主となり奥田儀に移って本格的に製鉄業を開始し（山﨑 2008），12 代目当主の勝之助直明が 1890（明治 23）年に奥田儀を後にするまで約 250 年間にわたり，この地でたたら製鉄を行ってきた[2]（第２図）。

越堂釛については，1771（明和８）年に石見国横道村の弥平太から田儀櫻井家の５代目当主甚三郎順之が越堂釛を買い請けたと考えられているが，文献史料によると越堂釛の山内が確認できるのは 1745（延享２）年であり（鳥谷 2004），田儀櫻井家の名義による操業は 1769（明和６）年からとなっている（鳥谷 2008）。そのため，1769 年以前から田儀櫻井家が越堂釛の経営に携わっていた可能性が考えられる（藤原 2009）。

田儀櫻井家が最盛期を迎えるのは，10 代目当主多四郎直敬および 11 代目当主運右衛門直順の時期である。この時期には海岸部の越堂釛は銑鉄を大量に生産し，1823（文政６）年の産鉄量から見ても田儀櫻井家が経営するなかで基幹的なたたら場であったことが分かる（鳥谷 2004・2006）。越堂釛で生産された銑鉄は，田儀櫻井家の本拠地であった宮本鍛冶屋（宮本鍛冶山内遺跡）へと運ばれ割鉄として加工される一方，近接する田儀浦（現在の田儀港）の海運を利用してそのまま販売されたものも多い（鳥谷 2008）。出雲国の各鉄師が飛躍的に増産を遂げる幕末頃の産鉄量の変遷（鳥谷 2011）を見

第１図　越堂たたら跡周辺の遠景（左：南から　右：北から）



第 2 図　田儀櫻井家の系譜

ると，田儀櫻井家は主要な鉄師のなかで一二を争うほどの産鉄量を誇り，越堂鈩での大量の鉄生産が幕末から明治初年頃に最盛期となる田儀櫻井家の躍進を後押ししたと考えられる。

その後，明治維新を迎えて経済状況が大きく変わるなかで，12 代直明は生糸改良会社の設立，蚕種製造業，銀行設立など多角的な経営に乗り出すが，いずれも成功には至らなかった（渡辺 1996）。田儀櫻井家の所有するたたら場・鍛冶屋および山林は 1878（明治 11）年に東京蓬莱社の所有となるが，1882（明治 15）年の宮本鍛冶屋での大火に関する記録に記載されていることから，越堂鈩は少なくとも 1882 年までは操業が続いていたとされ（藤原 2009），文献史料で確認できるだけでも約 150 年間もの長期間にわたり稼働していたことが分かる。なお，1890 年には 12 代直明がたたら製鉄業を断念して奥田儀の地を去り，田儀櫻井家のたたら製鉄は終焉を迎えることになるが，1882 年以降に越堂鈩がいつ頃まで操業されていたのかは今後の検討すべき課題である [3]。

2　調査に至る目的と経緯（第 3 ～ 6 図）

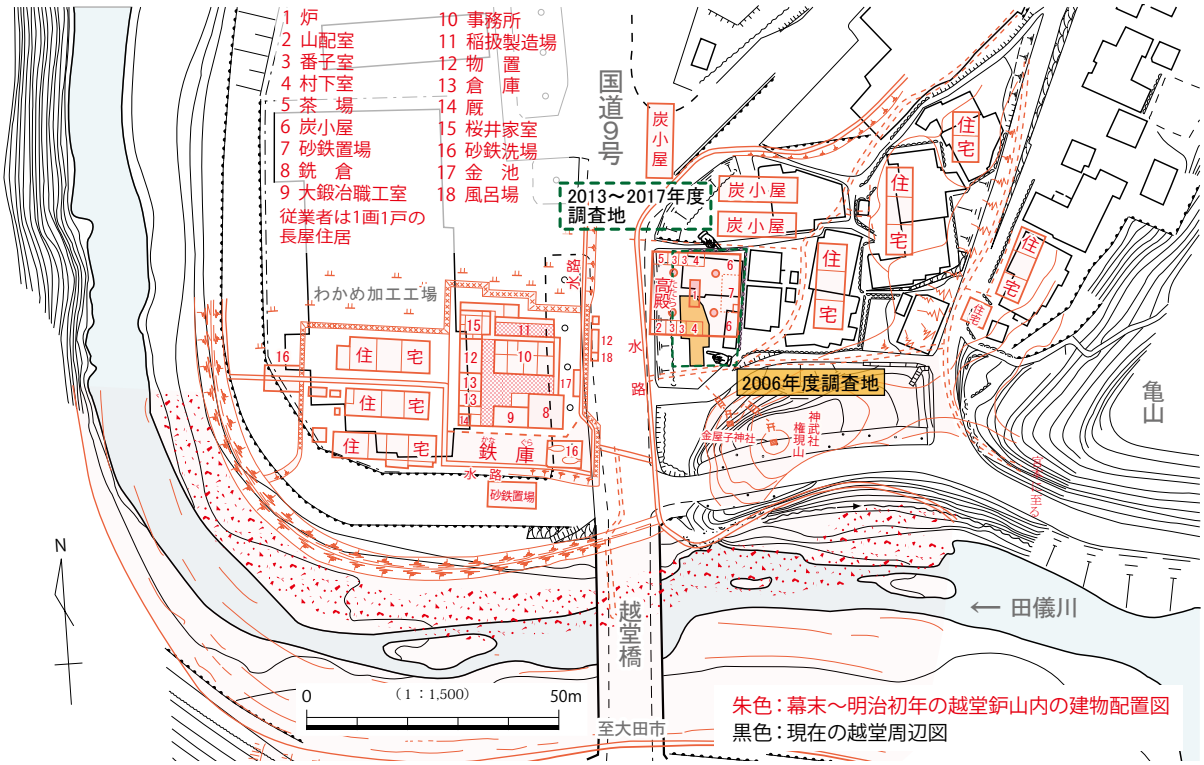
今回報告する越堂たたら跡の調査成果は，高殿内とその周辺における遺構の残存状況の確認を主な目的として 2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度まで実施した発掘調査，その後の整理作業や自然科学分析，製鉄関連具や文献史料の調査成果を総合的にまとめたものである。今回の調査以前にも越堂たたら跡の存在は知られており，現地の周辺踏査や発掘調査などが実施されている。ここでは，調査に至る経緯として，今回の調査を含めたこれまでの調査成果の概要などを整理したい。

（1）『田儀村誌』掲載の建物配置図

越堂鈩の詳しい様子が広く知られるようになったのは，多伎村役場 [4] が刊行した『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）に掲載された越堂鈩山内の建物配置図（第 3 図）によるところが大きい [5]。山内の建物配置図は幕末から明治初年の様子を描いたものとされ，高殿の位置や高殿内部にある製鉄炉などの配置のほか，事務所や鉄庫，砂鉄置場や炭小屋といった製鉄関連の建物や住居跡，そして金屋子神社の位置が詳細に記されており，当時のたたら製鉄における山内の様子が具体的に把握できる貴重な資料である [6]。なお，配置図に描かれた田儀川沿いの水路や金屋子神社が存在した権現山は現在も残されている（第 4 図）。

（2）2003 年度の周辺踏査

多伎町が 2000（平成 12）年に計画した「第 4 次多伎町総合振興計画」のなかに「宮本史跡公園整備事業」が位置づけられ，田儀櫻井家のたたら製鉄の重要性が広く認識されるようになったが，その

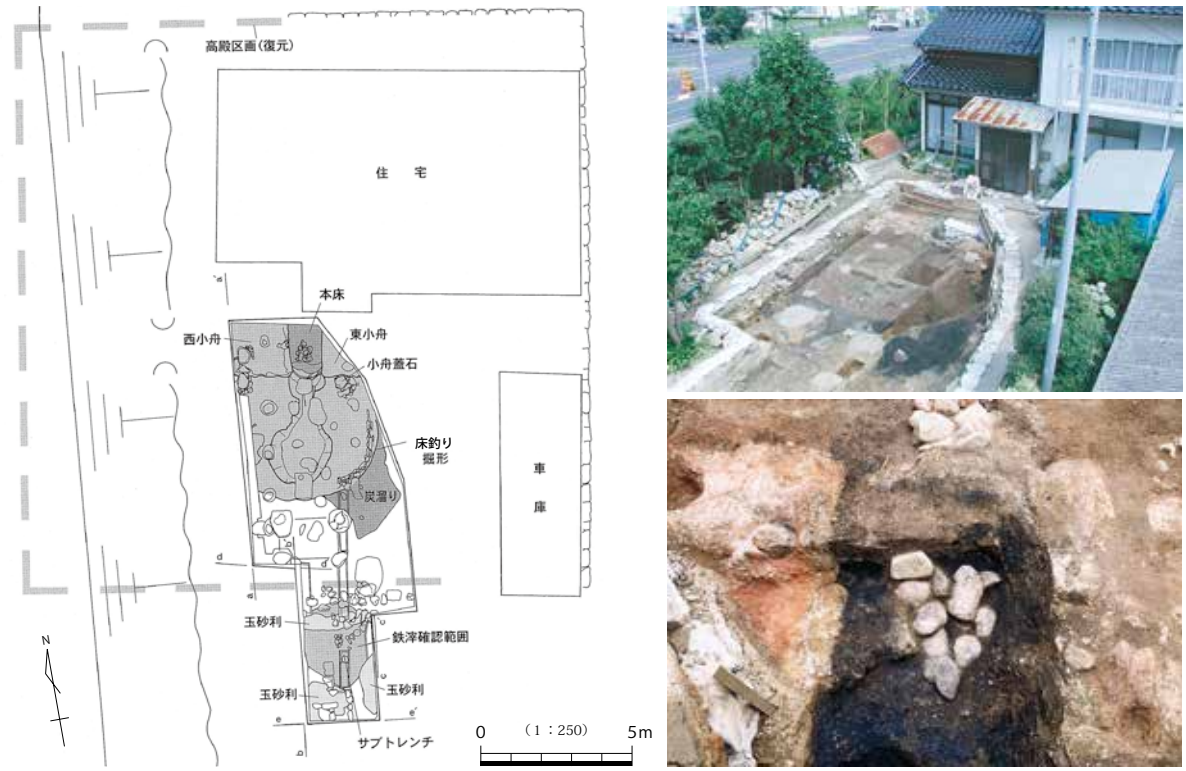


第３図　『田儀村誌』掲載の越堂鈩山内建物配置図

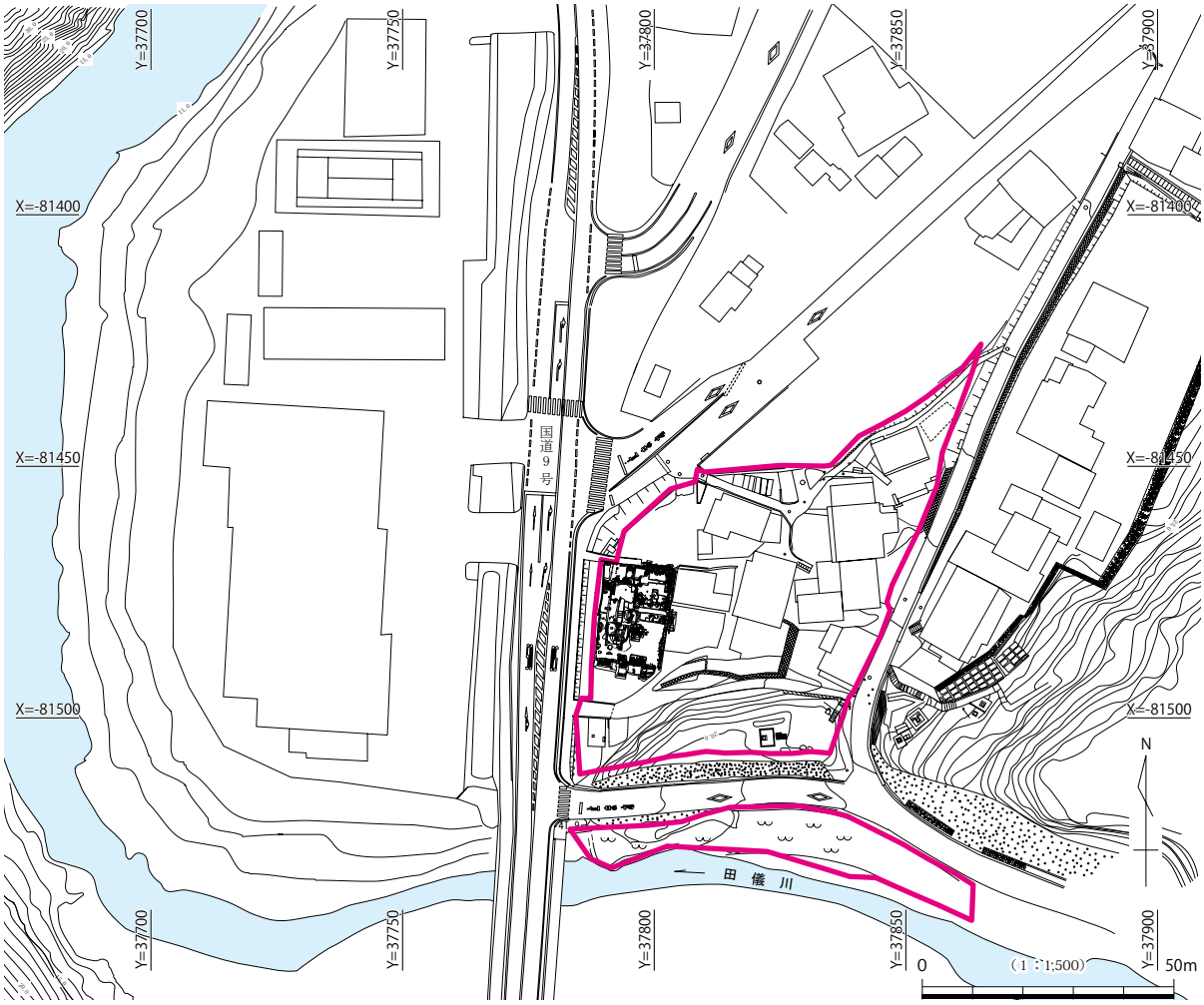
第４図　田儀川沿いの水路（左：西から）と金屋子神社が存在した権現山（右：北から）

一方で遺跡の実態はほとんど知られていなかった。そうした状況を受けて，2003（平成 15）年度に多伎町において「宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査事業」が立ち上がり，考古学・歴史学・民俗学・建築学などの各分野の専門家からなる学術的な調査委員会が組織され，総合的な基礎調査を実施した。その成果は基礎調査報告書（田中・松尾編 2004）としてまとめられている。この基礎調査の成果によって，田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は近世たたら製鉄の一貫した工程を把握できる重要な遺跡として評価され，2006（平成 18）年 1 月に宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡（出雲市佐田町高津屋）が国史跡に指定された。

基礎調査のなかで，越堂たたら跡周辺は『田儀村誌』に掲載された建物配置図を手掛かりに踏査が実施されており，田儀川の河岸に残る低い丘陵が建物配置図のなかで金屋子神社が造立された権現山である可能性が確認された。その一方で，たたら場の詳細な内容は，建物配置図の正確性を含め，発掘調査などで確認する必要が指摘されている。



第 5 図　2006 年度発掘調査の調査区と遺構平面図（左）・完掘状況（右上：南東から）と本床（右下：北から）



第 6 図　越堂たたら跡の史跡指定範囲

（3）2006 年度の発掘調査

基礎調査の成果を受けて，越堂鈩の実態把握や『田儀村誌』掲載の建物配置図との整合性の確認などを主眼に置いた内容確認調査が 2006（平成 18）年度に実施され，その調査成果が報告されている（石原編 2008）。この確認調査では，発掘調査に先立って建物配置図の内容と現況の地形を照らし合わせて検討しており，金屋子神社が造立された権現山のほか，田儀川沿いの水路や高殿建物の石垣が確認されている（7）。こうした状況を勘案して，建物配置図で製鉄炉が示されている地点を含めて高殿内に調査区（約 54㎡）が設定され，発掘調査が実施された。

発掘調査では，調査区北半分において防湿や保温を目的とした製鉄炉地下構造である床釣りの一部の本床や小舟，掘形と跡坪壁面の石積みの一部が確認されたほか，製鉄炉から流れ込んだ銑や鉄滓が滞留したとみられる湯溜まり状遺構が見つかり，たたら場の存在が具体的に明らかになった（第５図）。本床は製鉄炉下に設けられた施設であるが，その位置が『田儀村誌』の建物配置図における製鉄炉の位置と概ね合致するため，建物配置図はかなり正確に当時の越堂鈩山内の様子を描いている蓋然性が高いことが明らかになった。この調査成果によって，越堂たたら跡は 2009（平成 21）年２月に聖谷たたら跡（出雲市多伎町奥田儀）とともに国史跡の追加指定を受けることとなった（第６図）。

（4）2013 年度から 2017 年度の発掘調査

2006 年度の発掘調査の成果によって『田儀村誌』掲載の越堂鈩山内の建物配置図が正確に当時の様子を反映している可能性が高いことが判明し，また床釣りの存在も確認された。それを受けて，高殿内とその周辺における遺構の残存状況を確認する目的で，2013 年度から 2017 年度にかけて発掘調査が行われた。

調査成果については，第３章にて詳しく報告するが，高殿を支える押立柱の礎石などが見つかり，高殿の規模や内部の施設配置が確認できたほか，床釣りの掘形や本床・小舟の詳しい構造が明らかになった。これらは越堂鈩が稼働した約 150 年間の操業期間のなかで，越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）にあたる高殿の遺構であり，その下層からは炭置場や砂鉄置場，礎石列など越堂鈩操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）の操業面が確認された。さらに高殿の外側には，越堂鈩操業１期（田儀櫻井家経営以前）の可能性がある暗渠施設が高殿全体を廻るようにして構築されており，また床釣りや高殿南面石垣では複数の造り替え痕跡が見つかるなど，越堂鈩の長期間操業のなかで高殿が何度か改修された様子が具体的に確認できた。

なお，越堂鈩の操業時期は，操業面や遺構内および盛土・埋土内から出土した陶磁器や，採取した炭化物を対象に実施した年代測定の成果（第５章第１節）をもとに推定している（第３章第２節）。

註

（1）可部屋は製鉄業を開始した櫻井家の屋号であり，田儀櫻井家は９代目当主祖左衛門から屋号を可部屋から宮本屋に改めた（鳥谷 2004）。なお，櫻井家の祖は大坂夏の陣で活躍した塙団右衛門直之といわれている。

（2）田儀櫻井家の本拠地には宮本鍛冶屋が設けられ，各たたら場の産鉄を搬入して鉄素材などに加工していた。現在は宮本鍛冶山内遺跡（出雲市多伎町奥田儀）として，製鉄に関する大鍛冶場跡や小鍛冶場跡などの生産関連遺構のほか，田儀櫻井家の本宅跡や製鉄従事者の住居跡など生活に関する遺構，そして田儀櫻井家の菩提寺

である智光院（山号は白応山）や金屋子神社，歴代当主とその子女の墓地である田儀櫻井家墓地，従事者墓地である智光院墓地および水丸子山墓地など信仰に関する遺構が良好に残存しており，近世から近代にかけてたたら製鉄で栄えた山内の様子を今に伝えている。

（3）『訂正増補　田儀村沿革史』（河上 1928）には，田儀櫻井家が製鉄経営から手を引いた後も 1897（明治 30）年まで操業が行われたことが記されている。

（4）1963（昭和 38）年の町制施行により多伎町となる前の多伎村は，1956（昭和 31）年に岐久町と田儀村が合併して誕生している。なお，2005（平成 17）年の出雲市，平田市，大社町，佐田町，湖陵町，多伎町による市町村合併，2011（平成 23）年の斐川町編入により現在の出雲市が誕生した。

（5）『田儀村誌』は内容の一部補足や修正，および多伎町教育委員会に納められた田儀村誌資料集の趣意書を付して 1995（平成 7）年に復刻されている。なお，翌年の 1996（平成 8）年には田儀櫻井家の系譜や変遷，関連文献史料について整理された『田儀桜井家年代記』（渡辺 1996）がまとめられた。

（6）この『田儀村誌』に記された配置図の出典は不明である。

（7）高殿を囲む石垣はたたら場操業当時のものであることが，『田儀村誌資料第十三号　史蹟』にて渡邊勝治氏が古老から聞き取り記録した内容として報告されている（石原編 2008）。

参考文献

石原　聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会

河上昌敏 1928『訂正増補　田儀村沿革史』

田中義昭・松尾充晶編 2004『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会

鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　19 ～ 38 頁

鳥谷智文 2006「近世後期松江藩における鉄師の基礎的考察」『島根史学会会報』第 43・44 合併号　島根史学会　30 ～ 50 頁

鳥谷智文 2008「掛樋・越堂・聖谷たたらの文献調査」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会　106 ～ 111 頁

鳥谷智文 2011「近世後期における出雲の鉄師」『たたら製鉄と近代の幕開け』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録　島根県立古代出雲歴史博物館　56 ～ 57 頁

藤原雄高 2009「田儀櫻井家の鈩・鍛冶屋の変遷」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告 8　出雲市教育委員会　101 ～ 113 頁

山﨑一郎 2008「松江藩領神門郡における田儀櫻井家の鉄山経営―十七世紀後期～十八世紀前期を中心に―」『たたら製鉄・石見銀山と地域社会　近世近代の中国地方』清文堂　29 ～ 51 頁

渡辺勝治 1996『田儀桜井家年代記』自費出版

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場

第２節　調査の経過

2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度の越堂たたら跡の発掘調査は，2010（平成 22）年１月に設立した史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会（委員長：坂井秀弥氏）にて指導・助言を受けながら実施した。各年度の調査経過，自然科学分析，現地指導・見学会およびその後の史跡整備などは第１～５表のとおりである。各年度の主要な調査・整備の経過を整理して以下にまとめる。

１　調査の経過（第７～ 12 図，第１～５表）

2006（平成 18）年度の発掘調査の成果によって，越堂たたら跡の床釣りが残存することが判明した[(1)]。それを受けて高殿内とその周辺の遺構の残存状況を確認するために発掘調査を実施することとなり，高殿内を中心に調査区（A ～ F 区:約 256㎡）を設定して遺構の残存状況を確認した（第７図）。なお,調査前には越堂たたら跡とその周辺の詳細な地形図を作成するために３次元測量を行っている。

（1）2013 年度の調査

2013 年度の発掘調査は，床釣りの状況を確認する目的で 2006 年度調査区の北に設定した A・B 区を対象に実施した（第８図）。A・B 区では床釣りの詳しい構造を把握し，東小舟で造り替え痕跡を確認した。また高殿東面石垣では裏込めを確認したほか，その下から礎石および炭や砂鉄を伴う操業面が見つかり，古い時期の炭置場・砂鉄置場の存在が認められた。

（2）2014 年度の調査

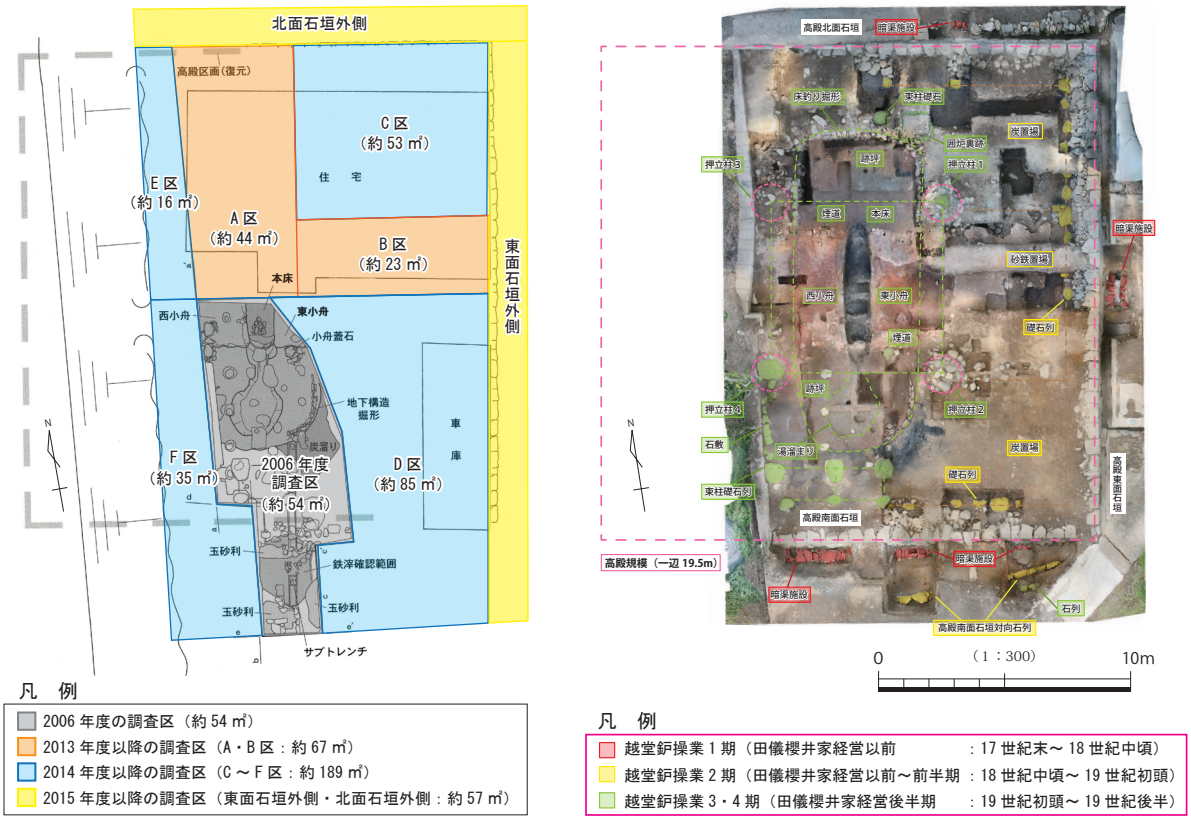
2014（平成 26）年度は，A・B 区に加えて高殿内全体の C ～ F 区まで調査範囲を広げて全面的な発掘調査を進めた（第９図）。床釣り北西側の精査では，跡坪の石積みと跡坪の出入口が見つかり，2006 年度に確認された床釣り南側での跡坪壁面の石積みと合わせて床釣り全体の規模が判明した。また詳細な調査は行っていないものの，床釣りの西小舟の煙道とその内部の様子を確認している。

床釣り周辺では高殿の屋根を支えた押立柱の礎石や根固め石が見つかった（押立柱１～４）。なお，押立柱の根固め石は４箇所で確認できたが，そのうち礎石が確認できたのは押立柱１・４である。また，押立柱４では礎石に柱のほぞ穴（直径約 47cm）が彫り込まれており，押立柱の規模が具体的に想定可能になっている。

高殿南側の D 区では高殿南面石垣を確認し，田儀櫻井家経営の後半期の越堂鈩は，最大で一辺約 19.5m の角打の高殿規模を持つたたら場であることが明らかになった。高殿南面石垣の裏込め下には古い時期の炭置場の存在を示す炭層や礎石が見つかっている。また，これによって現行の高殿石垣の内側を廻る古い時期の礎石列が存在することが判明した。

（3）2015 年度の調査

2015（平成 27）年度には高殿外側（約 57㎡）の調査にも本格的に着手した（第 10 図）。高殿南面石垣外側のほか，東面石垣外側および北面石垣外側にトレンチを設けて状況を確認している。調査ではそれぞれのトレンチ内で石垣下に暗渠施設が確認され，高殿周辺を廻るように敷設されている状況が明らかになった。これらは年代測定の結果から越堂鈩操業１期（田儀櫻井家経営以前）の可能性が示さ



第 7 図　発掘調査の調査区（2013 ～ 2017 年度）（左）と遺構全体図（オルソ画像）（右）

第 8 図　発掘調査状況（2013 年度）

第 9 図　発掘調査状況（2014 年度）

れている（第５章第１節）。

なお高殿南面石垣では，自然石の古い石垣の上に整美な切石を用いて新しい石垣が構築されており，高殿の改修があったことが読み取れる。

一方，越堂たたら跡の史跡指定範囲隣接地は，越堂たたら跡を整備・活用していくなかでガイダンス施設整備が計画されている[2]。よってガイダンス施設整備の候補地として想定されていたこの場所において越堂鉄山内関連遺構の有無を確認するために試掘確認調査を実施した（第３章第４節）。調査の結果，越堂鉄山内に関する遺構は確認できなかった。

（４）2016・2017 年度の調査

2016（平成 28）年度は，これまで確認した遺構の記録を中心に行った。図面作成や写真撮影のほか，３次元測量や写真測量による各遺構の詳細な情報の記録や空中写真撮影などを実施している。また発掘調査のなかで確認した床釣りについて，立体的な記録保存と今後の整備や活用を念頭に置き，東小舟南側の土層立体剥ぎ取りを実施した（第 11 図）。

2017 年度には，空中写真撮影および動画撮影を行ったほか，床釣りの東小舟周辺の底面からさらに下部の「下床釣り」の構造について，掘削を伴うことなく地下情報を取得することを目的に地中レーダー探査を実施した（第 12 図）。なお，地中レーダー探査の成果については，第５章第３節にて報告されている。その他，高殿周辺の石垣を中心とした補足の写真測量を実施した。現地での全ての記録作業が終了した段階で埋め戻しを行い，発掘調査を完了した。

第 10 図　発掘調査状況（2015 年度）

第 11 図　床釣り土層立体剥ぎ取り状況（2016 年度）

第 12 図　床釣り地中レーダー探査状況（2017 年度）

（5）2018 ～ 2021 年度の調査

2018（平成 30）年度から 2020（令和 2）年度は，出土遺物の整理および自然科学分析を実施した。砂鉄に含まれる磁鉄鉱の形態分析や化学組成分析は 2016 年度に実施しているが，その成果を補足するための追加試料の分析を 2019（平成 31・令和元）年度と 2020 年度に実施した。また 2018 年度には出土した製鉄関連遺物の金属学的分析を行った。これらの成果は，第 5 章第 2 ・ 4 節にて報告されている。なお製鉄関連遺物については，鉄塊系遺物を中心に磁着度およびメタル度を測定し，デジタル X 線撮影を実施した[(3)]（図版 29・42）。

2021（令和 3）年度には出土遺物の整理や写真撮影などの記録作業を進めた。

2　整備の経過

現地の埋め戻し完了後の 2018 年度からは，越堂たたら跡の現地整備に着手している。2018 年度および 2019 年度には遺構表示や遺跡説明看板，遺跡名称看板などを設置した[(4)]。

2020（令和 2）年度は高殿南外側の地盤整備を行い，高殿南面石垣の見学環境を整えた。また，越堂たたら跡の整備計画の具体的な指針となる「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡　越堂たたら跡整備基本計画」を策定した（出雲市 2021）。

2021（令和 3）年度は史跡標識および説明プレートの設置や高殿内の地盤整備を行った。

註

（1）2006 年度の発掘調査後には，2008（平成 20）年策定の「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画」（出雲市 2008）および 2012（平成 24）年に策定した「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」の方針に沿い，遺跡を保護するために 2012 年度から 2013（平成 25）年度にかけて越堂たたら跡の高殿周辺の公有地化を進めた。なお，公有地化に伴い調査前には建物を撤去している。

（2）越堂たたら跡の整備については，「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」のなかで，史跡全体の導入ゾーンとしての役割を担うためにガイダンス施設の設置が構想された。

（3）メタル度および磁着度の測定は，メタルチェッカーおよび標準磁石を用いて実施した。なお「特 L」の測定が可能なメタルチェッカーと標準磁石は，島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの機材を借用した。またデジタル X 線撮影は，島根県立古代出雲歴史博物館の撮影装置を使用して行った。メタルチェッカーと標準磁石の借用は守岡正司氏，デジタル X 線撮影にあたっては，澤田正明氏にお世話になった。

（4）遺跡名称看板は，地元の田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会によって設置された。

参考文献

出雲市 2008『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存管理計画書』

出雲市 2021『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡　越堂たたら跡整備基本計画書』

第１表　越堂たたら跡の発掘調査経過一覧

年　月　日		主な事項
2013（平成 25）年度	11 月	調査区設定（調査開始：11 月 20 日）
	12 月	３次元測量の実施（現地・周辺地形） 床釣りの本床・東小舟を確認（A 区）
	1 月	高殿北面石垣の裏込めと礎石・炭置場を確認（A 区） 高殿東面石垣の裏込めと礎石を確認（B 区）
	2 月	東小舟の造り替え痕跡と火渡しを確認（A 区） 砂鉄置場を確認（B 区）
	3 月	３次元測量の実施（東小舟内部）
2014（平成 26）年度	6 月	高殿東面石垣の裏込めと礎石・砂鉄置場および炭置場を確認（C 区） 高殿北面石垣（西側の延長）を確認（E 区）
	7 月	床釣り跡坪の石積みと出入口を確認（A 区） 押立柱 1 の礎石と根固め石を確認（A 区）
	8 月	囲炉裏跡を確認（A 区） 高殿東面石垣と並行する礎石列を確認（B・C 区）
	9 月	床釣りの息抜き穴を確認（A 区） 高殿南面石垣を確認（D 区）
	11 月	押立柱 2 の根固め石を確認（D 区）
	2 月	高殿南面石垣の裏込めと礎石列を確認（D 区） 押立柱 4 の礎石を確認（F 区）
	3 月	西小舟（煙道）を確認（A 区） 押立柱 3 の根固め石を確認（E 区）
2015（平成 27）年度	4 月	押立柱 4 南側の石敷を確認（F 区） 史跡指定範囲隣接地の試掘確認調査
	5 月	高殿北側の束柱礎石を確認（A 区） 押立柱 4 の礎石の墨書と高殿南側の束柱礎石列を確認（F 区）
	6 月	高殿南面石垣下の暗渠施設を確認（D 区）
	7 月	高殿南面石垣の新旧石垣を確認（D 区）
	8 月	高殿南面石垣の南側に石列を確認（D 区）
	9 月	床釣りの西小舟（甲の一部）を確認（A 区） 砂鉄置場と炭置場の区画石列を確認（C 区）
	3 月	高殿北面外側・東面石垣外側に暗渠施設を確認
2016（平成 28）年度	6 ～ 8 月	３次元測量の実施（完掘状況）
	10 月	空中撮影・写真測量の実施（完掘状況）
	12 月	床釣り（東小舟南側）の土層立体剥ぎ取りの実施
2017（平成 29）年度	5 月	床釣り（東小舟周辺）下部の地中レーダー探査の実施 空中撮影・動画撮影の実施（完掘状況）
	6 月	写真測量の実施（周辺石垣等） 現地埋め戻し（調査完了：6 月 27 日）
2018（平成 30）年度	6 月	製鉄関連遺物メタル度・磁着度測定（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）
	7 月	製鉄関連遺物デジタル X 線撮影（島根県立古代出雲歴史博物館）

第２表　越堂たたら跡の現地整備一覧

年　月　日	主な事項
2018（平成 30）年度	遺構表示の実施・遺跡説明看板の設置
	発掘調査成果解説パンフレット作成
2019（平成 31）年度	遺跡名称看板の設置
2020（令和２）年度	地盤整備（高殿南外側）
	整備基本計画策定・整備基本計画書作成
2021（令和３）年度	史跡標識・説明プレートの設置
	地盤整備（高殿内）

第３表　越堂たたら跡発掘調査に係る自然科学分析一覧

年　月　日	主な事項
2015（平成 27）年度	AMS 年代測定（高殿南 1 tr・東面石垣外側 tr 出土炭化物）
2016（平成 28）年度	磁鉄鉱形態・化学組成分析（砂鉄置場・A-B 区東西横断 tr・高殿南 4 tr・東面石垣外側 tr 出土砂鉄）
	AMS 年代測定（東小舟甲上炭化物・東面石垣外側 tr の暗渠施設内出土樹木）
	樹種同定（東面石垣外側 tr の暗渠施設内出土樹木）
2018（平成 30）年度	製鉄関連遺物金属学的分析（製錬滓 [含鉄]・鉄塊系遺物）
2019（平成 31）年度	磁鉄鉱形態・化学組成分析（砂鉄置場・東面石垣外側 tr 出土砂鉄）
2020（令和２）年度	磁鉄鉱形態・化学組成分析（砂鉄置場・東面石垣外側 tr・朝日たたら跡出土砂鉄）

第４表　越堂たたら跡発掘調査に係る調査指導・現地視察および整備検討委員会一覧

年　月　日		主な事項
2013（平成 25）年度	12 月 25 日	第 6 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	1 月 16 日	山下信一郎氏（文化庁文化財部記念物課）・椿真治氏・角田徳幸氏（島根県教育庁文化財課）現地視察
	2 月 26 日	角田徳幸氏　調査指導
	2 月 27 日	廣江耕史氏・熱田貴保氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）現地視察
2014（平成 26）年度	6 月 13 日	伊藤創氏（江津市教育委員会）現地視察
	7 月 1 日	上栁武氏（岡山県古代吉備文化財センター）現地視察
	7 月 25 日	大久保徹也氏（徳島文理大学）・高橋克壽氏（花園大学）現地視察
	7 月 28 日	角田徳幸氏・深田浩氏（島根県教育庁文化財課）調査指導
	7 月 29 日	西尾克己氏（大田市教育委員会）現地視察
	8 月 8 日	第 7 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	9 月 10 日	小寺智津子氏（国士舘大学）現地視察
	11 月 21 日	内田和伸氏（文化庁文化財部記念物課）現地視察
	12 月 19 日	中村唯史氏（島根県立三瓶自然館）調査指導
	2 月 2 日	第 8 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	2 月 27 日	深田浩氏　調査指導
	3 月 3 日	角田徳幸氏　調査指導
	3 月 26 日	作野広和氏（島根大学）現地視察
	3 月 27 日	柴田伊廣氏（文化庁文化財部記念物課）現地視察
2015（平成 27）年度	5 月 1 日	角田徳幸氏（島根県立古代出雲歴史博物館）・深田浩氏　調査指導
	7 月 10 日	角田徳幸氏・深田浩氏　調査指導
	8 月 7 日	第 9 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	10 月 29 日	西尾克己氏　調査指導
	2 月 2 日	第 10 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	2 月 5 日	穴澤義功氏（たたら研究会）・渡邊朋和氏（新潟市文化財センター）現地視察
2016（平成 28）年度	8 月 8 日	角田徳幸氏　調査指導
	8 月 10 日	上原眞人氏（京都大学大学院文学研究科）・山下信一郎氏・守岡利栄氏（島根県教育庁文化財課）現地視察
	9 月 26 日	高尾昭浩氏・宍戸俊悟氏（奥出雲町教育委員会）現地視察（可部屋集成館運営委員会視察同行）
	9 月 30 日	第 11 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
	10 月 21 日	崔煐珉氏（韓神大學校博物館）・榊原博英（浜田市教育委員会）現地視察
	10 月 25 日	中村唯史氏　調査指導
	1 月 31 日	第 12 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
2017（平成 29）年度	5 月 26 日	渡部麻生氏（島根県教育庁文化財課）現地視察
	5 月 30 日	仁木聡氏・吉松優希氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）現地視察
	9 月 29 日	第 13 回　史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備検討委員会
2018（平成 30）年度	5 月 23 日	角田徳幸氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）鉄滓整理指導
	6 月 8 日	東山信治氏（島根県教育庁古代文化センター）鉄滓整理協力
	7 月 27 日	澤田正明氏（島根県立古代出雲歴史博物館）鉄滓デジタル X 線撮影協力

第５表　越堂たたら跡発掘調査に係る見学会・体験学習・展示・講座など

年　月　日		主な事項
2014（平成 26）年度	9 月 3 日	平成 25 年度発掘調査速報展（出雲弥生の森博物館　会期：9 月 3 日～ 12 月 1 日）
	9 月 6 日	現地説明会（田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会・多伎文化伝習館歴史を語る会）
	9 月 25 日	出雲市立第三中学校 3 年生　職場体験（発掘体験）
	10 月 4 日	現地説明会（地元自治会／一般参加）
	10 月 7 日	出雲市立田儀小学校 5・6 年生　現地見学（ふるさと歴史学習）
	2 月 20 日	第3回埋蔵文化財専門研修「出雲市　越堂たたら跡―その特徴と発掘調査―」(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター)
	3 月 12 日	大社コミュニティセンター郷土学びま専科　現地見学
2015（平成 27）年度	7 月 30 日	神門ヒスタム（郷土史研究会）歴史ウォーク　現地見学
	8 月 3 日	出雲市教育研修会中学校社会科部会　現地視察研修
	9 月 2 日	出雲市立第三中学校 3 年生　職場体験（発掘体験）
	9 月 17 日	美郷町立大和中学校 3 年生　職場体験（発掘体験）
	10 月 3 日	現地説明会（地元自治会／一般参加）
	10 月 15 日	出雲商工会議所観光連携推進委員会　視察研修
	10 月 29 日	出雲市立多伎中学校 1 年生　現地見学（ふるさと歴史学習）
	11 月 13 日	多伎コミュニティセンター地域探訪講座　現地見学
	12 月 20 日	島根考古学会 12 月例会「出雲市・越堂たたら跡　田儀櫻井家のたたら製鉄遺跡」（島根県民会館）
2016（平成 28）年度	5 月 21 日	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡保存会講演会「越堂たたら跡の調査成果から田儀櫻井家を読み解く―今後の整備・活用に向けて―」（多伎文化伝習館）
	6 月 20 日	出雲市職員退職者会　現地視察
	7 月 27 日	平成 26・27 年度発掘調査速報展（出雲弥生の森博物館　会期：7 月 27 日～翌 1 月 23 日）
	9 月 5 日	島根県立大学ゼミ研修会
	9 月 26 日	可部屋集成館運営委員会　現地視察
	10 月 29 日	多伎町文化祭　発掘調査速報展（多伎コミュニティセンター　会期：10 月 29・30 日）
2017（平成 29）年度	5 月 27 日	現地説明会（多伎町内／地元自治会／保存会）
	6 月 3 日	「発掘された日本列島 2017」展（東京都江戸東京博物館ほか　会期：6 月 3 日～翌 2 月 25 日）
2021（令和 3）年度	12 月 15 日	2021 年度　出雲弥生の森博物館博物館　ギャラリー展Ⅳ「田儀櫻井家のたたら製鉄―その 2　国指定史跡越堂たたら跡―」（出雲弥生の森博物館　会期：12 月 15 日～翌 3 月 7 日）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

越堂たたら跡は島根県東部地域のなかでも西寄りに位置する出雲市多伎町口田儀に所在し，周辺には田儀櫻井家が営んだたたら場跡や鍛冶場跡が数多く存在する。これらの遺跡は出雲市多伎町や佐田町のほか，隣接する雲南市域や大田市域にまで広がって分布しており，田儀櫻井家の製鉄経営が広域にわたり展開していたことを示している。

多伎町の山系は南北に走り，東から西に向かうにつれて急峻となり，海岸部近くまで迫っている。この山系に沿って田儀川，小田川，久村川が日本海に注ぐ。越堂たたら跡は現在の田儀港付近に注ぐ田儀川流域にあり，港から直線距離にして約 700m 程度の場所に立地する。また田儀川およびその支流の宮本川を通じて宮本鍛冶山内遺跡とつながっている。田儀港は田儀櫻井家のたたら製鉄において製鉄の原材料の調達や鉄素材および鉄製品などの搬出を担う流通の要であり，田儀川は田儀港への物資の輸送経路として重要な位置を占める河川であった。

佐田町は中国山地の脊梁部と日本海沿岸部との間に位置し，標高約 400 mから 600 mの山間部で，神戸川の中流域にあたる。神戸川は佐田町に接する飯石郡飯南町に発し，三瓶山の西麓を流れて出雲平野に至り，日本海に注いでいる。三瓶山は約 10 万年前からこれまでに 7 回程度の噴火が確認されており，そのうち縄文時代における 2 回の噴火で発生した大量の火砕物が洪水によって神戸川を下り，扇状地を急激に発達させて三角州が肥大し，現在の出雲平野を生み出したと考えられる（中村 2006a・2006b）。製鉄遺跡は，山間部にある段丘や谷底の氾濫原などのわずかな平坦地を利用して展開しているが，付近には製鉄の原材料となる木炭の生産や鉄穴流しによる砂鉄採取のための各資源が豊富に存在し，たたら場を営むための好条件を備えていたと考えられる。

大田市域東部には，三瓶山から流れる三瓶川や大原川が日本海に注ぐ河口に広がる沖積平野が存在する。沖積平野には汽水湖の波根湖が広がっていたが，中世から干拓と新田開発が進められ，1951（昭和 26）年に干拓が完了して農地化している。こうした河川や，かつての波根湖に挟まれるように鳥井丘陵などの比較的低い丘陵が存在しており，海岸や河川と平野部，そして丘陵が一体となった地勢に恵まれた地域であった。なお，海岸沿いには田儀櫻井家が経営に携わった時期があるたたら場跡の百済たたら跡が存在しており，近接する現在の久手港との関連が推測される。

参考文献

中村唯史 2006a「神戸川デルタの地形発達」『島根県立三瓶自然館研究報告』第 4 号　島根県立三瓶自然館　25 ～ 29 頁

中村唯史 2006b「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第 45 巻第 5 号　日本第四紀学会　407 ～ 420 頁

第２節　歴史的環境

ここでは越堂たたら跡を中心とした田儀櫻井家たたら製鉄遺跡が展開する出雲市多伎町，佐田町および大田市域東部の歴史的環境を概観する。なお本文中の番号は第 13･14 図の遺跡番号に対応する。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は，多伎町内の日本海沿岸付近にある砂原遺跡（25）で石器の発見が報告されている（松藤編 2013）。近接する砂原Ⅰ遺跡（26）では，約５万年前の三瓶火山から噴出した三瓶雲南テフラと三瓶池田テフラの可能性がある火山灰層，そして約３万年前から２万８千年前の南九州の姶良カルデラに由来する姶良 Tn 火山灰層が確認された（今岡・勝部 2010 編）。

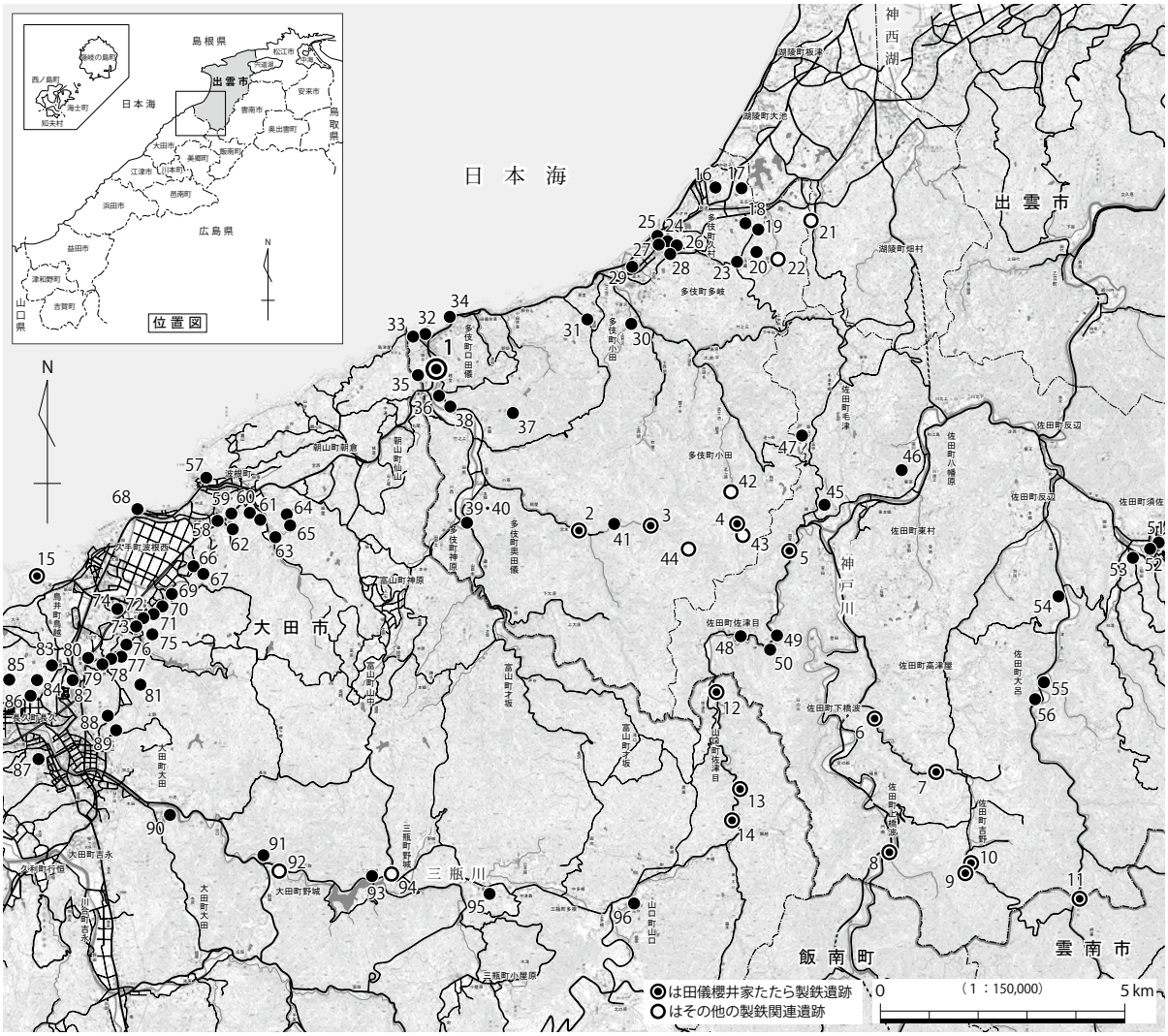
縄文時代の草創期から早期の遺跡は多くないが，多伎町内の菅沢遺跡（31）周辺の菅沢地区で尖頭器が採取され（松尾編 2004），大田市域東部の中尾Ｈ遺跡（78）や三瓶川中流域の引ノ子遺跡（92）でも尖頭器が出土している（遠藤編 1989，是田編 2017）。また菅沢地区では，黒曜石製の石鏃や掻器，磨製石斧なども採取されており（松尾編 2004），山間部の屋形遺跡（多伎町，41）でも黒曜石製の石鏃や剥片が確認されている（阿部・江角編 2004）。前期から中期の遺跡も総じて少なく，中尾Ｈ遺跡や檀原遺跡（佐田町，８）などで土器が出土した程度にとどまる（角田・宮本編 1997，内田編 2013b）。

後期になると各地で遺跡数が増加し，この地域での人々の活動が活発になる。多伎町・佐田町内では菅沢遺跡のほか，朝日遺跡（６）や塚脇遺跡（51），茶屋谷遺跡（55）などで後期初頭から中葉にかけての土器や石器が確認されている（杉原ほか編 1983，田中編 1998・2001，内田編 2013a）。なお，茶屋谷遺跡では数基の土坑が見つかっており，周辺に集落が存在した可能性が高い。一方，大田市域東部の波根川流域では，東灘遺跡（57），波根川遺跡（61），高原遺跡（63）などでこの時期に比定できる土器や石器が確認できる（大國ほか編 2005，渡辺・糸川 2012，内田編 2013b，林ほか編 2015，是田編 2017）。同じく大田市域東部の江谷川や支流の市井谷川流域周辺にも遺跡が展開し，荒槇遺跡（73），門遺跡（76），市井深田遺跡（77），中尾Ｈ遺跡などで遺物が出土した（内田編 2013b，是田編 2014・2017，林編 2016）。なかでも中尾Ｈ遺跡からは後期初頭から前葉の土器や石器が大量に出土し，また数箇所の礫群とともに大型石棒や線刻石などの特殊な遺物も確認されるなど，この地域の中核を担う拠点的な集落であったことが予想される。そのほか三瓶川流域でも遺跡が確認され，中流域の夏焼遺跡（大田市，91）では後期初頭の土器や石器などが採取されている（遠藤編 1989）。

晩期には確認できる遺跡が減少し，三瓶川上流域の神田遺跡（大田市，96），佐田町内の塚脇遺跡などで晩期中葉から後葉にかけての土器が数点確認できるにとどまる（田中編 1998，大國・中田編 1999）。その他，下流域付近の丘陵上に所在する御堂谷遺跡（大田市，84）では時期不明の落とし穴が存在し（仁木ほか編 2019），この地が狩猟の場として利用されていたことが分かる。

弥生時代

弥生時代には本格的な水稲農耕へと生業の中心が移っていくが，縄文時代晩期に引き続き，弥生時代前期から中期にかけては確認できる遺跡数が少ない。多伎町内では矢谷遺跡（18）から前期後半の土器が出土しており，器面に籾の圧痕が付着している（松尾編 2004）。大田市域東部の平野部の栗林



1	**越堂たたら跡**	25	砂原遺跡	49	下佐津目銅山精錬所跡	73	荒槇遺跡
2	**宮本鍛冶山内遺跡**	26	砂原Ⅰ遺跡	50	三味線坑銅山精錬所跡	74	竹原古墳
3	**掛樋たたら跡**	27	砂原古墳	51	塚脇遺跡	75	岩山城跡
4	**聖谷たたら跡**	28	後谷横穴墓群	52	尾崎横穴墓群	76	門遺跡
5	**加賀谷たたら跡・鍛冶屋跡**	29	小田古墳	53	塚松山古墳群	77	市井深田遺跡
6	**朝日遺跡・朝日たたら跡**	30	富士ヶ城跡	54	八幡古墳	78	中尾Ｈ遺跡
7	**吉原たたら跡・鍛冶屋跡**	31	菅沢遺跡	55	茶屋谷遺跡	79	奥市井遺跡
8	**檀原遺跡・檀原たたら跡**	32	口田儀番所跡	56	坂本古墳	80	諸友大師山横穴墓群
9	**梅ヶ谷鍛冶屋跡**	33	口田儀台場跡（１）	57	東灘遺跡	81	段山城跡
10	**梅ヶ谷尻たたら跡**	34	口田儀台場跡（２）	58	松田谷横穴墓群	82	栗林Ｂ遺跡
11	**堂ノ原たたら跡・鍛冶屋跡**	35	鶴ヶ城跡	59	天王平廃寺跡	83	尾ノ上遺跡
12	**日ノ平たたら跡**	36	経塚山古墳群	60	上川内遺跡	84	御堂谷遺跡
13	**奥原たたら跡**	37	要害山城跡	61	波根川遺跡	85	鳥井南遺跡
14	**橋ヶ原沢たたら跡**	38	経塚山横穴墓群	62	西迫横穴	86	半明遺跡
15	**百済たたら跡**	39	原の古墳	63	高原遺跡	87	鶴山遺跡
16	正南横穴墓群	40	三嶋家墓地	64	旭山城跡	88	城山古墳
17	雲州久邑長沢焼窯跡	41	屋形遺跡	65	旭山遺跡	89	松山城跡
18	矢谷遺跡	42	茗ヶ原奥たたら跡	66	大西大師山遺跡	90	立花横穴墓群
19	久村鉱山跡選鉱場	43	聖谷奥Ⅰ遺跡	67	大西大師山横穴墓群	91	夏焼遺跡
20	久村鉱山跡採鉱場	44	屋敷谷たたら跡	68	鰐走城跡	92	引ノ子遺跡
21	姉谷鉱山跡	45	伊秩城跡	69	鈴見Ｂ遺跡	93	灰取遺跡
22	赤松鉄穴	46	吉栗山城跡	70	神谷遺跡	94	久谷たたら跡
23	華蔵寺	47	銀山谷銅山跡	71	涼見Ｅ遺跡	95	下多根遺跡
24	砂原小山横穴墓群	48	中佐津目銅山精錬所跡	72	城ヶ谷遺跡	96	神田遺跡

第 13 図　田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺主要遺跡位置図

B 遺跡（82）では，２条の自然流路内で前期前半の土器や石器がまとまって出土したほか，同時期頃の環状杭列も見つかっており，また包含層中からは３箇所の穿孔を持つ板状木材が確認された（矢部編 2016）。前期後半には丘陵部の御堂谷遺跡で多くの遺物が出土し，この時期に高地性の集落が存在した可能性がある（仁木ほか編 2019）。同じ丘陵上の尾ノ上遺跡（83）では前期後葉から後期中葉頃の大溝が確認され（大庭編 2019），御堂谷遺跡との関連が注目される。三瓶川下流域の丘陵部の鶴山遺跡（大田市，87）でも前期後葉から中期の遺物が出土している（大國編 1982b）。

また御堂谷遺跡では，中期後半から後期前半頃に竪穴建物跡や加工段が多数存在し，断続的ながらも集落が存続した様子が分かる（仁木ほか編 2019）。同じ丘陵上には，同時期頃の竪穴住居跡や段状遺構が数多く見つかった鳥井南遺跡（大田市，85）があり，環濠の可能性がある大溝も確認されているため（大國ほか編 2018，野島編 2018），かなりの規模の集落が存在したと思われる。中期後半以降には東灘遺跡，高原遺跡，荒槇遺跡など大田市域東部の各地で一定量の遺物の出土が確認され（大國ほか編 2005，内田編 2013b，是田編 2014），周辺に複数の集落が展開したことを想起させる。

古墳時代

古墳時代に入ると各地で古墳が造営されるが，この地域では前期から中期の古墳はあまり多くはない。多伎町内では経塚山古墳群（36）が古くから知られ，1951（昭和 26）年に行われた方墳の発掘調査では，竪穴式石室の様相を呈した箱式石棺を持ち，滑石製の勾玉や管玉などの副葬品が出土している（松尾編 2004）。佐田町内では６基の箱式石棺が確認された塚松山古墳群（53）から鉄剣などが出土した（田中ほか編 1987）。大田市域東部の竹原古墳（74）がこの頃に比定される可能性が高く，葺石が存在している（近藤編 1975，大國 1980）。また，竹原古墳に近接する涼見 E 遺跡（大田市，71）では，葺石の存在が想定される２基の方墳が見つかっており（久保田ほか編 2016），この地域でも連綿と古墳が造営されていたことを示唆する。

後期になると，古墳や横穴墓が各地で築かれるようになる。多伎町内では横穴式石室を持つ原の古墳（39）が後期の古墳として知られるほか，箱式石棺もしくは横穴式石室が造られていたとみられる砂原古墳（27）や，実態が不明な小田古墳（29）なども存在する（松尾編 2004）。佐田町内では玄室と羨道の区別がない無袖式の横穴式石室の八幡古墳（54）や，終末期に比定できる須恵器が出土した坂本古墳（56）などが確認できる（田中編 1989）。大田市域東部では，横穴式石室を持つ城山古墳（88）が確認されている（大國・稲田編 1984）。古墳に比べて横穴墓は数多く築かれており，多伎町内には須恵器が出土した砂原小山横穴墓群（24）をはじめ，正南横穴墓群（16），後谷横穴墓群（28），経塚山横穴墓群（38）が知られる（松尾編 2004）。佐田町内にも，16 基以上が群集し，出雲東部の石棺式石室から派生した意宇型横穴墓に類する横穴墓や，出雲西部に多い天井部に肋骨状加工痕のある横穴墓を持つ尾崎横穴墓群（52）などが認められる（田中編 1988a）。大田市域東部には横穴墓群が密集しており，合計で 4 支群 16 基が確認された諸友大師山横穴墓群（80），耳環や勾玉，石製紡錘車などが出土した松田谷横穴墓群（58），切妻整正家形の天井部を持つ大型の横穴墓である西迫横穴（62）などが古くから知られている（近藤編 1975，大國 1980，大國編 1982a・1983，仁木ほか編 2019）。その他，20 基近くの横穴墓の存在が推定されている大西大師山横穴墓群（67）や，同じ丘陵上で合計

19 基が確認された大西大師山遺跡（66）では同様に耳環や管玉，切子玉などが出土している（蓮岡 1968，宮本編 2016，林・秦編 2017）。一方で，三瓶川下中流域にも横穴墓の造営が確認できる。立花横穴墓群（90）は６基以上存在したとされ，頭椎大刀や水晶切子玉などが出土した（遠藤編 1989 など）。

古墳時代では前期の集落の様子が分かる遺跡は少ないが，大田市域東部において上川内遺跡（60）とその周辺で遺物が確認され（大國編 1981），近接する高原遺跡では前期の土器が多量に出土していることから（内田編 2013b），この周辺にはある程度の規模を持つ集落が存在したと考えられる。中期から後期にかけては集落跡を示す資料が増加する。大田市域東部では，門遺跡や高原遺跡，中尾 H 遺跡などで土器がまとまって出土した（内田編 2013b，林ほか編 2015，林編 2016）。市井深田遺跡や城ヶ谷遺跡（大田市，72），御堂谷遺跡，鳥井南遺跡などでは竪穴住居跡や加工段などが複数見つかるとともに造り付け竈が確認され，石見地方沿岸部で卓越する土製支脚や移動式竈などとあわせ，当時の生活様式を具体的に知ることができる（是田編 2014，久保田ほか編 2016，野島編 2018，仁木ほか編 2019）。また鳥井南遺跡では，巨石に伴う祭祀遺構や水辺の祭祀遺構とみられる配石施設のほか，土製模造品などの祭祀関連遺物が大量に見つかり（大國ほか編 2018），この時期の集落における祭祀の様相を具体的に示している。一方で，三瓶川中上流域にも中期から後期の集落が存在する。下多根遺跡（大田市，95）や神田遺跡では竪穴建物跡や掘立柱建物跡が確認され，一部には造り付け竈が伴う（大國・中田編 1999）。この時期になると生産遺跡も確認され，神谷遺跡（大田市，70）では石見地方で初となる古墳時代終末期から奈良時代の横口付き炭窯が見つかり，鈴見 B 遺跡（69）では鍛冶炉の可能性のある焼土面や羽口などの鍛冶関連遺物が出土した（久保田ほか編 2015・2016）。

奈良・平安時代

奈良時代には律令国家の成立に伴って各地に国・郡制が整備される。733 年に奏上された『出雲国風土記』および平安時代に成立した『倭名類聚抄』などによると，出雲国には９つの郡と 61 の郷，石見国には６つの郡と 37 の郷があり，多伎町は神門郡多伎郷，佐田町は神門郡余戸里（のちに伊秩郷）と飯石郡須佐郷として登場し，大田市域東部は安濃郡，波禰郡と刺鹿郡に比定される。この地域は出雲国と石見国の境界に位置し，古代山陰道の一部で出雲国府から石見国府へとつながる正西道が通る交通の要衝であった。多伎町内や大田市域東部でこれらに関する直接的な資料は確認されていないが，菅沢遺跡では古代まで遡る可能性のある道路状遺構が見つかり，当時の驛路や伝路などの可能性も想定できる（内田編 2013a）。また，海産物を貢納する際の荷札と推定される木簡が中尾 H 遺跡から出土しており（内田編 2013b），近隣に波禰驛家や官衙などが存在したことが分かる。

古代寺院跡についてはこの地域ではあまり確認されていないものの，大田市域東部では奈良時代前期とされる天王平廃寺跡（59）が古くから知られ，塔や金堂を有する寺院であったことが確認されている（近藤編 1975，大國 1980）。また近隣の高原遺跡では，古代の平瓦や写経に関すると推測できる木簡が少量出土しており，天王平廃寺跡との関係がうかがえる（内田編 2013b，林ほか編 2015）。また多伎町の華蔵寺（23）は奈良時代に開かれた天台宗の古刹であり，平安時代中後期の作とされる毘沙門天立像が安置されている（松尾編 2004，『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

この時期の集落跡では，市井深田遺跡で確認された多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が注目される

（是田編 2014）。これらの遺構は古墳時代後期から平安時代前期にかけて連綿と存続した集落の存在を示しており，周辺では門遺跡や荒槇遺跡などでこの時期の遺構や遺物が見つかっているため（内田編 2013b，是田編 2014），市井深田遺跡を中心に複数の集落が展開していた可能性が高い。また半明遺跡（大田市，86）では平安時代の灌漑水路のほか，平安時代から鎌倉時代初期にかけての鋳鉄製犁先が見つかっており（角田ほか編 2021），当時の農業生産の様相が分かる。

中世

鎌倉時代の初め頃は朝山氏が出雲平野で勢力を拡げたが，出雲国守護の佐々木氏（のちの塩冶氏）が次第に勢力を拡大した。室町時代から戦国時代には尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防が出雲国周辺で繰り広げられ，各地で山城や砦が築かれた。特に出雲国と石見国の国境に位置する多伎町内では多くの山城跡が知られており，尼子氏の配下であったとされる小田氏の居城であった富士ヶ城跡（30），大内氏が築いて後に尼子氏に攻め落とされたといわれる要害山城跡（37），尼子氏が西方の防御を固めるために築造した鶴ヶ城跡（35）が著名である（松尾編 2004）。鶴ヶ城は最終的に毛利氏に攻め落とされるが，尼子氏の出雲国西端の守りの要として，それまでの大内氏や毛利氏による侵攻を防いだ。また，佐田町内にも山城跡が多く確認されている。室町時代に足利尊氏の命によって佐々木氏が築城した吉栗山城跡（46）や，山名宗全の家臣であった井筒氏が因幡国から移り地名の伊秩を姓としたとされる伊秩氏の居城で，毛利氏支配下では出雲国の城督の一つであった伊秩城跡（45）などが知られる（田中編 1988b）。石見国の東端部である大田市域東部でも旭山城跡（64）や岩山城跡（75），段山城跡（81）など多くの山城跡が知られる一方，海岸部に近接して築かれた水軍の城郭であった鰐走城跡（68）も存在する（錦田編 1997）。鰐走城跡のほか現在の大田市街地を一望できる丘陵部に築かれた松山城跡（89）は，尼子氏の軍事戦略のなかで重要な位置を占めたと考えられる（錦田編 1997）。

この時期の明確な集落跡は確認されていないが，柵列状遺構や段状遺構などが見つかった奥市井遺跡（大田市，79）は集落跡の一部の可能性が考えられる（矢部編 2018）。また，荒槇遺跡では木棺墓と考えられる遺構が確認され（是田編 2014），周辺に墓域が展開したことが予想される。その他，旭山城跡に近接する旭山遺跡（大田市，65）では，陶磁器などのほか中世末に遡るとみられる礎石建物跡が確認され（林編 2016），この地にかつて寺院が存在したと考えられる。周辺の高原遺跡でも中近世の掘立柱建物跡や石塔の基壇などが見つかっており（是田編 2017），その関連性が注目される。

中世期には山間部で銅山開発が進み，佐田町内には銀山谷銅山跡（47）などが知られている。この時期には多くの銅山が開かれて昭和年代まで断続的に営まれ，精錬所も三味線坑銅山精錬所跡（50），下佐津目銅山精錬所跡（49），中佐津目銅山精錬所跡（48）などが確認されている（田中編 1988b）。銅山開発では，多伎町出身の銅山師である三嶋清右衛門が著名であり，出雲市大社町の鷺浦にある鷺銅山を発見して開発したほか，博多の豪商である神谷寿禎に乞われて大田市域西部の石見銀山の再開発にも協力したとされる。多伎町内にある三嶋家墓地（40）には，清右衛門の供養塔と伝わる石塔が残されている（松尾編 2004）。銅山開発とともに鉄の生産も山間部を中心に盛んになり，多伎町内の屋敷谷たたら跡（44）や佐田町内の檀原遺跡では，製鉄炉や精錬鍛冶炉などが確認されている（角田・宮本編 1997，宮本編 2002，石原編 2010）。そのなかで，茗ヶ原奥たたら跡（42）は製鉄炉の構造など

詳細は不明であるが，中世末から近世の野だたらと推測されている（石原ほか編 2005）。

近世

近世になると幕藩体制が確立され，最盛期を迎えた石見銀山は幕府直轄地となり，その出入りを厳重に警備するために出雲国と石見国との国境付近である多伎町の口田儀に番所（32）が設置された（松尾編 2004）。石見銀山の開発とともに製鉄業も活性化し，たたら製鉄の経営が中国地方各地で盛んに行われ，製鉄炉を中心に置いて４本の押立柱で支えられた建物構造を有する高殿たたらが成立する。

その他の生産遺跡としては，多伎町内で近世後期の雲州久邑長沢焼窯跡（17）が存在し，全国各地で陶磁器の生産が始まった時期に操業され，山陰地方で最も早い時期の磁器窯として知られている（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

また，幕末期には日本近海に外国船が出没するなど高まる軍事的緊張により松江藩は日本海沿岸に台場を設け，多伎町内では口田儀台場跡（33・34）などが知られている（松尾編 2004）。

近代

明治期になると急速に近代化が進行して産業が発展するとともに，それまでの封建的な規制が緩んで全国的に窯跡が増加する。城ヶ谷遺跡では連房式登窯が上下に重なって２基確認され（久保田ほか編 2016），近現代における石州瓦・石見焼の生産遺跡として重要である。

昭和初期には国内で鉄鉱資源の需要が高まり，多伎町内で 1940（昭和 15）年から採鉱場や選鉱場など近代的な設備を備えた久村鉱山（19・20）が操業される（仁木・福田編 2019）。また近接する湖陵町の姉谷鉱山（21）でも砂鉄採掘が行われ，これまでに複数の坑道が確認されているなど，近代的な久村鉱山とは対照的に人力作業で採掘した小規模な鉱山としての実態を示している（東山ほか 2018）。久村鉱山では最盛期には多くの精鉱を生産したが，敗戦と同時に操業を停止し，1949（昭和 24）年には過度経済力集中排除法により閉山を余儀なくされた（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

近世・近代の田儀櫻井家のたたら製鉄

近世から近代に活躍した田儀櫻井家は，多伎町奥田儀を拠点として，佐田町内のほか，隣接する雲南市域や大田市域東部にもたたら場や鍛冶屋を設け，広く製鉄経営を展開した。田儀櫻井家は近世初期にこの地域に居宅を構えて鉄山を開発し，1665 年から 1678 年頃（寛文中期から延宝期）には本格的に製鉄業を開始した（山﨑 2008）。そして 1890（明治 23）年までの約 250 年間にわたり製鉄業を営み，最盛期には出雲国でも有数の鉄師にまで成長するとともに，地域経済の発展にも貢献した。

多伎町内の山間部には田儀櫻井家の本拠地で，生産関連遺構や生活関連遺構のほか，田儀櫻井家の菩提寺の智光院や金屋子神社，歴代当主やその子女の墓地である田儀櫻井家墓地が現存する宮本鍛冶山内遺跡（２）のほか，発掘調査によって製鉄炉地下構造である床釣りなどが確認された掛樋たたら跡（３）や聖谷たたら跡（４）が存在する（石原編 2008，幡中編 2020）。

佐田町内や雲南市域，大田市域の山間部にも田儀櫻井家が経営した多くのたたら場跡，鍛冶屋跡が存在し，佐田町内では加賀谷たたら跡・鍛冶屋跡（５），朝日たたら跡（６），吉原たたら跡・鍛冶屋跡（７），檀原たたら跡（８），梅ヶ谷尻たたら跡（吉野鈩）（10），梅ヶ谷鍛冶屋跡（９）が知られ，佐田町と雲南市域の境には堂ノ原たたら跡・鍛冶屋跡（11），大田市域東部の山間部には日ノ平たたら

跡（12），奥原たたら跡（13），橋ヶ原沢たたら跡（14）が確認できる（鳥谷 2004，藤原 2009）。このうち，朝日たたら跡，檀原たたら跡，梅ヶ谷尻たたら跡，日ノ平たたら跡では発掘調査で製鉄炉の床釣りの様相が明らかにされ（杉原ほか編 1983，大國・遠藤編 1987，杉原編 1992，角田・宮本編 1997），朝日たたら跡では高殿周辺から陶磁器などが確認されている（田中編 2001）。吉原たたら跡や梅ヶ谷尻鍛冶屋跡，堂ノ原たたら跡は測量調査などが実施され，高殿や鍛冶場の位置のほか，たたら製鉄の山内における製鉄関連遺構の残存状況が明らかにされている（石原編 2010）。

山間部で田儀櫻井家のたたら場が設けられる一方で，海岸部でもたたら製鉄が営まれた。多伎町の越堂たたら跡（１）は田儀櫻井家の製鉄業を支えた基幹的なたたら場跡である。越堂鈩は約 150 年間操業され，近接する田儀浦（現在の田儀港）の海運を利用して周辺地域や因幡国・伯耆国・石見国などから製鉄の原材料の砂鉄や木炭を搬入し，生産した銑鉄などを全国へ出荷した（鳥谷 2004，藤原 2009）。山内の様子は建物配置図で知られていたが（渡辺ほか編 1961），発掘調査では概ね配置図の位置に製鉄炉の床釣りが認められ（石原編 2008），今回報告する高殿全体の発掘調査により長期間の操業で床釣りや高殿石垣が複数回改修されたことが判明した（幡中 2017）。大田市域東部の百済たたら跡（15）は越堂たたら跡と同じく海岸部のたたら場跡だが，詳細な実態は不明である（藤原 2009）。

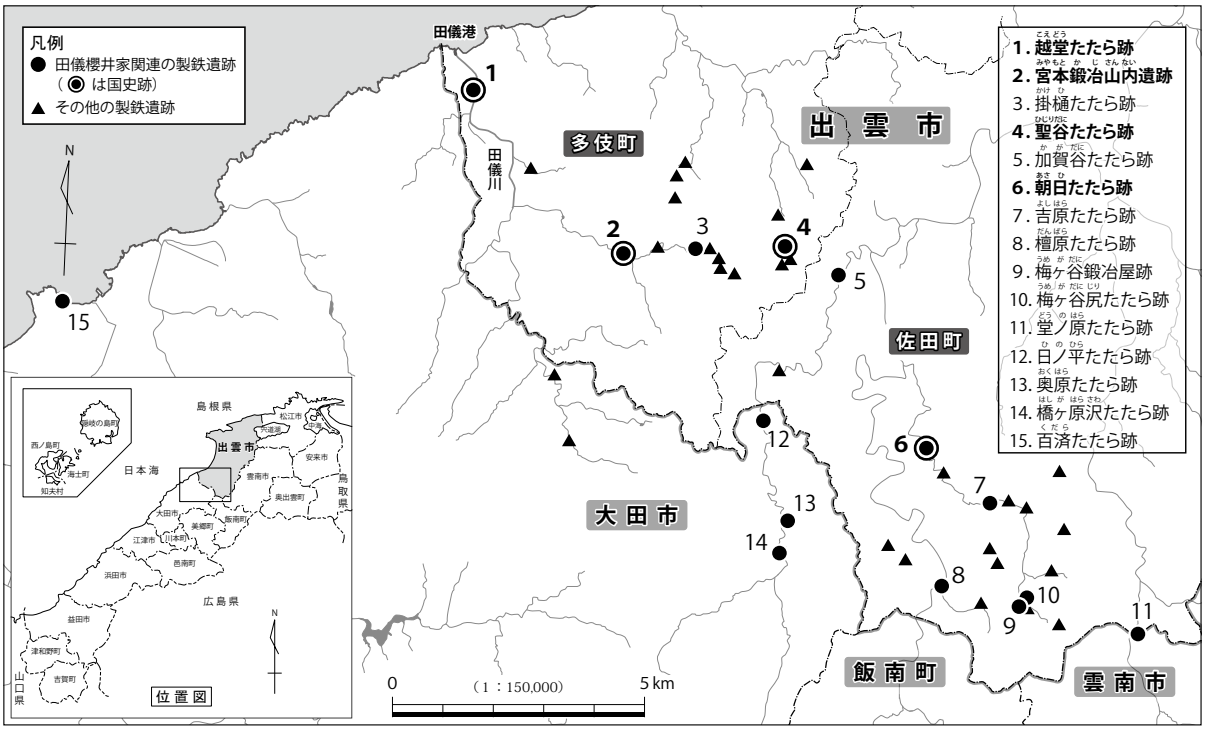
その他，田儀櫻井家との関連性は不明であるが，三瓶川中流域の引ノ子遺跡や灰取遺跡（大田市，93）では，近世から近代の陶磁器や鉄滓，近世の建物跡や石垣などが確認され，高殿や製鉄炉の床釣りなどが見つかった久谷たたら跡（大田市，94）との関係性が注目される（遠藤編 1989・1990）。

田儀櫻井家は製鉄の原材料となる砂鉄や木炭を港の海運によって他地域から調達するとともに，山間部のたたら場の近隣で炭窯の構築や鉄穴流しを行って原材料を生産したと考えられる。例えば，聖谷たたら跡に近接する聖谷奥Ⅰ遺跡（多伎町，43）では近世の炭窯跡が見つかっており，年代測定の結果から聖谷鈩が操業された時期と重なる可能性が示されている（景山編 2012）。また多伎町東部にあたる久村地区では，赤松鉄穴（22）が田儀櫻井家によって開発されて砂鉄の供給地となっており（『久村の歴史』編集委員会編 2011），この地域の製鉄関連遺跡として注目される。

幕末から明治初年頃に最盛期を迎えた田儀櫻井家は，引き続きたたら製鉄の経営を続けるが，開国による海外の安価で均質な輸入鉄の流通などの影響で逼迫し，生糸改良会社設立や蚕種製造業，銀行設立などの多角的な経営で再建を目指すが成功には至らなかった（渡辺 1996）。また本拠地の宮本で山内が火災に見舞われるなどの事態が重なり，1890 年に田儀櫻井家のたたら製鉄は終焉を迎えた。

これまでに見てきたように，田儀櫻井家が活躍した多伎町周辺は，律令期以来，出雲国と石見国の境界付近になり，中世期には特に石見銀山をめぐって各地の有力大名による様々な攻防の舞台となる。続く近世の幕藩体制においては，幕府直轄地となった石見銀山のある石見国との自由な往来が制限されることとなった。幕藩体制の厳しい統制化でもこの地に製鉄業を興し，地域や国境を越えて広範囲にわたりたたら製鉄を営んだ田儀櫻井家は，最盛期には出雲国において一二を争うほどの収益を誇るまでの発展を見せ，松江藩から様々な待遇を受けるまでに成長する。

こうした田儀櫻井家における一連のたたら製鉄の経営は，封建社会における様々な規制や制限を乗り越えて成り立つ当時の経済活動の力強さを如実に物語っているといえよう。



第 14 図　田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の分布

第６表　歴史的環境の参考文献一覧

編著	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・掲載文献・掲載頁	発行機関
阿部智子・江角ひろみ編	2004	屋形遺跡	林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	多伎町教育委員会
石原　聡ほか編	2005	茗ヶ原奥たたら跡	林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	出雲市教育委員会
石原　聡編	2008	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―	出雲市の文化財報告 1	出雲市教育委員会
石原　聡編	2010	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―	出雲市の文化財報告 15	出雲市教育委員会
今岡一三・勝部智明編	2010	砂原車廻古墳群・砂原Ⅰ遺跡	一般県道多伎インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
内田律雄編	2013a	菅沢遺跡	一般国道９号（多伎朝山道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
内田律雄編	2013b	門遺跡　高原遺跡Ⅰ区　中尾Ｈ遺跡	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1	島根県教育委員会
遠藤浩巳編	1989	引ノ子遺跡・灰取遺跡―三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査１―	大田市埋蔵文化財調査報告９	大田市教育委員会
遠藤浩巳編	1990	久谷たたら跡―三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査２―	大田市埋蔵文化財調査報告 11	大田市教育委員会
大國晴雄	1980	島根県大田市域の遺跡	松江考古　第３号　77 ～ 82 頁	松江考古学談話会
大國晴雄編	1981	上川内遺跡―田長・高原地区―	大田市埋蔵文化財調査報告１	大田市教育委員会
大國晴雄編	1982a	大田市松田谷横穴群	―	島根県教育委員会
大國晴雄編	1982b	川南遺跡群―大田西部土地造成事業に伴う発掘調査―	大田市埋蔵文化財調査報告２	大田市教育委員会
大國晴雄編	1983	諸友大師山横穴群―三瓶川流域遺跡他詳細分布調査１―	大田市埋蔵文化財調査報告３	大田市教育委員会
大國晴雄・稲田　信編	1984	三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ―大田市内遺跡一覧・地図―	大田市埋蔵文化財調査報告４	大田市教育委員会
大國晴雄・遠藤浩巳編	1987	日ノ平たたら跡発掘調査報告書―近世高殿たたらとたたら文書―	大田市埋蔵文化財調査報告６	大田市教育委員会
大國晴雄・中田健一編	1999	下多根・神田―北三瓶地区県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査―	大田市埋蔵文化財調査報告第 22 集	大田市教育委員会
大國晴雄ほか編	2005	東灘遺跡―輝日谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財調査―	大田市埋蔵文化財調査報告書第 32 集	大田市教育委員会
大國晴雄ほか編	2018	鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅰ―壱貫田地区・志田ヶ池地区・蛾山地区・千代迫地区・狼段原地区―	大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 35 集	大田市教育委員会
大庭俊次編	2019	尾ノ上遺跡　桜田遺跡	一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4	島根県教育委員会
角田徳幸・宮本正保編	1997	檀原遺跡・谷川遺跡・殿淵山毛宅前釿跡	志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4	島根県教育委員会

編著	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・掲載文献・掲載頁	発行機関
角田徳幸ほか編	2021	半明遺跡	一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５	島根県教育委員会
景山真二編	2012	聖谷奥Ｉ遺跡	出雲市の文化財報告 21	出雲市教育委員会
久保田一郎ほか編	2015	鈴見Ｂ遺跡２区	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３	島根県教育委員会
久保田一郎ほか編	2016	城ヶ谷遺跡（１区）　神谷遺跡　涼見Ｅ遺跡	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６	島根県教育委員会
『久村の歴史』編集委員会編	2011	久村の歴史	—	久村地区連合自治会
是田　敦編	2014	市井深田遺跡　荒槇遺跡　鈴見Ｂ遺跡１区	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２	島根県教育委員会
是田　敦編	2017	高原遺跡（３区）・中尾Ｈ遺跡（４区）・門遺跡（２区）	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10	島根県教育委員会
近藤　正編	1975	島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅱ集	—	島根県教育委員会
杉原清一編	1992	梅ヶ谷尻たたら跡	—	佐田町教育委員会
杉原清一ほか編	1983	朝日鉾	—	佐田町教育委員会
田中迪亮ほか編	1987	佐田町の遺跡　東須佐地区	—	佐田町教育委員会
田中迪亮編	1988a	尾崎横穴群発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
田中迪亮編	1988b	佐田町の遺跡　窪田地区	—	佐田町教育委員会
田中迪亮編	1989	佐田町の遺跡　西須佐地区	—	佐田町教育委員会
田中迪亮編	1998	上組団地茶屋谷遺跡発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
田中迪亮編	2001	朝日遺跡発掘調査報告書	—	佐田町教育委員会
鳥谷智文	2004	田儀櫻井家の沿革	田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書　19 ～ 38 頁	多伎町教育委員会
仁木　聡・福田市子編	2019	久村鉱山跡―選鉱場の調査―（旧 株式会社日立製作所安来工場久村鉱山）	一般国道９号（湖陵多伎道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
仁木　聡ほか編	2019	御堂谷遺跡・諸友大師山横穴Ⅳ群１号穴	一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３	島根県教育委員会
錦田剛志編	1997	石見の城館跡	島根県中近世城館跡分布調査報告書第１集	島根県教育委員会
野島智実編	2018	鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ―狼段原地区―	大田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 36 集	大田市教育委員会
蓮岡法暲	1968	大田市内の遺跡・遺物	大田市誌　十五年のあゆみ　48 ～ 59 頁	大田市
幡中光輔	2017	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の整備・活用とゾーン展開	遺跡学研究　第 14 号　82 ～ 89 頁	日本遺跡学会
幡中光輔編	2020	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ―宮本鍛冶山内遺跡　田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究―	出雲市の文化財報告 42	出雲市教育委員会
林　健亮ほか編	2015	高原遺跡（２区）	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４	島根県教育委員会
林　健亮編	2016	旭山遺跡・中尾Ｈ遺跡（３区）	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５	島根県教育委員会
林　健亮・秦　愛子編	2017	大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）　城ヶ谷遺跡（２区）	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９	島根県教育委員会
東山信治ほか	2018	出雲市湖陵町姉谷鉱山跡測量調査報告	古代文化研究　第 26 号　77 ～ 90 頁	島根県古代文化センター
藤原雄高	2009	田儀櫻井家の鉾・鍛冶屋の変遷	田儀櫻井家　たたら史料と文書目録 出雲市の文化財報告８　101 ～ 113 頁	出雲市教育委員会
松尾充晶編	2004	多伎郷の考古学　ふるさとの史跡を歩く	—	多伎町ライオンズクラブ
松藤和人編	2013	砂原旧石器遺跡の研究―島根県多伎町砂原所在砂原遺跡発掘調査報告書―	—	砂原遺跡学術発掘調査団
宮本正保編	2002	檀原遺跡（２）―自然科学分析編―	志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 11	島根県教育委員会
宮本正保編	2016	大西大師山遺跡	一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７	島根県埋蔵文化財調査センター
矢部俊一編	2016	栗林Ｂ遺跡　一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１	大田市埋蔵文化財調査報告書第 33 集	大田市教育委員会
矢部俊一編	2018	諸友越峠遺跡・奥市井遺跡　一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３	大田市埋蔵文化財調査報告書第 37 集	大田市教育委員会
山崎一郎	2008	松江藩神門郡における田儀櫻井家の鉄山経営	たたら製鉄・石見銀山と地域社会　近世近代の中国地方　29 ～ 51 頁	清文堂
渡辺勝治	1996	田儀桜井家年代記	—	自費出版
渡辺勝治ほか編	1961	田儀村誌	—	多伎村役場
渡辺　聡・糸川寿幸	2012	波根川遺跡の縄文土器	島根考古学会誌　第 29 集　31 ～ 34 頁	島根考古学会

第３章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の概要

今回の越堂たたら跡の発掘調査は，第１章第２節で整理したように，2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度において高殿内とその周辺を中心に調査を実施した。高殿内の調査対象は A ～ F 区および 2006（平成 18）年度調査区を含めて約 310㎡，高殿外側は約 57㎡であり，合計約 367㎡である。また，越堂たたら跡の史跡指定範囲隣接地においては，遺構の有無を確認するための試掘確認調査を実施した。ここでは，これらの調査成果の概要を整理して報告する。

１　調査状況の概要（第 15 図）

2006 年度の発掘調査後に高殿内およびその周辺の公有地化を進めており，今回の発掘調査は，高殿内に存在した住宅および車庫の撤去がなされたために実施された（第 15 図）。

高殿内および高殿周辺の発掘調査は，基本的に人力掘削により行い，遺構や遺物の有無を確認した。また高殿は，国道９号に隣接して現在の集落の宅地内に所在しており，道路交通や周辺住民の生活に影響を及ぼさないように慎重に調査を進めた。すべての記録作業の終了後は，真砂土および掘削土によって現地を埋め戻した。

なお，発掘調査に伴う掘削土の一部には，後世の造成に伴うとみられるコンクリート破片やアスファルト片などの瓦礫が大量に含まれており，それらを適切に運搬・処理するとともに，その他の掘削土は埋め戻し土として再利用するため，周辺環境に配慮しながら適切に保管した。また，雨風などから遺構の状態を保護するため，木製板材と角材およびシートを組み合わせた遺構養生を実施した。

２　調査成果の概要（第 16 ～ 18 図，図版２・３）

発掘調査によって高殿の南面石垣を確認できたため，北面石垣および東面石垣と合わせて最大で一辺約 19.5m の角打の高殿であることが判明したほか，たたら場操業当時の高殿内部の施設配置を示

第 15 図　調査前状況（住宅撤去後，北西から）（2013 年度）

第 16 図　遺構全景（北西から）（2017 年度）

す遺構や，本床および小舟など製鉄炉の防湿や保湿を目的とした地下構造施設である床釣りの遺構が比較的良好な状態で確認された（第 16 図）。これらの遺構は全てが同一面ではなく，複数の遺構面で確認されたことから，越堂釛が稼働した約 150 年間の操業期間のなかで複数時期の操業面が残存することが明らかになった。そして現存する高殿の外側には暗渠施設が確認されたが，暗渠施設は高殿石垣下に構築されており，高殿石垣構築以前の遺構であることが判明した。さらに，床釣りおよび高殿南面石垣では造り替え痕跡が確認され，高殿内における複数時期の操業面と対応することが分かり，越堂釛の長期間の操業において高殿が何度か改修された状況が具体的に把握できた。

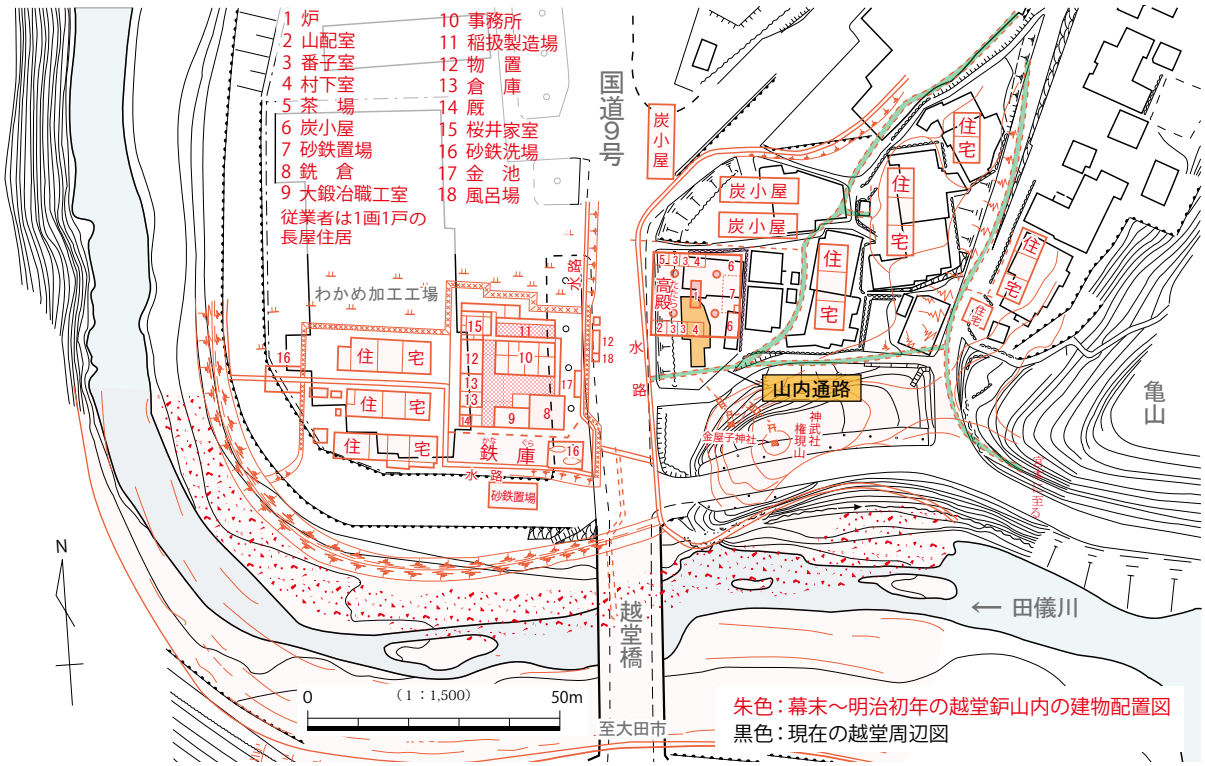
このように，今回の越堂たたら跡の発掘調査は，たたら操業当時の遺構が良好に残存する状況を確認できたことに加えて，たたら操業を示す遺構が複数時期の操業面で存在し，それらが高殿の造り替え痕跡と関連して明確に位置づけられたことが大きな成果として挙げられる。

なお，『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）掲載の幕末から明治初年の越堂釛の山内建物配置図には，高殿から東側に向かう山内通路が記されているが（第 17 図），当時の山内通路に伴う石垣の一部が残され，現在も里道として利用されている。その他，高殿周辺には礎石列が残存しており，山内建物配置図に記された高殿周辺の炭小屋や住宅に伴う礎石の可能性がある。

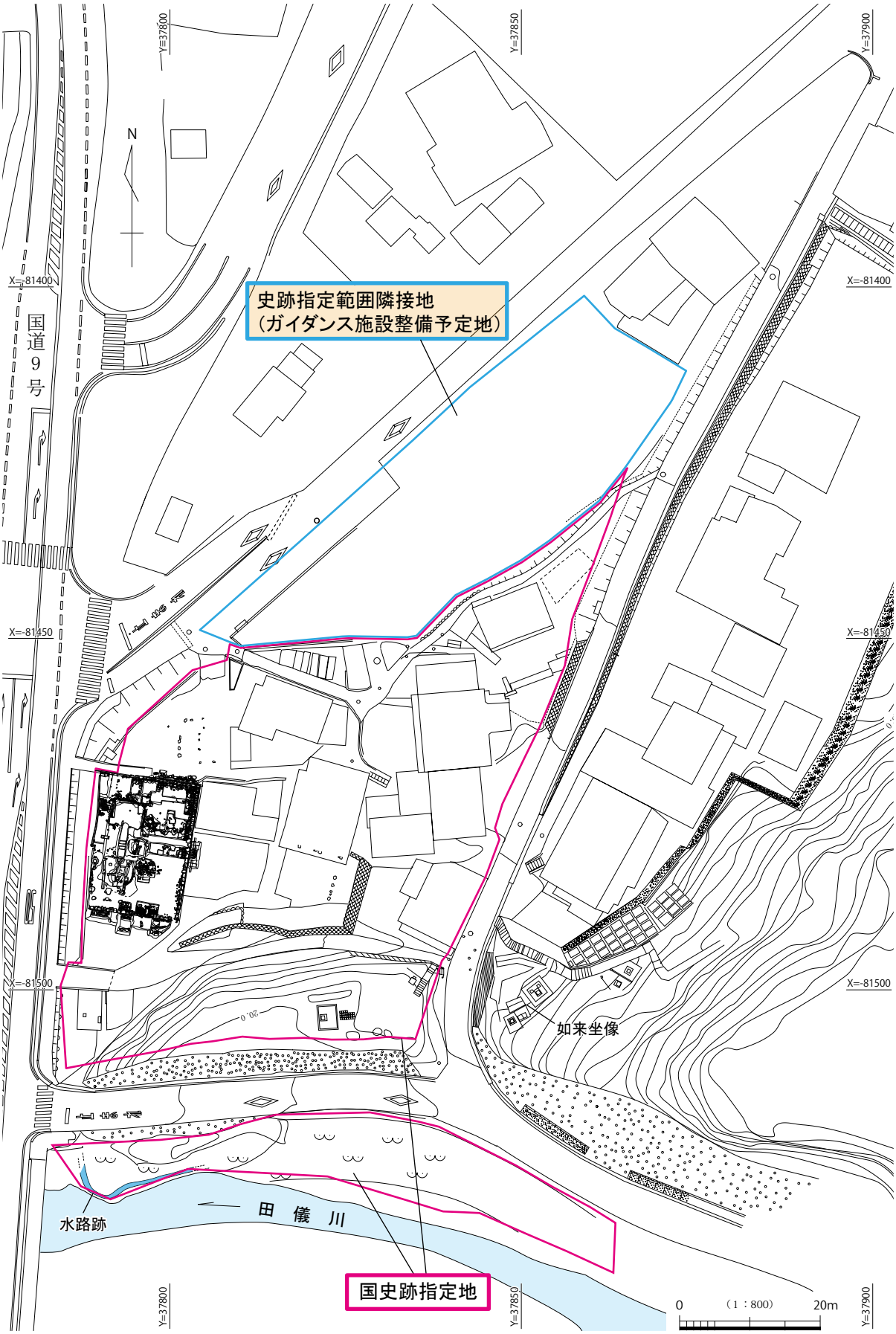
また，越堂たたら跡における史跡指定範囲隣接地（ガイダンス施設整備予定地）（第 18 図）の試掘確認調査では，山内に関する遺構は確認できなかったが，越堂釛山内の周辺に存在した田の痕跡が見つかり，明治初年頃の口田儀村の絵図で描かれた景観と合致することを確認した。

参考文献

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場



第 17 図　『田儀村誌』掲載の越堂釛山内建物配置図にみる高殿東側の山内通路



第 18 図　越堂たたら跡の史跡指定範囲と隣接地

第２節　操業時期と遺構の年代

１　操業時期と高殿関連の遺構（第 19 ～ 21 図，第７表，図版５）

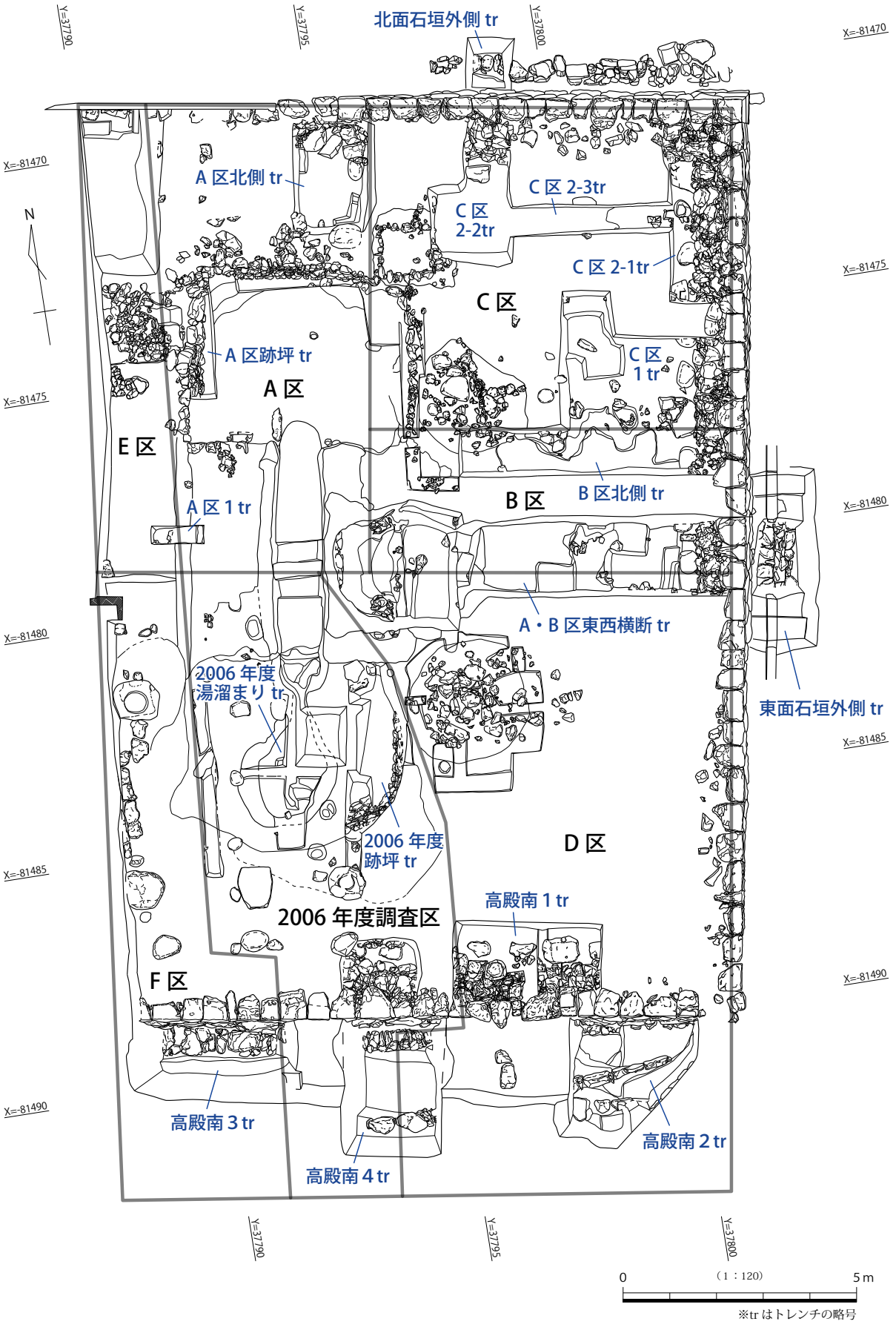
越堂たたら跡の調査区と高殿関連の遺構の全体配置図は，第 19・20 図のとおりである。越堂釛は第１章第１節で整理したように，文献史料では 1745（延享２）年の時点で操業が確認され，田儀櫻井家の５代目当主甚三郎順之が石見国横道村の弥平太から 1771（明和８）年に買い請けたと考えられているが，1769（明和６）年には田儀櫻井家の名義による操業が確認されており，この時点で越堂釛の経営に携わっていた可能性がある。その後，1882（明治 15）年までは操業が続けられており，田儀櫻井家の経営以前の時期を含めて越堂釛の操業自体は，少なくとも約 150 年間継続したことになる。発掘調査では，この約 150 年間におよぶ操業の痕跡が操業面に伴う遺構から確認でき，操業面や遺構内，盛土から採取した炭化物の年代測定を実施した。その詳細な測定結果は第５章第１節にて報告されており，その測定結果および高殿の構築状況（第 21 図）をもとに田儀櫻井家の経営時期を踏まえて越堂釛操業１～４期に整理する（第７表）。ここでは各時期の様相を概観するが，第３章第３節で各時期の盛土や埋土の構築状況および遺構の内容を詳しく検討するほか，第３章第５節の出土遺物の報告内容を踏まえ，第３章第６節で各時期のたたら操業の様相を総括する。

２　越堂釛操業１期（田儀櫻井家経営以前）

発掘調査で確認された遺構で最も古いのは，現存する高殿石垣外側を廻る暗渠施設である。暗渠施設は高殿石垣下に構築され，高殿石垣構築以前の遺構である。高殿東面石垣外側で確認した暗渠施設内には，埋土とともに炭化したクヌギ節やコナラ節などの樹木（第５章第１節）が埋められていた。高殿内では硬化面が複数箇所で確認されている。その他の遺構は見つかっておらず，たたら場の操業の実態や暗渠施設と硬化面の直接的な関係は不明だが，暗渠施設は高殿石垣周辺を廻り，それ以前に存在したと想定されるたたら場の操業に伴う硬化面と排水施設の可能性がある。暗渠施設内の樹木や暗渠施設埋土内の炭化物（AMS- １・２）を年代測定した結果，17 世紀末から 18 世紀中頃の年代値が得られ，硬化面を形成する盛土からは 17 世紀末から 18 世紀後半の陶磁器（第３章第５節第 48 図４），高殿内外からは 17 世紀後半から 18 世紀中頃の陶磁器が出土した（第３章第５節第 48 図１・２，第 49 図 32）。これらは田儀櫻井家経営以前の時期と考えられ，この時期を越堂釛操業の１期とする。

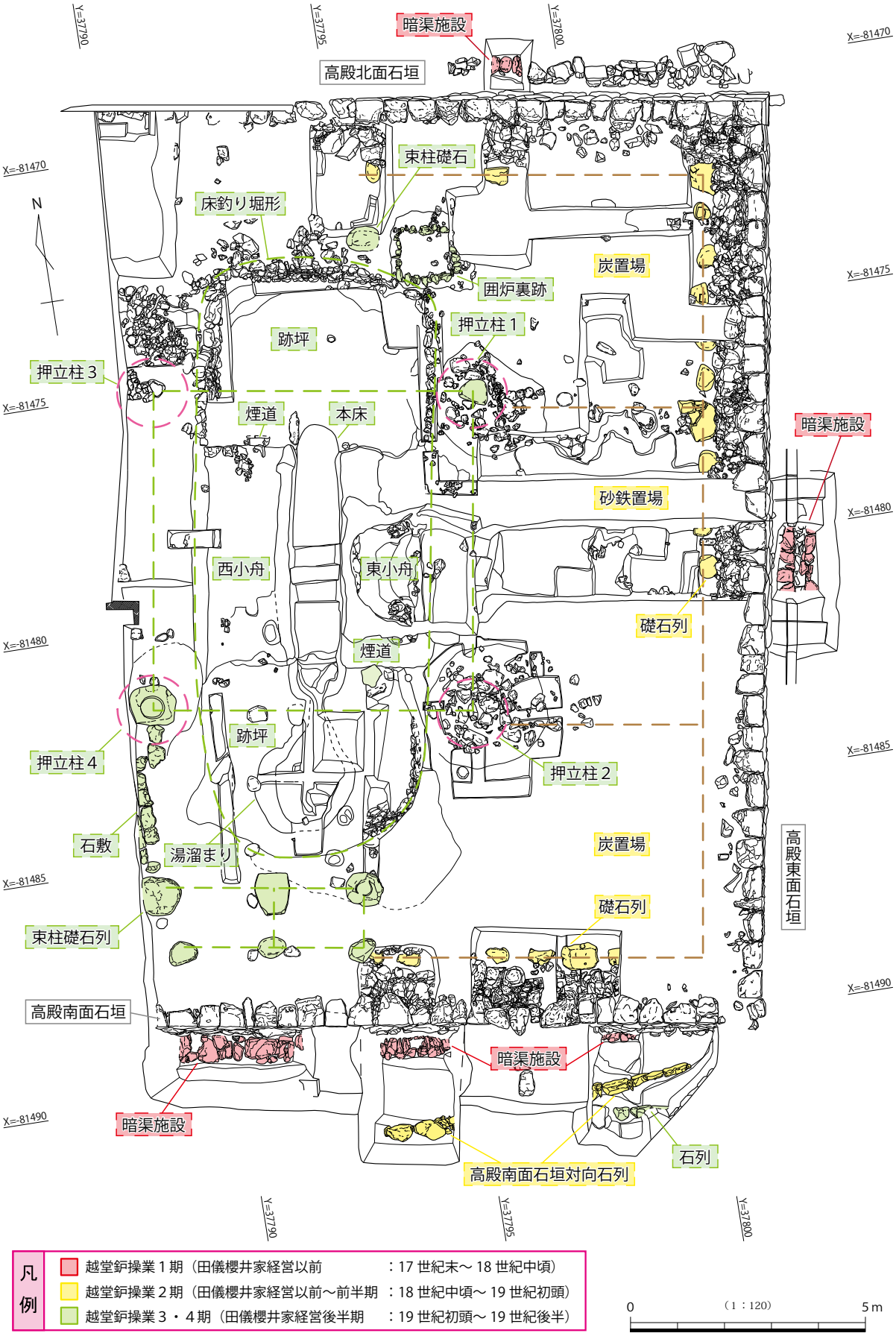
３　越堂釛操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）

現存する整美な切石を用いた高殿石垣の下には自然石を用いた石垣が存在しており，それに伴う操業面では炭置場や砂鉄置場，礎石列などが確認され，たたら操業が展開することを確認した。高殿南１トレンチ石垣床面直上盛土内の炭化物（AMS- ３）および高殿南１トレンチ内の炭置場に残存していた炭化物（AMS- ４）の年代測定で 18 世紀中頃から後半頃の年代値が与えられた。また，高殿石垣床面を形成する盛土からは，18 世紀中頃から後半頃の陶磁器が出土している（第３章第５節第 48 図５）。



※tr はトレンチの略号

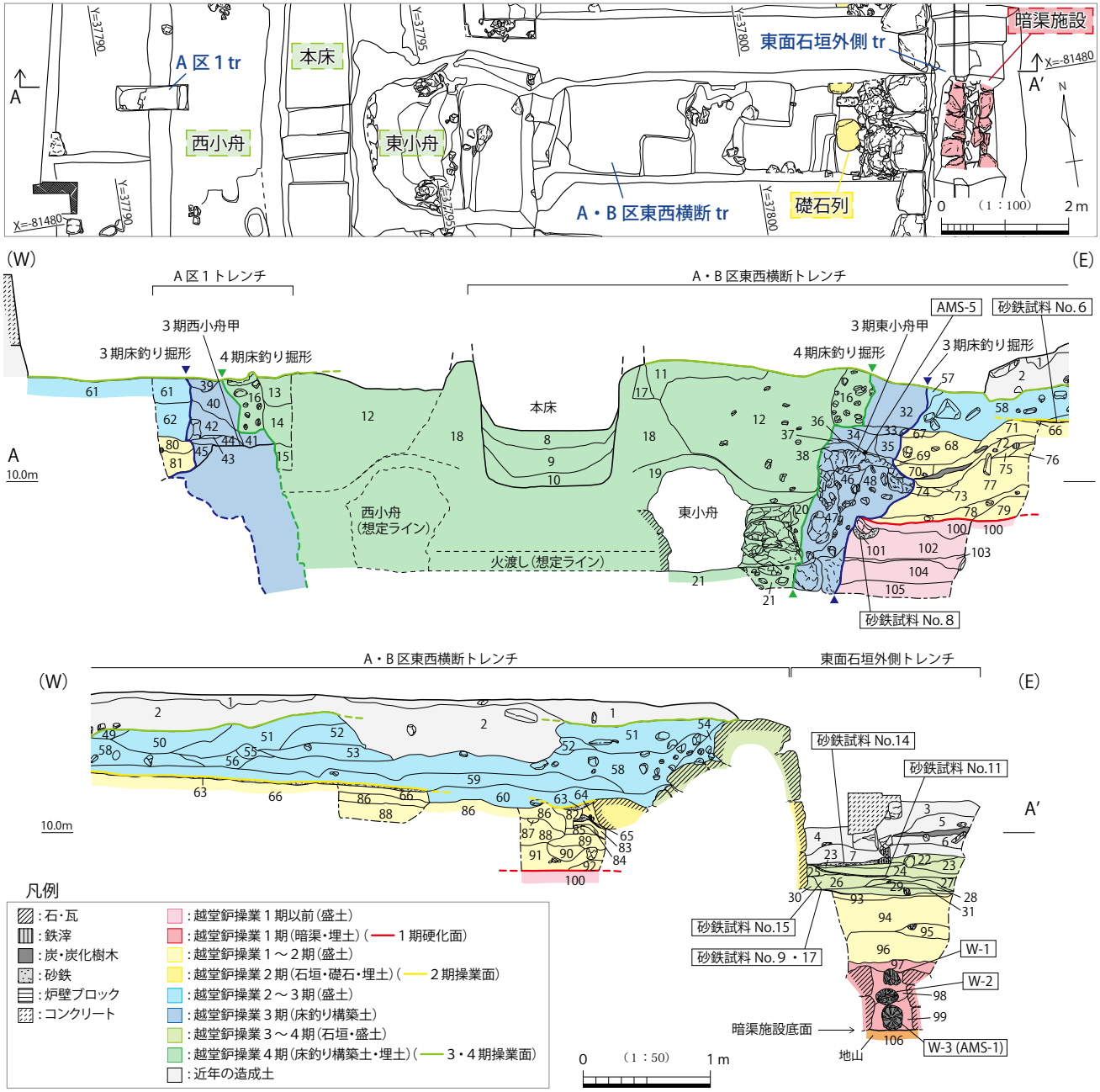
第 19 図　越堂たたら跡の調査区配置図



第 20 図　越堂たたら跡の遺構配置図

第７表　越堂鈩操業時期と推定年代・AMS 年代測定試料

	田儀櫻井家経営時期	推定操業年代	測定対象	測定試料 No.	測定値（２σ）
越堂鈩操業１期	田儀櫻井家 経営以前	17 世紀末～ 18 世紀中頃	暗渠施設内埋設樹木 暗渠施設埋土内炭化物	AMS- １・２	1694 ～ 1730 年
越堂鈩操業２期	田儀櫻井家 経営以前～経営前半期	18 世紀中頃～ 19 世紀初頭	炭置場上炭化物 小舟甲（３期）上炭化物	AMS- ３～５	1727 ～ 1803 年
越堂鈩操業３期	田儀櫻井家 経営後半期（前半）	19 世紀初頭～中頃	本床埋土（粉炭層）内炭化物	AMS- ６	1801 ～ 1940 年
越堂鈩操業４期	田儀櫻井家 経営後半期（後半）	19 世紀中頃～後半頃			



第 21 図　高殿東西ベルト北壁土層図

この時期の操業面を削って構築された床釣り（３期）の小舟は，現存する床釣り（４期）の小舟に削平されて全体は残存していないが，小舟の天井部分に相当するアーチ状の甲が確認され，現存する床釣りよりも古い時期の所産であることが判明した。この小舟の甲上の炭化物（AMS-5）は年代測定により 18 世紀後半から 19 世紀初頭の年代値が与えられ，この時期には自然石の石垣に対応する操業面全体に盛土をして高殿全体のかさ上げを行った構築状況が確認できる。同時期頃の盛土内からは 18 世紀後半から 19 世紀前半頃の陶磁器が出土しており（第３章第５節第 48 図８），それ以前の自然石の石垣に対応する操業面は，18 世紀中頃から 19 世紀初頭まで稼働した可能性があり，この時期を田儀櫻井家の経営以前から経営の前半期として把握し，越堂鈩操業の２期に位置づける。

４　越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）

現存する切石を用いた高殿石垣と床釣りは，越堂鈩が操業された最終段階の遺構であり，越堂鈩の操業が終焉を迎えた時期まで稼働していたと考えられる。床釣りのほかに押立柱，囲炉裏跡や束柱礎石列などの遺構が確認された。2006 年度の発掘調査では，床釣りの本床底面付近の埋土（粉炭層）から採取された炭化物の年代測定が実施されている。それらの試料（AMS-6・7）について今回の年代測定と同様の手法で再度解析が試みられ，AMS-6 では 19 世紀初頭以降の年代値が得られた（第５章第１節）。なお，2006 年度の発掘調査のなかで，本床の土層断面の剥ぎ取りが行われている。

第３章第３節で詳述するが，現存する床釣りに伴う息抜き穴は，土管を連結させて仕上げられている。土管は概ね幕末から明治初年以降に普及するため（1），床釣りは 19 世紀中頃から後半頃に稼働した蓋然性が高い。２期の操業面上に盛土がなされて 19 世紀初頭頃までに造られた床釣り（掘形と小舟の甲が残存）は，現存する床釣りに削平されている。しかし，両者の小舟の甲は高さがほとんど変わっていないため，たたら操業面が新たにかさ上げされることなく 19 世紀初頭頃から同一面で操業が継続して行われ，19 世紀中頃から後半頃に床釣りのみが改修された可能性がある。よって，19 世紀初頭頃までに２期の操業面上に盛土がなされて新たな操業面が構築され，19 世紀中頃までたたら場が稼働した時期を越堂鈩操業の３期，19 世紀中頃から後半頃に床釣りのみが改修されて稼働した時期を越堂鈩操業の４期として設定でき，これら３・４期を田儀櫻井家経営の後半期に位置づける（2）。なお，2006 年度に確認された床釣りは，今回の調査で４期の高殿の床釣りであることが判明した。

註

（１）規格性の高い土管の大量生産が可能になるのは明治初年以降であるが，江戸期の終わり頃から常滑焼などの土管が生産されていたことが分かっている（柿田 1992）。

（２）越堂鈩は 1878（明治 11）年に東京蓬莱社の所有となるため，４期の後半段階には田儀櫻井家による全面的な経営体制ではなかったと推測される。なお，越堂鈩は 1882（明治 15）年までは操業されていたことが記録に残っており，越堂鈩がいつ頃まで稼働していたのかは今後の検討の余地がある。

参考文献

柿田富造 1992「[土管] 使用の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　３～ 29 頁

第３節　高殿内とその周辺の調査

１　高殿構造と高殿石垣（第 22 図，図版６～９）

（1）高殿構造

高殿の規模と構造は，高殿建物を囲む石垣から推測できる。これまで高殿の北面石垣および東面石垣の一部が確認されていたが，今回の調査によって南面石垣を確認したことで東面石垣の正確な長さが把握でき，約 19.5m にわたり東面石垣が構築されていたことが判明した。高殿建物の規模を示す柱穴跡などは確認されていないため正確な規模は不明であるが，高殿石垣の長さから推定すると，一辺が最大で約 19.5m であったと考えられる。また『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）掲載の越堂鈩山内建物配置図（第１章第１節第３図）には正方形の角打の高殿建物が描かれているため，越堂鈩の高殿建物は一辺が最大で約 19.5m の規模を持ち，平面形が正方形の角打の高殿構造を持っていたと考えられる。これらは越堂鈩操業の３・４期（田儀櫻井家経営後半期）の高殿構造である。

（2）高殿石垣

高殿石垣は，西面石垣が国道９号下に埋没しているが，東面石垣と北面石垣，南面石垣の一部は，今回の発掘調査で確認できた。高殿石垣の構築状況は，特に南面石垣のなかで具体的に把握できる。高殿石垣の上部は整美な切石で構築されるが，根石を含む高殿石垣下部は比較的大型の自然石を用いており，自然石の石垣上部に切石の石垣が増し積みされた様子がよく分かる。

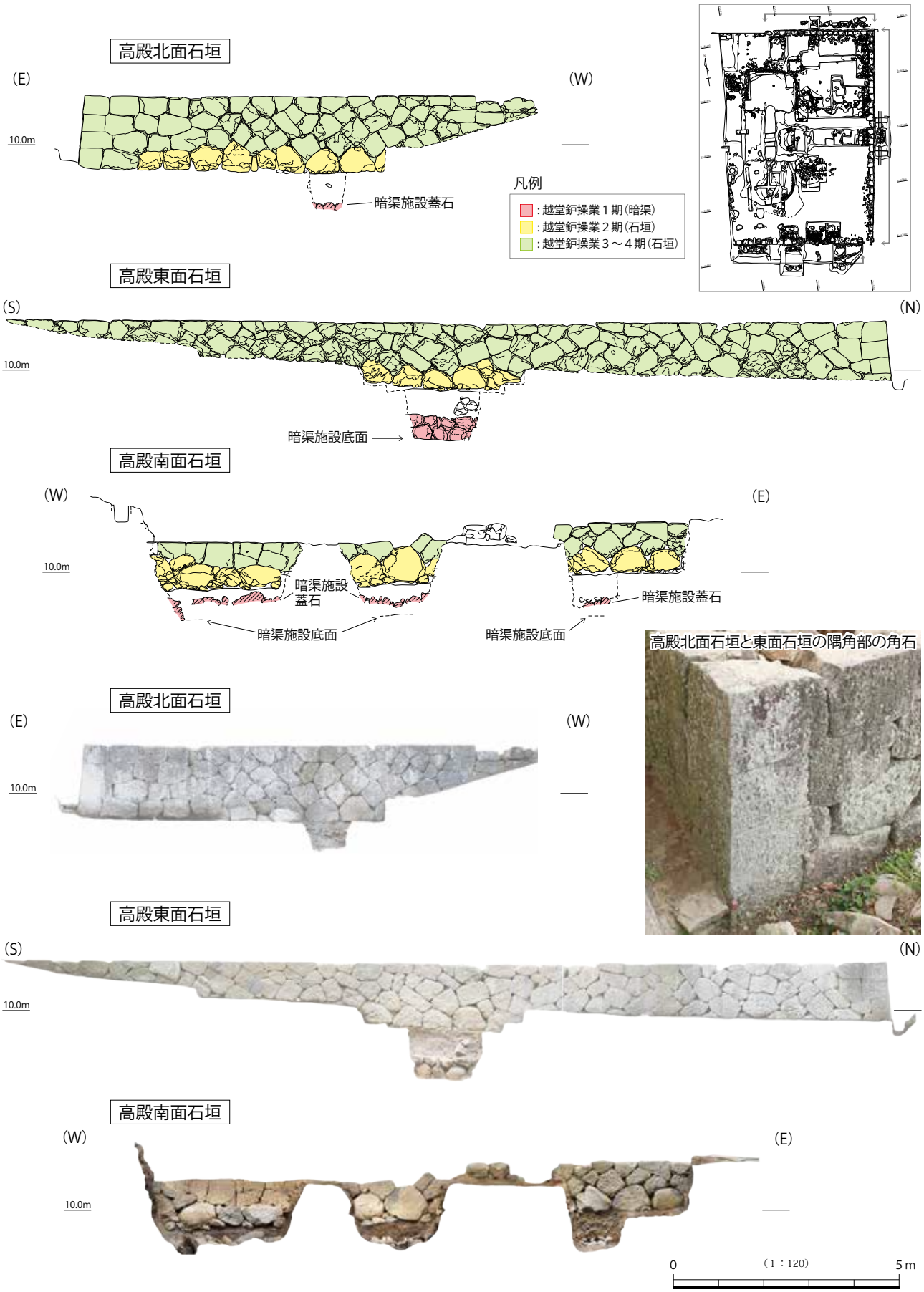
自然石の石垣

自然石の石垣は高殿南面石垣外側のほか，東面石垣・北面石垣外側の各トレンチで確認できる。乱積みで構築された石垣は高殿全体を廻っていたと考えられ，石垣の高さは約 0.9m と推測される。これらの自然石は玉石状の安山岩の転石（風化残留核）を主に使用しており，地山との間詰め石には，花崗岩や熱水変質安山岩などの河原石が用いられている[(1)]。なお，高殿南面石垣の自然石は表面に明確な破面が確認でき，表面を加工して平滑に整えたことが分かる。隣接する石材の表面に合わせて加工している状況から勘案すると，自然石または切石の石垣を構築後に成形したと考えられる。

切石の石垣

切石の石垣は自然石の石垣上部に増し積みして構築され，２期の操業面上に裏込めが敷設されている。自然石の石垣を含めて北面石垣は約 1.6m，東面石垣は約 1.5m，南面石垣は約 1.1m の高さとなる。北面石垣と東面石垣で構成される隅角部の出角は，丁寧に加工された方形の角石の小面と大面を交互に組み合わせた算木積みが行われ，石材表面には細かいノミ痕が残るものもある。東面石垣のその他の石垣は多角形のやや不揃いな切石による谷落とし積みで，石材同士は隙間が生じている。風化が進み不明瞭な部分があるが石材表面にはやや粗いノミ痕が残り，石材の加工状況や石材表面の加工度合いは均一でない。これらの石材は凝灰角礫岩から火山角礫岩の特徴を示す[(2)]。

南面石垣を見ると，東側と西側で石垣上面にある天端石の高さが異なり，南面石垣の東端から 7.3m 付近より西側が 48cm ほど低くなる状況が分かる。南面石垣東側の切石における天端石の高さは東



第 22 図　高殿石垣立面図（北面・東面・南面）（上）・オルソ画像（下）

面石垣と揃っており，また石積み構造や石材の加工状況，石材表面の加工度合いも類似する。その一方で，南面石垣西側の切石は，主に方形の切石が用いられて布崩し積みに近い石積み構造を持ち，石材同士の隙間は生じていない。石材は南面石垣東側と同様の凝灰角礫岩から火山角礫岩の特徴を有するが，石材表面に残るノミ痕が細かく，南面石垣東側とはやや異なる特徴を持つ石垣構成となっている。なお，南面石垣東側は後世の造成に伴い天端石の一部が取り除かれていた。

北面石垣も南面石垣に近い状況であり，北面石垣の東端から 8.7m 付近より西側は天端石の高さが低くなり，また布崩し積みに近い石積みで方形の石材が認められるなど，南面石垣西側の状況と類似する。東面石垣との隅角部の角石は，石材表面が細かいノミ痕の方形の石材による算木積みであり，その他の石垣は多角形の不揃いな切石の谷落とし積みで，粗いノミ痕が石材表面に残るなど，東面石垣および南面石垣東側と共通する。これらは凝灰角礫岩から火山角礫岩製である。

石垣の構築時期

自然石の石垣に対応するのは，越堂鈩操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）の操業面であり（第 21 図 66 層上面），自然石を利用した乱積みの高殿石垣は，詳細な構築時期は不明だが，田儀櫻井家の経営以前から経営の前半期頃に構築されたことが想定される。

切石の高殿石垣は，２期の操業面に対応する自然石の石垣上部に増し積みされており，２期以降の所産である。東面石垣と北面石垣東側および南面石垣東側の石垣構造は，全体的に宮本鍛冶山内遺跡の田儀櫻井家墓地のテラス増築時における石垣構造（幡中編 2020）よりもやや粗雑な印象を受けるものの，角石の表面縁辺部に僅かながら縁消し加工痕跡が認められ，宮本鍛冶山内遺跡の田儀櫻井家墓地の石垣や金屋子神社本殿石垣などとの共通点がある。縁消し加工痕がみられる田儀櫻井家墓地の石垣は 19 世紀中頃に構築されたと考えられ（幡中 2020），これらの石垣も比較的近い時期の所産であると想定すると，越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）に位置づけられる。

ここで問題となるのが，北面石垣西側と南面石垣西側の切石石垣の位置づけである。切石石垣が構築された３・４期のなかで時期差があると考えると，方形の石材による布崩し積みに近い石積みの北面石垣西側と南面石垣西側の構築後に，谷落とし積みの北面石垣東側と南面石垣東側が増し積みされたと考えられる。正確な時期は不明だが，３・４期のなかでも高殿石垣の改修があったことが推測されるため，切石石垣は３期から４期にかけての高殿石垣として広く捉えることにする。

２　高殿の構築状況（第 23 ～ 29 図，図版７）

高殿の構築状況については，第３章第２節の操業時期と遺構の年代のなかでも確認しているが（第 21 図），その内容を踏まえて高殿の構築状況を詳しく確認したい。

（１）越堂鈩操業１期（田儀櫻井家経営以前）の高殿構築状況

高殿の構築状況（第 21・24 図）を見ると，現存する高殿石垣の外側には，標高９m 付近の高さまで越堂鈩操業１期（田儀櫻井家経営以前）の暗渠施設が構築されており，その内部には埋土とともに炭化したクヌギ節やコナラ節などの樹木が埋められていた。東西石垣外側トレンチのほかに，高殿南２・４トレンチでも地山が確認され（第 25・26・28 図），地山を掘り込んで暗渠施設が構築された様子が

よく分かる。暗渠施設上面には１～２期にかけて盛土が施され，２期の高殿石垣の根石が据えられた床面が形成されている。

高殿内の複数個所で確認された硬化面は，高殿内全面に展開した可能性があり，暗渠施設は１期のたたら場操業に伴う硬化面の排水施設の可能性が考えられる。硬化面を形成する盛土内には砂鉄層が確認されることからも，１期やそれ以前にたたら場が操業していたことが推測される。

（２）越堂鈩操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）の高殿構築状況

越堂鈩操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）の自然石を用いた石垣は，１～２期にかけて施された盛土上に構築され，高殿内には１期の硬化面上に盛土がなされている状況が確認できる。砂鉄層などが盛土内に認められる土層もあり，１～２期のたたら場で使用された砂鉄が混入した可能性がある。また高殿石垣から 1.3m 程度内側に入った場所で，盛土を掘り込んで設置された礎石が認められる。礎石は各トレンチで高殿石垣の内側を廻るように配置され，礎石列を形成する。礎石列の上面には砂鉄や炭が堆積しており，２期の砂鉄置場および炭置場であったと考えてよい。また炭置場上面には燻し瓦（第３章第５節第 52 図 81）が認められ，この時期の高殿やその周辺における建物の一部に燻し瓦が用いられた可能性を示唆する。

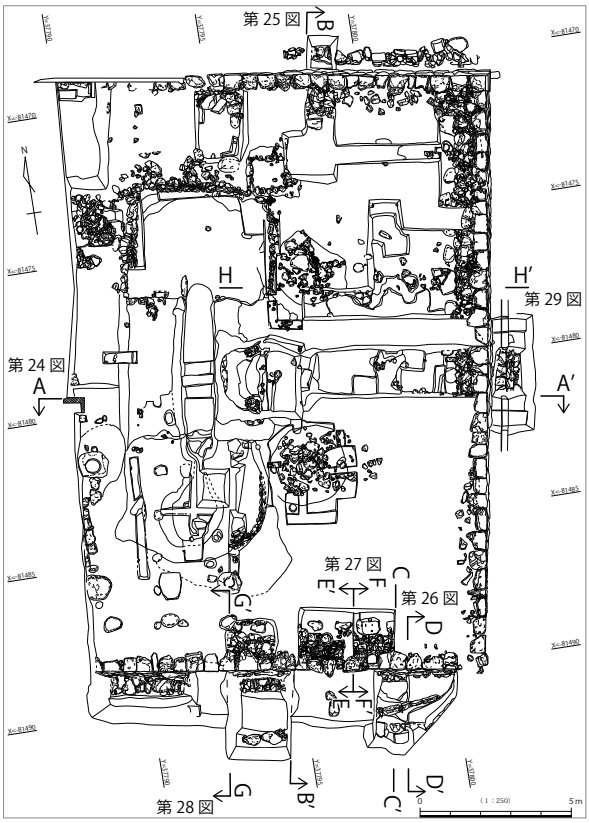
２期の砂鉄置場や炭置場などの操業面は，後述する３・４期の高殿の改修に伴い部分的に削平されているほか，床釣り自体も３期の床釣りの構築時に削られたとみられ，残存していない。また，高殿南外側では高殿南面石垣に対向する自然石の石列が存在し，２期の自然石で構成される高殿石垣の根石と同じ高さで地山直上に構築されているため（第 25・26 図），この時期の遺構として把握した。

（３）越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）の高殿操業状況

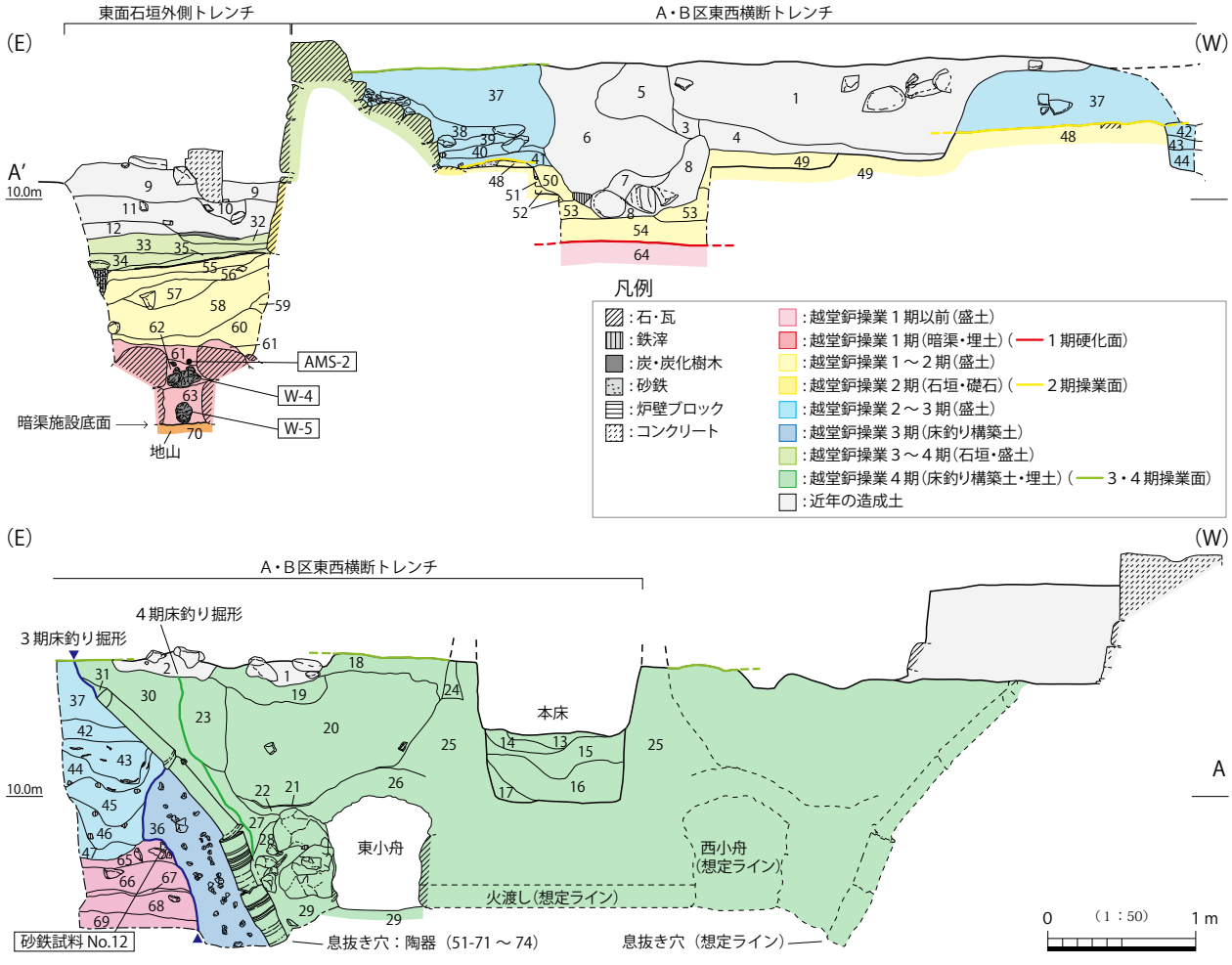
越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）における切石の高殿石垣は，２期の自然石の石垣上に増し積みされており，またこの時期のたたら操業面は，２期の操業面上に盛土を施して形成されたと考えられる（第 21・24 ～ 27・29 図）。盛土は２期の操業面上に全面的になされており，高殿内の操業面全体をかさ上げすることで，高殿全体を改修した状況が確認できる。

３・４期のたたら操業面は同一であったと考えられる。しかしながら，後世の造成で削平された部分が多く，明確な砂鉄置場および炭置場は残存していなかった[(3)]。２期の砂鉄置場を掘り込んだ盛土内には，煤が付着した燻し瓦（第３章第５節第 52 図 80）が確認されており（第 29 図），２期の高殿やその周辺の建物の一部に使用されたと考えられる。３期の床釣りは２期の操業面を削平して構築され，床釣りの掘形や東小舟および西小舟の甲が確認できる（第 21・24 図）。３期の床釣りを削って４期の床釣りが構築されたため，掘形や小舟の甲以外の床釣り痕跡は確認できなかった。

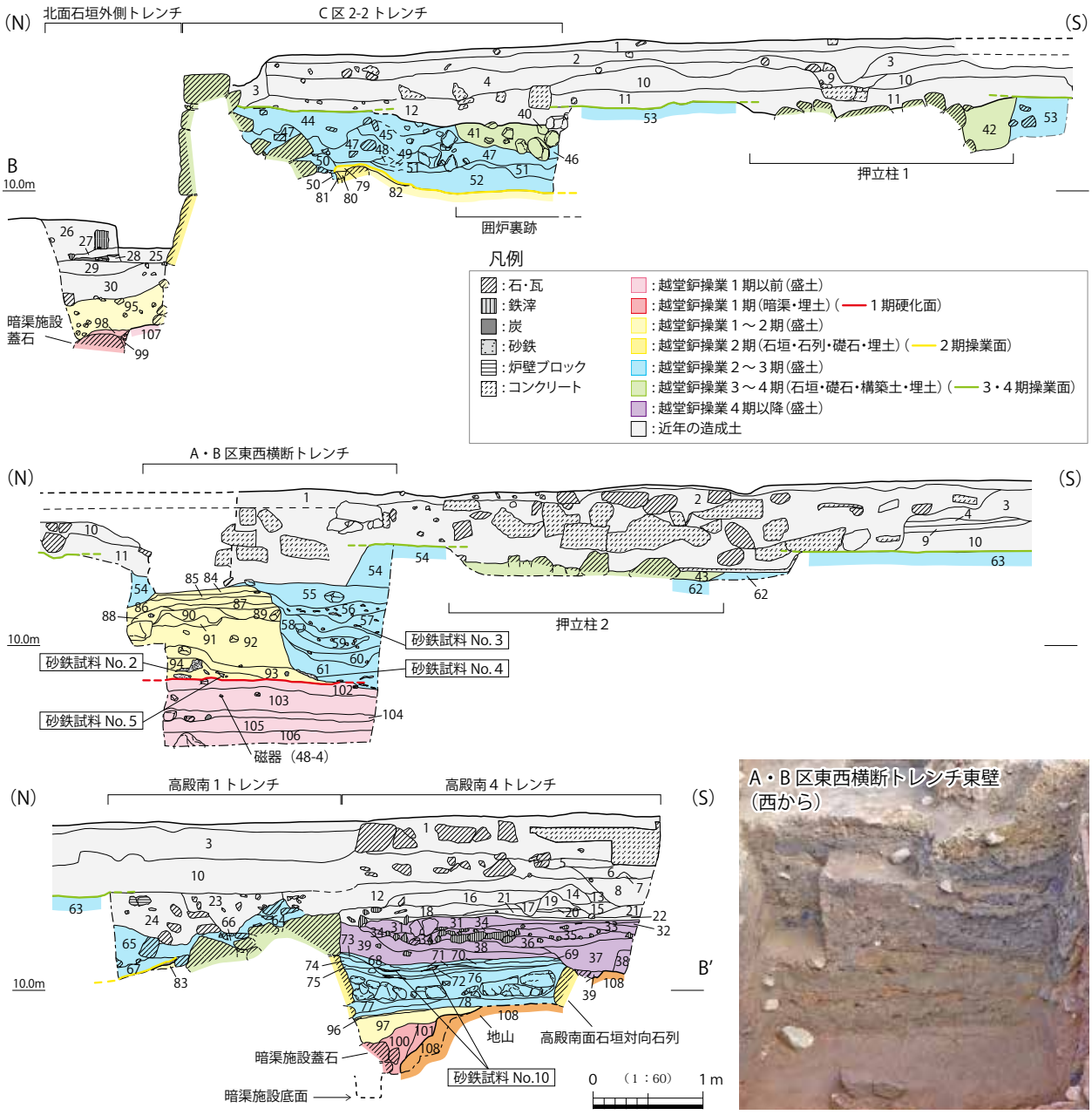
高殿南面石垣の外側では，自然石の高殿石垣やそれに対向する石列を覆うように２～３期の盛土がなされている状況が分かる（第 25・26・28 図）。盛土には砂鉄層が含まれ，３期の高殿の改修に伴い，２期のたたら操業面の掘削土などを用いて盛土を行ったことが推測される。そのため，高殿南面石垣の外側は，切石の石垣を構築後に２期の自然石の石垣を意図的に盛土で埋没させ，切石の石垣のみが見えるように整えた可能性が考えられる。また，高殿南面石垣外側では，２～３期の盛土上に堆積する炉壁や焼土ブロック，鉄滓を多量に含んだ盛土が存在するが，これらは３・４期の高殿石垣の天端



第 23 図　高殿周辺における土層図・立面図・断面図（第 24 ～ 29 図）の位置



第 24 図　高殿東西ベルト南壁土層図



第 25 図　高殿南北ベルト土層図（1）

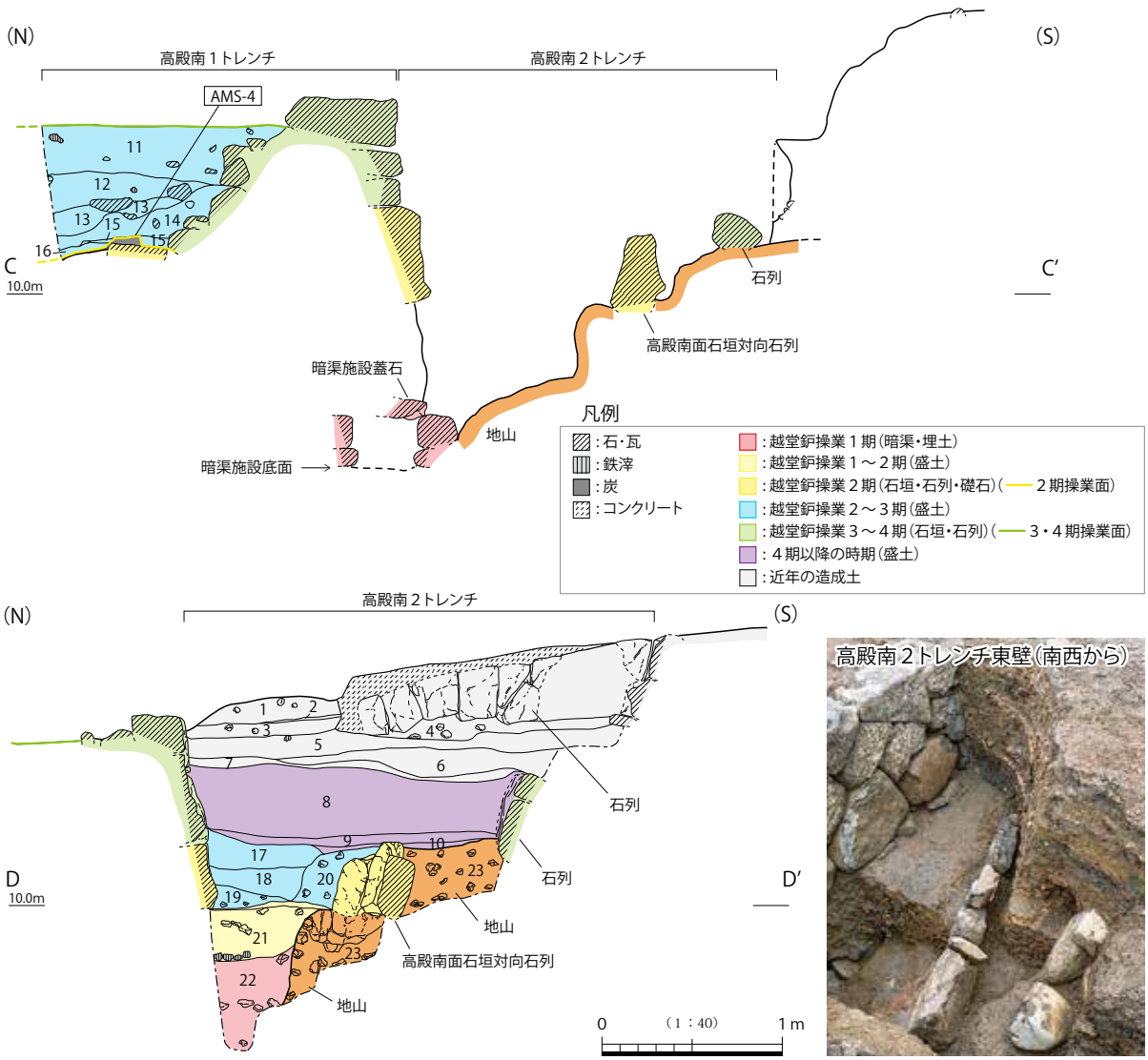
石と同程度の高さまで認められる（第 25・26・28 図）。この盛土の正確な時期は不明であるが，３・４期のたたら操業面や床釣りなどを削った掘削土による盛土の可能性があり，これらの状況から勘案すると，越堂鈩でのたたら操業が終了した４期以降になされたと判断できる。その上にはコンクリート片やアスファルト片などの瓦礫を多量に含む近年の造成土が堆積する状況となっている。

３　高殿関連の遺構（第 30 ～ 41 図，図版８～ 16）

（1）越堂鈩操業１期（田儀櫻井家経営以前）の遺構

暗渠施設

１期の暗渠施設は，高殿北面石垣外側および東面石垣外側，南面石垣外側でそれぞれ確認されており，現存する高殿石垣外側を廻るように石垣下に存在する（第 30 図）。その範囲内の排水施設として

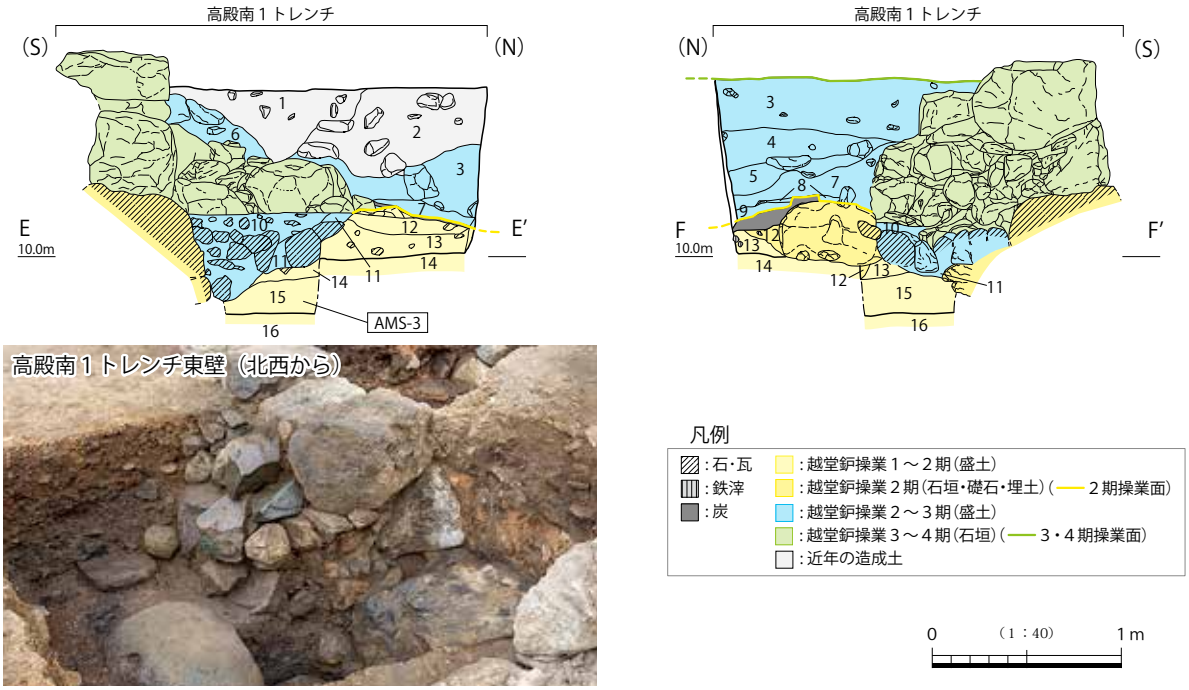


第 26 図　高殿南１トレンチ東壁土層図・２トレンチ断面図（上）と２トレンチ東壁立面図（下）

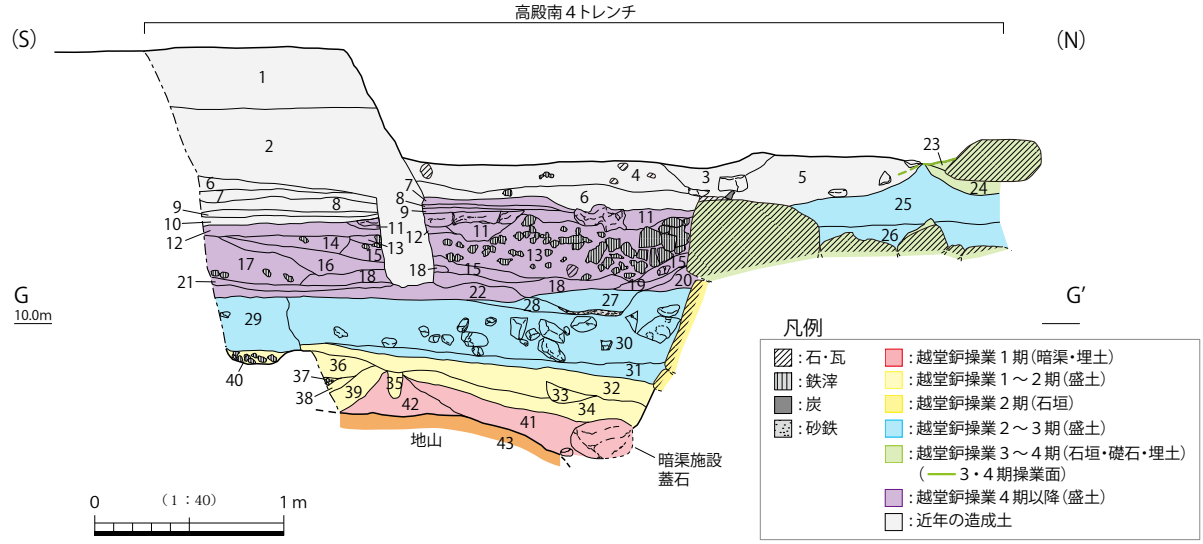
機能したと想定され，田儀櫻井家経営以前に構築されたと考えられる。高殿石垣外側を廻っており，高殿石垣よりも古い時期に敷設されたものであるが，２期以降も高殿内の排水施設として利用するために暗渠施設に沿って高殿石垣が構築されたと考えられる（4）。

暗渠施設は自然石で構築され，東面石垣外側では両側の石積みを含めた幅が最大で約 86.9cm，深さは約 52.2cm である。北面石垣外側および南面石垣外側の暗渠施設には蓋石が存在していたが，東面石垣外側の暗渠施設では確認されず，内部には炭化したクヌギ節やコナラ節などの樹木が埋められていた（第５章第１節）。また東面石垣外側の暗渠施設の石積みは，比較的整った石材で整然と積み上げられ，暗渠施設以前に水路として使用された可能性がある。なお，東面石垣外側の暗渠施設の南側底面は標高 8.5 m，北側底面が標高 8.46m を測り，南面石垣外側の暗渠施設中央の東側底面は標高約 9.06m，西側底面は概ね標高 9.04m で，暗渠施設西側は底面が標高約 8.94m となるため，地下に浸透して暗渠施設内に進入する雨水の流れは，南から北，そして東から西の排水方向が想定される。

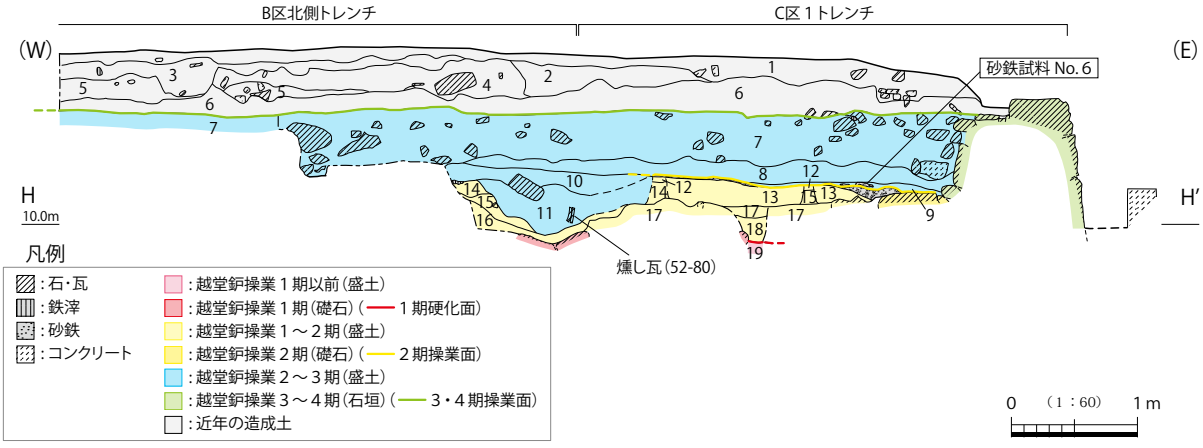
暗渠施設の石材は安山岩や花崗岩，凝灰角礫岩など多様な石材の河原石が使用されており，特定の石材にこだわらずに暗渠施設の構築に必要な形状をもとに石材を選択したと考えられる。



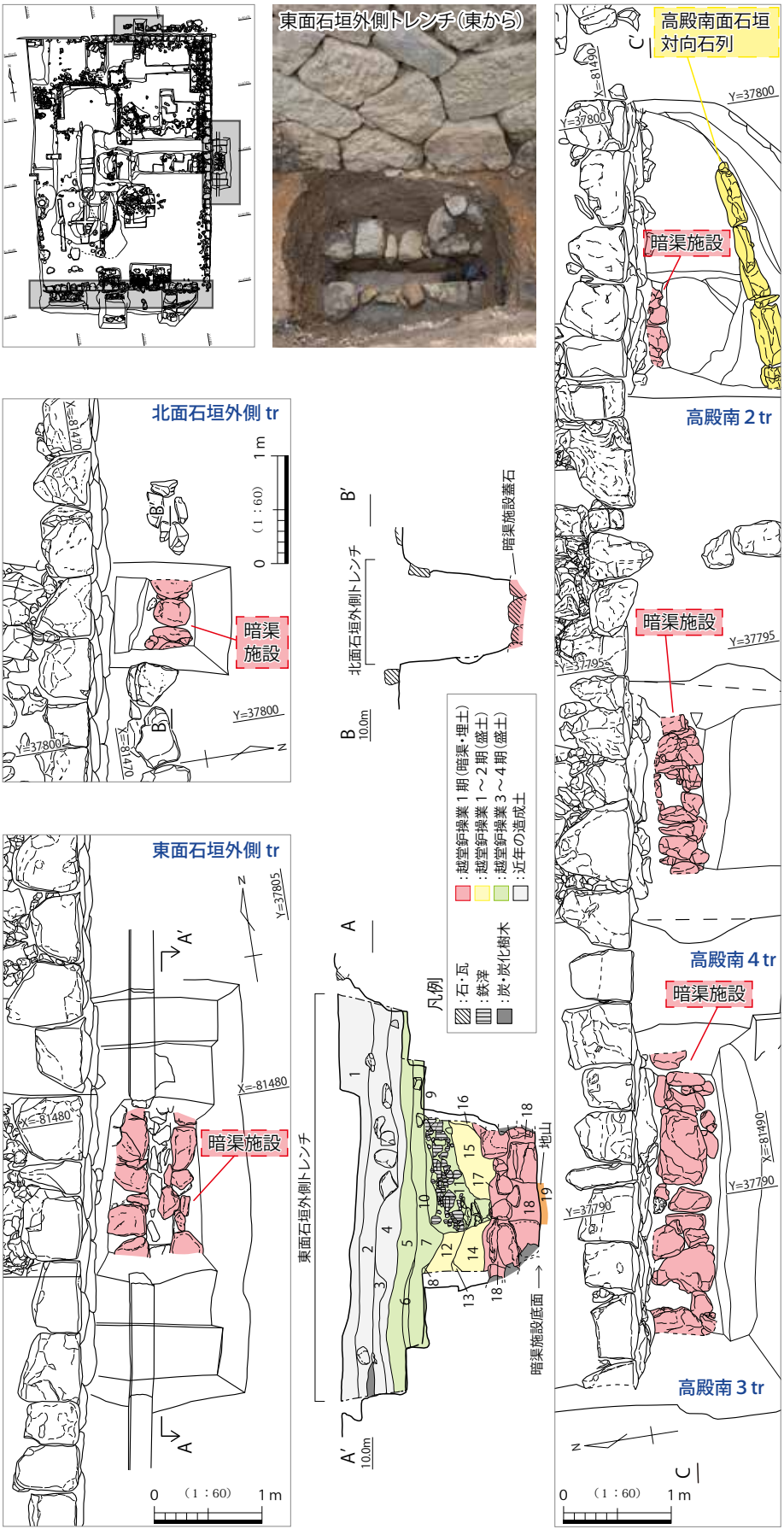
第 27 図　高殿南１トレンチ西壁（左）・東壁（右）立面図



第 28 図　高殿南４トレンチ西壁土層図



第 29 図　B 区北側トレンチ北壁・C 区１トレンチ南壁土層図



第 30 図　暗渠施設（１期）平面図・立面図・断面図

（２）越堂鈩操業２期（田儀櫻井家経営以前から前半期）の遺構

砂鉄置場・炭置場

２期のたたら操業面では，砂鉄置場と炭置場が見つかった（第 31 図）。部分的に３・４期の高殿の改修に伴い削平されているが，操業面上には砂鉄や炭が広がり，その存在が確認できる。高殿北側と北東側および南側で炭置場，高殿東側中央では砂鉄置場が認められた。これらの場所は，幕末から明治初年の越堂鈩山内建物配置図（第１章第１節第３図）に示された位置と符合し，２期から高殿内の施設配置は大きく変わらないことが推測される。なお，高殿東側では砂鉄置場と炭置場の間に砂鉄や炭が側面に付着した石列が確認されており，両者の空間を区画した石列として設置された様子が把握できる。炭置場の礎石上面には燻し瓦（第３章第５節第 52 図 81）が確認されている（第 31 図）。

礎石列

２期のたたら操業面では，高殿石垣の内側を廻る礎石列が確認された（第 32 図）。砂鉄置場や炭置場の礎石列は，砂鉄や炭で上面の一部が被覆され，この時期に機能したと判断できる。礎石列は不揃いな大きさの自然石が使用されており，２期の自然石の高殿石垣と同じく玉石状の安山岩が主に用いられ，高殿石垣の構築時期に合わせて設置されたと考えられる。高殿東側の礎石列の一つには一辺 16cm 程度の方形のほぞ穴が確認でき，高殿建物を支えた方形の柱が廻っていた可能性がある。

高殿石垣と礎石列の間には約 1.3m 程度の犬走り状の空間が設けられており，犬走り状の空間を覆う庇が高殿建物に付いていた可能性が考えられる。一方，後述する３・４期では，２期の礎石列に対応する遺構は確認できないため，高殿建物の構造が異なっていたと推測される。

高殿南面石垣対向石列（山内通路石垣の根石）

高殿南面石垣の外側には，石垣に対向する自然石の石列が存在する（第 33 図）。石列は地山上面に設置され，２期の高殿石垣の根石と同じ高さで揃えられていた。石列の石材は玉石状の安山岩や凝灰角礫岩などで構成され，石列間の間隙は間詰め石が充填される。石材表面は一部を削って平滑に整えた痕跡が確認できる。なお，石列は高殿石垣と並行ではなく，やや外側に向かって構築され，その延長線上には現在の里道石垣が存在する。幕末から明治初年の越堂鈩の山内建物配置図では里道と概ね同じ位置で山内の通路が確認でき（第３章第１節第 17 図），当時の山内通路が現在も里道として使われている。よって高殿南面石垣に対向する石列は，２期の山内通路に伴う石垣の根石の可能性がある。なお，高殿南面石垣対向石列と現在の里道石垣との関係性は，第３章第４節で詳しく検討する。

また，高殿南面石垣対向石列の南側には，さらに別の石列が認められた。両者は互いに方向が異なり，別時期の所産である蓋然性が高い。推測の域を出ないが，２期の高殿南面石垣対向石列の構築後，４期以降に盛土がなされる以前の３・４期頃の石列である可能性が考えられる（第 26 図）。両者は構築状況が似ているため，同じく山内通路などに伴う石列であったと想定できる。

（３）越堂鈩操業３・４期（田儀櫻井家経営後半期）の遺構

押立柱（３・４期）

高殿建物の覆屋を支えた４つの押立柱の痕跡が確認できた（第 34 図）。押立柱１は中央に幅が最大で約 0.61m の礎石があり，その周りを大小様々な大きさの根固め石で固定している。押立柱２は礎

石が残存していなかったが，押立柱１と同程度の根固め石を確認した。押立柱３は礎石が残存しておらず，また根固め石もあまり残っていない状況であった。そのなかで，押立柱４は最大幅が約１ｍの大型の礎石と根固め石が残存し，礎石の石材は玉石状の安山岩が用いられている。その礎石の中央には押立柱を嵌め込んだ直径約 47cm のほぞ穴が設けられており，押立柱が直径約 47cm 程度であることが判明した。この規模の押立柱が４本据えられて高殿の覆屋を支えたと考えられる。なお，押立柱間の距離は一辺が約 6.8m であり，製鉄炉を囲んで正方形に押立柱が配置されたと想定できる。

押立柱４の礎石には東南隅に「壹」（いち）と記された墨書文字が確認された。2006 年度調査では床釣りの南側で見つかった４つの礎石のうちの１つに「八十□　七拾八」と記された墨書文字が見つかっている。後述するように，それらの礎石は今回の調査で『田儀村誌』掲載の越堂鈩山内建物配置図にある村下室や番子室などに伴う束柱礎石列と考えられ，これらの番号は高殿の構築に伴う礎石の石材の番付を示している可能性がある。

束柱礎石列（３・４期）

2006 年度調査で確認された床釣りの南側にある４つの礎石の西側に新たな礎石を確認し（第 34 図），これらは『田儀村誌』掲載の越堂鈩山内の建物配置図に記された村下室や番子室などに伴う束柱礎石列として認識した。束柱礎石列の石材は玉石状の安山岩製であり，礎石列北側にはかなり大型の石材が使用され，古い時期の押立柱の礎石などを転用した可能性もある。このうち北東の礎石には直径約 34cm のほぞ穴が設けられている。また，床釣りの掘形北側にも玉石状の安山岩と考えられる大型の礎石が認められた（第 31・32 図）。越堂鈩山内の建物配置図によると，北側にも村下室や番子室などが描かれており，それに対応する束柱などの礎石であったと考えられる。

なお，この束柱礎石列の軸線は２期における高殿内の礎石列の軸線と合致しており，高殿の改修のなかで２期の礎石列の軸線に合わせて３・４期の束柱礎石列を配置した可能性が高い。

囲炉裏跡（３・４期）

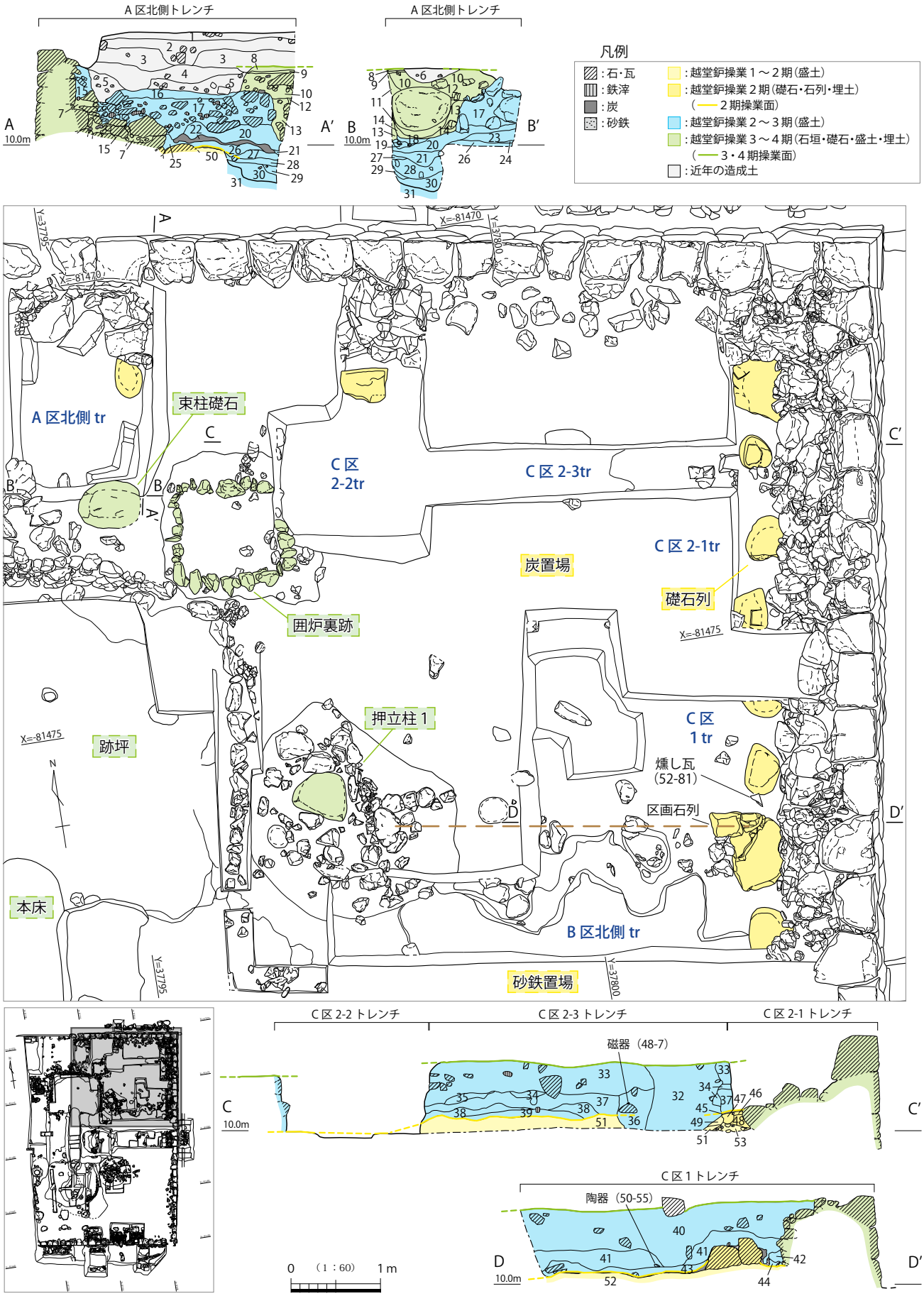
床釣り掘形の北東側の脇に南北約 1.3m, 東西約 1.1m の幅を測る石組みの囲炉裏跡が確認された（第 35 図）。石組み上面や内側を中心に被熱痕跡があり，内部には貝類などの食糧残滓が残っていた。囲炉裏跡の場所は村下室に近く，村下などが煮炊きに使用したと考えられる。なお，囲炉裏跡下部の２期の炭置場上面に構築された２～３期の盛土からは，内外面に煤が付着した土管が確認された。

湯溜まり（４期）

2006 年度調査のなかで本床南側と連結するように長さ約 3.5m，幅が約 2.1m の無花果形の土坑が確認され，湯溜まりとして認識されている。湯溜まり内の鉄滓類を多く含む土層は高温で被熱した痕跡の還元色であり，その上面に本床上部の製鉄炉で生成された鉄滓類が流れ込んだと考えられる。越堂たたら跡の湯溜まりは，周辺地域の湯溜まりと比較してもかなり大型であり，大量の銑生産に力点を置いた生産のあり方を示している（詳細は第７章第３節を参照）。

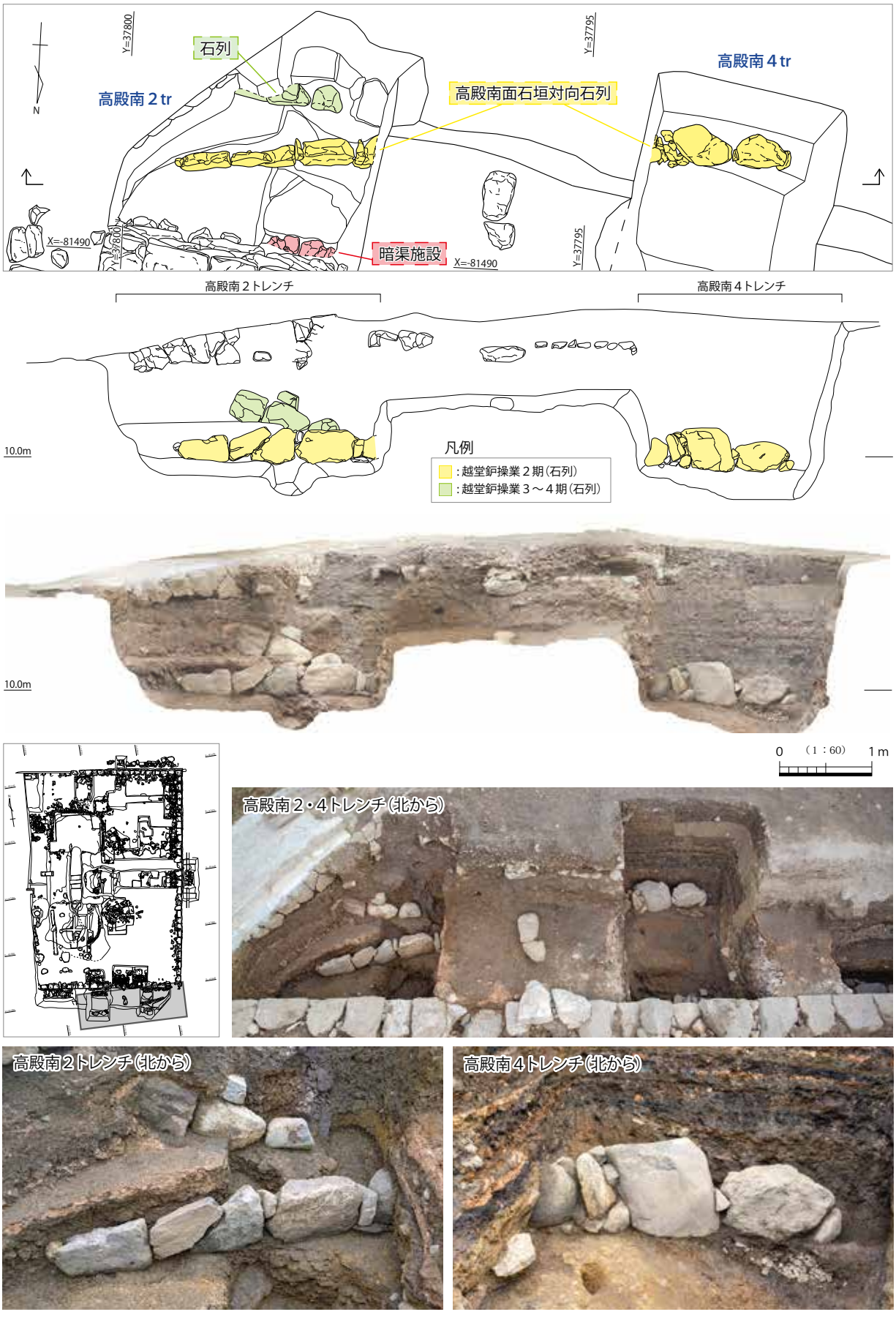
床釣りの掘形と小舟（３期）

３期の明確なたたら操業面は確認されていないが，２期のたたら操業面上に盛土を施して床釣りの掘形を構築した痕跡が高殿構築状況から認められ（第 21・24 図），東小舟および西小舟では天井部分

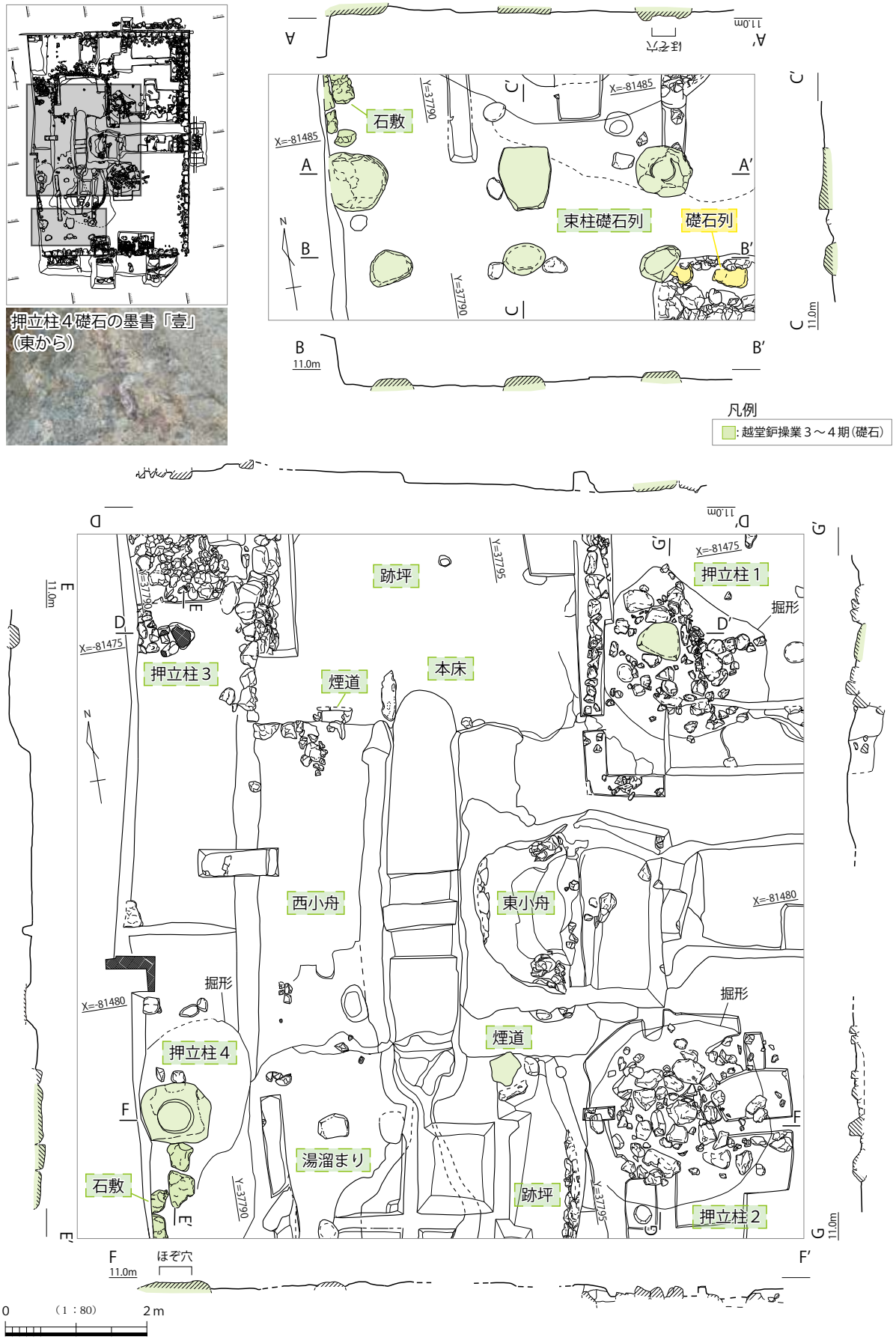


第 31 図　砂鉄置場・炭置場（北側）（２期）平面図・土層図

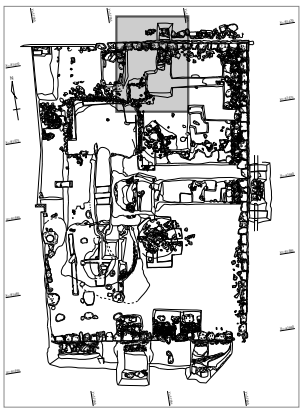
第 32 図　礎石列（２期）平面図・断面図

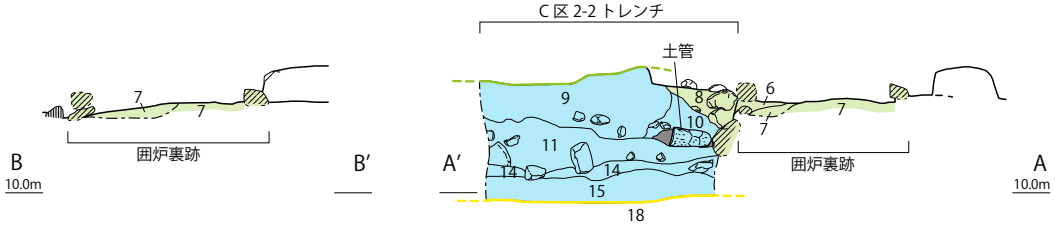


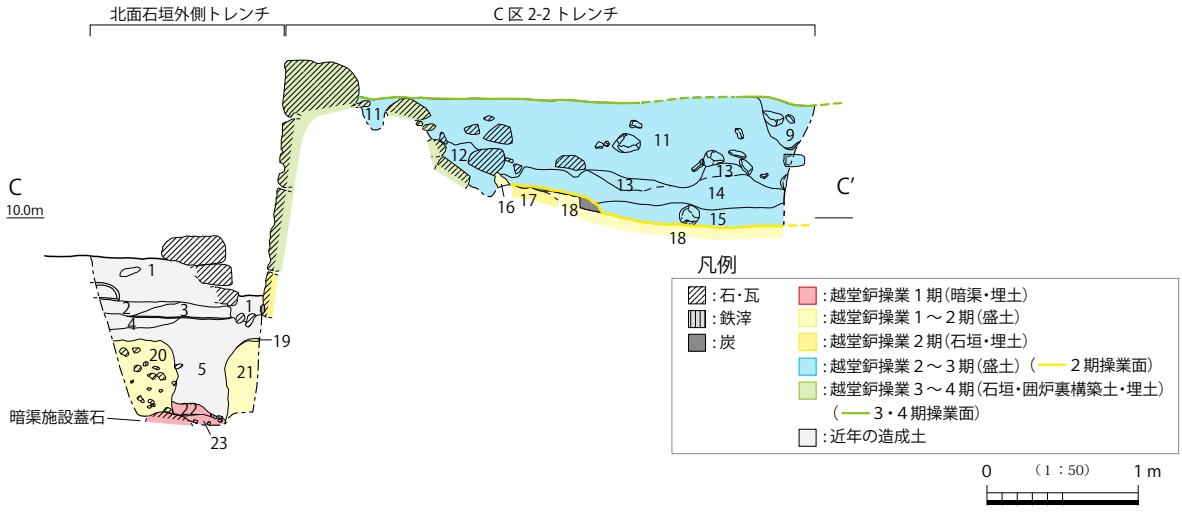
第 33 図　高殿南面石垣対向石列（２期）平面図・立面図・オルソ画像



第 34 図　束柱礎石列（上）・押立柱１～４（下）（３・４期）平面図・断面図







第 35 図　囲炉裏跡（３・４期）周辺平面図・土層図

に相当するアーチ状の甲が確認でき，東小舟北側では３・４期の小舟の甲や掘形の重複関係がよく分かる（第 36 図）。小舟の甲は石製で，高温の被熱のため表面が不明瞭だが石材は凝灰角礫岩の可能性がある。３期の床釣りは４期の床釣りによって削られ，掘形や小舟の甲以外の床釣りの痕跡は確認できなかった。３期の小舟の甲は，後述する４期の小舟の甲と概ね同じ高さであるが，東小舟と西小舟の中心間の距離は４期に比べて広いため，床釣り全体の規模は４期よりもやや大きかった可能性がある。また，３期の東西小舟の甲の位置は４期の本床の位置を挟んで対称的な場所にあり，本床の位置は４期と同じ場所に設けられていたと考えられ，床釣りの掘形の短軸は約 5.8m と推定できる。

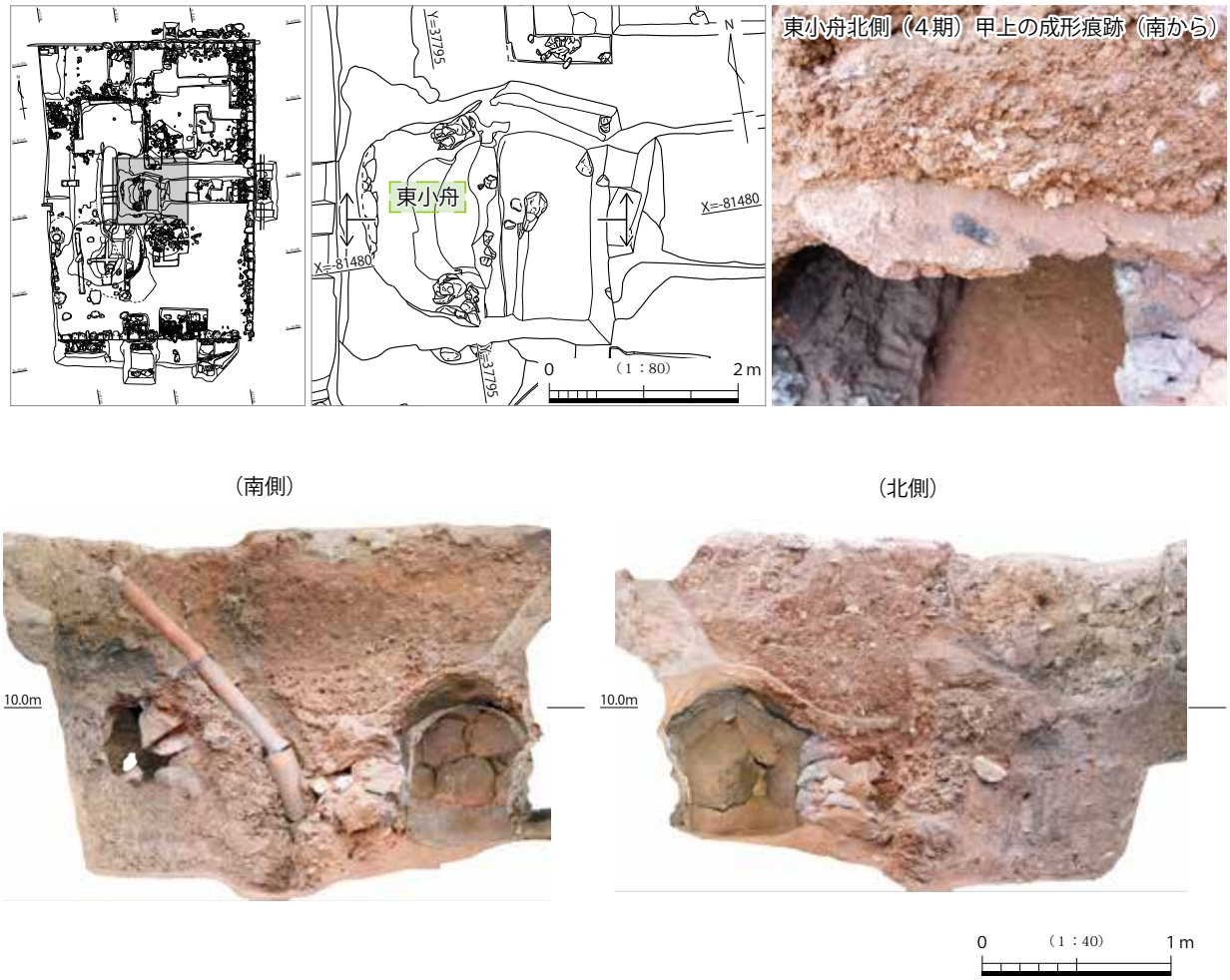
床釣りの掘形と跡坪（４期）

４期の床釣りは，本床や小舟が削られた重機掘削の痕跡が壁面に確認されるなど，後世の造成で一部が削られていたが，全体としては概ね残存状況は良好であったことが確認できた。なお今回の調査では製鉄炉の防湿や保湿を目的とする製鉄炉地下構造施設である床釣りのうち，本床と小舟からなる「本床釣り」までを対象としており，本床釣りよりも下部の「下床釣り」は調査を行っていないが，掘形床面の伏樋やその上部の坊主石，および火落とし穴などの下床釣りに伴う遺構が存在する可能性は十分に想定される。

今回の調査で確認した掘形から床釣りの規模は短軸約 5.0m，長軸約 12.5m を測る。床釣りの南北には跡坪が存在しており，2006 年度の発掘調査で確認された床釣り南側の跡坪壁面に伴う石積みのほか，北側の跡坪壁面の石積み全体を確認した。これらの状況から勘案すると，跡坪壁面の石積みは北側と南側の壁面全体に沿わせて構築されたと考えられる。A 区跡坪トレンチ西側では石積みに段差がつけられており，跡坪の出入口と判断できる（第 37 図）。なお跡坪壁面の石材は玉石状の安山岩が主に使用されるなかに変質凝灰岩や花崗岩などが一部で用いられる。また跡坪で本床および小舟の両側から燃焼させる照し焼が行われた後の埋め戻し状況が跡坪内部の土層堆積状況（第 37 図）から確認できる。跡坪南西側については詳細な調査を実施していないが，A 区跡坪トレンチ西側の出入口付近と対応する位置に石敷が確認できる。石敷は調査区西端部に位置しており，さらに西側に展開するかどうかは不明であるが，跡坪南西側の出入口の仕切りに伴う石敷であった可能性が考えられる。

本床（４期）

床釣りの本床は 2006 年度の発掘調査で存在が確認され，今回の調査で全面的に確認したことで幅が内法で上面 1.14m，下面 0.86m であり，長さは 4.85m であることが判明した（第 38 図）。南北の小口は調査を行っていないため不明であるが，焚口が設けられていたと考えられ，南側の小口付近では焼き締まった粘土で土手状の高まりが形成されている。本床の底面は，後述する小舟内部側面の石壁とほぼ同じ高さに揃えて構築されたと考えられる。本床側壁は粘土を焼き締めたものであり，粘土には白色砂粒が認められ，混和剤として石英粒が含まれていると考えられる。なお，本床側壁の剥離した部分では粘土を何層も重ねて仕上げた様子が観察できる。本床内部には粉炭層が堆積しており，鉄滓なども出土した。2006 年度の調査では，本床底面付近の粉炭層に含まれる炭化物を対象に年代測定が実施され，それらの試料（AMS-6・7）を今回の年代測定と同様の手法で再度解析したところ，特に AMS-6 において 19 世紀初頭以降の年代値が得られている（第５章第１節）。



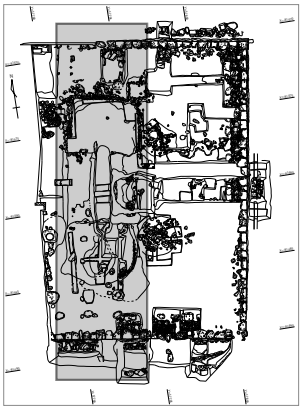
第 36 図　東小舟南側（左）・北側（右）（３・４期）オルソ画像

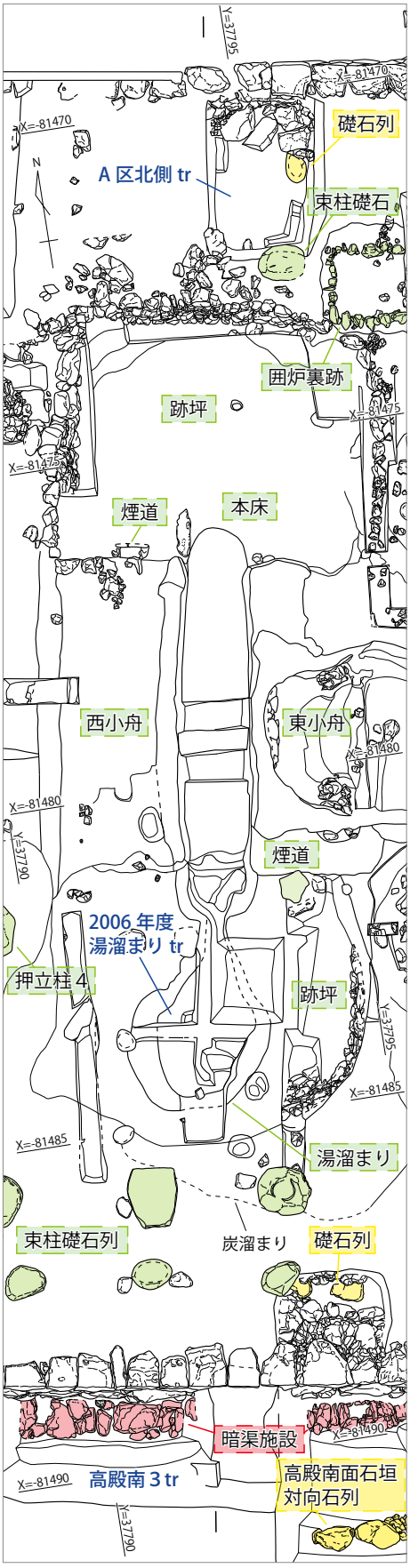
小舟（４期）

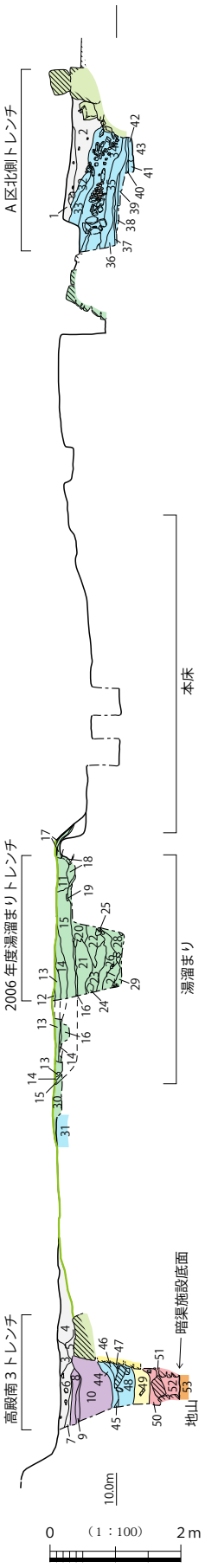
床釣りの小舟は 2006 年度の調査でも東小舟の一部が確認されていたが，今回の調査では東小舟全体および西小舟の一部を調査した（第 36・39・40 図）。東小舟は最大幅が約 0.8m で小舟内部の石壁の高さが約 0.48m，長さが 4.85m を測る（第 36・39 図）。東小舟の北側が焚口，南側は煙道となり，西小舟の北側は煙道，南側が焚口になると考えられる。2006 年度調査では，東小舟の煙道の煙出し口で板状節理が発達した安山岩製の蓋石が確認され，円筒形の煙道内部上端は直径約 35cm，小口付近は直径約 45cm となる。西小舟の煙道の煙出し口上部には後世の石列が存在していたため，蓋石は認められなかったものの長方形の煙出し口が認められ，煙道内部の上端は長辺約 42cm，短辺約 17cm となる。小口付近では東小舟と同じく長辺が約 45cm で，短辺は概ね 35cm 程度と推測される。

東小舟で確認したアーチ状の甲は焼き締まった粘土で形成され，甲上面には工具による成形痕跡が残っている（第 36 図写真）。粘土の甲の厚みは本床側で約 24cm，掘形側で約 12cm であり，本床側の方がやや厚いことが分かる。小舟小口の甲は切石が用いられ，石材は凝灰角礫岩であると考えられる。東小舟では焚口側の小口の甲が厚さ約 27cm の石材で合掌形の石組みであり，煙道側の小口の甲はアーチ形の石組みとなっている（第 36 図）。西小舟では焚口側，煙道側の小口ともに甲は合掌形の石組みであり，煙道側の小口の石材は厚さ 33cm で，焚口側の小口の甲も同程度の厚みのある石

第 37 図　跡坪（４期）周辺（上）・湯溜まり（４期）周辺（下）平面図・土層図



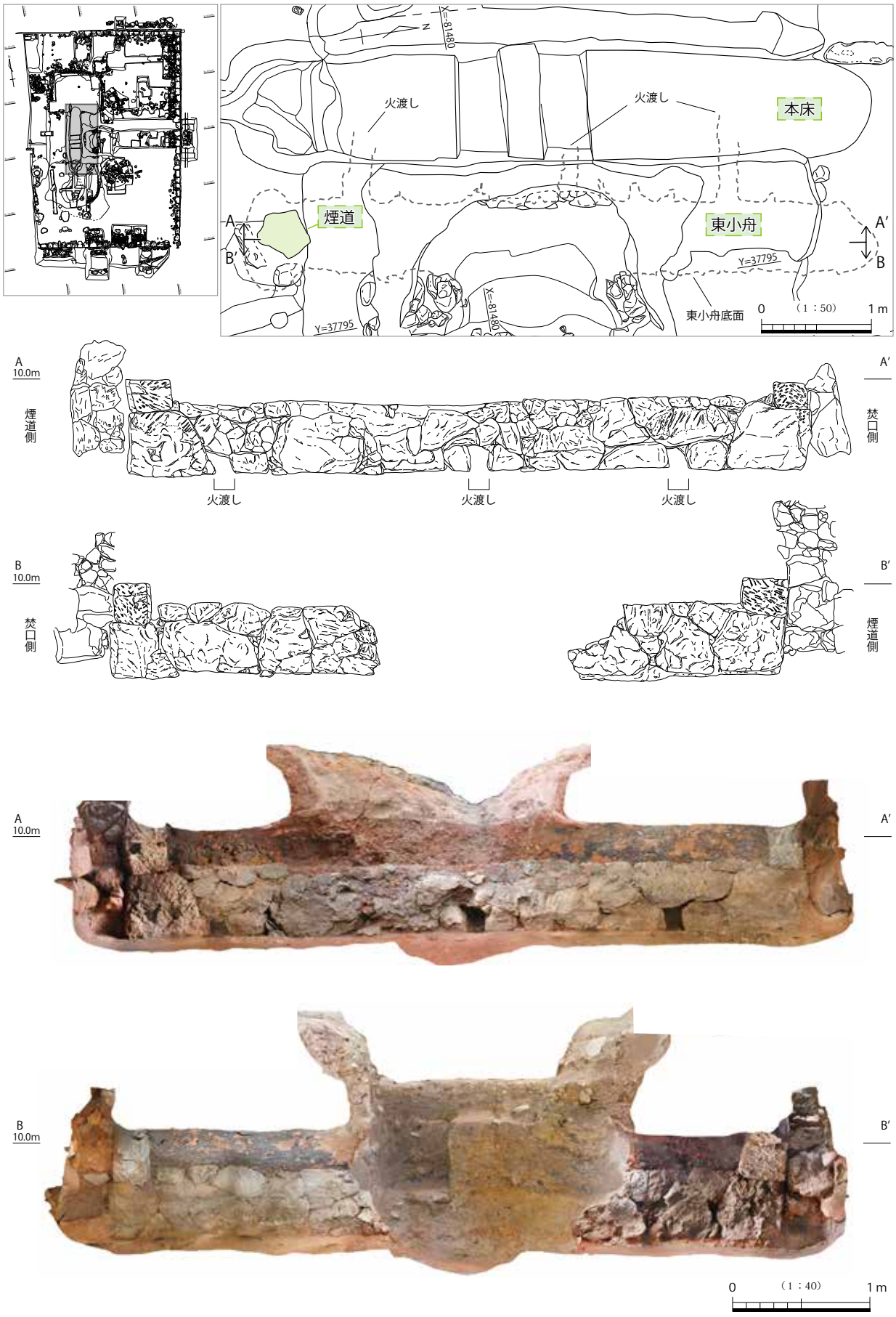




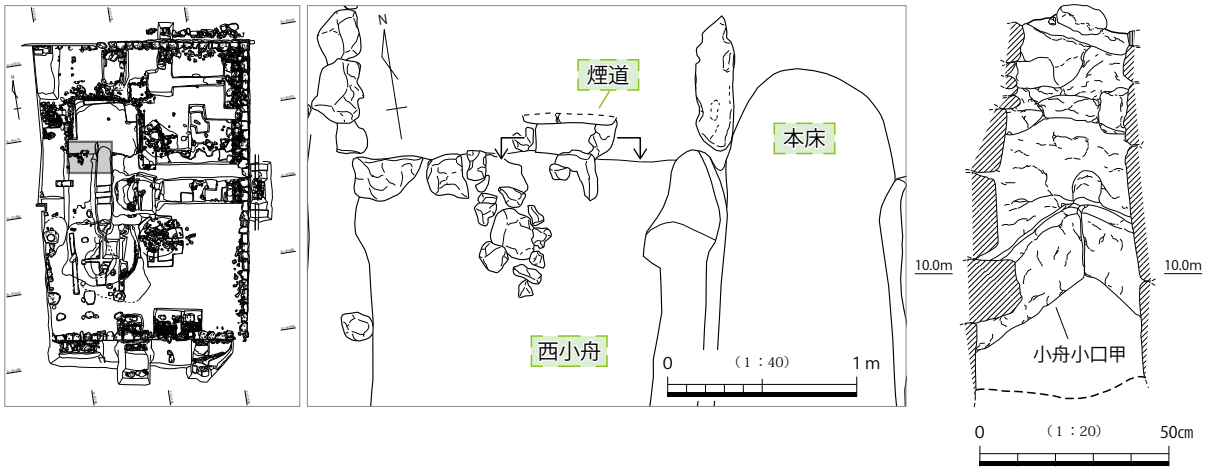
凡例

- ：石・瓦
- ：鉄滓
- ：コンクリート
- ：越堂鈩操業１期（暗渠・埋土）
- ：越堂鈩操業１～２期（盛土）
- ：越堂鈩操業２期（石垣）
- ：越堂鈩操業２～３期（盛土）
- ：越堂鈩操業３～４期（石垣・盛土）
- （―― 3・4 期操業面）
- ：越堂鈩操業４期（石積・埋土）
- ：越堂鈩操業４期以降（盛土）
- ：近年の造成土

第 38 図　高殿南北ベルト土層図（2）・本床断面図



第 39 図　東小舟（４期）内部西側石壁・東側石壁立面図（上）・オルソ画像（下）



第 40 図　西小舟（４期）内部煙道小口立面図

材を用いていたと考えられる（5）（第 40 図）。

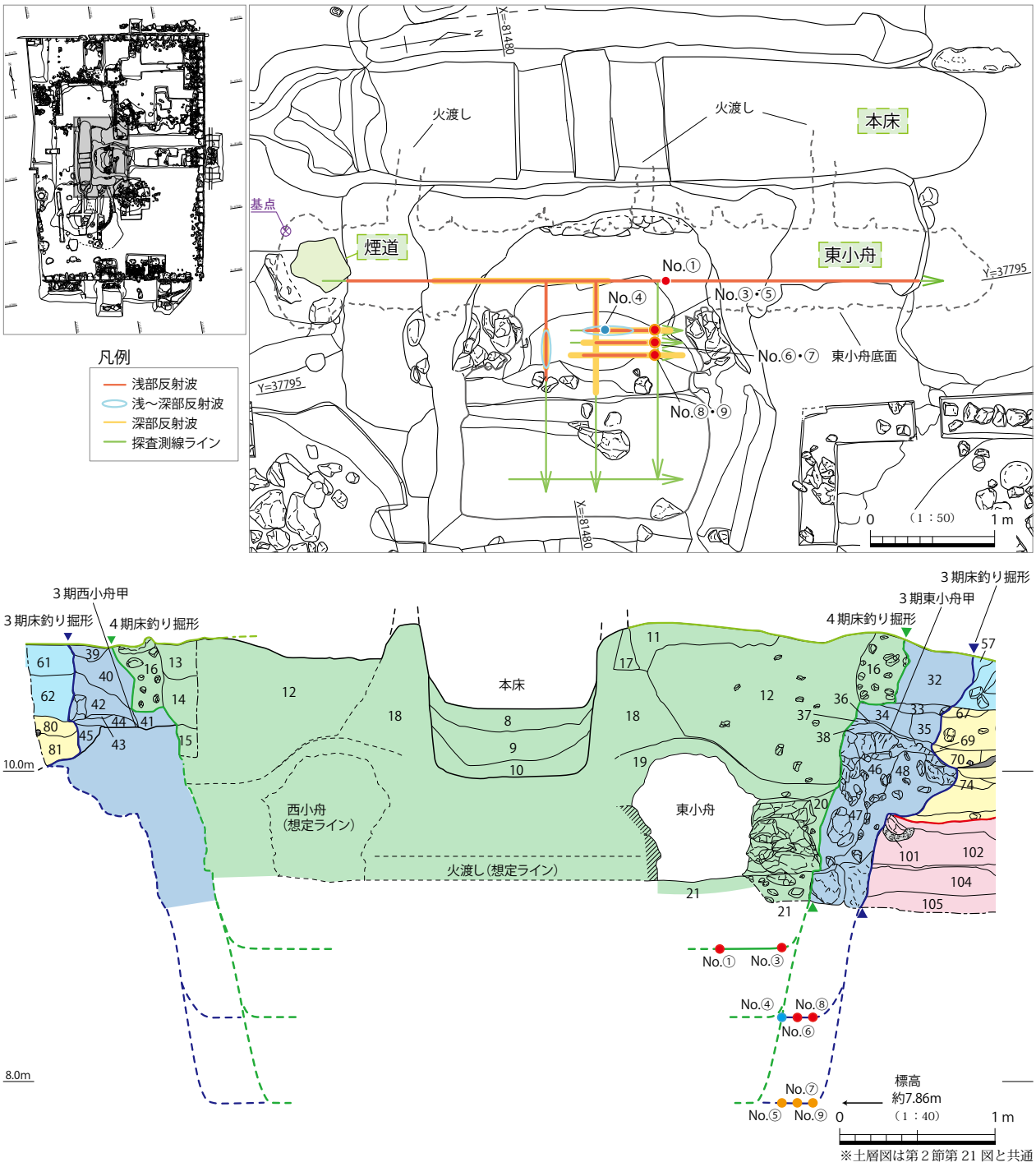
東小舟の石壁表面は上部が被熱で溶融しており不明瞭ではあるが切石が用いられ，石材は凝灰角礫岩と推測される（第 39 図）。両小口の石壁は大型の石材で構築され，小口付近の石壁に比較的大型の石材をいくつか配置してその間に小型の石材を充填した構造になっている。本床側の石壁の方が全体的にやや大きい石材を用いているように見受けられる。

火渡しと息抜き穴（４期）

東小舟の本床側の石壁には東小舟と西小舟をつなぐ通気孔の火渡しが３本確認できた（第 39 図）。火渡しは石壁の石材の組み合わせで間隙を設ける構造で，幅が約 15cm 程度である。小舟の構築面から下に向かう通気孔の火落とし穴が存在する可能性は高いが，今回の調査では確認できなかった。

４期の床釣りの掘形壁面外側では，気抜孔である息抜き穴が見つかり（第 24・36 図），３期の床釣りを削って構築されている。息抜き穴は４本の土管を連結させて構築しており，上部２本は，片側の先端部に継手が付属した同規格のものだが，下部２本は上部２本よりも口径の大きい円筒形の土管である。土管が普及するのは幕末から明治初年以降であり（柿田 1992），それが息抜き穴として用いられた４期の床釣りは，幕末から明治初年以降の 19 世紀中頃から後半頃に構築された蓋然性が高い。なお，下床釣りの詳細な調査は行っておらず確実ではないが，土管周辺の本床釣り下面を精査した結果，下床釣りにさらに土管が連なる痕跡は認められず，本床釣りのみに敷設された可能性が高い。

また，床釣りの詳細な調査が行われた朝日たたら跡（出雲市佐田町）では，床釣りの掘形底面の溝である伏樋が集結して地上につながる粘土製の息抜きが掘形壁面の片側３箇所で想定されている（杉原ほか編 1983）。同じく床釣りの構造や構築過程が判明した弓谷たたら跡（飯南町）では，息抜きが押立柱に近い位置で確認され，集結した伏樋が掘形壁面外側を通って息抜き穴と連結し，地上へとつながる。また，息抜き穴の立ち上がり部分は石積みで構築されている（田中編 2000）。朝日たたら跡は床釣りの掘形壁面に息抜き穴が合計で６箇所，弓谷たたら跡では合計で４箇所に設けられていたと推測されるが，越堂たたら跡の息抜き穴は掘形壁面の外側に構築されて押立柱に近い位置で地上と繋がっており，弓谷たたら跡と類似した構造を示していると考えられる。そのため，合計で４箇所に息抜き穴が設けられた可能性が高いと判断される。



第 41 図　地中レーダー探査による下床釣りの推定

下床釣りの推定（３・４期）

今回の発掘調査では，本床および小舟の本床釣り部分を対象としており，それより下部にある製鉄炉の防湿や保湿施設であった下床釣りの詳細な構造は不明である。そこで，掘削を伴わずに地下の構造の一部をある程度推定することが可能になる地中レーダー探査を実施し，下床釣りの状況の把握に努めた。なお，地中レーダー探査の詳細な成果は第５章第３節で報告されている。地中に向かって送信した電磁波の反射波の反応から地中の物性境界面を推定することができ，それによって３箇所の高さで高い反応が得られた[(6)]（第 41 図）。反応のあった測線の位置は，３・４期の下床釣りに伴う構築

面の一部である可能性がある。また反応のあった最下面の高さは標高が約 7.86m であり，現存する４期の床釣り掘形上面から概ね 3.04m 程度の深さがあったことが推測される。この面が床釣り掘形の床面を示していると仮定すると，前述の朝日たたら跡や弓谷たたら跡と同程度の深さとなり（7），伏樋や坊主石，火落とし穴などの複雑な構造を持つこれらのたたら場と同等の下床釣りが構築されていた可能性が高いと考えられる。

また，19 世紀中頃に田儀櫻井家のたたら製鉄経営で村下や炭坂を任された川上家の文書史料において，たたら操業の様子が把握できる史料（川上家文書・整理番号 1）（相良監修 2009）では，越堂釛と推定されるたたらの普請や床釣りの修繕を行っていた様子が具体的に明らかにされている（鳥谷 2017）。そのなかで，床釣りの掘り下げは約 3.03m であると記録されているほか，坊主石の敷設などの下床釣りの構築過程が明確に示されており，今回実施した地中レーダー探査の成果と概ね整合的である。そのため，越堂釛では複雑な構造を持つ下床釣りが本床釣り下部に構築されていた蓋然性が高いと考えられる。

註

（1）越堂たたら跡の石垣を含めた各遺構の使用石材の種類は，中村唯史氏による調査指導でご教示いただいた。

（2）田儀川沿いには岩盤に掘られた水路が存在するが（第 1 章第 1 節第 4 図左・図版 17），この岩盤は切石の石垣石材と同じ凝灰角礫岩で，越堂たたら跡から国道 9 号と田儀川を挟んで西側の鶴ヶ城方面の露頭にも凝灰角礫岩が確認できることを中村唯史氏の調査指導で確認した。よって田儀川流域付近に凝灰角礫岩の石切り場が存在し，越堂たたら跡の石垣などの石材は，その石切り場で採取された可能性が考えられる。

（3）なお 2006 年度の発掘調査では，４期の床釣り南側付近の操業面上に広がる炭溜まりを確認しており（第 37・38 図），この時期における炭置場の痕跡を示している可能性がある。

（4）暗渠施設は現在も地下に浸透した雨水などに対する排水機能を維持しているようであり，越堂釛操業の２期以降も高殿周辺の排水施設として長期間にわたって機能したと考えられる。

（5）小舟の小口にアーチ形の石組みが採用されるのは，弓谷たたら跡（田中編 2000）など山間部を中心とする出雲国のたたら場で主に認められる。一方，合掌形の石組みの明確な事例は少なく，石見国の鉄師が経営したたたら場跡である大板山たたら製鉄遺跡（山口県萩市）（渡辺編 1992）で類似した形態の小口が確認できる。なお，これら小舟の小口の形態と特徴については，角田徳幸氏からご教示を得た。

（6）第 41 図は，３箇所の高さで得られた反応を第 21 図の床釣り土層図に示したものである。なお第 41 図中の No.①・③～⑨は，第 5 章第 3 節の第 26 表の No. 1 ・ 3 ～ 9 に対応し，各点の位置は No. 1 ・ 3 ～ 9 が概ね直線上に並ぶ地点であり，それぞれの本床釣り底面の高さから算出した測定深度の位置を土層図に示した。

（7）朝日たたら跡の床釣りの深さは約 3.0m，弓谷たたら跡の床釣りの深さは約 2.9m を測る。

参考文献

柿田富造 1992「[土管] 使用の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　3 ～ 29 頁

相良英輔監修 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告 8　出雲市教育委員会

杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鉾』佐田町教育委員会

田中迪亮編 2000『弓谷たたら』頓原町教育委員会

鳥谷智文 2017「たたら経営に携わる人々の特質―田儀櫻井家を事例として―」『たたら研究　特別号（60 周年記念論文集）』たたら研究会　137 ～ 151 頁

幡中光輔 2020「田儀櫻井家墓地・智光院墓地・智光院の造営過程の総合的考察」『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ―宮本鍛冶山内遺跡　田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究―』出雲市の文化財報告 42　出雲市教育委員会　161 ～ 170 頁

幡中光輔編 2020『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ―宮本鍛冶山内遺跡　田儀櫻井家墓地の保存修理と調査研究―』出雲市の文化財報告 42　出雲市教育委員会

渡辺一雄編 1992『大板山たたら製鉄遺跡　保存整備計画策定報告書』福栄町教育委員会

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場

第８表　土層観察表

高殿東西ベルト北壁土層図（第 21 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰色粘質土	造成土	しまりなし	3 ～ 5㎝大の礫をまばらに含む	現代の庭石・バラスをまばらに含む
2	黄灰色粘質土	造成土	しまりなし	赤色焼土が多く混じる	ガレキを多く含む 炉壁を多く含む
3	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	1㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む
4	黄灰色土	造成土	ややしまる	1㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の円礫をまれに含む
5	黄褐色土	造成土	しまりなし	1㎝大の炭をまれに含む	10㎝大の礫をまれに含む 瓦混じる
6	明黄褐色土	造成土	しまる	1 ～ 3㎝大の地山礫をまばらに含む	
7	黄灰色土	造成土	しまりなし	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の鉄滓をまばらに含む
8	粉炭層	本床埋土 (4期)	しまりなし		
9	暗灰褐色粘質土	本床埋土 (4期)	しまり弱い	鉄滓を含む	赤色焼土片をわずかに含む
10	粉炭層	本床埋土 (4期)	しまりなし	鉄滓を含む	
11	淡赤橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	10㎝以上の淡赤橙色焼土ブロックをまれに含む	上面たたら操業面(4期)
12	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5㎝大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	上面たたら操業面(4期)
13	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5㎝大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	上面たたら操業面(4期)
14	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	3 ～ 5㎝大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10㎝の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
15	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	しまり弱い	10㎝以上の白色炉壁ブロックをまれに含む	赤灰色焼土ブロックをまばらに含む
16	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	しまりなし	5 ～ 10㎝大の暗赤色焼土ブロックを多く含む	上面たたら操業面(4期)
17	淡橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	本床側壁
18	淡橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	1 ～ 5㎜大の砂粒をまばらに含む	本床側壁
19	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5㎝大の暗赤褐色焼土ブロックをまばらに含む	小舟の甲
20	赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	しまりなし	1 ～ 3㎝大の赤褐色焼土ブロックを多く含む	
21	にぶい赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の赤褐色焼土ブロックを多く含む	
22	黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまりなし	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 砂鉄が混じる	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
23	灰黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	砂鉄がまばらに混じる	0.5 ～ 1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
24	明褐色焼土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	砂鉄が帯状にやや多く混じる	0.5 ～ 1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
25	灰黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1㎝大の炭をまばらに含む	
26	黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	砂鉄が少し混じる	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む
27	黄褐色土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
28	にぶい黄色粘質土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む	
29	黒褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまりなし	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	粉炭をまばらに含む
30	明黄褐色土 (灰黄褐色混じり)	盛土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまれに含む	
31	褐灰色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む	
32	暗赤褐色土	床釣り構築土 (3期)	かたくしまる	5 ～ 10㎝大の焼土ブロックを多く含む	上面たたら操業面(3・4期)
33	にぶい黄褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をごくまれに含む
34	暗赤褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまり弱い	炭をまれに含む	炉壁を含む
35	暗褐色土	床釣り構築土 (3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む	
36	黒褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまる	上面にうすく炭が広がる	0.5 ～ 1㎝大の赤褐色焼土ブロックをまれに含む
37	明黄褐色焼土	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	
38	にぶい赤褐色焼土	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	1 ～ 3㎝大のにぶい赤褐色礫をまれに含む	
39	灰黄褐色土	床釣り構築土 (3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
40	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (3期)	かたくしまる	5 ～ 10㎝大の焼土ブロックを多く含む	
41	暗赤褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまり弱い	炭をまれに含む	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む
42	にぶい黄褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をごくまれに含む
43	黒色土	床釣り構築土 (3期)	しまり弱い	粉炭が非常に多く混じる	1 ～ 3㎝大の明赤褐色ブロックをまばらに含む
44	褐灰色土	床釣り構築土 (3期)	ややしまる	炭がまばらに混じる	1 ～ 3㎝大の白色炉壁ブロックをまれに含む
45	にぶい赤褐色土	床釣り構築土 (3期)	しまる		
46	暗赤褐色焼土 (黒色混じり)	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	3 ～ 5㎝大の黒色混暗赤褐色礫を多く含む	
47	赤褐色焼土	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	1 ～ 5㎝大の赤褐色礫を多く含む	
48	暗赤褐色焼土 (赤灰色混じり)	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	3 ～ 5㎝大の暗赤褐色礫を多く含む	
49	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
50	褐灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の礫を含む 上面たたら操業面(3・4期)
51	褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 5㎝大の礫を含む 上面たたら操業面(3・4期)
52	灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む
53	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
54	黄灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む	
55	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる		
56	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
57	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
58	灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む 上面たたら操業面(3・4期)
59	明赤褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む 3 ～ 5㎝大の鉄滓を含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
60	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
61	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
62	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまばらに含む
63	砂鉄層	砂鉄層 (2期)	しまりなし	砂鉄置場上砂鉄層	0.5 ～ 1㎝程度の厚みで砂鉄が堆積
64	にぶい黄色土 (暗灰黄色混じり)	礎石埋土 (2期)	しまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む	
65	砂鉄層	砂鉄層 (2期)	しまりなし	礎石(2期)掘形壁面に堆積	
66	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面たたら操業面(2期)	
67	黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	
68	にぶい黄色土 (黄灰色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の炉壁ブロックをまれに含む
69	黒色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	粉炭が非常に多く混じる	1 ～ 3㎝大の明赤褐色ブロックをまばらに含む
70	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまれに含む	3 ～ 5㎝大の黒褐色焼土ブロックをまばらに含む
71	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	炭をまばらに含む(砂鉄が帯状に混じる)	1 ～ 3㎝大の鉄滓をごくまれに含む
72	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまれに含む	0.5 ～ 1㎝大の焼土ブロックをまばらに含む
73	黒褐色粘質土 (暗褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	0.5 ～ 1㎝大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む	
74	暗褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の炭ブロックをまばらに含む	3 ～ 5㎝大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
75	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	炭をまれに含む 砂鉄が帯状に混じる	1 ～ 3㎝大の赤色焼土ブロックをまれに含む
76	にぶい黄褐色 粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	砂鉄ブロックをわずかに含む	1 ～ 3㎝大の赤色焼土ブロックをまばらに含む
77	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをまれに含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
78	暗赤褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	炭をごくまれに含む 砂鉄ブロックをまれに含む	橙色焼土ブロックをまれに含む
79	明黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	砂鉄を多く含む	10㎝大の白色焼土ブロックを含む
80	黄褐色土 (黒褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまれに含む	5 ～ 10㎝大の炉壁ブロックをまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
81	灰褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炉壁ブロックをまれに含む	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む
82	真砂土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	3 ～ 5cm大の円礫をまれに含む	
83	黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる		
84	褐灰色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む	
85	明赤褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の明赤褐色ブロックをまれに含む	
86	暗褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	5 ～ 10cm大の黄色土ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
87	明赤褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む	
88	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
89	黒褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	粉炭が帯状に混じる	
90	黒色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	粉炭がまばらに混じる	
91	黄褐色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	5 ～ 10cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む	10cm以上の炉壁ブロックをまれに含む
92	黒褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまれに含む	0.5 ～ 1cm大の鉄滓片をまれに含む
93	明黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1cm大の炭をまれに含む 上面に砂鉄が薄く堆積	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックを多く含む
94	黄褐色土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	非常にかたくしまる	1cm大の白色ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む
95	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	粉炭がまばらに混じる	1 ～ 3cm大の木炭片を多く含む
96	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
97	にぶい黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックをまれにふくむ	
98	暗灰黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	5 ～ 10cm大の炭片を多く含む	10cm以上の木炭をまばらに含む
99	黄褐色粘質土	埋土 (1期)	しまり弱い	1cm大の炭をまれに含む	
100	明赤褐色粘質土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをまれに含む	上面硬化面(1期)
101	砂鉄層	砂鉄 (～ 1期)	しまりなし	10cm程度の厚みで砂鉄が広がる	
102	灰褐色粘質土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	砂鉄をわずかに含む	3 ～ 5cm大の白色礫をまれに含む
103	明赤褐色焼土	盛土 (～ 1期)	しまる	砂鉄ブロックをごくまれに含む	10cm以上の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
104	灰褐色粘質土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをごくまれに含む	
105	暗灰黄色粘質土	盛土 (～ 1期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む
106	黄褐色土	地山	しまり弱い	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む	

高殿東西ベルト南壁土層図（第 24 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰黄色土	造成土	ややしまる	1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大の円礫を含む 瓦をまれに含む
2	暗灰色粘質土	造成土	しまりなし	3 ～ 5cm大の礫をまばらに含む	現代の庭石・パラスをまばらに含む
3	浅黄色砂質土	造成土	しまりなし	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックをまれに含む	
4	黄褐色土	造成土	しまる	1cm大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
5	褐色粘質土	造成土	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 5cm大の礫をまばらに含む
6	黄灰色粘質土	造成土	しまりなし	赤色焼土が多く混じる	ガレキを多く含む 炉壁を多く含む
7	にぶい黄色粘質土	造成土	かたくしまる		
8	暗灰黄色粘質土	造成土	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の黄色礫をまばらに含む
9	黄灰色土	造成土	ややしまる	1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の円礫をまれに含む
10	暗灰黄色土	造成土	しまりなし	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	5 ～ 10cm大の礫をまれに含む
11	黄褐色土	造成土	しまりなし	1cm大の炭をまれに含む	10cm大の礫をまれに含む 瓦混じる
12	黄灰色土	造成土	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	5 ～ 10cm大の鉄滓をまばらに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
13	にぶい黄褐色粘質土	本床埋土 (4期)	しまりなし	炭や赤色焼土を含む	本床側壁片が混在
14	粉炭層	本床埋土 (4期)	しまりなし		
15	褐灰粘質土	本床埋土 (4期)	しまりなし	鉄滓を含む	赤色焼土をわずかに含む
16	粉炭層	本床埋土 (4期)	しまりなし	黒褐色粘質土に粉炭が多量に混じる	鉄滓を含む
17	黒褐色粘質土 (黄褐色混じり)	本床埋土 (4期)	しまりなし	粉炭が多く混じる	3cm大の炉壁ブロックをまれに含む
18	淡赤橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	10cm以上の淡赤橙色焼土ブロックをまれに含む	上面たたら操業面(4期)
19	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の焼土ブロックをまばらに含む	5cm大の礫をまれに含む
20	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10cm大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
21	淡橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	1 ～ 5mm大の砂粒をまばらに含む	
22	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大の暗赤褐色焼土ブロックを多く含む	
23	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	しまりなし	5 ～ 10cmの暗赤色焼土ブロックを多く含む	
24	赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3mm大の砂粒をまれに含む	本床側壁
25	淡橙色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	1 ～ 5mm大の砂粒をまばらに含む	本床側壁
26	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大の暗赤褐色焼土ブロックをまばらに含む	小舟の甲
27	暗赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	5 ～ 10cm大の暗赤褐色焼土ブロックを多く含む	
28	赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の赤褐色焼土ブロックを多く含む	
29	にぶい赤褐色焼土	床釣り構築土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の赤褐色焼土ブロックを多く含む	
30	暗赤褐色土	土管埋土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む	上面たたら操業面(4期)
31	暗灰黄色土	土管埋土 (4期)	しまる	1cm大の炭をまれに含む	
32	にぶい黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまりなし	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3mm大の白色砂粒をまばらに含む
33	灰黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1cm大の炭をまばらに含む	
34	黄褐色土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
35	褐灰色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1mm大の白色砂粒をまばらに含む	
36	赤褐色焼土	床釣り構築土 (3期)	しまりなし	1 ～ 5cm大の赤褐色礫を多く含む	
37	灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む 上面たたら操業面(3・4期)
38	黄灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし		
39	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1cm大の明黄褐色土のブロックをまばらに含む	0.5 ～ 1cm大の粉炭をまれに含む
40	オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
41	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の黄色礫をまばらに含む
42	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む 砂鉄が帯状に混ざる	1 ～ 3cm大の赤色焼土ブロックをまれに含む
43	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	砂鉄がブロック状・帯状に混じる	1 ～ 3cm大の黄色ブロックをまばらに含む
44	黄灰色土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3mm大の砂粒を含む 1 ～ 3cm大の炭を含む	1 ～ 3cm大の黄色・明褐色ブロックをまばらに含む
45	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3mm大の砂粒を含む 1 ～ 3cm大の鉄滓を含む	1 ～ 3cm大の黄色ブロックをまばらに含む
46	黒褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	0.5 ～ 1cm大の炭を含む 1 ～ 3cm大の鉄滓を含む	1 ～ 3cm大の明褐色ブロックをまれに含む
47	暗褐色粘質土 (黄灰色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭を含む 砂鉄が帯状に混じる	3 ～ 5cm大の明褐色ブロックをまばらに含む
48	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面たたら操業面(2期)	
49	暗褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	5 ～ 10cm大の黄色粘質土ブロックをまばらに含む	1cm大の焼土ブロックをまばらに含む
50	真砂土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	3 ～ 5cm大の円礫をまれに含む	
51	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の鉄滓を含む 砂鉄・粉炭が混じる	1 ～ 3cm大の明黄褐色土ブロックをまれに含む
52	黄灰色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	0.5cm大の炭ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色ブロックをまばらに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
53	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭ブロックをまばらに含む	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
54	赤褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1㎝大の炉壁ブロックをまれに含む	1㎝大の明赤褐色ブロックをまれに含む
55	明黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1㎝大の炭をごくまれに含む 上面に砂鉄が薄く堆積	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックを多く含む
56	灰黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1㎝大の炭を多く含む	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
57	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の礫をまれに含む
58	にぶい黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
59	オリーブ褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
60	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
61	にぶい黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまれにふくむ	
62	暗灰黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	5 ～ 10㎝大の炭片を多く含む	10㎝以上の木炭をまばらに含む
63	黄褐色粘質土	埋土 (1期)	しまり弱い	1㎝大の炭をまれに含む	
64	明赤褐色粘質土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをまれに含む	上面硬化面(1期)
65	暗赤褐色土	盛土 (～ 1期)	しまる	砂鉄を多く含む	
66	暗赤褐色焼土 (赤灰色混じり)	盛土 (～ 1期)	しまる	1 ～ 3㎝大の暗赤褐色礫を多く含む	
67	淡赤橙色焼土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	10㎝以上の淡赤橙色焼土ブロックをまれに含む
68	暗赤褐色焼土	盛土 (～ 1期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5㎝大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10㎝大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
69	暗灰黄色粘質土	盛土 (～ 1期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭をまれに含む	3 ～ 5㎝大の礫をまれに含む
70	黄褐色土	地山	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む	

高殿南北ベルト土層図（１）（第 25 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰色粘質土	造成土	しまりなし	3 ～ 5㎝大の礫をまばらに含む	現代の庭石・バラスをまばらに含む
2	オリーブ褐色土	造成土	かたくしまる	瓦・鉄滓をまれに含む	5 ～ 10㎝大の礫をまれに含む
3	暗オリーブ褐色粘質土	造成土	かたくしまる	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む	コンクリートブロック・瓦をまれに含む
4	オリーブ褐色土	造成土	しまりなし	炭を多く含む	赤褐色ブロック・コンクリートブロックが混じる
5	暗褐色土	造成土	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の炭をまれに含む	
6	明黄褐色粘質土	造成土	ややしまる	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまれに含む	
7	黄灰色土	造成土	ややしまる	鉄滓をまばらに含む	
8	暗灰黄色土	造成土	しまりなし	1㎝大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
9	黒褐色粘質土	造成土	かたくしまる	橙色ブロックがまばらに混じる	
10	灰色粘質土	造成土	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む
11	暗灰黄色粘質土	造成土	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
12	灰黄色砂質土	造成土	しまりなし	1 ～ 3㎝大の礫をまばらに含む	一部に真砂が混じる
13	明黄褐色土	造成土	ややしまる		
14	にぶい黄色粘質土	造成土	しまりなし	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む	人頭大の礫をまばらに含む
15	暗オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	1㎝大の鉄滓をまれに含む
16	黄褐色砂質土	造成土	しまりなし	1 ～ 3㎝大の玉砂利をまれに含む	
17	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭を多く含む	1㎝大の礫をまばらに含む
18	灰黄褐色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5㎝大の礫を含む 瓦をまれに含む	明赤褐色焼土をまばらに含む
19	明黄褐色焼土	造成土	しまりなし	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む	白色焼土が帯状に混じる
20	暗赤褐色焼土	造成土	しまりなし	1㎝大の炭をまれに含む	1㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
21	明赤褐色焼土	造成土	しまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む	
22	黄褐色砂質土	造成土	しまる	粉炭をまれに含む	0.5 ～ 1㎝大の鉄滓片をまばらに含む
23	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまばらに含む
24	黄褐色土	造成土	しまりなし	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3㎝大の礫をまばらに含む
25	黒褐色土	造成土	しまりなし	有機物混じる	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む
26	暗灰黄色土	造成土	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	10㎝大の明赤褐色焼土ブロックをごくまれに含む
27	黒褐色土	造成土	ややしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	5㎝大の白色焼土ブロックをまばらに含む
28	にぶい黄色土	造成土	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む	3 ～ 5㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
29	黄灰色土	造成土	ややしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の白色焼土ブロックをまれに含む
30	黄褐色土 (黄灰色混じり)	造成土	かたくしまる	1㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の明黄褐色ブロックを多く含む
31	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	かたくしまる	拳大の鉄滓をまれに含む	拳大の炉壁ブロックを多く含む
32	黒褐色土	盛土 (4期～)	しまる	1㎝大の炭を多く含む	
33	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまる	5 ～ 10㎝大の鉄滓をまれに含む	
34	暗赤褐色土	盛土 (4期～)	しまる	3 ～ 5㎝大の鉄滓を多く含む	10㎝以上の鉄滓をまばらに含む
35	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまる	10㎝以上の鉄滓を多く含む	
36	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまる	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまれに含む	
37	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	ややしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	
38	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	
39	黄褐色土	盛土 (4期～)	しまる	1 ～ 3㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	
40	暗オリーブ褐色土	囲炉裏埋土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	食料残滓を含む
41	オリーブ黒色土	囲炉裏構築土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む
42	暗褐色粘質土	押立柱1礎石 埋土(3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む	
43	黄褐色粘質土 (明黄褐色混じり)	押立柱2礎石 埋土(3 ～ 4期)	しまる	3 ～ 5㎜大の白色砂粒をまばらに含む	3 ～ 5㎝大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
44	オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 5㎝大の鉄滓をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
45	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭を多く含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色ブロックをまばらに含む
46	暗オリーブ褐色土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の礫を多く含む
47	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の黄色礫をまばらに含む
48	黄灰色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	3 ～ 5㎜大の砂粒をまばらに含む
49	暗黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3 ～ 5㎜大の砂粒をまばらに含む	
50	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎜大の明褐色砂粒をまばらに含む	0.5 ～ 1㎜大の砂粒をまれに含む
51	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1㎝大の炭をまれに含む	
52	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックを含む
53	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の礫をまばらに含む	炉壁ブロックを含む
54	灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む 1 ～ 3㎝大の黄色礫を含む	上面たたら操業面(3・4期)
55	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む 砂鉄が帯状に混ざる	1 ～ 3㎝大の赤色焼土ブロックをまれに含む
56	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	砂鉄がブロック状・帯状に混じる	1 ～ 3㎝大の黄色ブロックをまばらに含む
57	黄灰色土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭を含む 1 ～ 3㎜大の砂粒を含む	1 ～ 3㎝大の黄色・明褐色ブロックをまばらに含む
58	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓を含む 1 ～ 3㎜大の砂粒を含む	1 ～ 3㎝大の黄色ブロックをまばらに含む
59	黄灰色粘質土 (灰褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 1 ～ 3㎝大の鉄滓を多く含む	1 ～ 3㎝大の明褐色ブロックをまれに含む
60	黒褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 1 ～ 3㎝大の鉄滓を含む	1 ～ 3㎝大の明褐色ブロックをまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
61	暗褐色粘質土 (黄灰色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭を含む 砂鉄が帯状に混じる	3 ～ 5cm大の明褐色ブロックをまばらに含む
62	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	
63	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	上面たたら操業面(3・4期)
64	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む	
65	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	ほぼ1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックで充填される
66	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む	
67	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックが帯状に混じる	10cm以上の炭ブロックをまれに含む
68	赤灰色砂質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の炉壁ブロックをまれに含む
69	黒褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1cm大の炭ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
70	暗赤灰色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	0.5 ～ 1cm大の鉄滓片をまれに含む
71	暗赤灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
72	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	上面に部分的に砂鉄が広がる	1cm大の炭ブロックをまばらに含む
73	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	3 ～ 5mm大の白色砂粒をまばらに含む
74	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3 ～ 5mm大の白色砂粒をまれに含む	
75	黒褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	砂鉄をまばらに含む	1cm大の炭ブロックをまばらに含む
76	にぶい黄褐色 粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	5 ～ 10cm大の礫をまばらに含む	人頭大の礫をまばらに含む
77	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	0.5cm程度の炭片をまばらに含む	1cm大の明黄褐色ブロックをまれに含む
78	暗赤褐色焼土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	3cm大の炭ブロックをまれに含む	10cm以上の炉壁ブロックをまれに含む
79	黄褐色粘質土	礎石埋土 (2期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	0.5 ～ 1mm大の白色砂粒をまばらに含む
80	にぶい黄色粘質土	礎石埋土 (2期)	ややしまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む
81	明黄褐色粘質土	礎石埋土 (2期)	かたくしまる	0.5 ～ 1mm大の白色砂粒をまれに含む	1 ～ 3cm大の明褐色ブロックをまばらに含む
82	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面に炭が広がる	上面たたら操業面(2期)
83	明黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1 ～ 3mm大の砂粒をごくまれに含む	上面たたら操業面(2期)
84	暗赤褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	5 ～ 10cmの暗赤色焼土ブロックを多量に含む	
85	にぶい黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1 ～ 3mm大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3cm大の黄色礫をごくまれに含む
86	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	炭をまれに含む 砂鉄が帯状に混じる	1 ～ 3cm大の赤色焼土ブロックをまれに含む
87	にぶい黄褐色 粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	砂鉄ブロックわずかに含む	1 ～ 3cm大の赤色焼土ブロックをまばらに含む
88	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む	0.5 ～ 1cm大の焼土ブロックをまばらに含む
89	にぶい赤褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3mm大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3cm大のにぶい赤褐色礫をまれに含む
90	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
91	暗赤褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	ややかたくしまる	炭・砂鉄ブロックをごくまれに含む	15cm大の橙色焼土ブロックをわずかに含む
92	明黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の白色焼土ブロックをまれに含む	10cm大の白色焼土ブロックをわずかに含む
93	明赤褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	砂鉄ブロックをまれに含む	人頭大半分程度の礫をわずかに含む
94	明赤褐色焼土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	砂鉄ブロックを含む	10cm以上の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
95	灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の玉砂利を多く含む	5 ～ 10cm大の河原石を多く含む
96	暗灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	3 ～ 5mm大の粉炭をまばらに含む	1cm大の明黄褐色ブロックをまれに含む
97	明黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	
98	灰白色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の白色焼土ブロックをまばらに含む
99	黄褐色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	3 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の玉砂利を多く含む
100	オリーブ褐色 粘質土	埋土 (1期)	しまり弱い	1mm大の白色砂粒をまばらに含む	
101	オリーブ褐色 粘質土	埋土 (1期)	しまる	1mm大の白色砂粒をまばらに含む	
102	暗赤褐色土	盛土 (～ 1期)	しまる	砂鉄を多く含む	上面硬化面(1期)
103	暗赤褐色焼土 (赤灰色混じり)	盛土 (～ 1期)	しまる	1 ～ 3cm大の暗赤褐色礫を多く含む	
104	淡赤橙色焼土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	1 ～ 3mm大の砂粒をまばらに含む	10cm以上の淡赤橙色焼土ブロックをまれに含む
105	暗赤褐色焼土	盛土 (～ 1期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大の暗赤色褐色焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10cm大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
106	暗灰黄色粘質土	盛土 (～ 1期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む
107	にぶい黄色粘質土	盛土 (～ 1期)	かたくしまる	1cm大の円礫をまばらに含む	
108	明黄褐色土	地山	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大の地山ブロックをまばらに含む	5 ～ 10cm大の地山ブロックをまばらに含む

高殿南１tr 東壁土層図・２tr 断面図（上）と２tr 東壁立面図（下）（第 26 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰黄色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5cm大の円礫をまばらに含む	真砂土が少し混じる
2	明赤褐色焼土	造成土	かたくしまる	0.5 ～ 1cm大の炭ブロックをまばらに含む	
3	明黄褐色土	造成土	しまり弱い	3 ～ 5cm大の礫を含む 1cm大の炭ブロックを含む	
4	灰黄褐色土	造成土	しまりなし	3 ～ 5cm大の礫を多く含む	
5	暗オリーブ褐色土	造成土	ややしまる	1cm大の炭ブロックを含む 粉炭が帯状に一部混じる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
6	黄褐色土	造成土	ややしまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
7	明赤褐色焼土	造成土	ややしまる	1 ～ 3mm大の砂粒をまばらに含む	1cm大の礫をまれに含む
8	にぶい黄褐色土	盛土 (4期～)	ややしまる	3cm大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む
9	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	かたくしまる	3 ～ 5mm大の砂粒をまばらに含む	1cm大の鉄滓をまれに含む
10	黒褐色土	盛土 (4期～)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまれに含む	1mm大の砂粒をまれに含む
11	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	ほぼ1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックで充填される
12	暗灰黄色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
13	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3 ～ 5cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の炉壁をまれに含む
14	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックが帯状に混じる	10cm以上の炭ブロックをまれに含む
15	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む	
16	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3mm大の砂粒をごくまれに含む	上面たたら操業面(2期)
17	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む	1cm大の炭ブロックをまばらに含む
18	黒褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1mm大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3cm大の地山礫ブロックをまばらに含む
19	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1cm大の炭ブロックをまれに含む	3 ～ 5cm大の地山礫をまばらに含む
20	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1cm大の炭ブロックをまれに含む	3 ～ 5cm大の地山礫を多く含む
21	明黄褐色土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓片をまれに含む	5 ～ 10cm大の地山礫を多く含む
22	明黄褐色土	埋土 (1期)	しまり弱い	3 ～ 10cm大の地山礫をまばらに含む	
23	明黄褐色土	地山	かたくしまる	底面に岩盤あり	

高殿南１tr 西壁（左）・東壁（右）立面図（第 27 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	5 ～ 10cm大の礫をまばらに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む
2	黄褐色土	造成土	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む
3	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	上面たたら操業面(3・4期)
4	暗灰黄色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
5	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3 ～ 5cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の炉壁をまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
6	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む	
7	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックが帯状に混じる	10cm以上の炭ブロックをまれに含む
8	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む	
9	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3㎜大の砂粒をごくまれに含む	上面たたら操業面(2期)
10	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む
11	暗赤褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の炉壁ブロックをまばらに含む
12	オリーブ褐色土	礎石埋土 (2期)	しまる	3 ～ 5cm大の鉄滓片をまばらに含む	3 ～ 5cm大のくさり礫をまれに含む
13	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	3 ～ 5cm大の鉄滓片をまばらに含む
14	黄色粘質土 (黒褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭ブロックが多く混じる	1 ～ 3cm大の明褐色焼土ブロックをまばらに含む
15	黒褐色土 (褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をごくまれに含む1	1 ～ 3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
16	黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	5 ～ 10cm大のくさり礫をまばらに含む	

高殿４tr 西壁土層図（第 28 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	黒褐色土	造成土	しまる	1 ～ 3cm大の赤褐色ブロックをまばらに含む	2006年度埋戻土
2	真砂土	造成土	しまりなし	2006年度埋戻土	
3	明黄褐色土	造成土	ややしまる	1㎜大の砂粒を多く含む	3 ～ 5cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
4	暗灰黄色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5cm大の鉄滓をまばらに含む	5 ～ 10cm大の礫を多く含む
5	黄褐色土	造成土	しまる	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む
6	オリーブ褐色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5cm大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫をまばらに含む
7	黄褐色砂質土	造成土	しまる	0.5 ～ 1cm大の鉄滓片をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
8	明赤褐色焼土	造成土	しまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	
9	黒褐色土	造成土	ややしまる	5㎜大の砂粒をまばらに含む	
10	暗赤褐色焼土	造成土	かたくしまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む	
11	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	かたくしまる	拳大の鉄滓をまれに含む	拳大の炉壁ブロックを多く含む
12	暗オリーブ褐色土	盛土 (4期～)	しまりなし	1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む
13	暗赤褐色土	盛土 (4期～)	しまりなし	3 ～ 5cm大の鉄滓を多く含む	10cm以上の鉄滓をまばらに含む
14	暗赤褐色土	盛土 (4期～)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
15	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまりなし	1cm大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む
16	黄色砂質土 (黄褐色混じり)	盛土 (4期～)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	1cm大の鉄滓をまばらに含む
17	暗灰黄色砂質土	盛土 (4期～)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	3 ～ 5cm大の鉄滓をまばらに含む
18	オリーブ褐色 粘質土	盛土 (4期～)	しまりなし	0.5 ～ 1cm大の鉄滓片をまれに含む	
19	赤灰色砂質土	盛土 (4期～)	しまりなし	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の炉壁ブロックをまれに含む
20	暗灰黄色粘質土	盛土 (4期～)	しまる	3 ～ 5㎜大の白色砂粒をまれに含む	
21	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	しまる	1cm大の鉄滓をまれに含む	
22	黒褐色土	盛土 (4期～)	ややしまる	1cm大の炭ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
23	暗黄褐色粘質土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
24	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	礎石埋土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1cm大の炭をまれに含む	3cm大の礫をまばらに含む
25	暗赤褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1cm大の炭をまばらに含む	3 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む
26	明黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1㎜大の砂粒をまばらに含む	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む
27	暗赤灰色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭ブロックをまばらに含む	0.5 ～ 1cm大の鉄滓片をまれに含む
28	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	上面に砂鉄が部分的に広がる	1cm大の炭ブロックをまばらに含む
29	暗オリーブ褐色 粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大の礫をまれに含む
30	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる		
31	暗赤褐色焼土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	3cm大の炭ブロックをまれに含む	10cm大の炉壁ブロックをまれに含む
32	暗灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	3 ～ 5㎜大の粉炭をまばらに含む	1cm大の明黄褐色ブロックをまれに含む
33	黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	5㎜大の粉炭をまばらに含む	
34	明黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	
35	暗灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	3 ～ 5㎜大の粉炭をまれに含む	
36	明黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む
37	暗灰黄色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓を多く含む
38	黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む
39	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	
40	暗灰黄色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 5cm大の鉄滓をまばらに含む	
41	黄褐色粘質土	埋土 (1期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	1cm大の明赤褐色ブロックをまれに含む
42	明黄褐色粘質土	埋土 (1期)	かたくしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	1cm大の円礫をまれに含む
43	明黄褐色土	地山	かたくしまる	3 ～ 5cm大の地山ブロックをまばらに含む	5 ～ 10cm大の地山ブロックをまばらに含む

B 区北側 tr 北壁・C 区 1 tr 南壁土層図（第 29 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	褐灰色粘質土	造成土	しまりなし	3 ～ 5cm大の礫をまばらに含む	現代の庭石・バラスをまばらに含む
2	オリーブ褐色土	造成土	しまる	1 ～ 3cm大の礫を多く含む	タイルを含む
3	オリーブ褐色土 (焼土混じり)	造成土	かたくしまる	瓦・鉄滓をまれに含む	5 ～ 10cm大の礫をまれに含む
4	暗オリーブ褐色 粘質土	造成土	かたくしまる	1 ～ 10cm大の礫をまれに含む	瓦・コンクリートブロックをまれに含む
5	暗灰黄色粘質土	造成土	しまりなし	瓦・コンクリートブロックをまばらに含む	
6	黒褐色粘質土	造成土	かたくしまる	炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
7	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	1 ～ 5cm大の黄色礫を多く含む
8	灰黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む 1 ～ 3cm大の黄色礫を含む	上面たたら操業面(3・4期)
9	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックを含む
10	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
11	暗灰色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1cm大の炭をまばらに含む	瓦を含む
12	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面に砂鉄が広がる	
13	暗灰色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1cm大の炭をまばらに含む	3 ～ 5cm大の炉壁ブロックをまれに含む
14	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む	
15	暗灰黄色土	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
16	黄褐色土 (明黄褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	ややしまる	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む	
17	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面に砂鉄が広がる	
18	黄色粘質土 (明黄褐色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1cm大のくさり礫が混じる	
19	明黄褐色土	盛土 (～ 1期)	非常にかたくしまる	3 ～ 5cm大のブロック状に固くまとまる	上面硬化面(1期)

暗渠施設（１期）平面図・立面図・断面図（第 30 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	黄灰色土	造成土	ややしまる	1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の円礫をまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
2	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む
3	明黄褐色土	造成土	しまる	1 ～ 3cm大の地山礫をまばらに含む	
4	黄灰色土	造成土	しまりなし	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	5 ～ 10cm大の鉄滓をまばらに含む
5	灰黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1cm大の炭をまばらに含む	
6	明褐色焼土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	砂鉄が帯状にやや多く混じる	0.5 ～ 1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
7	黄褐色土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
8	褐灰色土	盛土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む	
9	明黄褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	1cm大の炭をまれに含む 上面に砂鉄が薄く堆積	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックを多く含む
10	オリーブ褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまりなし	1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5㎜大の白色砂粒をまばらに含む
11	暗赤褐色焼土	盛土 (3 ～ 4期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	5 ～ 20cm大の鉄滓をまばらに含む
12	黄褐色土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	非常にかたくしまる	1cm大の白色ブロックをまばらに含む	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む
13	黒褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	粉炭がまばらに混じる	1 ～ 3cm大の木炭片を多く含む
14	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む	1cm大の明赤褐色焼土ブロックをまばらに含む
15	暗オリーブ褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1cm大の炭をまばらに含む	1cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
16	にぶい黄褐色土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
17	にぶい黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の明黄褐色ブロックをまれにふくむ	
18	暗灰黄色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	5 ～ 10cm大の炭片を多く含む	10cm以上の木炭をまばらに含む
19	黄褐色土	地山	しまり弱い	1 ～ 3cm大の礫をまれに含む	

砂鉄置場・炭置場（北側）（２期）平面図・土層図（第 31 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰色粘質土	造成土	しまりなし	3 ～ 5cm大の礫をまばらに含む	現代の庭石・バラスをまばらに含む
2	暗褐色粘質土	造成土	しまりなし	炭や赤色焼土片が混在	
3	褐灰色粘質土	造成土	しまりなし	赤色焼土をわずかに含む	
4	黄褐色粘質土	造成土	かたくしまる	炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3cm大の赤褐色ブロックをまれに含む
5	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	3 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む	3 ～ 10cm大の礫を含む レンガ含む
6	黄褐色土	造成土	しまり弱い	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 3cm大の礫をまばらに含む
7	暗褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大のくさり礫をまれに含む	
8	赤褐色粘質土	盛土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	
9	炭層	盛土 (3 ～ 4期)	しまりなし		
10	黄橙色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	上面たたら操業面(3・４期)
11	黒褐色土	盛土 (3 ～ 4期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 5cm大のくさり礫をまばらに含む
12	明赤褐色焼土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	しまりなし	1 ～ 10cm大の焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10cm大の炉壁ブロックをまれに含む
13	暗灰黄色粘質土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	ややしまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む	3 ～ 5cm大のくさり礫をまばらに含む
14	明黄褐色土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	しまる	5 ～ 10cm大の礫をまれに含む	
15	オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	5 ～ 10cm大の礫をまばらに含む	
16	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大のくさり礫をまれに含む	
17	オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 5cm大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 10cm大のくさり礫をまばらに含む
18	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	ややしまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	
19	灰黄褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	5 ～ 10cm大の鉄滓を多く含む	
20	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックをまれに含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
21	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
22	炭層	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし		
23	黄灰色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	3 ～ 5cm大の炉壁ブロックを多く含む	
24	暗灰黄褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の明黄褐色のくさり礫をまれに含む
25	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3 期)	かたくしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
26	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	
27	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫が帯状に混じる
28	黄色粘質土 (明黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	5 ～ 10cm大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 3cm大のくさり礫が帯状に混じる
29	暗灰黄色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の焼土ブロックをまれに含む
30	黄灰色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む
31	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3 ～ 5cm大のくさり礫を多く含む	
32	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	上面たたら操業面(3・４期)
33	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	上面たたら操業面(3・４期)
34	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎜大の白色砂粒をまばらに含む
35	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大のくさり礫をまばらに含む
36	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまりなし	上面に1 ～ 3cm大の炭ブロックがまばらに広がる	
37	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	1 ～ 3cm大の焼土ブロックをまれに含む
38	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
40	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	上面たたら操業面(3・４期)
41	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
42	浅黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	砂鉄が少し混じる	
43	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックを含む
44	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	砂鉄が帯状に混じる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む
45	炭層	炭層 (2期)	しまりなし	炭置場上炭層	礎石上に薄く堆積する
46	にぶい黄色粘質土	礎石埋土 (2期)	かたくしまる	上面たたら操業面(2期)	
47	暗灰黄色土 (黄色混じり)	礎石埋土 (2期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
48	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	礎石埋土 (2期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の赤土ブロックをまれに含む	
49	オリーブ褐色 粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし		
50	灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	上面たたら操業面(2期)
51	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	炭をまばらに含む 炉壁ブロックをまれに含む	上面たたら操業面(2期)
52	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	非常にかたくしまる	上面に炭が堆積する	上面たたら操業面(2期)
53	黄褐色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の鉄滓を多く含む	3 ～ 5cm大の炉壁ブロックを多く含む

囲炉裏跡（３・４期）周辺平面図・土層図（第 35 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰黄色土	造成土	しまり弱い	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	10cm大の明赤褐色焼土ブロックをごくまれに含む
2	黒褐色土	造成土	ややしまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	5cm大の白色焼土ブロックをまばらに含む
3	にぶい黄色土	造成土	かたくしまる	1 ～ 3cm大の炭をまれに含む	3 ～ 5cm大の明黄褐色ブロックをまばらに含む
4	黄灰色土	造成土	ややしまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の白色焼土ブロックをまれに含む
5	黄褐色土 (黄灰色混じり)	造成土	かたくしまる	1cm大の炭をまばらに含む	5 ～ 10cm大の明黄褐色ブロックを多く含む
6	暗オリーブ褐色土	囲炉裏埋土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	食料残滓を含む

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
7	オリーブ黒色土	囲炉裏埋土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	食料残滓を含む
8	オリーブ黒色土	囲炉裏構築土 (3 ～ 4期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	5 ～ 10cm大の礫をまばらに含む
9	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	上面たたら操業面(3・4期)
10	暗オリーブ褐色土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭をまばらに含む	1 ～ 3cm大の炭ブロックを多く含む
11	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	上面たたら操業面(3・4期)
12	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎜大の明褐色砂粒をまばらに含む	0.5 ～ 1㎜大の砂粒をまれに含む
13	黄色粘質土 (暗灰黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	0.5 ～ 1㎜大の砂粒を含む 1 ～ 3cm大の炭を含む	1 ～ 3cm大の明赤褐色ブロックをまれに含む
14	黄色粘質土 (黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	
15	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックを含む
16	黄褐色粘質土	礎石埋土 (2期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまれに含む	0.5 ～ 1㎜大の白色砂粒をまばらに含む
17	明黄褐色粘質土	礎石埋土 (2期)	かたくしまる	0.5 ～ 1㎜大の白色砂粒をまれに含む	1 ～ 3cm大の明褐色ブロックをまばらに含む
18	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	かたくしまる	上面に炭が広がる	上面たたら操業面(2期)
19	灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	
20	灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の玉砂利を多く含む	5 ～ 10cm大の河原石を多く含む
21	にぶい黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまる	1cm大の円礫をまばらに含む	
22	灰白色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の白色焼土ブロックをまばらに含む
23	黄褐色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし	3 ～ 5cm大の鉄滓をまれに含む	1 ～ 3cm大の玉砂利を多く含む

跡坪（４期）周辺（上）・湯溜まり（４期）周辺（下）平面図・土層図（第 37 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	暗灰色粘質土	造成土	しまりなし	5cm大の礫をまばらに含む	現代の庭石・バラスをまばらに含む
2	黄褐色粘質土	造成土	しまりなし	真砂土?	
3	青灰色粘質土	造成土	しまり弱い		
4	暗褐色粘質土	造成土	しまりなし	炭をまばらに含む	0.5 ～ 1cm大の赤褐色土ブロックをまれに含む
5	黒褐色粘質土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	攪乱土?	
6	明赤褐色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	上面たたら操業面(4期)	
7	褐灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	0.5 ～ 3cm大の炭を多く含む	上面たたら操業面(4期)
8	褐灰色土 (黄褐色混じり)	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	上面たたら操業面(4期)	
9	暗黄褐色砂質土 (青灰色混じり)	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	炭を含む	
10	暗赤灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	しまり弱い	上面たたら操業面(4期)	
11	青灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む	3 ～ 5cm大の鉄塊を含む 上面たたら操業面(4期)
12	褐灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 3cm大の炭を含む
13	青灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3cm大の鉄滓をまれに含む	
14	暗褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	上面たたら操業面(4期)	
15	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	3 ～ 5cm大の明赤褐色ブロックを多く含む	上面たたら操業面(4期)
16	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる		
17	黒褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	しまる		
18	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3cm大の炭を多く含む	焼土を多く含む
19	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1cm以下の炭をまばらに含む	
20	粉炭層	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	上面たたら操業面(4期)	
21	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	0.5cm大の鉄滓片をまばらに含む	

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
22	粉炭層	跡坪埋土 (4期)	しまりなし		
23	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	3cm大の鉄滓をまばらに含む	赤褐色焼土ブロックを多く含む
24	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	0.5cm大の炭片をまばらに含む	1 ～ 3cm大の礫を多く含む
25	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1cm以下の炭をごくまれに含む	
26	黒褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
27	黒褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	1cm以下の砂粒を多く含む	
28	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1cm大の炭をごくまれに含む	
29	黒褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	1cm以下の砂粒をまばらに含む	
30	黒褐色砂質土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる		
31	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	1cm大の炭を多く含む	1 ～ 3cm大の赤褐色焼土ブロックを多く含む
32	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	0.5 ～ 1cm大の鉄滓をまばらに含む
33	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
34	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1cm以下の焼土ブロック多く含む	
35	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
36	暗褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	炭の小片を多く含む	3cm大の炉壁ブロックを含む 上面たたら操業面(4期)
37	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	5cm以上の鉄滓を含む 炭を含む	赤褐色ブロックを含む 上面たたら操業面(4期)
38	暗褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	上面たたら操業面(4期)	
39	明赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1cm大の鉄滓をまれに含む	
40	暗褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	炭の小片をまれに含む	
41	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1cm大の鉄滓や炭を含む	上面たたら操業面(4期)
42	暗褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 4cm大の鉄滓を含む	
43	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1cm大の炭を含む	鉄滓は含まない
44	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	1cm大の炭を含む	
45	褐灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	5㎜大の炭を多く含む	1cm大の焼土ブロックを含む
46	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	鉄滓や炭を多く含む	
47	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	焼土塊を多く含む	
48	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる		
49	褐灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる		
50	黄灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1cm大の炭をわずかに含む	焼土ブロックを多く含む
51	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3cm大の焼土塊を含む	
52	褐灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる		
53	赤褐色焼土 (褐灰色混じり)	跡坪埋土 (4期)	しまりなし	1cm大の炭をわずかに含む	
54	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	3 ～ 5cm大の焼土ブロックをまばらに含む	
55	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1cm大の炭をまばらに含む	1cm大の焼土ブロックをまばらに含む
56	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1cm大の炭をまばらに含む	1cm大の焼土ブロックをまばらに含む
57	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む	
58	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1cm大の炭をまれに含む	3cm大の炉壁ブロックをまれに含む
59	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	0.5 ～ 1cm大の炭を含む 1 ～ 3cm大の鉄滓を含む	上面たたら操業面(4期)
60	灰赤色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1cm大の炭をまばらに含む	上面たたら操業面(4期)
61	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1cm大の炭を含む 1 ～ 3cm大の鉄滓を含む	上面たたら操業面(4期)

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
62	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 0.5 ～ 1㎝大の鉄滓を含む	上面たたら操業面(4期)
63	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	上面たたら操業面(4期)
64	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 1 ～ 3㎜大の砂粒を含む	0.5 ～ 1㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまれに含む
65	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまれに含む
66	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭を含む 1 ～ 3㎜大の砂粒を含む	0.5 ～ 1㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまれに含む
67	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭をごくまれに含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまばらに含む
68	褐灰色土	跡坪埋土 (4期)	ややしまる	3 ～ 5㎝大の炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまれに含む
69	暗オリーブ色土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまばらに含む	
70	暗灰黄色土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまれに含む
71	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の炭ブロックをまばらに含む	3 ～ 5㎝大の明赤褐色の焼土ブロックをまばらに含む
72	明赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	炉壁ブロックをまれに含む	
73	黄褐色土	跡坪埋土 (4期)	しまる	5 ～ 10㎝大のくさり礫をまばらに含む	
74	黄灰色粘質土 (黄褐色混じり)	跡坪埋土 (4期)	ややしまる	粉炭混じる	
75	明黄褐色粘質土	跡坪構築土 (4期)	かたくしまる	表面に3 ～ 5㎝大の灰色ブロックをまれに含む	上面跡坪床面(4期)
76	明黄褐色粘質土	跡坪構築土 (4期)	かたくしまる	3 ～ 5㎝大の灰色ブロックをまれに含む	上面跡坪床面(4期)
77	黄褐色粘質土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	炭の小片を含む	鉄滓をわずかに含む
78	暗灰黄色粘質土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	かたくしまる	上面たたら操業面(4期)	
79	オリーブ褐色土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	しまる	磁着強い	礫を多く含む 上面たたら操業面(4期)
80	明黄褐色土	礎石埋土 (3 ～ 4期)	しまる	明黄褐色粘土塊を含む	上面たたら操業面(4期)
81	暗オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1㎝大の炭を多く含む 磁着強い	1㎝大の礫を多く含む 上面たたら操業面(4期)
82	暗灰黄色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	3㎝大の炭を一個含む	
83	明赤褐色焼土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる		
84	暗灰黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭の小片を含む	鉄滓をわずかに含む
85	淡黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 5㎝大の黄色ブロックをまばらに含む	3 ～ 5㎝大の赤褐色焼土ブロックをまれに含む

高殿南北ベルト土層図（２）・本床断面図（第 38 図）

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
1	黄褐色粘質土	造成土	かたくしまる	炭ブロックをまれに含む	1 ～ 3㎝大の赤褐色ブロックをまれに含む
2	オリーブ褐色土	造成土	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまれに含む	3 ～ 10㎝大の礫を含む レンガ含む
3	明黄褐色土	造成土	ややしまる	1㎜大の砂粒を多く含む	3 ～ 5㎝大の明赤褐色焼土ブロックをまれに含む
4	黄褐色土	造成土	しまる	1㎜大の白色砂粒をまばらに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまばらに含む
5	オリーブ褐色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5㎝大の炭ブロックをまばらに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまばらに含む
6	暗灰黄色土	造成土	ややしまる	3 ～ 5㎝大の鉄滓をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の礫を多く含む
7	暗褐色土	造成土	しまり弱い	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	1㎝大のくさり礫をまれに含む
8	明赤褐色焼土	盛土 (4期～)	かたくしまる	1㎝大の鉄滓をまれに含む	
9	灰黄褐色土	盛土 (4期～)	しまり弱い	1㎝大の炭をまばらに含む	3 ～ 5㎜大の砂粒をまばらに含む
10	暗褐色鉄滓層	盛土 (4期～)	しまりなし	1 ～ 5㎝大の鉄滓をまばらに含む	5 ～ 10㎝大の鉄滓を多く含む
11	暗褐色砂質土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	上面たたら操業面(4期)	
12	明赤褐色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	上面たたら操業面(4期)	
13	褐灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	0.5 ～ 3㎝大の炭を多く含む	上面たたら操業面(4期)
14	青灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまばらに含む	上面たたら操業面(4期)

層番号	層　名	属　性	しまり	備　考	
15	褐灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭を含む	1 ～ 3㎝大の鉄滓を含む 上面たたら操業面(4期)
16	青灰色焼土	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む	
17	にぶい黄褐色土	湯溜まり埋土 (4期)	しまる	上面たたら操業面(4期)	
18	黒褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	1㎝大の鉄滓をまばらに含む
19	青灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
20	にぶい赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	1 ～ 3㎝大の円礫をまれに含む	
21	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	かたくしまる	1㎝以下の炭をまばらに含む	
22	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1㎝大の炭をまばらに含む	1㎝大の鉄滓をまれに含む
23	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	0.5 ～ 1㎝大の炭をまばらに含む	0.5 ～ 1㎝大の鉄滓をまばらに含む
24	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	3 ～ 5㎝大の炭ブロックをまれに含む	
25	灰褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の炭をまれに含む	
26	暗赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
27	暗赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1㎝以下の暗赤褐色ブロックを多く含む	
28	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	
29	赤灰色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまり弱い		
30	赤褐色焼土	跡坪埋土 (4期)	しまる	上面たたら操業面(4期)	
31	黒褐色焼土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる		
32	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまれに含む	
33	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまる	1 ～ 3㎝大の礫をまばらに含む	
34	オリーブ褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1 ～ 5㎝大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 10㎝大のくさり礫をまばらに含む
35	暗灰黄色粘質土 (黄色混じり)	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまばらに含む	炉壁ブロックをまれに含む
36	黄灰色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	3 ～ 5㎝大の炉壁ブロックを多く含む	
37	暗灰黄褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫をまれに含む
38	にぶい黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炭をまれに含む	
39	黄灰色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の炭をまばらに含む	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む
40	明赤褐色焼土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまりなし	1 ～ 10㎝大の焼土ブロックを多く含む	5 ～ 10㎝大の炉壁ブロックをまれに含む
41	黄色粘質土 (明黄褐色混じり)	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	5 ～ 10㎝大の鉄滓をまばらに含む	1 ～ 3㎝大のくさり礫が帯状に混じる
42	黄褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	1 ～ 3㎝大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎝大の鉄滓をまれに含む
43	明黄褐色土	盛土 (2 ～ 3 期)	しまる	3 ～ 5㎝大のくさり礫を多く含む	
44	黄褐色土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1㎝大の炭をまばらに含む	
45	黒褐色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	しまり弱い	1㎜大の砂粒をまばらに含む	
46	明赤褐色焼土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	炉壁を多く含む	
47	オリーブ褐色 粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	かたくしまる	1㎝大の炭をまれに含む	1 ～ 3㎜大の砂粒をまばらに含む
48	黄色粘質土	盛土 (2 ～ 3期)	ややしまる	5 ～ 10㎝大の礫をまばらに含む	3 ～ 5㎝大のくさり礫をまれに含む
49	暗灰黄色粘質土	盛土 (1 ～ 2期)	しまり弱い	1㎝大の炭をまばらに含む	5 ～ 10㎝大のくさり礫をまれに含む
50	明黄褐色粘質土 (暗灰黄色混じり)	埋土 (1期)	かたくしまる	3㎝大の鉄滓をまれに含む	3㎝大のくさり礫をまばらに含む
51	暗灰黄色粘質土	埋土 (1期)	しまる	1 ～ 3㎜大の砂粒をまれに含む	
52	黒褐色粘質土	埋土 (1期)	しまりなし		
53	黄褐色土	地山	しまり弱い	1 ～ 3㎝大の礫をまれに含む	

第４節　越堂鈩山内の調査

１　越堂鈩山内の礎石列（第 42 図）

越堂鈩山内には高殿北側に炭小屋，東側に住宅が存在していたことが『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）に掲載された幕末から明治初年の越堂鈩山内建物配置図から読み取れる（第１章第１節第３図）。今回の調査では建物配置図で炭小屋および住居が描かれた場所に礎石列を確認した（第 42 図）。

（１）炭小屋跡礎石列

高殿北側には礎石列が存在しており，2006 年度の調査でも確認されている。確実ではないが，礎石がＬ字状に配置されているように見受けられ，現行で南北方向に約 5.2m，南側の東西方向に約 5.1m を測る。その周辺には複数の礎石が存在しており，後世の所産の可能性もあるが，『田儀村誌』掲載の越堂鈩山内配置図では，この場所には炭小屋が南北に２棟存在したことが記されており，その位置関係から南側の炭小屋に伴う礎石の一部であった可能性が想定できる。

（２）住宅跡礎石列

高殿の東側には高殿石垣の南北および東西方向に伸びる礎石列がＬ字状に確認された。現行で礎石列は南北方向に約 6.3m，東西方向に約 6.2m を測る。『田儀村誌』の越堂鈩山内配置図にはこの場所に南北方向の長屋とみられる住宅が存在していた様子が描かれている。近年まで周辺に住宅が存在しており，それに伴う礎石の可能性も否定できないが，絵図に描かれた住宅は，高殿建物の南北および東西方向の軸線と整合性があり，今回確認した礎石列も高殿石垣の南北および東西方向と合致する状況を考慮すると，当時の住宅に伴う礎石列の可能性が考えられる。

２　越堂鈩山内の石垣（第 43 ～ 45 図，図版 17）

（１）里道石垣

高殿南面石垣の外側には，石垣に対向する自然石の石列を確認した。この石列の延長は現在の里道の石垣と連なり，山内南側に存在した越堂鈩操業２期の山内通路石垣の根石であると想定した。この高殿南面石垣対向石列は地山上面に構築され，その地山の高さは里道の石垣側に向かうにつれて徐々に高くなり，石列が据えられていた底面の地山の標高ラインを延長すると，現在の里道石垣の最下段にある根石下面付近に到達する。また里道石垣の最下段の石材は，２期の高殿南面石垣対向石列と同様に大型の自然石を用いており，根石の石材状況が類似する。これらの状況から，現在の里道石垣にも山内通路石垣の一部が残存する可能性が高いと考えられる。こうした視点をもとに，現在の里道石垣を３つに区分（里道石垣１～３）して石材状況を詳しく検討する（第 43 図）。なお石材の種類は，玉石状の安山岩や凝灰角礫岩などが主に用いられていると考えられる。

里道石垣１

里道石垣１は，根石部分が埋没して確認できないが，大小様々な自然石および割石を用いた乱積みで構築されている。現行では，石垣の高さは最大で 1.1m 程度である。表面を平滑にするために一部

第 42 図　越堂鈩山内の礎石列（上）とオルソ画像（下）

が削られている自然石の石材も見受けられる。また石垣中央付近には天端石の高さが揃っていない部分があり，一部が積み直された可能性がある。石材同士の間隙には間詰め石が一部で確認されるものの，全体的には少ない。なお里道石垣１と里道石垣２の間には元々石垣があった可能性があるが，現在は残存していない。

里道石垣２

里道石垣２は東側と西側に区分でき，その境目に整然とした石垣の縦目地が通っている。石垣の高さは東側で約 2.9m，西側で約 2.1m となる。西側は石垣下段から上段まで規格性のある形の整った間知石を主に使用して谷落とし積みで間隙なく積まれており，近代から現代の所産と考えられる。西側端部付近にも石垣の縦目地が存在し，その上部には自然石や割石の乱積みが認められてやや古い様相を残すが，その一方で下部はコンクリートブロックで支えてあり，残存する古い石垣を支えるために後世に設置されたと考えられる。

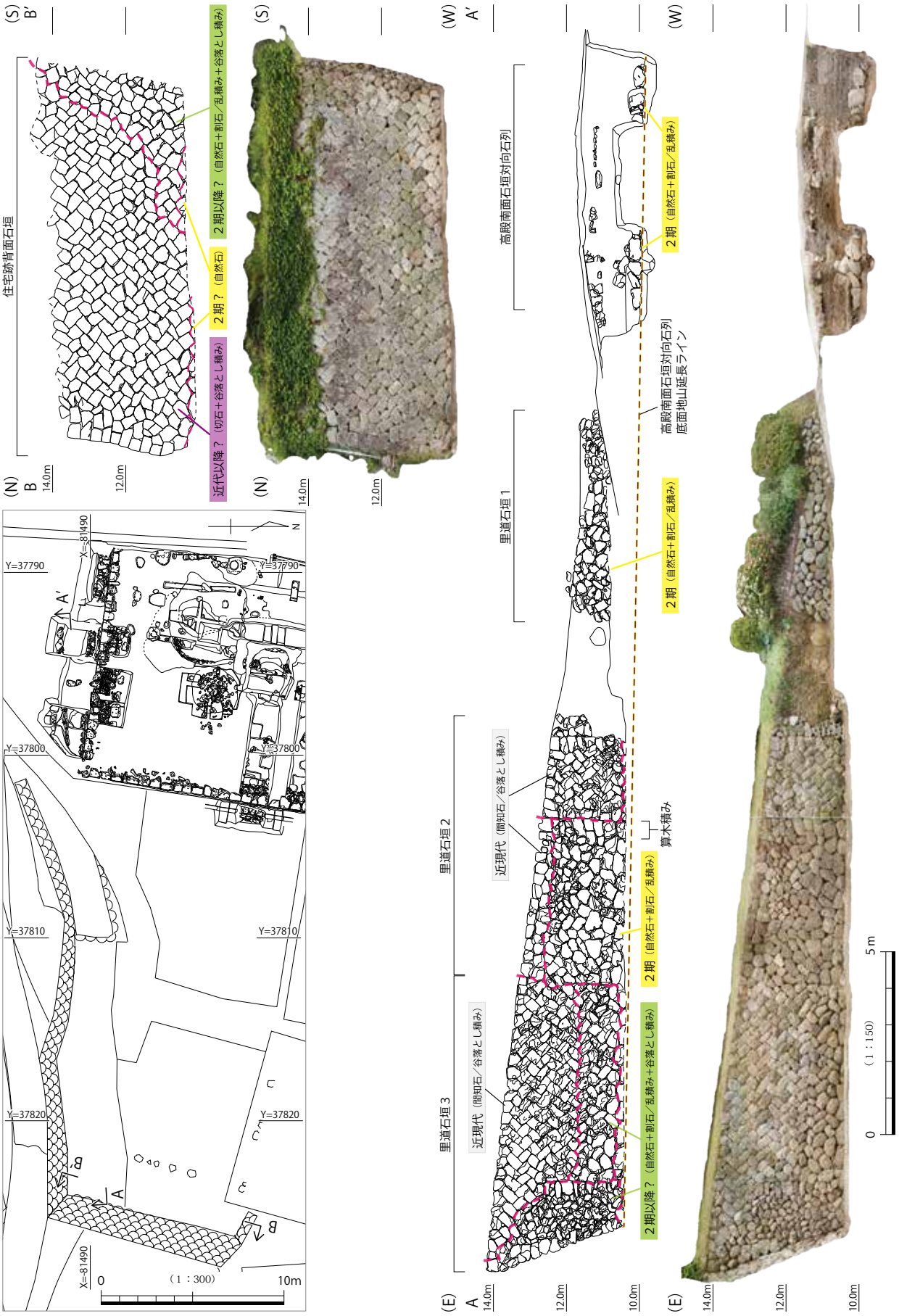
里道石垣２の東側は比較的古い石垣と考えられ，自然石や割石を中心に乱積みで構築されている。石材の表面にはノミ痕などの石材加工の痕跡が一部の石材で見られるが，全体的には少ない。石材の規模は下段ほど大きく，上段に向かうほど小型の石材を用いている様子が分かる。石材同士には間隙が見られるが，間詰め石が確認できるのは一部のみである。天端石およびその下段の石材は規格的な間知石であり，近現代に積み直されたと推測される。なお，里道石垣２の東側と西側の間にある縦目地付近の石垣は，東側が隅角部に用いられる算木積みで構成されていることが注目される。そのため，近現代の所産である西側の石垣の場所には，それ以前に石段などの別の構造物が存在したことが推測される。また，里道石垣２から里道石垣３にかけては，里道の方向に合わせて石垣の角度が変換しており，石垣の縦目地が通っている。

里道石垣３

里道石垣３は，里道石垣２から角度を変換して構築されており，石垣の高さは最も高い東側で約 3.8m，西側で約 2.9m を測る。石垣の根石は全体的に大型の自然石を使用しており，また里道石垣２の根石と連なっているため同時期の所産と考えられる。また石垣の根石から４段目付近の位置で造り替えられた痕跡が確認でき，上段と下段に分けることができる。

下段の石垣には東側に縦目地が確認でき，縦目地より東側の石垣は主に小型の自然石や割石を用いて乱積みで構築され，縦目地付近や後述する住宅跡背面石垣との隣接部分には比較的大きな石材を用いている。石材表面は一部を削った痕跡が認められるものの，完全には平滑になっていない石材が目立っている。また，下段の石垣は自然石と割石を用いた谷落とし積みで石垣が構築され，石材同士の間隙がやや目立つ。石材の表面には加工痕跡が認められるが，平滑には仕上がっていない。上段の石垣は規格性の高い間知石で間隙なく積み上げられており，新しく積み直されたと想定される。

里道石垣３のなかでの新旧関係については，里道石垣２の根石と連なる自然石の根石が最も古い時期の所産と考えられる。下段の石垣は縦目地を境に東西で石材の規模に差はあるが，類似した風合いの自然石や割石を用いており，比較的近い時期に構築された可能性がある。その後に上段の石垣が規格性の高い間知石で近現代に積み直されたと考えられる。



第 43 図　高殿南面石垣対向石列・里道石垣 1 ～ 3・住宅跡背面石垣立面図・オルソ画像

里道石垣の構築過程と山内通路石垣

これまで里道石垣１～３の構築状況について確認してきたが，ここで里道石垣全体の構築過程について，部分的に残存する山内通路石垣を踏まえて整理したい。

２期の高殿南面石垣対向石列の延長上に現在の里道石垣が存在しており，地山上に構築された高殿南面石垣対向石列の底面が里道石垣の根石底面付近の高さと連なる。そのため，里道石垣２・３で確認された根石は，２期の高殿南面石垣対向石列と同時期の所産と考えられる。里道石垣２は東側が自然石や割石の乱積みで構築され，天端石下段の石垣以外は古い様相を残していると考えられる。これらには積み直された痕跡は確認できず，２期の高殿南面石垣対向石列と同時期の可能性も残る。また里道石垣１には根石は確認できないが，自然石や割石を利用した乱積みで石材の様相も類似しており，里道石垣２の東側と同様の状況が確認できる。そのため，天端石付近は一部で積み直されたと思われるが全体としては比較的古く，２期の高殿南面石垣対向石列と同時期に積まれた可能性があり，これらは山内通路石垣であったと考えられる。なお，この時期における里道石垣２の西側の場所には，里道石垣２の東側の石垣と連なる石段などの構造物が形成されていた可能性が考えられる。

里道石垣３の下段の石垣は縦目地を挟み東西で積み方に違いはあるが，類似した風合いの自然石や割石を用いており，比較的近い時期に構築されたと考えられる。その一方で，重複関係から里道石垣３の下段の石垣は里道石垣２の東側よりも新しく，２期以降に積み直された可能性が想定されるが，どの程度の時期差があったのかは同時期頃の可能性を含めて判断が難しい。

里道石垣２の西側の石垣や里道石垣３の上段の石垣は，規格性の高い間知石で間隙なく積み上げられており，近現代の構造物であると考えられる。

よって２期の高殿南面石垣対向石列が構築された時期には，現在の里道石垣の原形となる当時の山内通路石垣が存在しており，高殿南面石垣対向石列を含め，里道石垣１および里道石垣２の根石と東側石垣，里道石垣３の根石がその一部として残存している可能性がある。その後，どの程度の時期差があったのかは不明瞭であるが，同時期の可能性を含めて里道石垣３の下段の石垣が積み直されたと推測される。そして近代から現代にかけて，里道石垣２の西側および東側の天端石とその下段，里道石垣３の上段の石垣が新たに積み直されたという構築過程を想定することができる。

（２）その他の石垣

現在の越堂たたら跡周辺には，幕末から明治初年の越堂鈩山内建物配置図に描かれた様子が残されている部分が認められ，山内通路石垣が一部で残る里道石垣のほかに，たたら場操業当時に存在した可能性のある石垣が認められる。

住宅跡背面石垣

山内通路石垣の根石を持つ現在の里道石垣３と直交する形で，高さが約 4.1m の石垣が存在している（第 43・44 図）。石垣の根石の一部には比較的大型の自然石が用いられており，２期の山内通路石垣と同時期頃の所産である可能性がある。

里道石垣３と直交する石垣の南側は，石垣の重複関係から里道石垣３の東側と同時期か，それよりも古い時期に構築された可能性があるが，里道石垣３の東側と同様に自然石や割石を用いた乱積みや

第 44 図　住宅跡背面石垣（左）と里道石垣（右）（西から）

第 45 図　山内北側石垣（北西から）

谷落とし積みで構築されているため，同時期頃の所産と判断できる。一方で，それ以外の石垣は比較的整った割石で谷落とし積みによって構築されている。石材間には間隙が目立ち，規格性の高い近現代の間知石の石垣よりも古い時期の所産であると考えられる。

越堂鈩山内建物配置図では石垣手前に住宅が存在しており，幕末から明治初年には住宅跡背面の石垣として構築されていた可能性がある。なお，山内建物配置図に記された他の住宅の場所周辺には現在でも石垣が一部で確認できるため，たたら場操業当時の住宅に伴う石垣が現在まで残存している蓋然性が高い。

山内北側石垣

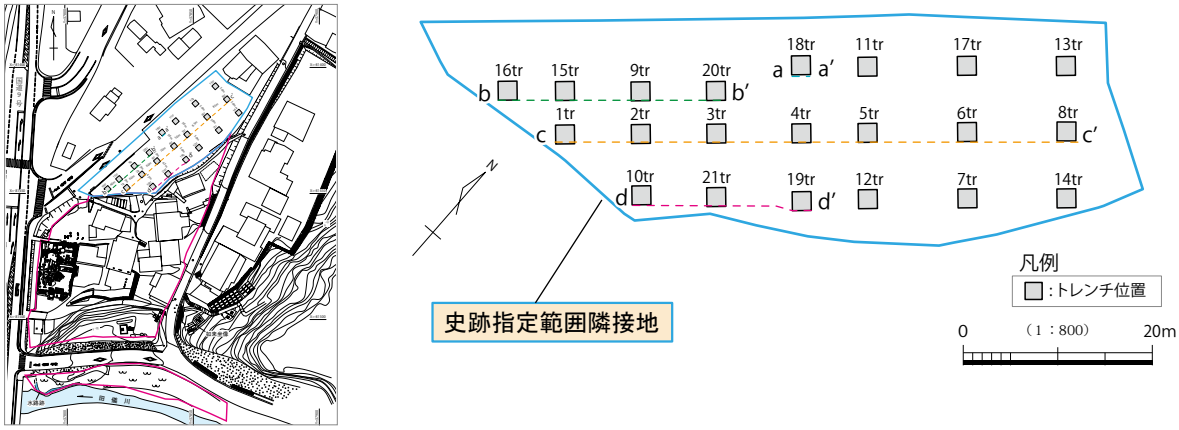
越堂鈩山内建物配置図には山内の北側に水路と通路が存在しており（第 3 章第 1 節第 17 図），通路を挟んだ北側には住宅などの建物が認められず，その周辺が当時の越堂鈩山内の集落の境界であったと考えられる。当時の通路と概ね同一の場所に現在も里道が存在し，自然石で積まれた石垣が伴うため，当時の石垣がそのまま残存している可能性がある（第 45 図）。この山内北側の石垣は山内通路の石垣であったとともに，集落の境界も同時に示していた可能性が想定できる。

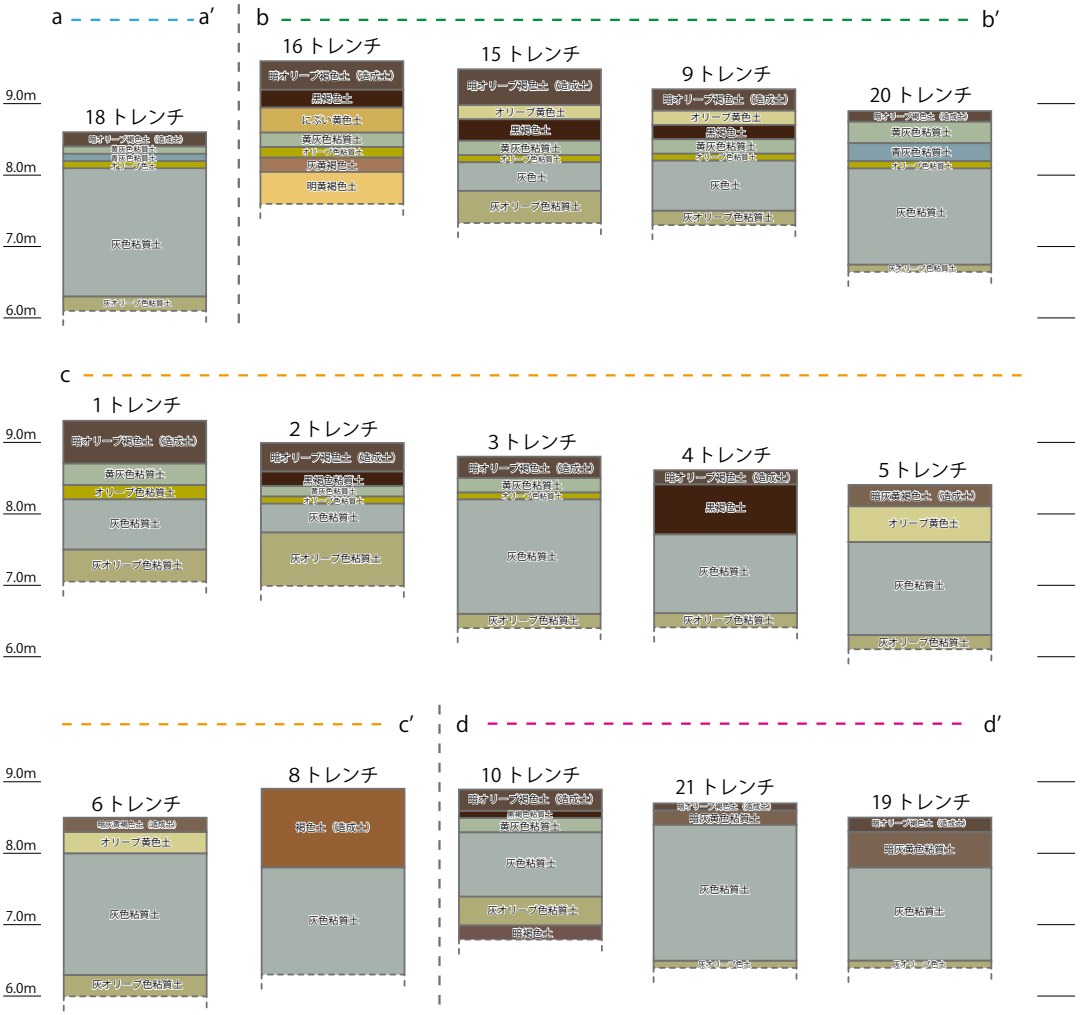
3　越堂鈩山内周辺の調査（第 46・47 図）

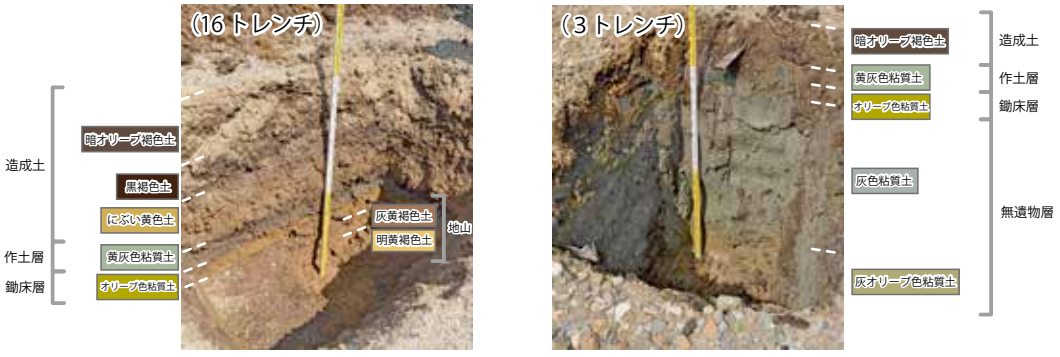
越堂たたら跡は，2012（平成 24）年に策定された「史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想」のなかで，田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の導入部として近接地にガイダンス施設設置の方針を示していた。そのため，越堂たたら跡の史跡指定範囲隣接地（ガイダンス施設整備予定地）（第 3 章第 1 節第 18 図）に越堂鈩山内に関連する遺構の有無を確認する必要があり，2015（平成 27）年度に重機掘削による試掘確認調査を実施した。

（1）試掘確認調査の位置

試掘確認調査は，約 1,300㎡の面積がある史跡指定範囲隣接地を調査対象とした。この範囲で可能な限り地下の状況を確認するため，合計 21 箇所で 2 × 2 m のトレンチを設定し（第 46 図），重機掘削により試掘確認調査を実施した。なお，史跡指定範囲隣接地において設定したトレンチのなかで最も高い地表面の標高が約 9.6m，最も低い地表面の標高は約 8.4m であり，最大で 1.2m 程度の高低差が生じている。







第 46 図　試掘確認調査のトレンチ位置（上）と土層堆積柱状図（中）・土層堆積状況（下）

（2）試掘確認調査の成果

試掘確認調査の結果，越堂鈩山内関連の遺構は確認できなかったが，史跡指定範囲隣接地のなかで越堂鈩山内に隣接する南西側では，概ね標高 8.2m 前後の位置で鋤床層が存在しており，この範囲に田が広がっていたことが各トレンチの土層堆積状況（第 46 図）から確認できた。明治初年頃の口田儀村の絵図（出雲国第三十四区神門郡口田儀邨図面）には越堂鈩周辺の様子が描かれ，これらの歴史的景観や当時の土地利用の変遷が考察されている（藤原 2008）。今回改めて絵図の内容を確認すると，史跡指定範囲隣接地に該当する場所は，この当時には田であったことを確認した（第 47 図）[(1)]。

そのため，今回の試掘確認調査で認められた鋤床層の正確な時期は不明であるが，たたら場操業当時の田の痕跡を示す可能性が考えられる。その場合，この周辺の当時の地表面は標高 8 ～ 9m 程度であったことが推測され，概ね標高 9.5m の越堂鈩の高殿石垣の底面（第 3 章第 3 節第 22 図）よりもやや低い位置で田が広がっていたという当時の景観が復元できる。

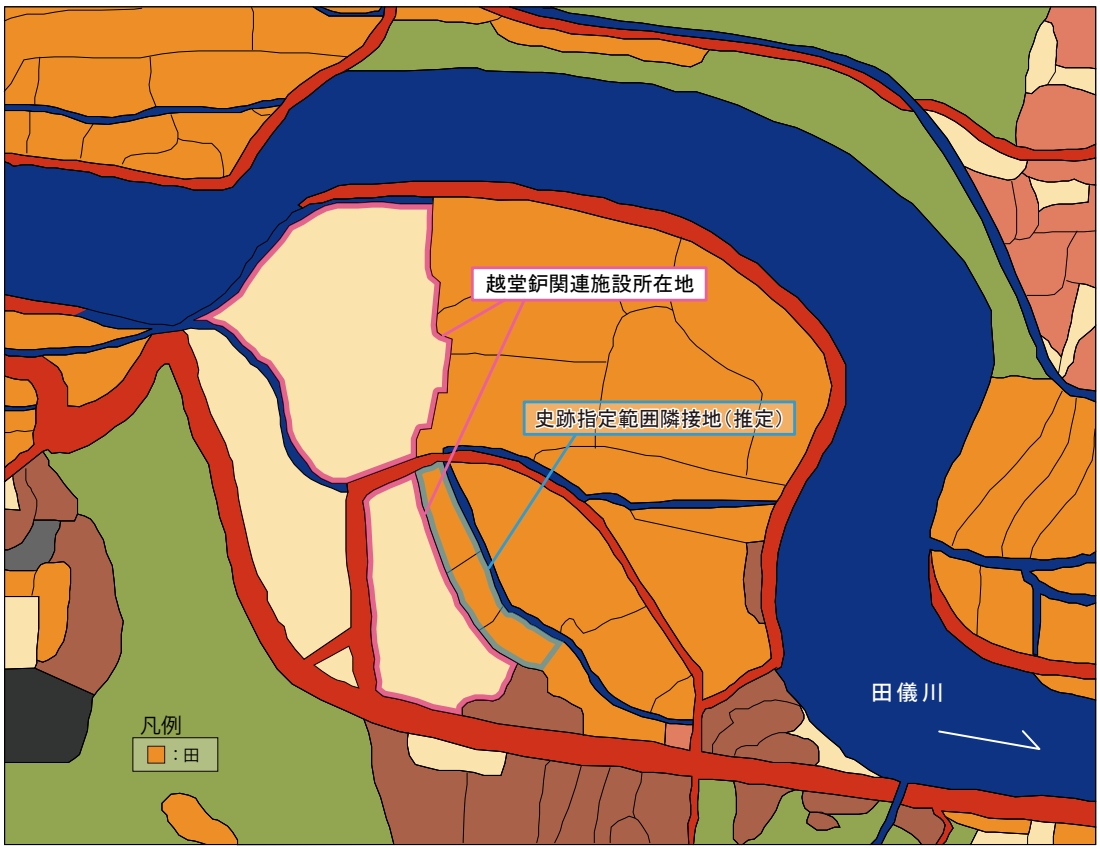
註

（1）なお，第 47 図は絵図のデジタルデータ（出雲市立海辺の多伎図書館所蔵）で確認した内容および藤原（2008）をもとに作成した。

参考文献

藤原雄高 2008「絵図からみた田儀櫻井家の遺跡」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会　116 ～ 126 頁

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場



第 47 図　明治初年頃の口田儀村の絵図にみる越堂鈩周辺

第５節　出土遺物

越堂たたら跡の発掘調査では，各調査区において陶磁器などが一定量出土したほか，製鉄炉に伴う炉壁や鉄滓類が多量に出土した。ここでは，出土した遺物について種類別に報告する(1)。陶磁器の碗は，必要に応じて形状や大きさで分類した４種類の器形（大形 [口径 10cm 以上]・中形 [口径 10 ～ 8 cm 程度]・小形 [口径 8 cm 以下]・筒形 [器高≧口径]）について記述する(2)。陶磁器で時期が推定できる個体は，九州近世陶磁学会事務局編（2000）の編年区分（九陶編年Ⅰ～Ⅴ期）を示している。また，出土地点は越堂鉧の操業時期（第３章第２節の越堂鉧操業１～４期）を踏まえて報告しており，その内容は第３章第６節で総合的に整理している。なお，出土した遺物の詳細な観察内容は，第３章第６節の観察表（第 13 表）に記している。

１　陶磁器（第 48 ～ 51 図，図版 20 ～ 27）

（１）磁器

碗

１・２は肥前系の陶胎染付の碗である。小片のため正確ではないが，１は中形の口縁部片，２は中形から大形の底部片と考えられる。２の胴下半部は厚手の器壁である。これらは九陶編年Ⅳ-1 期（1690 ～ 1740 年代）頃の所産であろう。

３・４は，肥前系の碗の胴下半部片である。３は薄手で丁寧な絵付けがなされる。４は厚手の器壁を持つ。小片で判断が難しいが中形と考えられ，九陶編年Ⅳ期（1690 ～ 1780 年代）頃に生産されたと考えられる。５・６は外面に青磁釉を施す外青磁の蓋付碗で，５の蓋の内面中央にはコンニャク印判が認められる。６は屈曲した胴下半部片である。九陶編年Ⅳ - ２期の後半頃（1760 ～ 1780 年代）に比定できる。７・８は広東碗であり，８は高台が付く。九陶編年Ⅴ期の前半頃（1780 ～ 1840 年代）の所産と考えられる。

９は肥前系の大形の碗，10・11 は中形，12 は小形，13 ～ 15 は筒形である。やや淡い色合いの絵付けであり，正確な時期比定は難しいが，19 世紀前半頃の所産と推定される。

16 は肥前系の大形の碗，17 ～ 19 は中形，22・23 は筒形であり，鮮やかな色合いの絵付けがなされ，概ね幕末から明治前半頃の可能性が考えられる。20・21 は小形の瀬戸新製焼の碗である。

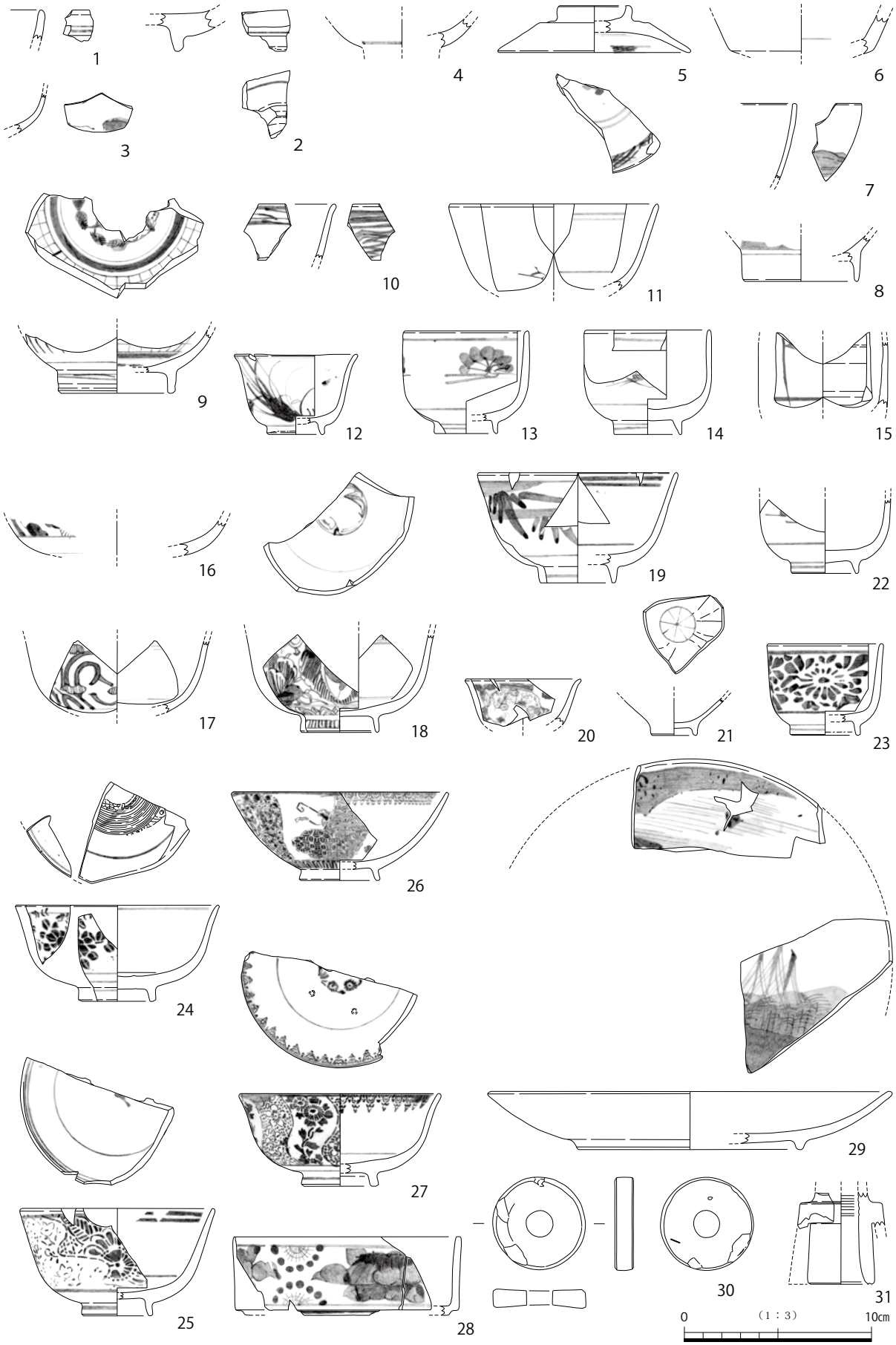
24 ～ 27 は，型紙摺りの装飾技法がなされる大形碗で，24 の底部内面には蛇目釉はぎと墨書が認められる。これらは明治初年以降に生産されたものと考えられる。

段重・皿

28 は段重である。器形が低く，筒形の形状をしており，底面には短い高台が付いて二段以上に重ねることが可能となる。19 世紀前半頃の所産と考えられる。29 は皿である。全体の残存状況は良好ではないが，比較的大形であったと考えられ，概ね幕末から明治前半頃に製作されたと見受けられる。

戸車・碍子

30 は扉の戸車である。表面は摩滅しているが，一部に釉薬が確認できるため，当初は全体的に釉


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
（1：3）
10cm

第 48 図　出土磁器（1）

薬が施された可能性がある。なお中央穴の内部は摩滅しておらず，釉薬が残存する。正確な時期は不明であるが，明治期以降の可能性が高い。31 は電気の絶縁体として使用された碍子の胴部で，二重の裾部を持つ。上部および外側の裾部が欠損している。釉薬は外面および内面下部の先端に施される。内面にはネジの受け部が認められる。明治期以降の所産であろう。

出土地点（磁器）

３・７はＣ区２トレンチの炭置場上の盛土（２～３期）から出土している。４はＡ・Ｂ区東西横断トレンチ東壁の硬化面（１期）を形成する盛土（～１期）から出土した。５は高殿南３トレンチにおける暗渠施設（１期）の蓋石上面の盛土（１～２期）から確認している。８・11 はＡ区北側トレンチの炭置場直上の盛土（２～３期），17 は史跡指定範囲隣接地における試掘確認調査の 10 トレンチの作土層から出土した。21 は囲炉裏跡の埋土（３～４期）からの出土である。30 は押立柱２の根固め石付近（３・４期）で確認された。その他の磁器は，４期以降の盛土や造成土から出土している。

（２）陶器

碗

32 ～ 39 は陶器の碗である。32 は底部片でやや撥形の高い高台が付き，大形になると推定される。内外面に釉薬が認められ，器壁がかなり厚い。呉器手形の碗と考えられる。小片のため時期比定が難しく，九陶編年Ⅲ期（1650 ～ 1690 年代）頃と考えられるが，Ⅳ期の前半頃（1690 ～ 1740 年代）の可能性もある。

33 は大形の底部片で，内外面に施釉が確認できる。34 は筒形碗で，胴部内面および胴上半部外面に施釉が確認できるが，口縁端部から口縁部内外面，胴下半部外面は無釉で露胎である。これらは概ね 18 世紀から 19 世紀の前半頃までの所産と考えられる。

35 は京焼風の中形の口縁部片で，内外面に透明釉が施される。36 ～ 39 は石見焼の碗である。36・37 は大形，38 は中形の口縁部片，39 は中形の底部片である。36 ～ 38 は内外面に施釉され，36・37 には黒色釉が認められる。これらは 19 世紀頃の所産である。

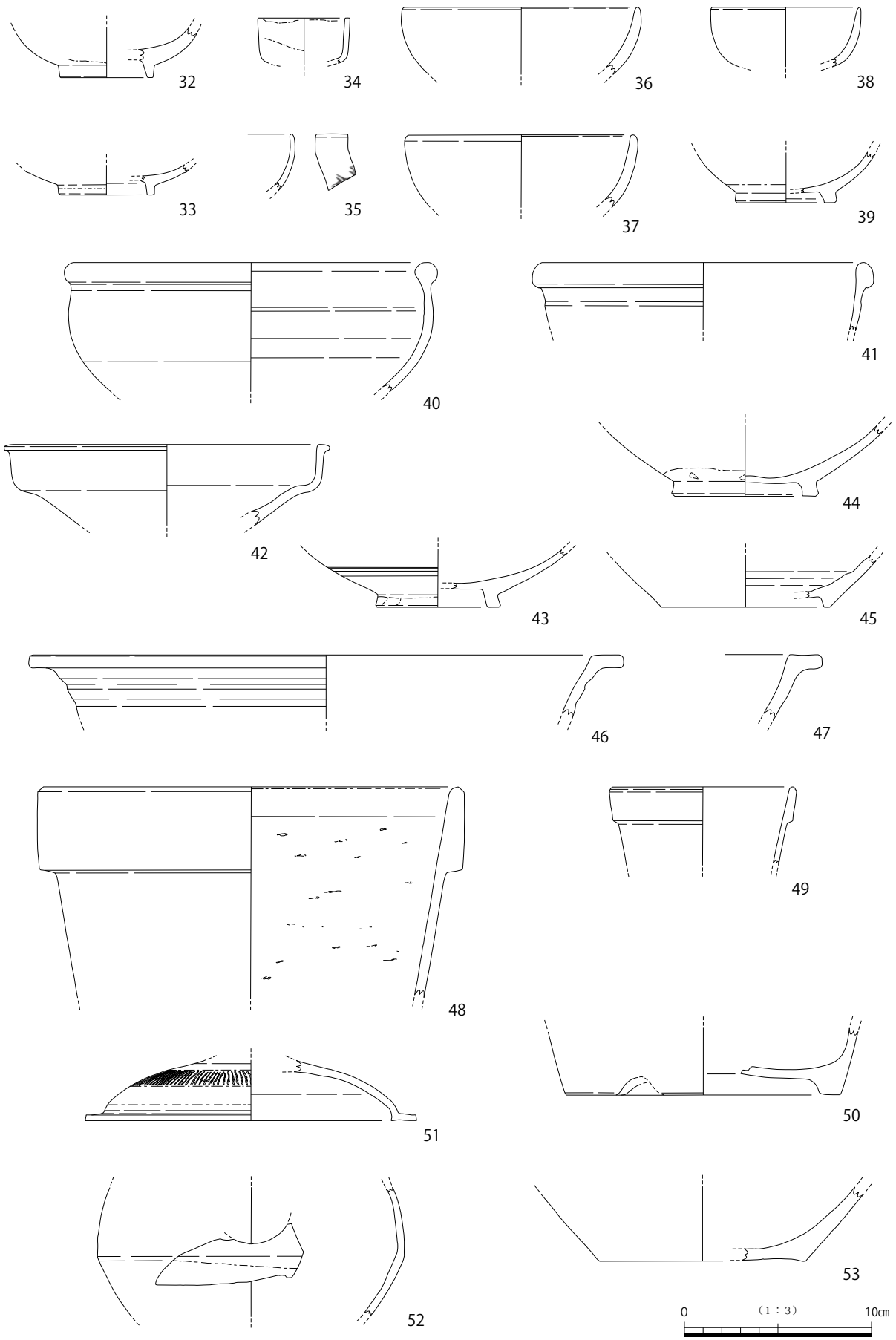
鉢

40 ～ 50 は陶器の鉢である。40 ～ 42 は口縁部片で，40・41 は片口であると考えられる。内外面に施釉が認められ，42 は黒色釉である。43 ～ 45 は底部片で，43・44 は高台底，45 は碁笥底となっている。44 の底部外面は露胎，45 の底部内面には一部で来待釉が認められる。40 ～ 44 は石見焼であるが，45 は布志名焼の可能性がある。これらの生産時期は概ね 19 世紀頃と考えられる。

46 ～ 50 は植木鉢で，46 ～ 49 は口縁部片である。46・47 は素焼であり，口縁上部が屈曲して平坦面を形成する。48・49 は口縁部が肥厚して口縁部外面から口縁端部にかけて施釉が認められる。小片のため判然としないが，48・49 は土管の可能性も残る。50 は底部で，碁笥底である。全体的に薄く釉薬が残る。46・47 は 19 世紀頃に生産されたと想定されるが，48 ～ 50 は比較的新しく，明治期以降の所産であると考えられる。

鍋

51 ～ 53 は鍋で，51 は行平鍋の蓋である。肩部には施釉帯と無釉帯が交互に設けられ，無釉帯に


32
34
36
38
33
35
37
39
40
41
42
44
43
45
46
47
48
49
51
50
52
53
0
（1：3）
10cm

第 49 図　出土陶器（1）

は飛び鉋技法による装飾が施される。52 は行平鍋の胴部片で，肩部外面から胴上半部外面には釉薬が認められ，胴下半部外面は露胎である。51・52 は石見焼であり，53 は素焼の底部片で，内面の一部に釉薬が認められる。これらは 19 世紀頃の所産であろう。

土瓶

54 ～ 58 は土瓶である。54 ～ 56 は胴部片で，54・55 は外面の一部に釉薬が認められ，胎土や焼成が類似しており，同一個体の可能性もある。55 の胴下半部は露胎である。56 は外面に青緑色釉が施され，胴下半部は露胎となっている。57 は把手部分で，全面に黒色釉が施される。58 は注口部で，胴部との接合部分に濾し孔を有する。外面および内面の注口先端付近まで施釉される。54・55・58 は石見焼で，56 は布志名焼の可能性がある。57 は胎土から石見焼ではないと想定されるが，正確な生産地は不明である。これらは概ね 19 世紀頃の所産であると推定される。

壺

59 ～ 63 は石見焼の壺で，内外面に施釉がみられる。59 は口縁部片，60 は肩部である。61 は胴部から底部片で，底部付近は露胎である。62・63 は底部片で，62 は碁笥底であり，底部付近は露胎で，高台が付く 63 の底部内面には２箇所の目跡が残る。61・62 は来待釉の可能性がある。これらは概ね 19 世紀頃に生産されたと考えられる。

灯火具

64 ～ 67 は灯火具である。64 は秉燭で，胴部中央に灯芯を保持するための円筒形の突起が付き，突起には切り込みがみられる。脚部底面の外面には固定用の窪みが設けられる。胴部外面から内面にかけては釉薬が施される。65 は脚付火受皿であり，口縁部内側に環状の突起の受けが廻り，途中に切り込みが入る。また胴部中央の内面には煤が付着する。脚部底面の外面には固定用の窪みと墨書がみられる。脚部底面以外は施釉されている。66・67 は灯火皿であり，66 は内面に３箇所の目跡が確認できる。釉薬は内面および口縁部外面に施され，それより下部は露胎である。また外面の一部には煤が付着する。67 は内面に施釉されている。64 ～ 67 の底部外面には回転糸切り痕跡が認められる。これらの灯火具の生産時期は，19 世紀頃と推定される。

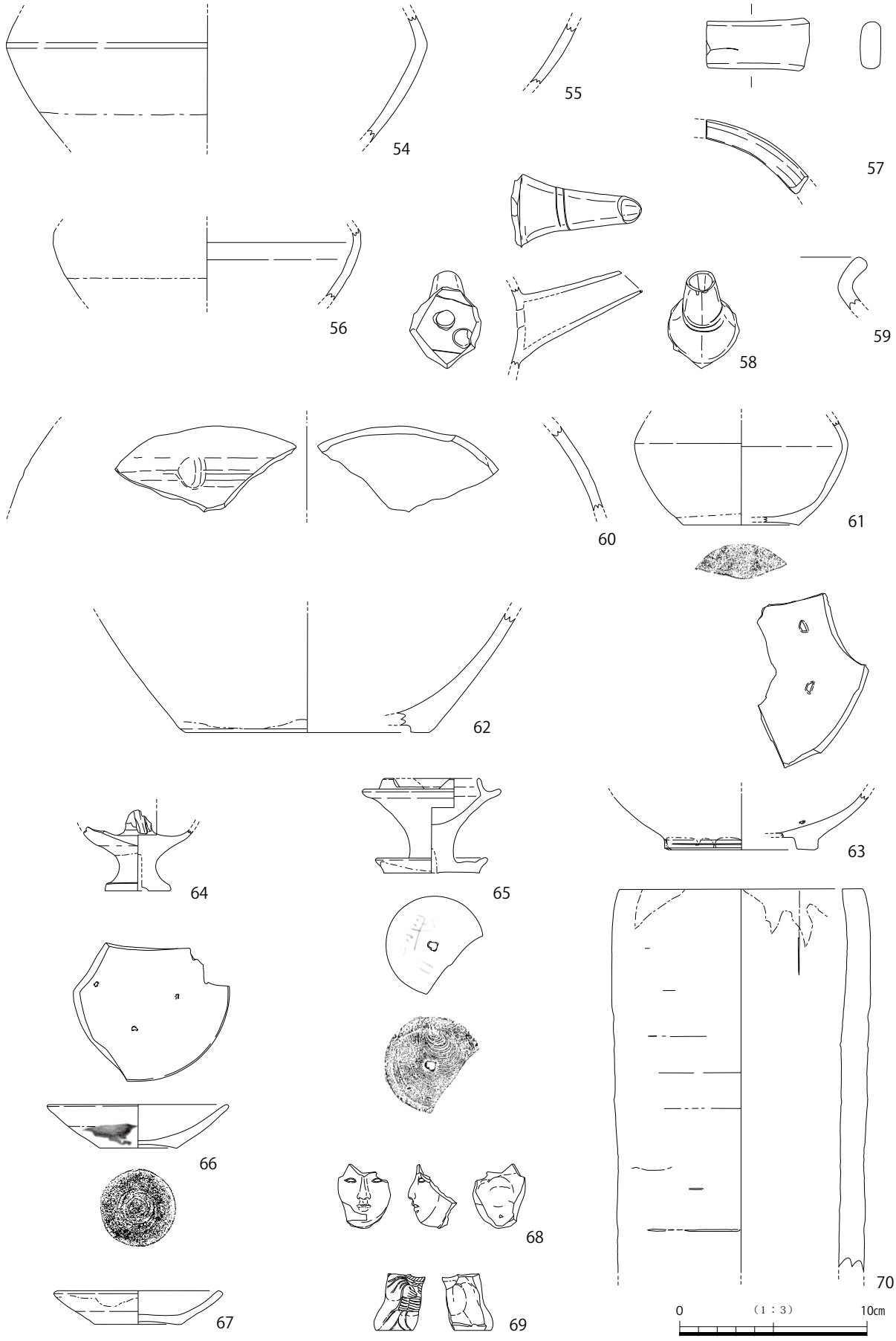
人形

68・69 は人形である。68 は素焼で，69 は緑釉が表面に施されたと考えられる。68・69 はともに中空で，型作りの成形と判断でき，68 の表面には型取りを行いやすくするための細かな雲母がみられる。68 の内面には成形に伴う指頭圧痕が確認できる。69 の内面には煤が付着する。これらは 19 世紀頃の所産と考えられる。

土管

70 ～ 74 は土管である。70 は内外面に来待釉が施され，釉薬瓦の可能性もある。内面には一部に煤が付着する。成形時の接合痕が内外面に認められる。19 世紀頃の可能性が高い。

71 ～ 74 は床釣りの息抜き穴に用いられていた土管である。71・72 は息抜き穴の上部（71 が上，72 が下）で使用されていた素焼の比較的細長い土管で，連結用の受け口部がある。その他の構造や胎土，焼成などもほぼ同一であり規格性が高い。床釣りの息抜き穴に用いるため同じ産地で製作された



第 50 図　出土陶器（２）

規格品を使用した可能性がある。73・74 は口径が大きく短い土管であり，息抜き穴の下部（73 が上，74 が下）に使用されていた。この２つの土管も大きさはやや異なるが，形状は類似している。長さの調整や土管同士の連結を円滑にするため，口縁部の一部を打ち欠いていると思われる。また胴部外面には凹線が認められる。正確な産地は不明であるが，石見焼とは胎土がやや異なる。73・74 ともに内外面に煤が付着している。74 は表面の一部に釉薬が施され，来待釉の可能性がある。これらは幕末から明治初年以降の 19 世紀中頃から後半頃に生産されたと想定される[(3)]。

出土地点（陶器）

32 は A 区の跡坪石積み上面付近（３・４期），34 は高殿北面石垣の石垣直上（３・４期），35 は高殿南２トレンチの盛土（２～３期）から確認されている。37・51・56・63 は東面石垣外側トレンチの盛土（３～４期），46・53 は B 区北側トレンチの２期の操業面を掘り込む盛土（２～３期），47 は押立柱２の根固め石付近（３・４期），54・55 は C 区１トレンチ周辺の盛土（２～３期）から出土した。59 は押立柱１の根固め石付近（３・４期），60 は A 区北側トレンチの盛土（２～３期）からの出土である。68・69 は囲炉裏跡上面付近（３・４期）から出土している。71 ～ 74 は床釣りの息抜き穴（４期）に用いられていた。それ以外の陶器は４期以降の盛土や造成土からの出土である。

２　土師質土器（第 51 図，図版 26・27）

75 ～ 79 は土師質土器であり，全体としての出土量は多くないが，焜炉類，焙烙などの日常用品が確認できた。

焜炉類

75 ～ 77 は厨房具の焜炉類と考えられる。75・76 は竈の可能性があるが，残存状態が部分的なため，詳細は不明である。75・76 は胴部から底部片で，75 は胴部の下半部に通気孔が認められる。76 は円形の焚口が設けられ，脚部の一部が残る。77 は焜炉の内部で用いられるサナ部と考えられ，上面には煤が全体的に付着する。これらの明確な時期は不明であるが，明治期以降の所産であろう。

焙烙

78・79 は焙烙の口縁部片である。78 は外面に煤が付着するほか，破面にも煤の付着が認められる。79 は全体的に煤が付着しており，同様に破面の一部にも煤が付着する。これらは破砕した後にも被熱したと思われる。概ね 19 世紀頃の時期が考えられる。

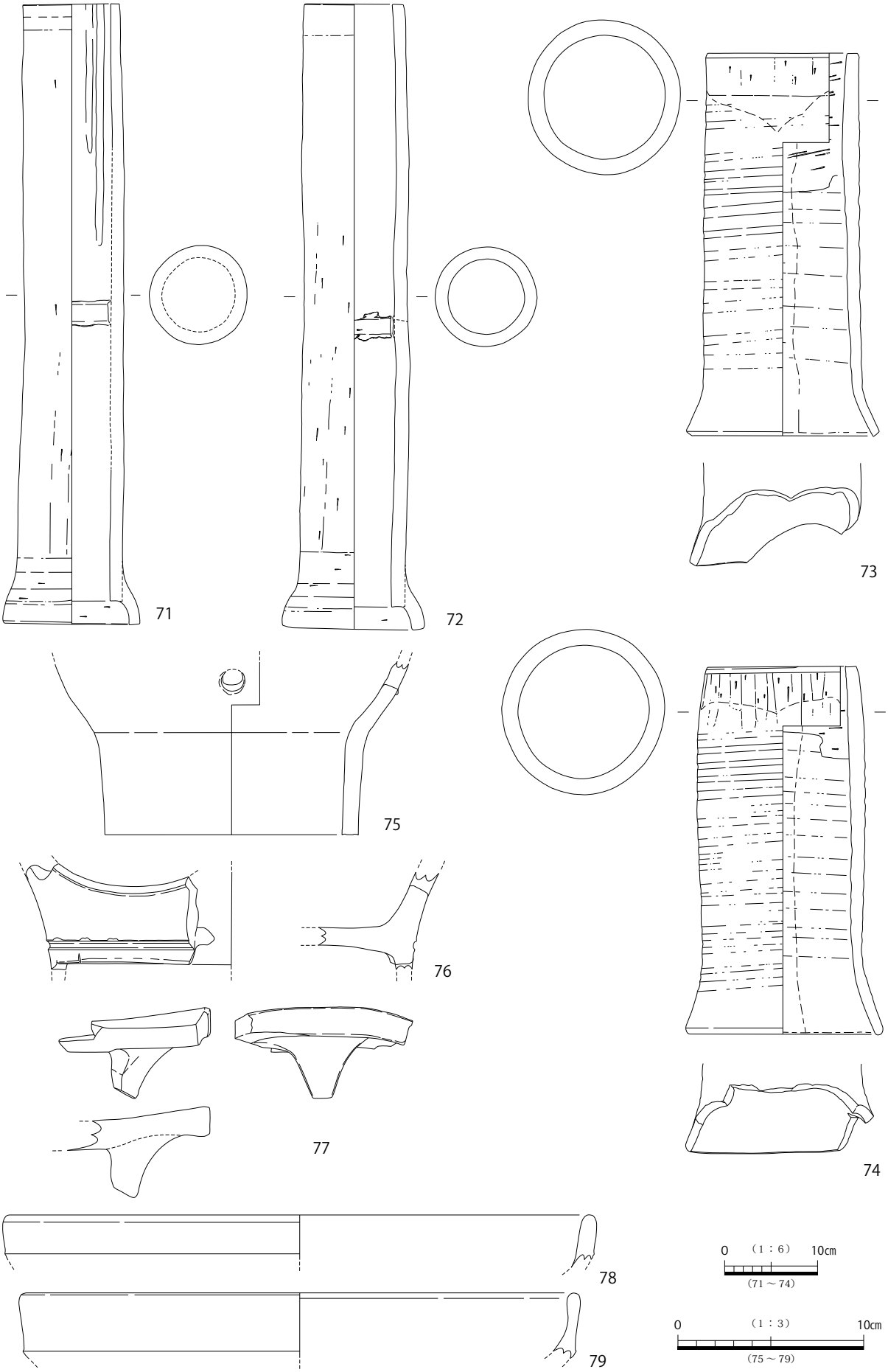
出土地点（土師質土器）

土師質土器の出土地点は，79 が囲炉裏跡の埋土内（３～４期）から出土しているが，その他は造成土から出土した。

３　瓦（第 52 図，図版 28）

（１）燻し瓦

燻し瓦は全体的な量は多くないが，桟瓦を中心に一定量出土している。また４期以降の盛土や造成土からはあまり出土しておらず，釉薬瓦よりも古い時期の所産のものが多いと考えられる。



第 51 図　出土陶器（3）・土師質土器

桟瓦

80 ～ 85 は燻し瓦の右桟瓦である。80 は燻し瓦にしては焼きが良い。破面を見ると一部に煤が付着しているため，破砕後に被熱した可能性がある。81・82 は差込み部で，82 には固定用とみられる釘穴が焼成前に穿孔される。83 は「山に坂」の刻印がみられ，生産者の屋号などを記した可能性がある。表面には光沢砂粒が認められる。84・85 は桟部である。

出土地点（燻し瓦）

80 は B 区北側トレンチの砂鉄置場（２期）を掘り込む盛土（２～３期）から出土し，81 は C 区 1 トレンチの炭置場上面（２期）から出土した。82 は東面石垣外側トレンチの盛土（３～４期）から出土している。その他は 4 期以降の盛土や造成土からの出土である。

（２）釉薬瓦

釉薬瓦はある程度まとまって出土しており，その大半が石見焼の石州瓦である。概ね 19 世紀以降に生産されたと考えられるが，造成土などからも釉薬瓦が出土するため，現代の石州瓦との明確な区別は困難である。

軒丸瓦

86 は軒丸瓦と考えられ，瓦当付近の部位片である。器厚が比較的厚くて重量感があり，しっかりとしたつくりである印象を受ける。外面および内面の瓦当付近には釉薬が施されており，来待釉の可能性が考えられる。

雁振瓦

87 は角桟の雁振瓦の先端部である。雁振瓦は全体的に見てほとんど出土していない。外面と内面の先端部付近は施釉が認められる。来待釉の可能性が高い。

桟瓦

88 ～ 90 は右桟瓦である。88 は概ね全体の大きさが把握できる残存状況の良好な桟瓦で，外面全体に来待釉が施されている。内面は瓦の設置時に外側から見える可能性のある四辺の端部周辺に施釉されている。89・90 は桟瓦の桟部であり，破面に一部煤が付着しているため，破砕後に被熱したと考えられる。

出土地点（釉薬瓦）

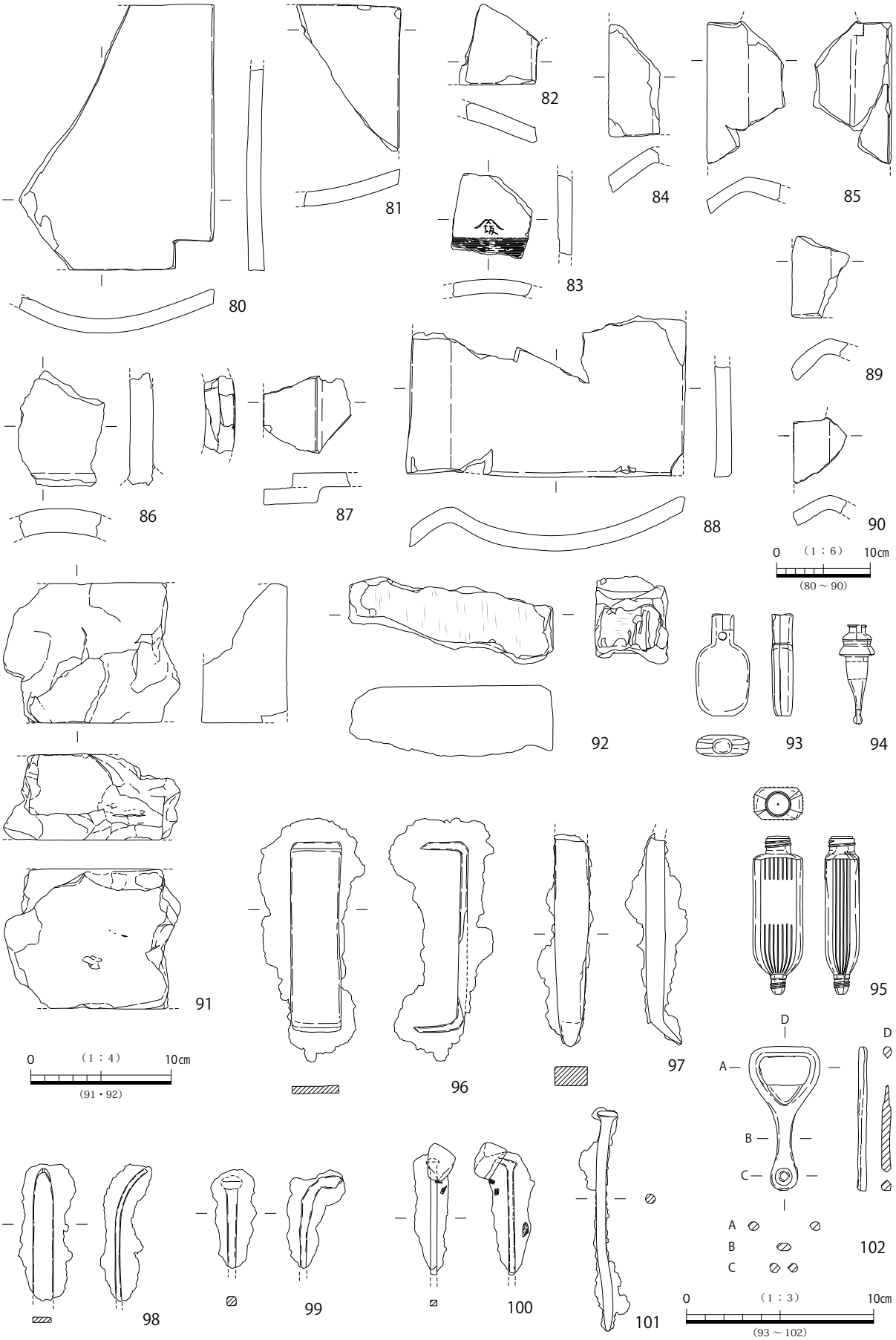
釉薬瓦の桟瓦は，86・87 が東面石垣外側トレンチの盛土（３～４期），89 が A 区跡坪トレンチにおける跡坪埋土（４期），90 が囲炉裏跡上面付近（３・４期）から出土している。88 は造成土からの出土である。

４　その他（第 52・53 図，図版 19・26・28・29）

（１）煉瓦・砥石

煉瓦

91 は煉瓦である。全体的に胎土は明褐色であり，胎土中には１～３mm 大の砂粒がまばらに混じり，良く焼き締まっている。煉瓦の表面は上面のみが被熱している。明治期以降の所産である。



第 52 図　出土瓦・煉瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品

砥石

92 は砥石である。灰白色に近い淡橙色であり，良く焼き締まっている。研ぎ面は平滑になっており，道具の補修などに用いられたと思われる。19 世紀以降の所産の可能性がある。

出土地点（煉瓦・砥石）

煉瓦は出土地点が不明であるが，砥石については 2006 年度跡坪トレンチの底面付近に堆積していた埋土（４期）から出土している。

（２）ガラス瓶

薬瓶

93 は薬瓶である。ガラスは緑色半透明で，胴部には商標などの陽刻（エンボス）は認められないが，頸部には円形の陰刻がみられる。胴部は隅丸方形で，底部は自立できるように平坦面を作出している。明治期以降の所産である。

目薬瓶

94 は目薬瓶の点眼器である。無色透明のガラスで，口縁部は横に肥大してゴム製のスポイトが付属していたと思われる。95 はスポイトと目薬瓶が一体化したもので，ガラスは淡褐色半透明である。胴部には線状の陽刻が表面全体に入れられており，滑り止めの役割を果たしていたと考えられる。また胴部中央には線状の陽刻がみられない長方形のスペースがあるが，商標のシールなどが貼られていたものと推測される。明治期以降の所産であろう。

出土地点（ガラス瓶）

ガラス瓶は，94 が高殿南側の束柱礎石列付近（３・４期）から出土している。93 と 95 は造成土から出土した。

（３）鉄製品

鉄製品については鎹と鉄釘，栓抜きなどを確認している。鎹や鉄釘は錆膨れが激しく，また全体的にあまり出土していない。

鎹

96 ～ 98 は鎹である。96 は幅が広く，両爪が直角である。97 はそれほど幅が広くないが，全体的に長く，両爪はやや角度が浅い屈折である。98 は小型で，両爪は緩やかに屈曲している。

鉄釘

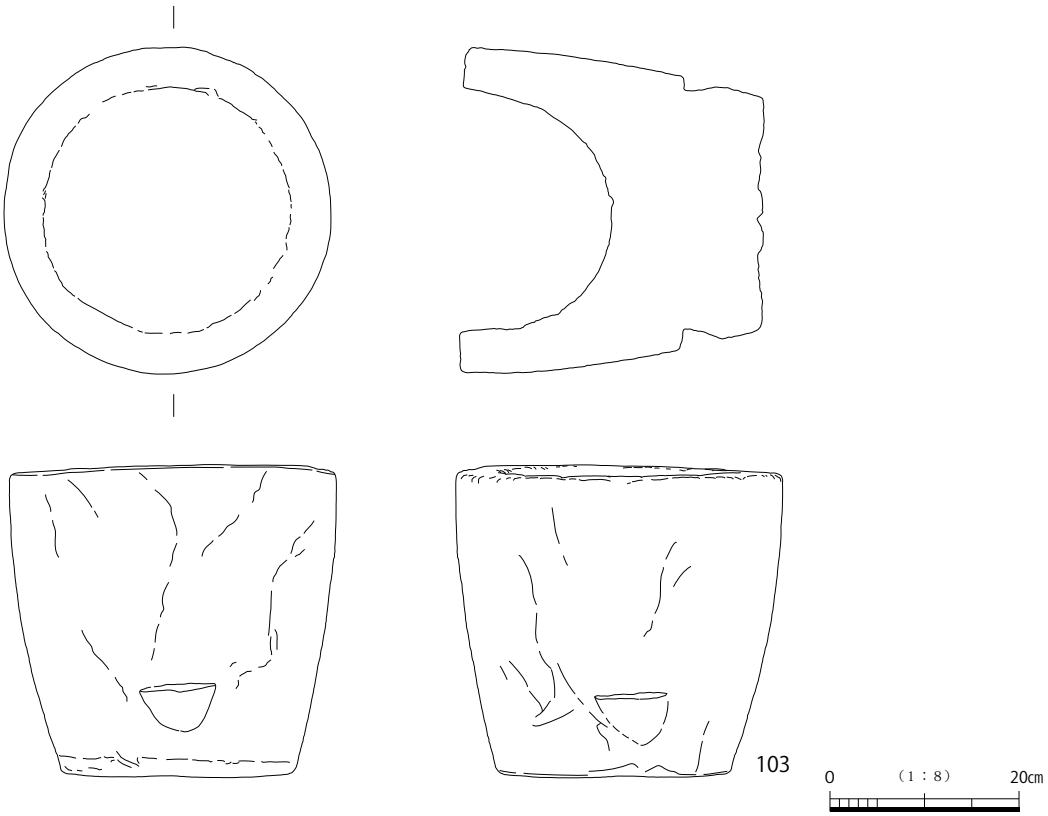
99 ～ 101 は鉄釘である。99 は断面形が方形である。頭部はＬ字型もしくは直角に屈曲する状態である。100 は断面形が方形で，Ｌ字型である可能性が高い。これらは先端部が欠損している。101 は断面形が円形の鉄釘であり，頭部も円形である。

栓抜き

102 は栓抜きで，表面は錆の付着が著しいが，全体的な形状は把握できる。側面には鋳造時に生じたバリが残る。柄部には表裏面ともに文字の表示は認められない。明治期以降の所産であろう。

出土地点（鉄製品）

96 はＡ・Ｂ区東西横断トレンチの２期の操業面を形成する盛土（１～２期）から出土した。97 は，



第 53 図　出土手水鉢

C 区２トレンチの炭置場における炭層付近の石材上面（２期）から確認されている。98 が東面石垣外側トレンチの暗渠施設内埋土（１期）の木炭に混じって出土している。99 は B 区北側トレンチの盛土（２～３期）から出土した。その他は造成土から出土している。

（４）手水鉢

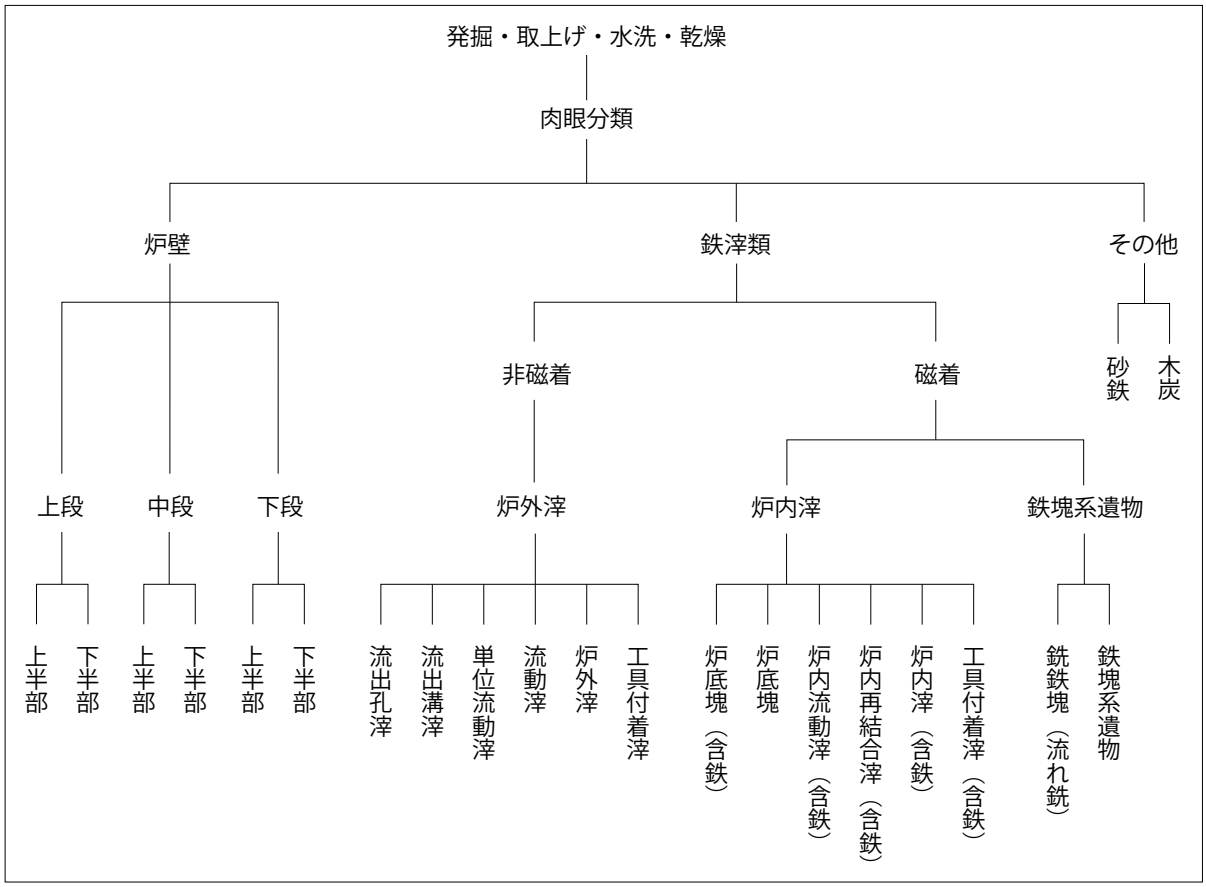
103 は手水鉢である。来待石製と考えられ，口径 34.5cm，底径 24.5cm，高さ約 32cm を測る。底面付近に逆三角形状の窪みが両側に刳り抜かれ，窪みに指を掛けて運搬が可能な形状である。造成土から出土しており，後世の所産の可能性もあるが，高殿に伴う手水鉢であったことも想定される。

５　製鉄関連遺物（第 54 ～ 68 図，第９表，図版 30 ～ 42）

今回の越堂たたら跡の発掘調査では，炉壁や鉄滓類，砂鉄や木炭などの製鉄関連遺物が多く出土し，総計で 1,395.57kg を測る。炉壁や鉄滓類はそれぞれ種類別に分類して整理した[(4)]（第 54 図）。ここでは各種類の代表的な個体について報告し，詳細な観察内容は観察表（第 13 表）に記している。なお，鉄滓類（第 65 図 185・186・188，第 67 図 209）を対象に，金属学的分析を実施した（第５章第４節）。

（１）分類の方法

炉壁や鉄滓類の整理は，肉眼観察で炉壁と鉄滓に大別し，炉壁は上段・中段・下段の各部位およびそれぞれの上半部・下半部に区分した。炉壁の分類は，各部位の形状や特徴，滓部の厚みなどをもとに分類している。そのなかで磁着の反応のあるものは含鉄の炉壁と判断しており，磁着度やメタル度を測定した[(5)]。



第 54 図　製鉄関連遺物の分類図

鉄滓類は，磁着の有無をもとに炉内滓と炉外滓・鉄塊系遺物に大別した。炉外滓は形状や特徴によって流出孔滓，流出溝滓，単位流動滓および流動滓に分類し，工具痕の付着したものは工具付着滓として区分した。その他は炉外滓として一括りに整理した。

炉内滓は，形状や特徴で炉底塊，炉内流動滓，炉内再結合滓，その他の炉内滓に分類しており，一部の炉底塊以外には基本的に磁着が認められる。また，磁着を持つ工具付着滓も炉内滓の分類項目のなかに含めた。

鉄塊系遺物は，磁着度が高く，メタル度がＬまたは特Ｌの反応を示す炉内滓のなかで，その反応が個体全体に認められるものを選定した。そのなかで，形状から銑鉄塊（流れ銑）と判断できるものは区別して報告する。

また炉壁や鉄滓類以外には，砂鉄や木炭などを採取した。採取した砂鉄については，磁鉄鉱の形態分析や化学組成分析を行っている（第５章第２節）。

（２）出土地点の整理

これら炉壁や鉄滓類は種類を分類するとともに，出土地点も同時に整理している。出土地点は，調査区や出土位置，出土層位をもとに分類しており，それをもとに出土地点 No. を設定し，種類別にみた出土地点の重量一覧も同時に掲載した（第９表）。それぞれの出土地点は，越堂鈩操業時期（１～４期）との対応が概ね推定でき，炉壁や鉄滓類の個別報告を行うなかで，出土地点から推定される時期も同時に報告する。

第９表　製鉄関連遺物の出土地点と種類別重量一覧

単位：kg

調査区	出土地点No.	出土場所	出土層位	時期	炉壁						鉄滓類															その他		合計
					上段		中段		下段		炉外滓						炉内滓							鉄塊系遺物				
					上半部	下半部	上半部	下半部	上半部	下半部	流出孔滓	流出溝滓	単位流動滓	流動滓	炉外滓	工具付着滓	炉底塊（含鉄）	炉底塊	炉内流動滓（含鉄）	炉内再結合滓（含鉄）	炉内滓（含鉄）	工具付着滓（含鉄）	鉄鉄塊（流れ鉄）	鉄塊系遺物	砂鉄	木炭	
A区	A-１～４・10～12・18～21	-	盛土～造成土	3～4期			0.19	0.11					0.62	8.90	10.81						1.45	0.03	0.29	0.16		0.02	22.58
	A-５～９13～15	本床	本床埋土	4期									0.85	3.63	3.42				0.19		0.46					0.00	8.55
	A-16・17	西小舟付近	たたら操業面上	3・4期											5.41					0.52	0.03						5.96
	A-22	A区北側tr	たたら操業面付近	2期										0.01													0.01
	A-23～25	A区北側tr	盛土	2～3期	1.38			0.78		3.42			0.06	3.32	14.57	1.21					0.94		0.06				25.74
	A-26・27	床釣り掘形付近	たたら操業面上	3・4期					3.59					0.06	2.27		0.39		0.17	0.14	0.34		0.84			0.06	7.86
	A-28・29	2006年度跡坪tr	跡坪埋土	4期																						0.01	0.01
	A-30	A区跡坪	跡坪埋土	4期						2.20																	2.20
	A-31	高殿石垣付近	盛土～造成土	3～4期											1.81						0.02						1.83
	A-32	-	たたら操業面付近	3・4期											2.44												2.44
	-	-	盛土～造成土？	3～4期		0.14								1.24													1.38
	-	跡坪上	跡坪埋土	4期																						0.03	0.03
	-	2006年度跡坪tr	跡坪埋土	4期																						0.03	0.03
B区	B-１	床釣り	床釣り構築土	2～3期											0.94	0.01					0.09						1.04
	B-２	B区北側tr	礎石上面	2期										0.22	0.92												1.14
	B-３～６・15	A・B区東西横断tr	盛土	2～3期				0.81		1.66				0.74	1.51	0.01				0.08	0.23					0.00	5.04
	B-７・11・19	-	盛土～造成土	3～4期										0.34	1.00						0.56	0.01					1.91
	B-８・９	B区北側tr	盛土	2～3期										0.73	0.47						0.46			0.04		0.03	1.73
	B-10・12	-	盛土	2～3期										0.24	3.78						0.87		0.17			0.01	5.07
	B-13・14・16～18	A・B区東西横断tr	盛土	1～2期		1.49			0.56	1.24	0.29			1.07	2.10						0.07					0.00	6.82
	-	-	盛土～造成土？	不明										0.61	2.36												2.97
	-	-	盛土～造成土？	3～4期																						0.01	0.01
	砂鉄１・４	A・B区東西横断tr	盛土	1～2期																					0.10		0.10
	砂鉄２・３	A・B区東西横断tr	盛土	2～3期																					0.02		0.02
	砂鉄５・６	B区北側tr	砂鉄置場上	2期																					0.02		0.02
	砂鉄７・８	A・B区東西横断tr	盛土	～1期																					0.19		0.19
C区	C-１・２・４～６	C区1tr	盛土～造成土	3～4期					0.07	0.40				0.24	1.03	0.01											1.75
	C-7・20・22	C区1tr	たたら操業面上	2期											0.84	0.03											0.87
	C-23	C区1tr	盛土	2～3期										0.02													0.02
	C-３・８	C区2tr	盛土～造成土	3～4期				0.14						3.71	13.45	0.04			0.95		0.46					0.00	18.75
	C-９	C区2tr	たたら操業面上	2期										0.16	0.36						0.10						0.62
	C-10・11	C区2tr	たたら操業面付近	2期							0.53			0.03	1.73												2.29
	C-12・14・15・19・21	C区2tr	盛土	2～3期			0.83		0.08	1.70				0.89	4.06	0.01			0.27		0.14					0.01	7.99
	C-13・16～18	C区2tr	盛土	1～2期				0.36	0.10					0.05	1.02					0.08		0.02					1.63
	C-24～26	C区2tr	たたら操業面付近	3・4期			0.05							0.90	1.99						0.02						2.96
	C-27・28	押立柱1付近	たたら操業面付近	3・4期										0.03	0.21	0.03								0.21			0.48
	C-29	-	盛土～造成土	3～4期										0.08	1.28						0.05						1.41
	-	C区1tr	盛土（炭置場上）	2～3期																						0.04	0.04
	-	C区1tr	たたら操業面上	2期																						0.07	0.07
	-	C区2tr	礎石上面付近	2期																						0.26	0.26
	-	C区2tr	たたら操業面上	2期																						0.00	0.00
	-	C区2tr	盛土	2～3期																						0.12	0.12
	砂鉄９・11	C区1tr	砂鉄置場上	2期																					0.11		0.11
	砂鉄10	C区1tr	盛土	2～3期																					0.10		0.10
D区	D-１～４・７	-	盛土～造成土	3～4期			0.07		0.17			0.07	0.14	0.81	4.15						0.27						5.68
	D-５・８・９	-	たたら操業面上	3・4期			0.25	0.05	0.29					0.78	3.05	0.04				0.47	0.18						5.11
	D-６	-	たたら操業面付近	3・4期											0.34						0.18						0.52
	D-10・11	A・B区東西横断tr	小舟直上	3期											0.03												0.03
	D-12・13	A・B区東西横断tr	本床釣り床面上	4期			0.62								0.03												0.65
	D-14・15	押立柱2付近	礎石埋土	3・4期											0.58												0.58
	D-16・24	高殿南1tr	盛土～造成土	3～4期		4.54			3.97	8.01				0.09	6.63		0.79	7.18		0.52							31.73
	D-17	高殿南1tr	炭置場上	2期				1.03		1.82				0.08	3.88	0.04					0.20					0.01	7.06
	D-18	高殿南1tr	盛土	2～3期					0.22					0.10													0.32
	D-19	高殿南1tr	たたら操業面上	2期					0.06					0.13	0.12						0.28						0.59
	D-20～23	高殿南1tr	盛土	1～2期					0.36						2.94					0.26	0.07					0.02	3.65
	D-25～27	高殿南2tr	盛土～造成土	3～4期	0.47	2.21	10.89	23.61	37.57	26.98					10.58		2.32	27.52									142.15
	D-28	高殿南2tr	地山直上	2期					0.26						9.58											0.01	9.85
	D-29・30	高殿南2tr	盛土	2～3期	0.33	7.20	11.49	12.04	10.98	7.67					34.32						1.31			0.09			85.43
	D-31	高殿南3tr	盛土	2～3期											6.84	0.01											6.85
	D-32	高殿南3tr	暗渠底面	1期											3.64												3.64
	D-33・35	高殿南4tr	盛土	2～3期		7.08	8.49	11.69	16.24	4.80					48.40		6.31	16.35		0.31	1.17					0.01	120.85
	D-34・36・37・42～44	高殿南4tr	盛土～造成土	3～4期			6.95	3.85	3.44	14.39			0.04	0.98	24.07	0.05		0.65	1.61	0.99	1.54			0.18			58.74
	D-38	高殿南4tr	盛土	3期				0.50						2.40													2.90
	D-39	高殿南4tr	暗渠埋土？	1期											2.57												2.57
	D-40	高殿南4tr	暗渠底面	1期			0.06							0.02	0.45												0.53
	D-41	高殿南4tr	地山上	1期										0.01													0.01
	D-45	2006年度湯溜まりtr	埋土	4期									0.07														0.07
	-	高殿南1tr	礎石上面付近	2期																						0.45	0.45
	-	高殿南1tr	盛土	2～3期																						0.07	0.07
	-	高殿南1tr	盛土	1～2期																						0.02	0.02
	-	高殿南2tr	たたら操業面付近	2期																						0.03	0.03
	砂鉄12	高殿南4tr	盛土～造成土	3～4期																					0.00		0.00
E区	E-１	-	盛土～造成土	3～4期									0.01		0.42						0.10						0.53
F区	F-１・２	押立柱4付近	礎石直上	3・4期			0.01						0.12	0.18		0.01										0.00	0.32
	F-３	押立柱4付近	たたら操業面付近	3・4期									0.03	0.05		0.01											0.09
	F-４	押立柱4付近	盛土～造成土	3～4期					0.16				0.02		0.50						0.36		0.10			0.03	1.17
	F-５	束柱礎石付近	たたら操業面付近	3・4期											1.52											0.02	1.54
	F-６	南面石垣付近	盛土～造成土	3～4期				0.14						0.34	0.30												0.78
	F-７・８・10・11・13～18	高殿南3tr	盛土	2～3期	1.25	6.15	12.72	10.47	10.76	7.23			0.04	6.95	523.44	0.01	2.43	58.30	4.35	3.61	15.71			3.13		0.03	666.58
北面・東面石垣外側	-	北面石垣外側tr	盛土～造成土	4期～																						0.02	0.02
	東外-１・４～６・８	東面石垣外側tr	盛土	1～2期					0.20	2.44				0.05	17.49						0.34						20.52
	東外-２・３	東面石垣外側tr	暗渠埋土	1期					0.01						0.98					0.02						7.60	8.61
	東外-７・９・10	東面石垣外側tr	盛土～造成土	3～4期					0.88				0.01	0.41	5.16			0.11									6.57
	-	東面石垣外側tr	盛土	3～4期																						0.10	0.10
	-	東面石垣外側tr	盛土	1～2期																						0.00	0.00
	-	東側石垣外側tr	暗渠埋土	1期																						0.02	0.02
	-	東面石垣外側tr	暗渠内埋土	1期																						0.34	0.34
	-	東面石垣外側tr	盛土～造成土	3～4期																						0.09	0.09
	砂鉄13・17・18	東面石垣外側tr	高殿石垣床面直上	2期																					0.14		0.14
	砂鉄14～16	東面石垣外側tr	盛土	3～4期																					0.94	0.04	0.98
その他	-	-	盛土～造成土	3～4期		0.36								0.39	0.80												1.55
	-	-	不明	不明		3.63	3.51	0.77	1.72	0.71				1.23	37.83	0.06			0.27	1.60	0.03					0.03	51.39
合計					3.43	32.80	56.13	66.35	91.69	84.67	0.82	0.07	2.01	42.22	830.42	1.58	12.24	110.11	7.81	8.60	28.03	0.06	1.46	3.81	1.62	9.64	1395.57

※0.00は10g以下の重量を示す

（3）炉壁

上段上半部

104 は炉壁の上段上半部片である。両面ともに一部に煤が付着して被熱痕跡があり，成形当時の壁面が残存している可能性がある。その部分の厚みは最大で約 10cm 程度である。

上段下半部

105 ～ 108 は炉壁の上段下半部片であり，105 と 108 はコーナー部と考えられる。これらの滓部表面には砂鉄焼結が認められる。滓部は全体的に薄い。

中段上半部

109 ～ 111 は炉壁の中段上半部片であると考えられる。110 は上部に砂鉄焼結が認められ，中央部には木炭痕跡が明瞭に残る。111 は含鉄の炉壁で磁着度が３，メタル度は H である。

中段下半部

112 ～ 117 は炉壁の中段下半部である。114 はコーナー部で，比較的しっかりと屈曲する。116 は木炭などの再結合部分が認められる。113，115，117 は含鉄の炉壁で，113 は磁着度が３でメタル度は H，115 は磁着度が６でメタル度は M，117 は磁着度が３でメタル度は L である。

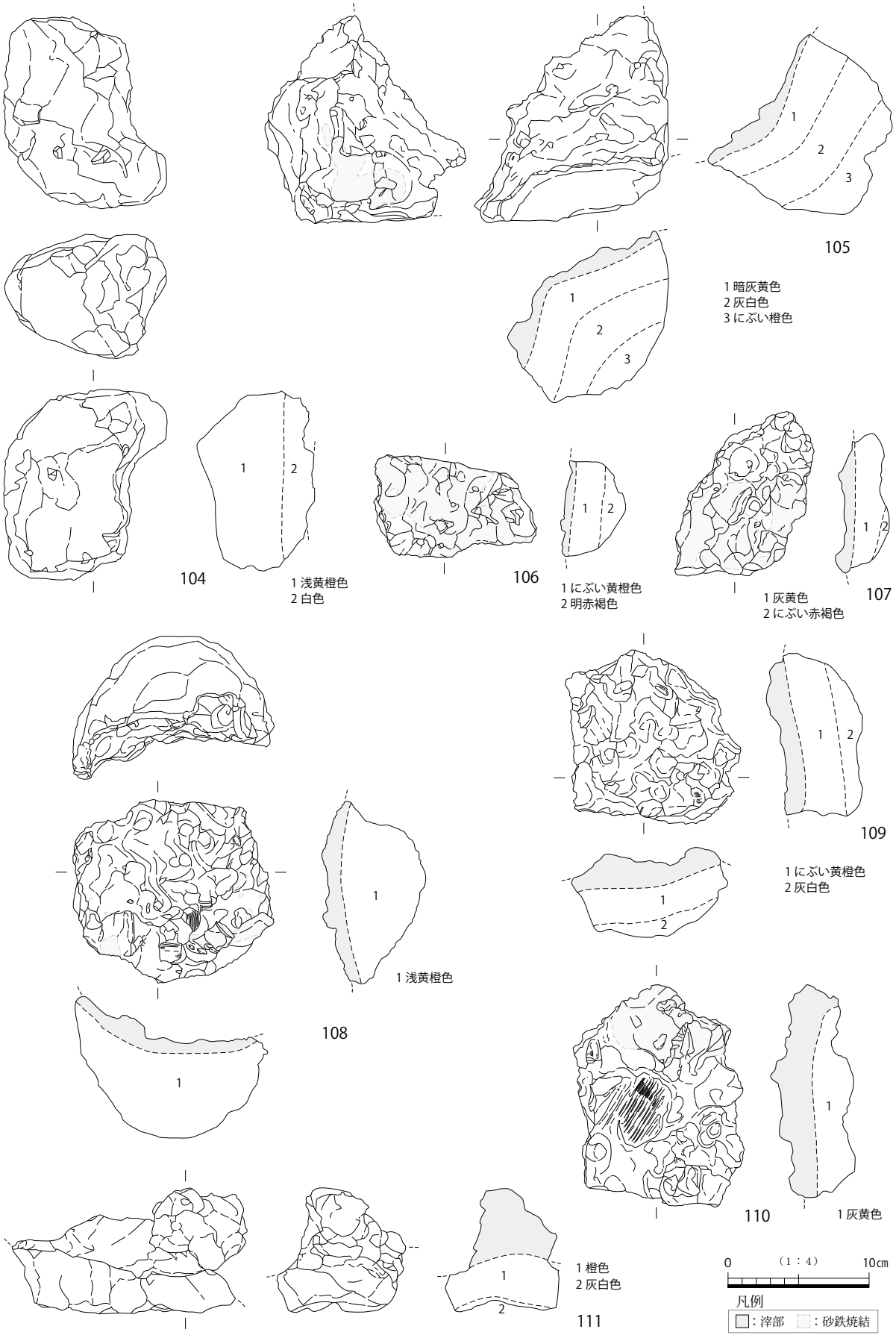
下段上半部

118 ～ 130 が炉壁の下段上半部で，118 ～ 124・127 ～ 130 に通風孔が認められ，その多くが炉の長軸側の部位であったと考えられる。通風孔は，129 にみられるように滓部の孔先付近では円形に近くなるため，断面円形の棒状工具を差し込んで通風孔が設けられていると推測される。また 129 は棒状工具の差し込まれた角度が概ね推測できる。孔先付近は，124 や 130 において長軸方向で４～５cm 程度に復元できる楕円形の通風孔がある一方，全体的には小型の直径２cm 程度で円形の通風孔が目立ち，121・122・127 で確認できるように，小型の通風孔は孔先が滓部で閉じられているものが多い傾向にある。通風孔の中心間の距離は，118･121･123 で約 15 ～ 16cm 前後を測り，概ね 15 ～ 16cm 前後の間隔で水平に通風孔が設けられたと思われる。その一方で，128 の通風孔は左右が約 15 ～ 16cm の間隔に加えて，上下に８cm 程度の高低差があり，通風孔が 15 ～ 16cm 程度の間隔を空けながらも，上下約８cm の高低差を持って孔が設けられた可能性が想定される。また 130 も通風孔間の距離は上下に８cm 程度の高低差が認められる。

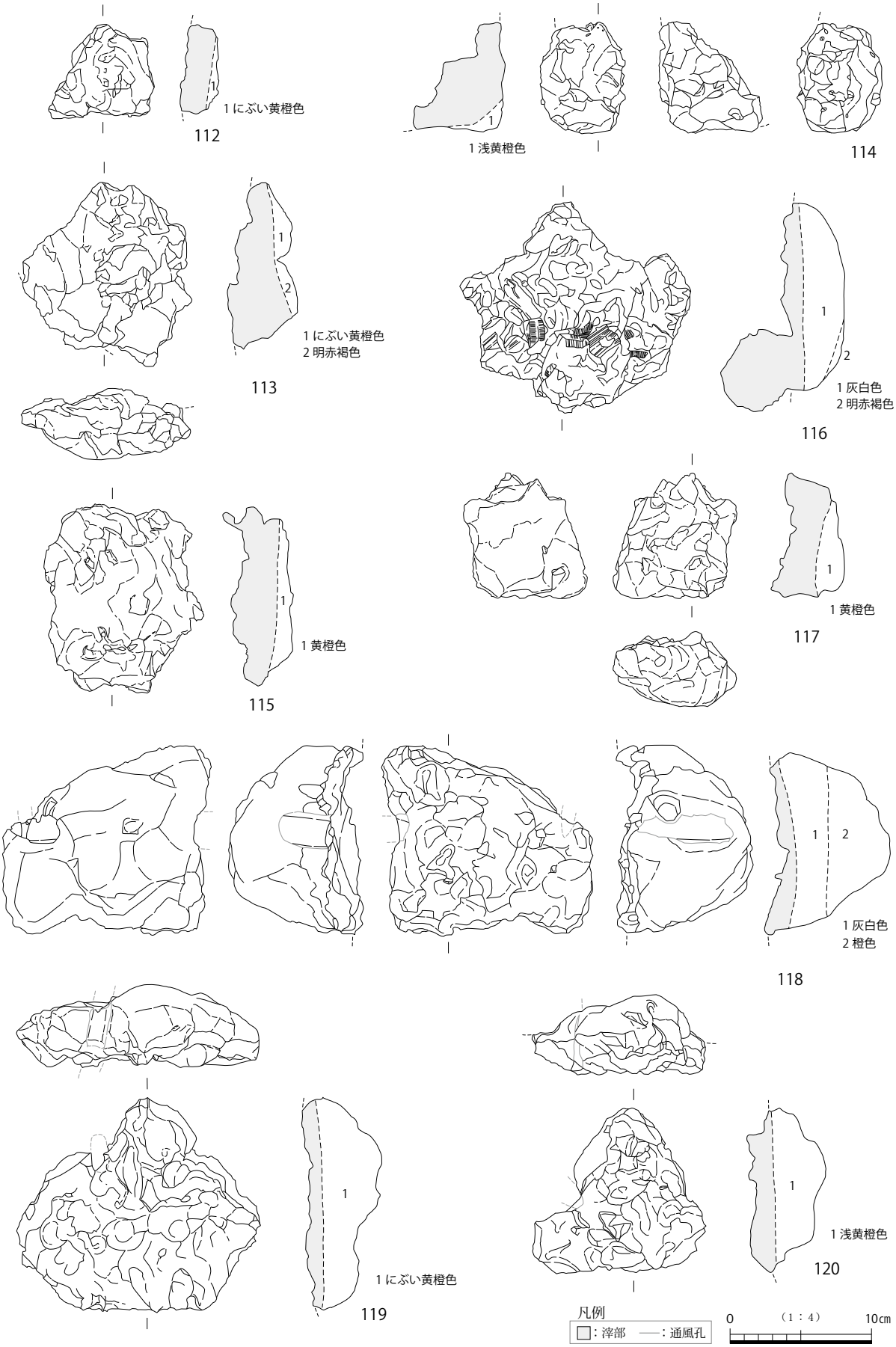
125・126 は含鉄の炉壁であり，125 は再結合した木炭が滓部に付着する。125 は磁着度が４，メタル度は L で，126 は磁着度が３，メタル度は L である。これらは通風孔が認められないため，炉の短軸側の破片である可能性が考えられる。

下段下半部

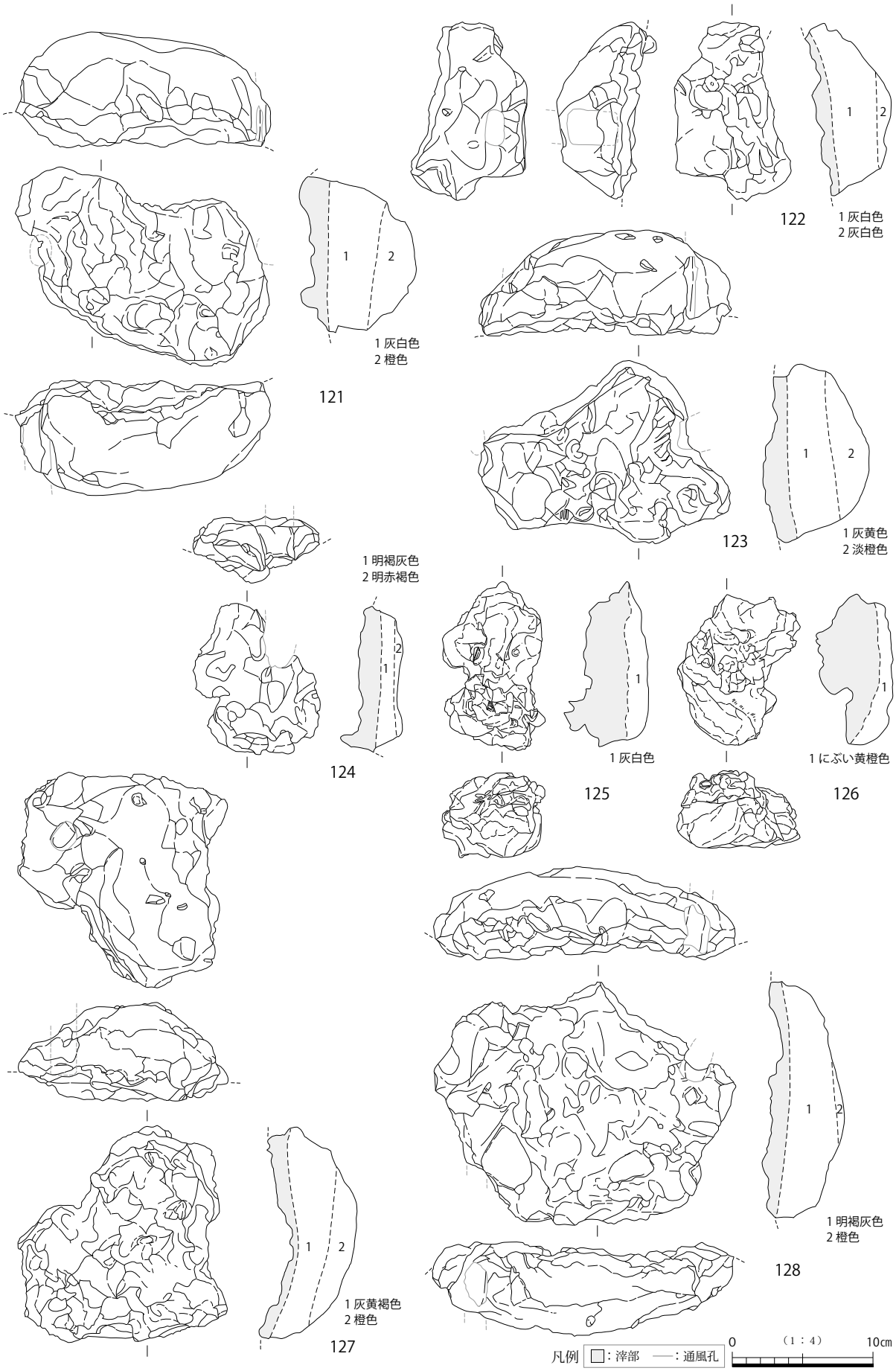
131 ～ 140 は炉壁の下段下半部である。131・132・135・138 は滓部が基底部付近で炉壁側に湾曲して入り込んでおり，132・135 には炉の基底面が明瞭に認められる。136，140 は下段下半部にあったとみられる楕円形の流出孔が付属する。これらは流出孔が付く炉の短軸側の部位と想定され，流出孔の幅は約 10cm 程度である。137 は下段上半部から下半部にかけての破片である。下面は滓部が炉壁側に入り込んでおり，基底面あるいは基底面に近い炉の粘土単位の接合面であると思われる。



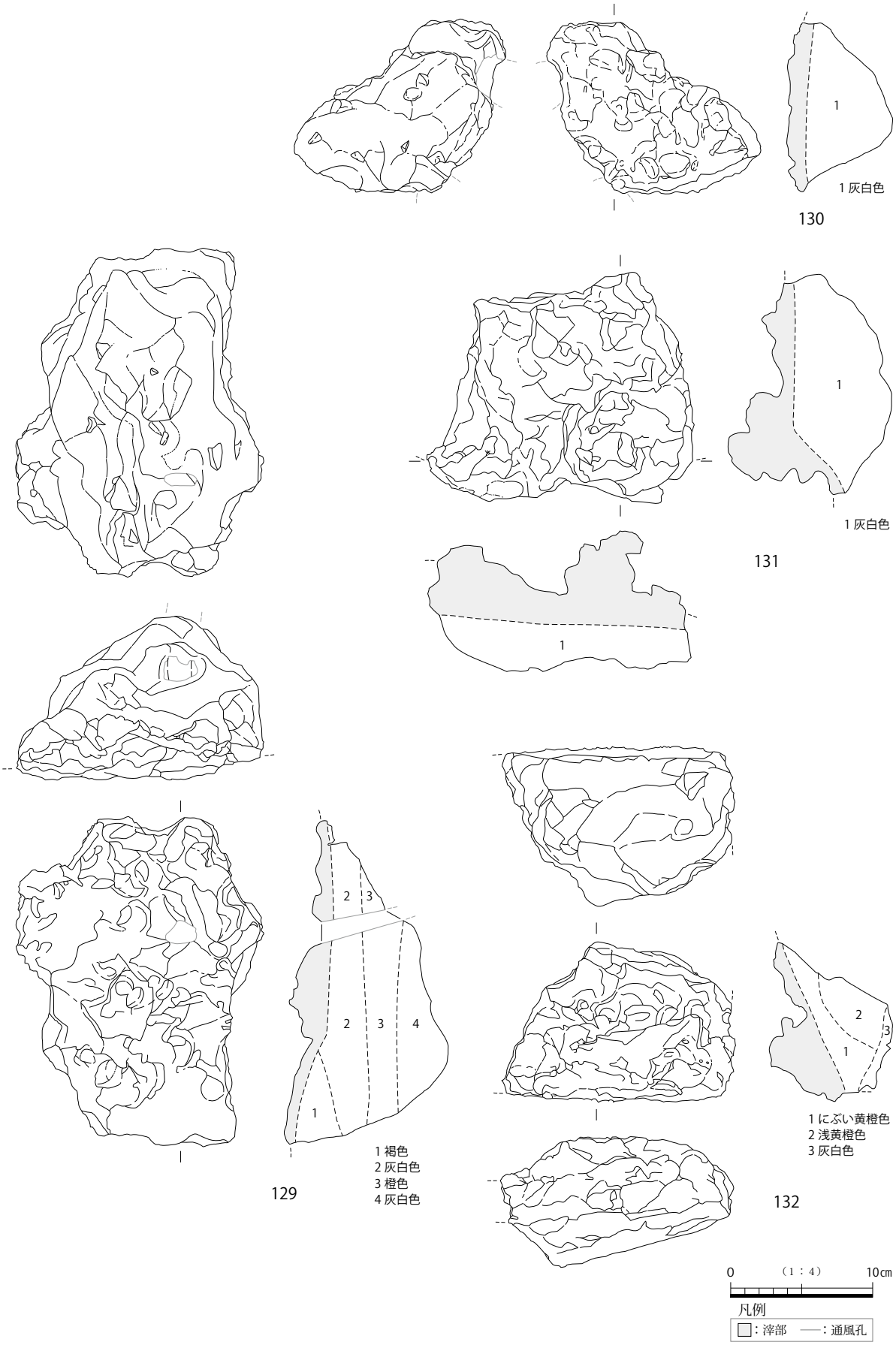
第 55 図　出土炉壁（1）（上段・中段）



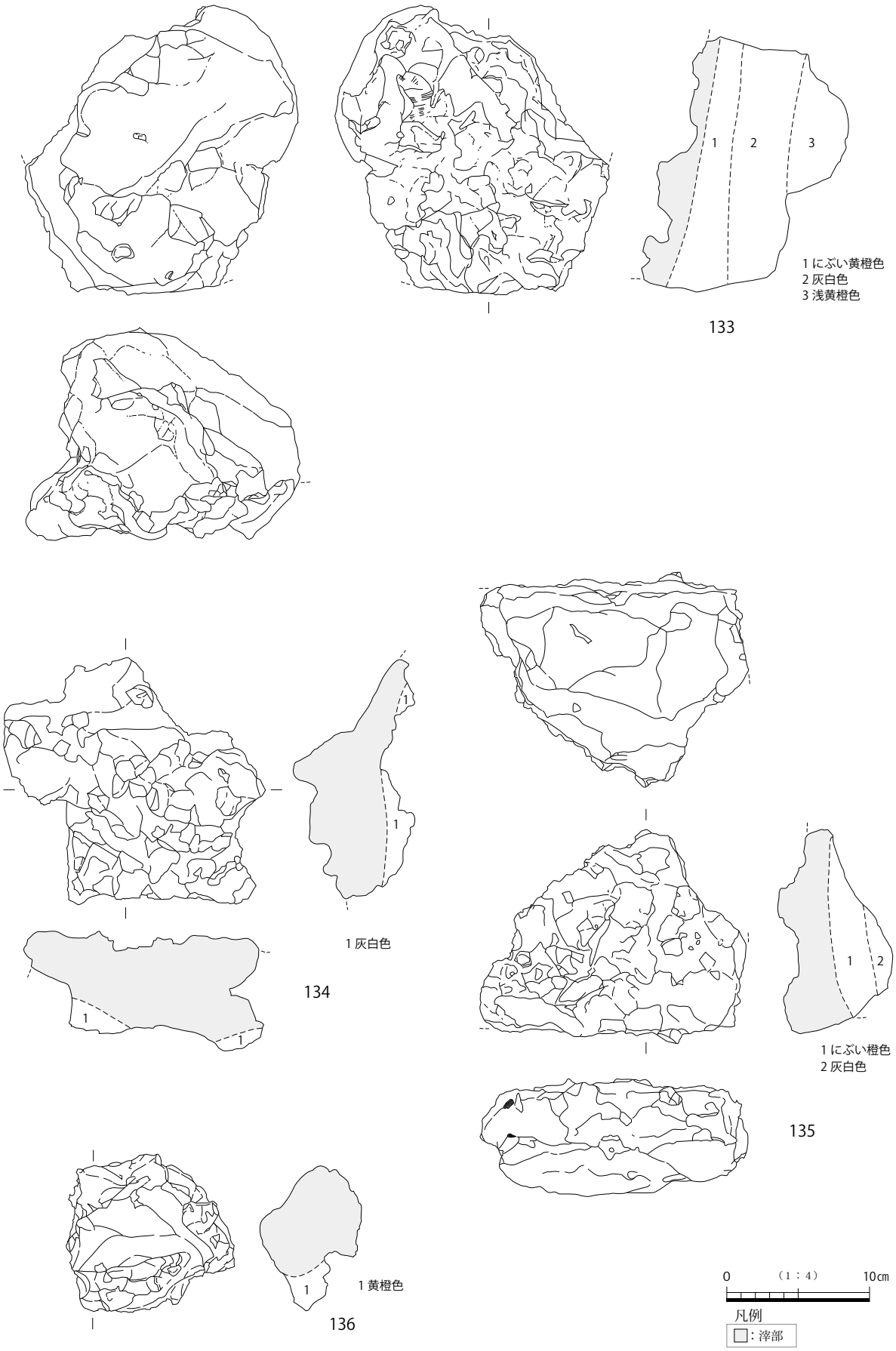
第 56 図　出土炉壁（２）（中段・下段）



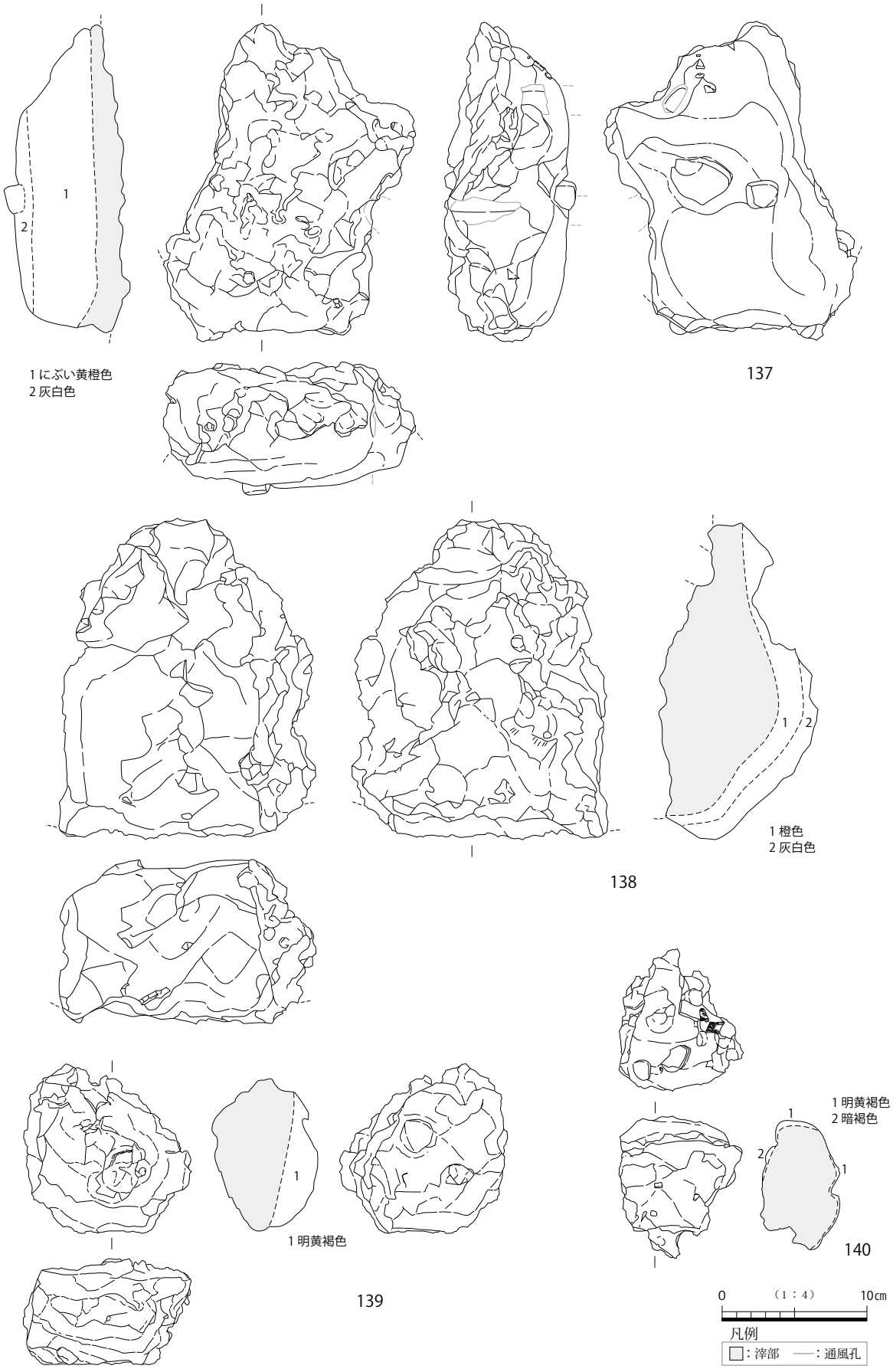
第 57 図　出土炉壁（3）（下段）



第 58 図　出土炉壁（4）（下段）



第 59 図　出土炉壁（5）（下段）



第 60 図　出土炉壁（6）（下段）

上半部には通風孔が２箇所残り，滓部で閉じられている。下面が基底面である場合，上側の通風孔までは約 16cm，下側の通風孔までは約８cm を測り，通風孔同士の上下の高さは約８cm 間隔の高低差があることになる。なお，通風孔は滓部の左側には認められないことから，炉のコーナー部に近い長軸側の部位である可能性が考えられる。138 の上部付近における滓部は斜め上方向から貫入された工具の痕跡が認められるため，コーナー部に近い炉の長軸側の部位と判断される。

134・139 は含鉄の炉壁で，134 は滓部に再結合した木炭が認められる。134 は磁着度が１，メタル度はＭであり，139 は磁着度が３，メタル度はＬである。

出土地点（炉壁）

炉壁の出土地点については，第９表および観察表（第 13 表）で詳細な出土地点の情報を示しており，ここでは出土地点から想定される越堂鈩の操業時期（１～４期）を整理して報告する。

炉壁のなかで，１～２期と考えられる盛土から出土したのは，炉壁上段の下半部（105），炉壁下段の下半部（131・132）である。

２期の炭置場上面からは，炉壁中段の下半部（112・114）が出土した。２～３期の盛土からは，炉壁上段の上半部・下半部（104・106），炉壁中段の上半部・下半部（109・113・115），炉壁下段の上半部（118 ～ 122）が出土しており，123 は正確な出土地点は不明だが，121 と通風孔の特徴が類似し，２～３期の可能性がある。炉壁下段の下半部（133 ～ 136）もこの時期の盛土から出土している。

３～４期の炉壁は，盛土から造成土にかけて出土しており，炉壁上段の下半部（107・108）が認められるが，107 の正確な出土場所は不明である。炉壁の中段上半部（110・111）・下半部（116・117），炉壁の下段上半部（124・125 ～ 130），そして下半部（137 ～ 139）が出土している。140 の正確な出土場所は不明であるが，この時期の所産の可能性がある。

（４）鉄滓類① 炉外滓

流出孔滓

141・142 は流出孔滓である。炉外へ流出するなかで流出孔の内部で固まったと考えられる。141 は孔の形状の残りが良く，幅が６cm 程度，高さが想定で５cm ほどの楕円形の孔が復元でき，下面には孔底面に伴う土砂が付着する。142 は孔の幅が 10cm 程度と考えられる。上面には炉壁が一部に付着するが，滓の先端は破面ではなく固化した状態を保っており，炉内で炉壁の一部を含み込みながら炉外に流出したと考えられる。

流出溝滓

143・144 は流出溝滓と考えられる。溝内を流動する流れ皺が上面に明瞭に残る。半円状の溝で３分の１程度の形状が滓として確認され，概ね８～ 10cm ほどの幅を持つ溝が復元できる。144 は中空で，内面の表面は比較的平滑である。上面に流れ皺が確認でき，下面には溝底部に伴う土砂が付着する。約５cm の幅を持つ溝内で固まったと思われる。

単位流動滓

145 ～ 151 は単位流動滓である。148 は比較的幅が広い。150 は先端が固まっており，流動先端部であったことが分かる。

流動滓

152 ～ 157 は流動滓である。153 は下面が半円状で幅が６cm 程度であり，流出溝滓の可能性もあるが，小片で厚みがないため，ここでは流動滓として報告する。155・156 の下面には土砂が付着する。157 は側面から底面にかけて丸みを帯びるため，窪みなどに流れ込んで固まったと考えられる。

炉外滓

158 ～ 164 は炉外滓で，炉外周辺で固まった鉄滓と判断される。158 は側面から底面に土砂が付着し，溝または直線的な窪みの側面で固化したと思われる。159 は表面に工具痕が付着する。その痕跡から，断面方形で若干湾曲した工具が想定される。160 ～ 164 は，側面から底面にかけて椀形の形状をしており，円形状の窪みの部分で固着した鉄滓と考えられる。そのなかで 161・162 は大型の円形状であり，炉内からの流出後に湯溜まりで固まったことが想定される。163 は断面楕円形の棒状工具の痕跡が残る。工具痕から最大で幅３cm 程度の棒状工具であったと推測できる。

工具付着滓

165 ～ 169 は工具付着滓である。いずれも小片のため正確ではないが，断面形が円形もしくは楕円形で幅が概ね２～３cm 程度の棒状工具に付着したと考えられる。

出土地点（鉄滓類①炉外滓）

鉄滓類の炉外滓の出土地点も炉壁と同じく，第９表で示した出土地点 No. と観察表（第 13 表）で詳細な出土地点の情報を報告しており，ここでは，その内容を踏まえて出土地点を時期別に整理する。

１～２期の盛土からは，流出孔滓と流動滓（141・152）が確認され，２期の砂鉄置場上面や炭置場上面，操業面付近では，流出孔滓・流動滓（142・153）のほか，工具付着滓（165・166）が出土した。

２～３期の盛土からは，流出溝滓（143）と単位流動滓（145・147），流動滓（154・155）が出土し，炉外滓（158 ～ 163）や工具付着滓（167）も確認されている。

３・４期の操業面上では工具付着滓（169），３～４期の盛土から造成土では流出溝滓（144），単位流動滓（146・148），流動滓（156），炉外滓（164），工具付着滓（168）が出土した。４期の本床埋土から単位流動滓（149）と流動滓（157），湯溜まり埋土から単位流動滓（150・151）が認められる。

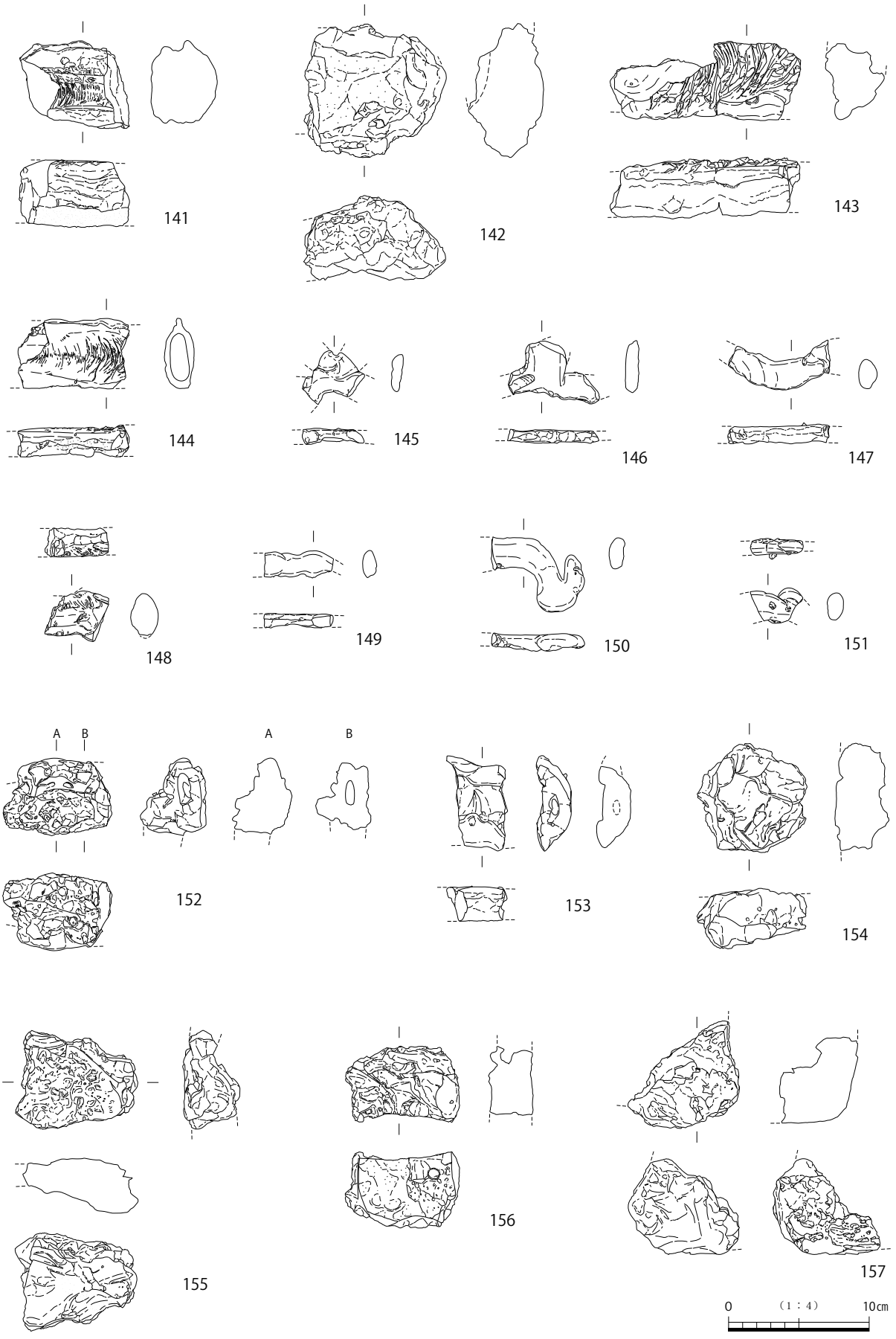
（５）鉄滓類② 炉内滓

炉底塊（含鉄）・炉底塊

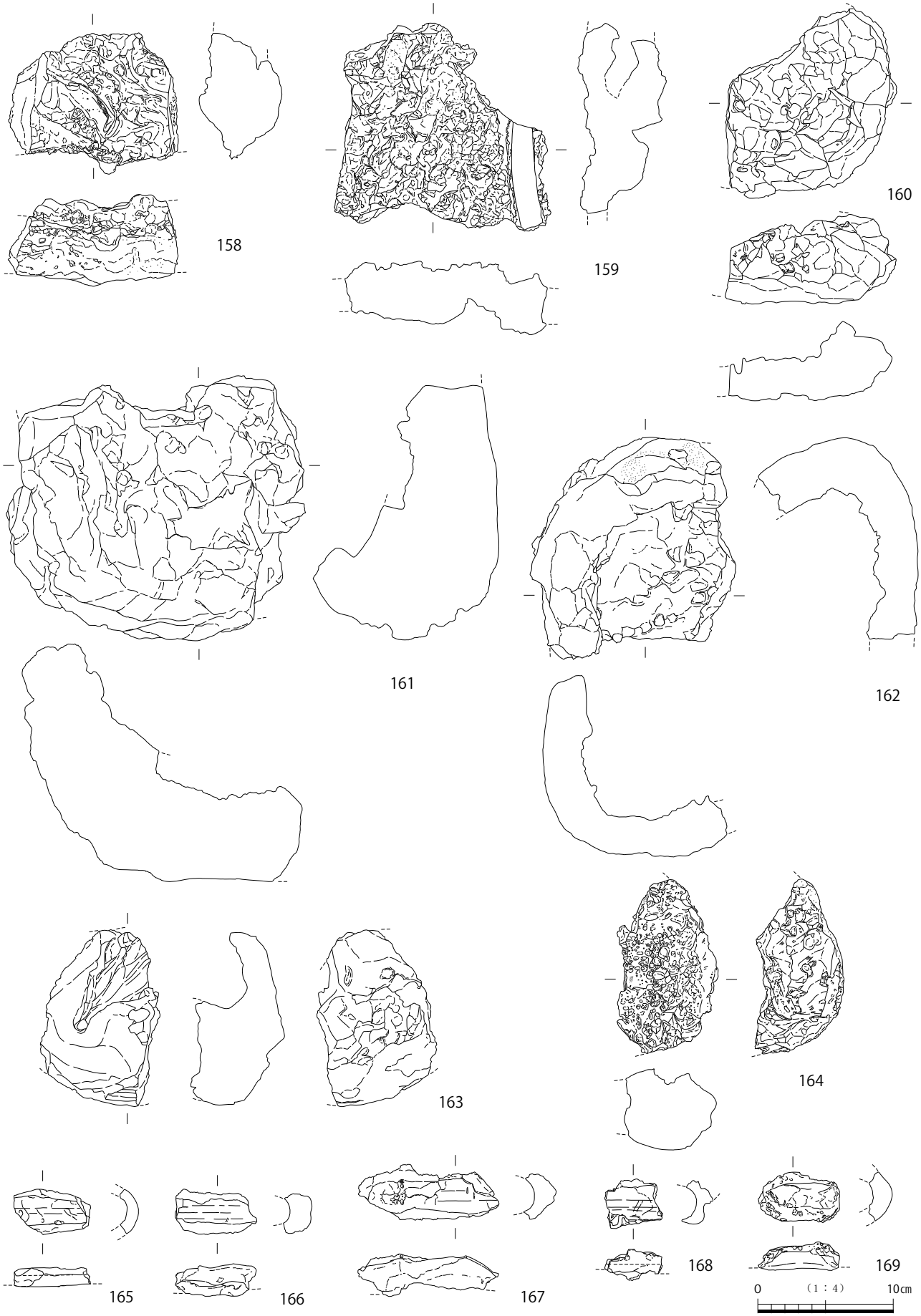
170 ～ 176 は炉底塊である。このうち，170 ～ 173 は含鉄の炉底塊である。170 は磁着度が３でメタル度 H，171 は磁着度が４でメタル度が M，172 は磁着度２でメタル度が H であり，173 は磁着度が６でメタル度が M と磁着度が高く，重量感がある。170・172 は，木炭が再結合して付着する。174 ～ 176 は大型の炉底塊で，いずれも炉内の壁面付近で固まったものと考えられる。

炉内流動滓（含鉄）

177 ～ 180 は炉内流動滓と判断した。いずれも含鉄で，177 は磁着度４でメタル度が M，178 は磁着度３であるがメタル度はない。179 は磁着度５でメタル度は M，180 は磁着度が４でメタル度は H である。177・179 には炉壁や木炭が付着する。178 は下面が平坦で全体的に土砂の付着が認められ，炉床や壁面に近い位置で固化したと思われる。



第 61 図　出土鉄滓類（1）（炉外滓）



第 62 図　出土鉄滓類（２）（炉外滓）

炉内再結合滓（含鉄）

181 ～ 184 は炉内再結合滓である。181 は磁着度４，182 は磁着度が３，183・184 は磁着度２であり，メタル度はいずれも H である。181・183 は炉壁や再結合した木炭が付着したとみられ，184 は全体的に微細な木炭片が再結合して白色の土砂が付着する。182 には炉壁が全体的に付着するほかに，釉薬瓦の破片が結合している点が注目される。越堂鈩の操業時期に高殿や周辺建物の一部などに釉薬瓦が用いられていた可能性を示唆する。

炉内滓（含鉄）

185 ～ 203 は炉内滓である。炉内滓のうち 185・186・188 は金属学的分析を実施しており（分析 No.KED- ２～４），第５章第４節にてその分析成果が報告されている。メタル度が L を示した炉内滓は 185 ～ 187，189 ～ 191，193 ～ 195，198・200・203 であり，このうち 190・191・194 が磁着度７で高い値を示した。その他の炉内滓の磁着度は２～６に収まる。なお 188 は磁着度８でメタル度が特 L を測り，かなり高い値を示す。炉壁や炉床の接地面が確認でき，これらに近い位置で沈着した鉄分が付着したと考えられる。

187・189 は細かい土砂が表面にまばらに付着する。192 ～ 194 はやや平坦な下面に土砂が付着し，炉床に近い位置で固まったと思われる。195 の上面に工具付着痕が認められるが，工具付着痕の上に滓部が重なるため，工具付着滓が再結合した可能性がある。198 ～ 203 は塊状の炉内滓で，199 は板状になっているため，溝内を流れた銑鉄塊（流れ銑）の可能性があるが，磁着度やメタル度の反応が全面的ではないため，含鉄の炉内滓に分類した。200 は炉壁が付着し，木炭が再結合したと考えられ，下面の形状が椀形に近い。201・202 は本床内で見つかり，全面的に木炭が付着する。

工具付着滓（含鉄）

204 ～ 206 は含鉄の工具付着滓である。いずれも磁着度は２で，204 がメタル度 H であるが，その他はメタル度の反応は認められなかった。204・206 は概ね２～３cm 程度の幅の円形または楕円形の断面形状を持つ棒状工具の痕跡であると思われるが，205 はそれよりも一回り大きく，最大で４～５cm ほどの幅を持つ棒状工具痕の可能性がある。

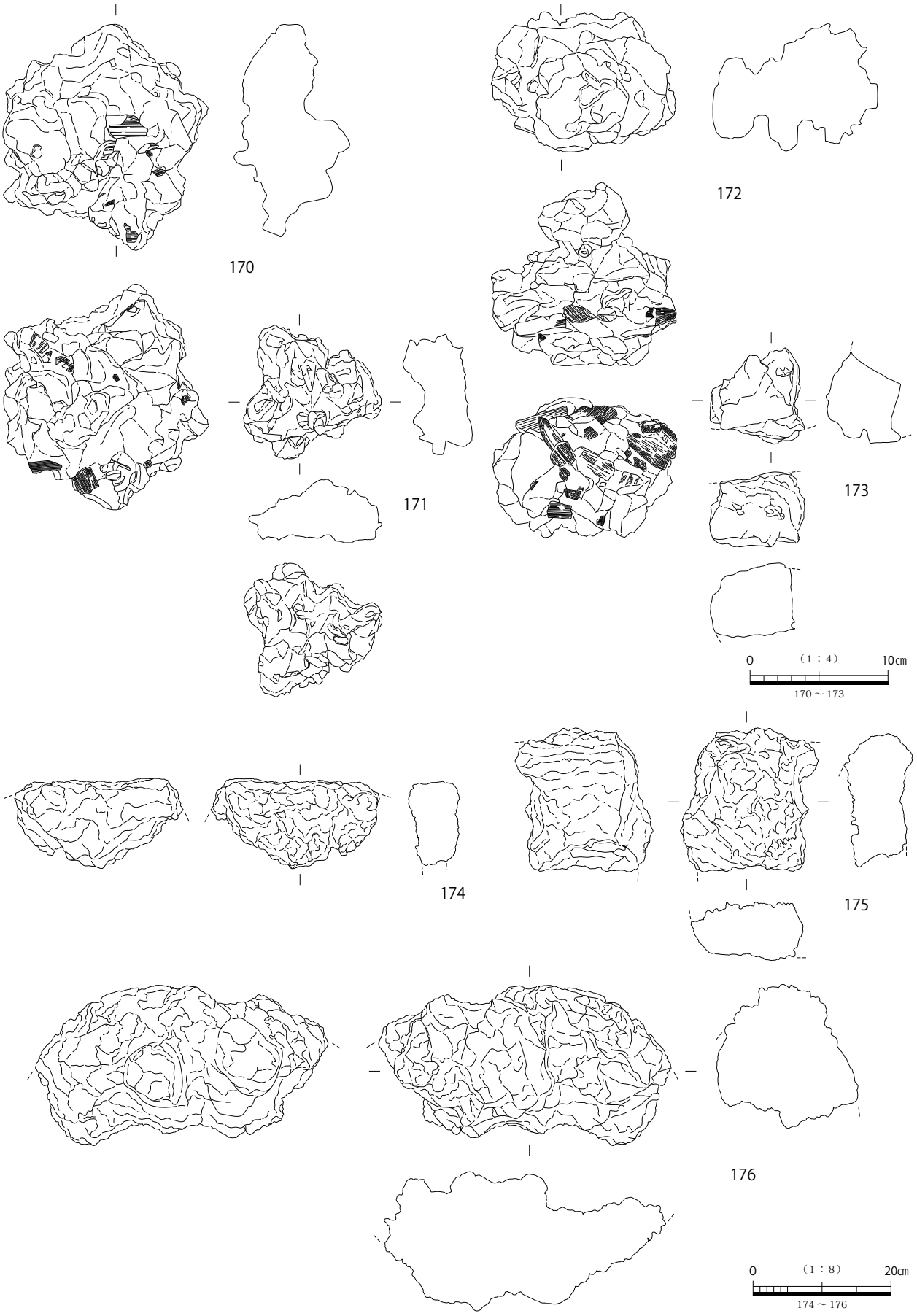
出土地点（鉄滓類②炉内滓）

鉄滓類の炉内滓についても，炉壁や炉外滓と同様に，第９表と観察表（第 13 表）で詳細な出土地点の情報をまとめている。ここでは，出土地点を時期別に整理して報告する。

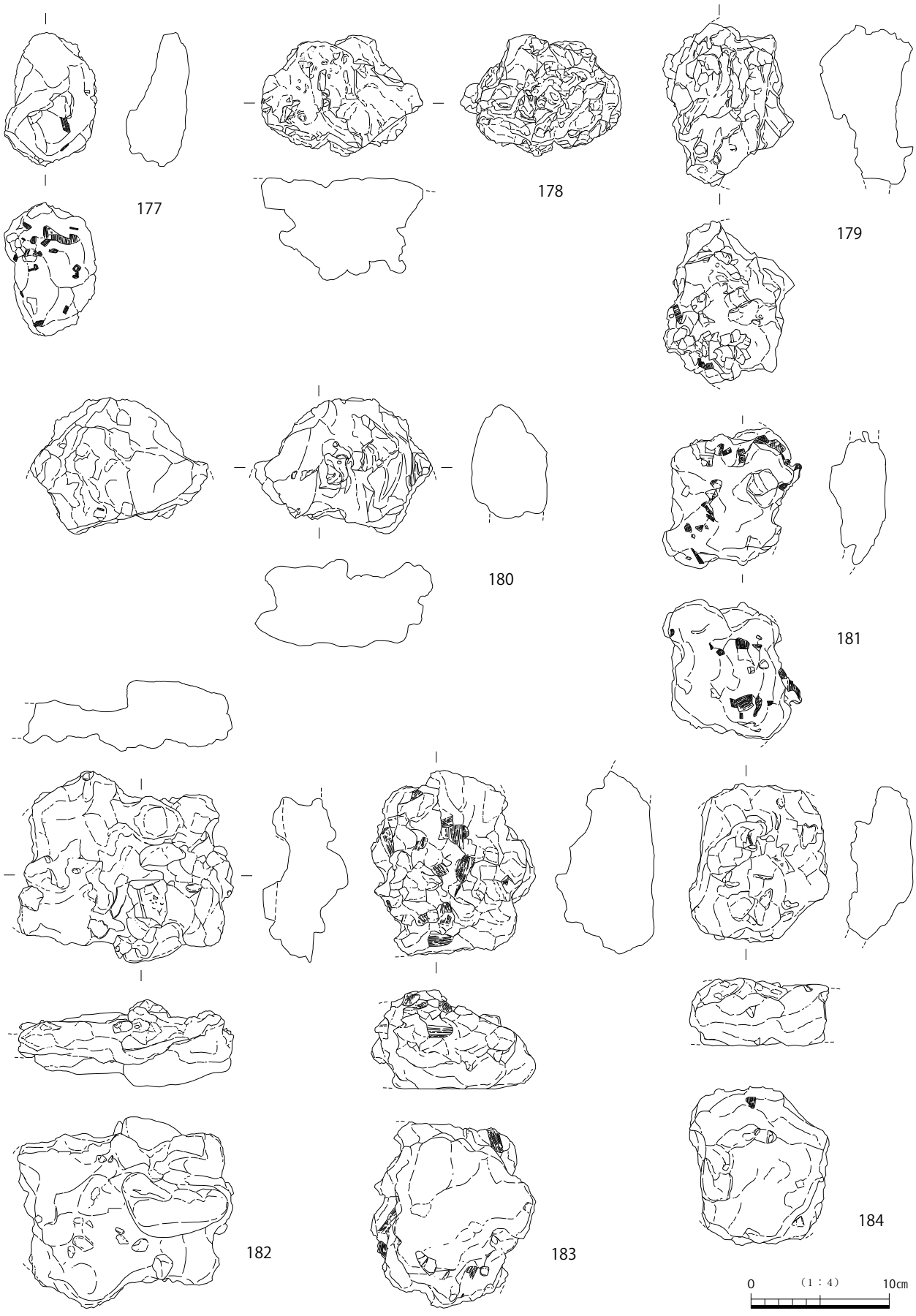
１～２期の盛土からの出土は，含鉄の炉内滓（185）と工具付着滓（204）が認められ，２期の操業面からは炉内滓（186）が出土している。

２～３期は盛土からの出土が多く，含鉄の炉底塊（170・171），炉内流動滓（177・178），炉内再結合滓（181 ～ 183），炉内滓（187 ～ 197）が確認された。

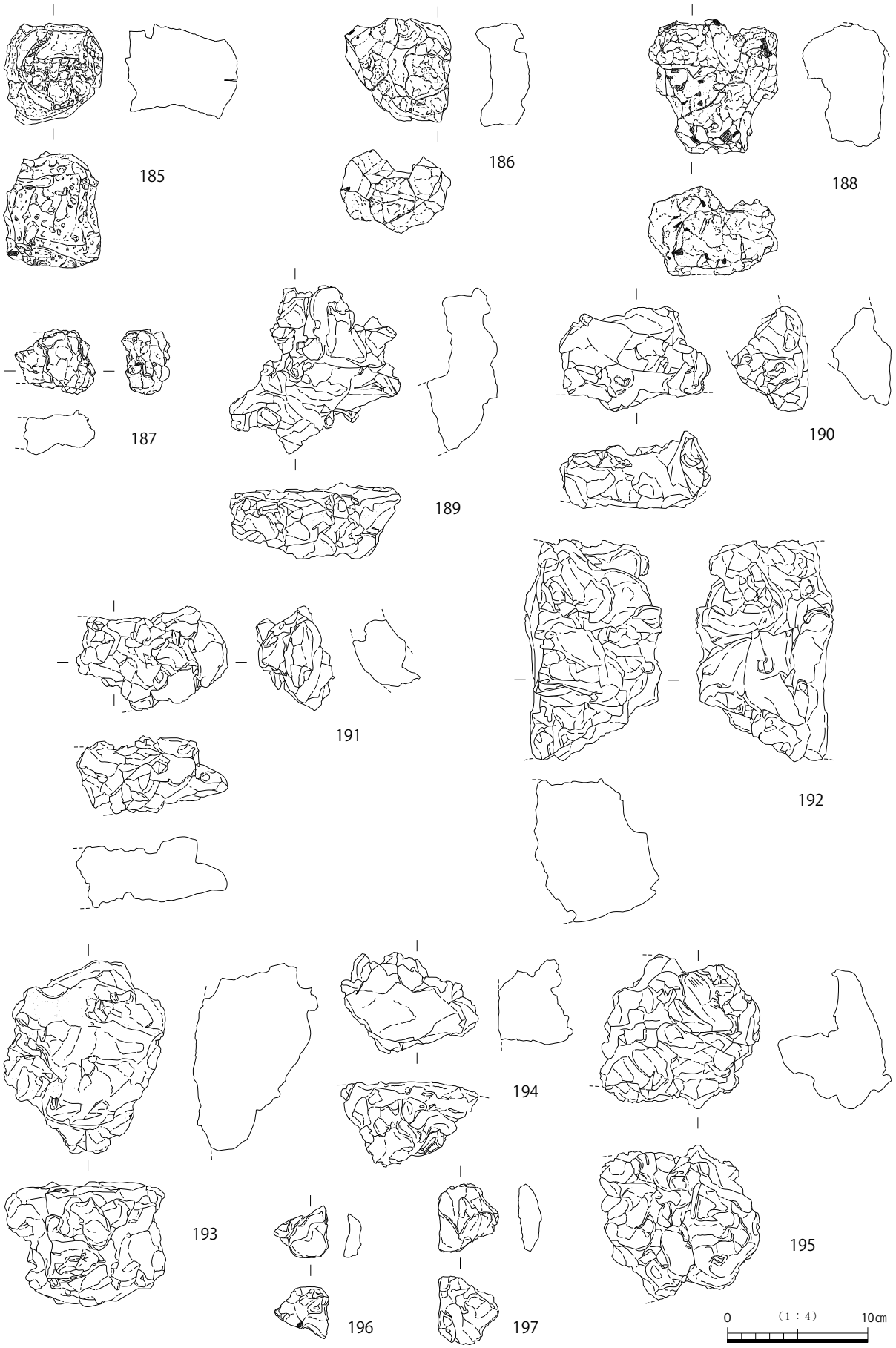
３～４期の操業面上からは，含鉄の炉底塊（173）と炉内再結合滓（184）が出土した。３～４期の盛土から造成土にかけては，炉底塊（174 ～ 176）と含鉄の炉底塊（172），炉内流動滓（179・180），炉内滓（198 ～ 200），工具付着滓（205・206）が出土した。工具付着滓である 203 の正確な出土地点は不明である。４期の本床埋土から炉内滓（201・202）が確認されている。



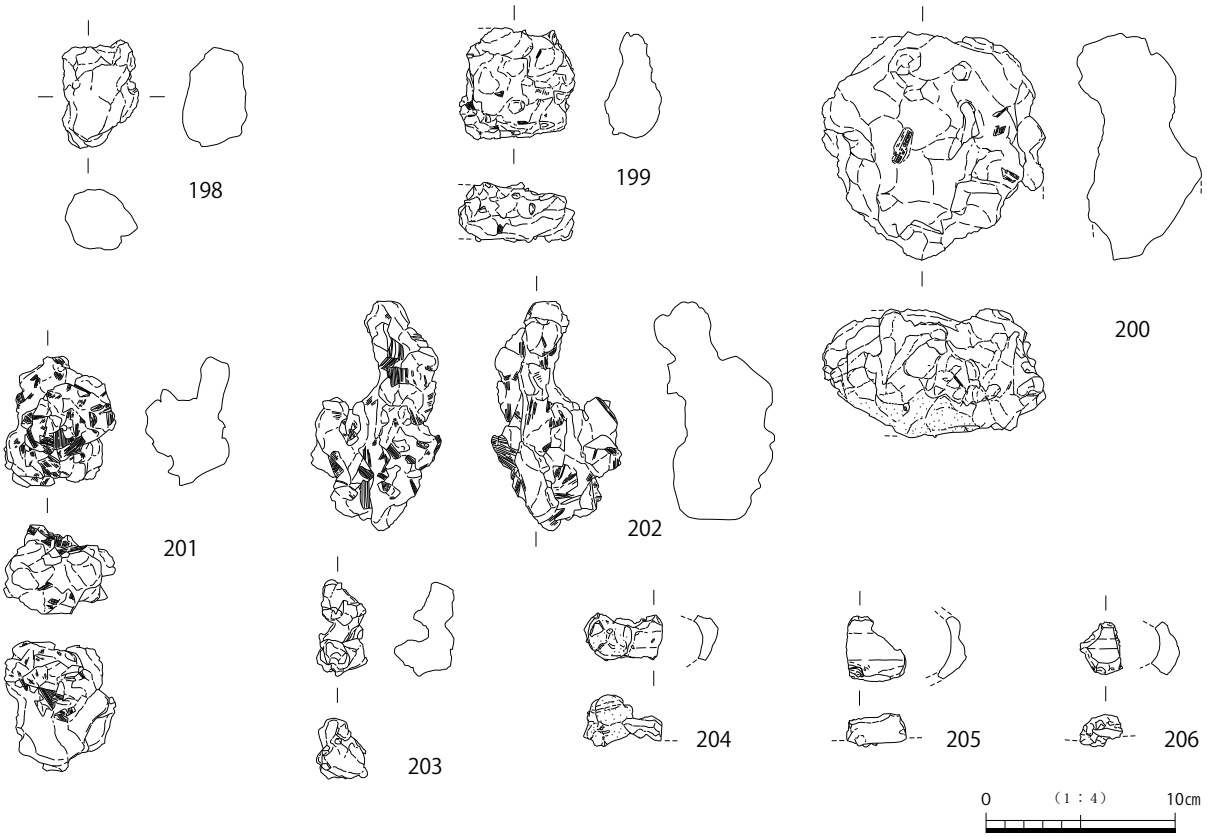
第 63 図　出土鉄滓類（3）（炉内滓）



第 64 図　出土鉄滓類（4）（炉内滓）



第 65 図　出土鉄滓類（５）（炉内滓）



第 66 図　出土鉄滓類（６）（炉内滓）

（６）鉄滓類③ 鉄塊系遺物

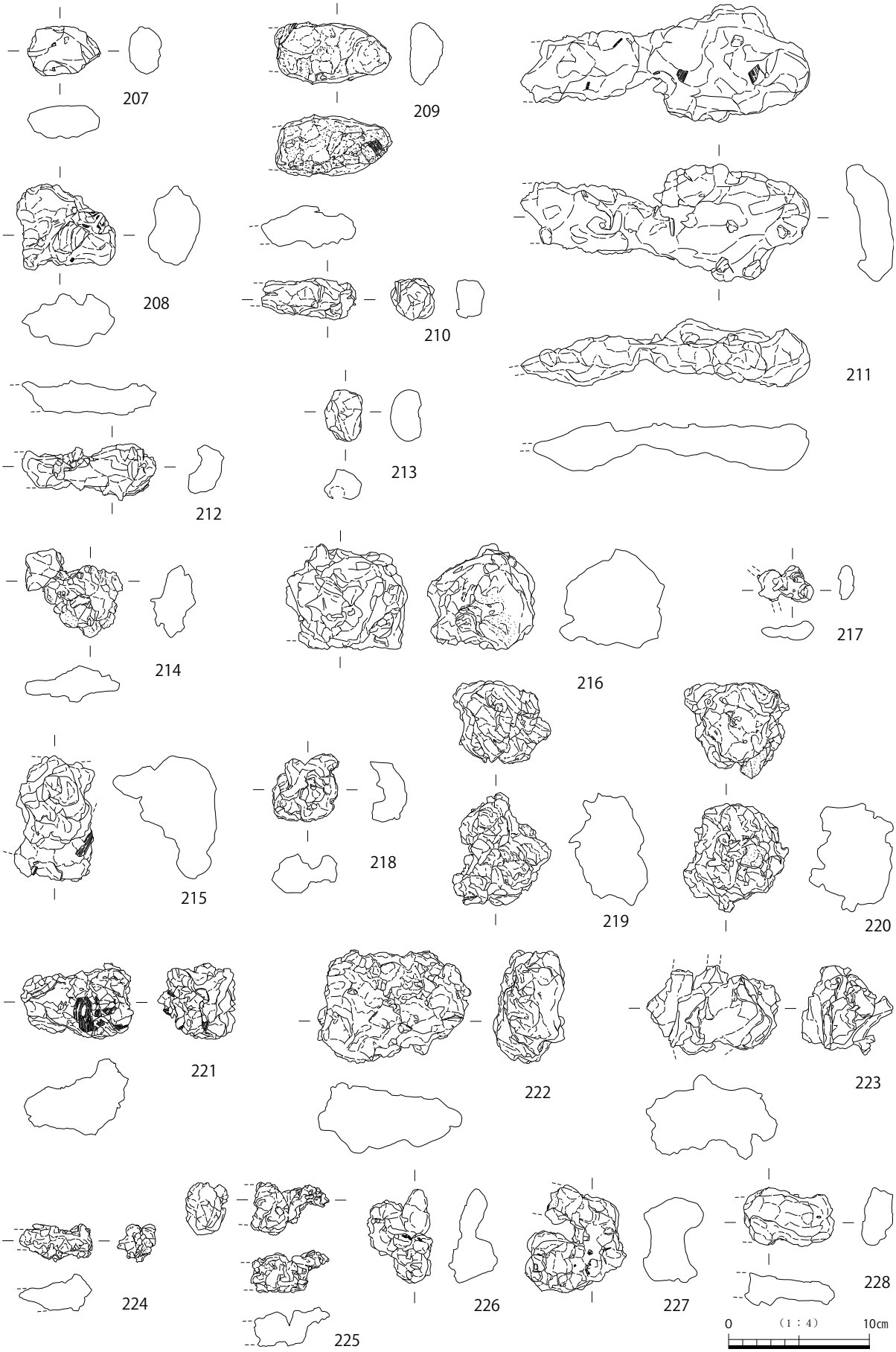
銑鉄塊（流れ銑）

207 ～ 212 は扁平な流動状の形状で全体的に重量感があり，磁着度やメタル度の反応が全面的に確認でき，高い測定値を示す鉄塊である。209 は金属学的分析を行い（分析 No.KED- 1），銑鉄塊（流れ銑）であることが示されており（第５章第４節），その他も銑鉄塊の可能性が高いと考えられる。

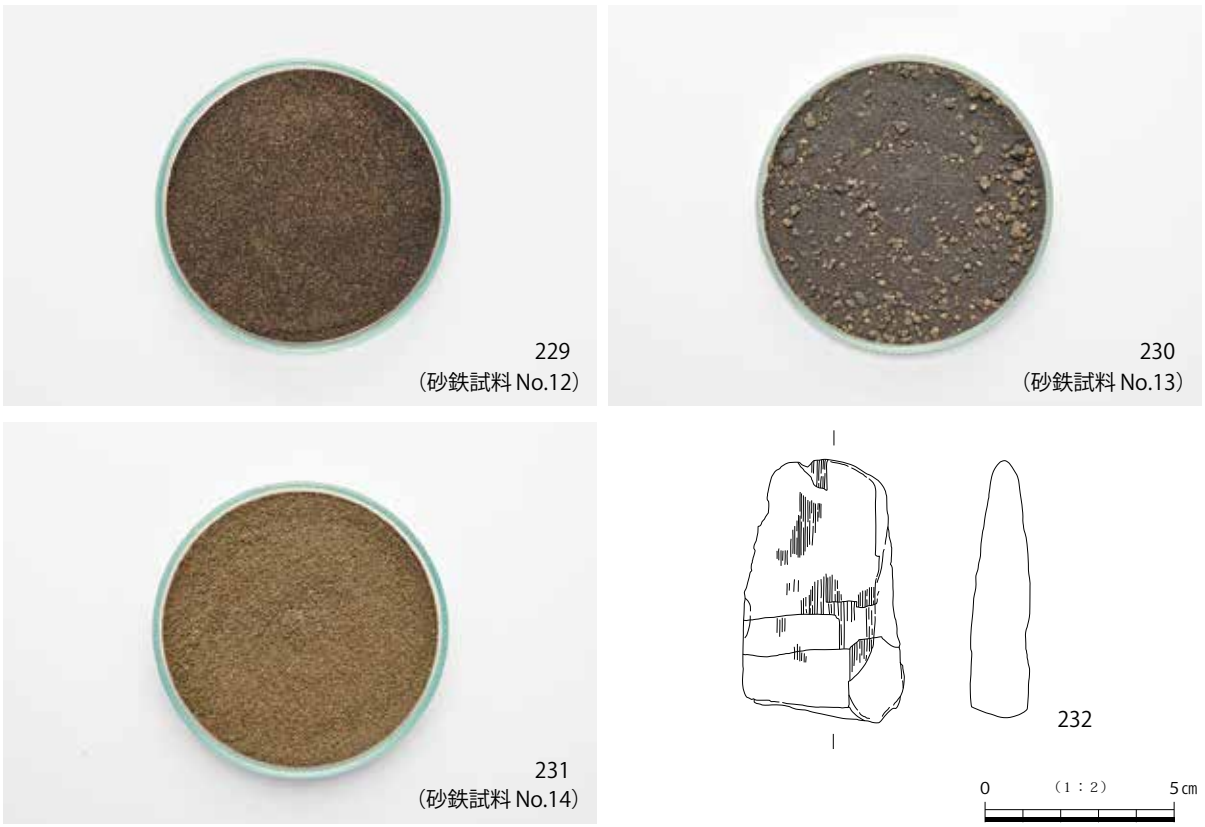
209・210 は磁着度が８でメタル度が特Ｌ，211 が磁着度が６でメタル度が特Ｌである。207・208 が磁着度５，212 は磁着度６でメタル度がＬである。207・208 は全体的に錆化が進み不明瞭であるが，炉内から流出後に窪み内で固着したと考えられる。209 ～ 212 は扁平な細長い形状で，炉内から流出するなかで溝内で固まった銑鉄塊である。209・211 の下面には木炭が付着している。

鉄塊系遺物

213 ～ 228 は鉄塊系遺物である。メタル度はＬ以上を示し，218 ～ 222，228 は特Ｌである。そのうち 219 ～ 221 は磁着度が高く，219 は磁着度９でそれ以外は磁着度が８である。その他の鉄塊系遺物は磁着度が４～６を測る。213・217・218 は小形の鉄塊系遺物で，213 は錆化が進んでいる。214・224・225 は表面に鉄片を含み込み，土砂の付着もみられる。215 は木炭の付着がみられ，平らな下面付近に炉壁の一部が認められるため，炉内の底面付近で固定化したと考えられる。216 は表面に土砂および流動性のある滓部の付着が確認できる。219 は表面に鉄塊が固着しており，全体的に錆化による割れが著しい。220 は土砂の付着が認められる。221 は表面に木炭が大量に付着している。222・223 は表面に滓部が付着し，223 は窪みに流れ込んだものとみられる。226・227 は



第 67 図　出土鉄滓類（７）（鉄塊系遺物）



第 68 図　出土砂鉄・木炭

表面に細かい木炭片がみられ，227 は U 字状の溝などで固着したと考えられる。228 は扁平な板状の鉄塊系遺物であり，銑鉄塊に近い。

出土地点（鉄滓類③鉄塊系遺物）

鉄塊系遺物も，炉壁や炉外滓・炉内滓と同様に第９表と観察表（第 13 表）において，詳しい出土地点の情報を整理している。よってここでは，出土地点を時期別にまとめて報告する。

１期や１～２期の盛土などからの出土は認められず，銑鉄塊（207・208）と鉄塊系遺物（213～223）が２～３期の盛土から出土している。

３～４期の操業面上では，銑鉄塊（210～212）および鉄塊系遺物（227）が確認でき，その他の銑鉄塊（209）と鉄塊系遺物（224～226・228）は３～４期の盛土から造成土の出土である。

（7）砂鉄・木炭

砂鉄

砂鉄は高殿内の操業面や砂鉄層および盛土などから確認でき，砂鉄の磁鉄鉱形態や化学組成分析を実施している（第５章第２節）。ここでは分析対象の３試料について出土地点を簡潔に報告する。

229（砂鉄試料 No.12）は A・B 区東西横断トレンチの南壁における越堂鈩操業１期の硬化面を形成する盛土から採取しており，１期以前のたたら操業で使用した砂鉄の可能性が高い。230（砂鉄試料 No.13）は，C 区１トレンチの２期の炭置場と砂鉄置場の区画石列に付着した砂鉄であり，２期のたたら操業に伴う砂鉄である。231（砂鉄試料 No.14）は，東面石垣外側トレンチのなかで，高殿石垣床面上面の３～４期の盛土から確認した砂鉄であり，越堂鈩操業３～４期に伴う砂鉄の可能性が高い。

木炭

木炭は，高殿内の炭置場や盛土内のほか，高殿石垣外側を廻る暗渠施設内などからも出土した。これらの試料を対象に AMS 年代測定を実施し（第５章第１節），越堂鈩の操業時期を推定できた。なお各試料の採取地点は，第５章第１節にて示されている。232（年代測定試料 AMS- ２）は東面石垣外側トレンチの暗渠施設（１期）から出土した木炭で，暗渠施設内の埋土（１期）から確認された。

註

（１）出土遺物のなかで，陶磁器の特徴や時期同定は西尾克己氏，土管や瓦の特徴は西尾克己氏や榊原博英氏，および伊藤創氏や持田直人氏からご教示をいただき，炉壁や鉄滓類の分類については角田徳幸氏から調査指導を受け，松尾充晶氏および東山信治氏から助言をいただいた。

（２）碗の分類には，御崎谷遺跡・御崎谷Ⅱ遺跡の報告（原田編 2001，伊藤編 2002）を参照している。

（３）明治初年以降に西洋の技術を導入して規格的な土管の大量生産が開始されたが，江戸期の終わり頃から常滑焼などの土管が生産されていたことが分かっている（柿田 1992）。

（４）炉壁や鉄滓類の分類区分の設定については，角田徳幸氏から調査指導を受けたほか，これまでの調査事例の分類方法（深田編 2000，松尾編 2009，石原編 2010，濵本・坂本編 2013 など）を参照した。

（５）炉壁や鉄滓類は，まず強力磁石によって磁着の有無を確認した後に専用の小型金属探知機で金属鉄の残留度合い（メタル度：H・M・L・特 L）を測定し，鉄滓分類用の標準磁石で磁着の度合い（磁着度：１～８）を確認した。一部のメタル度（特 L）と磁着度の測定は，島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの協力を得て，同センターが所有する小型金属探知機と標準磁着を借用して実施した。

参考文献

石原　聡編 2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―』出雲市の文化財報告 12　出雲市教育委員会

伊藤徳広編 2002『御崎谷Ⅱ遺跡―海軍望楼跡の調査―』隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書第３冊　島根県教育委員会

柿田富造 1992「[土管] 使用の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　３～ 29 頁

九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』九州近世陶磁学会

濵本利幸・坂本嘉和編 2013『下市築地ノ峯東通第２遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 49　鳥取県埋蔵文化財センター

原田敏照編 2001『御崎谷遺跡・大床遺跡―明治の海軍望楼跡と昭和の防空監視哨跡の調査―』隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書第１冊　島根県教育委員会

深田　浩編 2000『下山遺跡（１）―製鉄関連遺構の調査―』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　島根県教育委員会

松尾充晶編 2009『大志戸Ⅱ鈩跡　鉄関連遺物篇』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 17　島根県教育委員会

第６節　小結

今回の越堂たたら跡の発掘調査は，越堂釛の操業時期（１～４期）に対応する高殿関連の遺構のほか，越堂釛山内の遺構などが確認できた（第 10 表）。特に越堂釛操業の最終段階である４期は，高殿の規模や形態，床釣りの詳しい構造が判明した（第 11 表）。また，各操業面や盛土などに伴う陶磁器，炉壁や鉄滓類などのたたら操業の実態を具体的に示す遺物が豊富に出土したことも重要である。こうした越堂たたら跡の調査成果について，越堂釛の操業時期を踏まえて年代的に変遷を整理することで，約 150 年間におよぶ長期間操業した当時のたたら場の特質が明確になると考えられる。ここでは，これまでに報告した主な調査成果を時系列的に整理しつつ，その内容を詳しく検討したい。

第 10 表　越堂釛の操業時期と遺構一覧

操業時期	田儀櫻井家経営時期	推定操業年代	高殿関連遺構	越堂釛山内遺構
越堂釛操業１期	田儀櫻井家経営以前	17 世紀末～ 18 世紀中頃	暗渠施設 硬化面	—
越堂釛操業２期	田儀櫻井家経営以前 ～経営前半期	18 世紀中頃～ 19 世紀初頭	高殿石垣（自然石）・南面石垣対向石列 操業面：砂鉄置場・炭置場・礎石列	山内通路石垣 （高殿南面石垣対向石列・里道石垣） 住宅跡背面石垣
越堂釛操業３期	田儀櫻井家経営 後半期（前半）	19 世紀初頭～ 中頃	高殿石垣（切石）（３・４期） 操業面（３・４期）：押立柱（礎石・根固め石）・束柱礎石列・囲炉裏跡 床釣り：掘形・小舟（甲）	山内通路石垣 （石列・里道石垣） 住宅跡背面石垣 炭小屋跡礎石列 住宅跡礎石列 山内北側石垣
越堂釛操業４期	田儀櫻井家経営 後半期（後半）	19 世紀中頃～ 後半頃	操業面：湯溜まり 床釣り：掘形・跡坪・本床・小舟・火渡し・息抜き穴	

第 11 表　越堂釛操業４期の高殿と床釣りの規模・法量一覧

		項　目	規　模・法　量
高殿	規　模	南北	19.5m
		東西	19.5m（推定）
		形態	角打
	押立柱	柱間距離	6.8m
		柱径	直径 0.47m（押立柱４）
		基礎	礎石・根固め石
床釣り	掘　形	短軸	5.0m
		長軸	12.5m
		深さ	1.72m（本床釣り）
			3.04m（下床釣り）（掘形上面から）（地中レーダー探査の測定値）
	本　床	幅（内寸）	1.14m（上面）
			0.86m（下面）
		高さ（内寸）	1.0m
		長さ	4.85m
		床面位置	小舟石壁上端とほぼ同位置
	小　舟	幅（内寸）	0.8m（最大）
		高さ	0.48m（石壁）
		長さ	4.85m
		小口石組み	アーチ形（東小舟煙道）
			合掌形（東小舟焚口・西小舟焚口および煙道）

1　越堂鈩の高殿と床釣りの変遷（第 10・11 表）

（1）高殿の構造と変遷

１期の高殿（田儀櫻井家経営以前：17 世紀末から 18 世紀中頃）

１期の高殿関連の遺構は，暗渠施設と硬化面が見つかっている。たたら操業に関する明確な遺構の様相は不明であり，この時期のたたら場の操業を示す具体的な内容は確認できないが，暗渠施設は現在でも排水機能を維持しており，また現存する４期の高殿北面石垣，東面石垣および南面石垣外側を廻っていることから，２期以降も高殿内の排水施設として利用するために，１期の暗渠施設に沿って石垣が構築されたことが想定される。さらに，高殿内での１期の硬化面を形成した盛土内には，砂鉄層や被熱した石積みの存在が認められたことを考慮すると，田儀櫻井家が越堂鈩の経営に携わる以前の１期は，２期以降の高殿と同じ空間内でたたら場の操業が行われていた可能性が考えられる。

２期の高殿（田儀櫻井家経営以前から前半期：18 世紀中頃から 19 世紀初頭）

２期の高殿は，１～２期の盛土上面に自然石を用いた高殿石垣が構築され，石垣の高さは約 0.9m である。１期の硬化面上に施された１～２期の盛土上面にこの時期に対応するたたら操業面が認められ，高殿石垣から約 1.3m ほど内側に入った場所には高殿建物を支えた柱に伴う礎石列が石垣に沿って廻っており，犬走り状の空間が設けられていた。礎石列の１つには一辺 16cm 程度の方形のほぞ穴が認められ，高殿建物の柱の規模が確認できる。

たたら操業面には砂鉄置場や炭置場が確認でき，当時の製鉄の原材料となった砂鉄（第３章第５節第 68 図 230）や木炭が残されていた。また，炭置場の上面や操業面を掘り込んで堆積する２～３期の盛土，および３・４期の高殿北面石垣構築時の裏込め上面の盛土には，２～３期の所産であったと推測される燻し瓦が認められ（第３章第５節第 52 図 80・81，図版７），この時期には高殿やその周辺建物の一部に燻し瓦が用いられていた可能性を示唆する。

たたら操業面で確認した砂鉄置場や炭置場の位置は，『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）掲載の幕末から明治初年頃の越堂鈩山内の建物配置図（第１章第１節第３図）における高殿内での砂鉄置場および炭置場の配置と合致する点が注目される。また高殿石垣の位置も建物配置図での位置と重なってくるため，幕末から明治初年頃の高殿の配置は，少なくとも２期当初の 18 世紀中頃に構築された高殿配置が引き継がれてたたら操業が行われていた蓋然性が高い。

また２期に構築された高殿南面石垣に対向する位置で石列が見つかり，山内通路石垣の根石と想定される。高殿南面石垣対向石列は東側に伸びており，石垣の積み直しなどを経て現在も里道石垣として利用されている。

３・４期の高殿（田儀櫻井家経営後半期：19 世紀初頭から後半頃）

この時期の高殿石垣は，２期の自然石の石垣上に増し積みされた切石の石垣が全面に構築されており，３期に高殿全体が改修されたことを示している。高殿石垣の高さは，２期に構築された自然石の石垣を含めて約 1.6m とかなりの高さとなる。その一方で，高殿南面石垣の外側は盛土が施され，２期の自然石の石垣を埋没させて３・４期の切石の石垣のみが見えるように整えたと考えられる。

３・４期は，床釣りにおける小舟の甲の高さが概ね同一であるため，たたら操業面も同一であった可能性が高いと想定される。２期のたたら操業面上に盛土でかさ上げを行って３期のたたら操業面が構築された後に，４期に床釣りのみが改修されたと考えられる。この時期の操業面は後世の造成によって削られ，砂鉄置場や炭置場などは確認できなかったが，高殿建物を支える押立柱の礎石や根固め石などが確認されており，高殿の構造が把握できる。最大幅が約１mを測る大型の押立柱４の礎石には，直径約 47cm のほぞ穴が残され，押立柱が直径約 47cm であったことを裏付ける。また同礎石には，高殿構築時に使用する礎石の石材の番付を示したと思われる「壹」の墨書文字が確認できる。

跡坪内の埋土からは釉薬瓦が出土しているほか（第３章第５節第 52 図 89），この頃のたたら操業に伴う炉内再結合滓にも釉薬瓦片が付着しており（第３章第５節第 64 図 182），高殿やその周辺の建物の一部に釉薬瓦が用いられた可能性が考えられる。なお石見焼の来待釉を施釉した赤瓦は，18 世紀末には成立し，19 世紀前半以降に各地に広がったことが示されており（熱田 2017），越堂鈩操業３・４期の時期と符合する。

高殿北側および南側では，村下室や番子室などに伴う束柱の礎石が存在し，南側では複数の束柱礎石が存在して礎石列が認められた。その礎石の１つには「八十□　七拾八」と記された墨書文字があり，石材の番付であると考えられる。こうした石材の番付の存在は，高殿建物が緻密な設計のもとに建てられていたことを傍証する。なお，南側の束柱礎石列には大型の石材が存在しており，２期以前の押立柱の礎石などを転用した可能性がある。そのなかには直径約 32cm のほぞ穴が設けられている礎石が認められる。また南側の束柱礎石列の軸線は，２期における高殿内の礎石列の軸線と合致しており，３期の高殿の改修は，２期以前の礎石やその配列を活かして計画的に行われたことが読み取れる。その他，高殿北側では村下室に近い場所で囲炉裏跡が確認され，たたら操業のなかで村下などが煮炊きに使用したと考えられる。

『田儀村誌』に記された幕末から明治初年頃の建物配置図は，４期の 19 世紀中頃から後半頃の高殿と越堂鈩山内の様子をもとに描いたと考えられ，その状況が高殿や周辺の調査で明らかになった。

（２）床釣りの構造と変遷

１・２期の床釣り（田儀櫻井家経営以前／経営以前から前半期：17 世紀末から 19 世紀初頭）

１・２期の確実な床釣りの遺構は，後述する３・４期の床釣り構築時に削平されたとみられ，確認できなかった。なお，１期の硬化面を形成する盛土内には被熱した石積みの存在が確認されており，床釣りに伴う石積みの一部であった可能性もある。

３期の床釣り（田儀櫻井家経営後半期の前半：19 世紀初頭から中頃）

３期の床釣りは，２期のたたら操業面上に盛土を施し，２期のたたら操業面や床釣りを削平して構築したと考えられる。しかし，その大半が後続する４期の床釣りの構築時に削られており，辛うじて床釣りの掘形や小舟の甲の一部が残存する状況である。小舟の甲は東西の小舟の両方で確認され，後述する４期の東西の小舟よりも両者の中心間の距離が広がり，床釣り全体の規模は４期よりも大きかった可能性がある。なお，東西の小舟は４期の本床を挟んで対称的な場所にあるほか，甲の高さも４期の小舟の甲と概ね同じであり，本床の位置は３・４期で同じ場所に設けられたと推測される。

４期の床釣り（田儀櫻井家経営後半期の後半：19 世紀中頃から後半頃）

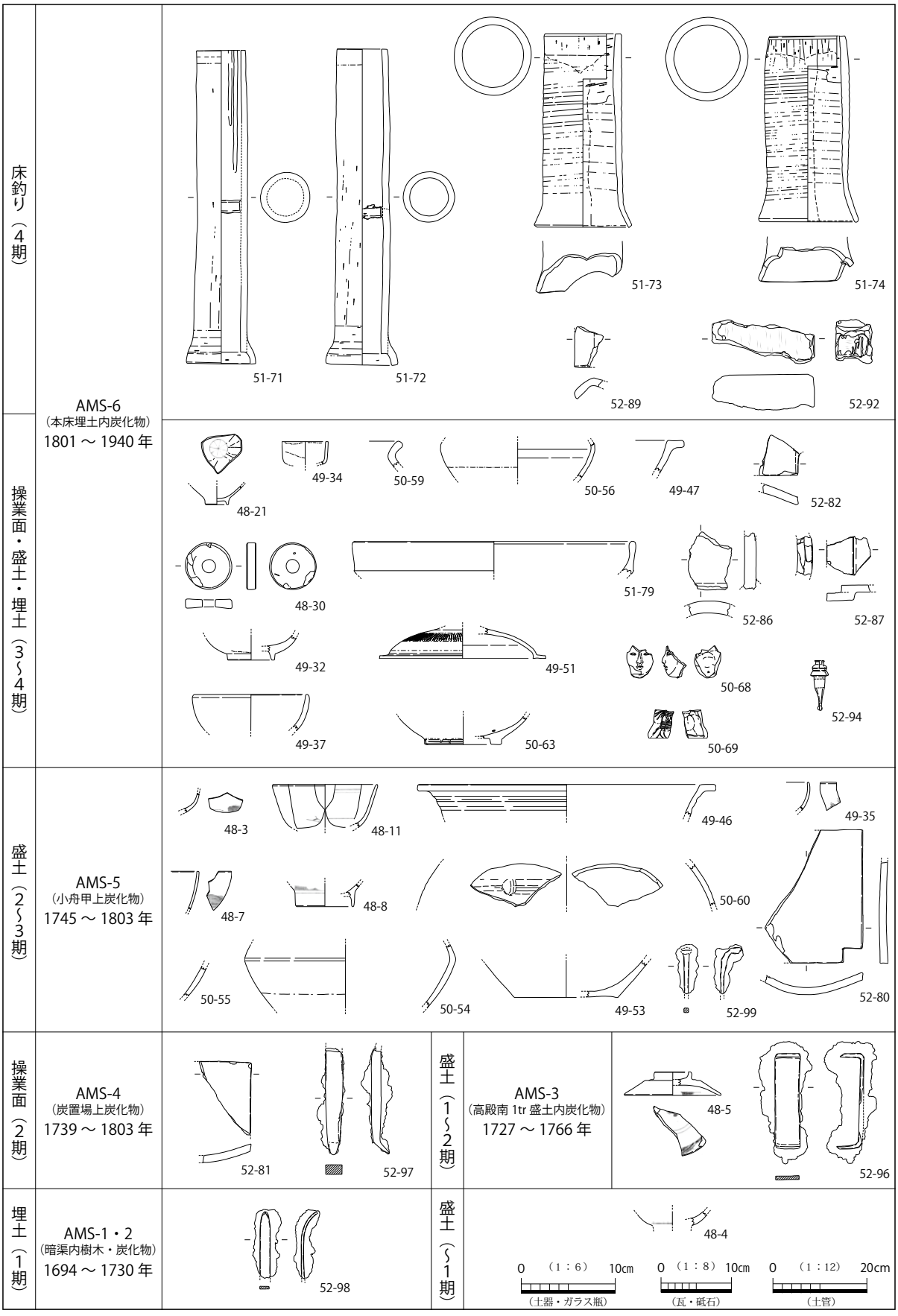
４期の床釣りは，良好な状態で残存することが今回の調査で確認され，越堂鈩の操業終了時点の床釣り構造を示していると考えられる。床釣りの規模や出入口を持つ跡坪の詳しい様相のほか，本床や小舟の構造や規模も具体的に明らかになった。なお，前述のように３期の床釣りを削平して４期の床釣りとして改修されたが，その規模はやや縮小した可能性がある。

本床の底面は小舟内部側面の石壁とほぼ同じ高さであり，出雲国神門郡や飯石郡の神戸川流域に多い高殿Ⅱａ類（角田 2014）の特徴を示している。小舟の小口の甲に注目すると，東小舟の小口は北側の焚口が合掌形の石組み，南側の煙道がアーチ形の石組みであり，西小舟の小口は南側の焚口と北側の煙道がともに合掌形の石組みとなる。アーチ形の石組みは弓谷たたら（田中編 2000）などで確認されるように，出雲国の山間部のたたら場で多く認められる。一方，合掌形の石組みは調査事例が少なく実態が不明であるが，長門国の大板山たたら製鉄遺跡（渡辺編 1992）で確認されており，日本海沿岸地域との共通性を示す可能性が考えられる。

また，息抜き穴には４本の土管が採用されていることも注目される。土管の生産は幕末から明治初年以降に普及するため（柿田 1992），越堂鈩操業４期の床釣りがこの頃に構築されたことを具体的に示している。なお，越堂たたら跡から比較的近い山間部に位置する朝日たたら跡や弓谷たたら跡などは，息抜き穴に粘土や石積みを採用しており（杉原ほか編 1983，田中編 2000），越堂鈩操業４期よりも古い時期に操業したと考えられるこれらのたたら場では，息抜き穴は粘土製や石製の気抜孔として空間を設ける造りであったと想定される。そのため，越堂鈩操業１～３期に設けられた可能性のある息抜き穴は，同様に粘土製や石製であったことが推測される。息抜き穴は４箇所に設置されたことが想定できるが，土管の使用によってそれまでの粘土製や石製の息抜き穴よりも敷設に係る労力が軽減され，さらに息抜き穴４箇所で均等かつ効率的に床釣り内部の気抜きが可能になったと推測される。こうした床釣りの部分的な性能の向上は，幕末から明治初年頃に最盛期を迎える田儀櫻井家の基幹的な役割を担った越堂鈩での安定的な銑生産を支えた要因の一つであったと考えられる。なお，下床釣りの詳細な調査は行っていないが，越堂鈩操業４期の息抜き穴の土管は本床釣りのみに設けられ，下床釣りには粘土製や石製などの息抜き穴が設置されていた可能性もある。また地中レーダー探査により，下床釣りに伴う構築面の一部や床釣り掘形の床面の可能性がある反応が得られ，越堂鈩と推定されるたたら場の普請や床釣りの修繕の様子（鳥谷 2017）で示された床釣りの深さと整合的である。そのなかには坊主石の敷設などの下床釣り構造が記されており，４期の越堂鈩では，こうした下床釣りが構築されていた蓋然性が高いと考えられる。

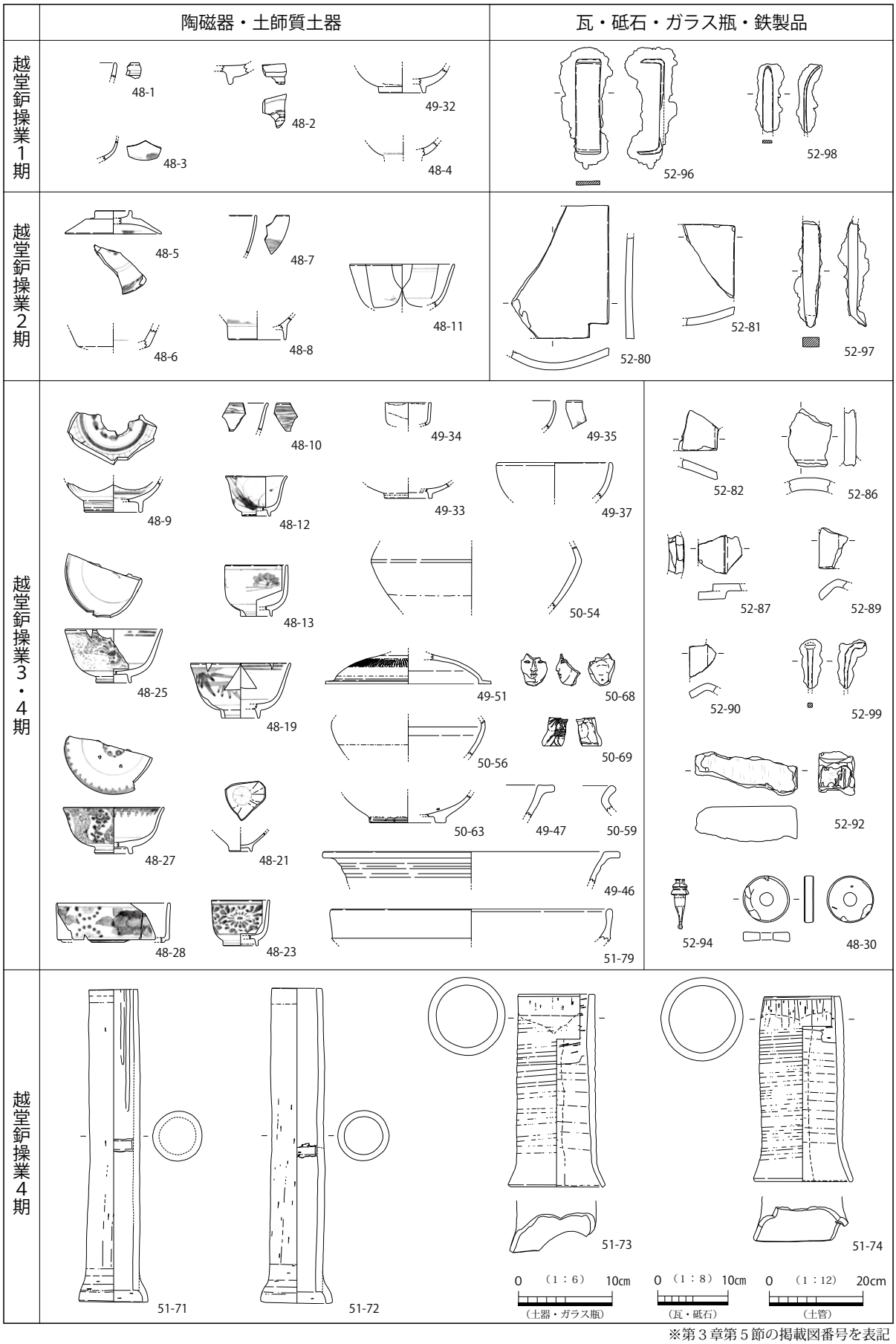
２　出土遺物の特徴と変遷（第 69 ～ 72 図，第 12 表）

越堂たたら跡の出土遺物は，陶磁器や瓦，鉄製品など多様な種類が確認され，また炉壁や鉄滓類などの製鉄関連遺物も豊富に出土した。ここでは，越堂鈩操業の１～４期に合わせて，時期別における出土遺物の主な特徴を整理する。なお，第 69 ～ 72 図の出土遺物は，第３章第５節における掲載図番号を簡略的に表記しており，以下についても，第３章第５節の掲載番号で報告する。



※AMS 年代測定は２σ／第３章第５節の掲載図番号を表記

第 69 図　各時期の操業面・盛土・埋土・床釣り出土の土器・瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品



※第３章第５節の掲載図番号を表記

第 70 図　土器・瓦・砥石・ガラス瓶・鉄製品の時期的変遷

（1）陶磁器・土師質土器・瓦・鉄製品

陶磁器や瓦などは，各時期の操業面や盛土・埋土および床釣りから出土しており，各地点から出土した炭化物の年代測定値とともに，たたら場の操業時期を推定するうえで重要な情報となる。

第３章第２節で越堂釛の操業時期と遺構の年代を推定するために，時期比定に関連する陶磁器とその出土地点を簡潔に報告している。ここでは越堂釛の操業時期の様相をさらに明確にするため，第３章第３・５節で報告した各時期の操業面や盛土などから出土した陶磁器などを整理した（第 69 図）。この内容を踏まえ，越堂釛操業１～４期における時期比定が推定可能な陶磁器のほか，土師質土器や瓦，鉄製品を中心に時期的な変遷をまとめた（第 70 図）。

ここでは，第 69・70 図をもとに各時期の陶磁器・土師質土器・瓦・鉄製品の特徴と時期的な変遷を確認する。

１期の陶磁器・鉄製品（田儀櫻井家経営以前：17 世紀末から 18 世紀中頃）

越堂たたら跡で最も古い時期の陶磁器は，九陶編年Ⅲ期（1650 ～ 1690 年代），もしくはⅣ期の前半頃（1690 ～ 1740 年代）の呉器手形の碗（49-32）や，九陶編年Ⅳ - １期（1690 ～ 1740 年代）の陶胎染付の碗（48-1･2）である。これらの陶磁器から，18 世紀中頃には１期の暗渠施設が機能しており，その構築時期は 17 世紀末頃まで遡る可能性が示唆される[(1)]。なお，九陶編年Ⅳ期（1690 ～ 1780 年代）と判断される肥前系の碗（48-4）は，１期の硬化面を形成する盛土から出土している。

また暗渠施設内の埋土からは鉄製品の鎹（52-98）が木炭に混じって出土しているほか，２期の操業面を形成する１～２期の盛土からも鎹（52-96）が出土しており，１～２期の可能性がある。

２期の陶磁器・瓦・鉄製品（田儀櫻井家経営以前から前半期：18 世紀中頃から 19 世紀初頭）

２期のなかで最も古い陶磁器は，九陶編年Ⅳ - ２期の後半（1760 ～ 1780 年代）である外青磁の蓋坏碗（48-5・6）と想定できる。48-5 は暗渠施設の蓋石上面の盛土（１～２期）から見つかっており，その上面に積まれた自然石の高殿石垣の構築年代に近いと推測される。また九陶編年Ⅴ期の前半頃（1780 ～ 1840 年代）の広東碗（48-7・8）や，19 世紀前半頃の肥前系の碗（48-11）は，２期の炭置場上の２～３期の盛土から出土しているため，２～３期頃に対応すると考えられる。

２期には燻し瓦（52-81）がＣ区１トレンチの２期の炭置場上面で確認されたほか，２期の砂鉄置場を掘り込む２～３期の盛土からも燻し瓦（52-80）が出土している。２期には高殿やその周辺建物の一部に燻し瓦が用いられていた可能性を示唆する。

鉄製品の鎹（52-97）は，Ｃ区２トレンチで２期の炭置場における炭層付近の石材上面から出土しており，２期の所産であったと考えられる。

３・４期の陶磁器・土師質土器・瓦・鉄製品（田儀櫻井家経営後半期：19 世紀初頭から後半頃）

３期の遺構はほとんど残っておらず，それに伴う確実な陶磁器は確認されていない。陶磁器の特徴としては，Ａ区北側トレンチやＣ区１トレンチの２～３期の盛土から出土した土瓶や壺（50-54，50-60）のように石見焼の陶器が目立ってくる傾向にある。その他，やや淡い絵付けのなされた磁器は，正確な時期は不明であるが，19 世紀前半頃の所産である可能性が考えられる（48-9・10・12・13・28）。３・４期の陶器はその種類が豊富になり，行平鍋（49-51）や土瓶（50-56）・壺（50-59・63）の

ほか，植木鉢（49-46・47）や人形（50-68・69）などが認められ，土師質土器では焙烙（51-79）が確認できる。４期は床釣りが改修された時期であり，その床釣りで確認した土管（51-71 ～ 74）は，幕末から明治初年以降に生産されたと考えられる。磁器のなかで，瀬戸新製焼や型紙摺りの装飾技法を持つ磁器碗（48-21・25・27）などが概ね同時期頃の所産と考えられる。

３期の瓦および鉄製品についても，この時期の確実なものは確認されていない。可能性のあるものとしては，燻し瓦（52-82）が東面石垣外側トレンチの石垣床面上の３～４期における盛土で確認されているほか，石見焼の釉薬瓦（52-90）が囲炉裏跡上面付近から出土している。19 世紀前半には石見焼の来待釉赤瓦が各地に普及するため（熱田 2017），３・４期のなかで石見焼の釉薬瓦が高殿や周辺建物の一部に採用されたことを示唆する。４期の瓦の可能性が高いのは，A 区跡坪トレンチ内の埋土から出土した石見焼の釉薬瓦（52-89）であり，この頃には石見焼の釉薬瓦が高殿やその周辺の建物に用いられ，それが普及していた状況が考えられる。その他造成土中にみられる瓦の大半は釉薬瓦であり，４期以降は石見焼の釉薬瓦が一般的に使用されていたと考えられる。

鉄製品の釘（52-99）は，B 区北側トレンチの２期のたたら操業面上に施された２～３期の盛土から出土しており，この時期の所産と考えた。

（２）製鉄関連遺物

炉壁や鉄滓類は多量に出土しており，砂鉄や木炭を含めると，総計で 1,395.57kg であった。また越堂鈩操業時期（１～４期）に対応する出土地点ごとに取り上げており，出土地点と種類別の重量一覧は第３章第５節第９表で整理している。その内容をもとに時期別の重量を示し（第 12 表），加えて種類別にみた製鉄関連遺物の時期的変遷を整理した（第 71・72 図）。ここではその内容を踏まえ，各時期の主要な製鉄関連遺物を取り上げながら，製鉄関連遺物の特徴と時期的な変遷を検討する。

１～２期の製鉄関連遺物

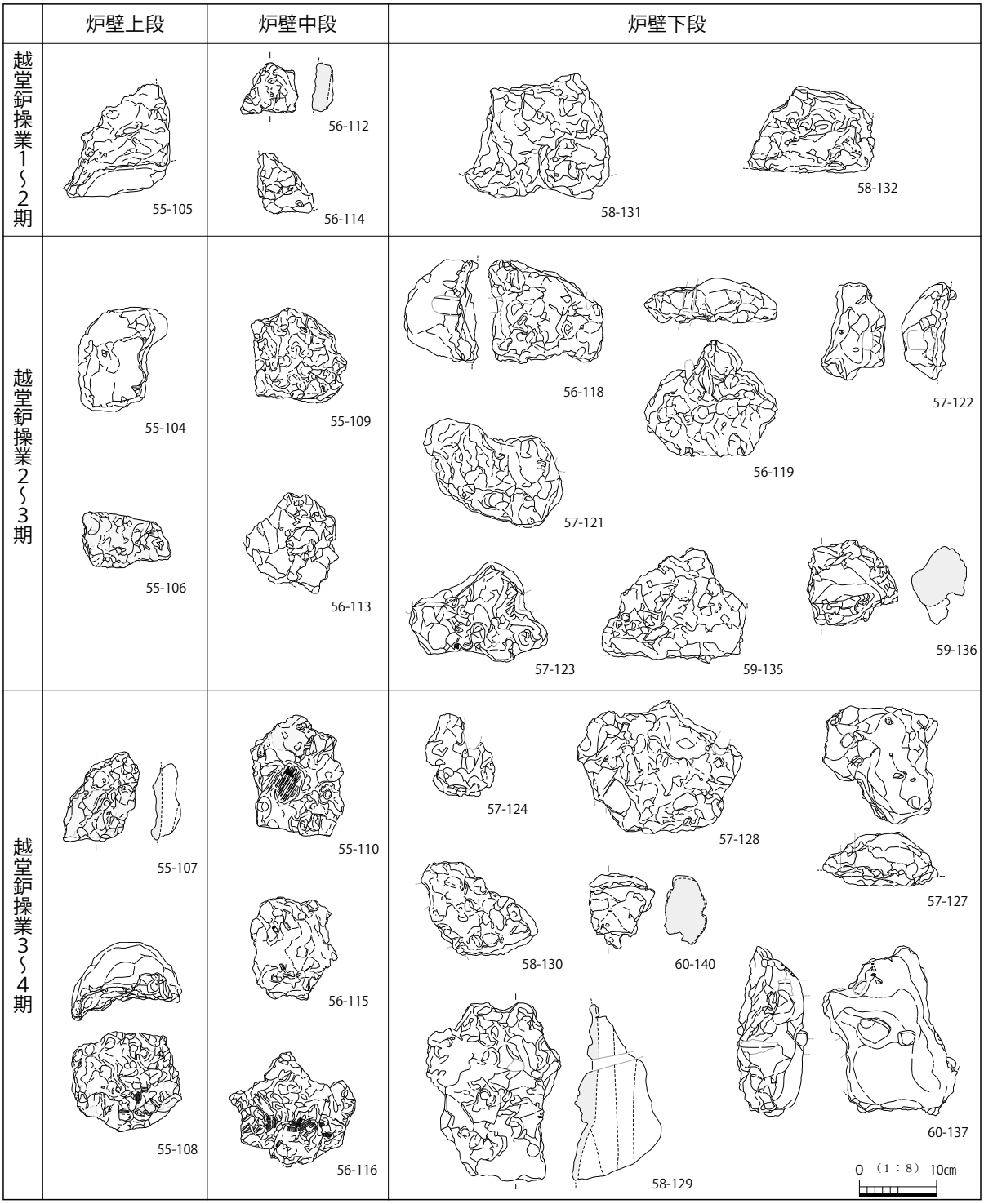
１～２期の炉壁は全体的に少なく，具体的な実態は把握できないが，炉壁下段が比較的目立つ。炉の全体を復元するには至らなかったものの，コーナー部分が認められるものがある（55-105・114）。

第 12 表　製鉄関連遺物の時期別重量一覧

単位：kg

	炉壁						鉄滓類														その他		合計
	上段		中段		下段		非磁着						磁着										
							炉外滓						炉内滓						鉄塊系遺物				
	上半部	下半部	上半部	下半部	上半部	下半部	流出孔滓	流出溝滓	単位流動滓	流動滓	炉外滓	工具付着滓	炉底塊（含鉄）	炉底塊	炉内流動滓（含鉄）	炉内滓（再結合滓）	炉内滓（含鉄）	工具付着滓（含鉄）	銑鉄塊（流れ銑）	鉄塊系遺物	砂鉄	木炭	
１～２期	0.00	1.49	0.06	1.39	1.55	5.50	0.82	0.00	0.00	1.83	48.62	0.07	0.00	0.00	0.00	0.36	1.06	0.02	0.00	0.00	0.56	8.83	72.16
２～３期	2.96	20.43	33.53	36.29	38.28	26.48	0.00	0.00	0.10	15.39	638.36	1.26	8.74	74.65	4.62	4.00	20.92	0.00	0.23	3.26	0.12	0.32	929.94
３～４期	0.47	7.25	19.03	27.90	50.14	51.98	0.00	0.07	1.91	23.16	103.25	0.19	3.50	35.46	2.92	2.64	6.02	0.04	1.23	0.55	0.94	0.46	339.11
その他・不明	0.00	3.63	3.51	0.77	1.72	0.71	0.00	0.00	0.00	1.84	40.19	0.06	0.00	0.00	0.27	1.60	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	54.36
合　計	3.43	32.80	56.13	66.35	91.69	84.67	0.82	0.07	2.01	42.22	830.42	1.58	12.24	110.11	7.81	8.60	28.03	0.06	1.46	3.81	1.62	9.64	1395.57

１～２期の鉄滓類は流出孔滓が比較的多く認められる。炉内滓は金属学的分析を実施しており（65-185・186[分析 No.KED- ２・３])，生産された鉄は銑鉄の割合が高かったことが示されている（第５章第４節)。よって，比較的古い時期の越堂鈩操業１～２期から銑生産を行っていたことが分かり，田儀櫻井家の経営以前から越堂鈩の操業形態は銑押しであったことが推測される。なお，この時期の明確な鉄塊系遺物は確認できなかった。また，この時期は木炭の出土量が多いが，これは暗渠施設内の炭化した樹木を含めているためである。



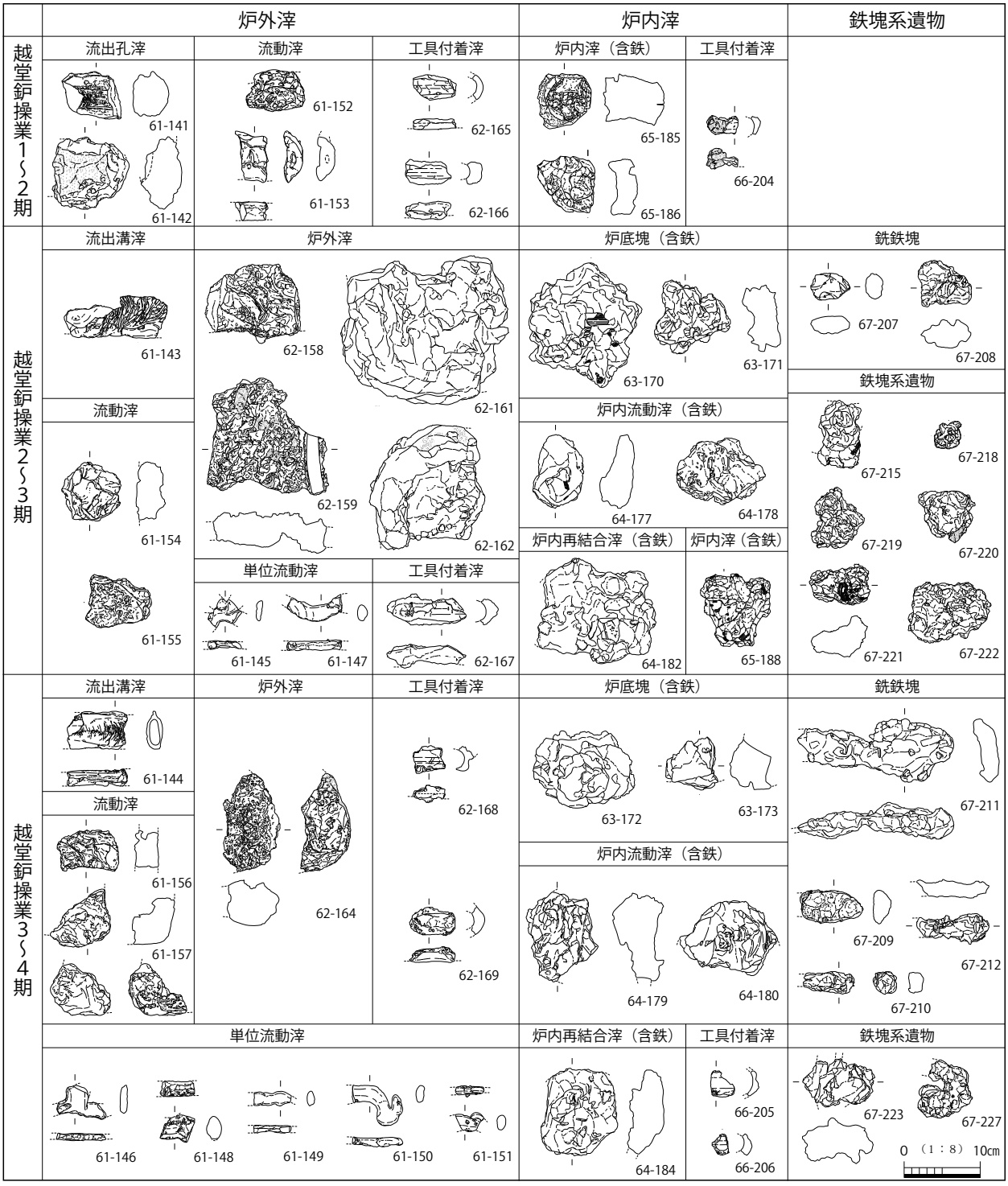
※第３章第５節の掲載図番号を表記

第 71 図　製鉄関連遺物（炉壁）の時期的変遷

２～３期の製鉄関連遺物

２～３期の炉壁は 157.97kg と全時期のなかで最も出土量が多い。そのなかでも炉壁中段が多く，下段の下半部は他時期と比べると，その割合は少ない。炉壁の上段では，約 10cm の厚みがある上段上半部の炉壁（55-104）が確認でき，炉の上端付近は炉壁の厚みが 10cm 程度の可能性がある。

炉壁下段の通風孔を有する炉壁のなかで，通風孔間の距離が判明するものが確認できる（56-118，57-121・123）。これらは約 15 ～ 16㎝前後の水平距離であり，概ねその間隔で水平に通風孔が設け



※第３章第５節の掲載図番号を表記

第 72 図　製鉄関連遺物（鉄滓類）の時期的変遷

られたと考えられる。なお，通風孔の大きさは，直径約２cm の小型で円形のものが多い傾向にある。

２～３期の鉄滓類の総量は，771.53kg と多量に出土した。そのうち炉外滓で注目されるのは，大型の円形状の窪みで固まったとみられる炉外滓（62-161・162）である。炉内から流出後に湯溜まりで固着したと考えられ，２～３期の越堂鈩の鉄生産における湯溜まりの形状の一部を推定することができる。なお４期の湯溜まりは，2006 年度調査において確認されており，周辺地域の湯溜まりと比較してもかなり大型であり，大量の銑を生産していたことが想定できる（第７章第３節）。また鉄滓類では，釉薬瓦の破片が付着する炉内再結合滓を確認した（64-182）。石見焼の来待釉赤瓦の波及は 19 世紀前半頃のため（熱田 2017），３期の所産である可能性が高く，またこの頃には高殿や周辺建物の一部に釉薬瓦が使用されていた可能性が考えられる。鉄塊系遺物は，全体的な出土量としてはあまり多くないものの，各時期と比べるとまとまって出土している。

３～４期の製鉄関連遺物

３～４期の炉壁全体は 156.77kg であり，２～３期とほぼ同程度の出土量である。そのなかで中段・下段は多いものの，上段の部位はあまり確認されていない。この傾向は，越堂鈩操業の１～２期および２～３期も同様であり，上段は硬質で安定した滓部に比べて脆い炉壁部が大部分を占めるため，相対的に残存しにくいと考えられる。またコーナー部とみられる炉壁（55-108）が見つかっているが，全体的に少ない。炉壁の下段には，通風孔が確認できるものが散見される。通風孔は，直径が２cm 程度で円形のもの（57-127・128，58-129）が多いが，長軸で約４～ 5cm を測る楕円形の通風孔を持つ個体（57-124，58-130）も見つかっている。また通風孔の間隔は，15 ～ 16cm 程度の距離を空けながらも，上下に約８cm の高低差がある炉壁が確認できる（57-128）。また通風孔が上下に約８cm の高低差がある状況は，その他の個体でも認められる（58-130，60-137）。通風孔の全体的な位置関係が把握できる炉壁は全体的に少なく，確実ではないが，水平に約 15 ～ 16cm の間隔で通風孔が設けられた２～３期の状況から，通風孔の上下に高低差をつけて通風孔を設けた３～４期へと通風孔の配置や構造に時期的な変化が生じた可能性を考慮することができる。

３～４期の鉄滓類は 180.94kg であり，２～３期と比較すると，それほど多くはない。一方，鉄塊系遺物は比較的多く出土している。そのなかで，金属学的分析を実施した鉄塊系遺物（67-209[分析 No.KED- 1]）は，分析結果から銑鉄塊であることが確認された（第５章第４節）。全体的に細長い銑鉄塊が多く（67-209 ～ 212），流れ銑としての形状がよく示している。

註

（1）越堂鈩については，1745（延享２）年には山内が形成されており，たたら場の操業が確認できることが示されている（鳥谷 2004）。越堂鈩の操業開始期がどこまで遡るのかは今後の課題であるが，今回の調査成果からは，17 世紀末頃まで遡る可能性も考慮する必要があることを確認した。

参考文献

熱田貴保 2017「来待釉赤瓦の成立」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター研究論集第 17 集　島根県古代文化センター　151 ～ 155 頁

柿田富造 1992「[土管] 使用の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　３～ 29 頁

角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂出版

杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鉾』佐田町教育委員会

田中迪亮編 2000『弓谷たたら』頓原町教育委員会

鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　19 ～ 38 頁

鳥谷智文 2017「たたら経営に携わる人々の特質―田儀櫻井家を事例として―」『たたら研究　特別号（60 周年記念論文集）』たたら研究会　137 ～ 151 頁

渡辺一雄編 1992『大板山たたら製鉄遺跡　保存整備計画策定報告書』福栄村教育委員会

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎村役場

第 13 表　出土遺物観察表

陶磁器・土師質土器・瓦・その他（第 48 ～ 53 図）

挿図番号		図版番号	出土位置	出土層位	種別	器種	法　量（cm）			色　調	器面調整／文様等	胎土	焼成	備　考
掲載図	番号						口径	底径	器高					
48	1	22	A 区北側tr 付近	造成土	磁器	碗（中形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰色	外面：藍色で圏線	密	良好	肥前系，陶胎染付 九陶編年Ⅳ－1期 （1690～1740年代）
48	2	22	北面石垣外側tr	造成土	磁器	碗（中形～大形）				内外面：（釉）オリーブ灰色 胎土：黄灰色	外面：緑灰色で圏線	密	良好	肥前系，陶胎染付，高台底 九陶編年Ⅳ－1期 （1690～1740年代）
48	3	22	C 区2-2tr 炭置場上	盛土 （2～3期）	磁器	碗（中形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で花	密	良好	肥前系 九陶編年Ⅳ期 （1690～1780年代）
48	4	22	A・B 区東西横断tr 東壁	盛土 （～1期）	磁器	碗（中形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：淡青色で圏線	密	良好	肥前系 九陶編年Ⅳ期 （1690～1780年代）
48	5	22	高殿南3tr 暗渠施設上面	盛土 （1～2期）	磁器	碗の蓋	（10.2）	つまみ径 （3.7）	2.5	外面：（青磁釉）明青灰色 内面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	内面：暗青色で斜め格子・圏線・底部中央にコンニャク印判	密	良好	外青磁（6とセット？） 九陶編年Ⅳ期－2期後半 （1760～1780年代）
48	6	22	押立柱礎石 根固め石上面	造成土	磁器	碗				外面：（青磁釉）明青灰色 内面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	内面：淡青色で圏線	密	良好	外青磁（5とセット？） 九陶編年Ⅳ期－2期後半 （1760～1780年代）
48	7	22	C 区2-2・2-4tr 炭置場上	盛土 （2～3期）	磁器	碗				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で風景？	密	良好	広東碗 九陶編年Ⅴ期前半 （1780～1840年代）
48	8	22	A 区北側tr 炭置場直上	盛土 （2～3期）	磁器	碗		（6.0）		内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：淡青色で帯線・圏線	密	良好	広東碗，高台底 九陶編年Ⅴ期前半 （1780～1840年代）
48	9	21 22	高殿南1～2tr	造成土	磁器	碗（大形）		（6.0）		内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で縦方向の線・圏線 内面：青色で格子・帯線・圏線，底部に草花	密	良好	肥前系，高台底 19世紀前半頃
48	10	22	東面石垣外側tr	造成土	磁器	碗（中形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	内外面：青色で草花？	密	良好	肥前系 19世紀前半頃
48	11	22	A 区北側tr 炭置場直上	盛土 （2～3期）	磁器	碗（中形）	（11.1）			内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：暗青色で草花 内面：暗青色で圏線	密	良好	肥前系 19世紀前半頃
48	12	22	高殿南1～2tr	造成土	磁器	碗（小形）	（6.6）	（2.9）	4.3	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草花，圏線	密	良好	肥前系，高台底 19世紀前半頃
48	13	21	東面石垣外側tr	造成土	磁器	碗（筒形）	（6.6）	（3.3）	5.5	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：暗青色で花，圏線	密	良好	肥前系，高台底 19世紀前半頃
48	14	21	高殿南1～2tr	造成土	磁器	碗（筒形）	6.6	3.5	（5.6）	内外面：（釉）灰白色 胎土：白色	外面：淡青色で線描，圏線	密	良好	肥前系，高台底 19世紀前半頃
48	15	22	高殿南4tr	盛土 （4期以降）	磁器	碗（筒形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草，圏線	密	良好	肥前系 19世紀前半頃
48	16	22	C 区1tr	造成土	磁器	碗（大形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草花，圏線	密	良好	肥前系 幕末～明治前半頃
48	17	22	史跡指定範囲隣接地試掘10tr	作土層	磁器	碗（中形）				内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で唐草模様，圏線 内面：青色で圏線	密	良好	肥前系 幕末～明治前半頃
48	18	22	高殿南2tr	造成土	磁器	碗（中形）		（4.0）		内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草花 内面：青色で連続雷文様，草花？，圏線	密	良好	肥前系，高台底 幕末～明治前半頃
48	19	21	高殿南3tr	盛土 （4期以降）	磁器	碗（中形）	（10.6）	（4.0）	5.9	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草花，圏線 内面：青色で圏線	密	良好	肥前系，高台底 幕末～明治前半頃
48	20	22	D 区	盛土 （4期以降）	磁器	碗（小形）	（6.1）			内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：暗オリーブ色で野菜・巾着など	密	良好	瀬戸新製焼 幕末～明治前半頃
48	21	22	囲炉裏跡	埋土 （3～4期）	磁器	碗（小形）		2.4		内外面：（釉）白色 胎土：白色	内面：底部中央に金色で円紋に放射線	密	良好	瀬戸新製焼，高台底 幕末～明治前半頃
48	22	22	高殿南3tr	盛土 （4期以降）	磁器	碗（筒形）		（3.5）		内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：緑灰色で草？，圏線	密	良好	肥前系，高台底 幕末～明治前半頃
48	23	21	高殿南3～4tr	造成土	磁器	碗（筒形）	（6.0）	（3.5）	4.9	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で花，圏線	密	良好	肥前系，高台底 幕末～明治前半頃
48	24	22	東面石垣外側tr	造成土	磁器	碗（大形）	（10.8）	（4.1）	5.2	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青藍色で花，圏線 内面：底部に蛇目釉はぎ，墨書	密	良好	高台底，型紙摺り 明治初年以降
48	25	21 23	高殿南2tr	造成土	磁器	碗（大形）	（10.1）	（3.6）	5.7	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で草花，圏線 内面：青色で圏線	密	良好	高台底，型紙摺り 明治初年以降
48	26	21	B 区北側tr	造成土	磁器	碗（大形）	（11.4）	（4.2）	4.7	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青藍色で波・七宝・花など 内面：青藍色で行灯？	密	良好	高台底，型紙摺り 明治初年以降
48	27	21 23	高殿南1～2tr	造成土	磁器	碗（大形）	（10.6）	（3.8）	5.0	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：藍色で花 内面：藍色で草花・行灯，圏線	密	良好	高台底，型紙摺り 明治初年以降
48	28	23	高殿南3～4tr	造成土	磁器	段重（筒形）	（12.1）	（10.9）		内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	外面：青色で花	密	良好	高台底 19世紀前半頃
48	29	23	高殿南2tr	造成土	磁器	皿（大形）	（21.2）	（11.9）	3.1	内外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色	内面：淡青色・暗青色で風景	密	良好	高台底 幕末～明治前半頃
48	30	23	押立柱2 根固め石付近	操業面 （3・4期）	磁器	扉の戸車	長さ 5.0	幅 5.0	厚さ 1.0	内外円面：（釉）灰白色 胎土：灰白色		密	良好	明治期以降
48	31	23	囲炉裏跡付近	造成土	磁器	碍子				外面：（釉）灰白色 胎土：灰白色		密	良好	明治期以降
49	32	23	A 区跡坪 石積み上面付近	操業面 （3・4期）	陶器	碗（大形）				内外面：（釉）にぶい黄橙色 胎土：にぶい黄橙色		密	良好	呉器手形の碗（高台底），九陶編年Ⅲ期（1650～1690年代）又はⅣ期前半（1690～1740年代）
49	33	23	東面石垣外側tr	造成土	陶器	碗（大形）		（5.1）		外面：（釉）灰白色 内面：（釉）淡黄色 胎土：浅黄色		密	良好	高台底 18～19世紀前半頃
49	34	23	高殿北面石垣 石垣直上	操業面 （3・4期）	陶器	碗（筒形）		（4.9）		内外面：（釉）にぶい黄褐色 胎土：にぶい黄橙色～明黄褐色		密	良好	18～19世紀前半頃

挿図番号		図版番号	出土位置	出土層位	種別	器種	法　量（cm）			色　調	器面調整／文様等	胎土	焼成	備　考
掲載図	番号						口径	底径	器高					
49	35	23	高殿南2tr	盛土（2～3期）	陶器	碗（中形）				内外面（釉）：灰白色（透明） 胎土：淡黄色	外面：深緑色で草，赤で花	密	良好	京焼風 19世紀頃
49	36	24	高殿南1～2tr	造成土	陶器	碗（大形）	（12.5）			内外面：（釉）黒色 胎土：明褐灰色		密	良好	石見焼 19世紀頃
49	37	24	東面石垣外側tr	盛土（3～4期）	陶器	碗（大形）	（12.0）			内外面：（釉）黒色 胎土：灰黄色		密	良好	石見焼 19世紀頃
49	38	24	D区	盛土（4期以降）	陶器	碗（中形）				内外面：（釉）浅黄色 胎土：灰白色		密	良好	石見焼 19世紀頃
49	39	24	高殿南2tr	造成土	陶器	碗（中形）		（5.2）		内外面：（釉）灰白色 胎土：浅黄色		密	良好	石見焼，高台底 19世紀頃
49	40	24	高殿南1～2tr	造成土	陶器	鉢	（19.0）			内外面：（釉）オリーブ黄色 胎土：灰黄色		密	良好	石見焼，片口 19世紀頃
49	41	24	C区1tr	造成土	陶器	鉢	（17.2）			内外面：（釉）オリーブ黄色 胎土：灰白色		密	良好	石見焼，片口 19世紀頃
49	42	24	高殿南2tr	造成土	陶器	鉢				内外面：（釉）黒色 胎土：浅黄色		密	良好	石見焼 19世紀頃
49	43	24	高殿南1～2tr	造成土	陶器	鉢		（6.5）		内外面：（釉）オリーブ黄色 胎土：灰色	外面：凹線	密	良好	石見焼，高台底 19世紀頃
49	44	24	高殿南1～2tr	造成土	陶器	鉢		（7.5）		内外面：（釉）浅黄色 胎土：淡黄色		密	良好	石見焼，高台底 19世紀頃
49	45	24	東面石垣外側tr	造成土	陶器	鉢				外面：にぶい赤褐色 内面：（釉）暗赤褐色 胎土：明赤褐色	内面：回転ナデ	密	良好	布志名焼？，碁笥底 底部内面に一部来待釉 19世紀頃
49	46	24	B区北側tr	盛土（2～3期）	陶器	鉢（植木鉢）				内外面：浅黄色	内外面：回転ナデ	密	良好	素焼 19世紀頃
49	47	24	押立柱2 根固め石付近	操業面（3・4期）	陶器	鉢（植木鉢）				外面：淡黄色 内面：浅黄色		密	良好	素焼 19世紀頃
49	48	24	東面石垣外側tr	造成土	陶器	鉢（植木鉢）	（22.0）			外面：（釉）暗赤褐色 内面：にぶい赤褐色 胎土：にぶい赤褐色	内面：ケズリ	密	良好	明治期以降
49	49	25	東面石垣外側tr	造成土	陶器	鉢（植木鉢）		（10.0）		外面：（釉）暗赤褐色 内面：赤褐色 胎土：赤褐色		密	良好	明治期以降
49	50	25	東面石垣外側tr	造成土	陶器	鉢（植木鉢）		（14.6）		外面：（釉）赤褐色～暗赤褐色 内面：暗赤褐色 胎土：にぶい赤褐色		密	良好	碁笥底 全面に薄く釉薬 明治期以降
49	51	25	東面石垣外側tr	盛土（3～4期）	陶器	鍋の蓋（行平鍋）	（17.7）			外面：（釉）暗赤褐色 内面：灰黄色 胎土：灰黄色	内外面：回転ナデ 外面：飛び鉋技法の装飾	密	良好	石見焼 19世紀頃
49	52	25	高殿南1～2tr	造成土	陶器	鍋（行平鍋）				外面：（釉）淡黄色 内面：淡黄色 胎土：淡黄色		密	良好	石見焼 19世紀頃
49	53	25	B区北側tr	盛土（2～3期）	陶器	鍋		（11.0）		外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	底部：回転糸切り後ナデ	密	良好	素焼 内面一部に釉薬 19世紀頃
50	54	25	C区1tr 周辺	盛土（2～3期）	陶器	土瓶				外面：にぶい黄橙色～暗褐色 内面：浅黄橙色 胎土：浅黄橙色		密	良好	石見焼 外面一部に釉薬 19世紀頃
50	55	25	C区1tr 周辺	盛土（2～3期）	陶器	土瓶				外面（釉）浅黄色 内面：浅黄色 胎土：浅黄色～暗褐色		密	良好	石見焼 外面一部に釉薬 19世紀頃
50	56	25	東面石垣外側tr	盛土（3～4期）	陶器	土瓶				外面：（釉）灰緑色 内面：明黄褐色 胎土：浅黄色～灰黄色		密	良好	布志名焼？ 19世紀頃
50	57	25	高殿南1～2tr	造成土	陶器	土瓶の把手				内外面：（釉）黒色 胎土：にぶい赤褐色		やや粗	良好	19世紀頃
50	58	25	高殿南3tr	盛土（4期以降）	陶器	土瓶の注口				外面：（釉）オリーブ黄色 内面：褐色 胎土：灰黄色	外面：螺旋状の凹線	密	良好	石見焼 19世紀頃
50	59	25	押立柱1 根固め石付近	操業面（3・4期）	陶器	壺				内外面：（釉）淡黄色～灰黄色 胎土：淡黄色		密	良好	石見焼 19世紀頃
50	60	26	A区北側tr	盛土（2～3期）	陶器	壺				内外面：（釉）灰オリーブ色 胎土：にぶい黄色		密	良好	石見焼 19世紀頃
50	61	26	北面石垣外側tr	造成土	陶器	壺		（6.1）		内外面：（釉）暗褐色 胎土：灰白色		密	良好	石見焼 来待釉？ 19世紀頃
50	62	26	高殿南1～2tr	造成土	陶器	壺		（13.0）		内外面：（釉）暗赤褐色 胎土：灰色		密	良好	石見焼，碁笥底 来待釉？ 19世紀頃
50	63	26	東面石垣外側tr	盛土（3～4期）	陶器	壺		（7.8）		内外面：（釉）にぶい黄色 内面：（釉）オリーブ黄色 胎土：灰黄色～にぶい黄橙色		密	良好	石見焼 底部内面に2箇所の目跡 19世紀頃
50	64	21	東面石垣外側tr	造成土	陶器	灯火具（秉燭）		3.5		内外面：（釉）黒褐色 内面：（釉）黒褐色 胎土：明赤褐色	底部：回転糸切り	密	良好	19世紀頃
50	65	21	高殿南1～2tr	造成土	陶器	灯火具（脚付火受皿）	5.0	5.1	5.1	内外面：（釉）浅黄色 胎土：淡黄色	口縁：切り込み 底部：回転糸切り，脚部底面の外面に墨書	密	良好	胴部中央内面に煤付着 19世紀頃
50	66	26	東面石垣外側tr	造成土	陶器	灯火具（灯火皿）	（9.6）	（4.1）	2.3	内外面：（釉）浅黄色 胎土：灰白色	外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密	良好	内面に3箇所の目跡 外面の一部に煤付着 19世紀頃
50	67	26	不明	不明	陶器	灯火具（灯火皿）	（8.6）	（4.7）	1.8	外面：明赤褐色 内面：（釉）極暗赤褐色 胎土：にぶい赤褐色	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密	良好	19世紀頃
50	68	26	囲炉裏跡 上面付近	操業面（3・4期）	陶器	人形				内外面：にぶい橙色 胎土：にぶい橙色		密	良好	素焼，型作り，指頭圧痕 表面に微細な雲母 19世紀頃
50	69	26	囲炉裏跡 上面付近	操業面（3・4期）	陶器	人形				外面：（釉）浅黄色～緑色 内面：浅黄色～黒褐色 胎土：淡黄色		密	良好	型作り，内面に煤付着 19世紀頃

挿図番号		図版番号	出土位置	出土層位	種別	器種	法　量（cm）			色　調	器面調整／文様等	胎土	焼成	備　考
掲載図	番号						口径	底径	器高					
50	70	27	押立柱1 上面付近	造成土	陶器	土管	(13.0)			内外面：(釉) 暗赤褐色 胎土：黄褐色		やや粗，5～10㎜程度の砂粒を含む	良好	内面に一部煤付着 来待釉？，釉薬瓦？ 19世紀頃
51	71	20	床釣り	息抜き穴1 (4期)	陶器	土管	10.6	15.2	67.4	内外面：赤色～灰褐色 胎土：赤色	内外面：ナデ	密，3～5㎜大の砂粒をまれに含む	良好	素焼 連結用の受け口部あり 19世紀中頃～後半頃
51	72	20	床釣り	息抜き穴2 (4期)	陶器	土管	10.4	14.7	66.8	内外面：明赤褐色 胎土：明赤褐色	内外面：ナデ	密，3～5㎜大の砂粒をまれに含む	良好	素焼 連結用の受け口部あり 19世紀中頃～後半頃
51	73	20	床釣り	息抜き穴3 (4期)	陶器	土管	20.8	16.2	41.0	外面：(釉) 黄褐色 内面：明赤褐色 胎土：明赤褐色	内外面: 回転ナデ，ケズリ	密，3㎜以下の砂粒をまれに含む	良好	内外面に煤付着 19世紀中頃～後半頃
51	74	20	床釣り	息抜き穴4 (4期)	陶器	土管	21.3	16.05	39.4	外面：(釉) 灰褐色 内面：灰黄褐色～にぶい褐色 胎土：にぶい褐色	内外面: 回転ナデ，ケズリ	密，5㎜以下の砂粒をまれに含む	良好	内外面に煤付着 来待釉？ 19世紀中頃～後半頃
51	75	27	東面石垣外側tr	造成土	土師質 土器	焜炉類		(13.6)		外面：浅黄色 内面：にぶい赤橙色～橙色 胎土：浅黄色	内外面：ナデ	密，3㎜以下の砂粒を少量含む	良好	竈の可能性あり 胴下半部に通気孔 明治期以降
51	76	26	東面石垣外側tr	造成土	土師質 土器	焜炉類		(19.4)		外面：灰白色 内面：淡黄色 胎土：淡黄色	内面：ナデ	やや粗，1㎜以下の砂粒を少量含む	良好	竈の可能性あり 明治期以降
51	77	27	東面石垣外側tr	造成土	土師質 土器	焜炉内部 の サナ部				上面：黒色 下面（脚部）：黄褐色～橙色 胎土：にぶい黄褐色	内外面：ナデ	密，2㎜以下の砂粒を少量含む	良好	全体的に煤付着 明治期以降
51	78	27	高殿南3～4tr	造成土	土師質 土器	焙烙				外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色 胎土：にぶい橙色	内外面：ナデ	密，1㎜以下の砂粒を少量含む	良好	外面・破面に煤付着 19世紀頃
51	79	27	囲炉裏跡	埋土 (3～4期)	土師質 土器	焙烙	(29.4)			内外面：黒色 胎土：黄褐色	内外面：ナデ	密，2㎜以下の砂粒を少量含む	良好	全体・破面に煤付着 19世紀頃
52	80	28	B区北側tr 砂鉄置場上	盛土 (2～3期)	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 28.5	幅 20.8	厚さ 1.5	内外面：灰色 胎土：灰色		密	良好	右桟瓦 破面に一部煤付着
52	81	28	C区1tr 炭置場上	操業面 (2期)	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 15.7	幅 11.1	厚さ 1.5	内外面：灰色 胎土：灰色		密	良好	右桟瓦，差込み部
52	82	28	東面石垣外側tr	盛土 (3・4期)	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 8.7	幅 8.5	厚さ 1.6	外面：黄灰色 内面：黄灰色～黄褐色 胎土：灰色		密	良好	右桟瓦，差込み部
52	83	28	D区	盛土 (4期以降)	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 9.2	幅 9.0	厚さ 1.5	内外面：暗灰色～灰色 胎土：灰色	外面：「山に坂」の刻印	密	良好	右桟瓦
52	84	28	高殿南3～4tr	造成土	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 12.0	幅 5.5	厚さ 1.6	内外面：暗灰色～灰色 胎土：灰色		密	良好	右桟瓦，桟部
52	85	28	東面石垣外側tr	造成土	瓦	燻し瓦 (桟瓦)	長さ 15.3	幅 8.3	厚さ 1.6	外面：灰黄色～黄灰色 内面：灰黄色 胎土：灰色		密	良好	右桟瓦，桟部
52	86	28	東面石垣外側tr	盛土 (3・4期)	瓦	釉薬瓦 (軒丸瓦)	長さ 12.4	幅 8.7	厚さ 2.4	外面：(釉) 暗褐色 内面：明褐色 胎土：明褐色		やや粗	良好	瓦当付近 来待釉？
52	87	28	東面石垣外側tr	盛土 (3・4期)	瓦	釉薬瓦 (雁振瓦)	長さ 8.2	幅 9.3	厚さ 3.1	内外面：(釉) にぶい赤褐色 胎土：明黄褐色		やや粗	良好	角桟の雁振瓦の先端部 来待釉？
52	88	28	高殿南1～2tr	造成土	瓦	釉薬瓦 (桟瓦)	長さ 17.3	幅 29.8	厚さ 1.6	外面：(釉) 暗赤褐色 内面：(釉) 暗赤褐色 胎土：明黄褐色		密	良好	右桟瓦 来待釉
52	89	28	A区跡坪tr	埋土 (4期)	瓦	釉薬瓦 (桟瓦)	長さ 8.7	幅 6.1	厚さ 1.6	外側：(釉) 暗赤褐色 内面：にぶい橙色 胎土：にぶい橙色		密，1㎜以下の砂粒を少量含む	良好	右桟瓦，桟部 破面に一部煤付着
52	90	28	囲炉裏跡 上面付近	操業面 (3・4期)	瓦	釉薬瓦 (桟瓦)	長さ 7.0	幅 5.6	厚さ 1.5	外面：(釉) 暗赤灰色 内面：褐色 胎土：褐色		やや粗い，2㎜以下の砂粒を少量含む	良好	右桟瓦，桟部 破面に一部煤付着
52	91	28	不明	不明	煉瓦	煉瓦	長さ 10	幅 12.6	厚さ 6.1	上面：黒色 下面：明褐色 胎土：明赤褐色		密，1～3㎜大の砂粒をまばらに含む	良好	表面上部のみ被熱 明治期以降
52	92	28	2006年度跡坪tr	埋土 (4期)	砥石	砥石	長さ 6.3	幅 14.5	厚さ 5.1	上面：灰白色 下面：浅黄橙色 胎土：浅黄橙色		密	良好	19世紀以降
52	93	26	D区	造成土	ガラス 瓶	薬瓶	長さ 5.5	幅 2.8	厚さ 1.1	緑色半透明				頸部に円形の陰刻 明治期以降
52	94	26	束柱礎石列付近	操業面 (3・4期)	ガラス 瓶	目薬瓶	長さ 5.3	幅 1.9	厚さ 1.9	無色透明				ゴム製スポイド付属？ 明治期以降
52	95	26	D区	造成土	ガラス 瓶	目薬瓶	長さ 8.5	幅 3.7	厚さ 1.8	淡褐色透明				表面全体に線状の陽刻 明治期以降
52	96	29	A・B区東西横断 tr	盛土 (1～2期)	鉄製品	鎹	長さ 10.2	幅 2.6	厚さ 0.4					磁着度4，メタル度L（●）
52	97	29	C区2tr 炭置場上面	炭層付近 石材上面 (2期)	鉄製品	鎹	長さ 11.1	幅 1.9	厚さ 1.0					
52	98	29	東面石垣外側tr 暗渠施設内	埋土 (1期)	鉄製品	鎹	長さ 7	幅 1.1	厚さ 0.3					磁着度5，メタル度L（●）
52	99	29	B区北側tr	盛土 (2～3期)	鉄製品	鉄釘	長さ 5	幅 0.5	厚さ 0.4					磁着度5，メタル度L（●）
52	100	29	B区	造成土	鉄製品	鉄釘	長さ 6.2	幅 0.3	厚さ 0.3					磁着度4，メタル度L（●）
52	101	29	押立柱1付近	造成土	鉄製品	鉄釘	長さ 11.7	幅 0.5	厚さ 0.5					
52	102	26	D区	造成土	鉄製品	栓抜き	長さ 7.7	幅 3.8	厚さ 0.5					明治期以降
53	103	19	A・B区東西横断 tr	造成土	手水鉢	手水鉢	34.5	24.5	32.0					来待石製

製鉄関連遺物（第 55 ～ 68 図）

挿図番号		図版番号	出土地点No.	出土位置	出土層位	種別	器　種	法　量（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	時　期	備　考
掲載図	番号							長さ	幅	厚さ					
55	104	30	A-25	A区北側tr	盛土	炉壁	上段　上半部	13.5	11.6	8.4	911.75			2～3期	両面に煤付着 成形当時の壁面残存？
55	105	30	B-17	A・B区東西横断tr	盛土	炉壁	上段　下半部	14.6	13.5	13.1	1490.25			1～2期	コーナー部 滓部に砂鉄焼結
55	106	30	F-10	高殿南3tr	盛土	炉壁	上段　下半部	7.2	11.5	4.6	290			2～3期	滓部に砂鉄焼結
55	107	30	–	–	盛土～造成土	炉壁	上段　下半部	11.6	9.8	3.8	290.3			3～4期	滓部に砂鉄焼結
55	108	30	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	上段　下半部	13	14.2	10	1072.5			3～4期	コーナー部 滓部に砂鉄焼結
55	109	30	C-15	C区2tr	盛土	炉壁	中段　上半部	12.3	12.3	6.8	829.79			2～3期	
55	110	30	D-24	高殿南1tr	盛土～造成土	炉壁	中段　上半部	15.7	11.9	5.9	951.2			3～4期	上部に砂鉄焼結，木炭痕跡
55	111	30	D-44	高殿南4tr	盛土～造成土	炉壁	中段　上半部	9.2	16.6	8.8	976.8	3	H（○）	3～4期	含鉄炉壁
56	112	30	D-17	高殿南1tr	炭置場上	炉壁	中段　下半部	6.6	7.4	2.8	138.3			2期	
56	113	30	F-10	高殿南3tr	盛土	炉壁	中段　下半部	13	12	5	492.73	3	H（○）	2～3期	含鉄炉壁
56	114	30	D-17	高殿南1tr	炭置場上	炉壁	中段　下半部	7.8	5.9	6.5	248.6			2期	コーナー部
56	115	31	F-13	高殿南3tr	盛土	炉壁	中段　下半部	13.3	11.3	5	612	6	M（◎）	2～3期	含鉄炉壁
56	116	31	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	中段　下半部	15	15.1	8.7	1068.5			3～4期	木炭再結合
56	117	31	D-27	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	中段　下半部	8.9	8.8	5.2	329.68	3	L（●）	3～4期	含鉄炉壁
56	118	31	D-33	高殿南4tr	盛土	炉壁	下段　上半部	14.8	13.3	9.6	1368.52			2～3期	通風孔付（2箇所）
56	119	31	D-33	高殿南4tr	盛土	炉壁	下段　上半部	15.1	17	5.8	971.3			2～3期	通風孔付
56	120	31	D-33	高殿南4tr	盛土	炉壁	下段　上半部	11.7	12	5.5	502.97			2～3期	通風孔付
57	121	31	F-10	高殿南3tr	盛土	炉壁	下段　上半部	14.1	17.9	8.2	1429.73			2～3期	通風孔付（2箇所）
57	122	31	F-13	高殿南3tr	盛土	炉壁	下段　上半部	12.6	8.1	6.1	373.54			2～3期	通風孔付
57	123	32	–	–	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	13	17.8	7.5	1187.5			2～3期	通風孔付（2箇所）
57	124	32	A-26	床釣り掘形付近	たたら操業面上	炉壁	下段　上半部	10.7	9	4.4	254.1			3～4期	通風孔付
57	125	32	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	12	7	6	365.5	4	L（●）	3・4期	含鉄炉壁，木炭再結合
57	126	32	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	10.7	8.7	5.5	348.74	3	L（●）	3～4期	含鉄炉壁
57	127	32	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	15.5	14.8	7	956.55			3～4期	通風孔付
57	128	32	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	17.3	16.2	6	1779.8			3～4期	通風孔付（2箇所）
58	129	33	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	23.3	17.4	11.5	2828.5			3～4期	通風孔付（全形残存）
58	130	32	D-27	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　上半部	11.4	15.1	8.3	992.62			3～4期	通風孔付（2箇所）
58	131	32	東外-5	東面石垣外側tr	盛土	炉壁	下段　下半部	16.2	18.8	11.5	2440			1～2期	
58	132	33	B-17	A・B区東西横断tr	盛土	炉壁	下段　下半部	11.2	16.3	8.5	1237.66			1～2期	炉の基底面付
59	133	34	A-25	A区北側tr	盛土	炉壁	下段　下半部	20.3	19.1	14.5	3420			2～3期	
59	134	33	B-15	A・B区東西横断tr	盛土	炉壁	下段　下半部	17.2	18.4	8.6	1658.7	1	M（◎）	2～3期	含鉄炉壁，木炭再結合
59	135	33	C-15	C区2tr	盛土	炉壁	下段　下半部	15.1	18.6	8	1703.59			2～3期	炉の基底面付
59	136	34	D-35	高殿南4tr	盛土	炉壁	下段　下半部	11	11.7	7.2	705.2			2～3期	流出孔付
60	137	34	D-24	高殿南1tr	盛土～造成土	炉壁	下段　下半部	22	17.4	9.1	2190			3～4期	通風孔（2箇所）
60	138	35	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　下半部	22.1	17.5	11	3620			3～4期	工具痕付
60	139	34	D-27	高殿南2tr	盛土～造成土	炉壁	下段　下半部	11.6	11.6	7.3	878.11	3	L（●）	3～4期	含鉄炉壁
60	140	34	–	–	–	炉壁	下段　下半部	9.8	8.5	5.4	340			3～4期？	流出孔付
61	141	35	B-18	A・B区東西横断tr	盛土	鉄滓類	流出孔滓	6.2	7.8	4.7	289.26			1～2期	下面に土砂付着
61	142	35	C-11	C区2tr	たたら操業面付近	鉄滓類	流出孔滓	9.5	10	5.3	525.56			2期	炉壁が一部付着
61	143	35	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	流出溝滓	5.5	13.5	4.2	170.0			2～3期	流れ皺付，下面に土砂付着
61	144	35	D-3	D区	盛土～造成土	鉄滓類	流出溝滓	5.0	7.9	2.1	72.05			3～4期	流れ皺付，下面に土砂付着
61	145	35	A-25	A区北側tr	盛土	鉄滓類	単位流動滓	3.8	4.5	0.8	22.9			2～3期	
61	146	35	D-37	高殿南4tr	盛土～造成土	鉄滓類	単位流動滓	4.5	6.5	1.0	38.49			3～4期	
61	147	35	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	単位流動滓	3.6	7.2	1.3	44.42			2～3期	
61	148	35	D-1	D区	盛土～造成土	鉄滓類	単位流動滓	3.6	4.5	2.0	52.3			3～4期	
61	149	35	A-8	本床	本床埋土	鉄滓類	単位流動滓	2.0	4.9	1.0	16.9			4期	
61	150	35	D-45	2006年度湯溜まりtr	埋土	鉄滓類	単位流動滓	5.3	6.6	1	51.4			4期	
61	151	35	D-45	2006年度湯溜まりtr	埋土	鉄滓類	単位流動滓	2.5	3.7	1.1	16.7			4期	
61	152	35	B-17	A・B区東西横断tr	盛土	鉄滓類	流動滓	5.5	7.8	4.3	132.36			1～2期	
61	153	35	B-2	砂鉄置場礎石上面	砂鉄置場上	鉄滓類	流動滓	6.8	4.3	2.5	85.0			2期	
61	154	35	C-21	C区2tr	盛土	鉄滓類	流動滓	7.8	7.8	3.8	197.1			2～3期	
61	155	35	F-11	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	流動滓	8.7	7	3.9	124.5			2～3期	下面に土砂付着
61	156	36	D-37	高殿南4tr	盛土～造成土	鉄滓類	流動滓	5.3	8.1	3.1	184.7			3～4期	下面に土砂付着
61	157	36	A-6	本床	本床埋土	鉄滓類	流動滓	7.9	7.6	5.5	239.2			4期	
62	158	36	D-35	高殿南4tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	10.4	12.5	6.1	706.2			2～3期	側面～底面に土砂付着
62	159	36	D-35	高殿南4tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	15.4	16	6.5	1173.45			2～3期	工具痕付（幅約2.7cm）
62	160	36	F-11	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	14	11.5	6	811.7			2～3期	
62	161	36	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	23.1	24.7	11.3	4910			2～3期	湯溜まりで固着？
62	162	36	F-13	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	16.4	15.2	13.4	1612.3			2～3期	湯溜まりで固着？

挿図番号		図版番号	出土地点No.	出土位置	出土層位	種別	器種	法量（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	時期	備考
掲載図	番号							長さ	幅	厚さ					
62	163	36	F-13	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉外滓	13	8.8	6.9	537.59			2～3期	工具痕付（最大幅約3.0cm）
62	164	36	東外-9	東面石垣外側tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉外滓	12.9	7.4	6	588.76			3～4期	
62	165	36	C-20	C区1tr	たたら操業面上	鉄滓類	工具付着滓	3.4	5.6	0.9	25.1			2期	工具痕付（幅約2.3cm）
62	166	36	D-17	高殿南1tr	炭置場上	鉄滓類	工具付着滓	3.8	6.0	1.6	42.21			2期	工具痕付（幅約2.3cm）
62	167	36	A-23	A区北側tr	盛土	鉄滓類	工具付着滓	4.0	10.3	2.5	71.66			2～3期	工具痕付（幅約2.8cm）
62	168	36	D-34	高殿南4tr	盛土～造成土	鉄滓類	工具付着滓	3.6	4.3		20.4			3～4期	工具痕付（幅約2.7cm）
62	169	36	D-9	D区	たたら操業面上	鉄滓類	工具付着滓	3.6	6	1.4	37.56			3・4期	工具痕付（幅約2.4cm）
63	170	37	D-33	高殿南4tr	盛土	鉄滓類	炉底塊（含鉄）	16.4	14.9	8.5	1298.2	3	H（○）	2～3期	木炭再結合
63	171	37	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉底塊（含鉄）	9.7	10	5.1	318.52	4	M（◎）	2～3期	
63	172	37	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉底塊（含鉄）	10.1	13.4	13.3	1091	2	H（○）	3～4期	木炭再結合
63	173	37	A-27	床釣り掘形付近	たたら操業面上	鉄滓類	炉底塊（含鉄）	7	6.8	5.4	391.2	6	M（◎）	3・4期	
63	174	37	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉底塊	24.2	12.3	8.9	1907.4			3～4期	
63	175	37	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉底塊	19.2	20.1	10.4	2910.3			3～4期	
63	176	37	D-26	高殿南2tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉底塊	40.8	22.8	19.4	11050			3～4期	
64	177	38	C-14	C区2tr	盛土	鉄滓類	炉内流動滓（含鉄）	9.7	6.7	4.5	269.4	4	M（◎）	2～3期	炉壁・木炭付着
64	178	38	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓流動滓（含鉄）	11.6	8.8	7.4	471.12	3		2～3期	土砂付着
64	179	38	C-3	C区2tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉内流動滓（含鉄）	11.8	9.5	6.7	521.1	5	M（◎）	3～4期	炉壁・木炭付着
64	180	39	D-42	高殿南4tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉内流動滓（含鉄）	9.8	12.9	6.3	552.88	4	H（○）	3～4期	
64	181	38	D-35	高殿南4tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（再結合滓）	10.2	10.1	4.1	311.89	4	H（○）	2～3期	炉壁付着，木炭再結合
64	182	38	F-16	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（再結合滓）	13.8	15.5	6.2	941.39	3	H（○）	2～3期	炉壁付着，釉薬瓦結合
64	183	38	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（再結合滓）	13.4	12	7.2	805.7	2	H（○）	2～3期	炉壁付着，木炭再結合
64	184	38	A-17	西小舟付近	たたら操業面上	鉄滓類	炉内滓（再結合滓）	11.5	10.1	4.3	520.9	2	H（○）	3・4期	木炭再結合，白色土砂付着
65	185	39	東外-6	東面石垣外側tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7.3	7	8	336.3	4	L（●）	1～2期	金属学的分析No.KED-3
65	186	39	D-19	高殿南1tr	たたら操業面上	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7.4	7.5	3.8	276.6	4	L（●）	2期	金属学的分析No.KED-2
65	187	39	C-14	C区2tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	5.7	4.7	2.2	113.9	5	L（●）	2～3期	表面に土砂付着
65	188	39	F-17	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	9.6	9.1	5.9	622.4	8	特L（☆）	2～3期	金属学的分析No.KED-4
65	189	39	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	13.1	12.2	5	409.95	2	L（●）	2～3期	表面に土砂付着
65	190	39	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7.5	10.7	5.5	297.7	7	L（●）	2～3期	
65	191	39	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7.5	10.8	5.5	278.6	7	L（●）	2～3期	
65	192	39	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	9.8	15.8	10.1	1427.25	2	H（○）	2～3期	下面に土砂付着
65	193	39	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	13.8	11.5	8.9	802.62	2	L（●）	2～3期	下面に土砂付着
65	194	39	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7.2	9.8	5.3	257.7	7	L（●）	2～3期	下面に土砂付着
65	195	39	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	11	11.4	8.1	650.19	5	L（●）	2～3期	工具付着滓再結合？
65	196	40	F-17	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	3.7	3.8	1.2	14.2	6	M（◎）	2～3期	
65	197	40	F-17	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	4.8	4.3	1.7	33.3	6	M（◎）	2～3期	
66	198	40	D-1	D区	盛土～造成土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	5.7	4.1	3.4	87.95	3	L（●）	3～4期	
66	199	40	F-4	押立柱4付近	盛土～造成土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	6	6.1	3	112.2	5	H（○）	3～4期	
66	200	40	D-44	高殿南4tr	盛土～造成土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	12	11.8	6.5	84.45	3	L（●）	3～4期	炉壁付着，木炭再結合
66	201	40	A-9	本床	本床埋土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	7	5.9	4.4	98.6	5	H（○）	4期	全面的に木炭付着
66	202	40	A-5	本床	本床埋土	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	12.1	6.9	6.4	175	5	H（○）	4期	全面的に木炭付着
66	203	40	-	-	-	鉄滓類	炉内滓（含鉄）	5.1	2.7	3.2	30.5	5	L（●）	不明	
66	204	40	C-16	C区2tr	盛土	鉄滓類	工具付着滓（含鉄）	2.5	4.2	0.8	21.05	2	H（○）	1～2期	工具痕付（幅約3.4cm）
66	205	40	A-2	A区	盛土～造成土	鉄滓類	工具付着滓（含鉄）	3.4	3.2	0.8	10.8	2		3～4期	工具痕付（幅約4.4cm）
66	206	40	B-11	B区	盛土～造成土	鉄滓類	工具付着滓（含鉄）	2.8	2.3	1.1	6.3	2		3～4期	工具痕付（幅約2.8cm）
67	207	40 42	A-24	A区北側tr	盛土	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	5.1	3.5	2.3	58.7	5	L（●）	2～3期	
67	208	40 42	B-10	B区	盛土	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	6.1	7	3.7	169.8	5	L（●）	2～3期	
67	209	40 42	A-1	A区	盛土～造成土	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	4.4	8.3	2.3	157.3	8	特L（☆）	3～4期	金属学的分析No.KED-1 下面に木炭付着
67	210	40 42	A-26	床釣り掘形付近	たたら操業面上	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	6.7	2.9	3	73.9	8	特L（☆）	3・4期	
67	211	40 42	A-26	床釣り掘形付近	たたら操業面上	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	8.3	20.5	3.4	550.9	6	特L（☆）	3・4期	下面に木炭付着
67	212	40 42	A-27	床釣り掘形付近	たたら操業面上	鉄滓類	銑鉄塊（流れ銑）	9.5	4	2.5	122.6	6	L（●）	3・4期	
67	213	40 42	B-8	B区北側tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	3.6	2.5	2.2	35.2	5	L（●）	2～3期	
67	214	40 42	D-30	高殿南2tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	6.3	6.9	3.2	94.9	6	L（●）	2～3期	鉄片・土砂付着

挿図番号		図版番号	出土地点No.	出土位置	出土層位	種別	器　種	法　量（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	時　期	備　考
掲載図	番号							長さ	幅	厚さ					
67	215	40 42	D-35	高殿南4tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	9	5.7	7.4	240.3	5	L（●）	2～3期	炉壁・木炭付着
67	216	40 42	F-7	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	8	9.1	7.9	474.24	6	L（●）	2～3期	滓部・土砂付着
67	217	41 42	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	2.5	4	1.3	20.49	6	L（●）	2～3期	
67	218	41 42	F-10	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	4.9	4.6	2.8	100.5	6	特L（☆）	2～3期	
67	219	41	F-11	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	8	7	5.6	272.5	9	特L（☆）	2～3期	鉄塊固着
67	220	41 42	F-13	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	7.7	7.4	6	441.9	8	特L（☆）	2～3期	土砂付着
67	221	41 42	F-13	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	8	5.4	5.4	214.1	8	特L（☆）	2～3期	木炭付着
67	222	41 42	F-16	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	11	8	5	384	6	特L（☆）	2～3期	滓部付着
67	223	41 42	F-15	高殿南3tr	盛土	鉄滓類	鉄塊系遺物	9.5	6.3	6	255.76	4	L（●）	2～3期	滓部付着
67	224	41 42	A-1	A区	盛土～造成土	鉄滓類	鉄塊系遺物	5.2	2.7	2.6	41.3	6	L（●）	3～4期	鉄片・土砂付着
67	225	41 42	A-3	A区	盛土～造成土	鉄滓類	鉄塊系遺物	5.5	3.7	2.8	50.6	6	L（●）	3～4期	鉄片・土砂付着
67	226	41 42	A-10	A区	盛土～造成土	鉄滓類	鉄塊系遺物	6.7	4.7	3.5	83.1	5	L（●）	3～4期	木炭付着
67	227	41 42	C-27	押立柱1付近	たたら操業面付近	鉄滓類	鉄塊系遺物	7.6	7.2	4.3	214.4	6	L（●）	3・4期	木炭付着
67	228	41 42	F-4	押立柱4付近	盛土～造成土	鉄滓類	鉄塊系遺物	6.5	4.1	2.2	99.5	6	特L（☆）	3～4期	
68	229	41	砂鉄8	A・B区東西横断tr	盛土	砂鉄	砂鉄							～1期	砂鉄試料No.12
68	230	41	砂鉄11	C区1tr	砂鉄置場土	砂鉄	砂鉄							2期	砂鉄試料No.13
68	231	41	砂鉄14	東面石垣外側tr	盛土	砂鉄	砂鉄							3～4期	砂鉄試料No.14
68	232	41	-	東面石垣外側tr	暗渠施設埋土	木炭	木炭	7	4.3	1.5	18.95			1期	年代測定試料AMS-2

第４章　製鉄関連具・石造物の調査成果

第１節　製鉄関連具

ここでは，製鉄関連具について報告する。製鉄関連具は，田儀櫻井家のたたら場で村下や炭坂を務めていた川上家[1]が所蔵するものである[2]。川上家は 1744 ～ 1748 年（延享期）頃から越堂釛山内に代々居住していたと考えられ[3]，これらの製鉄関連具は越堂釛を含む田儀櫻井家のたたら場の操業と関連が深いと考えられる。

１　製鉄道具（第 73 図，図版 18）

打鍬

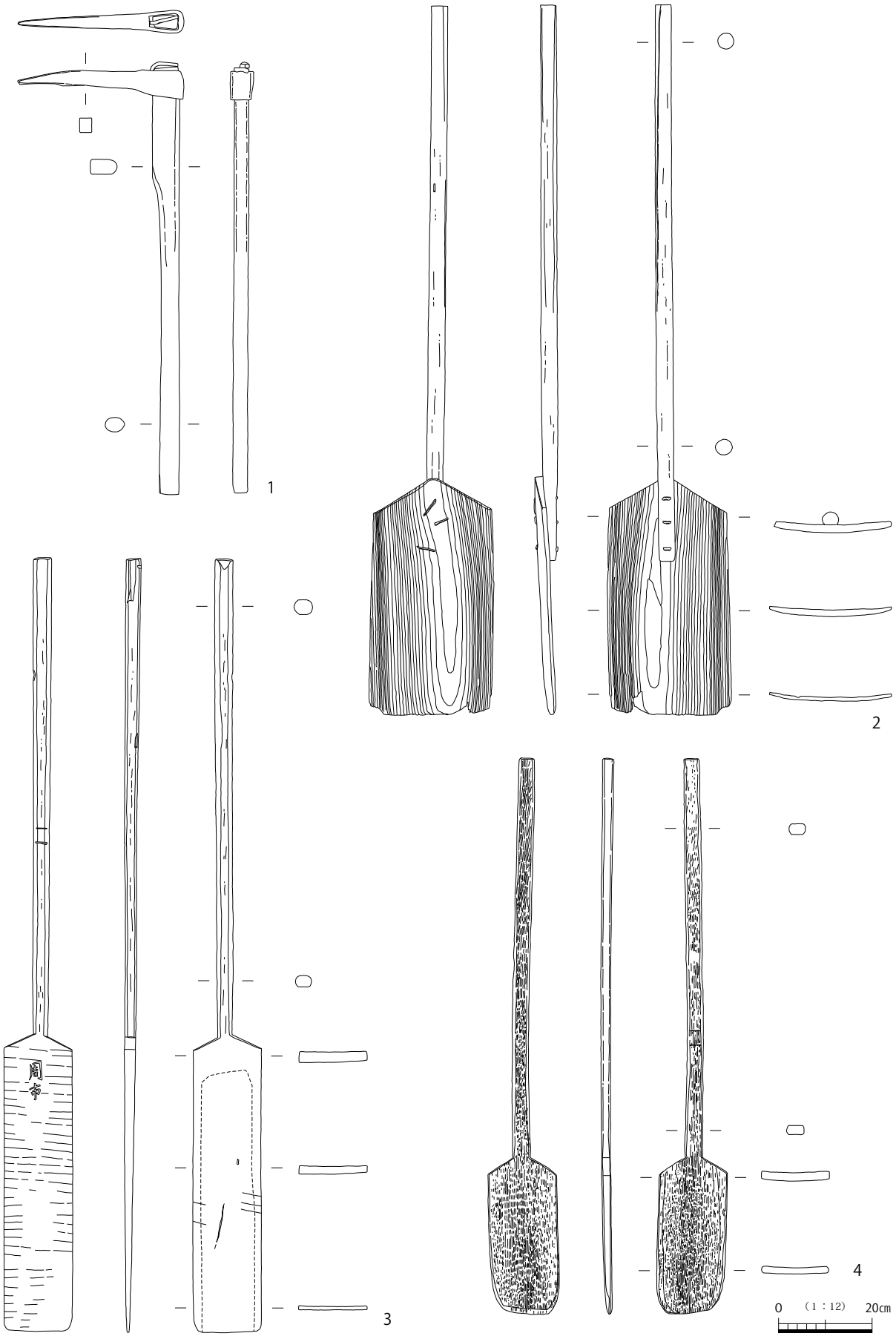
１は打鍬で，砂鉄採掘場である鉄穴場で砂鉄が含まれる山肌を掘り崩すために使われた道具である。全長は 92.6cm，木柄の長さは 89.7cm で，刃部の長さは 35.4cm，基部幅約 5.0cm，刃部幅 3.2cm であり，刃部の断面形はやや正方形に近い長方形である。木柄はカシ材と考えられ[4]，鉄製の刃部が直角にはめ込まれて装着されている。木柄は下部が断面楕円形であり，刃部に近い部分は，断面形は長方形に近いが，背の部分が半円形状に丸みを帯びる。また，木柄から刃部が抜けないように，上端部に楔が打ち込まれ，さらに楔の先端を折り返して固定している。

種鋤

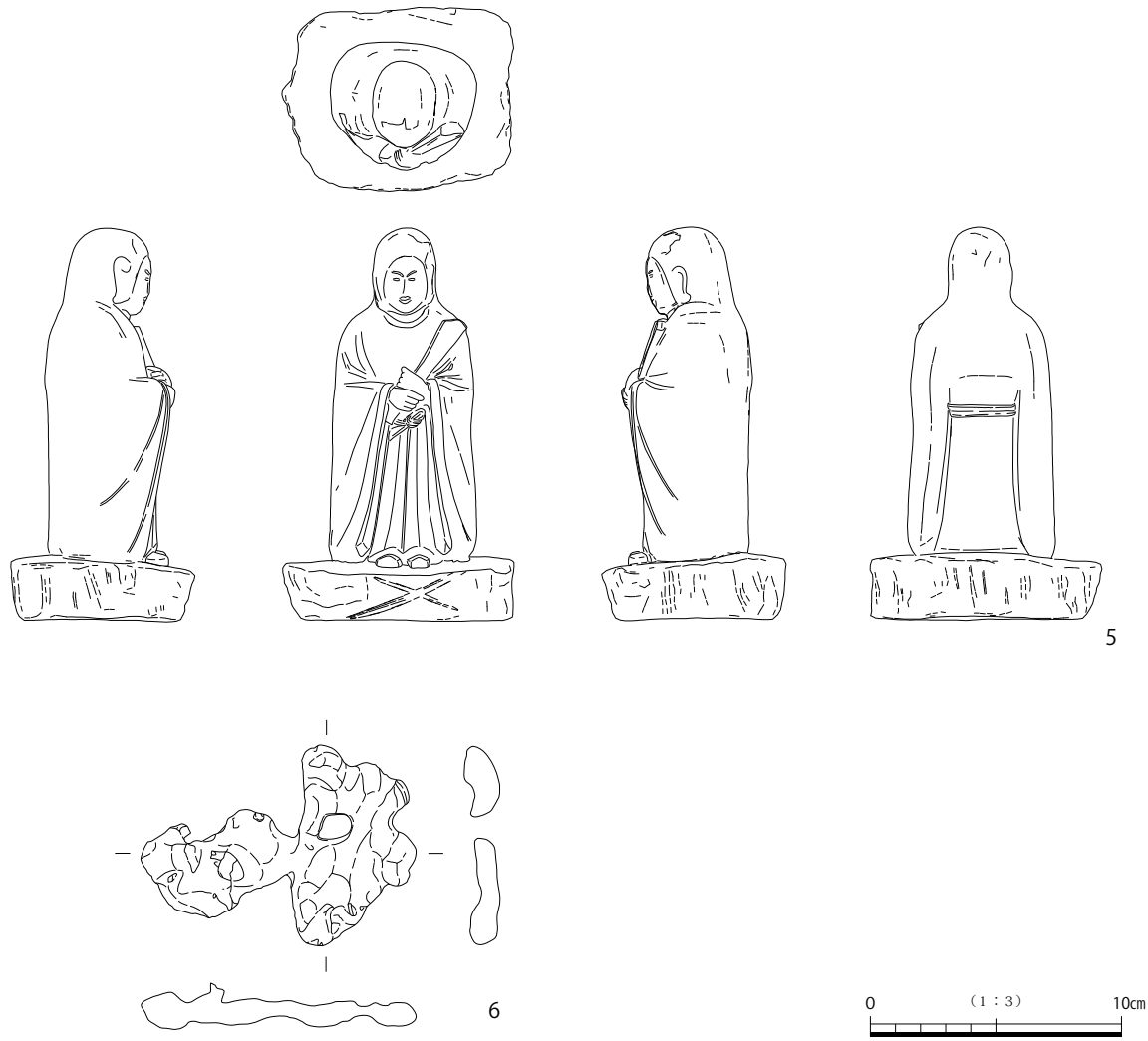
２は製鉄炉に砂鉄を投入する道具の種鋤である。全長は 153.2cm，断面形が円形の丸棒状の木柄は長さ 102.6cm を測り，身は幅 26.6cm で長さ 50.6cm である。身はスギやヒノキなどの針葉樹の木材を用いていると考えられ，断面は内湾しており，砂鉄を掬い入れるのに適した形状となっている。肩部はハの字状に整えられている。鋤先はやや欠けているが，概ね残存状況は良好である。木柄と身は，木柄側から３箇所，身側から３箇所が長細い金具で固定されている。全体的に軽量であり，長時間の操業時において砂鉄を製鉄炉内に投入する労力を軽減するとともに，投入量の細やかな調整が行えるように軽量な素材を選定したと思われる。

釜がい

３・４は製鉄炉の成形時に余分な粘土を削る道具の釜がいであり，これらはカシ材と考えられる。３は大形の釜がいで，柄から身まで一体となっている。全長は 164.5cm，柄の長さは 101.6cm，身は幅 14.5cm で長さ 62.9cm を測る。身は若干内側に湾曲して先端は細く加工され，肩付近から先端部にかけて徐々に薄くなる。裏面は身の成形時の加工痕が残るほか，「周市」と銘が刻まれている[5]。４も釜がいであり，３に比べると小形である。全長は 118.5cm，柄の長さ 85.0cm，身の幅は 15.5cm で長さは 33.5cm である。製鉄炉の成形のなかで，工程に応じて大小の釜がいを使い分けた可能性がある。なお，４の身の先端は，丸みを帯びて３ほど先端が薄くなっていないため，金属製などの別部品の先端部が付属した可能性もある。



第 73 図　製鉄関連具（1）



第 74 図　製鉄関連具（2）

2　神像・初花（第 74 図，図版 19・41）

神像

5 は神像である[(6)]。砂岩製でかなりの重量感がある。法量は，総高 15.5cm で像高は 13.0cm を測り，台座の幅は 9.5cm，奥行きは 7.2cm を測る。重量は 681.3g である。頭部の左右には耳の表現がなされ，手には檜扇を携えている。全体的に丸みを帯びており，柔和な印象を受ける。全体に黒彩が認められるが，その下塗りには赤彩が確認でき，当時は色彩豊かな表現がなされていた可能性が考えられる。台座正面には線刻が認められるが，それ以外の面には文字や印などは見受けられない。後述する初花とともに祀られていたとのことであり，確実ではないが，たたら製鉄や鍛冶，鋳物師など金属生産・加工に従事した人々に厚く信仰された金屋子神像の可能性がある。

初花

6 は初花で，重量は 217.6g である。田儀櫻井家のたたら操業に深く関わった川上家で大切に保管されており，越堂鈩で産出した初花の可能性がある。信仰の対象として，神像とともに祀られていたと考えられる。

註

（1）川上家については文書史料が残されており，田儀櫻井家におけるたたら操業の実態を詳細に示す良好な史料となっている（藤原 2009）。また，川上家文書においてたたら操業の様子が把握できる史料（川上家文書・整理番号１）（相良監修 2009）は近年詳細に検討されており，川上家の川上勝平が 19 世紀中頃に田儀櫻井家のたたら操業の中心となる村下や炭坂を任されたほか，たたらの普請や床釣りの修繕を行っていたことが明らかにされている（鳥谷 2017）。

（2）川上家文書を所蔵している川上晴夫氏のご厚意により，保管されていた製鉄関連具を借用して報告している。

（3）智光院文書（智光院文書・整理番号９）（相良監修 2009）には越堂鈩の山内労働者の名が記され，この頃には越堂鈩で山内が形成されてたたら操業が行われていたことが分かる（庄司 2009）。そのため，田儀櫻井家のたたら操業と関わりの深い川上家の川上勝平が越堂鈩の操業にも関わっていた蓋然性が高いと考えられる。

（4）製鉄関連具の木製品の材質は，渡辺正巳氏からご教示をいただいた。

（5）智光院文書（智光院文書・整理番号９）には，川上家の川上勝平の子が周市であることが記されており，田儀櫻井家のたたら場の操業を担っていた勝平の子である周市の名が製鉄具の釜がいに記されていることを鑑みれば，川上周市も越堂鈩などの操業に関わっていた可能性が高いと考えられる。

（6）神像の特徴は，的野克之氏からご教示をいただいた。また，神像の石材については，中村唯史氏からご教示を得た。

参考文献

相良英輔監修 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告８　出雲市教育委員会

庄司幸恵 2009「目録解題　智光院文書」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告８　出雲市教育委員会　194 頁

鳥谷智文 2017「たたら経営に携わる人々の特質―田儀櫻井家を事例として―」『たたら研究　特別号（60 周年記念論文集）』たたら研究会　137 ～ 150 頁

藤原雄高 2009「目録解題　川上家文書」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告８　出雲市教育委員会　195 頁

第２節　越堂鉾山内の石造物

越堂鉾山内の東側にある亀山山麓には，田儀櫻井家の６代目当主である幸左衛門義民が願主として記された如来坐像が確認されている（石原編 2008）（第 75 図）。なお，現在は如来坐像を含めて３体の石造物が並列して存在し，中央には地蔵，向かって左側には三宝荒神，そして右側には如来坐像が鎮座する[(1)]。ここでは，如来坐像について報告する[(2)]。

如来坐像は福光石製であり，法量は総高 48.7cm（蓮台含む），像高 42.5cm，蓮台幅 32.7cm（裳裾含む），蓮台奥行き 26.5cm（裳裾含む）である。蓮台には蓮弁文が陽刻で表現されている。如来坐像の頭部の眉間上には白毫が認められる。また頭部の左右はやや横に膨らみ，江戸期の特徴を示している。右手の状態は判然としないが，左手には薬壺を携えていると推測され，薬師如来の可能性がある。背面には「願主／雲刕越道櫻井幸左衛門」と記されている[(3)]。そのため如来坐像は，田儀櫻井家が越堂鉾の経営に携わり，６代義民が当主として活躍した 18 世紀後半頃に造られた可能性が高い。

如来坐像は，越堂鉾でたたら操業が行われていた時期から現在の場所に据えられていたかは不明であるが，越堂鉾山内を見渡せる場所に鎮座しており，当時の越堂鉾山内で信仰の対象となっていたことが想定される。

第 75 図　越堂鉾山内の如来坐像

註

（1）如来坐像は現在，所有者の森山裕司氏によって管理されている。なお，如来坐像は 2009（平成 21）年 6 月に出雲市の指定文化財となっている。

（2）如来坐像の特徴については，的野克之氏からご教示をいただいた。

（3）背面の銘文は鮮明で残存状態が良好であり，造立当時から現在に至るまで，地元で大切に維持・管理されてきたことが窺える。

参考文献

石原　聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会

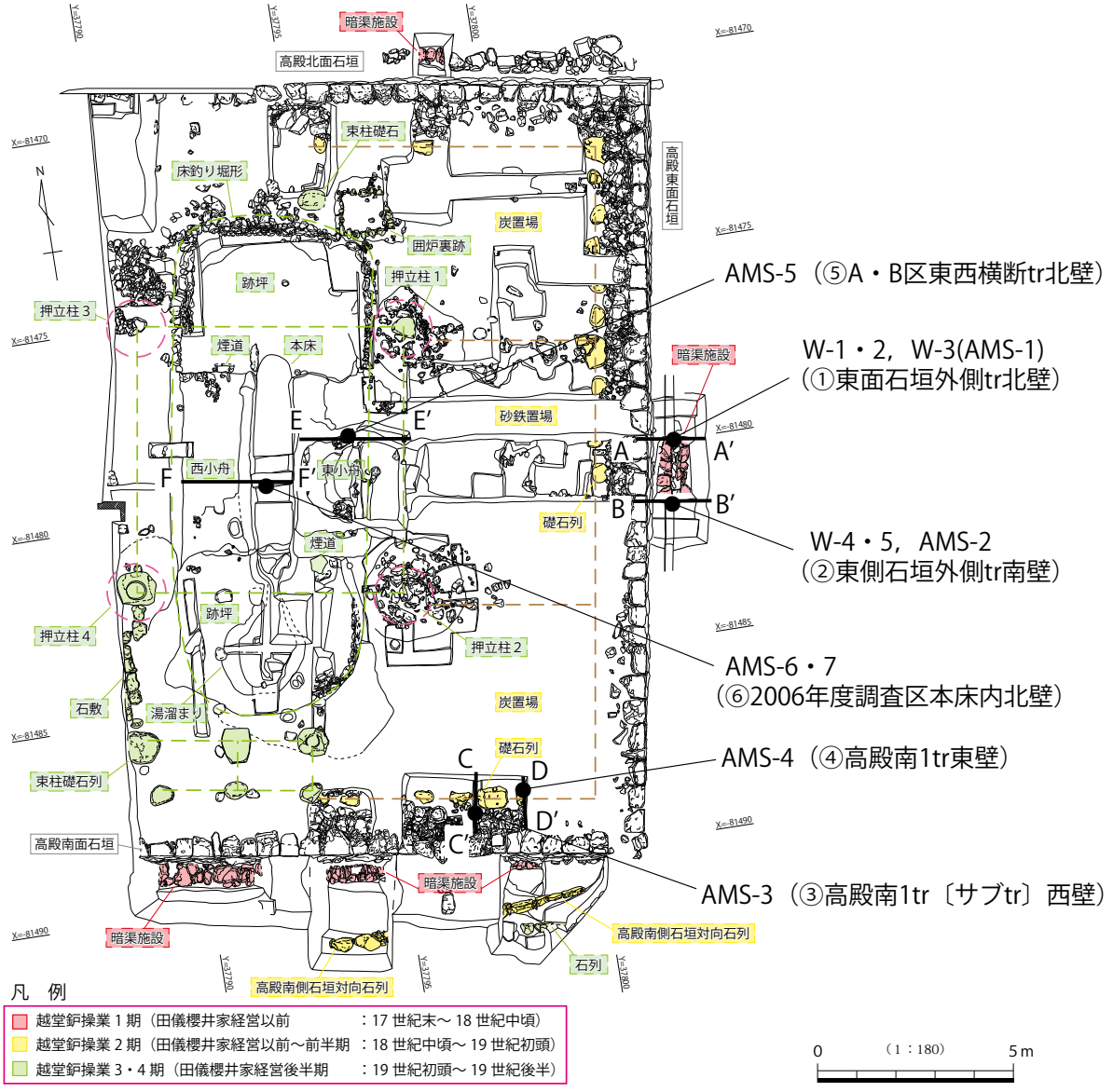
第５章　自然科学分析

第１節　越堂たたら跡出土炭化物のＡＭＳ年代測定・樹種同定

１　はじめに

越堂たたら跡は，島根県東部に位置する出雲市西端部の多伎町口田儀に位置する。河口から直線にして 1 km に満たない田儀川右岸に立地している。

本報告は，越堂たたら跡の発掘調査で出土した炭化物と樹木を対象に，越堂鈩の操業時期（１～４期）を推定するための AMS 年代測定および樹種同定の報告である。越堂たたら跡の遺構や盛土・埋土に伴う測定試料は，文化財調査コンサルタント株式会社が現地で採取した。



第 76 図　越堂たたら跡の遺構配置図と炭化物・樹木試料採取地点

２　分析試料について

第 76 図に試料採取地点を示す。また，詳細な土層図の試料採取地点を第 77 図に示す。さらに，第 14 表に AMS 年代測定試料一覧，第 15 表に樹種同定試料一覧を示す。また，第 14 表には試料の詳細，前処理方法，$\delta^{13}C$ 値と 4 種類の年代を示している。第 15 表には樹種同定試料と同定結果をまとめて示している。

３　分析方法

（1）AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理，更に再度酸洗浄を行った。この後，二酸化炭素を生成，精製し，グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い，半減期：5,568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey2009）を用い，INTCAL20（Reimer et al.2020）を利用した。

（2）樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは，渡辺（2010）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け，文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理している。顕微鏡観察は，光学顕微鏡下で 4 倍～ 600 倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について，顕微鏡写真撮影を行うとともに，島地ほか（1985）の用語に基本的に従い，記載を行った。

４　分析結果

（1）AMS 年代測定結果

年代測定結果を第 14 表および第 78 図に示す。第 78 図には，OxCal ver. 4.4（Ramsey2009）による試料ごとの暦年較正図を示した。第 14 表には，試料の詳細，前処理方法，$\delta^{13}C$ 値と 4 種類の年代を示している。

（2）樹種同定結果

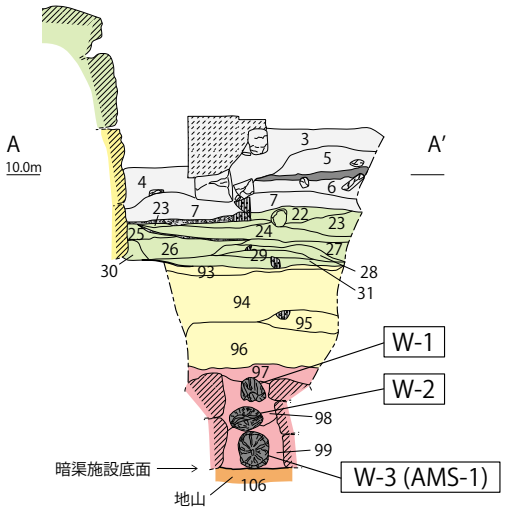
特徴的な試料の記載を分類ごとに行った。また第 15 表に同定結果を示し，顕微鏡写真を稿末（第 81・82 図）に掲載した。

クヌギ節：*Quercus* sub. *Lepidobalanus*（Sect. *Cerris*）sp.

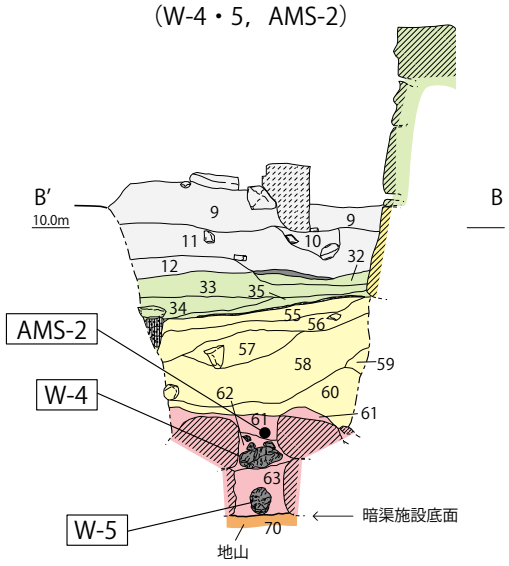
試料 No.W-5（W16112102）

大きい道管が年輪の内側に単独で 1 列に配列する環孔材である。孔圏外の小道管は，ほぼ円形で放射方向に単独で配列している。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースが認められる。周囲仮道管が存在している。道管放射組織間壁孔は不明瞭であるが，柵状を示す。軸方向柔組織は多く存在し，横断面での分布は炭化のため不明であるが，接線状配列と思われる。放射組織は同性で，単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる典型的な複合放射組織である。以上の組織上の特徴から，コナラ属クヌギ節と同定した。

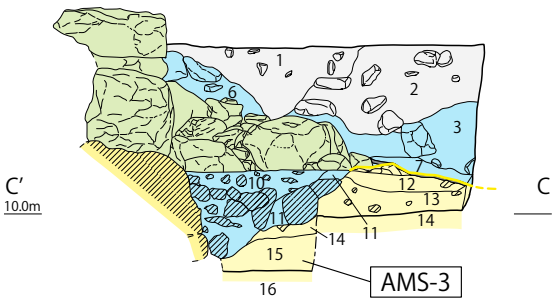
①東面石垣外側トレンチ北壁（第 21 図）
暗渠施設内埋設樹木
（W-1・2，W-3〔AMS-1〕）



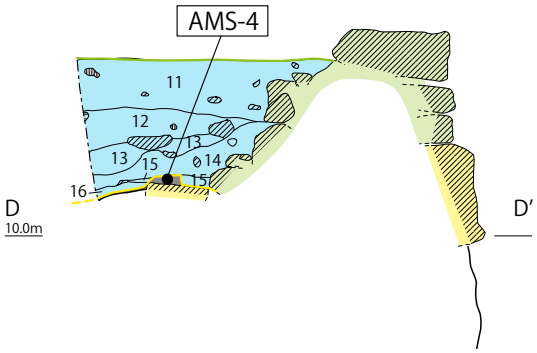
②東面石垣外側トレンチ南壁（第 24 図）
暗渠施設内埋設樹木・埋土内炭化物
（W-4・5，AMS-2）



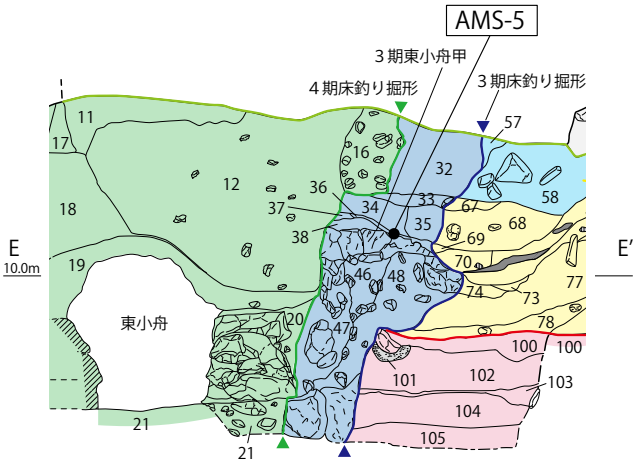
③高殿南１トレンチ（サブトレ）西壁（第 27 図）
石垣床面直上盛土内炭化物（AMS-3）



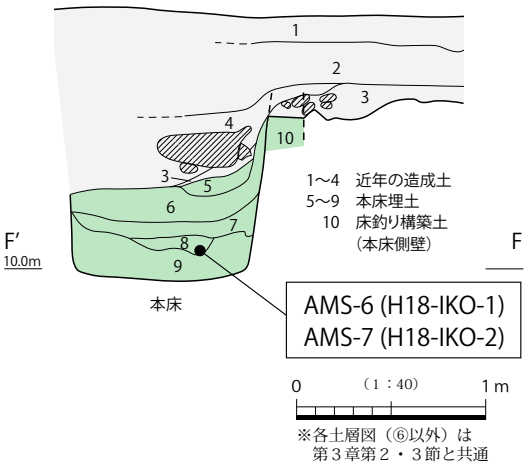
④高殿南１トレンチ東壁（第 26 図）
炭置場上炭化物（AMS-4）



⑤A・B 区東西横断トレンチ北壁（第 21 図）
３期床釣り小舟甲上炭化物（AMS-5）



⑥2006 年度調査区本床北壁
本床埋土内炭化物（AMS-6・7）



第 77 図　越堂たたら跡の炭化物・樹木試料採取地点（土層）

第 14 表　AMS 年代測定試料一覧（測定結果）

試料					前処理	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代*1 (yrBP ± 1σ)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	補正年代*2 (yrBP ± 1σ)	暦年較正年代			測定番号
試料No.	種別	遺跡名	出土地点ほか	重量 (g)						1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	3σ暦年代範囲	(PLD-)
AMS-1	炭化物	越堂たたら跡	東面石垣外側 tr 北壁 暗渠施設内埋設樹木	0.2689	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-27.75 ± 0.12	152 ± 17	106 ± 16	105 ± 15	AD1697-1723 (21.8%) AD1813-1837 (19.5%) AD1879-1914 (27.0%)	AD1693-1727 (25.3%) AD1811-1918 (70.2%)	AD1683-1735 (27.1%) AD1802-1930 (72.6%)	33750
AMS-2	炭化物	越堂たたら跡	東面石垣外側 tr 南壁 暗渠施設埋土内炭化物	47.4218	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-24.52 ± 0.21	103 ± 19	111 ± 18	110 ± 20	AD1695-1724 (20.5%) AD1813-1839 (18.1%) AD1847-1852 (3.0%) AD1869-1871 (1.5%) AD1878-1916 (25.2%)	AD1691-1728 (24.2%) AD1808-1921 (71.2%)	AD1680-1740 (26.2%) AD1752-1764 (0.3%) AD1800-1941 (73.2%)	30614
AMS-3	炭化物	越堂たたら跡	高殿南 1tr（サブ tr）西壁 石垣床面直上盛土内炭化物	5.6402	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-26.15 ± 0.16	229 ± 20	210 ± 20	210 ± 20	AD1655-1675 (24.3%) AD1743-1750 (4.3%) AD1765-1799 (39.6%)	AD1648-1684 (32.8%) AD1736-1803 (57.4%) AD1936-　(5.3%)	AD1642-1690 (33.9%) AD1728-1809 (58.8%) AD1922-　(7.1%)	30613
AMS-4	炭化物	越堂たたら跡	高殿南 1tr 東壁 炭置場上炭化物	5.5232	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-24.93 ± 0.21	165 ± 20	166 ± 20	165 ± 20	AD1672-1688 (11.9%) AD1730-1778 (35.8%) AD1799-1807 (6.1%) AD1925-1944 (14.5%)	AD1665-1696 (17.3%) AD1724-1785 (40.6%) AD1794-1813 (9.9%) AD1838-1878 (6.6%) AD1915-　(21.1%)	AD1659-1710 (18.2%) AD1717-1822 (51.7%) AD1831-1894 (8.0%) AD1905-　(21.8%)	30612
AMS-5	炭化物	越堂たたら跡	A・B 区東西横断 tr 北壁 3 期床釣り小舟甲上炭化物	0.3305	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-28.32 ± 0.16	257 ± 18	201 ± 17	200 ± 15	AD1661-1676 (19.7%) AD1743-1751 (7.4%) AD1765-1799 (41.2%)	AD1656-1684 (26.5%) AD1735-1804 (60.2%) AD1929-　(8.7%)	AD1648-1689 (28.2%) AD1728-1809 (62.1%) AD1923-　(9.5%)	33749
AMS-6 (H18-IKO-1)	炭化物	越堂たたら跡	2006 年度調査区本床北壁 本床埋土内炭化物	2.069	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-24.21 ± 0.14	125 ± 15	135 ± 17	135 ± 15	AD1686-1699 (8.7%) AD1722-1733 (6.6%) AD1805-1814 (5.7%) AD1835-1886 (35.1%) AD1909-1928 (12.1%)	AD1679-1741 (25.0%) AD1752-1764 (2.9%) AD1799-1895 (49.8%) AD1902-1941 (17.7%)	AD1670-1780 (30.9%) AD1796-　(68.8%)	6569
AMS-7 (H18-IKO-2)	炭化物	越堂たたら跡	2006 年度調査区本床北壁 本床埋土内炭化物	2.005	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）	-22.83 ± 0.13	115 ± 15	150 ± 17	150 ± 15	AD1677-1695 (11.9%) AD1725-1743 (11.7%) AD1751-1765 (8.4%) AD1799-1812 (8.7%) AD1839-1845 (2.4%) AD1853-1877 (7.6%) AD1916-1942 (17.7%)	AD1670-1700 (15.2%) AD1721-1780 (28.4%) AD1796-1815 (10.3%) AD1833-1889 (20.0%) AD1902-　(21.6%)	AD1666-1784 (45.6%) AD1795-　(54.1%)	6570

*1 $\delta^{13}C$ 補正無年代　*2 $\delta^{13}C$ 補正年代

第 15 表　樹種同定試料一覧

試料No.	樹種名	出土地点（遺構ほか）	整理番号
W-1	コナラ亜属	東面石垣外側 tr 北壁	W16112103
W-2	タラノキ	東面石垣外側 tr 北壁	W16112104
W-3 （AMS-1）	コナラ亜属類似	東面石垣外側 tr 北壁	W16112105
W-4	カエデ属類似	東面石垣外側 tr 南壁	W16112101
W-5	クヌギ節	東面石垣外側 tr 南壁	W16112102

コナラ節：*Quercus* sub. *Lepidobalanus*（Sect. *Prinus*）sp.

試料 No.W-1（W16112103）

年輪幅は非常に狭い。大きい円形ないし楕円形の道管がほとんど単独で１列（時に２列）に配列する環孔材である。孔圏外では急に道管の径を減じ，非常に小さい道管が放射状ないし火炎状に配列する傾向がある。小道管はやや角張っている。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースが発達している。孔圏道管の周りに周囲仮道管が存在している。軸方向柔組織の分布は不明である。放射組織は同性で，単列放射組織と幅の広い広放射組織からなる典型的な複合型放射組織である。以上の組織上の特徴から，コナラ節（コナラ亜属）と同定した。

コナラ節類似：cf. *Quercus* sub. *Lepidobalanus*（Sect. *Prinus*）sp.

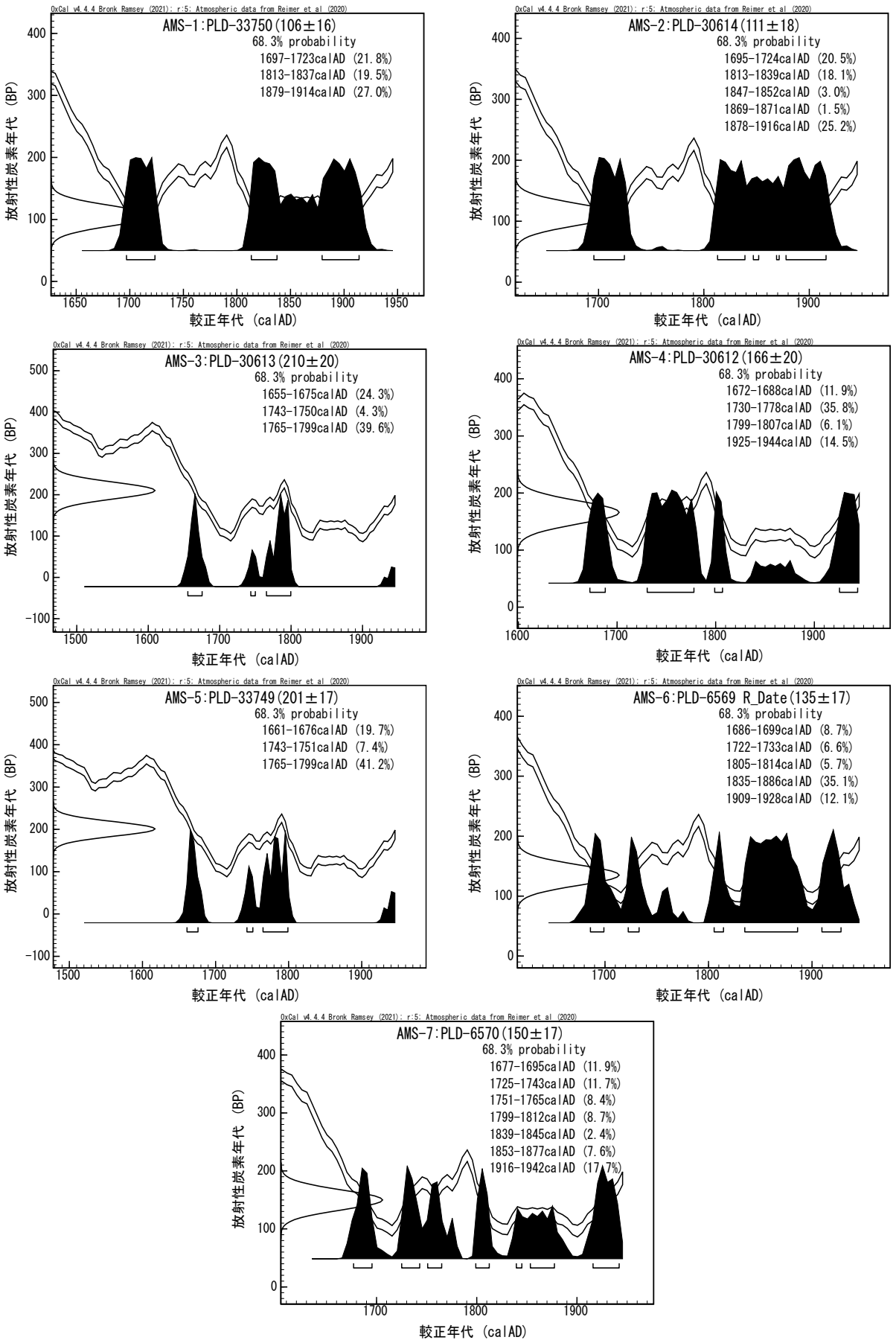
試料 No.W-3（W16112105）

観察が部分的であるが，年輪最内層に大きい楕円形の道管が２列に配列していることから，環孔材であると思われる。孔圏外では，小道管が放射状に配列することが認められた。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースがよく発達している。軸方向柔組織の分布は不明である。放射組織は同性で，単列放射組織と幅の広い広放射組織からなる典型的な複合型放射組織である。以上の組織上の特徴から，コナラ節（コナラ亜属）と推定されるが，断定に至らなかった。

カエデ属類似：cf. *Acer* sp.（カエデ科）

試料 No.W-4（W16112101）

年輪幅は狭い。やや小さい道管が単独ないし２～３個放射方向に複合して年輪内に均等に分布する


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2020)
AMS-1:PLD-33750(106±16)
68.3% probability
1697-1723calAD (21.8%)
1813-1837calAD (19.5%)
1879-1914calAD (27.0%)
AMS-2:PLD-30614(111±18)
68.3% probability
1695-1724calAD (20.5%)
1813-1839calAD (18.1%)
1847-1852calAD (3.0%)
1869-1871calAD (1.5%)
1878-1916calAD (25.2%)
AMS-3:PLD-30613(210±20)
68.3% probability
1655-1675calAD (24.3%)
1743-1750calAD (4.3%)
1765-1799calAD (39.6%)
AMS-4:PLD-30612(166±20)
68.3% probability
1672-1688calAD (11.9%)
1730-1778calAD (35.8%)
1799-1807calAD (6.1%)
1925-1944calAD (14.5%)
AMS-5:PLD-33749(201±17)
68.3% probability
1661-1676calAD (19.7%)
1743-1751calAD (7.4%)
1765-1799calAD (41.2%)
AMS-6:PLD-6569 R_Date(135±17)
68.3% probability
1686-1699calAD (8.7%)
1722-1733calAD (6.6%)
1805-1814calAD (5.7%)
1835-1886calAD (35.1%)
1909-1928calAD (12.1%)
AMS-7:PLD-6570(150±17)
68.3% probability
1677-1695calAD (11.9%)
1725-1743calAD (11.7%)
1751-1765calAD (8.4%)
1799-1812calAD (8.7%)
1839-1845calAD (2.4%)
1853-1877calAD (7.6%)
1916-1942calAD (17.7%)
放射性炭素年代 (BP)
較正年代 (calAD)

第 78 図　暦年較正結果

散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管内壁にらせん肥厚が認められる。道管相互壁孔は明瞭な交互状である。道管放射組織間壁孔はふるい状を示す。軸方向柔組織は非常に少なく，不顕著である。放射組織は同性で，１～３細胞幅であり，高さは低い。以上の組織上の特徴から，カエデ属と推定されるが，断定に至らなかった。

タラノキ：Aralia elata

試料 No.W-2（W16112104）

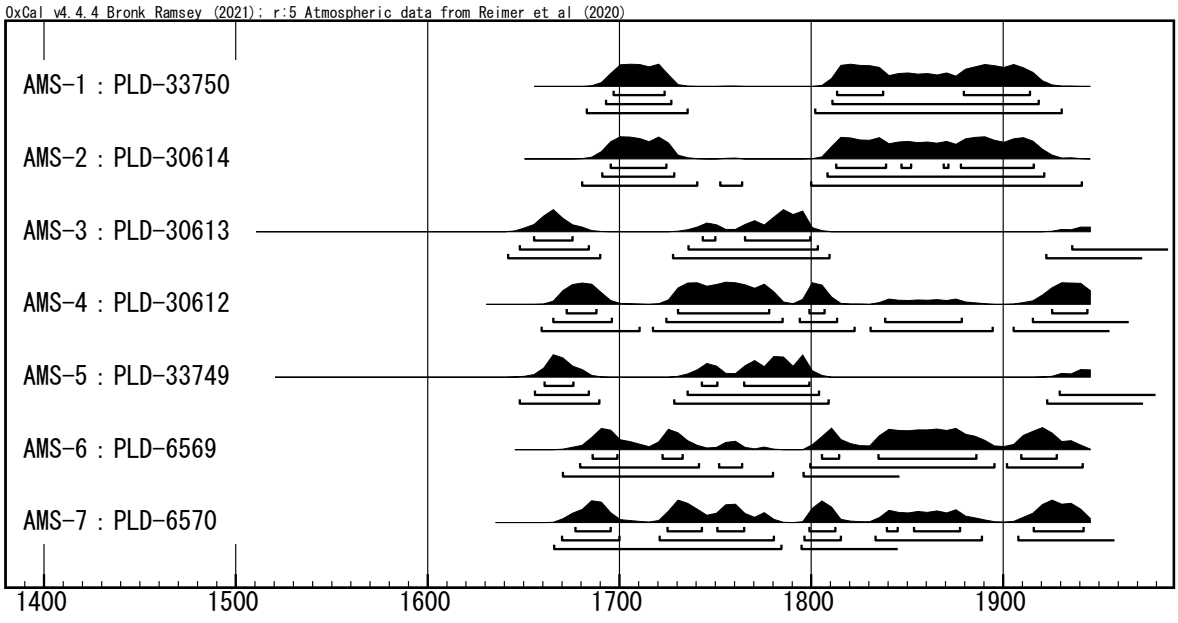
年輪幅は広い。やや大きい円形ないし楕円形の道管が１列または２～３列に配列する環孔材である。孔圏外では小道管が１～３列で多少波状になりながら接線方向に長く連なっている。この列の数は多く，特徴的である。道管せん孔は単せん孔である。道管相互壁孔は交互状である。軸方向柔組織の分布は不明である。放射組織は異性で，１～５細胞幅程度である。不明瞭であるが，さや細胞が存在している。以上の組織上の特徴から，タラノキと同定した。

５　年代測定値について

暦年較正年代の分布を第 79 図に示す。図から明らかなように，各試料ともσ，２σで 17 世紀中頃以降，20 世紀中頃までを示し，ほとんど重なっている。

第 80 図は，年代測定７試料と遺構の関係を基に，Oxcal 上で「Phase/Sequential」関数を用いた解析（Ramsey2008）を行った結果である。第 16 表には，解析値の詳細を示す。

１期の遺構に関連した AMS-1 には AD1695-1730，AMS-2 には AD1694-1730（２σ:95.4%）の年代が与えられた。この年代は，文献史料から確認できた操業確認時期（AD1745）以前で，田儀櫻井家により越堂鈩が買い請けられた AD1771 も含まなかった。したがって，１期は田儀櫻井家による操業以前の時期である可能性が高い。

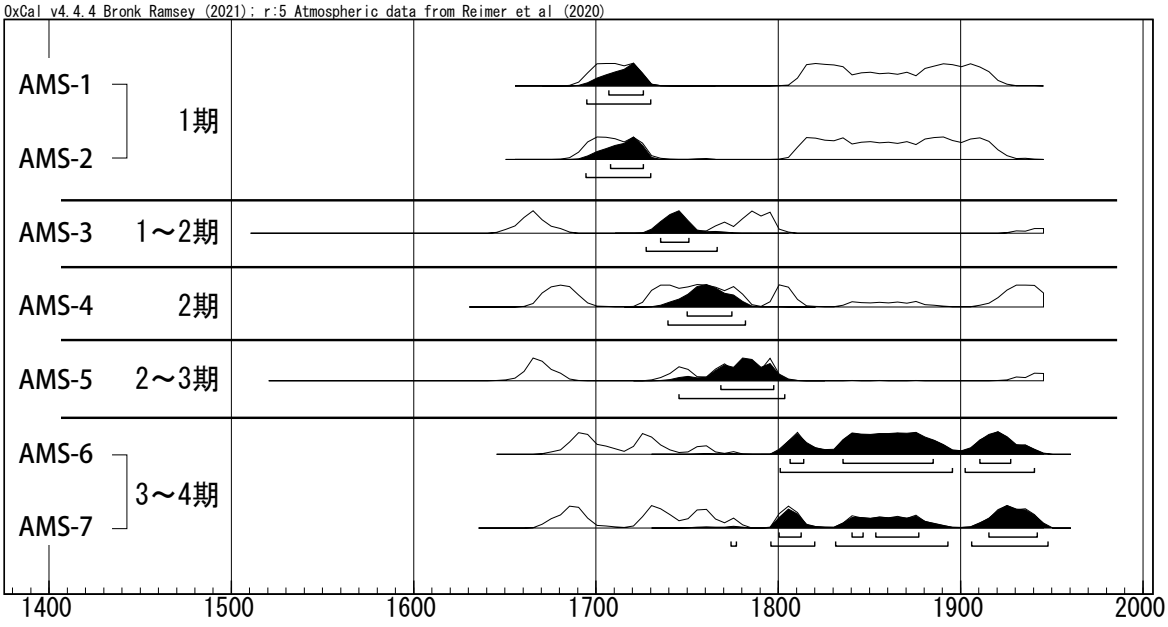


第 79 図　暦年較正結果の分布

１～２期の盛土中から採取された AMS-3 には AD1727-1766（２σ），２期の遺構に関連した AMS-4 には AD1739-1782（２σ）の年代が与えられた。いずれにも先の AD1745 は含まれる。田儀櫻井家により越堂鈩が買い請けられた AD1771 との重なりは AMS-3 ではなく，AMS-4 では僅かである。２期の遺構は田儀櫻井家による操業以前の時期を含む可能性がある。

３期の東小舟の甲上から採取された AMS-5 には AD1745-1803（２σ）の年代が与えられた。この値は２期の操業時期の下限を示しており，３期は田儀櫻井家による操業時期である可能性が高い。

４期の本床埋土内から得られた AMS-6 に AD1801-1940（２σ），AMS-7 に AD1774-1948（２σ）の年代が与えられた。両者は同じ層から採取された試料であり，AMS-6 の年代幅が AMS-7 に含まれることから，AMS-6 の AD1801-1940（２σ）の範囲に収まる可能性がより高いと考えられる。この範囲の始まりは田儀櫻井家により越堂鈩が買い請けられた AD1771 以降で，終わりは田儀櫻井家が宮本を去った AD1890 の後である。したがって，４期は田儀櫻井家による操業時期の遺構であると言える。ただし，操業終了時期を決定することはできなかった。



第 80 図　解析結果の分布

第 16 表　AMS 年代解析結果

試料					前処理	δ13C (‰)	測定年代*1 (yrBP ±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP ±1σ)	補正年代*2 (yrBP ±1σ)	解析年代		測定番号 (PLD-)
試料No.	種別	遺跡名	出土地点ほか	重量 (g)						1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
AMS-1	炭化物	越堂たたら跡	東面石垣外側 tr 北壁暗渠施設内埋設樹木	0.2689	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-27.75 ± 0.12	152 ± 17	106 ± 16	105 ± 15	AD1707-1726(68.3%)	AD1695-1730(95.4%)	33750
AMS-2	炭化物	越堂たたら跡	東面石垣外側 tr 南壁暗渠施設埋土内炭化物	47.4218	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-24.52 ± 0.21	103 ± 19	111 ± 18	110 ± 20	AD1708-1726(68.3%)	AD1694-1730(95.4%)	30614
AMS-3	炭化物	越堂たたら跡	高殿南 1tr（サブ tr）西壁石垣床面直上盛土内炭化物	5.6402	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-26.15 ± 0.16	229 ± 20	210 ± 20	210 ± 20	AD1735-1751(68.3%)	AD1727-1766(95.4%)	30613
AMS-4	炭化物	越堂たたら跡	高殿南 1tr 東壁炭置場上炭化物	5.5232	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-24.93 ± 0.21	165 ± 20	166 ± 20	165 ± 20	AD1750-1774(68.3%)	AD1739-1782(95.4%)	30612
AMS-5	炭化物	越堂たたら跡	A・B 区東西横断 tr 北壁 3 期床釣り小舟甲上炭化物	0.3305	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-28.32 ± 0.16	257 ± 18	201 ± 17	200 ± 15	AD1768-1797(68.3%)	AD1745-1803(95.4%)	33749
AMS-6 (H18-IKO-1)	炭化物	越堂たたら跡	2006 年度調査区本床北壁本床埋土内炭化物	2.069	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-24.21 ± 0.14	125 ± 15	135 ± 17	135 ± 15	AD1806-1927(68.3%)	AD1801-1940(95.4%)	6569
AMS-7 (H18-IKO-2)	炭化物	越堂たたら跡	2006 年度調査区本床北壁本床埋土内炭化物	2.005	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）	-22.83 ± 0.13	115 ± 15	150 ± 17	150 ± 15	AD1800-1942(68.3%)	AD1774-1948(95.4%)	6570

*1 δ13C 補正無年代　*2 δ13C 補正年代

６　まとめ

樹種同定の結果，暗渠施設内の樹木はいわゆる「雑木」で，クヌギ節，コナラ節，カエデ属，タラノキであった。

また，越堂鈩操業１～４期に関連した年代測定の結果，以下の事項が明らかになった。

①　１期の遺構は，田儀櫻井家による操業以前の時期である可能性が高い。

②　２期の遺構は，田儀櫻井家による操業以前の時期を含む可能性がある。

③　３期の遺構は，田儀櫻井家による操業時期である可能性が高い。

④　４期の遺構は，田儀櫻井家による操業時期である。しかし，操業終了時期を決定することはできなかった。

（渡辺正巳）

参考文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂

渡辺正巳 2010「木質遺物（埋没樹木）樹種同定」『必携　考古資料の自然科学調査法』ニュー・サイエンス社 194 ～ 198 頁

Bronk Ramsey, C. 2008. Deposition models for chronological records. *Quaternary Science Reviews*, 27（1-2）, pp.42-60.

Bronk Ramsey, C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51（1）, pp.337-360.

Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62.

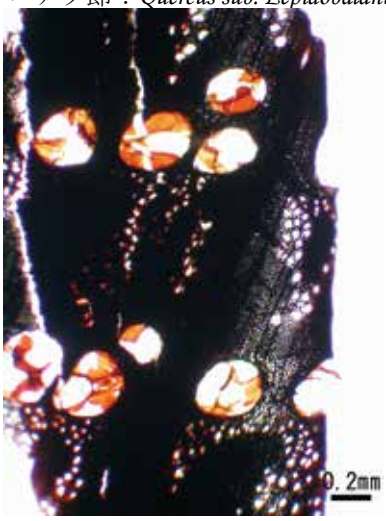
クヌギ節：*Quercus sub. Lepidobalanus*（Sect. *Cerris*）sp.：試料No. W-5（W16112102）

横断面

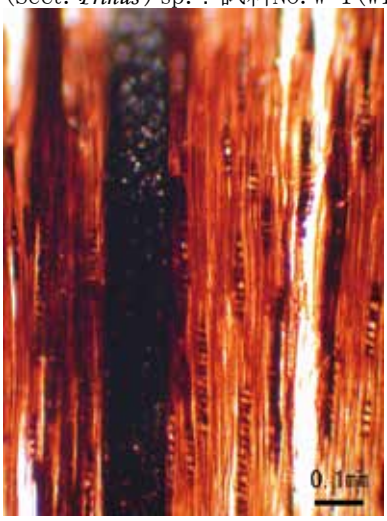
接線断面

放射断面

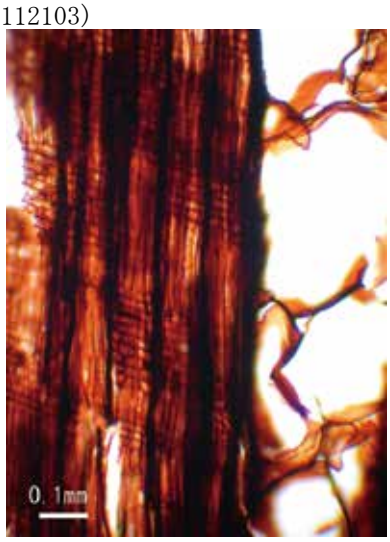
コナラ節：*Quercus sub. Lepidobalanus*（Sect. *Prinus*）sp.：試料No. W-1（W16112103）



横断面

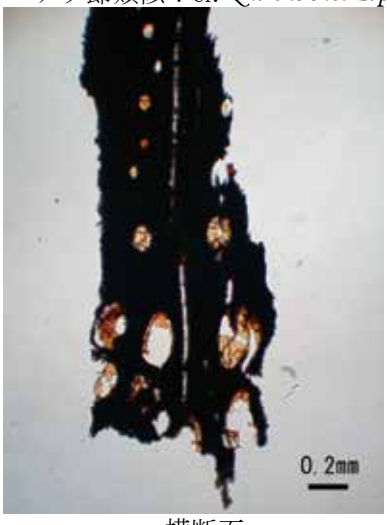


接線断面



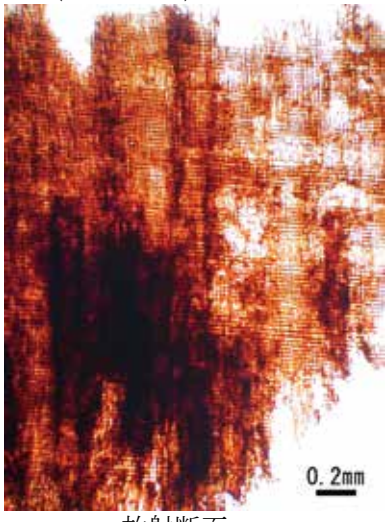
放射断面

コナラ節類似：cf. *Quercus sub. Lepidobalanus*（Sect. *Prinus*）sp.：試料 No. W-3（W16112105）



横断面

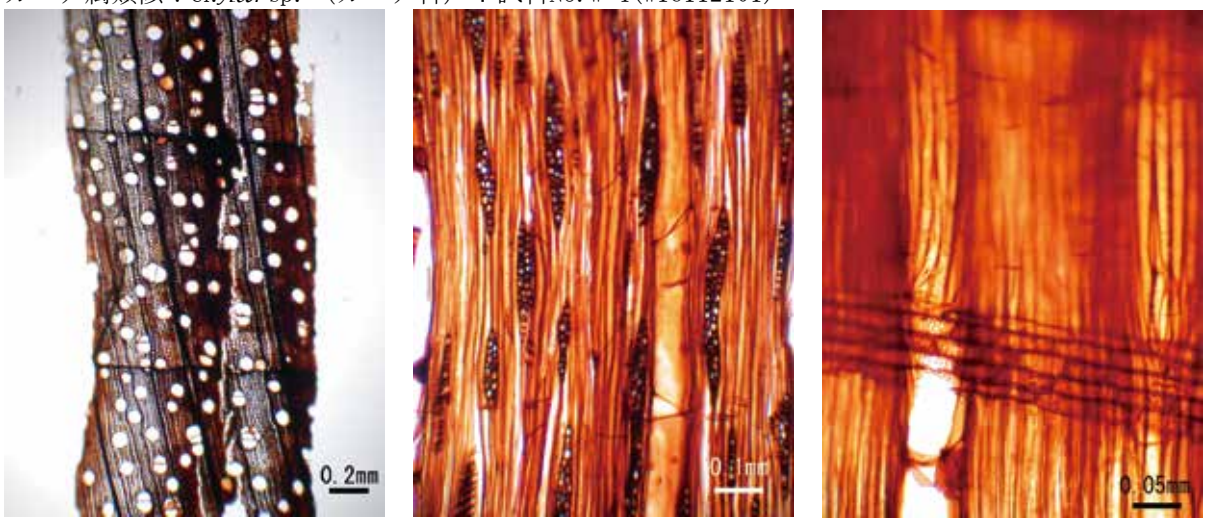
接線断面



放射断面

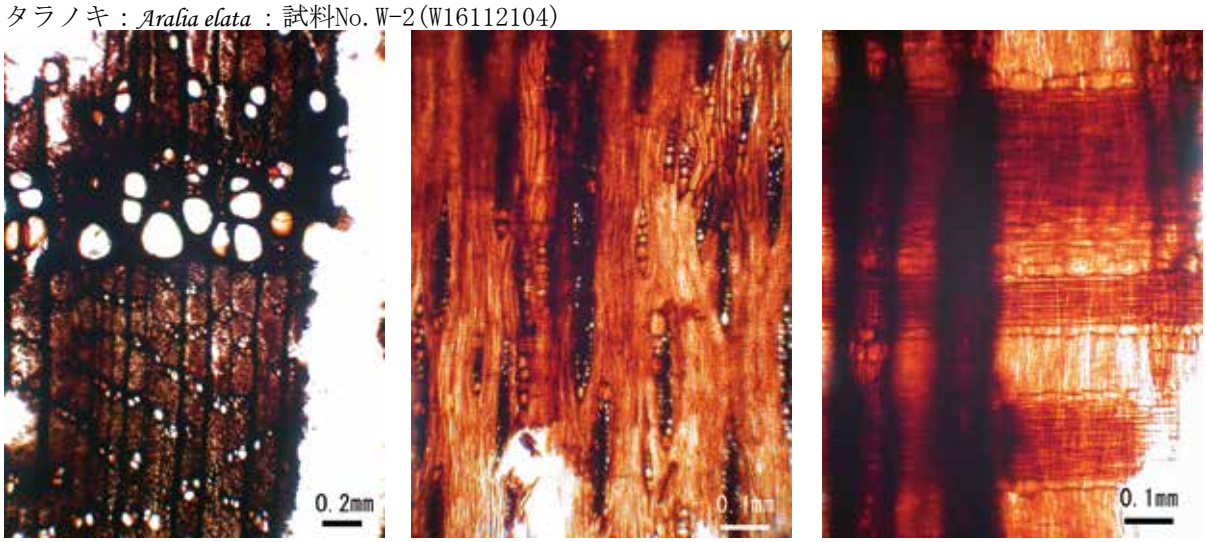
第 81 図　樹種同定顕微鏡写真（1）

カエデ属類似：cf.*Acer* sp.（カエデ科）：試料No.W-4(W16112101)



横断面　　接線断面　　放射断面

タラノキ：*Aralia elata*：試料No.W-2(W16112104)



横断面　　接線断面　　放射断面

第 82 図　樹種同定顕微鏡写真（2）

第２節　越堂たたら跡出土砂鉄の磁鉄鉱形態・化学組成分析

１　はじめに

越堂鈩は，田儀櫻井家によって江戸時代初期から明治時代にかけて経営され，さらに田儀櫻井家の経営以前から操業していたことが知られている。

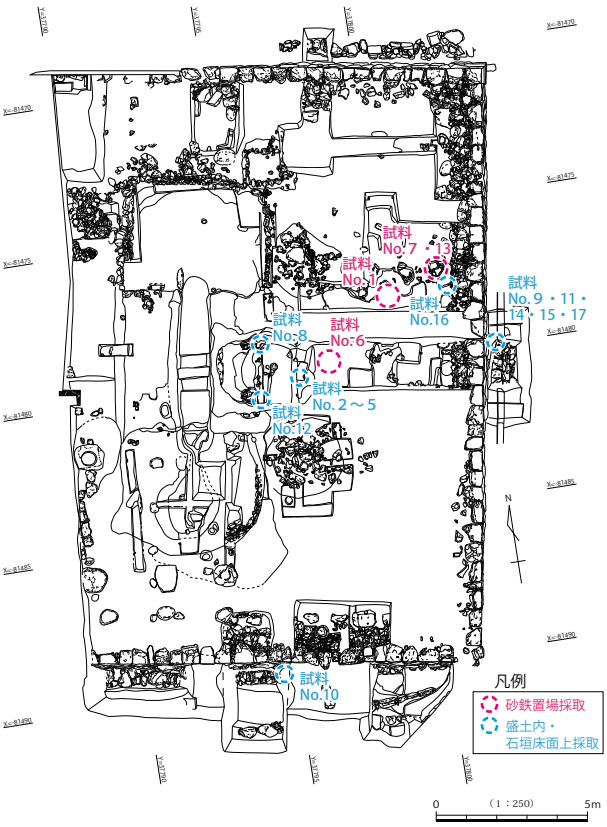
本報告では，2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度の越堂たたら跡の発掘調査で採取された砂鉄に含まれる磁鉄鉱（一部磁性鉱物）を対象に形態分析・化学組成分析を実施した（試料 No. 1 ～ 17）。また，1982（昭和 57）年の朝日たたら跡（出雲市佐田町高津屋）の発掘調査に伴い，採取されたと考えられる砂鉄についても分析を行っている（試料 No.18・19）。そして，これらの試料と山陰地方各地における河川の流域などで採取した砂鉄の分析結果との比較検討を行った。また，比較検討のために使用した山陰地方各地の河川試料のデータベース作成に関して，一部に JSPS 科研費 JP18K03760 の成果を利用している。

２　測定試料

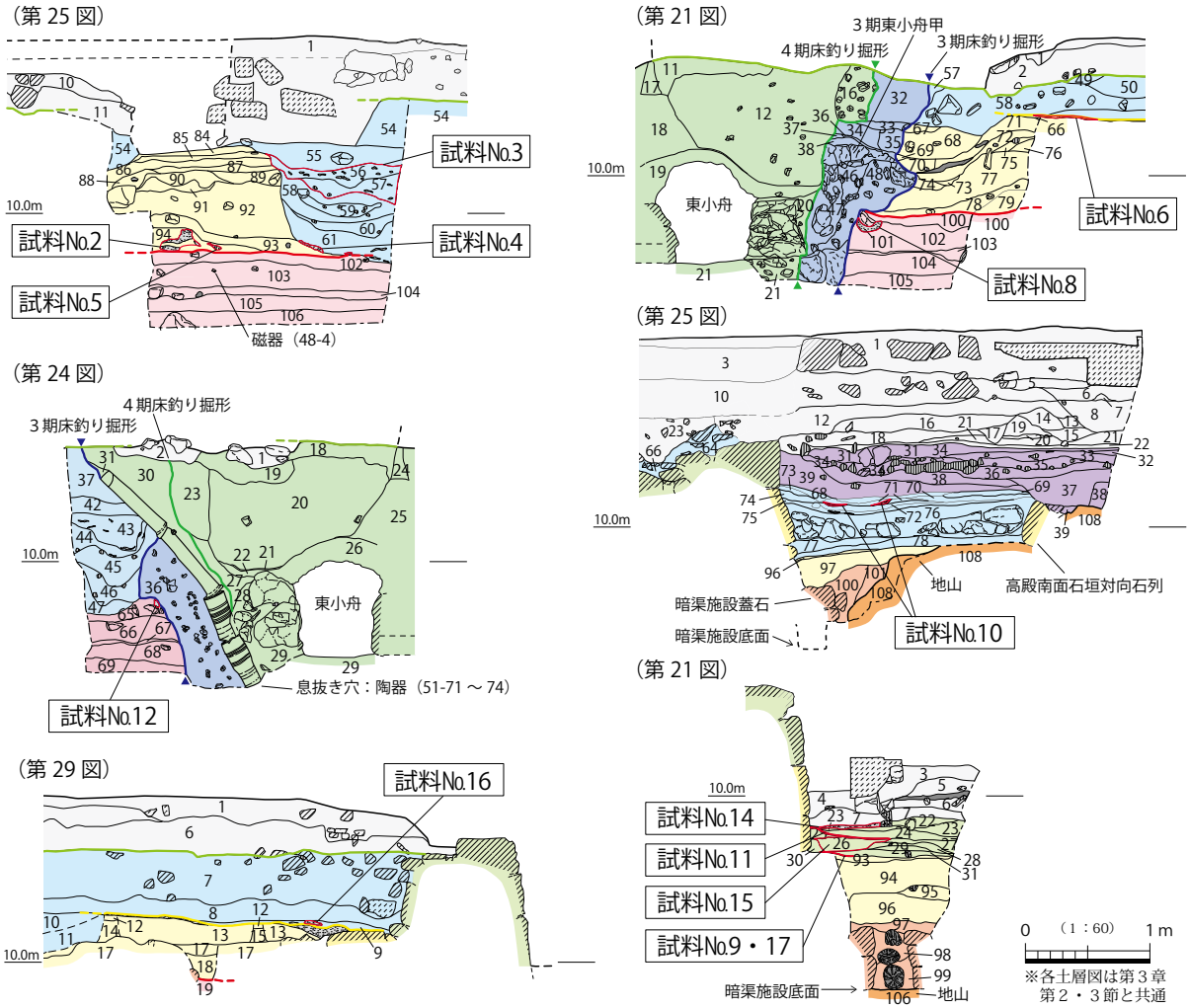
越堂たたら跡および朝日たたら跡の砂鉄試料の試料 No. と採取地点を第 17 表および第 83・84 図に示す。なお，朝日たたら跡の試料は調査当時の記載情報から，高殿内の小金町（砂鉄置場）で採取された可能性が高いと判断される。

第 17 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄試料一覧

遺跡名	試料No.	採取地点
越堂たたら跡	1	B 区北側 tr 砂鉄置場上面
	2	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内
	3	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内
	4	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内
	5	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内
	6	A・B 区東西横断 tr 砂鉄置場上面
	7	C 区 1tr 砂鉄置場上面
	8	A・B 区東西横断 tr 北壁盛土内
	9	東面石垣外側 tr 石垣床面上面
	10	高殿南 4tr 盛土内
	11	東面石垣外側 tr 盛土内
	12	A・B 区東西横断 tr 南壁盛土内
	13	C 区 1tr 砂鉄置場・炭置場間区画石列付着
	14	東面石垣外側 tr 盛土内
	15	東面石垣外側 tr 盛土内
	16	C 区 1tr 南壁盛土内
	17	東面石垣外側 tr 石垣床面上面
朝日たたら跡	18	出土地不明（砂鉄置場？）
	19	小金町（砂鉄置場）



第 83 図　越堂たたら跡の砂鉄試料採取地点（平面）



第 84 図　越堂たたら跡の砂鉄試料採取地点（土層）

3　分析方法

調査対象とした層より，磁石を用いて磁性鉱物を採取する。磁鉄鉱を含む磁性鉱物は，鉄を多く含んでおり，強い磁性を示す。色も黒を呈しているため，磁鉄鉱を実視で判別することは困難である。そこで，今回の分析では自形（正八面体）で磁性を示すものを「磁鉄鉱」として取り扱った。

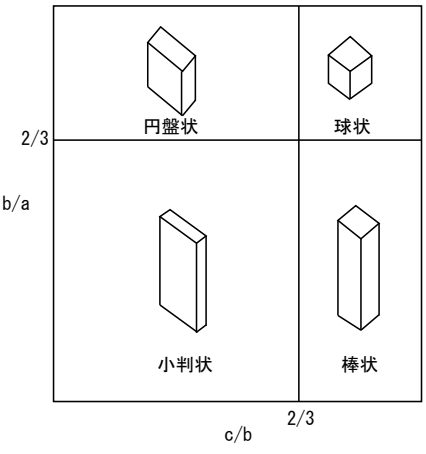
（1）磁鉄鉱の形態分析

分析手順

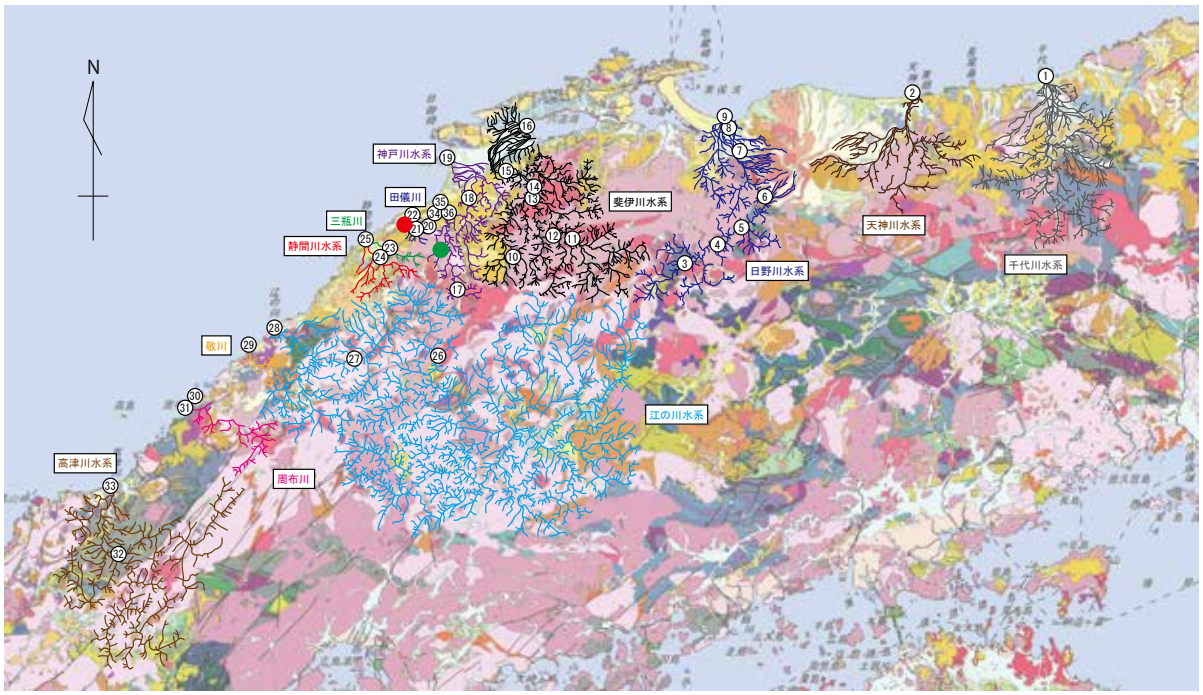
1）　超音波洗浄機を用い，磁性鉱物表面に付着している粘土分を分離する。

2）　公文・立石編（1998）（第 85 図）の礫の形状分類に従い，磁性鉱物を自形・球状・円盤状・棒状・小判状の 5 つに分類することができる。

3）　自形（磁鉄鉱）について長さを測る。分類合計，自形の長さの測定は，それぞれ 100 粒以上とする。



第 85 図　形状分類
（公文・立石編 1998 より）



比較試料採取位置

① 千代川（河口）	⑪ 斐伊川（仁多）	㉑ 田儀川（奥田儀）	㉛ 周布川（河口）
② 天神川（河口）	⑫ 斐伊川（尾原）	㉒ 田儀川（口田儀）	㉜ 高津川（中流）
③ 日野川（上流）	⑬ 斐伊川（木次）	㉓ 三瓶川（大田）	㉝ 高津川（下流）
④ 日野川（上流～中流）	⑭ 斐伊川（下熊谷）	㉔ 静間川（川合町）	㉞ 久村鉱山
⑤ 日野川（中流）	⑮ 斐伊川（出西）	㉕ 静間川（河口）	㉟ 久村鉱石
⑥ 日野川（中流～下流１）	⑯ 斐伊川（島村町）	㉖ 江の川（上流）	㊱ 姉谷鉱石
⑦ 日野川（中流～下流２）	⑰ 神戸川（八神）	㉗ 江の川（中流）	
⑧ 日野川（下流）	⑱ 神戸川（乙立町）	㉘ 江の川（下流）	● 越堂たたら跡
⑨ 日野川（河口）	⑲ 神戸川（河口）	㉙ 敬川（河口）	● 朝日たたら跡
⑩ 斐伊川（吉田）	⑳ 田儀川（宮本）	㉚ 日脚海岸	

第 86 図　比較試料採取位置図
（20 万分の 1 日本シームレス地質図・DamMaps- 日本全国 web 地図でダムめぐりに加筆）

（2）磁鉄鉱の化学組成分析

分析手順

１）　磁鉄鉱はエネルギー分散型Ｘ線分析装置（Energy dispersive X-ray spectrometry, EDX）で，化学組成分析を行う。

２）　測定条件は加速電圧 15kV，試料電流 80 ～ 100u Ａ，ライブタイム 100 秒である。

３）　１試料につき 20 粒以上の測定を行う。

４）　化学組成分析の測定元素については，和田ほか（2007），田村・鈴木（2001），田結庄（1986）などを参考にして，ＭｇＯ（マグネシウム），Ａｌ$_2$Ｏ$_3$（アルミニウム），ＳｉＯ$_2$（ケイ素），ＳＯ$_3$（硫黄），ＣａＯ（カルシウム），ＴｉＯ$_2$（チタン），Ｖ$_2$Ｏ$_3$（バナジウム），Ｃｒ$_2$Ｏ$_3$（クロム），ＭｎＯ（マンガン），Ｆｅ$_2$Ｏ$_3$（鉄）の 10 元素とする。測定値は 10 元素の合計を基にした，ｗｔ％で示す。

（３）比較試料の採取

越堂たたら跡および朝日たたら跡の試料との比較検討を行うため，山陰地方各地の河川の流域などから砂鉄を採取し，たたら跡試料と同様の分析を行い，比較試料とした。第 86 図に比較試料の採取位置を示す。

４　磁鉄鉱の形態分析結果

越堂たたら跡および朝日たたら跡の磁鉄鉱形態分析の結果を第 18 表に，比較試料の磁鉄鉱形態分析の結果を第 19 表に示す。

（１）形態分析

比較試料の形態分析の結果から，河川あるいは流域ごとで特徴を確認できた。円盤状が優占するのは河川中流域，球状が優占するのは河川下流域，棒状が優占するのは河川上流～中流域であった。また小判状を 10％以上含むのが神戸川と静間川，自形が優占するのが日野川，江の川，高津川であった。

（２）磁鉄鉱の粒径分析

磁鉄鉱について，長軸の長さを測定した結果，以下の特徴が確認できた。

１）　極細粒サイズ（1/16 ～ 1/8mm）：斐伊川中流～下流。

２）　中粒サイズ（1/4 ～ 1/2mm）：天神川，日野川，静間川。

以上の結果から，形態分析による各河川の特徴を第 20 表に示す。

第 18 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料の磁鉄鉱形態分析結果一覧

遺跡名	試料 No.	磁鉄鉱の形態						自形の粒径
		円盤状	球状	小判状	棒状	自形	自形率	平均（mm）
越堂たたら跡	1	21	21	13	2	43	43%	0.17
	2	17	22	11	17	33	33%	0.24
	3	22	11	8	34	25	25%	0.17
	4	24	18	10	28	20	20%	0.18
	5	25	27	7	5	36	36%	0.22
	6	19	16	5	37	23	23%	0.16
	7	32	23	2	28	15	15%	0.19
	8	13	34	3	34	16	16%	0.20
	9	12	28	5	28	27	27%	0.15
	10	19	26	5	22	28	28%	0.16
	11	14	25	4	21	36	36%	0.20
	12	22	33	3	25	17	17%	0.21
	13	14	30	6	21	29	29%	0.17
	14	22	34	11	11	22	22%	0.22
	15	21	29	2	16	32	32%	0.15
	16	31	25	9	11	24	24%	0.16
	17	19	25	6	25	25	25%	0.12
朝日たたら跡	18	26	26	5	13	30	30%	0.18
	19	14	41	5	16	24	24%	0.37

第 19 表　比較試料の磁鉄鉱形態分析結果一覧

試料採取場所	磁鉄鉱の形態						自形の粒径
	円盤状	球状	小判状	棒状	自形	自形率	平均（mm）
① 千代川 (河口)	15	63	19	6	21	17%	0.16
② 天神川 (河口)	16	60	3	3	18	18%	0.30
③ 日野川 (上流)	12	12	8	15	53	53%	-
④ 日野川 (上流～中流)	13	12	9	13	53	53%	-
⑤ 日野川（中流)	16	14	12	8	50	50%	-
⑥ 日野川 (中流～下流１)	12	10	7	12	59	59%	-
⑦ 日野川 (中流～下流２)	14	8	13	13	52	52%	-
⑧ 日野川 (下流)	12	11	12	9	56	56%	-
⑨ 日野川 (河口)	17	68	1	1	13	13%	0.26
⑩ 斐伊川 (吉田)	16	25	1	36	22	22%	0.26
⑪ 斐伊川 (仁多)	6	72	0	8	22	20%	0.10
⑫ 斐伊川 (尾原)	25	26	1	30	18	18%	0.16
⑬ 斐伊川 (木次)	5	38	0	4	60	56%	0.13
⑭ 斐伊川 (下熊谷)	16	22	6	35	21	21%	0.13
⑮ 斐伊川 (出西)	31	29	7	22	11	11%	0.18
⑯ 斐伊川 (島村町)	18	19	9	34	20	20%	0.09
⑰ 神戸川 (八神)	16	9	10	35	30	30%	0.13
⑱ 神戸川 (乙立町)	31	15	12	17	25	25%	0.22
⑲ 神戸川 (河口)	17	70	12	15	10	8%	0.20
⑳ 田儀川 (宮本)	16	28	1	36	19	19%	0.19
㉑ 田儀川 (奥田儀)	33	15	5	29	18	18%	0.21
㉒ 田儀川 (口田儀)	32	13	3	28	24	24%	0.17
㉓ 三瓶川 (大田)	23	19	8	28	22	22%	0.19
㉔ 静間川 (川合町)	16	21	20	16	27	27%	0.29
㉕ 静間川 (河口)	21	39	12	12	26	24%	0.28
㉖ 江の川 (上流)	6	14	6	15	59	59%	-
㉗ 江の川 (中流)	22	12	5	11	50	50%	-
㉘ 江の川 (下流)	22	9	7	7	55	55%	-
㉙ 敬川 (河口)	31	25	12	18	14	14%	0.22
㉚ 日脚海岸	23	24	6	22	25	25%	0.16
㉛ 周布川 (河口)	27	32	6	19	16	16%	0.15
㉜ 高津川 (中流)	23	22	10	10	35	35%	-
㉝ 高津川 (下流)	24	17	9	12	38	38%	-
㉞ 久村鉱山	25	19	2	28	26	26%	0.17
㉟ 久村鉱石	23	23	7	20	27	27%	0.15
㊱ 姉谷鉱石	25	33	4	13	25	25%	0.20

第 20 表　磁鉄鉱形態分析による各河川の特徴

	形状分類	測定内容	対応河川流域および河川
形態分析	円盤状	優占	各河川中流域
	球状	優占	各河川下流域
	棒状	優占	各河川上流～中流域
	自形	優占	日野川・江の川・高津川
	小判状	10% 以上含有	神戸川・静間川
粒径分析	法量分類	法量内容	対応河川流域および河川
	極細粒	1/16 ～ 1/8㎜	斐伊川中流～下流
	中粒	1/4 ～ 1/2㎜	天神川・日野川・静間川

５　磁鉄鉱の化学組成分析の結果

磁鉄鉱の化学組成分析の結果，全ての試料でＦｅ２Ｏ３が優占する。また全体的に，Ａｌ２Ｏ３，ＳｉＯ２，ＴｉＯ２，ＭｇＯの４成分が，Ｆｅ２Ｏ３を除いた中で優占する。

各試料の割合の平均値を第 21 表に示し，比較試料は採取場所（上流・中流・下流・鉱山・鉱石）で区分した。なお比較試料は，磁鉄鉱における主成分の鉄であるＦｅ２Ｏ３を除く９成分のグラフを第 87 図に示しており，Ａｌ２Ｏ３・ＳｉＯ２・ＴｉＯ２の３成分が顕著な変化を見せた。

第 21 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡（上）と比較試料（下）の磁鉄鉱の化学組成分析結果一覧（平均値）

（%）

遺跡名	試料 No.	MgO	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	CaO	TiO_2	V_2O_3	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3
越堂たたら跡	1	1.12	4.46	5.31	0.17	0.35	7.60	0.40	0.32	0.55	79.72
	2	0.87	1.87	1.26	0.22	0.18	2.46	0.25	0.20	0.38	92.32
	3	1.20	1.88	2.09	0.16	0.13	2.51	0.25	0.15	0.30	91.34
	4	1.34	1.88	1.83	0.25	0.21	6.08	0.25	0.22	0.68	87.27
	5	0.87	2.32	2.07	0.16	0.22	4.56	0.36	0.29	0.87	88.29
	6	1.27	1.45	0.47	0.20	0.17	3.59	0.26	0.16	0.36	92.07
	7	1.18	1.61	0.59	0.16	0.12	3.31	0.19	0.12	0.38	92.33
	8	1.22	1.69	1.06	0.19	0.12	4.51	0.18	0.13	0.29	90.60
	9	0.89	1.33	0.79	0.20	0.21	4.09	0.31	0.24	0.47	91.50
	10	1.19	1.72	0.73	0.18	0.18	2.95	0.24	0.18	0.32	92.33
	11	0.72	0.93	0.61	0.26	0.29	4.61	0.42	0.32	0.62	91.22
	12	0.92	1.66	0.95	0.79	0.34	5.46	0.41	0.31	0.64	88.52
	13	1.19	2.78	0.86	0.03	0.03	7.87	0.44	0.09	0.40	86.29
	14	0.31	1.72	0.80	0.03	0.06	2.84	0.40	0.06	0.25	93.53
	15	1.01	2.14	0.54	0.06	0.07	5.27	0.44	0.09	0.42	89.98
	16	1.17	3.10	1.06	0.07	0.05	5.66	0.38	0.15	0.45	88.02
	17	1.24	3.02	1.63	0.07	0.13	7.62	0.38	0.07	0.43	85.49
朝日たたら跡	18	0.17	3.86	1.43	0.09	0.14	1.41	0.50	0.13	0.15	92.42
	19	0.69	2.66	2.29	0.06	0.14	5.14	0.41	0.10	0.40	88.37

試料採取場所		MgO	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	CaO	TiO_2	V_2O_3	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3
①千代川（河口）	下流	0.76	1.40	1.01	0.23	0.23	5.85	0.52	0.37	0.70	88.92
②天神川（河口）	下流	0.56	1.04	0.86	0.23	0.24	2.03	0.46	1.07	0.57	92.93
⑦日野川（中流～下流 2）	下流	0.83	1.76	1.60	0.02	0.09	5.34	0.34	0.16	0.24	89.62
⑧日野川（下流）	下流	0.74	1.84	0.82	0.01	0.15	6.50	0.38	0.11	0.53	88.93
⑨日野川（河口）	下流	0.46	0.80	0.59	0.14	0.20	2.90	0.40	0.28	0.57	93.65
⑯斐伊川（島村町）	下流	0.17	1.05	1.82	0.19	0.29	2.19	0.39	0.46	0.96	92.47
⑲神戸川（河口）	下流	0.32	0.63	0.60	0.15	0.21	1.55	0.45	0.28	0.52	95.29
㉒田儀川（口田儀）	下流	1.24	2.46	2.62	0.18	0.29	7.42	0.36	0.21	1.04	84.18
㉕静間川（河口）	下流	0.79	1.44	0.72	0.22	0.20	2.90	0.29	0.22	0.57	92.67
㉙敬川（河口）	下流	0.75	1.83	3.20	0.29	0.50	4.11	0.42	0.37	0.79	87.73
㉛周布川（河口）	下流	0.73	4.55	6.31	0.42	0.57	4.04	0.45	0.36	1.43	81.14
㉚日脚海岸	下流	0.81	1.63	2.75	0.31	0.50	2.48	0.46	0.36	0.68	90.02
㉘江の川（下流）	下流	0.34	1.51	0.99	0.05	0.47	6.91	0.33	0.29	0.77	88.35
㉝高津川（下流）	下流	1.06	1.73	2.08	0.08	0.19	8.12	0.86	1.35	0.43	84.10
④日野川（上流～中流）	中流	0.22	2.07	1.71	0.02	0.30	7.37	0.45	0.06	0.61	87.16
⑤日野川（中流）	中流	0.44	2.57	1.92	0.06	0.41	2.62	1.71	0.13	0.85	89.38
⑥日野川（中流～下流 1）	中流	0.42	1.44	0.78	0.03	1.98	7.09	0.27	0.08	0.96	86.98
⑬斐伊川（木次）	中流	0.33	0.97	1.92	0.17	0.20	0.35	0.23	0.24	0.31	95.29
⑭斐伊川（下熊谷）	中流	0.66	3.08	3.93	0.13	0.28	1.92	0.38	0.27	0.57	88.79
⑮斐伊川（出西）	中流	0.25	0.70	0.93	0.20	0.23	3.28	0.36	0.27	0.80	92.98
⑱神戸川（乙立町）	中流	0.96	2.55	2.60	0.29	0.35	4.64	0.33	0.26	0.63	87.39
㉑田儀川（奥田儀）	中流	1.01	1.64	0.84	0.17	0.20	7.89	0.24	0.20	0.79	87.02
㉓三瓶川（大田）	中流	1.27	3.62	3.78	0.20	0.31	8.91	0.35	0.19	0.84	80.53
㉔静間川（川合町）	中流	0.64	2.05	1.69	0.20	0.27	2.98	0.37	0.28	0.92	90.60
㉗江の川（中流）	中流	0.40	2.38	1.91	0.21	0.24	1.56	0.39	0.21	0.13	92.58
㉜高津川（中流）	中流	0.43	2.32	3.65	0.04	0.23	5.40	0.41	0.10	0.25	87.17
③日野川（上流）	上流	1.32	1.79	2.18	0.16	0.80	6.16	0.53	0.53	0.73	85.80
⑩斐伊川（吉田）	上流	0.65	2.87	2.74	0.18	0.23	2.40	0.25	0.23	0.46	90.00
⑪斐伊川（仁多）	上流	0.19	1.31	1.65	0.17	0.22	0.88	0.31	0.26	0.63	94.38
⑫斐伊川（尾原）	上流	0.32	1.81	2.81	0.21	0.26	1.98	0.29	0.22	0.63	91.47
⑰神戸川（八神）	上流	0.75	1.94	1.99	0.22	0.28	4.89	0.28	0.25	0.57	88.83
⑳田儀川（宮本）	上流	0.72	3.09	3.02	0.20	0.26	3.69	0.33	0.25	0.71	87.73
㉖江の川（上流）	上流	0.58	2.40	0.96	0.03	0.28	4.85	0.53	0.13	0.42	89.83
㉞久村鉱山	鉱石	1.10	1.32	1.59	0.25	0.22	5.85	0.45	0.22	0.58	88.42
㉟姉谷鉱石	鉱石	1.40	1.79	2.42	0.26	0.29	8.29	0.43	0.30	0.57	84.25
㊱久村鉱石	鉱石	2.75	2.16	6.57	0.27	0.53	7.91	0.45	0.32	0.56	78.48

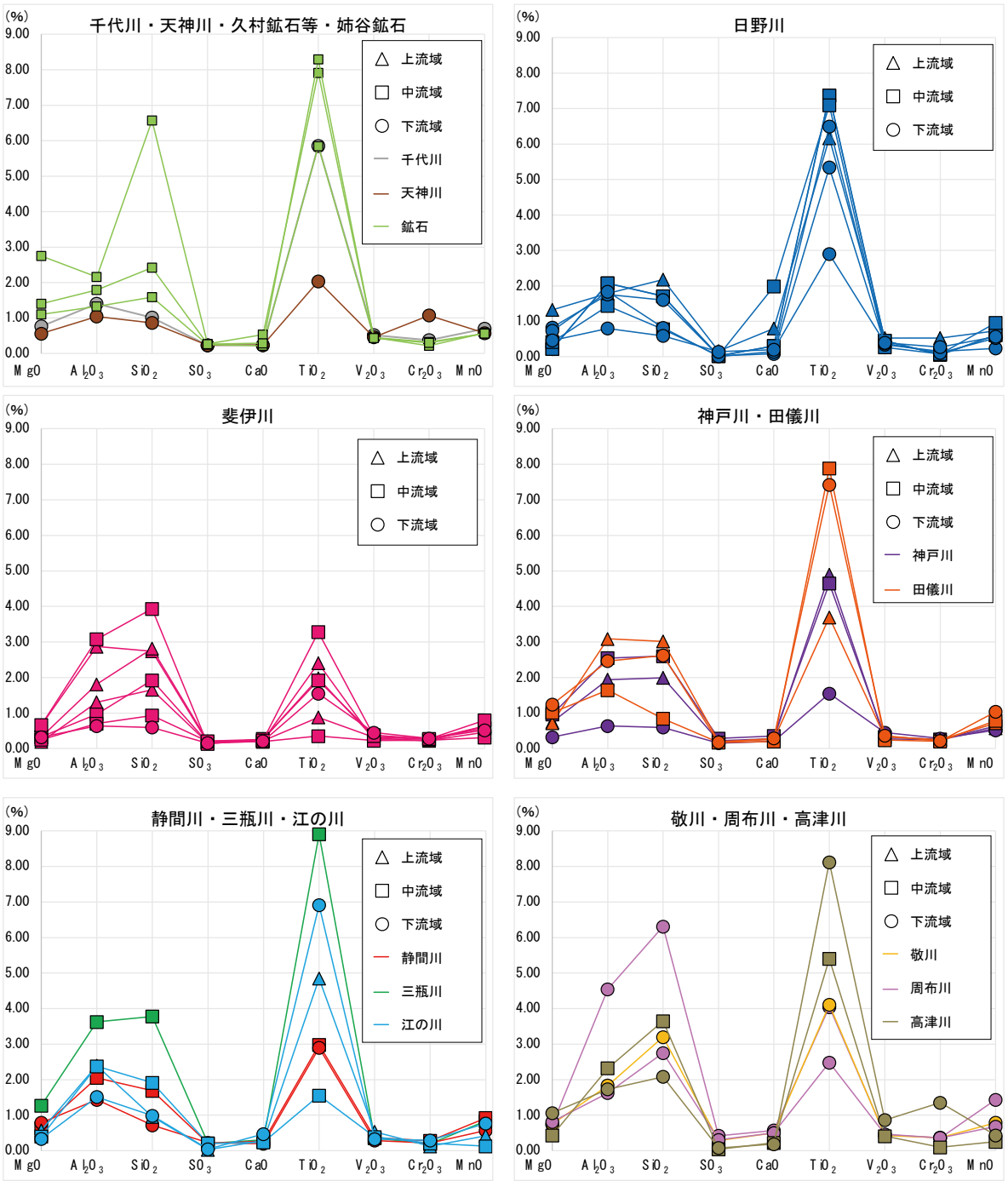
この結果から，この３成分をとって，越堂たたら跡・朝日たたら跡試料と比較試料について三角ダイアグラムを作成した（第 88 ～ 90 図）。三角ダイアグラムの傾向から，化学組成の特徴は以下の７つのグループに区別できた。

①　Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で，比較的TiO_2の含有量が多い。

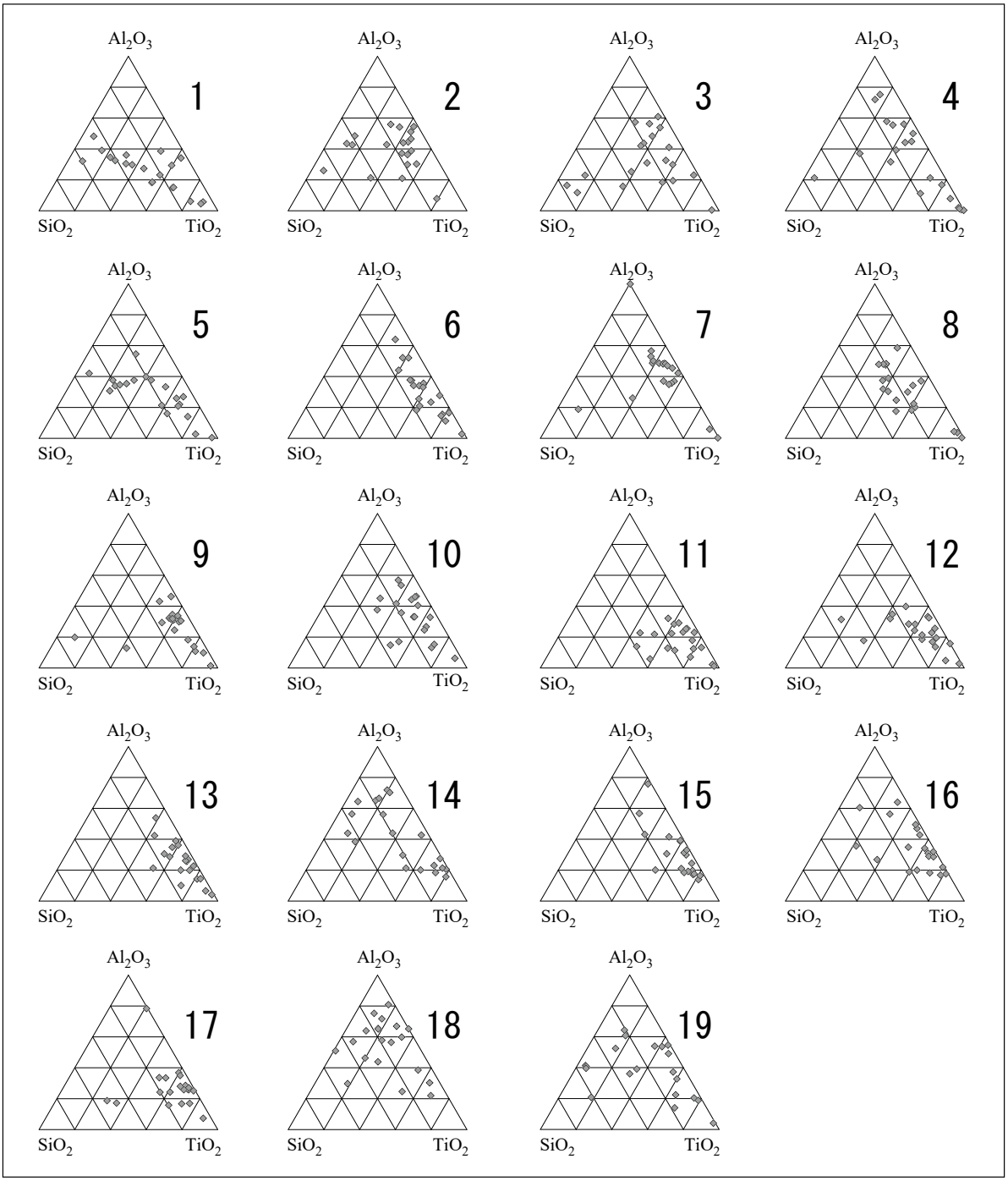
②　Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で，比較的TiO_2の含有量が少ない。

③　TiO_2の含有量が多い。

④　含有量の分布が全体に及ぶ。



第 87 図　比較試料の化学組成分析結果（平均値）



第 88 図　三角ダイアグラム（越堂たたら跡試料：No. 1 ～ 17　朝日たたら跡試料：No.18・19）

⑤　Ａｌ２Ｏ３の含有量が少ない。

⑥　ＴｉＯ２の含有量が少ない。

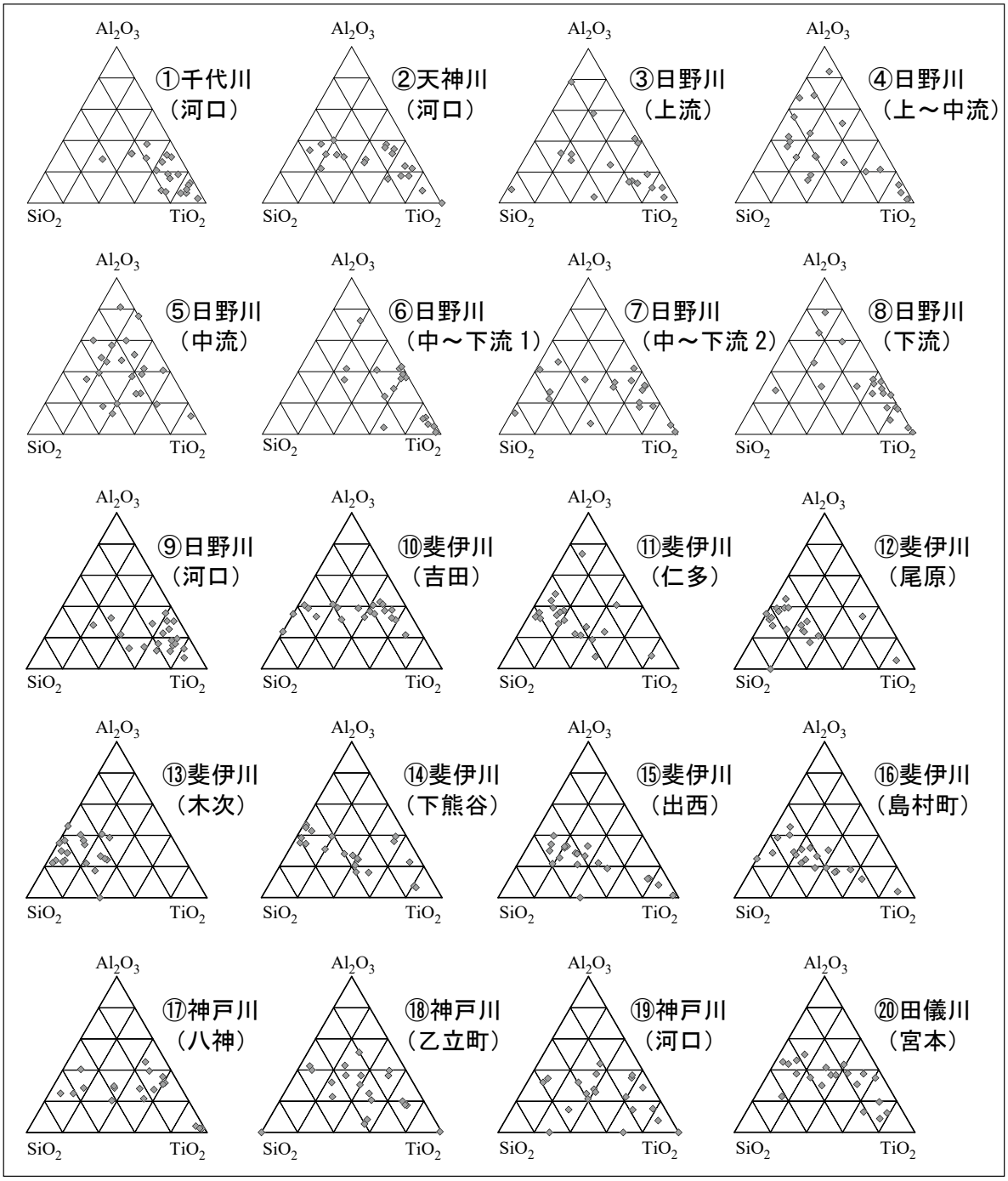
⑦　Ａｌ２Ｏ３の含有量がほぼ一定。

比較試料の採取場所（上流・中流・下流・鉱山・鉱石）における化学組成分析の特徴を第 22 表に示す。

6　分析結果の比較検討

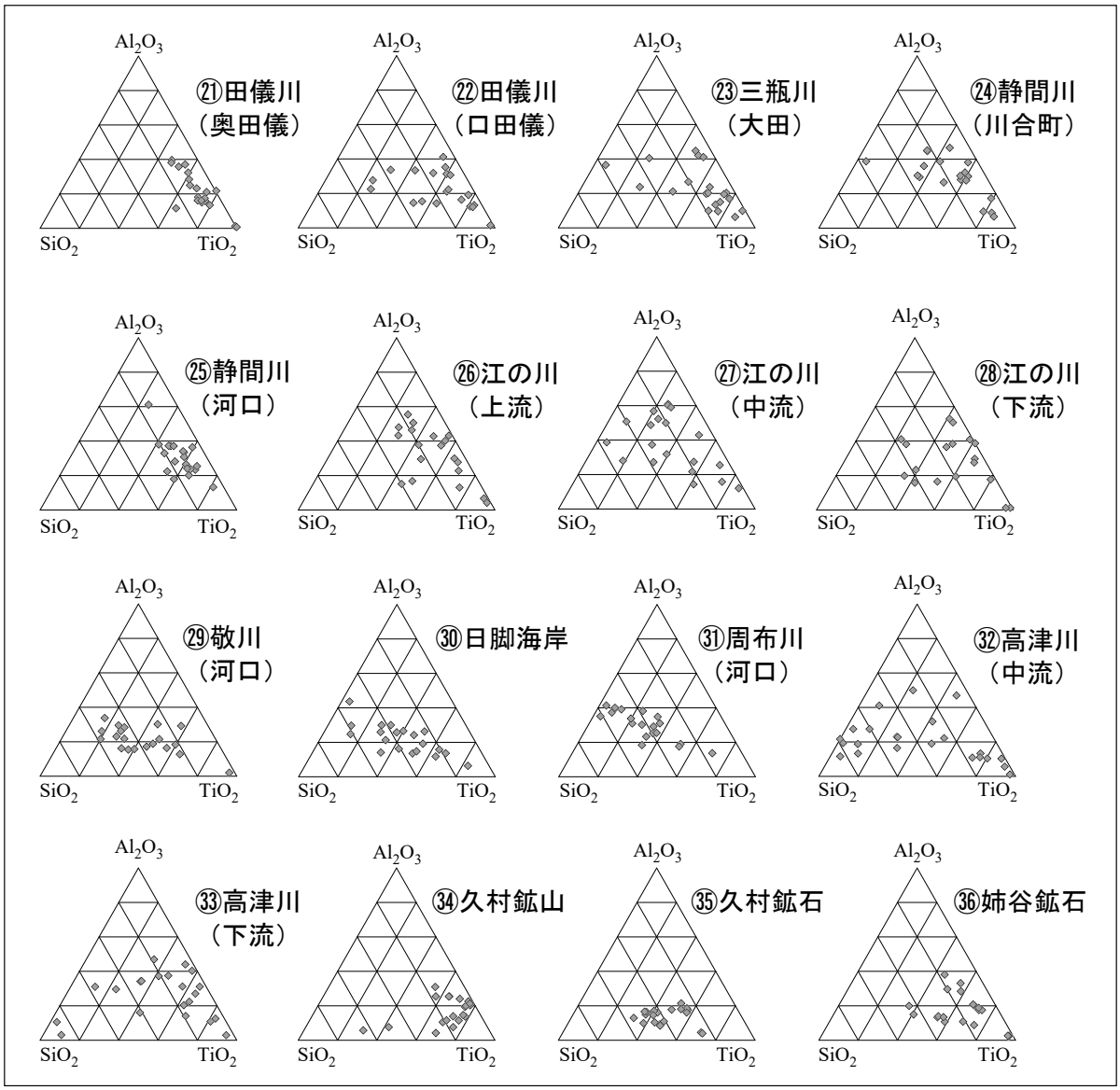
（1）形態分析・化学分析の比較について

越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄試料の分析結果と，山陰地方各地の河川の流域などで採取した



第 89 図　三角ダイアグラム (比較試料 1)

比較試料との対比結果を第 23・24 表に示す。第 24 表中では，比較項目を三色の「○」に分け，同一の分類群に属する地点と試料の関係を示している。従って，たたら場跡の分析試料と 3 項目とも同一の分類群に属する地点には，三色の「○」が揃うことになり，磁鉄鉱形態と化学組成の共通性が高いことになる。一方，「○」が無い場合には，共通性は比較的低いことになる。なお分析項目の共通性が高いことは，直ちに砂鉄の産地の特定には結び付かず，たたら場跡から出土した砂鉄の産地同定については，分析試料や分析項目の追加によって，さらに詳細かつ精緻な分析が必要になる。



第 90 図　三角ダイアグラム (比較試料 2)

第 22 表　化学組成分析による各河川の分類

分析方法	測定分類	千代川			天神川			日野川			斐伊川			神戸川			田儀川			三瓶川		
		上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流
化学分析	①						●												●		●	
	②											●	●									
	③			●						●								●				
	④							●	●	●	●			●	●	●	●					
	⑤											●										
	⑥										●	●										
	⑦										●											

分析方法	測定分類	静間川			江の川			敬川			周布川			高津川			久村		姉谷
		上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	鉱山	鉱石	鉱石
化学分析	①		●		●		●												
	②											●	●						
	③			●													●		●
	④					●									●	●			
	⑤									●								●	
	⑥																		
	⑦																		

第 23 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料の分析結果一覧

遺跡名	試料 No.	形態分析	粒径分析	化学分析	化学分析の特徴
越堂たたら跡	1	自形・小判状 10%以上	-	①	Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で、比較的TiO_2の含有量が多い。
	2	自形・小判状 10%以上	-	④	含有量の分布が全体に及ぶ。
	3	棒状	-		
	4	棒状・小判状 10%以上	-	①	Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で、比較的TiO_2の含有量が多い。
	5	自形	-		
	6	棒状	-		
	7	円盤状	-		
	8	球状・棒状	-		
	9	球状・棒状	-	③	TiO_2の含有量が多い。
	10	自形	-	①	Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で、比較的TiO_2の含有量が多い。
	11	自形	-	③	TiO_2の含有量が多い。
	12	球状	-		
	13	球状	-		
	14	球状・小判状 10%以上	-	④	含有量の分布が全体に及ぶ。
	15	自形	-	①	Al_2O_3とSiO_2の含有量がほぼ一定で、比較的TiO_2の含有量が多い。
	16	円盤状	-		
	17	球状・棒状・自形	極細粒	③	TiO_2の含有量が多い。
朝日たたら跡	18	自形	-	④	含有量の分布が全体に及ぶ。
	19	球状	中粒		

第 24 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡試料と比較試料との共通性

遺跡名	試料No.	千代川			天神川			日野川			斐伊川			神戸川			田儀川			三瓶川		
		上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流
越堂たたら跡	1						●	○	○	○				○	○	○			●		●	
	2							○●	○●	○●	●			○●	○●	○●	●					
	3	○	○		○	○		○●	○●	●	○●	○		○●	○●	●	○●	○		○	○	
	4	○	○		○	○	●	○	○		○	○		○	○	○	○	○	●	○	○●	
	5						●	○	○	○									●		●	
	6	○	○		○	○	●	○	○		○	○		○	○		○	○	●	○	○●	
	7		○			○	●		○			○			○			○	●		○●	
	8	○	○	○	○	○	○●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○●	○	○●	○
	9	○	○	○●	○	○	○	○	○	○●	○	○	○	○	○	○	○	○●	○	○	○	○
	10						●	○	○	○									●		●	
	11			●				○	○	○●								●				
	12			○●			○			○●			○			○		●	○			○
	13			○●			○			○●			○			○		●	○			○
	14			○			○	●	●	○●	●		○	○●	○●	○●	●		○			○
	15						●	○	○	○									●		●	
	16		○			○	●		○			○			○			○	●		○●	
	17	○	○	○●	○	○	○	○	○	○●	○	○●	○●	○	○	○	○	○●	○	○	○	○
朝日たたら跡	18							○●	○●	○●	●			●	●	●	●					
	19			○	●	●	○●	●●	●●	○●●	●		○	●	●	○●	●		○			○

遺跡名	試料No.	静間川			江の川			敬川			周布川			高津川			久村		姉谷
		上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	上流	中流	下流	鉱山	鉱石	鉱石
越堂たたら跡	1	○	○●	○	○●	○	○●							○	○	○			○
	2	○	○	○	○	○●	○							○	○●	○●			○
	3	○	○		○	○●		○	○		○	○		○	○●	●	○		
	4	○	○●	○	○●	○	●	○	○		○	○		○	○		○		
	5		●		○●	○	○●							○	○	○			○
	6	○	○●		○●	○	●	○	○		○	○		○	○		○		
	7		○●		●	○	●		○			○			○				
	8	○	○●	○	○●	○	○●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	9	○	○	○●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○●	○	●
	10		●		○●	○	○●							○	○	○			○
	11			●	○	○	○							○	○	○	●		○●
	12			○●			○			○			○			○	●	○	●
	13			○●			○			○			○			○	●	○	●
	14	○	○	○		●	○			○			○		●	○●		○	
	15		●		○●	○	○●							○	○	○			○
	16		○●		●	○	●		○			○			○				
	17	○	○	○●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○●	○	○●
朝日たたら跡	18				○	○●	○							○	○●	○●			○
	19	●	●	○●		●	○			○			○		●	○●		○	

凡例　○：形状分析結果の共通性　●：粒径分析結果の共通性　●：化学分析結果の共通性

（2）比較検討の結果

第 24 表に示したように，越堂たたら跡試料の多くで複数の比較試料と共通性が高いことが示された。『久村の歴史』編集委員会編（2011）によると，越堂鈩で使用されていた砂鉄は，たたら場周辺の鉄穴場のみならず，鳥取県東部・西部や島根県西部から購入していたとの記載がある。今回の分析結果も，このことに矛盾していない。

（3）磁鉄鉱の化学組成分析の成果と課題

第 23 表に示すように，越堂たたら跡と朝日たたら跡で確認された化学組成分析のグループは，7 つに分類したなかで，①・③・④のみであった。

また使用したデータベースでは，化学組成分析結果の 7 グループのみで比較試料の 36 地点を分類しているに過ぎず，大半のグループに複数の地点が含まれていた。このため山陰地方東部～中部，山陰地方中部～西部と広い範囲が含まれるグループもある。今後，より正確に分析を行うためには，比較試料の増加，3 成分（Al_2O_3・SiO_2・TiO_2）以外での有効な元素の選定などが期待される。

（4）朝日たたら跡の分析結果について

朝日たたら跡は神戸川中流域に位置する。朝日たたら跡の試料は，神戸川流域の採取試料との共通項目が少ないが，当時の流通の観点から，近辺で産出される原料（砂鉄）を使わなかったとは考え難い。第 24 表を詳細に見ると，形態分析では神戸川流域の採取試料を特徴付ける「小判状」粒子が少ないものの，化学組成分析の結果では共通性が高いことが示される。

なお，使用したデータベースは川砂鉄を対象としており，朝日鉧で使用された砂鉄が，近辺で産出される山砂鉄であったと仮定すると，形態分析で神戸川流域の採取試料と差異が生じたのは，川砂鉄と山砂鉄の形態の差に起因する可能性が考えられる。これらの問題を解決するためには，神戸川流域での新たな比較試料や，山砂鉄の追加が望まれる。

7　まとめ

今回の分析において，越堂たたら跡と朝日たたら跡から採取された砂鉄の磁鉄鉱が形態や化学組成のなかである程度分類され，それぞれに特徴を持つことが示された。今後，有効な元素を追加選定することにより，山陰地方各地の河川の流域との詳細な対比が可能になると思われる。そして形態分類については，山砂鉄を追加する必要性が指摘できた。今後，川砂鉄・山砂鉄などの比較試料をさらに充実させることで，詳細かつ具体的な分析成果が期待される。　（奥中亮太）

参考文献

公文富士夫・立石雅昭編 1998『新版砕屑物の研究法』地学双書 29　地学団体研究会

『久村の歴史』編集委員会編 2011『久村の歴史』久村地区連合自治会

田結庄良昭 1986「兵庫県西北部，波賀累帯深成岩体の地質および岩石」『岩石鉱物鉱床学会誌』第 81 巻第 1 号　32 ～ 45 頁

田村糸子・鈴木毅彦 2001「中期更新世広域テフラ Ng-1 と飛騨地域に分布する高山軽石層との対比」『第四紀研究』第 40 巻第 4 号　295 ～ 305 頁

和田恵治・石崎直人・佐藤鋭一 2007「根釧台地，別海町中春別露頭で同定された大雪山・御鉢平カルデラ起源の広域火山灰」『北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告』第 41 号　大雪山自然教育研究施設　55 ～ 65 頁

20 万分の 1 日本シームレス地質図（https://gbank.gsj.jp/seamless/seamless2015/2d/）

DamMaps- 日本全国 web 地図でダムめぐり（http://dammaps.jp/）

第３節　越堂たたら跡床釣りの地中レーダー探査

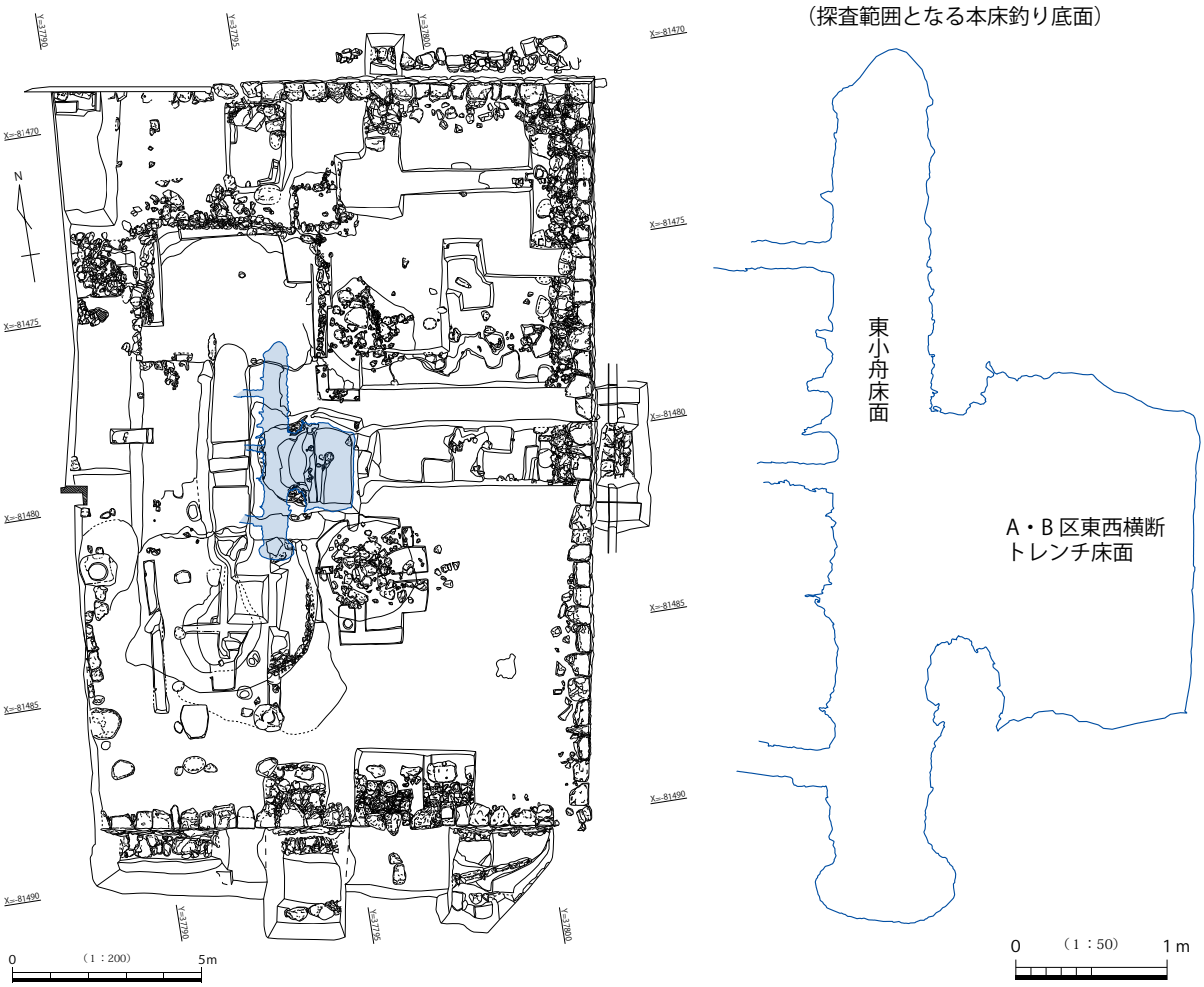
１　はじめに

越堂たたら跡は，製鉄炉の地下構造施設である床釣りが良好な状態で残存していた。発掘調査では床釣り上部の「本床釣り」が確認されたが，床釣り下部の「下床釣り」は未調査である。本報告では，越堂たたら跡の下床釣りの状況を把握する目的で，本床釣り底面において実施した地中レーダー探査の成果を整理して報告する。なお，地中レーダーの探査範囲は，第 91 図のとおりである。

２　測定方法と探査範囲

（1）地中レーダー探査の概要

地中レーダー探査は，地中に向かって電磁波を送信し，地層や空洞等の境界面で発生する反射波を地表で観測する方法である。反射波は地中の物性境界面を示しているため，設定した測線において連続的に反射波を観測することにより，第 92 図に示すような地中構造を推定できる探査結果を取得することができる。



第 91 図　越堂たたら跡の地中レーダ探査範囲

（２）地中レーダー探査の原理

信号源

信号源として用いているのは，電波と呼ばれる 300 万 MHz 以下の周波数の電磁波である。本探査では，第 93 図の青矢印で示すような超短波（VHF）から極超短波（UHF）帯の周波数の電磁波を信号源として用いている。

電磁波の地中伝搬特性

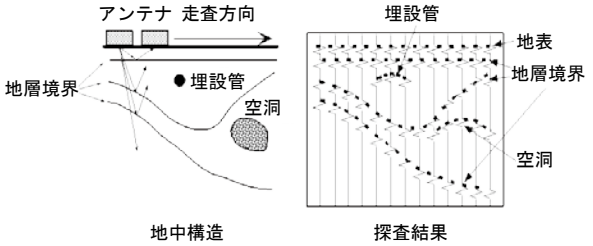
探査深度は，電磁波の送信電力と地中の伝搬損失によって決定される。伝搬損失は，地盤の電気的特性や電磁波の送信周波数に依存し，送信周波数が一定であれば地盤の導電率（σ：S/m）が小さいほど伝搬損失は小さい。つまり導電率が小さい（比抵抗値が高い）ほど探査深度は大きくなる。

地盤中の電磁波の伝搬速度（V：108m/sec）は，伝搬する媒質により異なり，近似的に比誘電率（εγ：単に誘電率とも呼ばれる）の関数として求められる。また誘電率は，第 25 表（Keller et al 1966, Morey1974）のように土の種類や含水状態により異なる。

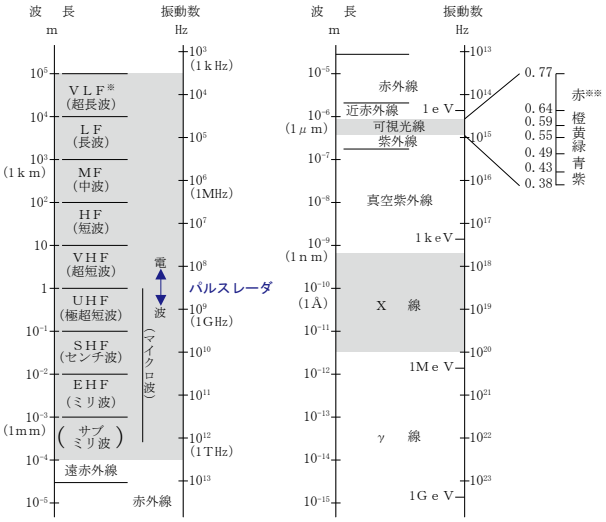
第 25 表の物質以外に，コンクリートやアスファルトなどの人工的な物質の誘電率は，施工されてからの経過年数や老朽化によっても異なるが，一般的に８～ 14 程度とされている。

地表から放射された電磁波は，地中に埋設物や空洞あるいは土質の境界などの電気的特性が異なる物質がある場合には，その境界面で反射波を生じる。このときの反射強度は，反射波の振幅で表され，境界面の上方と下方との媒質の電気的性質の比（コントラスト）によりその大きさが決定される。つまり地盤中を伝搬する波の減衰を考えなければ，境界面で接する媒質の電気的性質のコントラストが大きい方が反射波の振幅が大きくなっている。

なお，本調査では第 25 表中赤枠内の土質と想



第 92 図　地中レーダー探査の測定方法及び概念

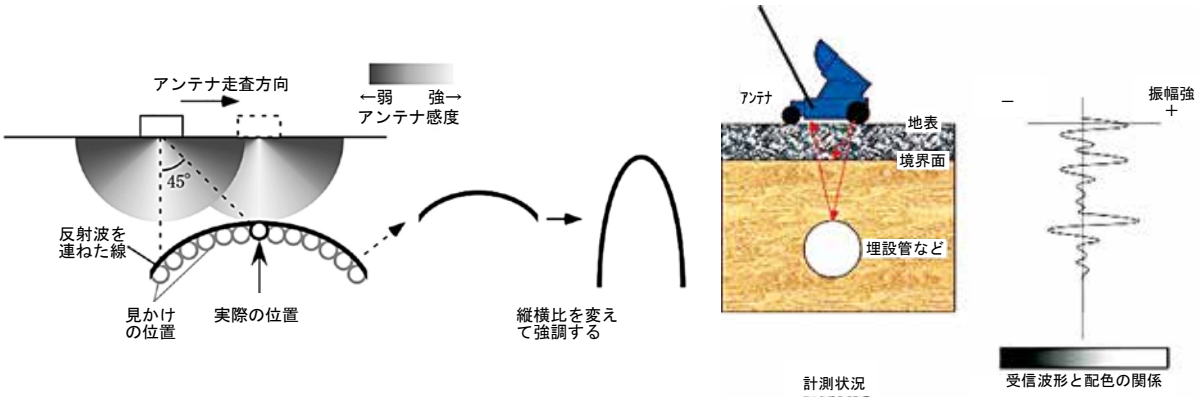


※　電波の周波数帯の英字による呼び方は国際電気通信条約無線規則による。
※※可視光線の限界ならびに色の境界には個人差がある。

第 93 図　電磁波の波長と振動数
（自然科学研究機構国立天文台編 2015 に加筆）

第 25 表　物質の導電率（σ）と比誘電率（εγ）・速度（V）

媒質	導電率（S/m）	比誘電率（εr）	電磁波速度（10^8m/sec）
空気	0	1	3
ｱｽﾌｧﾙﾄ：乾燥	10^{-3} ～ 10^{-2}	2 ～ 4	1.50 ～ 2.12
ｱｽﾌｧﾙﾄ：湿潤	10^{-2} ～ 10^{-1}	6 ～ 12	0.87 ～ 1.22
粘土：乾燥	10^{-3} ～ 10^{-1}	2 ～ 6	1.22 ～ 2.12
粘土：湿潤	10^{-1} ～ 1	15 ～ 40	0.47 ～ 0.77
石炭：乾燥	10^{-2}	3.5	1.60
石炭：湿潤	10^{-1}	8	1.06
ｺﾝｸﾘｰﾄ：乾燥	10^{-3} ～ 10^{-2}	4 ～ 10	0.95 ～ 1.50
ｺﾝｸﾘｰﾄ：湿潤	10^{-2} ～ 10^{-1}	10 ～ 20	0.67 ～ 0.95
真水	10^{-4} ～ 10^{-2}	81	0.33
真水氷	10^{-3}	4	1.50
花崗岩：乾燥	10^{-8} ～ 10^{-6}	5	1.34
花崗岩：湿潤	10^{-3} ～ 10^{-2}	7	1.13
玄武岩	10^{-2}	8	1.06
石灰岩：乾燥	10^{-9} ～ 10^{-6}	7	1.13
石灰岩：湿潤	10^{-2} ～ 10^{-1}	8	1.06
凍土	10^{-5} ～ 10^{-2}	4 ～ 8	1.06 ～ 1.50
岩塩：乾燥	10^{-4}	4 ～ 7	1.13 ～ 1.50
砂：乾燥	10^{-7} ～ 10^{-3}	4 ～ 6	1.22 ～ 1.50
砂：湿潤	10^{-4} ～ 10^{-2}	10 ～ 30	0.55 ～ 0.95
シルト：湿潤	10^{-3} ～ 10^{-2}	9 ～ 15	0.77 ～ 1.00
砂岩：乾燥	10^{-9} ～ 10^{-6}	2 ～ 3	1.73 ～ 2.12
砂岩：湿潤	10^{-6} ～ 10^{-2}	5 ～ 410	0.95 ～ 1.34
海水	4	81	0.33
海水氷	10^{-2} ～ 10^{-1}	4 ～ 8	1.06 ～ 1.50
頁岩	10^{-2} ～ 10^{-1}	6 ～ 9	1.00 ～ 1.22
雪：固結状態	10^{-6} ～ 10^{-5}	8 ～ 12	0.87 ～ 1.06
土壌：砂質、乾燥	10^{-4} ～ 10^{-2}	4 ～ 6	1.22 ～ 1.50
土壌：砂質、湿潤	10^{-3} ～ 10^{-1}	15 ～ 30	0.55 ～ 0.77
土壌：ﾛｰﾑ質、乾燥	10^{-4} ～ 10^{-3}	3 ～ 6	1.22 ～ 1.73
土壌：ﾛｰﾑ質、湿潤	10^{-2} ～ 10^{-1}	10 ～ 20	0.67 ～ 0.95
土壌：粘土質、乾燥	10^{-4} ～ 10^{-1}	3 ～ 6	1.22 ～ 1.73
土壌：粘土質、湿潤	10^{-2} ～ 10^{1}	10 ～ 15	0.77 ～ 0.95



第 94 図　局所的な異常（埋設管や空洞など）による双曲線状の反射波の重なり（左）と反射波の振幅（右）

定し，比誘電率を 12 として深度換算した。

反射画像

地中に向かって放射した電磁波は，第 94 図左に示したように，球面上に広がりながら地中を伝搬する。そのため，測線直下の反射波だけでなく周りの反射体からの反射波も検出する。アンテナの感度は，地中の媒質の電気特性や周波数によっても異なるが，鉛直方向から片側に約 45°，両側で 90°の感度分布を持っている。従って，局所的な異常による反射波（埋設管や空洞等）は，直上に来る前にアンテナによって検出される。この反射波は，反射体の手前では見かけ上深い位置にあるように見え，反射体直上で最も近づき，離れるに従って徐々に深くなるように見える。このとき，反射波の連なりが双曲線として現れる。

反射信号は，実際には波形として収録される。この波形記録を処理することにより画像記録として表示される。画像記録は，第 94 図右のように反射波の振幅がプラス（＋）側に大きければ白色，マイナス（－）側に大きければ黒色に着色される。

3　調査結果

地中レーダー探査は 8 測線実施した（第 95 図）。第 96 図に地中レーダー解析結果図および解釈を示した。また測定収録したデータの解析は，以下の点に着目して実施した。

①　空洞と推定される双曲線状反射面の抽出

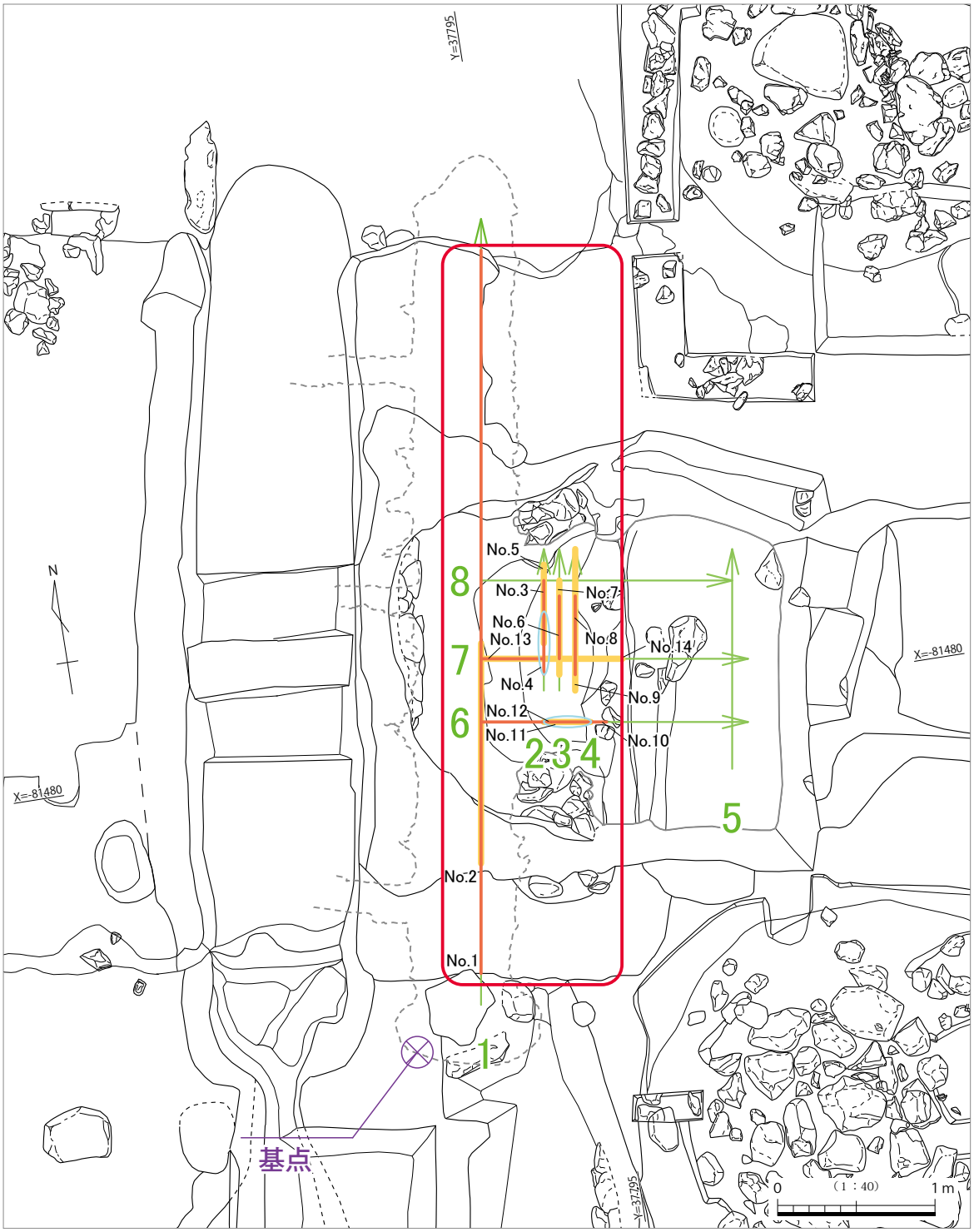
②　周囲と比べ強い反射面（もしくは傾斜する反射面）が連続する箇所の抽出

解析の結果，空洞と推定される双曲線状の反射面は確認されなかった。

周囲と比べ強い反射面が連続する箇所（もしくは傾斜する反射面）の抽出を行った。これらの箇所は土質の違いや地層境界であると推定される。

周囲と比べ強い反射面が連続する箇所（もしくは傾斜する反射面）は，測線 1 ～ 7 の 7 測線においてそれぞれ浅部（GL-0.3m ～ 0.8m 付近）と深部（GL-0.7m ～ 1.3m 付近）に認められた。浅部と深部の間に分布する No. 4，No.11 は浅～深部とした。

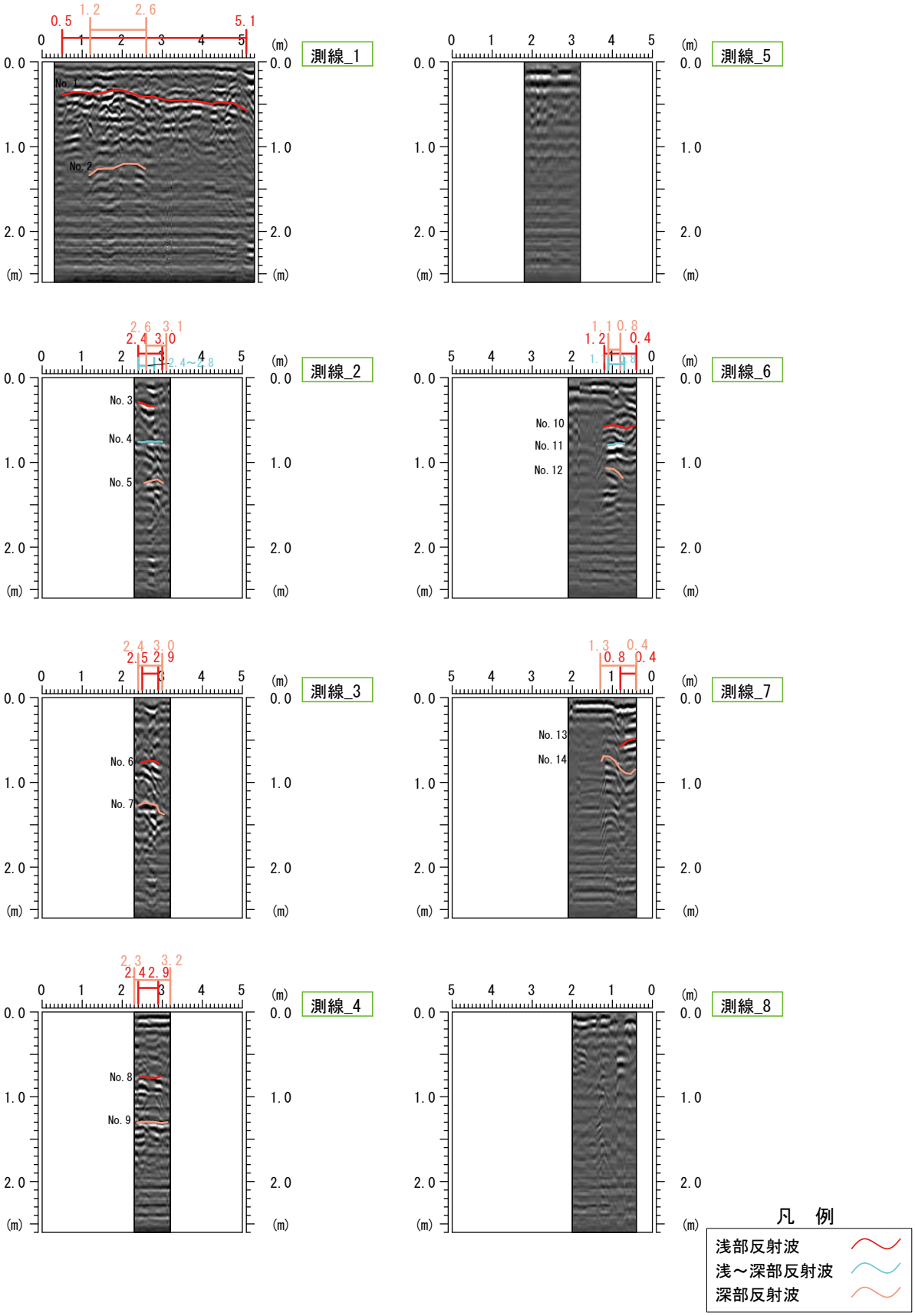
強い反射面（もしくは傾斜する反射面）の分布一覧を第 26 表に示す。



凡　例

：浅部反射波	：強い反射面もしくは傾斜する反射面の集中範囲
：浅～深部反射波	
：深部反射波	
：探査測線ライン	

第 95 図　地中レーダー探査測線（測線１～８）と強い反射面の位置（No. １～ 14）および集中範囲



第 96 図　地中レーダー解析結果図および解釈

第 26 表　強い反射面（もしくは傾斜する反射面）の分布一覧

No.	測線名	測線上の区間 (m)	区間長 (m)	深度 (GL-m)	備考
1	測線 _1	0.5　～　5.1	4.6	0.3 ～ 0.6	浅部
2	測線 _1	1.2　～　2.6	1.4	1.2 ～ 1.3	深部
3	測線 _2	2.4　～　2.8	0.4	0.3	浅部
4	測線 _2	2.4　～　3.0	0.6	0.7	浅～深部
5	測線 _2	2.6　～　3.1	0.5	1.2	深部
6	測線 _3	2.5　～　2.9	0.4	0.7	浅部
7	測線 _3	2.4　～　3.0	0.6	1.3	深部
8	測線 _4	2.4　～　2.9	0.5	0.8	浅部
9	測線 _4	2.3　～　3.2	0.9	1.3	深部
10	測線 _6	0.4　～　1.2	0.8	0.6	浅部
11	測線 _6	0.8　～　1.1	0.3	0.8	浅～深部
12	測線 _6	0.8　～　1.1	0.3	1.1 ～ 1.2	深部
13	測線 _7	0.4　～　0.8	0.4	0.5	浅部
14	測線 _7	0.4　～　1.3	0.9	0.7 ～ 0.9	深部

4　まとめ

強い反射面もしくは傾斜する反射面は測線 1 ～ 4 のほぼ全体と，測線 6，7 の前半部分の深度 GL-0.3m ～ 1.3m 付近に分布している（第 95 図赤枠）。

これら強い反射面もしくは傾斜する反射面は土質の違いや地層境界であると考えられるが，赤枠内に偏っていることから，人為的な影響を含んで生じた境界である可能性が考えられる。

空洞に関しては，双曲線状を示す反射面が認められないことから，空洞は無い，もしくは 空洞が存在する可能性は低いと考えられる。

（奥中亮太）

参考文献

自然科学研究機構国立天文台編 2015『理科年表』丸善出版

Keller, J. B., & Karal Jr, F. C. 1966. Effective dielectric constant, permeability, and conductivity of a random medium and the velocity and attenuation coefficient of coherent waves. *Journal of Mathematical Physics*, 7(4), pp.661-670.

Morey, R. M. 1974. Detection of subsurface cavities by ground penetrating radar. *Highway Geological Symposium, Proceedings*, Vol. 27, pp.28-30.

第４節　越堂たたら跡出土製鉄関連遺物の金属学的分析

１　はじめに

越堂たたら跡は出雲市多伎町口田儀に所在する。2006（平 18）年度と 2013 ～ 2017（平 25 ～ 29）年度の発掘調査によって，石垣で囲まれた敷地内からは近世から近代にかけてのたたら場の高殿と製鉄炉地下構造である床釣りが確認されている。

これまで，2006 年度の調査で出土した炉壁（TGS － 27），砂鉄（TGS － 28）各 1 点の分析調査が実施され，分析結果が報告されている（石原編 2010）。今回，越堂鈩の鉄生産の実態をさらに詳しく検討するため，2013 ～ 2017 年度の調査で出土した金属鉄を含む製鉄関連遺物 4 点を新たに分析する運びとなった。

２　調査方法

（1）供試材

出土製鉄関連遺物 4 点（KED-1 ～ 4）を調査した（第 27 表）。

（2）調査項目

外観観察

鉄滓の外観的な特徴を記載した。

マクロ組織

試料を端部から切り出した後，断面をエメリー研磨紙の #150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の３㎛と１㎛で順を追って研磨し，断面の全体像を撮影した。

顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属組織の観察を目的とする。試料観察面を設定・切り出し後，試験片は樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の #150，#240，#320，#600，#1000，及びダイヤモンド粒子の３㎛と１㎛で鏡面研磨した。金属反射顕微鏡を用い，特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。また金属鉄の組織観察には３％ナイタル（硝酸アルコール）を腐食に用いた。

ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて金属鉄部の硬度を測定した。試料は顕微鏡用を併用し，荷重は 200gf で測定した。ビッカース硬さは測定箇所に圧子（136°の頂角をもったダイヤモンド）を押し込んだ時の荷重と，それにより残された窪み（圧痕）の対角線長さから求めた表面積から算出される。

EPMA 調査

EPMA（日本電子製㈱ JXA-8230）を用いて，鉄滓の鉱物組成および鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV，照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

化学組成分析

①鉄塊（金属鉄部）

炭素（C）：燃焼容量法。

珪素（Si），マンガン（Mn），燐（P），ニッケル（Ni），クロム（Cr），モリブデン（Mo），銅（Cu），バナジウム（V），チタン（Ti），アルミニウム（Al），コバルト（Co）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer：誘導結合プラズマ発光分光分析法）。

②鉄滓

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S）：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer：誘導結合プラズマ発光分光分析法）。

３　調査結果

（１）KED-1：鉄塊系遺物（銑鉄塊）

外観観察

偏平な流動状の鉄塊（157.3g）である。表面は茶褐色の鉄錆に覆われる。表面には気孔がなく重量感があり，全体に金属探知器反応が強い。銑鉄塊（流れ銑）と推定される。また下面端部に１箇所灰白色の滓と木炭破片が付着する。

マクロ組織（第 100 図①）

観察面全体が，亜共晶組成白鋳鉄組織（C ＜ 4.26%）の鉄塊であった。

顕微鏡組織（第 100 図②・③）

②は金属鉄（亜共晶組成白鋳鉄組織）部分の拡大である。蜂の巣状のレデブライト（Ledeburite），白色針状のセメンタイト（Cementite：Fe_3C），黒色層状のパーライト（Pearlite）が確認された。

③の左側は表層に付着した製錬滓で，淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）が晶出する。また右側の青灰色粒は被熱砂鉄である。

ビッカース断面硬度

第 100 図②の金属鉄部（亜共晶組成白鋳鉄）の硬度を測定した。レデブライトの硬度値は 726Hv，セメンタイトの硬度値は 706Hv と非常に硬質であった。一方，パーライトの硬度値は 268Hv であった。それぞれ組織に見合った値である。

化学組成分析（第 28 表）

炭素（C）は 3.22% であった。金属組織と符合する（鋳鉄：C ＞ 2.14%）値であった。また燐（P）が 0.117% と高めであった。チタン（Ti）は＜ 0.01%，バナジウム（V）も＜ 0.01% と非常に低値で，製錬滓の影響はほとんどない。

当遺物はほぼ全面亜共晶組成白鋳鉄組織の鉄塊であった。

（2）KED-2：製錬滓（含鉄）

外観観察

不定形の製錬滓（炉内滓）破片（276.6g）である。表面は全体が黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆で覆われる。また腐食（錆化）に伴い，不規則な放射割れが生じている。素地は暗灰色の滓であるが，広い範囲で金属探知器反応があり，内部に小形の金属鉄が散在するものと推測される。

マクロ組織（第 100 図④）

素地の灰褐色部は製錬滓で，内部に小形の金属鉄部や木炭の破片が確認された。

顕微鏡組織（第 100 図⑤・⑥）

⑤の中央は金属鉄部で，亜共晶組成白鋳鉄組織であった。⑥も金属鉄部の拡大である。パーライト素地に白色針状のフェライト（Ferrite：α鉄）が析出する亜共析～共析（C ≦ 0.77%）組織であった。鉄中の炭素量は部位によるばらつきが大きいことが確認された。また⑥の不定形暗灰色部は製錬滓で，白色針状結晶イルメナイト（Ilmenite：$FeO{\cdot}TiO_2$）が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖（J.B.Mac1961）[1] といえる。

ビッカース断面硬度

第 100 図⑤の金属鉄部（亜共晶組成白鋳鉄組織）の硬度を測定した。レデブライトの硬度値は 909Hv，パーライトの硬度値は 175Hv であった。また第 100 図⑥の亜共析～共析組織部分の硬度を測定した。素地のパーライト組織の硬度値は 218Hv，フェライトが析出する箇所の硬度値は 196Hv であった。それぞれ組織に見合った値である。

化学組成分析

当遺物は素地が製錬滓で，内部に小形の金属鉄が複数確認された。金属鉄はまとまらずに廃棄されたものと推測される。また部位によって炭素量のばらつきが大きい。上述したように亜共析～共析組織の鋼の部分と白鋳鉄組織部分が確認された。

（3）KED-3：製錬滓（含鉄）

外観観察

大形で厚手の製錬滓（炉内滓）の破片（336.3g）である。滓の色調は暗灰色で，着磁性はほとんどない。上面の一部と下面は本来の表面で，側面は全面破面である。破面には中小の気孔が多数散在する。また下面の端部に 1 箇所やや偏平な粒状の鉄部が確認される。この部分は金属探知器反応があり，金属鉄が残存すると推定される。

マクロ組織（第 101 図①）

右上の灰褐色部は製錬滓，下側の粒状部分は金属鉄（またはその錆化したもの）である。

顕微鏡組織（第 101 図②・③）

②は金属鉄部の拡大である。素地は黒色層状のパーライトで，白色針状のセメンタイトおよび黒色片状の黒鉛（Graphite：C）が析出する。ねずみ鋳鉄組織であった。

③は製錬滓部分の拡大である。中央は被熱砂鉄粒子で，縞状離溶組織が観察される含チタン鉄鉱[2]

であった。外周部の微細な明白色粒は還元で生じた金属鉄である。また淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル，白色針状結晶イルメナイトが晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。

ビッカース断面硬度

第 101 図②の金属鉄部（ねずみ鋳鉄組織）の硬度を測定した。素地のパーライト硬度値は 196Hv，針状セメンタイトが析出する箇所は 272，359Hv であった。それぞれ組織に見合った値である。

EPMA 調査（第 101 図④・⑤）

④に金属鉄部の反射電子像（COMP）を示す。片状黒色部は特性 X 線像をみると炭素（C）に強い反応があり，黒鉛（Graphite：C）と推定される。微細な粒状黄褐色部は特性 X 線像では硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は 62.6%Fe － 33.3%S（分析点 1）であった。硫化鉄（FeS）である。また金属鉄部には燐（P）が網目状に分布する。定量分析値は 92.2%Fe － 5.0%P（分析点 2）であった。ステダイト（Steadite：Fe － Fe_3P － Fe_3C）に同定される。

また⑤は滓中の被熱砂鉄粒子の反射電子像（COMP：③の拡大）である。素地部分の定量分析値は 92.6%FeO － 2.3%MgO － 1.2%TiO_2（分析点 3）であった。磁鉄鉱（Magnetite：FeO･Fe_2O_3）で，少量マグネシア（MgO），チタニア（TiO_2）を固溶する。縞状の褐色部の定量分析値は 62.0%FeO － 25.4%TiO_2 － 3.6%Al_2O_3 － 1.9%MgO － 1.2%V_2O_3（分析点 4）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に近い組成である。また外周の白色針状結晶の定量分析値は 42.8%FeO － 49.9%TiO_2 － 1.3%MnO － 1.2%MgO － 1.0V_2O_3（分析点 5）であった。イルメナイト（Ilmenite：FeO･TiO_2）と同定される。微細淡灰色結晶の定量分析値は 48.7%FeO － 5.6%MgO － 35.6%SiO_2（分析点 6）であった。ファヤライトと推定される。素地部分の定量分析値 54.1%SiO_2 － 13.2%Al_2O_3 － 4.7%CaO － 2.0%K_2O － 16.6%FeO － 4.0%TiO_2（分析点 7）であった。非晶質珪酸塩である。

化学組成分析（第 28 表）

金属鉄部は量が限られるため，製錬滓を供試材とした。全鉄分（Total Fe）30.44% に対して，金属鉄（Metallic Fe）は 0.26%，酸化第 1 鉄（FeO）が 31.37%，酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）8.29% の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 41.27% と高めで，このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 4.51% であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 16.51%，バナジウム（V）が 0.26% と高値であった。また酸化マンガン（MnO）も 1.18% と高値であった。銅（Cu）は＜ 0.01% と低値であった。

当鉄滓は砂鉄（含チタン鉄鉱）を比較的高温で製錬した際の反応副生物（砂鉄製錬滓）であった。また滓中に付着した金属鉄粒は，ねずみ鋳鉄であった。

（４）KED-4：製錬滓（含鉄）

外観観察

大形で不定形の炉内滓（製錬滓）の破片（622.4g）と推定される。全体が茶褐色の鉄錆で覆われており，錆化に伴う割れも著しい。広い範囲で金属探知器反応があり，内部にはまとまった金属鉄が含まれるとものと判断する。一方で少なくとも表層の一部は黒灰色の製錬滓で，細かい木炭痕による凹凸が著しい。木炭破片も多数付着している。

マクロ組織（第 102 図①）

試料採取の際，まとまった金属鉄部が確認できた。その一部を断面観察したところ，ほぼ全面亜共晶組成白鋳鉄組織であった。

顕微鏡組織（第 102 図②・③）

②は滓部の拡大で，左側は格子状の離溶組織が残存する被熱砂鉄（含チタン鉄鉱）である。また右側の淡褐色片状結晶はシュードブルッカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3･TiO_2）と推定される。砂鉄を高温製錬した時の反応副生物といえる。一方，③は金属鉄部（亜共晶組成白鋳鉄組織）の拡大である。

ビッカース断面硬度

第 102 図③の金属鉄部（亜共晶組成白鋳鉄組織）の硬度を測定した。レデブライトの硬度値は 693Hv, セメンタイトの硬度値は 499Hv と硬質であった。一方, パーライトの硬度値は 244Hv であった。それぞれ組織に見合った値である。

EPMA 調査（第 102 図④・⑤）

④に滓部の反射電子像（COMP：②の拡大）を示す。④左側の被熱砂鉄（格子状）の定量分析値は 58.8%FeO － 30.3%TiO_2 － 3.9%Al_2O_3 － 1.6%MgO － 1.1%V_2O_3（分析点 8）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に近い組成である。また④の右側の淡褐色片状結晶の定量分析値は 85.3%TiO_2 － 8.8%FeO － 3.5%MgO － 1.2%V_2O_3（分析点 9）であった。シュードブルッカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3･TiO_2）と推定される。

もう 1 視野, 金属鉄部の反射電子像（COMP）を⑤に示す。粒状黄褐色部は特性 X 線像では硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は 61.5%Fe － 35.3%S（分析点 10）であった。硫化鉄（FeS）である。また金属鉄部には燐（P）が網目状に分布する。定量分析値は 85.5%Fe － 15.1%P（分析点 11）であった。ステダイト（Steadite：Fe － Fe_3P － Fe_3C）に同定される。

化学組成分析（第 28 表）

金属鉄部を供試材とした。炭素（C）は 2.84% であった。金属組織と符合する（鋳鉄：C ＞ 2.14%）値であった。また燐（P）が 0.174% と高めであった。チタン（Ti）は 0.08%, バナジウム（V）も＜ 0.01% と低値で，製錬滓の影響は僅かであった。

滓部の鉱物組成から，当遺物は砂鉄を高温製錬してできた含鉄鉄滓と判断される。また滓中には，まとまりのよい亜共晶組成白鋳鉄組織の金属鉄部が確認された。

4　まとめ

越堂たたら跡から出土した製鉄関連遺物 4 点（KED-1 ～ 4）を調査した結果，同たたら場ではチタニア（TiO_2）の割合の高い砂鉄を高温下で製錬しており，生産された鉄は銑（鋳鉄）の割合が高かったと推測される。詳細は以下の通りである。

製錬滓（KED-3）は，2006 年度に採取された越堂たたら跡出土砂鉄（TGS-28）と同様の砂鉄（TiO_2：8.75%）が製鉄原料であったと想定して矛盾のないものであった。

滓中には熱影響を受けて還元・滓化しかけた状態の砂鉄（含チタン鉄鉱）が確認された。またウル

ボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）に加え，イルメナイト（Ilmenite：FeO･TiO_2）が晶出する。チタニアの含有割合も高い（TiO_2：16.51%）。

今回の製錬滓（KED-3）の調査結果と，これまでに調査された出雲市内の中世～近世製鉄遺跡の出土砂鉄・製錬滓の化学組成（第 98 図）を合わせて，明治期に稼働していたたたらの調査例と比較すると，砂鉄は浜砂鉄，製錬滓は銑押し滓の組成と近似する。これは地域の鉄生産の特徴を示していると考えられる。

鉄塊系遺物（KED-1）と製錬滓（KED-3，4）の金属鉄部は鋳鉄であった。また製錬滓（KED-2）の金属鉄部は炭素量が低い箇所（亜共析～共析組織）もあるが，高い箇所は鋳鉄組織が確認されている（第 99 図）。上述したように，当遺跡で生産された鉄は銑（鋳鉄）の割合が高かったと考えられる。

（鈴木瑞穂）

註

（1）イルメナイト（Ilmenite：FeO･TiO_2），シュードブルッカイト（Pseudobrookite：Fe_2O_3･TiO_2）の晶出は FeO － TiO_2 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。第 97 図（J.B.Mac1961）参照。

（2）木下・小川（1995）によると，「チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。（中略）チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には，チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし，全体が完全に均質なものと，チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものとがある。チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり，これにも均質なものと，縞状のものとがある。（中略）このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱，または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。」と解説される。

参考文献

石原　聡編 2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―』出雲市の文化財報告 12　出雲市教育委員会

木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社

J.B.Mac chesney, A. Murau1961. *American Mineralogist*, 46, pp.572.

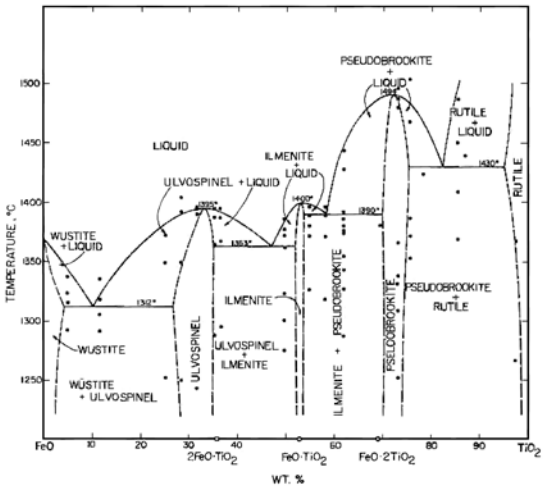
第 27 表　供試材の履歴と調査項目

分析No.	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目					報告書掲載No.
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	EPMA	化学分析	
KED-1	越堂たたら跡	A区 盛土～造成土	鉄塊系遺物	近世～近代	83×45×23	157.3	特L	○	○	○		○	67-209
KED-2		高殿南1tr 操業面上	製錬滓(含鉄)		54×53×24	276.6	L	○	○	○		○	65-186
KED-3		東面石垣外側tr 盛土	製錬滓(含鉄)		50×51×59	336.3	L	○	○	○		○	65-185
KED-4		高殿南3tr 盛土	製錬滓(含鉄)		65×68×45	622.4	特L	○	○	○	○	○	65-188

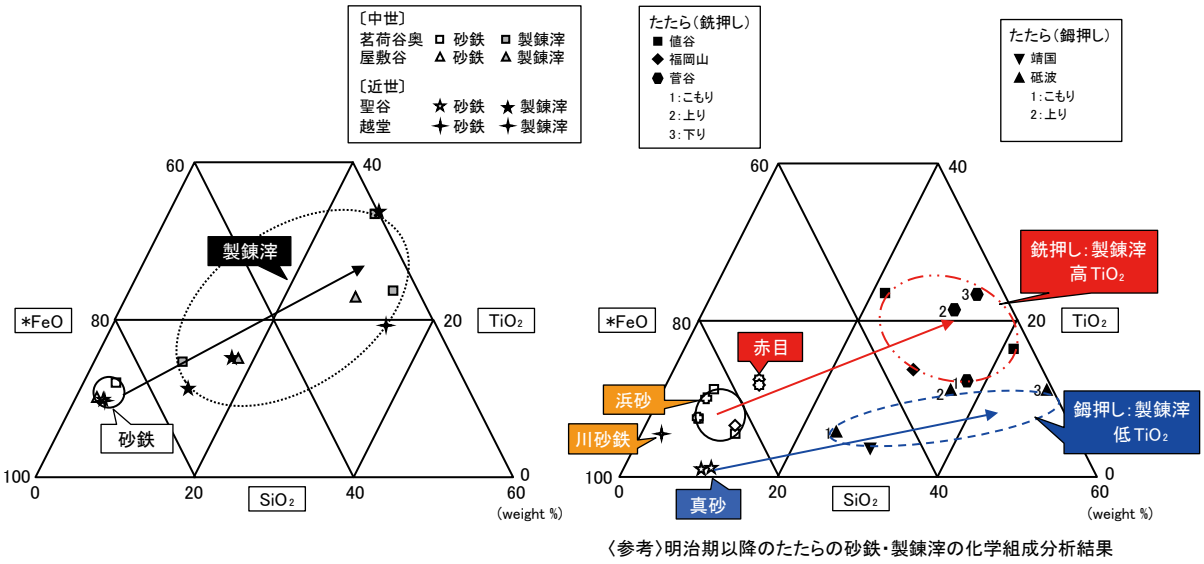
第 28 表　供試材の化学組成

分析No.	遺物名称	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic Fe)	酸化第1鉄(FeO)	酸化第2鉄(Fe_2O_3)	*二酸化珪素(SiO_2)	*酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ(Al_2O_3)	*酸化ｶﾙｼｳﾑ(CaO)	*酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ(MgO)	*酸化ｶﾘｳﾑ(K_2O)	*酸化ﾅﾄﾘｳﾑ(Na_2O)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ(MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ(TiO_2)	酸化ｸﾛﾑ(Cr_2O_3)	硫黄(S)	五酸化燐(P_2O_5)	炭素(C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ(V)	銅(Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ(ZrO_2)	Σ* 造滓成分
TGS-28	砂鉄	58.48	0.32	24.86	55.53	3.86	2.30	0.49	1.10	0.10	0.02	0.57	8.75	0.10	0.01	0.16	0.14	0.27	<0.01	0.06	7.87
KED-3	製錬滓(含鉄)	30.44	0.26	31.37	8.29	29.66	5.68	1.69	2.82	1.05	0.37	1.18	16.51	0.19	0.025	0.24	0.15	0.26	<0.01	0.38	41.27

分析No.	遺物名称	炭素(C)	珪素(Si)	ﾏﾝｶﾞﾝ(Mn)	燐(P)	ﾆｯｹﾙ(Ni)	ｸﾛﾑ(Cr)	ﾓﾘﾌﾞﾃﾞﾝ(Mo)	銅(Cu)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ(V)	ﾁﾀﾝ(Ti)	ｱﾙﾐﾆｳﾑ(Al)	ｺﾊﾞﾙﾄ(Co)
KED-1	鉄塊系遺物	3.22	0.02	<0.01	0.117	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	0.03
KED-2	製錬滓(含鉄)	0.91	0.10	0.02	0.056	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	0.01	0.37	0.14	0.02
KED-4	製錬滓(含鉄)	2.84	0.03	<0.01	0.174	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.08	0.04	0.02

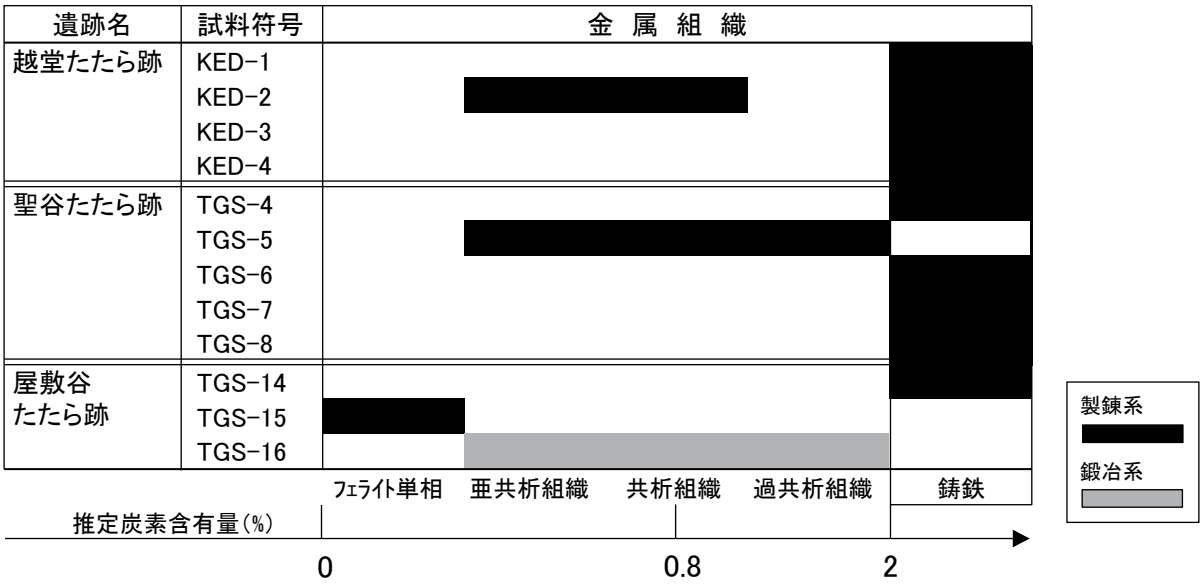


第 97 図　FeO-TiO_3 二元平衡状態図



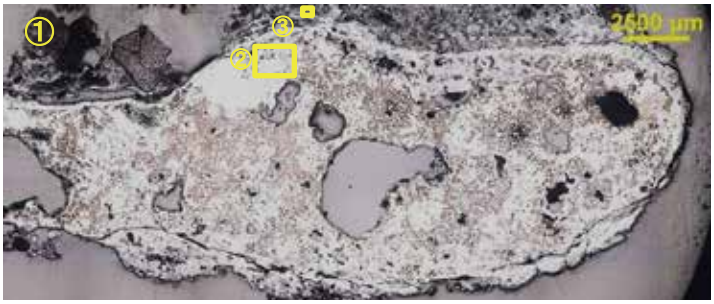
〈参考〉明治期以降のたたらの砂鉄・製錬滓の化学組成分析結果

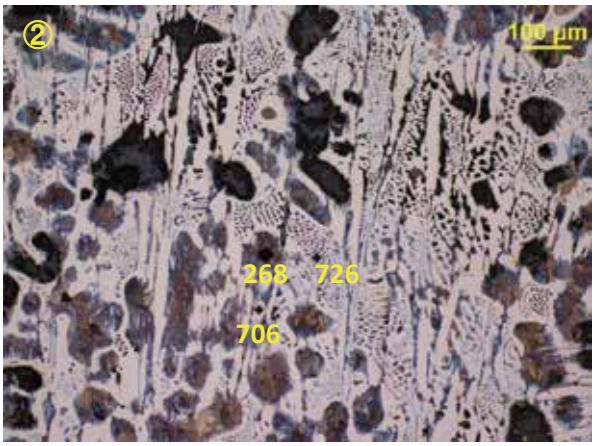
第 98 図　出雲市内の中世～近世製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成分析結果

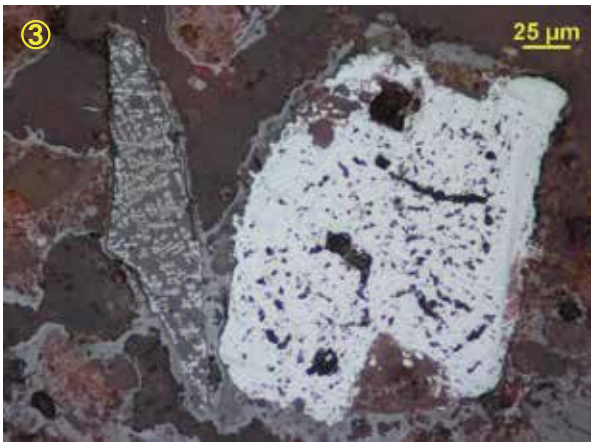


第 99 図　遺跡出土鉄塊系遺物の断面金属組織観察結果

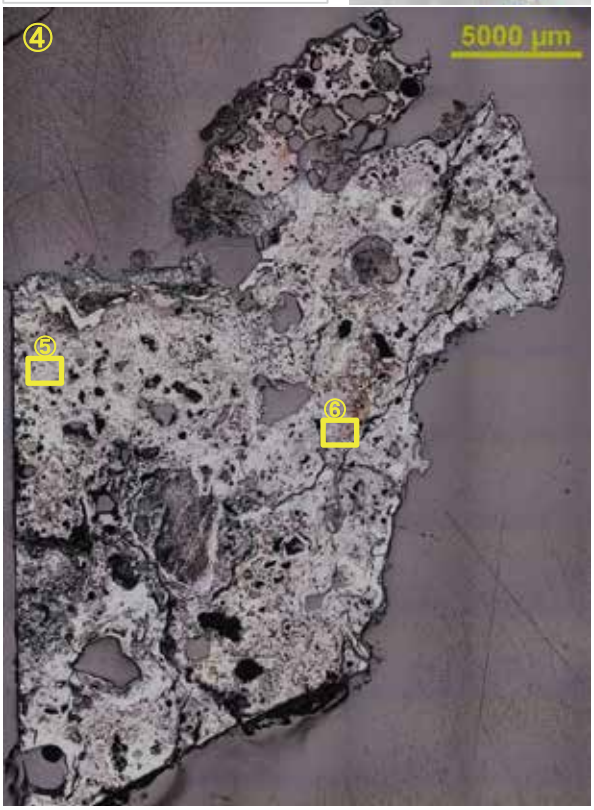
KED-1
鉄塊系遺物
①ﾏｸﾛ組織
②金属鉄部:亜共晶組成
白鋳鉄組織、硬度:268、
706、726Hv（200gf）
③左側付着滓:ｳｽﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ、
右側灰褐色粒：被熱砂鉄

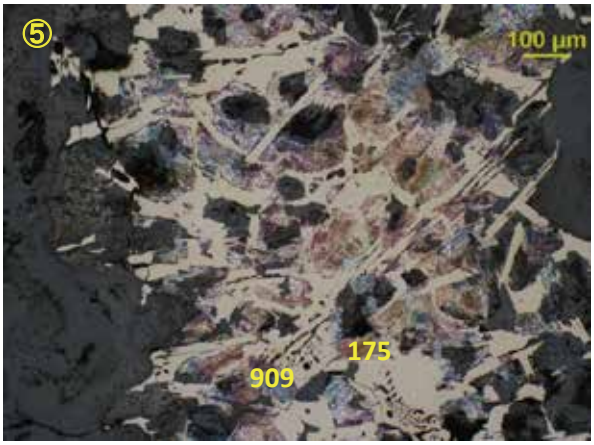


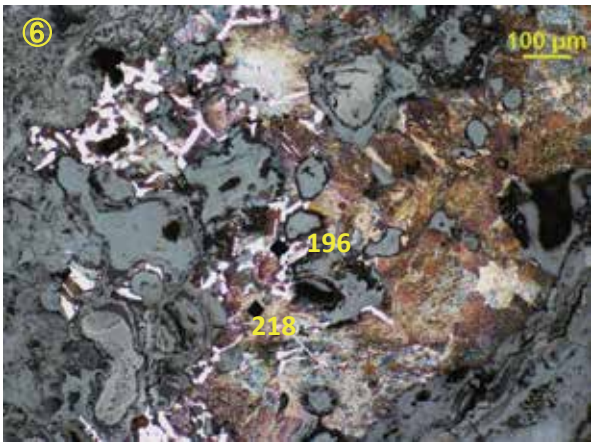




KED-2　　製錬滓（含鉄）
④ﾏｸﾛ組織、⑤金属鉄部:亜
共晶組成白鋳鉄組織、
硬度:175、909Hv（200gf）、
⑥金属鉄部亜共析～共析組織、
硬度:196、218Hv（200gf）、
滓部:ｲﾙﾒﾅｲﾄ

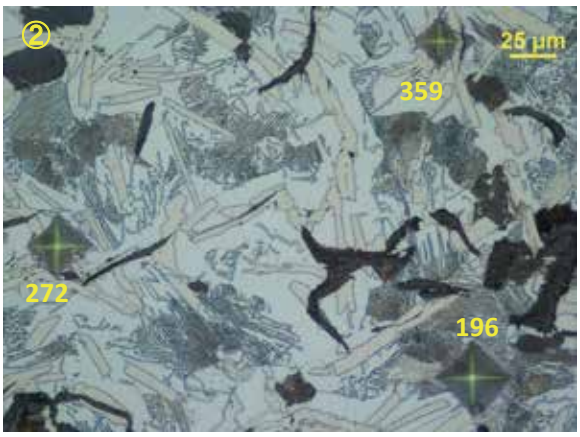


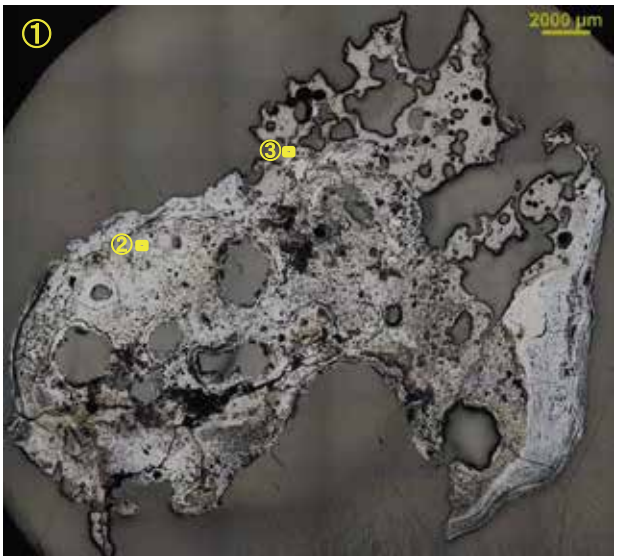


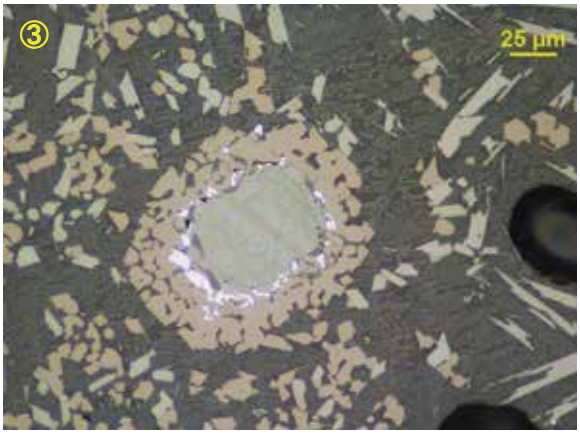


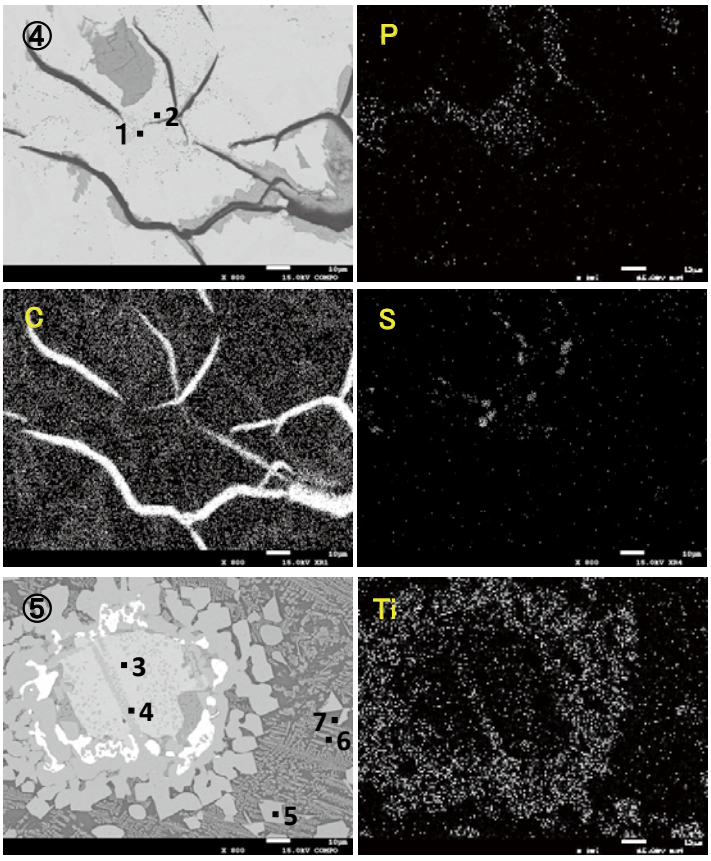
第 100 図　鉄塊系遺物（銑鉄塊）（KED-1）・製錬滓（含鉄）（KED-2）の顕微鏡組織

KED-3
製錬滓（含鉄）
①ﾏｸﾛ組織
②金属鉄部:ねずみ鋳鉄組織、
硬度:196、272、359Hv（200gf）
③滓部:ｳｽﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ･ｲﾙﾒﾅｲﾄ、
灰褐色粒：被熱砂鉄（含ﾁﾀﾝ鉄鉱）









金属鉄･滓部の反射電子像（COMP）および特性 X 線像

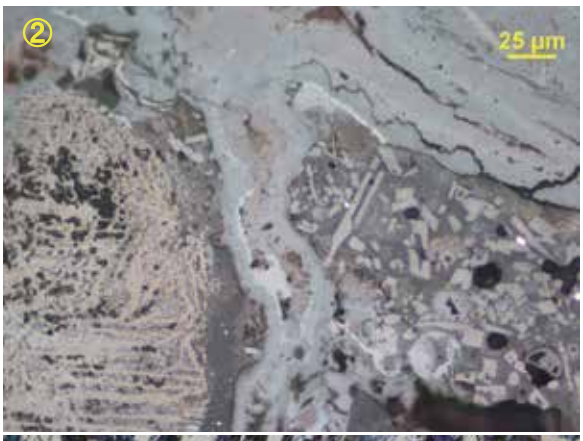
定量分析値

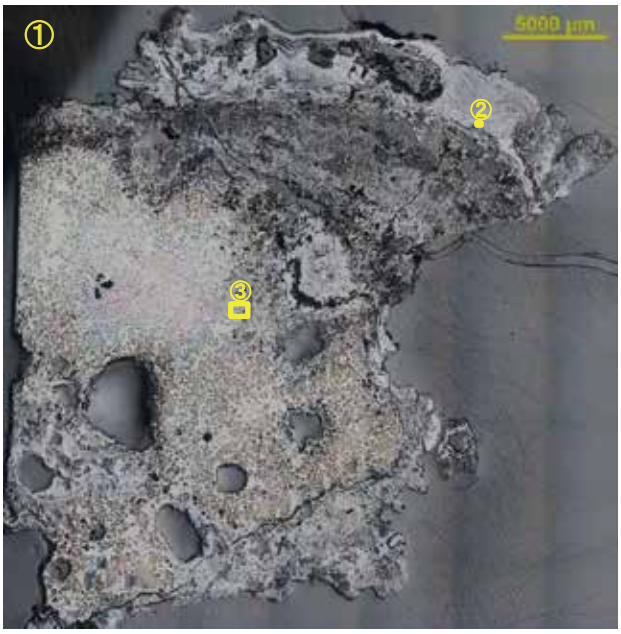
Element	1	2
N	0.242	0.323
O	0.756	0.305
Si	0.004	–
Na	0.014	–
Mg	0.005	–
S	33.325	0.093
Zr	–	0.008
P	0.047	5.040
Ti	0.037	–
Fe	62.634	92.198
Mn	0.090	–
Cr	0.226	–
Total	97.380	97.967

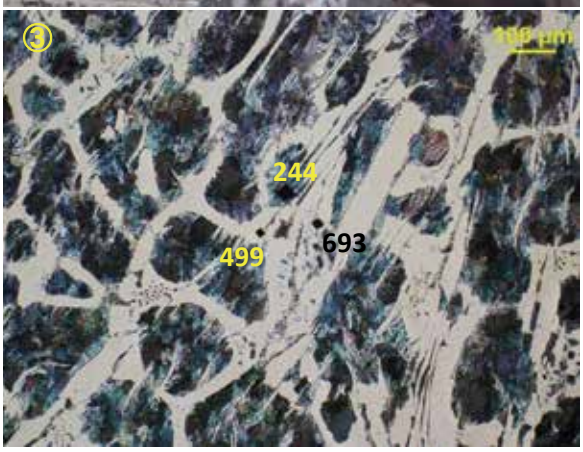
Element	3	4	5	6	7
MgO	2.279	1.898	1.245	5.626	0.832
SiO_2	0.077	0.014	0.108	35.560	54.111
Na_2O	–	0.025	–	0.102	0.824
Al_2O_3	0.097	3.602	0.168	2.899	13.191
CaO	–	–	0.023	0.900	4.676
TiO_2	1.240	25.389	49.888	4.275	4.025
S	0.015	0.001	–	0.020	0.142
ZrO_2	0.154	0.329	0.165	0.291	1.286
P_2O_5	–	0.008	0.024	0.119	0.467
K_2O	–	–	0.025	0.616	1.979
CuO	–	0.026	0.004	–	–
FeO	92.630	61.978	42.774	48.693	16.586
MnO	0.754	0.962	1.258	1.788	0.748
Cr_2O_3	0.025	0.254	0.050	0.012	0.003
V_2O_3	0.109	1.177	1.003	0.061	0.079
Total	97.380	95.663	96.735	100.962	98.949

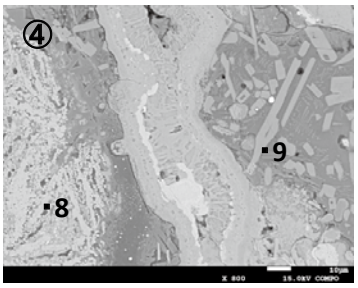
第 101 図　製錬滓（含鉄）（KED-3）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

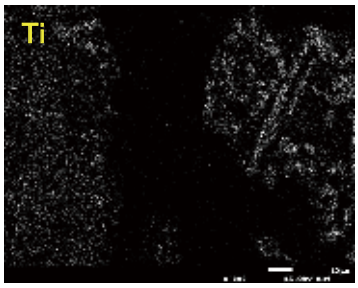
KED-4
製錬滓（含鉄）
①ﾏｸﾛ組織、②左側：被熱砂鉄（含ﾁﾀﾝ鉄鉱）、滓部:ｼｭｰﾄﾞﾌﾞﾙｯｶｲﾄ、
③金属鉄部:亜共晶組成
白鋳鉄組織、硬度:244、499、693Hv（200gf）

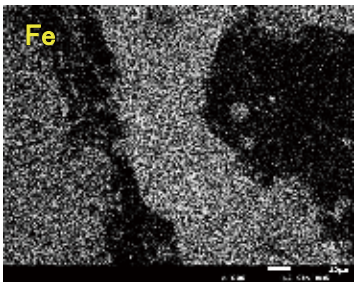


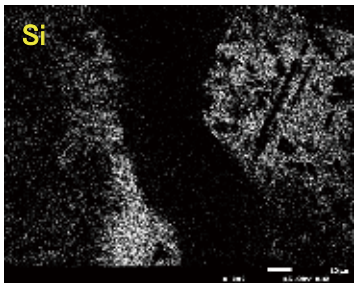








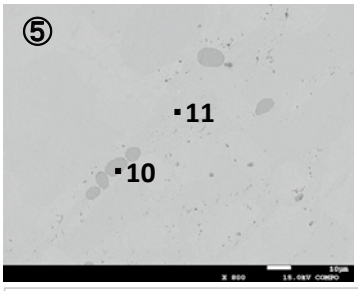


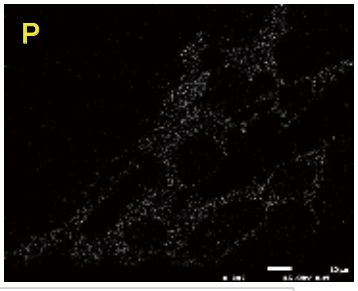


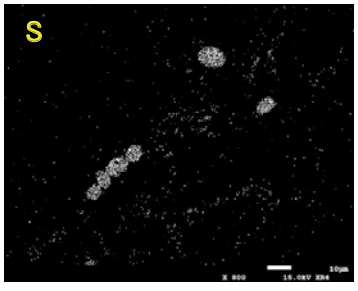
定量分析値

Element	8	9
MgO	1.613	3.531
SiO_2	0.600	0.078
Al_2O_3	3.924	0.740
CaO	0.371	0.553
TiO_2	30.309	85.278
S	–	0.002
ZrO_2	0.024	0.189
P_2O_5	0.038	–
K_2O	0.023	0.080
CuO	0.037	0.003
FeO	58.843	8.799
MnO	0.610	0.046
Cr_2O_3	0.086	0.056
V_2O_3	1.136	1.166
Total	97.614	100.521

Element	10	11
N	0.821	0.411
O	0.666	0.121
Si	0.018	–
Na	0.005	–
Mg	0.012	–
S	35.296	0.285
Zr	0.024	0.102
P	0.011	15.098
Sr	0.011	–
Ti	1.787	0.004
Fe	61.474	85.500
Mn	0.460	–
Cr	0.029	–
Total	100.614	101.521







金属鉄・滓部の反射電子像（COMP）および特性X線像

第 102 図　製錬滓（含鉄）（KED-4）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

第６章　文献史料の調査成果

第１節　明治初期の越堂・宮本の景観復元とたたら経営について

１　はじめに

本稿は、出雲市が所蔵する土地台帳史料及び個人家に残された史料を基に，田儀櫻井家のたたら経営について考察するものである。１点目は発掘調査と文献調査の両方を踏まえ，明治初期における越堂・宮本の景観復元を試みる。２点目は，たたら経営が明治 10 年代にどのように行われていたのか，特に明治 15（1882）年までの状況について考察したい。

これまで調査の手がかりとしてたびたび利用されてきた資料のうち,「越堂鈩の配置図」(『田儀村誌』)[(1)]や「田儀櫻井家本宅配置図」[(2)]は，藤原雄高氏が指摘したように，いずれも田儀村誌編纂にあたり後世に作図されたものであり[(3)]，史料批判なくこれらを使用するのは信頼性に欠けるところがある。よって，越堂鈩や宮本鍛治場が操業していた頃の同時代史料を用いて当時の景観を検討する必要がある。

これまでの発掘調査によって，宮本山内集落跡は宮本川の両岸に広がることが把握され，宮本鍛冶屋で大鍛冶に使用されたとみられる炉跡が判明している[(4)]。さらに，口田儀の越堂鈩については高殿とその周辺の発掘調査が進められ，高殿の内部構造などが詳細に判明した（第３章第２節）。

一方，文献調査では，藤原氏が口田儀村・奥田儀村の絵図の変遷から，地租改正に伴い明治初期に２度の地番振り替えが実施されたこと，地番の振り方の差異から越堂鈩は一つのまとまった事業所空間として認識されていたことを指摘している[(5)]。

これら越堂鈩・宮本山内の景観復元を巡る先行研究は，たとえば梅ヶ谷尻鍛冶屋跡のような，発掘調査と文献調査双方を突き合わせた総合的な検討が行われてきておらず，個別の報告にとどまっている[(6)]。本稿では両者の成果を合流させ，より詳細な景観復元を試みたい。

２　明治８年調野帳・切図を基にした景観復元

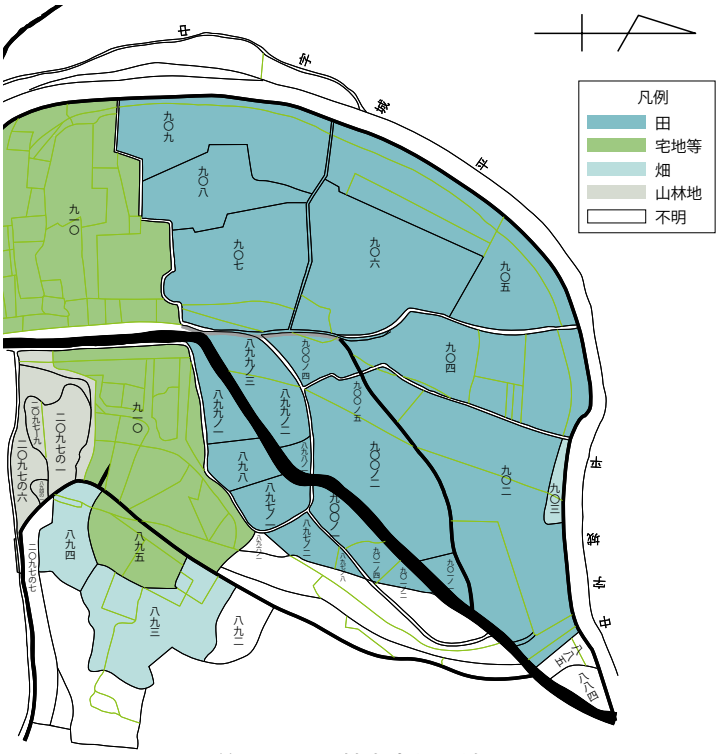
（1）史料について

ここで使用する史料は明治８（1875）年に作成された「実地調野帳」と「切図」である[(7)]。「調野帳」は明治初期に開始した地租改正事業のため各役場で作成された土地台帳で，現在の多伎町域としては口田儀村・奥田儀村・久村・小田村・多岐村の帳簿が存在する。この「調野帳」には建物の棟数や建坪などは記載されないものの，各地番内の地目・坪数を記しており，土地の利用形態を詳しく知ることができる。一方で「切図」は，口田儀村・久村・奥田儀村３か所の図面が存在し，「調野帳」の地番をベースとしながら，「909-1」など分筆が進んでいる。

（２）越堂釿

１つ目に，越堂を構成する番地（893 ～ 910 番地）を示したものが第 103 図である。18 か所中，884・885・898・901 番地の 4 か所を除いた大部分が櫻井洪造の所有である。そのうち宅地に該当する地番は 895・910 番地の 2 か所で，越堂の大部分が耕作地であった。さらに，越堂の東端に隣接する 893・894 番地は「同人（櫻井）山界」とされ，越堂東側の山林も含めた一円の土地を田儀櫻井家が所有していたことがわかった。

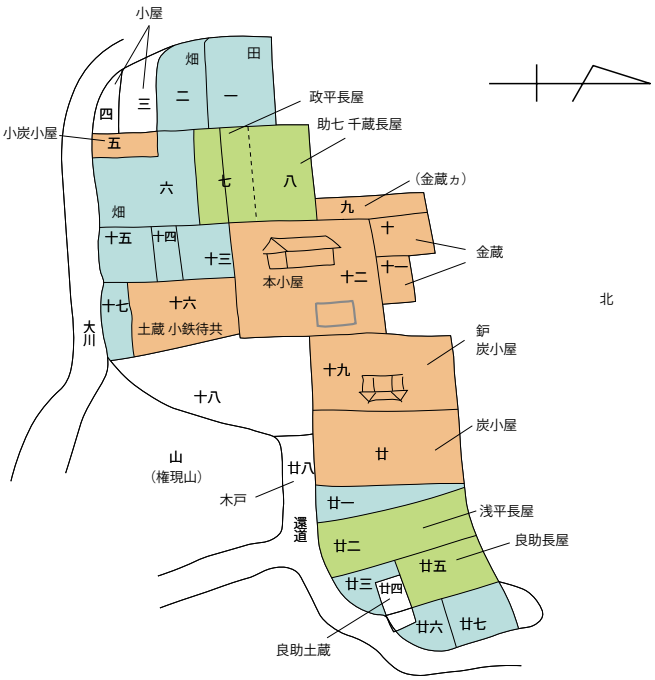
２つ目に，越堂釿が立地する 910 番地内を「調野帳」から復元したものが第 104 図である。「山」とする位置が権現山，「十七」「十六」「十二」が現在の国道 9 号の通る位置とみられる。敷地の中心に本小屋・釿・炭小屋などの製鉄関連施設が固まり，その外側を囲むように長屋が，さらにその周縁部に畑地が広がっている。「十九」には建物の絵が描かれているが，これが従来の発掘調査で確認された高殿とみられる。また「十二」には本小屋とみられる建物が描かれる。



第 103 図　越堂全体の地番

原材料保管場所に注目すると，本小屋隣接地「十六」には砂鉄保管用の土蔵が，高殿周辺「十九」「廿」には炭小屋，田儀川岸付近「三」「四」「五」には小炭小屋などの小屋を複数設置している。

なお，「九」は一度「金蔵」と記載されたが「本小屋西庭」に朱筆で抹消訂正されている。続く「十」「十一」は「同」とだけ記されていて，訂正前の「九」と同じ「金蔵」があったと考えられる。ここで注目したいのは，隣接地番の野取図に記載された境界情報である。第 103 図の，907 番地の境界情報では，南辺側は「同人宅地界」に接しているとある。さらに 908 番



第 104 図　調野帳から復元した 910 番地の地目

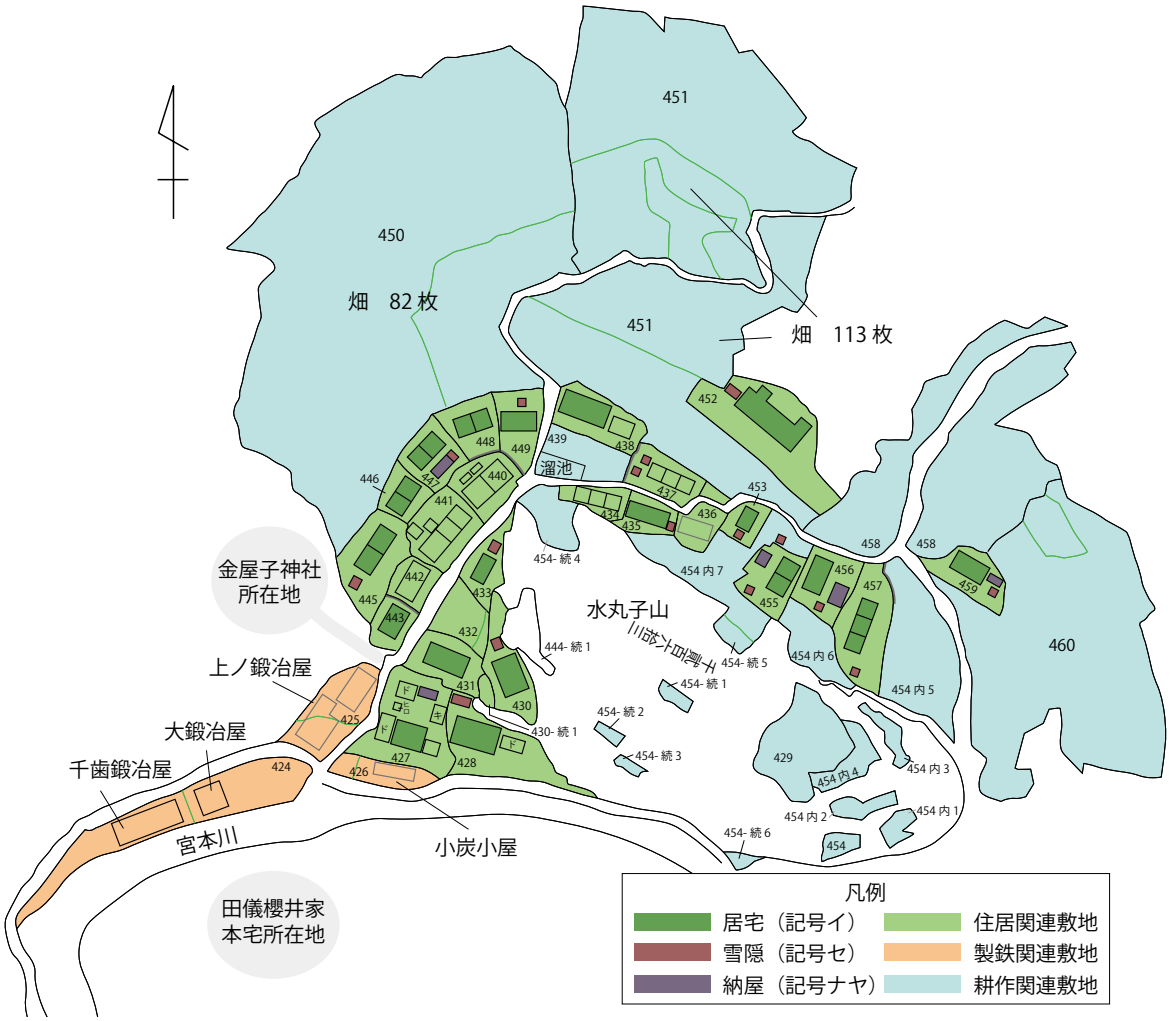
地では，南辺側に「長屋」，東南辺側に「鉄蔵」が接すると記載されており，東南側は「九」に該当する。よってこの調野帳を作成した明治 8 年は，本小屋北側（九～十一）に鉄蔵が存在していたと考えられる。

これに関して，従来文献調査の基礎資料とされてきた「越堂釜の配置図」には，事業所南側に鉄庫が，北側の「九～十一」比定地に田儀櫻井家の家屋や稲扱製造所があるとするが，「実地調野帳」の記載と比べると鉄蔵の位置が異なること，家屋及び稲扱製造施設の存在が確認できなかったことを指摘したい。

その他の特徴についてみてみると，長屋は，藤原（2008）が示す絵図（第 59 図「口田儀村㋑」）に朱筆された建物と位置関係が同じであることから，先行研究に従い計 5 棟の長屋が立地したと考えられる。長屋には「政平」や「千蔵」といった名前が書き連ねてあり，これらは越堂釜で働く者の代表的な人物であっただろうか。「浅平」「良助」という名もみえるが，これは中山玄貴氏によると（2020①[8]），森川浅平・森山良助のことと推測される。また，藤原氏が指摘していた往来と釜場をつなぐ通路「木戸」は，横幅 1 間 5 分（約 2.7 m），長さ 18 間（約 32 m）と，かなり幅広な道であった。

（3）宮本鍛冶山内遺跡

奥田儀村の宮本山内についてもみてみたい。第 103 図に示した全ての番地（424 ～ 460）が櫻井洪



第 105 図　宮本山内の土地利用状況

造の所有地であり，そのほとんどが「借地」として山内居住者に貸し付けられていた。この点，藤原氏は地番の振り方における越堂と宮本の差異に着目し，宮本山内は敷地が山内居住者固有の財産だと指摘していたが（藤原 2008），明治初期の時点で上物のみが居住者の固有財産だったことがわかる。

絵図に示される建物は一軒屋と二軒・三軒長屋があり，438・440 ～ 442 番地の 4 か所は建物自体も櫻井洪造が所有する「借家」であった。また，金屋子神社正面に位置するように，水丸子山の中腹に造成された 430 番地には田儀櫻井家の「本堂」がある。これは田儀櫻井家の別荘として機能していたとみられる [9]。山内の東側山の斜面には，「調野帳」によると山内居住者の生活を支える畑地が約 1,840 坪（約 6,000㎡）広がっていた [10]。

次に宮本鍛冶屋の位置関係をみたい。宮本川北岸に沿って細長く形成された 424 番地に「大かじや（大鍛冶屋）」「せんはかじや（小鍛冶屋）」が，その上段，金屋子神社参道石段手前の 425 番地に「上ノかじや」があり，宮本川北岸沿いに製鉄関連施設が集中している。また，現在は崩落箇所である 426 番地には「小炭小屋」が建てられており，ここも製鉄関連施設の区域だった。

宮本鍛冶屋に関して，発掘調査では 424 番地南部平坦面と，第 105 図で宅地表記となっている 443 番地で炉跡を確認している [11]。つまり，発掘調査で発見された 443 番地の炉跡は江戸時代に遡るものと推測できること，宮本山内では金屋子神社参道周辺の平坦面を利用して鍛冶場の打ち替えが繰り返されたことが考えられる。また，大鍛冶屋に隣接する「せんはかじや」は稲扱千歯を製作する小鍛冶屋のことを指しており，個別の製品に特化した小鍛冶屋が設けられていたことから，明治初期の田儀櫻井家は，鉄製品のなかでも特に稲扱千歯を重要視していたことが伺える。

さらに，宮本山内に立地したそれぞれの建物は，別史料からその利用状況を推測することができる。明治 10（1877）年に手代の大野秀三郎が作成した居宅の売却証文とその添付図面が，「調野帳」記載の建物省略記号と対応しているからである [12]。第 29 表を受けて「調野帳」を整理した結果，宮本

第 29 表　建物表記相対表（奥田儀村 427 番地）

調野帳	記号名	ド	イ	イン	セチエン	記号なし	ザ	キ	記号なし
井原家文書 No.14-6、8	建物名	土蔵	本屋・居宅	隠居	雪隠	漬物場	物置場	木小屋	湯殿
	坪数	8 坪	25 坪	4 坪	1 坪 5 合	5 坪	3 坪 8 合	3 坪	1 坪

山内には居宅 21 軒，納屋 5 軒，雪隠 15 か所，土蔵 2 棟，畑 9 か所，その他 9 か所の建物等が存在することがわかった。なお，調野帳の図面上では長屋とされる建物も，ここでは 1 軒として扱っている。また，居宅と思われるが調野帳に記号のないものは「その他」に含めた。

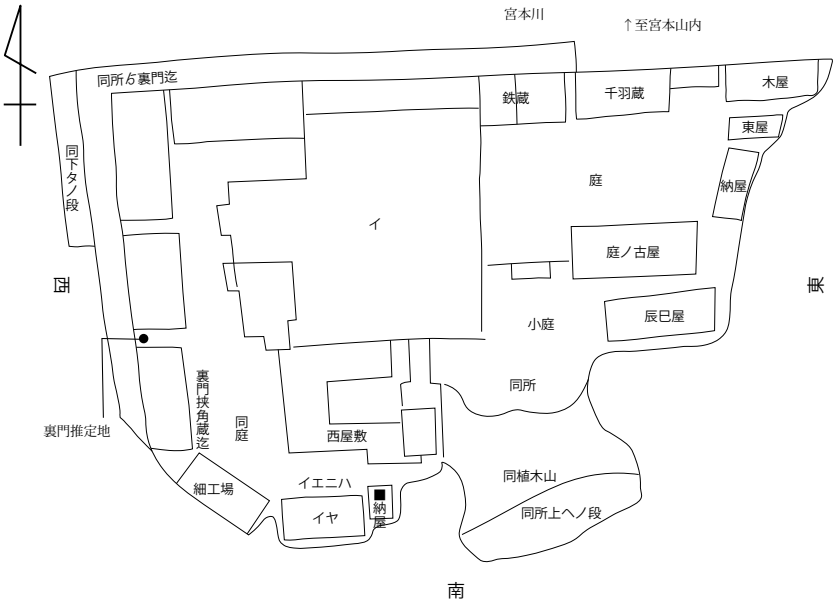
最終的に，宮本山内の借地人は総勢 40 名にのぼった。このうち智光院墓碑銘から澤田栄重・佐々木政吉・川上安吉・坂根為四郎・神田直平が，水丸子墓碑銘から佐々木彦十・森山作太郎の 7 名が確認できる [13]。

（4）田儀櫻井家本宅

田儀櫻井家本宅は，文化 9（1812）年～ 10 年頃に家普請が行われ，松江藩の御用宿を務めたことが判明しているものの [14]，史料的制約もあり詳細は明らかになっていない。「調野帳」からはその後

の本宅，特に田儀櫻井家が居住した最末期の状況を伺うことができるといえよう。本宅に該当する 423 番地が第 106 図である。敷地面積は 833 坪 8 合 7 勺 5 才（約 2,750㎡）とされ，発掘調査時に計測された平坦面（約 3,000㎡）に近い。今回の史料の特徴として，「切図」「調野帳」ともに宮本橋が描かれないのだが，本宅東側は宮本川右岸沿いに続く塀で囲われ，塀が途切れた地点から千羽蔵（千歯のことか）・木納屋といった建物が並ぶ[15]。この塀は，現在も残る石垣部分が該当するとみられる。

建物は，「イヤ」「西屋敷」「イ」の 3 区画に分けられており，これまでの記号表記に従えば「イ」は居宅のことであろう。本宅の間取りはこれまで 9 間（約 16.4m）四方とされてきたが，「調野帳」では 14 間 8 分（約 25.5m）四方とし，一回り大きかったとみられる。なお，発掘調査で確認された 1 トレンチ拡張区[16]の土間面，排水路とみられる遺構は，第 106 図に従えば西屋敷に該当するものではないだろうか。



第 106 図　田儀櫻井家本宅の見取り図

田儀櫻井家本宅には，「鉄蔵」「千羽蔵」といった製鉄関連施設があり，従来言われていた奈賀屋屋敷，計算場が見当たらない。用途不明の建物として「辰巳屋」「庭ノ古屋」「納屋」「東屋」「木納屋」などがあり，北側石垣沿いには蔵が建ち並んでいた。

以上，「調野帳」から主要建物を含めた詳しい土地利用状況がわかった。越堂は，立地の北半分は田，南半分は高殿を中心に製鉄業従事者の住居を内包した製鉄関連敷地があり，近隣の山林も含めて越堂全体が田儀櫻井家の所有する土地として立脚していた。また宮本山内も田儀櫻井家の所有地であり，田儀櫻井家と計 40 名の戸主との間には，地主 - 借地人の関係が形成されていた。

本宅に関しては，従来知られていた配置図に比べ，西屋敷やイヤ，納屋，東屋などの居宅・倉庫類の建物を確認できた。この点，宮本山内に土蔵類が乏しい状況と本宅とは対照的である。割鉄や稲扱千歯等の鉄製品は対岸で製作され，本宅側の蔵に保管されたと考えられ，宮本鍛冶屋だけでなく本宅を含めた宮本川両岸が田儀櫻井家の製鉄関連施設として機能したのではないだろうか。

3　明治 11 年以降のたたら経営について

（1）越堂釛・宮本鍛冶場の所有状況

周知のとおり明治 11（1878）年 4 月 9 日，田儀櫻井家の所有する越堂釛・宮本鍛冶場・加賀谷釛・堂ヶ谷釛の 4 か所が東京蓬莱社所有となり，竹下重四郎（保証人：井原正平）が掛り受け，その後明治

15 年まで操業をおこなったとみられる[17]。この間の操業実態について検討したい。

【史料１】は明治 14（1881）年 12 月 15 日付で，大野秀三郎が井原正平・醇一宛てに作成した地券証の預書である[18]。大野がなんらかの理由で「無余儀入用」として預り地となった３か所の宅地について，面積，地価，土地所有者など地券状の記載事項が簡略に記されている。この３か所を本稿第１項で示した地番と照らし合わせてみると，右から「越堂釛」，「千歯鍛冶屋・大鍛冶屋」，「上ノ鍛冶屋」であり，３件の土地は田儀櫻井家が所有した製鉄関連施設の所在する土地だとわかる。「持主」として記載された所有者は，いずれも井原正平・井原醇一・大野秀三郎の３名だが，所有の開始時期が異なる。奥田儀村宮本の「千歯鍛冶屋・大鍛冶屋」，「上ノ鍛冶屋」は明治 13（1880）年３月 22 日付で取得した一方，口田儀村町向の「越堂釛」は同年 10 月 18 日付と，土地取得までに約７か月の開きがある。これについて，以下の第 30 表が参考となる。

第 30 表　明治 13 年の釛・鍛冶場の稼働状況

品種	鑪	鑪	鑪	鍛冶場	稲扱場
地名	一窪田村加賀谷	口田儀村越堂	口田儀村越堂	奥田儀村宮本	奥田儀村宮本
持主人名	竹下重四郎	竹下重四郎	岩田又右衛門　外1	竹下重四郎	竹下重四郎
建坪	77 坪	81 坪	81 坪	18 坪	15 坪
入費	3,560 円	3,297 円 750	549 円 620	627 円 405	95 円 960
役員	2	3	3	5	3
工人男	112	57	57	50	17
工人女	57	26	26	15	9
給料	90 円	72 円 500	12 円 080	20 円	12 円 080
工価	140 円	199 円 050	33 円 170	204 円 910	43 円 950
機関	天秤吹	天秤吹	天秤吹	吹子	吹子
機器馬力	0	0	0	0	0
製造物価	3,500 円	3,487 円 850	581 円 300	851 円 850	165 円 960
純益	0	0	0	0	13 円 970
所有物件	0	0	114 円 800	109 円 080	123 円
金銀有高	68 円 210	144 円 800	0	0	0

第 30 表は，島根県が発行した「島根県統計表」を抜粋したものである[19]。これによると，明治 13 年の越堂釛は岩田又右衛門と竹下重四郎２名の鉱業主が存在した。どちらも建坪や工員数が同じことから，時期を分けて越堂釛を操業した結果と考えられる。このことから大野・井原らが所有権を獲得する以前に，岩田又右衛門が越堂釛の経営権を握っていたため，越堂釛の取得が遅れたのではないだろうか。生産高についてみると，明治 13 年の越堂釛の生産額は 4,069 円 15 銭で，加賀谷釛の 3,500 円より高かったものの純利益が出なかった状況が読み取れる。宮本鍛冶屋は全体生産額が 1,017 円 81 銭，なかでも稲扱場で製造する稲扱千歯に関しては 13 円 97 銭の純利益を上げていた。

（2）手代を中心とした経営再建

上記のとおり，明治 13 年に大野秀三郎や保証人の井原家によって，宮本鍛冶屋・越堂釛を田儀櫻井家サイドへ再獲得することに成功した。それでは、当該期にどのようにたたら経営が行われたのだろうか。次の史料から伺うことができる。【史料２】は，明治 12（1879）年２月，大野・坂根ら田儀櫻井家の手代とみられる人々から井原正平・醇一に宛てて提出された証書である[20]。内容を要約すると，第一条では，たたら経営の資本金を井原両名に支援してもらう代わりに，「諸山」で製造した物品は一束たりとも無断で他所へ売買せず，すべて「貴店」へ納入すると確約している。第三条以降ではより詳しく納入の取り決めを示しており，当月より出来高の点検を行い，「荷物金高」に準じて

井原方が鉄預り証を作成すること，毎月検査のため「諸山」を巡行すること，出来高と納入高を記した差引目録を手代から井原方へ提出することとしている。ここでいわれる「諸山」とは，前年に東京蓬莱社所有となった越堂鈩・宮本鍛冶屋・加賀谷鈩・堂ヶ谷鈩の４か所のことを指していると考えられ，竹下重四郎へ貸し付けられた「諸山」の生産品は，井原家からの金銭的支援を受けることの対価として，同家へ一括納入する運びとなったことがわかる。

井原家は，田儀櫻井家の手代を務めた家で，本家を井原屋，分家を井勢屋と呼ぶ。江戸時代末頃に謙右衛門が分家して初代井勢屋となった[21]。井原家文書によると，井原屋其市が櫻井運右衛門の代に堂ノ原鈩支配を命じられた経歴がみられるが，所有者の井原建幸氏によると「其市」は井原正平の別名であり，醇一は分家井勢屋謙右衛門の子である。これらのことから，当時の手代が中心となり，田儀櫻井家と密接なつながりがあり，かつ掛り受けの保証人でもある井原家へ，製品を担保として資金提供を願ったことが伺える。

また，資金調達先の確保と同時期に体制の見直しがされた。「宮本鐵業社」という名称の組織が立てられるとともに「業長」や「業務係」などの役職が置かれている[22]。その実態はどのように展開されたのだろうか。翌年以降の史料に具体的な動きがみえる。

【史料３】は，明治 15 年２月９日，井原正平・醇一宛てに川上才七が作成した書簡である[23]。内容は，山内総代５名が井原両名に対して差し入れていた越堂鈩・宮本鍛冶屋の敷地借用証書をこのたび川上才七が受け取り，総代人に返却するという旨である。明治 13 年 10 月に大野・井原らが越堂鈩を取得した１か月半後の 12 月３日から明治 15 年２月にかけては，山内総代人が越堂鈩・宮本鍛冶屋を借用するかたちで，たたら経営を継続していたことが読み取れる。

（3）田儀櫻井家の考え

このように，竹下重四郎が掛り受けとなった以後、旧来よりの田儀櫻井家の手代を中心とした経営再建が図られていた。このような動きを田儀櫻井家はどのように捉えていたのか。

【史料４】は明治 13 年７月 15 日付で櫻井洪造・塙幾之助から竹下重四郎・井原正平に宛てた確約証である[24]。ここでは竹下・井原が明治 11 年から７年間，蓬莱社が所有する山林・鈩・鍛冶場を掛り受けによって経営していることを改めて述べている。これに対して櫻井洪造は，両者が掛り受けを行うことは「拙家始，稼方人別数救助被成遣候」として，田儀櫻井家及び鉄山業に従事する人々を「救助」するものだとしている。このとき田儀櫻井家は「拙家再興」を図り蓬莱社と交渉を継続していたが，山林や鈩，鍛冶場の所有を田儀櫻井家に切り替えたとしても，事業債務を背負うことがいまだ困難な状況が伺える。そこで，櫻井洪造は７年間の掛り受け後も「是マテノ通」り経営を続けてほしいと竹下・井原へ依頼し，その代わりに，掛り受け期間中は外部からの苦情等に対して田儀櫻井家が交渉の場に立つと約束している。よって，これまでみてきた手代らを中心として行われた一連の動きは，同家の財政健全化が達成されるまでの事業継続方法の模索結果であり，竹下・井原による掛り受け期間中の利害調整を田儀櫻井家が取り扱う点からも，あくまで「田儀櫻井家のたたら」をどのように継続させるか，という意思に集約されるものだったと考えられる。

４　おわりに

宮本山内は，現在は雛壇状に続く平坦面と石垣が残されるだけだが，ここに明治初期は約 30 軒の家屋が建ち並び，本宅を眼下に収めるかたちで集落を形成していた。田儀櫻井家は越堂，宮本の土地一円を有する地主であり，宮本山内の鉄山従事者とは，鈩主 - 被雇用人であると同時に地主 - 借地人という関係があったことがわかった。そうした関係性が保持されつつ，明治 11 年以降，「田儀櫻井家のたたら」を再建するために，手代が主体となり鈩経営を継続しようとする動きがあったことを明らかにした。これまで田儀櫻井家文書の史料的制約によって，明治 10 年代のたたら経営の実態は判然としない点が多く残されてきた。今回の考察から，手代を務めた家に残される史料をてがかりにすることで，当該期のたたら経営の一端を明らかにできる可能性があるといえる。また今後の課題として，土地所有の実態解明については，田儀櫻井家が江戸時代以来，神門郡の各地で土地集積を行っていたことが知られており，他の村落も含めた広域的な分析によって田儀櫻井家の土地所有の全体が把握されるものと考える。

（春日　瞳）

註

（1）多伎村役場，1961 年。

（2）渡辺勝治 1996『田儀桜井家年代記』（自費出版，以下『年代記』と略す）。これをトレースした図が 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』（出雲市の文化財報告 1）出雲市教育委員会（以下『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1』と略す。）31 頁に掲載されている。

（3）2004『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会（以下『基礎調査報告』と略す。）18 頁（註 1,2）。

（4）『基礎調査報告』，『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1』参照。

（5）藤原雄高 2008「絵図からみた田儀櫻井家の遺跡」『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1』

（6）伊藤悟郎 2010「調査のまとめ」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―』（出雲市の文化財報告 12）出雲市教育委員会，61 頁～ 62 頁。

（7）出雲市所蔵。

（8）中山玄貴 2020「智光院過去帳に関する基礎的研究」『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ』（出雲市の文化財報告 42）出雲市教育委員会（文中では（中山 2020 ①）とする。）

（9）本宅以外の建物に関して，明治 28（1895）年生まれの桜井直敏談として「鍛冶場の後の小高い所にあった別荘」「別荘に火が移ってから，（省略）仏壇の本尊や位牌を持ち出し，焼失を辛うじて免れた。」（『年代記』）との記述があり，別荘が存在してそこに本尊や位牌が安置されていたことを示唆している。また，明治 11 年 5 月「金屋子神祭礼手配」（「田儀櫻井家文書」b3-7）という祭礼当日の役割分担表で，（石原ヵ）幸助という人物が「別荘方」の取締役を請け負っている。「鍛冶場の後の小高い所」がどの方向からみたものかが不明であるが，ほかに櫻井洪造名義の建物もみられないので「本堂」と「別荘」を同一のものと仮定すると，当該地は田儀櫻井家の先祖を祀る位牌堂としてだけでなく，宮本山内の祭礼に提供される空間としても機能していたのではないか。

(10)『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1 』掲載の写真 6「大正 10 年頃の櫻井家邸宅跡」には，邸宅の奥に宮本山内が写る。溜池近辺には当時蚕室が建てられたが，その背後に段々畑の跡がくっきりと捉えられている。

(11)『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1 』。

(12)「建物売渡証」(井原家文書 14-6)，「(大野秀三郎売渡居宅図面)」(井原家文書 14-8)。これは 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市教育委員会（以下『たたら史料』と略す。）に掲載の井原家目録中，14「永田山林及ヒ大野ニ関スル証書類入」に一括される史料である。枝番が振られていなかったため，掲載にあたり仮枝番を採った。

(13) 2020『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ』出雲市教育委員会，第 19 表「田儀櫻井家墓地　墓石等法量・銘文・石材一覧」、第 20 表「智光院墓地　墓石等法量・銘文・石材一覧」

(14) 田儀櫻井家文書 a3-1「鉄山證文小日記」史料 49。

(15) 石垣について「調野帳」の絵図は鉄蔵までだが，別記の計測を当てはめると千羽蔵まで石垣があることになる。

(16)『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 1 』34 頁，第 14 図。

(17) 藤原雄高 2009「田儀櫻井家の鈩・鍛冶屋の変遷」『たたら史料』

(18)「地券証預書」(井原家新出文書 74-3)。これは『たたら史料』刊行後，新たに同家で確認された古文書である。

(19) 国立国会図書館デジタルコレクション，請求番号特 17-957。

(20)「懇約証」(井原家文書 11「塙并鐵業方取引諸証文入」-39)。

(21) 庄司幸恵 2010「堂ノ原の金屋子神社棟札について」『田儀櫻井家　出雲市の文化財報告 12』。

(22) 前掲註 (21)。多伎藝神社 (出雲市多伎町口田儀) の新出棟札に明治 12 年 12 月 2 日銘の金屋子神社棟札があり，「願主　宮本鉄業所」「業長　大野秀三郎」と記されている。

(23)「記」(井原家文書 11-18)。

(24)「確証」(井原家文書 11-48)。

第四条

一、諸山業荷検査之ため月々巡山御調可被下事，但此賃金ハ業体方ヨリ、

候事

第五条

一、諸山業荷差引目録厳重ニ月々相認差出候事、右条件御懇約被下候上者、

此連署之モノ真儀ヲ旨トシ百事実誠之取扱可仕候、万一不相当之所業

有之節者如何様御所分有之共一言無之候、仍テ如件

明治十二年第二月

伊藤政助（印）

福田昭一郎（印）

坂根為四郎（印）

大野秀三郎（印）

塙　幾之助（印）

井原正平殿

井原醇一殿

塙幾之助代書人

坂根為四郎（印）

【史料３】

記

一、明治十三年十二月三日付ヲ以人別総代森山良助、川上武十、佐々木政

吉、栗見儀三郎、大谷甚平ノ五名より差入置タル越堂鑪場宮本鍛冶場

敷地借用証書壱通正ニ受取申候、追而右総代人へ返却方配斗可仕候也

宮本鍛冶場　川上才七（印）

明治十五年二月九日

井原正平殿

井原醇一殿

【史料４】

確証

一、蓬莱社所有山林鑪鍛冶場共、明治十一年ヨリ向七年間貴殿方御名義ヲ

以御掛リ受、拙家始稼方人別数救助被成遣候処、今般拙家再興ノ為メ

蓬莱社ト中川家示談中、調談上ハ、山林鑪鍛冶場名前切替ニ相成候テ

モ、貴殿方御名儀負債之内、拙家借用筋道ハ勿論相立不申テハ、タト

イ掛リ受年限退去候、其鑪鍛冶場稼方之儀ハ、是マテノ通貴殿方御名

儀ヲ以此□（段カ）御稼被遣度、いつ方ゟ苦情申出候共、拙者共ヨリ年限中

ハ御差支ニ不相成様急度取扱可申候、尤、年限中タリ共、負債ノ筋道

相立候上ハ、何時名分示談之上可相■為此上百事御尽力可被遣候、為

其連署一札仍テ如件

明治十三年七月十五日

桜井浩造（印）

塙　幾之助（印）

保証　福庭郁郎（印）

保証　大野秀三郎（印）

竹下重四郎殿

井原正平殿

（二）

史料編

《凡例》

・仮名遣いは原文通りとしたが、旧字体は新字体に改めた。また、異体字や合字はそのままとした。
・虫損や破損等により判読不能な箇所は□で表した。
・適宜、読点（、）や並列点（・）を付した。
・下線は筆者による。

【史料1】

地券証預書

神門郡口田儀村九百十番
字町向
一、宅地七反拾歩　十三年十月十八日　持主　井原正平
地価貳百五拾五円廿銭
同苗醇一
大野秀三郎

同郡奥田儀村四百貳拾四番
字宮
一、宅地五畝九歩　十三年三月廿二日　持主　井原正平
地価七円九拾貳銭
同姓醇一
大野秀三郎

同郡同村四百貳拾五番
一、宅地二畝三歩　十三年三月廿二日　持主　井原正平
地価三円拾四銭
井原醇一
大野秀三郎

〆地券状三枚
外ニ名簿三枚

右ハ無余儀入用ニ付、正ニ預リ置申処、確実也、然ル上ハ何時ニテモ此証券ニ引換相渡シ可申候、為后証預書仍テ如件

明治十四年十二月十五日　大野秀三郎（印）

井原正平殿
井原醇一殿

【史料2】

懇約証

第一条

一、業体資本金貴殿ヨリ御繰替被下候ニ付而者、諸山ニテ製造之物品、壱束タリトモ無断ニテ他売相禁悉皆貴店へ相納候事

第弐条

一、十弐年一月限り之処ニテ金三千円辻鉄預書差引不足ニ相成候分御元入ニ相当候儀、万一不意之質害有之候トモ、他借ニ異資本ニ候得者、不動産或者諸山諸品ヲ以此連署ノモノ精々尽力、貴殿へ者御損失相懸申間敷、誓テ受合可申事

第三条

一、今般金融願候節ハ、都而資本金之儀本月ヨリ出来高点検ヲ以荷物金高ニ準シ鉄預り証御認被下候約定之事

第２節　19 世紀の出雲国における砂鉄輸送の展開―神門郡を事例として―

１　はじめに

本稿は，出雲国神門郡奥田儀村の鉄師・田儀櫻井家のたたら製鉄における砂鉄調達を通じて，出雲国において廻船を用いた地域間輸送の展開について検討することを目的としている。

かつて，地域間輸送の担い手として天渡船の実態を検討した斎藤善之氏は，同船が新潟から酒田間を往来する小型廻船で，いわゆる北前船の全国的市場圏と重ならない，限られた地域市場圏における商品流通を担う存在であるとした。そして，この両市場圏が機能分担・補完関係にあること，このような流通構造が天明の飢饉を契機とした廻船規模の分化に端を発し，近代における民間型市場構造の歴史的前提となったことを指摘した(1)。

一方，近世中後期における小型廻船の活動実態については，北陸地域の事例を分析した深井甚三氏(2)や，山陰地域の事例を検討した中安恵一氏らの研究(3)がある。両事例とも，小型廻船の活動は斎藤氏がいうような局地的な輸送に限定されるものではなく，日本海沿岸や大坂あるいは九州に至るまでの広域なものであったことが指摘されている。つまり，小型廻船の役割はより広がる形で見直されつつあるいえよう。

このように小型廻船の役割が見直される中，地域市場における小型廻船についての検討はやや後景に退いている。そこで，本稿では出雲国を対象に，19 世紀における地域間流通の展開過程について考察を加える試みをおこないたい。具体的に取りあげるのは，同国の西端に位置し，石見国と隣接する神門郡奥田儀村に居住した鉄師・田儀櫻井家における砂鉄輸送である。

本稿で取り上げる出雲国では，廻船活動は同国の特産物である鉄の商品流通が中心という現状があり(4)，地域市場に対する視角が相対的に弱くなってしまった。これに関しては，中安氏が鋭く指摘するように，「同国の流通構造そのものを中心に据えた研究は乏しく，また鉄以外の商品流通についての研究も見られない」という状況にあり(5)，依然として検討の余地を残している。

また，田儀櫻井家と廻船の関係についても，従来は鉄の商品流通の観点から議論されてきた。すなわち，日本海に面した隣村・口田儀を積み出し港として，生産した銑や割鉄を北陸や大坂へ販売したことが指摘されている(6)。その一方，田儀櫻井家は口田儀村に所在する越堂鈩を同家の製鉄業における主力たたらとして操業しており，そこで消費する鉄の原材料（砂鉄や木炭など）を口田儀浦から運び入れたとされている(7)。つまり，越堂鈩の操業に必要な原材料の調達はローカルな流通構造に依拠していることが示唆されたのであるが，これに関する研究は進展しておらず，研究の空白域となっている。

以上を踏まえ，本稿では出雲国における地域間輸送の展開過程について，田儀櫻井家における砂鉄調達の動向とその輸送を検討する。この検討を通じ，上記のような研究状況を推し進めたい。

２　神門郡における砂鉄調達の開始

18 世紀後期において，田儀櫻井家が砂鉄の調達先とした場所は，おもに伯耆国・因幡国（現鳥取県）と石見国浜田藩領（現島根県浜田市）であったとみられている[(8)]。しかし，19 世紀に入ると，この調達に関して問題が生じていたことが【史料 1】から判明する。

【史料 1】によると，田儀櫻井家は石見国浜田藩領日脚村から砂鉄を調達していたが，石見国銀山附幕領（以下銀山料とする）の鉄師らが「相障候」として，その砂鉄調達を差し止めるよう，日脚村に働きかけた。これに対し，同村における砂鉄生産責任者と思われる砂元方の助十は，長年の得意先関係にあった田儀櫻井家との関係を考慮し，銀山料の鉄師らの働きかけを断っている。しかし，浜田藩へ内々に相談した結果，口田儀への砂鉄輸送を差し止めることとなった。こうした事態を受け，田儀櫻井家は日脚村砂鉄の代用を調達する必要に迫られた。その結果，日本海に面した出雲国神門郡西園村崎屋（現出雲市西園町）で日脚村の砂鉄に似た砂鉄が採取できる見込みがあるとして，同所での砂鉄採取を西園村に願い出たとみられる。

ここで注目したい点は３つある。まず１つ目は，日脚村の砂鉄を消費する田儀櫻井家のたたらの存在である。【史料 1】で「宮本御鑪」と「口田儀御鑪」の２つの「御鑪」が登場しているが，前者にたたら場はない。さらに当時の田儀櫻井家は，経営難により享和３（1803）年から藩の指導と再建策を受け入れる状態となっていた。その結果，たたら製鉄経営は鉄師頭取櫻井勘左右衛門・田部長右衛門の名目で取引すること，屋号を可部屋から宮本屋へと変更することとなる。そのため，【史料 1】の差出にみえるように，田儀櫻井家自体のことを「宮本御鑪」とよく呼んでいる[(9)]。したがって，日脚村で採取された砂鉄は，おもに「口田儀御鑪」，つまり越堂鈩で消費されたと考えられる。

次いで２つ目は，銀山料の鉄師らとの競合である。同所をはじめ，石見国のたたら製鉄は沿岸部に鈩が位置するものが多く，原材料の砂鉄や木炭は廻船を用いて他所から調達していた[(10)]。ちょうど，田儀櫻井家における越堂鈩の操業と同じ図式にあたる。したがって，銀山料よりもさらに西に位置する浜田から砂鉄を調達したいのは，田儀櫻井家だけではなかったと推測される。つまり，同業者がひしめく地域から砂鉄を調達すると，必然的に競合相手が生じるという問題を抱えていた可能性が高い。

加えて３つ目は，浜田藩領から口田儀への砂鉄輸送方法である。【史料 1】で明確に登場してはいないが，先学の指摘を踏まえるならば，廻船による輸送ではなかろうか。いずれにせよ，石見からの調達に頼らない方法を模索することとなったのである。

３　日本海沿岸地域と流通網

前項では，田儀櫻井家が石見国から調達していた砂鉄の代わりとして，出雲国神門郡西園村で砂鉄採取を開始したことをみた。本項ではこの西園村と砂鉄の輸送に関して，【史料 2】に注目したい。

この史料は，文政２（1819）年，田儀櫻井家が神門郡乙立村（現出雲市乙立町）で採取された砂鉄・「清流小鉄」を購入すべく，同村へ願い出たものである。なお，乙立村の位置だが，日本海へ注ぐ神戸川の中流域に位置しており，河口からは 20km 弱の距離がある。

そこで，田儀櫻井家は乙立村から口田儀村へ砂鉄を運ぶため，水上交通を利用した輸送ルートを提示した。そのルートは，「乙立村ゟ西園村崎屋迄川船ニ而積出し，同所ゟ海船ニ積替，口田儀迄運送いたし」とあるように，乙立村から西園村までの神戸川は「川船」，西園村から口田儀浦までの日本海沿岸は「海船」を用いるものであった。また，「船賃并ニ蔵敷等数々諸雑用」から，「川船」・「海船」ともに運賃積みで砂鉄を輸送する予定だったこと，砂鉄を一時的に保管する場所が存在したことを示している。これが存在したのは，砂鉄の積み替え地点に位置した崎屋であろう。しかしながら，諸経費の問題により口田儀村への水上輸送は実現せず，乙立村の砂鉄は広瀬藩領の堂ノ原釛で消費されることとなったようである。

ここで重要なのは，水上交通における崎屋の位置づけである。さきに崎屋で砂鉄採取がおこなわれたことをみたが，【史料 2】では，崎屋が神戸川と日本海を結ぶ流通の結節点として位置づけられている。このような崎屋の役割は，日本海沿岸を往来する「海船」だけでなく，神戸川を往来する「川船」が既に機能していたことを背景としているのではないか。

つまり，19 世紀初頭において，神戸川河口に位置した西園村崎屋は，川と海の流通の結節点として機能しており，物資の集散地としての役割を担っていたと考えられよう。このような流通構造の存在は，田儀櫻井家が乙立村へ示した輸送ルートの前提条件となったと推測される。

また，この時期の日本海沿岸地域おける砂鉄輸送の担い手について，若干の史料からその特徴を補足しておきたい。

第 31 表　文化年間の鷺浦における砂鉄積載廻船の入港状況

年月日	船籍	船所有者	船頭	人乗	出典	備考
文化７年４月６日	御国楯縫郡十六島浦	彦助	―	2	讃	
文化７年４月６日	御国楯縫郡十六島浦	嘉平次	―	2	讃	
文化７年４月６日	御国楯縫郡川下浦	惣兵衛	―	2	讃	
文化７年４月 19 日	伯州会見郡大篠津浦	甚兵衛	―	2	加	「直乗船頭」。
文化８年６月 21 日	伯州八橋郡大塚浦	源右衛門	―	2	加	
文化９年４月 10 日	伯州汗入郡御来屋浦	伊八	□（周ヵ）兵衛	2	讃	
文化 10 年３月 21 日	御国神門郡園村	喜三兵衛	―	2	讃	
文化 12 年２月晦日	御国神門郡園村	喜三兵衛	―	2	讃	
文化 12 年６月 14 日	御国秋鹿郡大野村	兵右衛門	―	2	讃	

出典）讃：讃岐屋文書（島根県立古代出雲歴史博物館蔵）、加：加田屋文書（出雲市蔵）

第 31 表は，出雲国神門郡鷺浦（現出雲市大社町）における廻船の入港記録のうち，砂鉄を積載した廻船を抽出したものである。なお，文化 10（1813）年・同 12（1815）年にみえる神門郡園村は，先述の西園村もしくは楯縫郡園村（現出雲市園町）の可能性が浮上する。しかし，他の事例が全て日本海沿岸地域であるから，この園村は神門郡西園村一帯を指していると思われる。さて，この表からは，いずれの廻船も２人乗りの小型廻船で，出雲国から伯耆国にかけた地域に船籍があるという点がわかる。ここに見える砂鉄すべてが越堂釛で消費されたかは判然としないが，当該期の日本海沿岸地域において，このような小型廻船によって砂鉄輸送が展開していたことを指摘できる。また，入港日を見ると，月日が下るにつれて，越堂釛が所在する神門郡口田儀村から離れた場所に船籍を置く船が鷺

浦に入港していることに気づく。こうした廻船活動時期の差は，冬期に荒れやすい日本海との関係が想定される。

4　幕末から明治初期における砂鉄輸送

最後に，これまでみてきた砂鉄の流通がその後どのように展開したかを，新出史料の紹介をかねて見ておきたい。

（1）幕末の田儀櫻井家と西園村崎屋

先ほどは 19 世紀初期の事例をみてきたが，幕末においても，崎屋周辺で砂鉄調達がおこなわれていたことが，【史料 3】から判明する。

本史料は横帳の断簡で，幕末から明治にかけて田儀櫻井家の手代を務めた，奈賀屋に伝来した史料群のうちの 1 点である (11)。

さて，【史料 3】は横帳の料紙を開いた形で現存しているが，その右半分は破損により欠落した状態となっている。そこで記載が残る部分について，記載部分に対して垂直方向，かつ料紙を中央で分割していた折れ目を基点に，上半分を①，下半分を②として史料編に反映した。したがって，折れ目を畳んで本来の帳簿の体裁にした場合，料紙右端に綴痕を有する①が最初になり，次の頁が②にあたるということになる。このような状態の史料ではあるが，詳しくみることによって，多くの情報を引き出すことができる。

まず，鈩と鍛冶屋の記載に注目したい。ここで挙がっている「越堂鑪」，「宮本鍛冶屋」，「奥原鑪」，「梅ヶ谷鍛冶屋」はいずれも田儀櫻井家が操業した鈩・鍛冶屋として知られている。これらの製鉄施設が操業した期間を確認してみると (12)，操業時期が重なるのは文久年間（1861 ～ 1863）にあたる。

次に，運上銀の数字に注目する。越堂鑪の運上銀以下 7 つの一つ書きにそれぞれ運上銀の数字が記載されているが，これらを足すと「〆弐貫百八拾三匁三分三厘」と同じ数字になる。つまり，【史料 3】の記載は，8 月 29 日分の一連の運上銀の書き上げとみていいだろう。

したがって本史料は，文久年間のいずれかの年における，8 月 29 日分の運上銀の書き上げということが判明する。残念ながら，本史料以外の料紙が見当たらず，これ以上の情報をすくい取ることは難しい。しかし，幕末の田儀櫻井家における製鉄関連史料は依然として大きな史料的制約があることを考慮すると (13)，【史料 3】は当該期における同家の製鉄業の実態を示す重要な史料といえよう。

さて，鉄穴の部分に注目すると，「下々鉄穴十三ヶ所」，「下々尻鉄穴三ヶ所」に続いて「神門郡西園村橋下ゟ古志川迄尻迄川粉鉄」とある。ここでの鉄穴は田儀櫻井家が砂鉄を採取する鉄穴を示しているのだが，それに続いて「川粉鉄」が採取される場所として西園村が挙げられていることが読み取れる。橋下という地名がどこを指すかは不明だが，古志川（現神戸川）の下流域もしくは河口付近の可能性は高い。続いて運上銀をみると，西園村の運上銀 83 匁は，「下々尻鉄穴三ヶ所」の 12 匁を優に超えていることがわかる。「下々鉄穴十三ヶ所」の 130 匁と比べると，その額の約 6 割に相当するといえよう。これらの情報から，【史料 3】は，西園村が幕末においても田儀櫻井家の砂鉄供給地として健在であったことを示している。

このような崎屋の位置づけに関して，【史料 4】に興味深い記述がある。本史料をみると，「碕屋鉄砂方」の人物が勘定のために口田儀に来たことが触れられている。そこで，差出人の治平はその人物を鳥屋尾本家（廻船業を経営していた油屋）へ行かせたが，鳥屋尾本家からは分家の奈賀屋五郎蔵のもとへ行くように指示された。これを受けた治平は，一連の経過を本史料に認めた上で，碕屋鉄砂方の人物を奈賀屋へ差し向けたものと推測される。なお，碕屋鉄砂方の人物が口田儀を訪れていることから，同人は口田儀に常駐していなかったこととなる。おそらく，普段は現地の西園村崎屋にいたと思われる。

実は，幕末から明治初期における田儀櫻井家では，「○○方」という表現が史料上散見される[(14)]。その事例を挙げると，「櫻井稲扱方」[(15)]，「櫻井殿り合い方」[(16)]，「桜井様御内田地方」[(17)]，「桜井酒方」[(18)]がある。中でも稲扱は，次節（第６章第３節）で触れるように，幕末から明治初期にかけて田儀櫻井家にとって重要な産業に成長していた可能性が高い。また，櫻井田地方という呼称は，田儀櫻井家外部の人間が使用していることから，対外的にも田地方が田儀櫻井家における担当部署のようにみられていたと考えられる。以上を考慮すると，「碕屋鉄砂方」も田儀櫻井家の製鉄業における一部署で，かつ出先機関のような存在となっていたのではないだろうか。

（２）砂鉄輸送の展開

先述のように，西園村崎屋は，幕末から明治初期の田儀櫻井家において，砂鉄の産地として重要な位置を占めていた。それ故，鈩の操業にも密接に関わっており，砂鉄輸送の遅延が問題化することがあった。

【史料 5】の傍線部をみると，輸送される予定だった崎屋の砂鉄が，「灘廻り」できないことにより到着せず，治平が困窮している。本史料の差出人である「鑢治平」は田儀櫻井家が操業する鈩に関係する人物と思われ，【史料 4】の差出人と同一人物と推測される。崎屋の砂鉄の到着を気にかけていることから，治平が関与しているのは越堂鈩であろう。また，ここでいう「灘廻り」は，【史料２】を考慮すると，廻船を利用して崎屋から口田儀へ向けて砂鉄を輸送することを指すと考えられる。これを踏まえて，本史料の日付を見ると，砂鉄を輸送する廻船は３月の冬期においても運行可能だったことを示唆するのではないか。似たような事例として，第 31 表において，２月末から３月末に鷺浦へ入港する園村の廻船が確認できる。残念ながら【史料５】から，遅延原因は判然としないが，冬期の越堂鈩において崎屋からの砂鉄供給が重要な問題であったことが指摘できよう。

また，砂鉄輸送の様相を示す史料として，【史料 6】に注目したい。本史料からは，次のことが判明する。

①：「当地」の鵜峠屋重蔵が廻船を用いて塩もの類を大坂方面へ積み登る予定ということ

②：船の積み荷不足のため，鵜峠屋が森山順七郎に対し，田儀櫻井家の鉄を買積したい旨を依頼したこと

③：杵築の幸左衛門の船が，越堂行きの砂鉄を積んで「田儀廻り」をすること

④：③の船便で，②で依頼を受けた鉄を，一両日中に「此元」へ送るよう要請したこと

ここから，神門郡における砂鉄の流通構造が示されている点に注目したい。まず，杵築から口田儀への砂鉄輸送が「田儀廻り」と称される地域間輸送網として史料上に現れている。このルートでは，

杵築から口田儀への往路が砂鉄を，復路は田儀櫻井家の産鉄を輸送するという，商品流通の実態が見受けられる。【史料 5】を踏まえると，積載する砂鉄は西園村崎屋のそれと推測されよう。また，こうした輸送に杵築の廻船主（幸左衛門）が登場していることに気づく。砂鉄輸送の担い手は，崎屋から口田儀間の地域における廻船主に限定されるものではなく，近隣の杵築からも参入可能であったことを示している。なお，幸左衛門の廻船規模は不明であるが，前掲の第 31 表を踏まえると，小型廻船と推測される。

さらに，①と②の点より，「田儀廻り」における商品流通は，遠隔地へ航海する廻船の積み荷を供給する側面も有していたといえよう。残念ながら，同じ場所にいる森山と鵜峠屋の居所が判然としないが，田儀櫻井家における崎屋の位置づけと杵築の廻船主の動きを踏まえると，両人の居所は西園村の可能性が大いにあると推測しておきたい。

5　おわりに

本稿では，出雲国神門郡奥田儀村の鉄師・田儀櫻井家のたたら製鉄における砂鉄調達を通じて，出雲国における廻船を用いた地域間輸送の展開について検討してきた。

まず，田儀櫻井家における砂鉄輸送をめぐる動向については，18 世紀後期に主要調達先の一角・石見国からの輸送が困難になり，その代替措置として出雲国神門郡で砂鉄採取を開始したことを確認した。これをめぐっては，銀山料の鉄師らとの競合によって田儀櫻井家が弾き出された形となった一方，神門郡において同家の砂鉄調達が開始される契機となった。

こうした動向に対し，19 世紀における神門郡での砂鉄調達を可能にしたのは，日本海沿岸地域で展開していた流通構造が前提となった。中でも，同郡西園村はその立地条件から日本海と神戸川の結節点となっていたこと，村内で砂鉄が採取可能という環境があったことから，田儀櫻井家のたたら製鉄における重要拠点として発展した。また，このような砂鉄の流通構造は幕末から明治初期にかけても健在であることを指摘した。今回の検討では，杵築から口田儀村にかけての沿岸地域における砂鉄の輸送と，砂鉄以外の商品流通の一端が明らかとなった。

さらに，このような流通構造において砂鉄輸送の担い手となったのは，日本海沿岸地域に船籍を置く小型廻船であった。冬期も運航可能という点もあいまって，小型廻船の活動は田儀櫻井家の製鉄業および越堂鈩の操業において重要な役割を果たしていたと推測される。

以上，これまで等閑視されていた出雲国内における流通構造について，砂鉄の事例を取り上げて検討した。これまで言及されてこなかった実態解明を進めることとなった一方，因幡国・伯耆国を含めた砂鉄調達の全体像は未だ不明なままである。また，本稿で述べてきた点は，少ない史料の中で推測に頼った内容も多くなっている。そのため，史料の内容や年次比定などの課題も多く残っていることはいうまでもない。こうした点については，今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿の作成にあたり，中安恵一氏，春日瞳氏より貴重なご教示をいただきました。末筆ながらここに記して感謝の意を表します。（中山玄貴）

註

（1）斎藤善之 1996「流通勢力の交代と市場構造の変容」『新しい近世史３　市場と民間社会』新人物往来社

（2）深井甚三 2001『近世中後期，加越能廻船と日本海地域の海運―越中の小廻船に注目して』富山県生活環境部，同 2002「近世中後期，飛島・酒田入津の越中廻船の動向と小廻船経営」『富山大学教育学部紀要』56

（3）中安恵一 2018「近世後期，松江藩領における小型廻船の活動」『松江市史研究９号』（松江市歴史叢書 11）松江市

（4）武井博明 1972 年『近世製鉄史論』三一書房，仲野義文 2004「田儀櫻井家の産鉄流通について」『田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会（以下『基礎調査報告書』と呼ぶ），同 2009「鉄宿史料から見る櫻井家の鉄流通の諸相」『櫻井家たたらの研究と文書目録―櫻井家文書悉皆調査報告書』島根県奥出雲町教育委員会

（5）前掲註（3）中安論文。

（6）前掲註（4）仲野論文。

（7）相良英輔 2004「田儀櫻井家のたたら製鉄業経営」『基礎調査報告書』多伎町教育委員会。これによると，越堂釛の生産高は不明であるが，田儀櫻井家が操業した別のたたら（奥原釛）では，銑 2,352 駄の年間生産高に対し，10,584 駄もの砂鉄が消費されたことが指摘されている。この数字を踏まえると，越堂釛でもかなりの量の砂鉄が消費されたと推測される。

（8）田儀櫻井家文書 a3-9。

（9）田儀櫻井家文書 a3-10。

（10）角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂。角田氏は，出雲国西部から石見国において，沿岸部に位置し廻船を利用して砂鉄や木炭を調達するたたらを「海のたたら」と分類している。

（11）奈賀屋文書の詳細については，拙稿（第６章第３節）で述べている。【史料 3】は，本史料を含めた横帳の断簡 6 点が左から順に貼り継がれた状態となっており，やや珍しい姿で伝来している。なお，貼り継がれた各史料はいずれも記載内容の性格が異なっており，かつてはそれぞれ別の帳簿に綴じられていたものと推測される。

（12）藤原雄高 2009「田儀櫻井家の釛・鍛治屋の変遷」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』（以下『たたら史料』と呼ぶ）出雲市教育委員会

（13）「田儀櫻井家文書目録」（『たたら史料』）。田儀櫻井家文書において，越堂釛の製鉄業について示す史料は現存していない。

（14）『大漢語林』によると，「方」の意味のうち，「かかり（係）。「道具方」」という記述がみられる。

（15）田儀櫻井家文書 a1-36。

（16）奈賀屋文書 1-7-15。

（17）奈賀屋文書 1-86-8。

（18）奈賀屋文書 1-93-82。

兼込入申上候、右着々御受まで余情譲拝謁□□候也、

三月二十九日

【史料6】奈賀屋文書1－8－6

〔端裏書〕

鳥屋尾五郎蔵様　森山順七郎

至急用□文

冷気弥増々御座候処、御揃益御多祥可被成御座奉恐観候、陳者当地鵜峠屋重蔵与申人ゟ此度塩もの類を大坂辺へ積登候筈ニ御座候所、船ニ荷物積入ニ少し荷高不足ニ付、御地鉄拾駄買入相添登せ度ニ付、私ゟ調呉与之事ニ御座候間、何卒鉄拾駄一両日ニ御調ひ被下度哉奉願上候、代金之儀ハ私方へ受取勘定可申上候、□合次第東ゟ杵築幸左衛門船、越堂行鉄砂積田儀廻りいたし候間、とふそ其船便ニ此元迄御送り被下度、是又奉願上候、尚直段之儀、外方御仕切振合ニして直段御しらせ可被下候、右御願申上度、如此ニ御座候也、

十月四日

一　同　三百弐拾五匁
　　山口村奥原御鑪運上銀
一　同　百五拾匁
　　同村同所御鈑冶屋運上
一　同　弐百匁
　　吉野村梅ヶ谷御鈑冶屋運上
②
一　同百三拾匁
　　下々鉄穴十三ヶ所運上
一　同拾弐匁
　　下々尻鉄穴三ヶ所運上
一　同八拾三匁
　　神門郡西園村橋下ゟ古志川迄尻迄川粉鉄御運上
〆弐貫百八拾三匁三分三厘
外ニ
　拾九匁六分五厘　九束現々
　拾三匁弐分弐厘　入□
合〆
　弐貫弐百拾六匁弐分
百文銀ニ〆
　代弐百廿三貫六百廿文（印）
（綴痕あり、綴痕以後は欠落）

【史料４】奈賀屋文書１－８－54
〔端裏書〕
　鳥屋尾様　　治平
　　尊下

此間者□□一配御同慶拝□ニ旧盆近寄、唯々御用繁可被為入奉承察候、然者碕屋鉄砂方勘定ニ参、本家へ今朝申遣候処、尊家ゟ受取候様申参、依テ申上候間、御渡し可被下、今日船三艘カ碕屋相尋居候趣、此分□候ハヽ廿円辻入用、尚又此元小払金最早少しも無之候間、都合三十円今日御渡被下度、追テ通ニ記シ差出申上候、今日之分可相成者、金札ニテ奉願上候、并原ゟ受取分ハ銅銭類斗ニテ碕や江者渡方困り候半与奉存候也、
　　八月十七日

【史料５】奈賀屋文書１－25
去ル廿四日御認之御手紙昨日拝見、兎角不勝之天気御障も不被遊候旨、御同慶奉存候、然者銑代御取切ニ相成、元方へ御送金之旨為御知被下承知仕候、扨鑪工合兎角吹ましニも不相成御同□歎息、此事ニ奉存候、□代堂ケ谷善平吹寄ニテ仕向、何角是迄分ハ大ニ□□替仕、籠ニ者大分工合宜敷、銑目合も上行斗、然処二日目夕方ヨリ又々銑堅シ、此分迚も荷数者百束之余無覚束、当代今朝籠、此度さか敷村下清吉如何可相成もの哉、弥□□工風ヲ考、□□之事ニ御座候、とふそ荷まヽニ相成候段、同夜案事申上候、
一、炭灰御遣□御申越被下承知仕候、
一、碕屋鉄砂□次第、積送候筈ニテ、日々相待居候得共、兎角灘廻り出来

可部屋
勘左衛門

下郡助左衛門殿
与頭藤十殿
与頭嘉一右衛門殿

【史料2】「年々見合帳」史料二十九（田儀櫻井家文書a1-10）

文政二年卯三月

神門郡乙立村大川内江小鉄流出候旨小百姓取上ケ、同郡奥田儀村多四郎方も買取呉候様及懸合候由之処、清流小鉄三拾貫目壱駄ニ付、口田儀村灘着ニシテ代銭三百文ニ買取可申旨多四郎ゟ及返答候之由、左候へハ、乙立村ゟ西園村崎屋迄川船ニ而積出し、同所ゟ海船ニ積替、口田儀迄運送いたし候得ハ、船賃并ニ蔵敷等数々諸雑用相懸り仕当ニ合不申由ニ付、広瀬御領堂ノ原鑪も遣候得ハ、相応之代銭ニ而買取可申由、依之右小鉄取上ケ、他国出被仰付度旨願出ニ付、御聞届被仰付而ハ、鉄師手前差障ニ相成候義ハ無之哉、左様之儀ニ有之候ハヽ、申出候様ニ御内々御手詰被仰付委細左ニ申上候、

一、乙立村ゟ差出候願書内見被仰付見合候処、鉄師手前差障無御座、勿論多四郎方ハ悉実意懸［　］ニ而、右様願出候儀ニ御座候得ハ、私共ゟ多四郎へ懸合少々直段引［　］為買候得者、乙立村貧民助ニ相成儀与衆評仕候得共、極陰ニ落入候鉄山之儀、多四郎ゟ申出候通、三百文位ならでハ難引受旨、是又無理ならさる儀与奉存候、此度乙立村ゟ前文願出候一條、御聞届被成遣候而も全余郡へ押移、鉄師手前難渋ニ相成候様之儀も有御座間敷、勿論多四郎手前当時差障り無御座候、然共依願表向御免被仰付候様相成候ハヽ、同郡古志川ニ而取上ケ候小鉄、当時多四郎方ニ遣候同人手前一廉之手当ニ相成居候由之処、直段引上ケ度ため、右古志川ニ而取上ケ候小鉄、石州へ遣度抔可願出も難斗、左候得者差障りニ相成候道理と奉存候、依之乙立村願之儀表向御免難被為成由ニ而、当時取上ケ候小鉄之分、願之通他国出し御免被仰付候建ニ相成居候ハヽ、又御国内鉄師手前へ買取度砌者、相対実意を以直段取極買受候様ニ可相成、左候得者、不相替乙立村人別作間之稼増ニ相成、扨又鉄師手前往々差障無御座儀与奉存候、以上、

卯十二月

勘左衛門
佐一右衛門

（二）

【史料3】奈賀屋文書2-2

①

（綴痕あり、綴痕以前は欠落）

八月廿九日

一　銀壱貫八拾三匁三分

口田儀村越堂鑪運上銀

一　同弐百匁

奥田儀村宮本御鈑冶屋運上銀

史料編

《凡例》

・仮名遣いは原文通りとしたが、旧字体は新字体に改めた。また、異体字や合字はそのままとした。

・虫損や破損等により判読不能な箇所は□、虫損が著しい箇所は［　］で表した。

・適宜、読点（、）や並列点（・）を付した。

・特に断らない限り、史料は出雲市所蔵であることを示す。

【史料１】「年々見合帳」史料二十六（田儀櫻井家文書ａ１－10）

乍恐御願申上御事

神門郡宮本御鑪之儀、是迄奉蒙御厚恩無難吹方仕、重々難有冥加至極奉存候、然処、石州浜田御領日脚村与申所之川中ニ御座候白砂能湯ニ相成候砂ニ而、鑪四日押壱代ニ拾弐三駄位茂入レ、釜之内一面湯ニ相成候砌、小鉄を入不申而者銑涌立不宜ニ付、無拠年来買入是迄鑪吹方出来申上候儀御座候処、此度石州鉄山師共ゟ右白砂宮本御鑪江買取候儀相障候由ニ而、日脚村砂元方助十与申者先月罷越申聞候ニハ、銀山料鉄山師中ゟ前段之趣被相頼候得共承知不仕、誠ニ口田儀御鑪之儀者年来之徳意先キ厚寄合、其上年々先銀等茂借用仕、悉恩儀有之候得者、被相頼候而茂得請不申与申聞候処、追々懸合ニ相成、無拠浜田領御役人様江内伺仕候処、末々迄相届候儀ニ者有之間敷候得共、一応銀山料大勢之頼候意を以口田儀江懸合可仕旨御内分被仰聞候ニ付罷越申候、元来銀山料銑殿り合ニ御一和無之故之儀相聞候、弥々一同不相成儀ニ候ハヽ、無余儀旧恩を相忘候事ニ候得共、右白砂注遣不申与相聞候ニ付、何之貪着茂無之躰ニ而返答仕置候得共、年来遣馴候砂之儀、俄ニ相止メ申候而者吹方千万無覚束如何共仕候而宜鋪哉、是悲右湯ニ相成候砂無御座候而ハ、鑪吹方差閊候儀、とこそ御国内ニ右代り相成候砂者有之間鋪哉与色々讃談仕見候処、神門郡崎屋辺川内ニ目細成砂相見候ニ付、少々御鑪江取、吹方仕試申上候処、湯心大分宜鋪随分相用候而茂、右日脚砂同様相見江申上候候間、何卒右崎屋川内白砂候儀御免被為仰付被下置候様奉願上候、左候ハヽ、崎屋近村小身之者之為ニ茂可相成、年中ニハ余程之賃銭等茂相渡候儀、勿論足弱之業ニ茂相叶候儀与奉存候ニ付、村方へ茂懸合仕候処、少茂相障候儀無御座候、其上川内ニ而取候儀土手等之差障ニ相成候儀決而仕間鋪候、何卒御憐愍之御慈悲を以、右白砂取候儀御免被為仰付被下候様宜鋪御願被仰上可被下候、以上

西園野村　　年寄仁兵衛

文化十一　　年寄円蔵

戌三月　　庄屋重左衛門

奥田儀村　　年寄和右衛門

庄屋佐六

宮本御鑪支配　　鉄師頭取

（一）

第３節　明治初期における稲扱の流通と廻船

１　はじめに

本稿の目的は，出雲市所蔵の奈賀屋文書のうち稲扱関係史料を取りあげ，明治初期の出雲国（島根県東部）における稲扱の流通と廻船の関係を検討することである(1)。

近世中期には登場していたとされる稲扱は，千歯扱きとも呼ばれ，収穫した稲穂から籾を扱き取る農具である。鉄や竹製の歯（刃）を台木という角材に櫛状に留めており，この歯と歯の間に稲穂を通すことで，稲と籾を分離する仕組みとなっている。大正期に回転式足踏み脱穀機が普及するまで，米づくりに欠かせない脱穀用具として重要な役割を果たしていた(2)。なお，本稿では取り上げる史料上の表記に従い，上記の農具を稲扱という呼称で統一する。また，今回の検討対象とするのは鉄製の歯を持つ稲扱である。したがって，本稿でいう「稲扱」は鉄製の歯を持つそれを指すものとする。

ところで，これまで稲扱の流通については，明治から大正における行商の活動が主な論点となってきた(3)。そこでは，行商人が書き残した行商記録の分析から，彼らの活動実態や稲扱の流通範囲などが明らかになっている。そして，このような実態が明らかにされている早瀬（現福井県三方郡美浜町）や倉吉（現鳥取県倉吉市）などは，稲扱の生産構造に関する研究が進展したこともあり，稲扱の生産地として名が知れた地域であったことも明らかにされている(4)。

しかし，日本における稲扱の生産が上記のような地域に限定されていたわけではなく，他の地域でも稲扱生産はおこなわれていた(5)。そのため，こうした事例も取り上げ，全国における稲扱の生産状況あるいは流通構造などの全体像を追究することが求められよう。

本稿では，明治初期における出雲国を対象とし，神門郡奥田儀村の鉄師・田儀櫻井家が生産した稲扱を取り上げ，その流通について検討を加えたい。

これまで出雲国（島根県東部）の稲扱に関するこれまでの研究では，生産していた事実の紹介あるいは稲扱の生産構造や生産量に関する分析に主眼が置かれ，稲扱の生産が有力な地場産業として取り上げられてきた(6)。その一方，稲扱の流通そのものに焦点をあてた研究は乏しい。わずかに廻船との関係が示唆されてはいるものの，史料の存在自体がほとんど知られていない状況下にあるため，実証的な研究をおこなうことが喫緊の課題となっている(7)。したがって，稲扱の流通については依然として不明な点が多く，検討の余地を残しているといえよう。

なお，今回取り上げる奈賀屋文書は，後述するように最近発見された史料群であり，これまで史料紹介されたことはもちろん，取り上げて分析されたこともない。そのため，本来であれば文書目録とともに紹介すべきところであるが，紙幅の都合上，目録の掲載は見送らざるを得なかった。したがって，今回の検討では史料群の概要を紹介するにとどめ，それを踏まえて稲扱の流通と廻船の関係について検討することとしたい。

２　奈賀屋文書の概要

（１）奈賀屋について

奈賀屋は，近世後期から出雲国神門郡口田儀村（現出雲市多伎町口田儀）に居住した家である。同家初代の五郎蔵は，同村で廻船業を営む油屋彦左衛門の二男として，文化８（1811）年に生まれた[(8)]。本家の油屋から分家した時期は史料上明瞭ではないが，文久２（1862）年には田儀櫻井家の手代として五郎蔵が登場することから[(9)]，これ以前には分家・独立していたものと推測される。また，同人が田儀櫻井家の手代を務めた期間については，史料的制約もあり，正確な年代を示すことは難しい。ただ，明治４年から翌５年（1871 ～ 1872）にかけての史料を最後に，手代としての活動がみえる五郎蔵は史料上から姿を消している[(10)]。これを考慮すると，五郎蔵が田儀櫻井家の手代を務めた期間は，おおよそ文久２年から明治５年の間と比定しておきたい。

加えて，田儀櫻井家のたたら製鉄における五郎蔵の位置の位置にも触れておきたい。幕末から明治初期にかけての田儀櫻井家のたたら製鉄では，少なくとも手代が 17 名以上いたことがうかがえるが[(11)]，各手代の役割分担などの詳しい様相は不明といわざるを得ない。しかし製鉄業において複数の部署が存在していたこと，五郎蔵が口田儀に居住しながら越堂鈩の砂鉄調達に関与していた可能性が高いことを別稿で指摘した[(12)]。また，後述するように本稿のテーマである稲扱の流通にも関与していることから，五郎蔵は上記のような業務を担当する手代として，活動していたものと考えられる。

（２）史料群の特徴

奈賀屋に伝来した史料群は，令和元（2019）年度に同家から出雲市へ一括寄贈された。史料群を整理したところ，点数は約 800 点に上ることが判明した。その大部分が田儀櫻井家の関係者間での業務連絡や私信で占められているのが特徴であり，宛先のほとんどが五郎蔵となっている。こうした史料は年次未記載のことが多いが，先述の五郎蔵の経歴を踏まえると，おおよそ幕末から明治初期にかけてのものと推測される。

さて，今回取りあげる稲扱関係史料は，いずれも奈賀屋文書に所収されており，第 32 表のとおりである。

第 32 表　奈良屋文書所収の稲扱関係史料

年月日	文書名	差出→宛名	形態	目録番号	備考
９月 29 日	〔鹿田忠兵衛書簡〕	忠兵衛→五郎蔵	切継紙	1-8-18-2	
９月 25 日	〔阪根為四郎・鹿田忠兵衛連署書簡〕	為四郎・忠兵衛→五郎蔵	切紙	1-8-30	
９月 19 日	〔阪根為四郎・鹿田忠兵衛連署書簡〕	為四郎・忠兵衛→五郎蔵	切継紙	1-8-35	
９月 20 日	〔鹿田忠兵衛書簡〕	忠兵衛→五郎蔵	切紙	1-8-38	
９月 21 日	〔鹿田忠兵衛書簡〕	忠兵衛→五郎蔵	切継紙	1-8-51	虫損小破。
10 月 21 日	〔大坂詰某書簡〕	大坂詰→鳥屋尾五郎蔵・阪根為四郎	切継紙	1-93-31	虫損小破。

点数は決して多いとはいえないが，後述するように，稲扱の流通に関して五郎蔵の差配を仰ぐこと，彼に対して意見徴収をおこなったことを示す史料が並ぶ。また，この稲扱関連史料の特徴として，それぞれの日付が９月中旬から 10 月中旬の間に集中していることが読み取れる。この時期に稲扱の流

通が集中するのは，稲刈りとの関係を想定するべきであろう。

なお，差出人について補足すると，忠兵衛は当該期における田儀櫻井家の手代である[13]。為四郎は史料上明確に手代として登場しないものの，稲扱の流通に関与していることを踏まえると，田儀櫻井家の本拠・奥田儀村宮本に所在する「せんば鍛冶屋」の関係者という可能性がある（第６章第１節春日論考）。

３　明治初期における稲扱の移出

（１）島根県における稲扱生産と田儀櫻井家

まず，稲扱の移出について，おおよその傾向を掴んでおきたい。明治初期の島根県における稲扱の移出量を示す史料として，『島根県一覧概表』が挙げられる[14]。たとえば明治 11（1878）年と同 13（1880）年のそれには，稲扱が「名産」と位置づけられている。また，生産された稲扱に関しては，明治７（1874）年の同表に具体的な記載がある。そこでは，稲扱が「物産」として 9,525 挺，「輸出」として 7,368 挺という数字になっている。「物産」を生産量，「輸出」を移出量と考えると，県外へ移出された稲扱は生産量の約 77％に上っていたといえよう。なお，「物産」では稲扱の生産地の内訳は記載されていない。そのため，約 9,000 挺に対して田儀櫻井家の稲扱が占めた割合は不明である。

つまり，明治初期において島根県で生産された稲扱は，その大部分が県外に移出・販売されており，明治 10 年代には，主要な移出品の１つとして認識されていたのである。

ところで，田儀櫻井家が稲扱の生産に乗り出したのはいつ頃であろうか。これまで言及されていない点であるため，触れておきたい。

まず，田儀櫻井家の菩提寺として知られる，神門郡奥田儀村宮本に所在する智光院の過去帳には，明治３（1870）年と同５年の箇所に「稲扱師伯耆国倉吉ノ産」とある人物がそれぞれ１名ずつ記載されている[15]。先述のとおり，伯耆国倉吉は稲扱の生産地として名が知られた場所である。上記の記載に従えば，同地出身の稲扱職人が田儀櫻井家の稲扱生産に関与していた可能性が高いといえよう。

つぎに，文久２（1862）年９月３日に，奈賀屋の本家・油屋の廻船が微量の稲扱を越後国出雲崎の泊屋へ移出している事例がある[16]。この稲扱の生産地は明らかではないが，年月日，移出の担い手，先ほどの過去帳の記載を踏まえると，田儀櫻井家が生産したものという可能性は高い。これらを考慮すると 1860 年代には，田儀櫻井家は稲扱生産に乗り出していたのではないだろうか。

（２）大坂における稲扱の販売と競合

それでは，島根県外へ移出された稲扱はどのように販売されたのであろうか。田儀櫻井家の場合，断片的ではあるが，大坂での事例をうかがうことができる。大坂方面での稲扱の販売状況は田儀櫻井家にとって重要な問題であったようで，大坂から五郎蔵に対し，稲扱の販売状況と仕入れに関する相談がおこなわれていたことが，【史料１】から判明する。

【史料１】は，明治初年ごろに「大坂詰」の人物が鳥屋尾五郎蔵・阪根為四郎に宛てた書簡であるが，この鳥屋尾五郎蔵が奈賀屋五郎蔵にあたる。この当時，大坂には田儀櫻井家の手代が詰めていたことを踏まえると[17]，この「大坂詰」は在坂中の田儀櫻井家手代と推測される。さて，この史料からは

大坂方面での稲扱販売状況の実態とそれに関する問題について，いくつかの情報をすくい取ることができる。虫損が目立つ史料ではあるが，以下まとめてみたい。

①：近江国高田（現滋賀県長浜市ヵ）で稲扱が好評を博したことを受け，来年は千箇の注文を希望されていること。

②：田儀櫻井家における鈑次屋の操業状況が芳しくないことから，稲扱生産への注力が推奨されていること。

③：田儀櫻井家の他に，代次屋（出雲国大原郡木次町の榊原家）の稲扱も取り扱いがあり，両家の稲扱が販売競争を展開していること。

④：田儀櫻井家産稲扱の評判が良く，その品質は伯耆国倉吉産稲扱の比較対象となっていること。

本史料により，明治初年ごろの大坂では，田儀櫻井家の稲扱が流通しており，その販売圏は近江にまで達していたことが分かる。また，大坂では大原郡木次町榊原家の稲扱も流通していたようで，少なくとも２者による販売競争が展開していたこと，田儀櫻井家の稲扱に対する評判・品質ともに上々で倉吉産稲扱が引き合いに出される状況が現出していたことなどがうかがえる。

さらに重要なのは，田儀櫻井家の鈑次屋（鍛治屋）で生産する割鉄に代わる商品として，稲扱の存在感が高まっていることであろう。田儀櫻井家の製鉄業は明治時代に入って以降は衰退期と位置づけられており，急速に斜陽化したという見方がされている[(18)]。しかし本史料をみると，稲扱に関しては衰退どころか，むしろ発展途上の状況にあるのではないか。つまり，当該期の田儀櫻井家では，割鉄生産から稲扱生産へと生産をシフトする話が手代の間で交わされるほど，製鉄業における稲扱の位置づけが重要になっていたとみられる。

４　稲扱流通の諸相

（１）稲扱の輸送をめぐって

さきに述べたように，明治初期における田儀櫻井家の製鉄業では稲扱生産が伸長しており，その販売が重要な課題となっていた。そのため，この時期の田儀櫻井家において，稲扱の流通方法が議論されることとなる。【史料２】では，田儀櫻井家における稲扱の流通構造が示されている点が注目される。この史料からは，次のことを読み取ることができる。

①：稲扱の積み出しについて奈賀屋五郎蔵の何らかの教示をおこなっていること。

②：それを基に田儀櫻井家内部で協議がおこなわれたこと。

③：馬関（下関）を拠点に，豊後鶴崎（現大分県大分市）へ稲扱を移出する考えであること。

④：大坂では，稲扱の値段が低下した際には購買需要が生じること。

⑤：稲扱積み出しの担い手は，田儀櫻井家が「慥向候もの」と判断した者であり，その選抜には奈賀屋五郎蔵の判断も含まれること。

特に注目したいのは③で，下関を中継地とした輸送のあり方が示されている点である。本史料では同所を経由し豊後国鶴崎に輸送するという具体例のほか，下関以降の流通先における販売見込みや販売不振時の措置が検討されている。つまり，必ずしも上方市場を介さない流通構造となっており，こ

れに基づいて稲扱の移出に関する議論が田儀櫻井家内部でおこなわれたものと考えられる。

それでは，どのような担い手が稲扱輸送をおこなったのであろうか。これに関して，いくつか史料が存在するので，紹介してみたい。

（2）口田儀浦の廻船による輸送

勝田安三郎の場合

安三郎は口田儀浦を本拠に廻船業を展開していた人物で，少なくとも明治 10 年代には廻船業を経営し，その航海圏は北陸まで伸びていたことが知られている[(19)]。そんな彼の廻船業について，その様子を具体的に示す史料が見つかったので，【史料 3】に掲げる。

この史料は，明治 6（1873）年の御用留に記された出帆免状の控で，当時の戸長が大阪府の船改所に宛てたものある。それによると，同年 4 月 20 日，口田儀浦の勝田安三郎が大坂へ向けて出帆したことが判明するのだが，同人の廻船に関する記載に注目したい。まず廻船について，勝田安三郎は幸安丸という和船を所有し，同船の規模は約 92 石積で 3 人乗りであることがうかがえる。また輸送形態については，「送り状」より今回の輸送は運賃積であること，船客は乗せていないことが分かる。つまり，明治初期の勝田安三郎は，自身が所有する小型廻船の直乗船頭を務めており，大坂方面へ向けて，商品や人の輸送をおこなっていたといえよう。

こうした廻船業を展開している安三郎に対して，田儀櫻井家側が稲扱の積み出しを依頼していたことを示すのが，【史料 4】である。本史料では，帰帆した勝田安三郎に対して，鳥屋尾五郎蔵が稲扱の積み出しを依頼し，同人の了承を得ていたことが分かる。おそらく，廻船は前出の小型廻船（幸安丸）と想定されるが，稲扱の輸送量は不明といわざるを得ない。

つぎに，同じく口田儀浦を本拠とする，別の廻船業者の事例もみておきたい。

中川屋多七郎の場合

中川屋も口田儀浦を本拠とした廻船商人である。同家の廻船・春磐丸は日本海沿岸から大坂方面にわたる範囲を商売圏としており[(20)]，その活動範囲は先の勝田安三郎と似ている。

そんな中川屋多七郎に対し，田儀櫻井家側による積み出しの依頼を示すのが【史料 5】である。この史料では，春磐丸に千刃の積み出しを依頼するため，忠兵衛が五郎蔵に対して内々に相談していることが知られる。なお，積み出しを依頼する積み荷が稲扱ではなく千刃となっている点に留意する必要があろう。第 32 表のうち，本史料以外は全て「稲扱」で統一されているから，ここでいう「千刃」は稲扱の歯の部分ではなかろうか。

さて，本史料で注目したいのは，販売方法と積み出し対する田儀櫻井家側の認識である。まず前者は，肥後での取引実績を持つ春磐丸に依頼するという，同船の商売に便乗したものであることがうかがえる。また後者は，「成丈余慶積呉候様御相談可被下」とあるように，積み出しに対して積極的な姿勢を看取できる。

これらの事例からは，田儀櫻井家が稲扱の積み出しにおいて，地元廻船の協力が必須だったこと，販売先に対して稲扱をどれだけ有効に提供できるかが課題となっていたことが推測される。特に，地元廻船との関係は産鉄の流通において明らかにされているが，その関係は稲扱の流通においても同様

であったことが指摘できよう。

（3）運賃積契約

次に、稲扱の積み出しに至る経緯とその契約の事例を見てみよう。ここで取り上げるのは，口田儀村の北方約 10km に位置する，神門郡久村の廻船主・豊四郎の事例である。同人は【史料 2】で登場した豊四郎その人であるが，この史料の翌日，奈賀屋五郎蔵が彼を口田儀へ呼び寄せている【史料 6】。ここでも，稲扱の積み出しの担い手確保を五郎蔵が手配していることがわかる。

さて，豊四郎が口田儀へ呼び出された翌々日，彼と田儀櫻井家側との間で稲扱の積み出しに関する話がまとまった。この話の内容について，五郎蔵へ報告されたのが【史料 7】であり，運賃積の具体的な内容を知ることができる。

本史料において，豊四郎と田儀櫻井家側が取り決めたのは，向こう 3 日のうちに稲扱と鉄を運賃積することであった。稲扱については，下関・鶴崎・筑前・大坂の 4 か所とそれぞれに要する運賃の額が決定している。なお，この輸送は下関までは豊四郎の乗船が必須という条件付きとなっていた。また，田儀櫻井家側は稲扱に加えて鉄の輸送も依頼しており，その輸送に係る運賃は稲扱のそれに準じることとなった。これを受け，豊四郎に輸送を依頼する鉄の確保が講じられることとなったようである。ここでは稲扱同様，鉄の輸送も下関を中継することとなっている。しかし，結局この運賃積は履行されなかったようで，3 日後の 9 月 25 日には破談となってしまった（【史料 4】）。

この事例からは，稲扱の積み出しにおいて，五郎蔵が窓口となって地元廻船や近隣の廻船に対して積み出しを依頼し，彼らとの具体的な契約は田儀櫻井家側によっておこなわれているという役割分担が存在したことがわかる。そのため，【史料 7】にみられるような報告の書簡が五郎蔵に宛てられたと考えられる。また，積み出しの担い手は地元廻船に限定されてはおらず，条件次第では近隣の廻船にも依頼する余地があった。さらに，積み出しは，下関を中継拠点とし，九州・大坂へ向かう方法がとられていた。前掲の【史料 2】で議論されていた稲扱の流通方針と一致しており，これが田儀櫻井家における稲扱の流通構造だったと考えられる。

5　おわりに

最後に，本稿で明らかにしたことを簡単にまとめておきたい。まず，奈賀屋文書については，初代五郎蔵の関係史料が大多数を占めており，田儀櫻井家内部における交信が多いという特徴がある。そのため，奈賀屋文書は五郎蔵が田儀櫻井家の手代を務めた，幕末から明治初期にかけての史料を中心に構成されていると考えられる。今回取り上げた稲扱関係史料も上記の時期と大きく変わらないといえよう。

つぎに，田儀櫻井家において，稲扱の移出は下関を経由する流通構造が基本方針となっていた。これを基に，田儀櫻井家内部で稲扱の移出や販売をおこなう計画が講じられていたほか，奈賀屋五郎蔵を窓口として輸送の担い手確保がおこなわれ，運賃積によって稲扱を積み出していった。下関を経由する流通構造については石見国における鉄類（銑鉄・鋼・割鉄）の事例で指摘されているが[21]，本稿で検討した稲扱はこの鉄類以外の事例として補足可能ではないだろうか。

また，稲扱の流通に関しては明治初期の上方において田儀櫻井家の稲扱が流通していたことが明らかとなった。近隣の木次産稲扱と競合しながら販売が展開されていたこと，品質・評判が良い稲扱として認識されていたことなどの状況を見いだせる。そのため，これまでは明治期に入ると製鉄業の衰退期と位置づけられてきた田儀櫻井家であったが，稲扱の生産はむしろ発展途上の段階にあり，製鉄業における稲扱の位置は上昇していたのではないか。

なお，こうした稲扱の流通を支えたのは，口田儀村やその近隣の廻船の存在があった。特に口田儀村の廻船と田儀櫻井家との関係は，たたら製鉄における産鉄の流通だけでなく，稲扱の流通においても同様の関係が見受けられたことは重要であろう。

ところで，本稿では限られた史料の中で検討を進めることとなったため，田儀櫻井家における稲扱の生産構造や生産量，稲扱流通の全体像など，残された課題は多いと認識している。また，史料的制約もあり，稲扱移出の担い手も限られた事例を提示するに留まってしまっている。これらの点は今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿の作成にあたっては，斎藤一氏，角田徳幸氏，岡宏三氏，中安恵一氏，藤原雄高氏，春日瞳氏より貴重なご教示をいただきました。末筆ながらここに記して感謝の意を表します。

（中山玄貴）

註

（1）島根県の県名は明治 4（1871）年 11 月からである。本稿では，これより前あるいはその可能性が高い年次を出雲国，これ以降を島根県と呼ぶこととする。

（2）飯沼二郎・堀尾尚志 1976『ものと人の文化史 19 農具』法政大学出版局，三橋時雄「千歯扱」『国史大辞典』

（3）横浜市歴史博物館編 2013 年『千歯扱き　倉吉・若狭・横浜』横浜市歴史博物館・（公財）横浜市ふるさと歴史財団。

（4）前掲註（3）図録。

（5）『日本民具辞典』（ぎょうせい，1997 年）には，稲扱の主な産地として，倉吉（鳥取県）・早瀬（福井県）・加茂（新潟県）・上諏訪（長野県）・粉河（和歌山県）・尾道（広島県）・堺（大阪府）が挙げられている。

（6）木次町誌編纂委員会編 1972『木次町誌』木次町，出雲市教育委員会編 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』（出雲市の文化財報告 8）出雲市教育委員会，角田徳幸 2018『斐伊川の砂鉄採取と木次の鍛冶屋』八日市地域づくりの会など。『木次町誌』には，稲扱生産に従事していた古老（明治 22 年生）の談が掲載されている。それによると，木次の近くで稲扱生産がおこなわれていた場所として，倉吉と田儀が挙げられている（同書 520 頁）。なお，田儀櫻井家の稲扱に関して，抵当物として稲扱が登場する事例が報告されている（「井原家文書」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』）。また，田儀櫻井家文書にも稲扱に関する史料がわずかながらみられる（田儀櫻井家文書 a3-36）。

（7）『木次町誌』では，明治中期における稲扱の販売は，日本海に面した境（鳥取県）からおこなう旨の記述があるが，史料的根拠は示されていない（同書 518 頁）。これに関して，角田徳幸氏は明治 41（1908）年における秋田県への送り状 1 点を紹介しているが（前掲註 5 角田著書），依然として稲扱の流通に関する史料状況は芳しくない。

（8）奈賀屋文書 1-93-5。なお，この油屋彦左衛門こそ，本書の巻末に掲載した，鳥屋尾家新出文書における同家6代目その人である。

（9）和田嘉宥 2004「建造物調査の結果」『田儀櫻井家　田儀櫻井家に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会。奥田儀村宮本に鎮座する金屋子神社棟札のうち，文久 2 年のそれに「手代　鳥屋尾五郎蔵」とみえる。

（10）奈賀屋文書 1-66-5，同 1-66-16~19。

（11）田儀櫻井家文書 a1-17。

（12）拙稿「19 世紀の出雲国における砂鉄輸送の展開―神門郡を事例として―」（本書第6章第2節）

（13）前掲註（11）田儀櫻井家文書。

（14）国立国会図書館デジタルコレクション。今回取り上げるのは，明治 7 年・同 11 年・同 13 年のもので，いずれも請求番号は特 17-957。

（15）智光院文書 9（出雲市所蔵）。同史料の史料的性格については，拙稿 2020「智光院過去帳の基礎的研究」『史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅰ』（出雲市の文化財報告 42）出雲市教育委員会。

（16）鳥屋尾家文書 521（『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』掲載分）

（17）田儀櫻井家文書 b5-20。田儀櫻井家の手代・秀三郎が大坂に詰め，稲扱を抵当とした金銭の融通に関する問題に対応している。

（18）鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会

（19）仲野義文「出雲国田儀浦関係の海運史料について」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』30 頁。

（20）鳥屋尾家新出文書 2 -165。

（21）中安恵一 2021「寛政天保期における鉄商品の廻送と小型廻船」『歴史評論』853 号

九月廿日　　忠兵衛
鳥屋尾様

【史料7】奈賀屋文書1－8－51

拝啓御気分如何為入候哉、追々御順快与奉案上候、陳ハ昨日久村豊四郎・林右衛門同道罷越、稲扱一条及示談候処、近ク之内灘廻り積出呉候筈、尚下ノ関辺迄豊四郎上乗ニ罷越呉候積ニ願談仕候、則運賃取究左ニ、

一、金十二円　馬関迄
一、同十六円　鶴崎迄
一、同十八円　筑前迄
一、同三十円　大坂迄

右稲扱百五拾丸余積入、外鉄拾五駄位為積候而も、右同様之運賃ニ御座候、右之通議定仕、両三日之中相廻候様ニ御座候間、此段御承知可被下候、扨又鉄少々成とも積入候得ハ、別テ斗合宜布旨御座候得者、此元鉄ハ無之事ニ御座候所、堂ヶ谷鉄拾五駄井原江抵当ニ差入置候分、此間かゝ谷迄操出候筈ニ候へハ、此分積入候得ハ斗合歟と奉存候、早速手配可仕候、

一、本月鉄売却之儀ハ、如何様共ニ御座候哉、買人参候得ハ、御相談置可被下奉願上候、

右之趣御願上度如此御座候、以上

九月廿二日　　忠兵衛
五郎蔵様

右事□迄如此御座候、以上、

九月十九日　　為四郎
　　忠兵衛

五郎蔵様

【史料３】「明治六年　御用留」（鳥屋尾家新出文書１－26）

出帆免状

一、幸安丸　　日本形
　積石　九拾弐石八升六合
　乗組　沖船頭勝田安三郎直乗
　　外ニ弐人
　積荷　　弐□
　　但送り状御通［　］通り
　船客無之

右者当浦勝田安三郎所持船、四月廿（ママ）出帆、其港江罷越候段届出候間、免状相渡候也、

島根県官下出雲国神門郡口田儀浦
　戸長
　　錦織謙三郎

第四月

大阪府　船改所

【史料４】奈賀屋文書１－８－30

忝拝見、本日安三郎帰帆、稲扱積出之義御示談被下候所、交合候旨安心仕候、出帆迄ニ一寸為上可被下奉願上候、

一、塩積戻り候趣、弐百俵為上可被下候、

一、久村豊四郎ハ破談申遣候間、此段御承知可被下候、

右用□迄御座候、以上、

九月廿五日　　為四郎
　　忠兵衛

鳥屋尾様

【史料５】奈賀屋文書１－８－18－２

春磐丸此度九州行致候ニ付、肥後ニテ先年千刃同船取扱候先キへ積込候へハ、仕切方ニ可相成、十二歟二十歟同船へ為積候而ハと被仰下、至極好処ニ御座候間、成丈伺分四五十丸位積入候而ハ如何様共ニ御座候哉、早々御示談成丈余慶積呉候様御相談可被下奉願上候、

右要□迄如此御座候、以上、

九月二十九日　　忠兵衛

五郎蔵様

【史料６】奈賀屋文書１－８－38

稲扱之儀、追々御配意難有仕合奉存候、豊四郎参候様御手配被下候旨承知仕候、且大坂ゟ別紙之通申越候、御一見可被下候、以上、

（二）

史料編

※凡例は第6章第2節と同。

【史料1】奈賀屋文書1‐93‐31

江州高田売稲扱評判宜布、明年ハ千箇手合呉候様頼□候所、如何様之計合ニ候哉、飯次屋ハ引合兼候へハ、稲扱専打立候方宜布哉ニ奉存候、尤代次屋千□大ニあしく相成売捌不申、当家稲扱ハ内実伯州ゟも宜布、内国一等と申事ニ御座候、此所ニ而代次や□不落□□候へハ、追々盛大ニ可相成、宜布御相談至急為御知可被下候、

一、仕入金不足ニ候へハ、随分為被□出候旨ニ御座候、

一、昨日代次屋引□、同人稲扱当年之所ニテ駄ニ付五拾銭も引落申候、当家ハ議定通ニ御座候、

一、明年之所、同人分直段相立、今年ゟ五拾銭落被致候由ニ御座候、

左候へハ、八拾弐円と相成候由ニ御座候、

□□円五十銭

一、当家分ハ今年之□直候間、為仕敷度心組ニ御座候、呉々も出来候見込至急為御知可被下候、

右之趣急御座候、

十月廿一日　大坂詰

鳥屋尾五郎蔵様

阪根為四郎様

二白、忠兵衛、明廿二日出港之積ニ御座候、以上、

【史料2】奈賀屋文書1‐8‐35

昨今御両通只今相達拝見仕候、先以此ニ御障成趣如何様共ニ御座候哉、御大事可被成候、陳ハ大君昨日出雲江御越被成、小遣御持出無之、三円御取替被下候趣扨々不怪事ニ御座候、扨又銑鉄代等追々御取替被下、銀廿四円御取替ニ相成候趣御尤千万、過日も御依頼候上、右之通銑売却ニ而も被成下、金調御周旋可被下奉拝願候、

一、稲扱積出之義、御思召細々御申被下至極御尤ニ御座候所、種々衆議候へハ、豊後鶴崎ニハ稲扱商人慥向候もの有之、馬関迄積下り候旨、惣方へ一応申遣候上、弥不向ニ候へハ、紅の吉へ預置候へハ斗合歟と申事ニ御座候、大坂ニ而ハ川平抔と申千刃師ハ、常々下直ニ候へハ、何時ニ而も買入候もの有之候趣、大野ゟ申出、一応船頭へ相談之上ならてハ思ハ図ニ参兼、夫へも船頭呑込不申候へハ、夫迄之事止メニ可致ゟ外無之と申衆議ニ付、昨日態々久村豊四郎へ申遣、一寸相参致呉候へハ、百事示合可致候旨頼遣候所、今日ハ可参候旨申越節余相待罷在候次第ニ御座候、其上尊家へも上申仕候積ニ而態与差控居候所、只今御帳面ニ而ハ尊家へ参候趣扨々行違不斗合之事ニ御座候、林右衛門一応御差向被下候へハ大ニ斗合宜布御座候、しかし尊様御取斗□□□申訳ニハ毛頭無御座候得共、面談ニ而人緒打明候へハ大ニ斗合歟と奉存候、豊四郎罷出候積ニ昨日申居候所、林右衛門と申者何右衛門悴歟、不案内ニ御座候、左様之訳候へハ、無拠止メ候ゟ外無御座候歟とも奉存候、

一、豊四郎治平祖平右三人ハ慥向候もの打任候而も宜布御座候間、林右衛門抔ハ如何哉、不慥之ものニ候へハ、御見切可被下奉願上候、

第７章　総　括

第１節　長期間操業にみる越堂釜の改修とその背景

１　はじめに

越堂たたら跡の発掘調査では，たたら場の操業を示す高殿関連の遺構が見つかった。そのなかで，高殿や床釣りに複数時期の造り替え痕跡が認められ，文献史料で確認できるだけでも約 150 年間もの長期間におよぶ操業の具体的な様相を確認できたことが大きな成果の一つである。ここでは，発掘調査で明らかになった越堂釜における各時期の高殿・床釣りの造り替え痕跡の具体的な検討を行い，近世から近代にかけて長期間操業した越堂釜の実態に迫るとともに，田儀櫻井家のたたら製鉄経営における越堂釜の位置づけを明確にしたい。

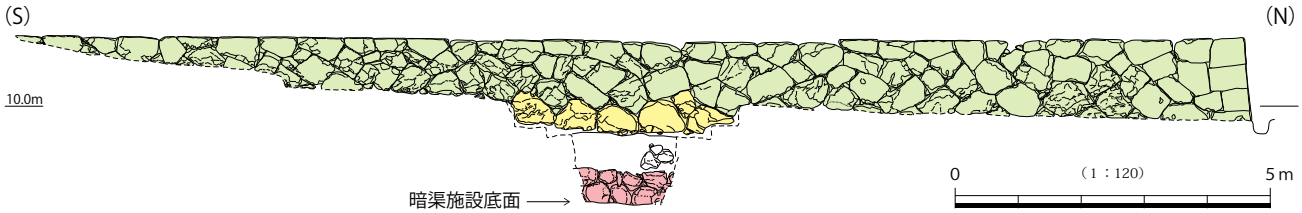
２　越堂釜の操業時期と高殿・床釣りの造り替え痕跡

越堂たたら跡の発掘調査において，高殿内外の盛土や埋土の様相が示す構築状況のなかで，複数時期の操業面や遺構が確認できた。これら操業面および盛土・埋土から出土した陶磁器や，炭化物の年代測定の結果（第５章第１節）をもとに各時期の推定年代を検討し，田儀櫻井家の経営時期とあわせて越堂釜操業１～４期に整理している（第３章第２節）。そのなかで高殿や床釣りに造り替え痕跡が複数時期で確認でき，越堂釜の時期的変遷を整理するなかで，複数の改修があったことが明確に把握できた（第３章第６節）。ここでは第３章第６節で明確にした高殿と床釣りの変遷を踏まえ，高殿と床釣りの造り替え痕跡に焦点を当て，その内容を簡潔に整理しておきたい（第 33 表・第 107 図）。

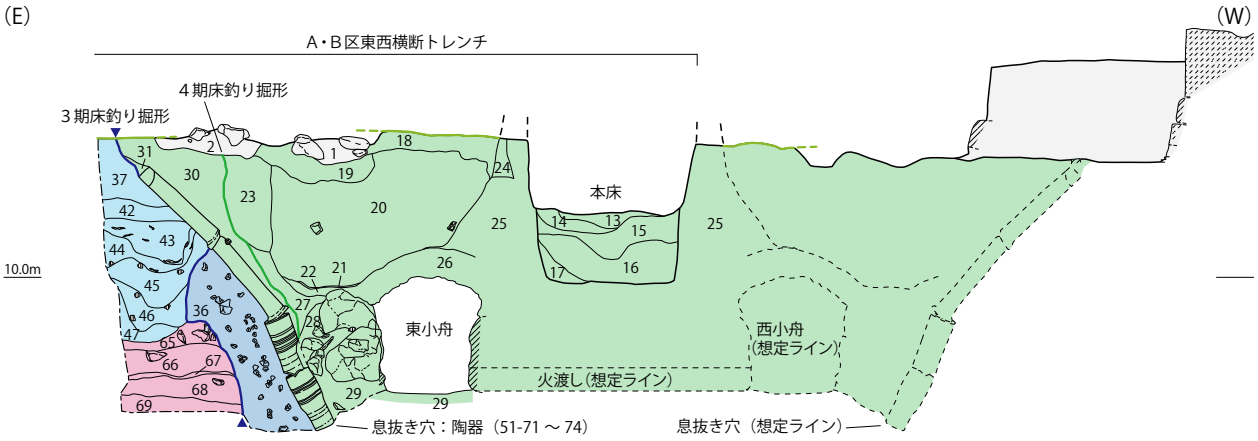
第 33 表　越堂釜操業１～４期における高殿・床釣り改修の推定時期と改修内容

操業時期	田儀櫻井家経営時期	推定年代	各時期の高殿関連遺構と改修内容
越堂釜操業４期	田儀櫻井家経営 後半期（後半）	19 世紀中頃～後半頃	操業面：湯溜まり 床釣り：掘形・跡坪・本床・小舟・火渡し・息抜き穴
床釣りの改修		19 世紀中頃	４期床釣りを構築
越堂釜操業３期	田儀櫻井家経営 後半期（前半）	19 世紀初頭～中頃	高殿石垣（切石）（３・４期） 操業面（３・４期）：押立柱・束柱礎石列・囲炉裏跡 床釣り：掘形・小舟（甲）
高殿・床釣りの改修		19 世紀初頭頃	３期床釣りを構築 ３・４期高殿石垣（切石）・操業面を構築 ２期操業面上に盛土
越堂釜操業２期	田儀櫻井家経営以前～ 経営前半期頃	18 世紀中頃～ 19 世紀初頭	高殿石垣（自然石） 操業面：砂鉄置場・炭置場・礎石列
高殿・床釣りの改修？		18 世紀中頃	２期床釣りを構築 ２期高殿石垣（自然石）・操業面を構築 １期硬化面上に盛土
越堂釜操業１期	田儀櫻井家経営以前	17 世紀末～ 18 世紀中頃	暗渠施設 硬化面

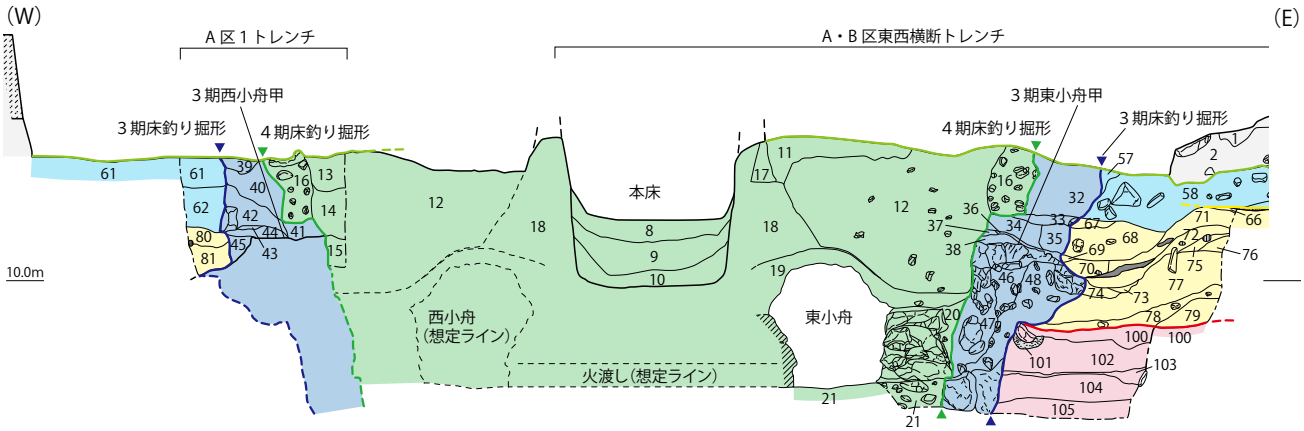
高殿東面石垣の改修状況（第22図）

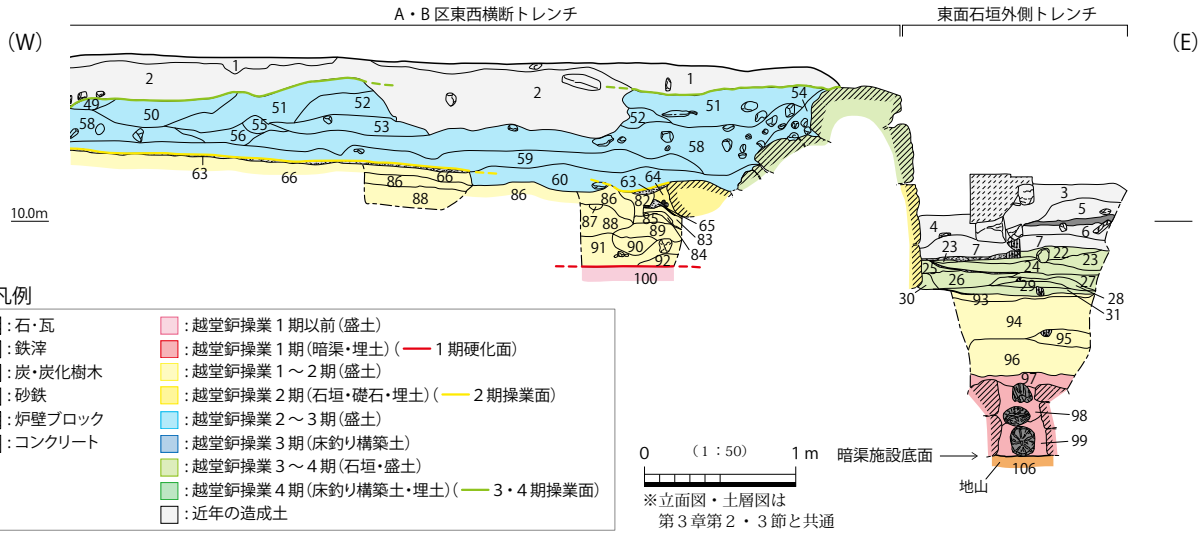


床釣りの改修状況（第24図）



高殿・床釣りの改修状況（第21図）





凡例

- ：石・瓦
- ：鉄滓
- ：炭・炭化樹木
- ：砂鉄
- ：炉壁ブロック
- ：コンクリート
- ：越堂鈩操業１期以前（盛土）
- ：越堂鈩操業１期（暗渠・埋土）（―― １期硬化面）
- ：越堂鈩操業１～２期（盛土）
- ：越堂鈩操業２期（石垣・礎石・埋土）（―― ２期操業面）
- ：越堂鈩操業２～３期（盛土）
- ：越堂鈩操業３期（床釣り構築土）
- ：越堂鈩操業３～４期（石垣・盛土）
- ：越堂鈩操業４期（床釣り構築土・埋土）（―― ３・４期操業面）
- ：近年の造成土

第 107 図　越堂鈩の高殿・床釣りの改修状況

（1）１～２期の改修時期と特徴

１～２期の改修時期

２期の高殿は，１～２期の盛土からの出土陶磁器や炭化物の年代測定（AMS-3），および炭置場上の炭化物の年代測定（AMS-4）から判断して，概ね 18 世紀中頃に構築されたと想定されるため，この時期にたたら場が改修されたと推測できる。

改修の特徴

高殿内の土層堆積状況から１期の硬化面が確認でき，その上に自然石の高殿石垣を積み上げ，盛土を行って２期の操業面を構築している。１期の明確な遺構は暗渠施設と硬化面のみで，それ以外の具体的な施設の実態は不明であるが，暗渠施設の排水機能は２期以降のたたら操業において有効に機能しており，また１期の硬化面を形成する盛土内にも砂鉄層や被熱した石積みがあることを考慮すると，１期やそれ以前にもこの場所でたたら場の操業が行われていた可能性が高い。また１期の暗渠施設の配置を活かして２期の高殿石垣を構築しているため，１期と同じ場所で２期のたたら場が稼働していた可能性を考えてよいだろう。なお，１期における床釣りの実態が不明であるため，１～２期の床釣り改修の具体的な様相は判然とせず，また２期の床釣りは，後述する３・４期の床釣り構築時に削られており，詳しい状況は不明である。

（2）２～３期の改修時期と特徴

２～３期の改修時期

３期の高殿の構築は，２～３期の盛土から出土した陶磁器や３期の床釣りの小舟甲上に認められた炭化物の年代測定（AMS-5）により 19 世紀初頭頃であったと推測され，２～３期の高殿の改修についても概ねこの時期であると考えられる。注目されるのは高殿石垣の改修状況で，２期の自然石の石垣上に切石で新たに石垣が増し積みされており，明確な時期差として把握できる。

改修の特徴

２期の石垣は１～２段程度であったが，３期の石垣は増し積みによって３～４段積みとなり，かなりの高さを誇る。なお，２期の自然石の石垣は，３・４期のなかで高殿外側に盛土を施して埋没させ，３・４期の切石の石垣のみが見えるように整えられている（第３章第３節第 25・26・28 図）。この時期の改修も１～２期の高殿の改修と同様，２期の操業面上に盛土を行い，同じ場所で３期の操業面を新たに構築したと考えられる。それは３・４期の高殿南側における束柱礎石列の軸線が，２期の高殿石垣の内側を廻る礎石列の軸線と符合することからも想定でき（第３章第３節第 32・34 図），２期の高殿内部の配置を意識して３期の高殿を構築した蓋然性が高い。３期の床釣りの掘形は土層堆積状況から確認されており，２期のたたら操業面に伴う盛土を削平して構築した状況が把握できる。

（3）３～４期の改修時期と特徴

３～４期の改修時期

４期に床釣りが改修された様子が具体的に明らかになり，床釣りの息抜き穴は４本の土管を連結させて造られている。江戸期の終わり頃から常滑焼などの土管が生産され，明治初年以降に規格性の高い土管の大量生産が可能になることが知られており（柿田 1992），息抜き穴に規格性の高い土管が使

用されている４期の床釣りは，19 世紀中頃から後半頃に稼働した蓋然性が高い。なお，田儀櫻井家のたたら製鉄経営で村下や炭坂を任された川上家の文書史料（川上家文書・整理番号１）（相良監修 2009）には，19 世紀中頃における床釣りの修繕の様子が具体的に記されており（鳥谷 2017），この時期の越堂鈩における床釣りの改修状況を示している可能性がある。そのため，３～４期の床釣りの改修は，19 世紀中頃に行われたと考えられる。

改修の特徴

３～４期にかけては，操業面が後世の造成で削平を受けた部分が多く不明瞭であるが，３・４期のたたら操業面は同一であったと想定される。その一方，４期の床釣りは３期の床釣りを削って構築された造り替え痕跡が土層堆積状況などから確認できる。たたら操業面は３期と同一であるほか，その他の製鉄関連施設も３期のものを引き継ぎ，４期に床釣りのみが改修されたと考えられる。

３　越堂鈩の改修とその背景

このように，長期間操業された越堂鈩は，複数の造り替えが行われていたことが発掘調査で明らかになり，その時期や特徴も確認できた。こうした各時期の改修とその背景について，田儀櫻井家の経営時期や文献史料などの越堂鈩を取り巻く当時の状況が把握できる情報から総合的に検討する。

（１）１～２期の高殿改修の背景

１期は田儀櫻井家が経営に携わる以前の時期であり，推定操業年代は 17 世紀末から 18 世紀中頃である。智光院文書[(1)]によると，1745（延享２）年には越堂鈩山内が形成されていることが示されており（鳥谷 2004），たたら場の操業が行われていたことが想定される。

続く２期の推定操業年代は，18 世紀中頃から 19 世紀初頭頃と考えられ，１～２期の高殿の改修が行われた時期は 18 世紀中頃の可能性がある。田儀櫻井家は 1771（明和８）年に石見国横道村の弥平太から越堂鈩を買い請けたと考えられているが，田儀櫻井家の名義による操業は 1769（明和６）年からであり（鳥谷 2008），1769 年以前から田儀櫻井家が越堂鈩の経営に携わっていた可能性が指摘されている（藤原 2009）。

このように，１～２期は越堂鈩の経営体制が大きく転換する時期であるが，こうした経営体制をめぐる変化が２期の高殿を構築した契機になったことが可能性の一つとして想定できよう。田儀櫻井家のたたら製鉄経営は，越堂鈩の経営に参画する前には，本拠地の宮本鍛冶屋を中心とする山間部のたたら場を中心に経営していた。そこに日本海沿岸に位置する越堂鈩を経営に組み込むことで，田儀櫻井家を特徴づける山間部と海岸部のたたら場の同時経営を実現することになり，それ以降，越堂鈩は田儀櫻井家の製鉄経営の基幹たたら場として，近隣の田儀浦の海運と連携して発展することになる。

こうして田儀櫻井家の基幹的なたたら場となる越堂鈩の鉄生産量は，それ以前よりも増大したことは想像に難くなく，鉄生産の拡大やそれに伴う設備の拡充などでたたら場の改修が必要になったことが推測され，それが１～２期の高殿の造り替え痕跡として示されている可能性が考えられる。

（２）２～３期の高殿改修の背景

３期の推定操業年代は 19 世紀初頭から中頃であったと想定され，２～３期に行われた高殿の改修

時期は 19 世紀初頭頃の可能性が考えられた。田儀櫻井家が越堂鈩の経営を行っていた時期にあたり，そのなかで改修が行われたと判断できる。先述したように，既に構築されていた２期の操業面上に全面的な盛土が施され，２期の自然石の高殿石垣の上に切石を増し積みして３期以降の新たな高殿石垣を構築しており，全体的にかさ上げを行って造り替え痕跡が明らかになった。

この２～３期における高殿の改修の背景として，高殿内部の老朽化などに伴い補修や修繕の必要性が生じたことも考えられるが，２期の操業面や遺構がそのままの状態で残されるほか，それらを覆うように盛土がなされ，また高殿石垣をすべて積み直すのではなく，古い石垣の上に新しい石垣を増し積みして高殿南面石垣外側では盛土で古い石垣を埋没させるなど，２期と同じ場所において高殿全体の刷新が早急に行われたという印象が強い。

ここで田儀櫻井家文書[(2)]に記された内容を見ると，1805（文化２）年に越堂鈩で火事が起こったことが記されている（鳥谷 2004）。このなかでは，たたら場の操業に伴う炎が北風や強風により高殿の屋根に燃え移り，炭小屋も類焼して両施設が全焼した様子が具体的に記されている。この頃には，越堂鈩は田儀櫻井家の基幹的なたたら場として鉄生産の主力であったと推測され，越堂鈩の高殿の焼失によって田儀櫻井家のたたら製鉄経営全体に大きな影響を及ぼすことは想像に難くなく，速やかに越堂鈩の操業を再開させる必要に迫られたことは十分に予想される。それ相応の時間や労力をかけて高殿を別の場所に打ち替える選択肢もあったと思われるが，近接する田儀港への流通や，田儀櫻井家の本拠地である宮本鍛冶屋への産鉄供給などの諸条件も考慮に入れると，２期までの高殿の場所と同じ位置でたたら場を再開することが最も効率的かつ経済的であり，早急に越堂鈩の操業が再開できる目途が立つ手法であったと考えられる。こうした越堂鈩を取り巻く経済的・地理的状況が，２～３期における高殿の改修の背景にあったと推測されよう。

（3）３～４期の改修の背景

４期の推定操業年代は，床釣りの息抜き穴に土管が使用されていることから，19 世紀中頃から後半頃に比定できる。３・４期のたたら操業面は同一で床釣りのみが４期に改修されたことが確認できた。可能性としては，19 世紀初頭頃に構築された３期の床釣りが半世紀を経て老朽化したことに伴い，床釣りの改修が必要になったことが想定される。

その他，この頃に一度東京蓬莱社の所有になるなど経営体制が変化しており（藤原 2009，第６章第１節），その影響が考えられるほか，生産体制の変化に伴う床釣りの再構築が可能性の一つとして挙げられる。４期の床釣りは，３期と同じ位置に本床を設けて小舟の甲の高さも同じ位置であるが，４期の小舟は３期よりも本床側に近接した位置で造られており，小舟の配置に若干の変化が生じている。こうした床釣り構造の変化が具体的にどのような効果として鉄生産に表れるのかは明確ではないが，４期の 19 世紀後半頃は，主な販売主品目が稲扱になるなど（第６章第３節），取扱品目に変化が生じていたことが予想される。推測の域を出ないが，越堂鈩で生産する銑鉄の品質を主要な取扱品目に対応させるための施策の一つとして，床釣りの改修が行われたと捉えることもできるだろう。

いずれにしろ，長期間操業による既存の経済的・地理的背景を維持し，それまでのたたら場の諸機能を最大限に活用するために，同一場所で従来の床釣りを改修する手法が選択されたと推測される。

4　長期間操業した海岸部・山間部のたたら場とその様相

これまでの検討から，約 150 年間もの長期間操業された越堂鈩では，高殿や床釣りの改修が複数時期に認められ，各時期の改修要因や背景は多岐にわたることが推察できた。ここで，他の地域で長期間操業された具体的な事例として，海岸部における恵口鈩（島根県江津市川平町）と山間部の宇根鈩（島根県仁多郡奥出雲町）を取り上げ（第 108 図），越堂鈩の改修とその特質を明確にしていきたい。

（1）恵口鈩にみる複数の高殿経営

恵口鈩は，江の川沿いの沿岸に所在して浜田藩領に立地し，浜田藩が 1772（明和 9）年に藩営炉として設け，1890（明治 23）年まで約 120 年間にわたって操業した石見国の日本海沿岸部のたたら場である（江津市誌編纂委員会編 1982，榊原 2014）。江の川によって日本海および山間部とつながり，河川を経由した物資輸送や産鉄の搬出に適した地理的条件を備えている。

恵口鈩の発掘調査は実施されておらず，遺構の残存状況などの詳しい実態は不明である。一方で，注目されるのは，山内のなかに複数の高殿（本鈩・添鈩）が設けられていた可能性がある点である（第 109 図）。平面形から見ても本鈩と添鈩の高殿形態は異なるが，本鈩が造られた後に添鈩が設けられた状況が指摘されており（榊原 2014），そのなかで，恵口鈩では本鈩と添鈩が同時に操業していた可能性が想定されている[(3)]。同一場所での複数の高殿経営は，恵口鈩の産鉄量の増産を目的としていたことが考えられるほか，他の場所へのたたら場の増設や打ち替えを選択せずに，恵口鈩で複数の高殿を設ける方式でそれまでの地理的条件を維持し，物資流通や産鉄搬出を維持しようとした意図もその背景にあったと思われる。

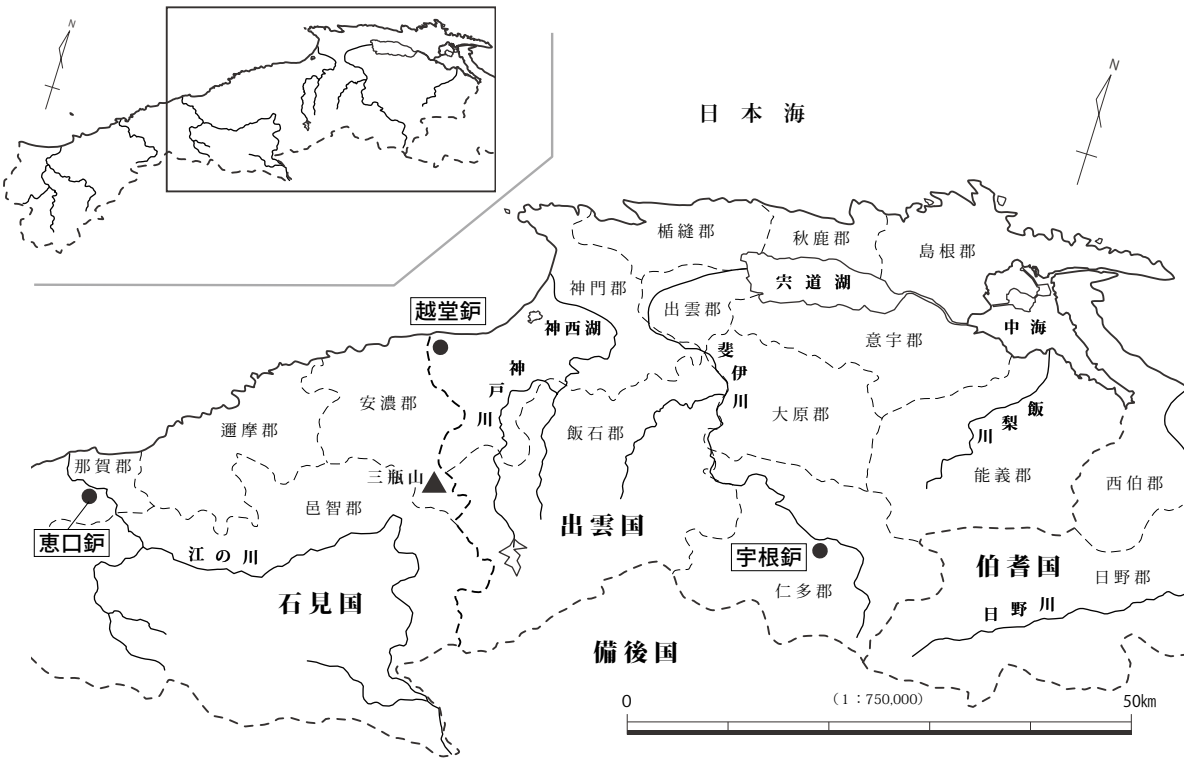
恵口鈩の状況は，同一場所で高殿のかさ上げによる改修を行う越堂鈩の様相とは異なるが，同一場所でたたら製鉄経営を存続させる背景は共通しており，長期間の操業が行われたと考えられる。

（2）宇根鈩の床釣りの造り替え

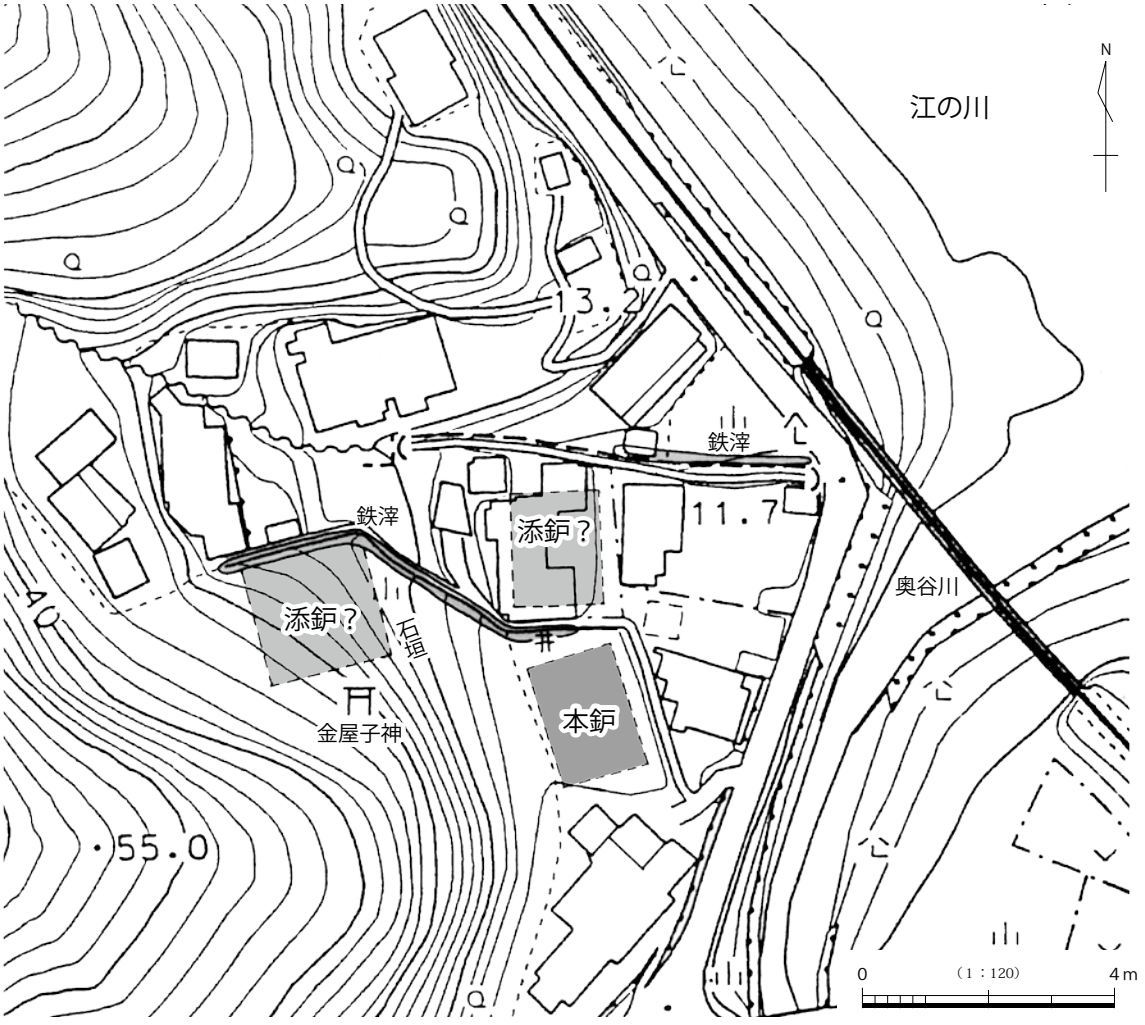
宇根鈩は，田儀櫻井家の本家である櫻井家によって営まれた山間部のたたら場である。櫻井家の拠点的なたたら場として 1775（安永 4）年から 1909（明治 42）年まで約 130 年間もの長期間にわたり同一場所で継続的に操業したことが知られ，また文献史料からは 1735（享保 20）年から 1775 年にかけて 2 回の移転を含めて断続的に稼働した状況が記されているため，それを含めると宇根鈩は約 170 年以上も操業したことが考えられる（杉原編 1996）。

宇根たたら跡は発掘調査によって床釣りが見つかり，そのなかで床釣りの造り替え痕跡が確認され，複数時期に大規模な改修が 3 回実施された状況が明らかにされたほか，文献史料からみた操業代数の減少によって 1775 年以降で 3 回の改修時期を推定している点が注目される[(4)]（杉原編 1996）。発掘調査で判明した床釣りの改修内容と推定時期を照らし合わせると第 34 表のように整理でき，別の場所に新しい床釣りを構築し直すのではなく，既存の下床釣りの機能を活かしながら，新しい時期に本床釣りのみを改修する様子が確認できる（第 110 図）。

この状況は，越堂たたら跡の発掘調査で確認した 4 期の床釣りの改修状況と類似し，越堂たたら跡では 3 期と同一のたたら操業面で床釣りのみを 4 期に造り替えた痕跡が具体的に判明している。越堂



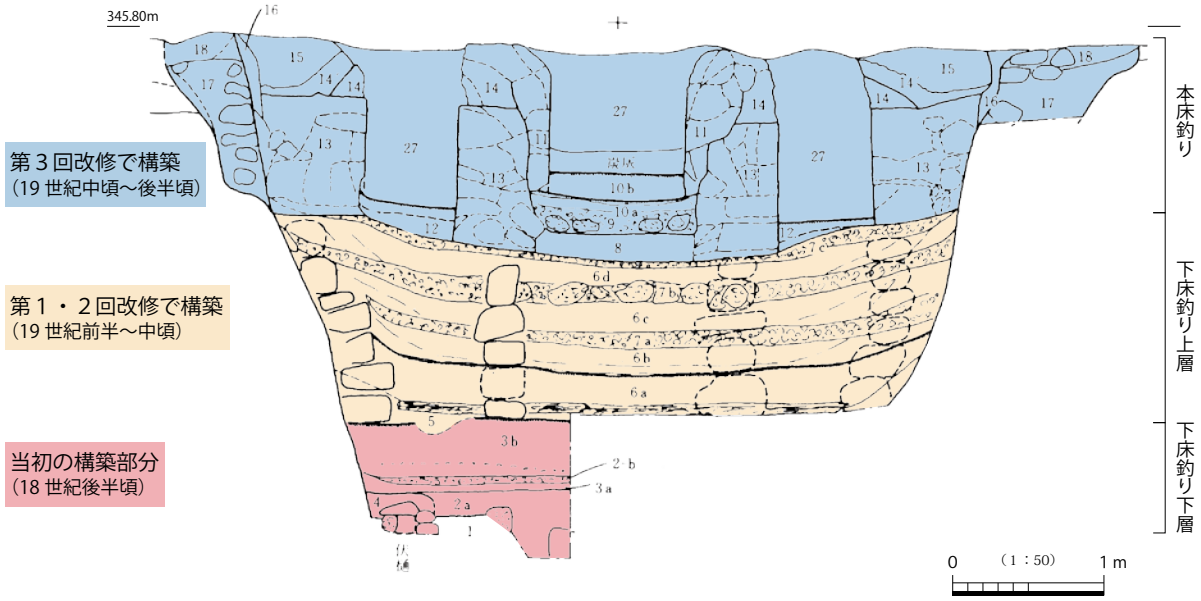
第 108 図　越堂鈩・恵口鈩・宇根鈩の位置



第 109 図　恵口鈩の本鈩・添鈩の想定配置図（榊原 2014 をもとに作成）

第 34 表　宇根鉾の床釣り改修の特徴と推定時期（杉原編 1996 をもとに作成）

	推定時期	改修内容	残存部分
第３回改修	19 世紀中頃～後半頃	本床釣り改修（本床・小舟構築）	本床釣り（本床・小舟）
第２回改修	19 世紀前半～中頃	下床釣り上層まで改修（支柱石設置）	下床釣り上層（支柱石）
第１回改修		下床釣り上層まで改修	―
当初の構築	18 世紀後半頃	―	下床釣り下層（伏樋・息抜き穴？）



第 110 図　宇根鉾の床釣りの改修状況（杉原編 1996 をもとに作成）

鉾と同様，宇根鉾でも高殿や床釣りを移転せずに同一場所で改修を行い継続的に操業することで，既存の経済的・地理的基盤を維持でき，なおかつ既存のたたら場の諸機能を活用できるため，経営戦略のなかで大きな利点を生み出すと考えられる。

また，通常宇根鉾のように山間部に営まれるたたら場は，周辺に製鉄の原材料となる砂鉄や木炭が枯渇すると，新たな資源を求めてたたら場を移転させる経営手法が一般的であるが，有力鉄師の基幹的なたたら場では，資源や産鉄の流通などの諸条件が整えば，海岸部のたたら場と同様に長期間操業を行っていた点が注目されよう。

5　長期間操業からみた越堂鉾の位置づけ

これまで越堂たたら跡で確認された各時期の造り替え痕跡の特徴を検討し，その背景についても推察するとともに，長期間操業された他のたたら場（恵口鉾・宇根鉾）の具体的な状況を検討した。ここではその内容を整理しつつ，高殿・床釣りの改修から見えてくる越堂鉾の位置づけについて，総合的に考察したい。

（1）越堂鉾の改修と長期間操業

越堂鉾の１～２期の高殿の改修内容は明確ではないが，越堂鉾の経営主体が田儀櫻井家に転換することで，生産体制が拡大したことが背景の一つにあると推測され，２～３期の高殿の改修は，火災により高殿が焼失したために早急に高殿を復旧してたたら場の操業を再開させる必要性が生じたと考え

られる。また，３～４期には床釣りのみが改修されており，床釣りの老朽化による改修の可能性のほか，経営主体や取扱品目の変化による生産体制の変容も要因として想定可能であった。

越堂鈩の各時期の改修に共通するのは，高殿の別場所への移転や高殿・床釣りの抜本的な造り直しではなく，同一場所での高殿の再構築や既存の床釣りの改修が行われていることである。長期間操業のなかでそれまでの経済的・地理的基盤を維持しつつ，既存のたたら場の機能を最大限に活かすことで，改修に伴う影響を最小限に抑えてたたら製鉄経営の安定化を志向したことが読み取れる。

（2）恵口鈩と宇根鈩における長期間操業

こうした長期間操業を志向した様相は，石見国における日本海沿岸部の恵口鈩や，出雲国の山間部の宇根鈩などでも確認できた。

恵口鈩では，高殿や床釣りの改修ではないが，たたら場のなかに複数の高殿を設けて同一場所で安定した長期間の操業を実現しており，たたら場の増産を志向しながらも，それまでの江の川による物資流通や産鉄搬出を維持しようとした意図も背景にあることが推測された。

宇根鈩は，山間部のたたら場に多い短期間での移転を行わず，複数回による同一の床釣りの改修によって既存の床釣りを含むたたら場の諸機能を継続して活用することで，櫻井家の基幹的なたたら場として長期間操業が行われている。

（3）長期間操業にみる田儀櫻井家の製鉄経営と越堂鈩

これまで見てきたように，たたら場を長期間操業するためには，たたら場を取り巻く状況や鉄師の経営体制によって様々な方法が試みられていたが，同一場所においてそれまでの経済的・地理的基盤を維持してたたら製鉄を長期間操業しようとした意向は共有して読み取れた。

ここで出雲国の鉄師によるたたら場の稼働期間の様相（角田 2014）を俯瞰すると，山間部を拠点とした田部家や櫻井家，絲原家でたたら場の長期間操業が行われるようになるのは，共通して 18 世紀中頃から後半頃であり，それまで山間部のたたら場を操業していた田儀櫻井家が本格的に海岸部の越堂鈩の経営に乗り出すのもこの頃である。

こうした 18 世紀中頃から後半頃のたたら場の長期間操業は，出雲国におけるたたら製鉄経営の一つの転換期を示していると推測され，出雲国内での広域的な経営戦略として主力のたたら場を設けて長期間操業する経営手法が確立し，田儀櫻井家は越堂鈩を基幹的なたたら場として位置づけて生産体制を強化したことが想定される[(5)]。よって今回の越堂たたら跡の発掘調査で確認された複数時期の高殿・床釣りの造り替え痕跡は，日本海沿岸部に基幹的なたたら場を設けて生産拠点とし，長期間にわたり同一場所で操業を安定させて鉄生産を維持・拡大しようとした田儀櫻井家の製鉄経営の方向性を具体的に示していると考えられよう。

（幡中光輔）

註

（1）智光院文書（智光院文書・整理番号 9）（相良監修 2009）には，越堂鈩山内労働者の名が記されている。

（2）田儀櫻井家文書（年々見合帳・整理番号 a 3-10）（相良監修 2009）は，田儀櫻井家から松江藩宛てに出された「願書」や「届出」，藩から田儀櫻井家への「通達」などの「控」が中心となっている（庄司 2009）。

（3）榊原博英氏は，「明治二年旧浜田藩引継約款」の鈩吹運上で銑押炭木（恵口鈩2箇所）と記された内容（鳥谷2014）に注目し，近世から近代にかけて2基の高殿があった可能性が想定されている。

（4）床釣りが改修される時期はたたら場の操業ができないため，その時期には操業代数が減少するとの想定をもとに，改修時期が推定されている。

（5）田儀櫻井家の本拠地である宮本鍛冶屋が全焼した1882（明治15）年にも，宮本鍛冶屋と越堂鈩を操業することにより再建を図ろうとしており（鳥谷2004），越堂鈩は田儀櫻井家のたたら製鉄経営の終盤期まで継続して重要なたたら場であったことが推測できる。

参考文献

柿田富造 1992「[土管] 使用の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　3～29頁

角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂

江津市誌編纂委員会編 1982『江津市誌』下巻　江津市

榊原博英 2014「石見国那賀郡の近世末から近代のたたら製鉄―遺跡分布と高殿平面形の比較を中心にして―」『古代文化研究』第22号　島根県古代文化センター　27～73頁

相良英輔監修 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8　出雲市教育委員会

庄司幸恵 2009「解題　田儀櫻井家文書」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8　出雲市教育委員会　193頁

杉原清一編 1996『宇根たたら跡』仁多町教育委員会

鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　19～38頁

鳥谷智文 2008「掛樋・越堂・聖谷たたらの文献調査」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成16～18年度の調査―』出雲市の文化財報告1　出雲市教育委員会　106～111頁

鳥谷智文 2014「石見地域における工業生産物の特徴と盛衰について―たたら製鉄業の盛衰と地域の変貌―」『山陰地方における地域社会の存立基盤とその歴史的転換に関する研究』2011年度～2013年度島根大学重点研究プロジェクト研究成果報告書　21～43頁

鳥谷智文 2017「たたら経営に携わる人々の特質―田儀櫻井家を事例として―」『たたら研究　特別号（60周年記念論文集）』たたら研究会　137～151頁

藤原雄高 2009「田儀櫻井家の鈩・鍛冶屋の変遷」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8　出雲市教育委員会　101～113頁

第２節　越堂たたら跡出土砂鉄の時期的変遷と砂鉄流通の展望

１　はじめに

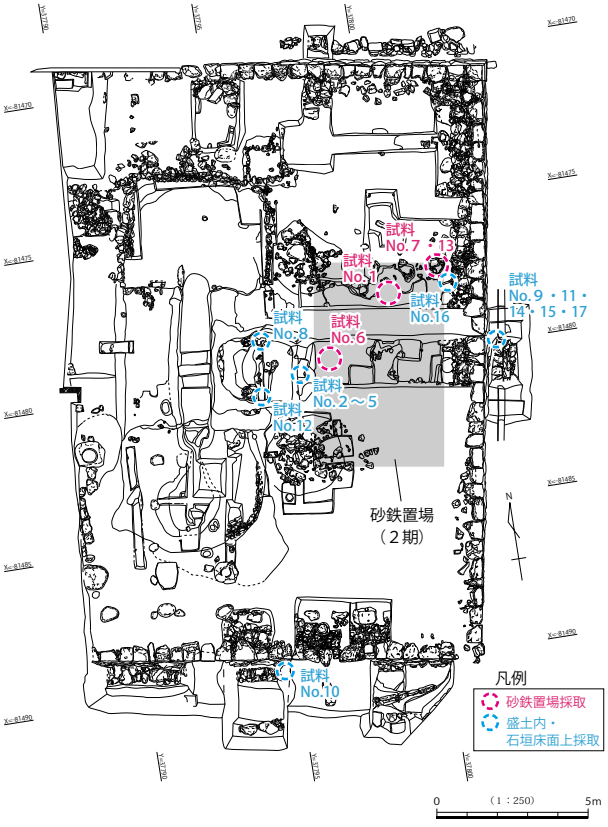
越堂たたら跡の発掘調査で複数の操業時期が確認でき，各時期（越堂鈩操業１～４期）の操業面や遺構が認められた。２期の操業面の砂鉄置場において砂鉄が残存していたほか，それぞれの時期の盛土などに伴う砂鉄が複数の地点で確認されており，各時期のたたら操業で使用した砂鉄である蓋然性が高いと判断される。第５章第２節では，越堂たたら跡の各地点で採取した砂鉄試料（第 35 表・第 111 図）の磁鉄鉱の形態分析と化学組成分析が実施され，それぞれの砂鉄試料の特徴が具体的に明らかになった。また，朝日たたら跡の砂鉄置場の試料も同様の分析が行われ，砂鉄試料の特徴が示された。

第５章第２節の砂鉄分析は，各砂鉄試料における磁鉄鉱 20 粒以上を対象に，磁鉄鉱に含まれる 10 成分の含有量の割合を示している。そのなかで有意な変化を示すアルミニウム（Al_2O_3），ケイ素（SiO_2），チタン（TiO_2）の３成分を取り上げ，各試料で測定した 20 粒の成分分布について，３成分の含有量の比率をもとにした三角ダイアグラム（第 112 図）が示されている。

ここでは，今回の砂鉄分析で明らかになった越堂たたら跡・朝日たたら跡における砂鉄試料の化学組成分析の成果（第５章第２節第 88 図）を援用して，試料間の比較検討や越堂鈩操業１～４期のなかでの時期的変遷から見えてくる当時の砂鉄流通の様相について検討を行うことにしたい。

第 35 表　越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄採取地点

遺跡名	試料№	採取地点	時期
越堂たたら跡	1	B 区北側 tr 砂鉄置場上面	2 期
	2	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内	1~2 期
	3	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内	2~3 期
	4	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内	2~3 期
	5	A・B 区東西横断 tr 東壁盛土内	1~2 期
	6	A・B 区東西横断 tr 砂鉄置場上面	2 期
	7	C 区 1tr 砂鉄置場上面	2 期
	8	A・B 区東西横断 tr 北壁盛土内	~1 期
	9	東面石垣外側 tr 石垣床面上面	2 期
	10	高殿南 4tr 盛土内	3~4 期
	11	東面石垣外側 tr 盛土内	3~4 期
	12	A・B 区東西横断 tr 南壁盛土内	~1 期
	13	C 区 1tr 砂鉄置場・炭置場間区画石列付着	2 期
	14	東面石垣外側 tr 盛土内	3~4 期
	15	東面石垣外側 tr 盛土内	3~4 期
	16	C 区 1tr 南壁盛土内	2~3 期
	17	東面石垣外側 tr 石垣床面上面	2 期
朝日たたら跡	18	出土地不明（砂鉄置場？）	1~2 期頃
	19	小金町（砂鉄置場）	1~2 期頃



第 111 図　越堂たたら跡の砂鉄置場と砂鉄採取地点

2　越堂たたら跡・朝日たたら跡出土砂鉄の推定時期

（1）越堂たたら跡の砂鉄試料

越堂たたら跡の砂鉄試料（第3章第5節第68図229～231など），2期の砂鉄置場上や高殿石垣床面上のほか，高殿内外の盛土内から採取されている（第5章第2節第84図）。各採取地点は越堂鈩操業1～4期と対応しており，それらを朝日たたら跡の砂鉄試料とともに第35表にて整理し，さらに時期別に区分して推定時期を示した（第36表）。ここではその内容を簡潔にまとめる。

1期以前の砂鉄試料

砂鉄試料No. 8・12は，1期の硬化面を形成する高殿内の盛土内から採取した。そのため，確実ではないが，1期以前のたたら操業に伴う砂鉄の可能性がある。

1～2期の砂鉄試料

砂鉄試料No. 2・5は，高殿内の1期の硬化面上における1～2期の盛土から採取した。盛土は2期のたたら操業面を形成しており，1～2期にかけてのたたら操業で用いられた砂鉄であろう。

2期の砂鉄試料

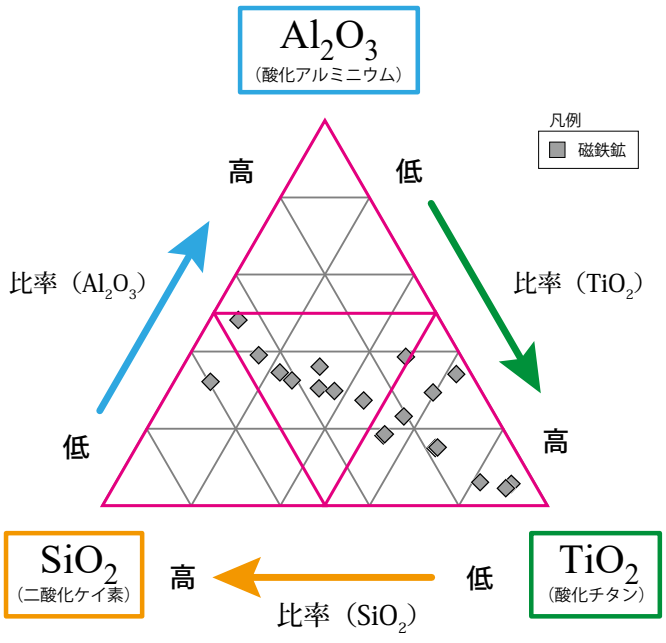
砂鉄試料No. 1・6・7・9・13・17は，2期のたたら操業に伴う砂鉄試料であり，砂鉄試料No. 1・6・7・13は2期の砂鉄置場上に残存していた砂鉄を採取した。砂鉄試料No. 9・17は東面石垣外側トレンチのなかで，1～2期の盛土上面に構築された2期の高殿石垣床面から採取した。

2～3期の砂鉄試料

砂鉄試料No. 3・4・16は，高殿内の2～3期の盛土から採取しており，2～3期のたたら操業に伴う砂鉄である。砂鉄試料No.16は，2期のたたら操業面に近い位置の盛土で確認されている。

第36表　砂鉄試料の推定時期

砂鉄試料 No.	推定時期	
8・12	越堂鈩 操業1期以前	17世紀末以前 ～18世紀中頃
2・5	越堂鈩 操業1～2期	
1・6・7・9・13・17	越堂鈩 操業2期	18世紀中頃 ～19世紀初頭
3・4・16	越堂鈩 操業2～3期	
10・11・14・15	越堂鈩 操業3～4期	19世紀初頭 ～後半頃
18・19	朝日鈩	18世紀前半 ～中頃



第112図　磁鉄鉱の3成分の三角ダイアグラム

３～４期の砂鉄試料

砂鉄試料 No.10・11・14・15 は，高殿外側の３～４期の盛土内で確認され，砂鉄試料 No.10 は高殿南４トレンチ，その他は東面石垣外側トレンチの盛土から採取している。これらは概ね３～４期にかけてのたたら操業の砂鉄試料と判断できる。

（２）朝日たたら跡の砂鉄試料

朝日たたら跡の砂鉄試料 No.18・19（第 113 図）は，佐田町教育委員会によって 1982（昭和 57）年に高殿の発掘調査が行われ，砂鉄置場の柱穴内から砂鉄を採取したことが報告されている（1）（杉原ほか編 1983）。朝日鈩の正確な操業年代は不明であるが，出土した陶磁器や文献調査，床釣り内での考古地磁気の分析結果などにより，18 世紀前半から中頃の操業時期が想定されている（杉原ほか編 1983）。当時この周辺にたたら場や鍛冶屋を設けてたたら製鉄を営んだ田儀櫻井家が経営するたたら場の一つであったと想定され，概ね越堂鈩操業１～２期と同じ時期に稼働したと想定される。

３　越堂たたら跡・朝日たたら跡の磁鉄鉱成分の時期的変遷

これまでに確認してきた越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄試料の時期をもとに，磁鉄鉱成分における化学組成の三角ダイアグラムの時期的変遷を示した（第 114 図）。この時期的な変遷から読み取れる内容について，これまでの文献史料の調査成果（第６章第２節）などを含めて検討を進めたい。

（１）１期以前・１～２期の磁鉄鉱成分の検討

越堂たたら跡における１期以前の砂鉄試料 No. ８・12 は，アルミニウムの含有比率もある程度は認められる一方，チタンの含有比率が高い。１期やそれ以前は田儀櫻井家が越堂鈩を経営する以前の時期であり，その当時におけるたたら場の操業で使用された砂鉄の特徴を示している。この頃の操業の実態は不明であるが，田儀櫻井家の経営時期に日本海沿岸地域の流通網によって砂鉄を調達していたように（第６章第２節），田儀浦の海運により他地域から運び込まれた砂鉄を用いてたたら操業を行っていた可能性がある。また，１～２期の砂鉄試料 No. ２・５の成分も一定程度アルミニウムの含有比率が認められるもののチタンの含有比率が高く，１期以前と同質であった可能性が高い。

朝日たたら跡の砂鉄試料 No.18・19 は，越堂鈩操業１～２期に比定できるため，越堂たたら跡砂鉄試料 No. ２・５と同時期に用いられた砂鉄であると考えられる。その成分分布を見ると，アルミニ

（砂鉄試料 No.18）　（砂鉄試料 No.19）

第 113 図　朝日たたら跡の砂鉄試料 No.18（左）・No.19（右）

ウムの含有比率が高いことが分かり，越堂たたら跡の砂鉄試料の成分分布とやや異なる状況が読み取れる。朝日鈩は，田儀櫻井家が山間部で経営するたたら場の一つであったと考えられ，朝日鈩周辺の山間部および河川などで採取した砂鉄を用いてたたら場操業が行われたことは想像に難くなく，その操業に伴う砂鉄と考えられる。

これら同時期の越堂たたら跡と朝日たたら跡の成分分布の差異は，海岸部で他地域から搬入した砂鉄と山間部やその周辺の河川などに由来する砂鉄という違いに起因すると想定され，海岸部と山間部のたたら場で使用された砂鉄が異なっていたことを具体的に示している可能性がある。

（2）２期の磁鉄鉱成分の検討

２期の砂鉄試料は，越堂たたら跡の砂鉄置場と高殿石垣床面から採取した砂鉄試料である。砂鉄置場の砂鉄試料 No. 1・6・7・13 は，それぞれ異なった地点から採取したが，各砂鉄試料の成分分布はチタンの含有率が高いほか，一定程度アルミニウムの含有比率も認められる傾向が共通する。

文献史料では，18 世紀後半頃に因幡国や伯耆国，石見国の浜田藩領などの様々な地域から砂鉄を搬入していたことが知られ[(2)]，越堂鈩の２期は各地域の砂鉄が使用されたことが考えられるが，成分分布は共通している点が注目される。こうした状況は，良質な銑鉄などを越堂鈩で安定して産出するために，同質の砂鉄を特定の産地から選定して安定的に搬入したことを想起させ，それが２期の砂鉄置場において複数地点で採取した砂鉄試料の成分分布が共通する点に示されていると推察できる。

（3）２～３期の磁鉄鉱成分の検討

２～３期の砂鉄試料を見ると，チタンの含有比率の割合が高いが，その一方で３成分がまばらに分布する傾向があり，２期の砂鉄試料の様相と類似しながらもやや異なる成分分布の状況を示している。そのため，２期の操業で用いた砂鉄とは異なる産地から搬入した砂鉄も存在したことが想定される。

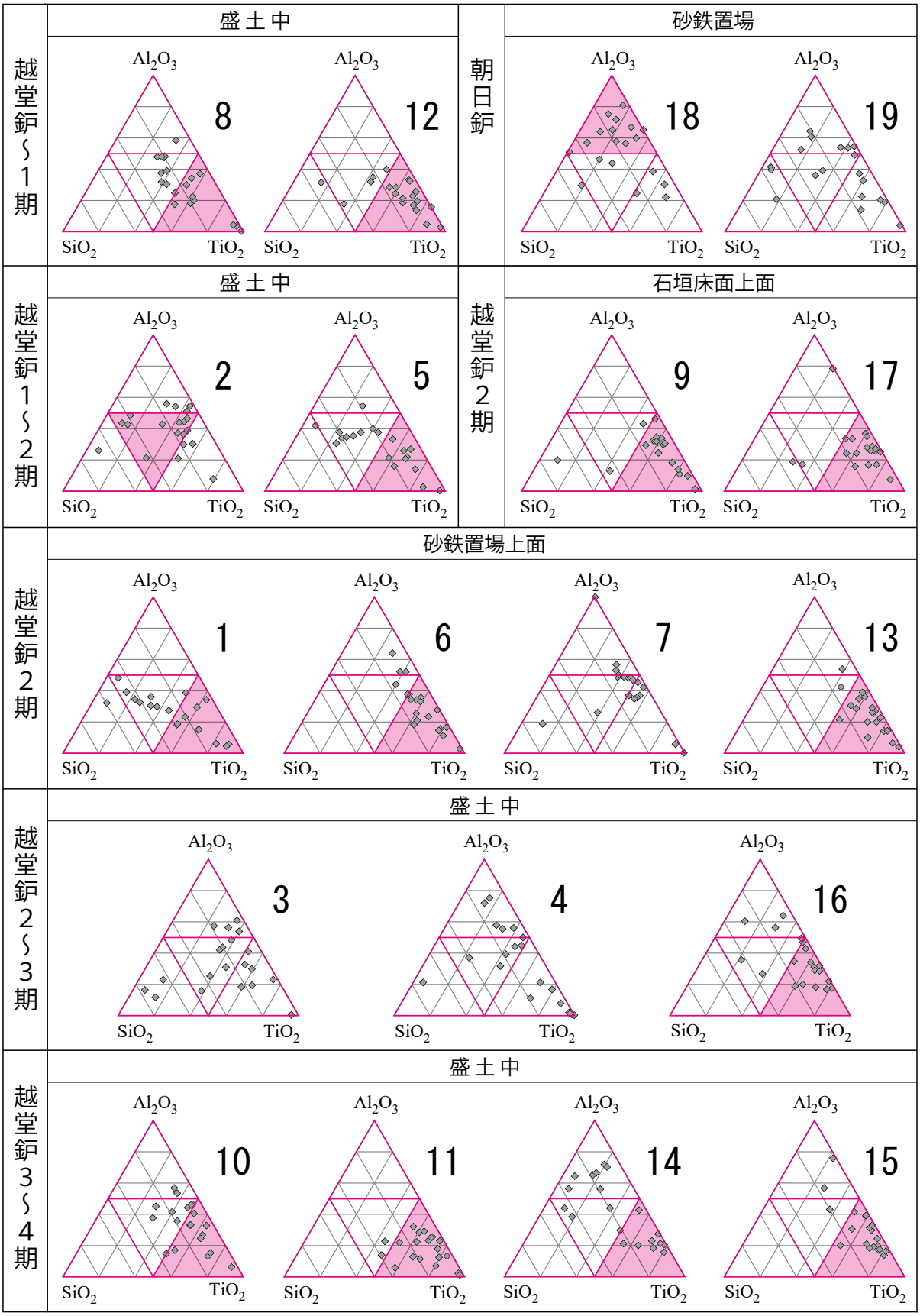
この状況を推察するためには，第６章第２節で明らかにされた田儀櫻井家の砂鉄輸送の様相が重要になってくる。19 世紀前半頃にそれまでの砂鉄の供給元であった石見国浜田藩領の日脚村からの搬入が困難となり，その砂鉄と同質の砂鉄が出雲国神門郡西園村で採取できる見込みがあるとして砂鉄採取を願い出たとみられる状況が示されている。また 19 世紀前半には，田儀櫻井家が越堂鈩に比較的近い赤松鉄穴を再開発することを松江藩に願い出ており（『久村の歴史』編集委員会編 2011），この時期はそれまでの越堂鈩を取り巻く砂鉄流通の状況に変化が生じた時期であった可能性が高い。

19 世紀前半は概ね３期頃に比定でき，それ以前の時期と同質の砂鉄を別の産地から調達しようとした状況が文献史料から窺えるとともに，それまでと同質だが産地が異なる砂鉄を搬入した状況が，やや異なる成分分布の様相に反映されていると捉えることもできよう。

（4）３～４期の磁鉄鉱成分の検討

越堂たたら跡における３～４期の砂鉄試料の成分分布は，チタンの含有比率が高くなり，アルミニウムの含有も一定程度認められる。これらの試料の成分分布は，概ね２期以前の成分分布の状況と類似していると判断できる。

19 世紀中頃から後半期にあたる４期の越堂鈩に関する砂鉄流通の全体的な様相は不明であるが，19 世紀後半には伯耆国から購入していたことが判明している（目次 2009）。確実ではないが，成分



※網掛け：三角ダイアグラムの４区分のなかで成分分布が 1/2 以上集中する範囲

第 114 図　越堂たたら跡・朝日たたら跡の磁鉄鉱成分の三角ダイアグラムと時期的変遷

分布を見る限り，伯耆国をはじめとする２期以前と一部で共通した産地から同質の砂鉄を搬入しており，この時期の越堂鈩のたたら操業で使用していた状況を考えることができる。

4　越堂鈩におけるたたら操業と砂鉄流通の展望

これまで検討してきたように，越堂たたら跡で採取した砂鉄を発掘調査の成果を踏まえて時期別に整理し，また磁鉄鉱の化学組成分析（第５章第２節）や文献史料の調査成果（第６章第２節）などを踏まえて総合的に考察することで，越堂鈩をめぐる砂鉄流通の時期的な変遷が具体的に想定可能になった。ここでは，これまでの検討内容を整理し，越堂鈩の砂鉄流通を展望したい。

越堂鈩では製鉄の原材料となる砂鉄を他地域から搬入しており，特に１期以前や１～２期，２期は概ね磁鉄鉱の成分分布が類似することから，特定の産地から同質の砂鉄を確保していた状況が想定され，それは文献史料からも把握できた。

その一方で，２～３期の磁鉄鉱の成分分布は他の時期とやや異なっており，それまでの砂鉄流通に変化が生じた可能性が考えられた。その状況は，既存の砂鉄と同質の砂鉄をそれまでとは異なる産地から搬入してたたら操業を継続しようとした様子が記された文献史料の内容と符合する。

そして３～４期は，再び２期以前と類似した磁鉄鉱の成分分布を示すようになり，２期以前と一部で共通した産地に由来する同質の砂鉄を用いてたたら操業を行っていた状況が垣間見える。

このように整理すると，越堂鈩の操業では，田儀櫻井家の経営以前から可能な限り特定の産地から同質の砂鉄の安定的な確保を志向した姿が具体的に把握できよう。海岸部に位置する越堂鈩は，他地域からの製鉄の原材料を搬入することでたたら操業が成り立っていた部分が大きく，田儀櫻井家における越堂鈩の製鉄経営にとって砂鉄流通の安定化が大きな課題であったことは想像に難くない。

越堂鈩の産鉄は 19 世紀前半には山間部の吉原鈩と共にかなりの産鉄量を誇っており（第７章第３節），19 世紀前半の３期頃に田儀櫻井家が越堂鈩に供給する砂鉄の確保に尽力した様子が文献史料や今回の検討のなかで確認できたが，その結果として良質かつ大量の銑生産が越堂鈩で実現でき，田儀櫻井家の基幹的なたたら場としての役割を担うことが可能になったと考えられよう。　　（幡中光輔）

註

（１）発掘調査で採取されたと考えられる砂鉄が，製鉄関連遺物などの出土遺物を収蔵したコンテナのなかに保管されていた。調査当時の記載情報から，高殿内の小金町（砂鉄置場）で採取されたと考えられる。

（２）田儀櫻井家文書・整理番号 a3-9（相良監修 2009）には，1784（天明４）年において因幡国や伯耆国のほか，石見国の浜田藩領から砂鉄を入手していたことが記されている。

参考文献

『久村の歴史』編集委員会編 2011『久村の歴史』久村地区連合自治会

相良英輔監修 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告８　出雲市教育委員会

杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鈩』佐田町教育委員会

目次謙一 2009「[鉄穴再興願] について」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告８　出雲市教育委員会　97 ～ 99 頁

第３節　田儀櫻井家のたたら経営と越堂鈩

１　たたら経営の展開

（1）たたら経営の開始

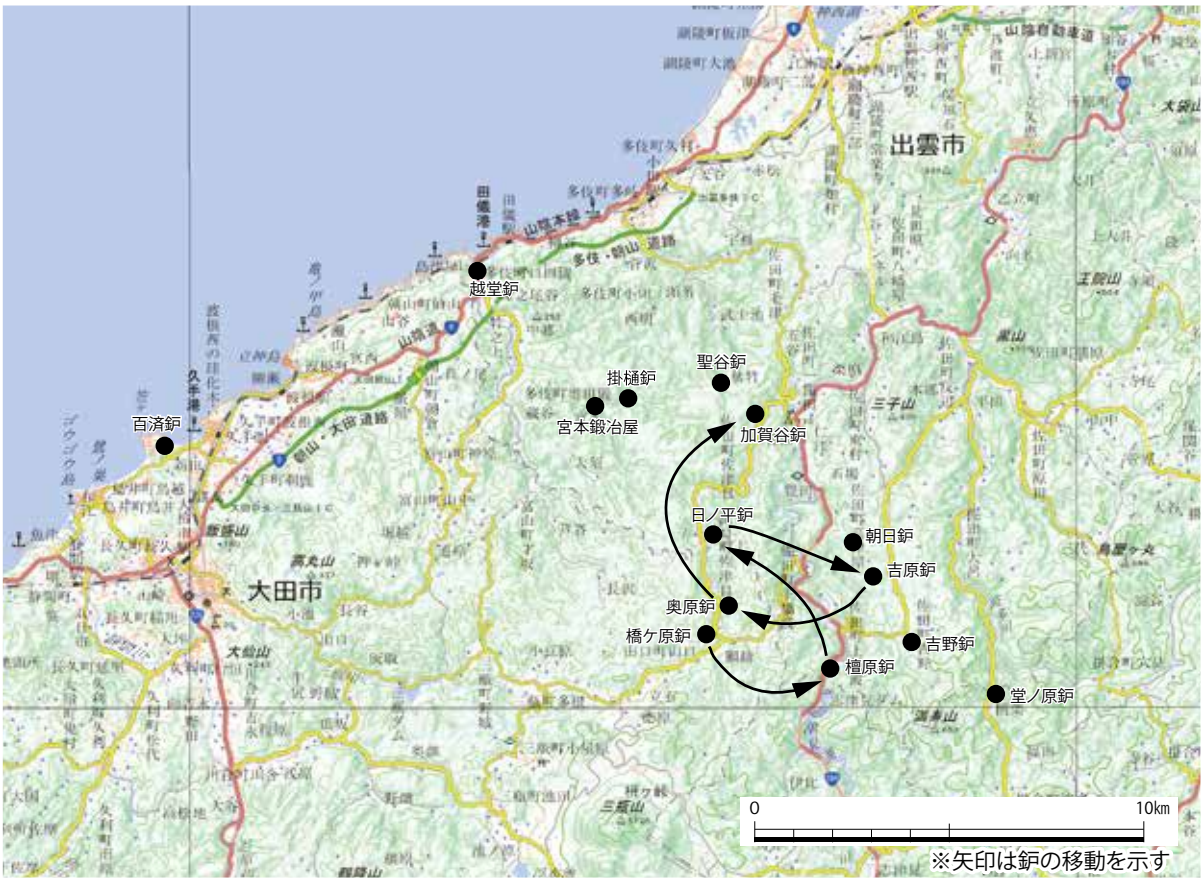
田儀櫻井家は，日本海沿岸部に立地する越堂鈩（海のたたら）と神戸川中流域を中心に山間部を移転しながら操業する鈩（山のたたら）を経営の両輪とした。本宅が置かれた宮本鍛冶屋は，この両者を繋ぐ位置にあり，田儀櫻井家のたたら経営を象徴する。しかしながら，こうした特色あるたたら経営は，同家が奥田儀村に進出した当初から行われたものではなかった。

1644（正保元）年，仁多郡上阿井村に居を構えた櫻井三郎左衛門直重は，製鉄業を始める。直重は，乞われて神門郡奥田儀村でも鉄山開発を行ったが，田儀櫻井家初代に数えられるのは，田儀に移住した嫡子の幸左衛門直春である（鳥谷 2004）。奥田儀村における鉄山業の開始，それから櫻井家が分家した時期は，史料によって記載に違いがあり，寛文中期～延宝期（1665 ～ 78 年頃）のこととされている。直春は，1675（延宝 3）年に奥田儀村と小田村の鉄山・御立山の利用を藩から認められており，鉄山業はその付近で始められたようだ（山﨑 2008）。

田儀櫻井家の鈩のうち，史料の上で最も遡るのは吉野鈩である。同家文書「鉄山証文小日記」は，1687（貞享 4）年に吉野村の鈩主の五兵衛と吉左衛門から田儀櫻井家が鈩山と鉄穴を買い請け，1694（元禄 7）年に吉野鈩を建設，操業したことを記す（山﨑 2008）。佐田町教育委員会が発掘調査した梅ヶ谷尻たたら跡は，この吉野鈩と考えられる。新旧２基の製鉄炉地下構造（床釣り）が明らかになっており，新段階の 1 号炉は高殿鈩で，自然科学分析の結果などから[(1)]，田儀櫻井家の吉野鈩と推測される。古段階の２号炉は，製鉄炉地下構造が 1 号炉より小形で先行するものとみられ，1687（貞享 4）年に廃業した五兵衛と吉左衛門の鈩に当たる可能性がある（杉原編 1992a）。

吉野鈩の銑・鋤は，多くは宮本鍛冶屋へと運ばれて割鉄に仕上げられ，口田儀の港から出荷されたようである（第 115 図）。宮本鍛冶屋は，田儀櫻井家の菩提寺である智光院の過去帳から 1694（元禄 7）年には山内があったことが確認できる（鳥谷 2004）。1712（正徳 2）年の「万覚書」によれば，鉄は吉野鈩から上鍛冶屋・下鍛冶屋に運ばれており，鍛冶屋は２箇所にあった（山﨑 2008）。その後，1754（宝暦 4）年の「神門郡南方萬差出帳」では割鉄鍛冶屋 1 軒で操業され，1807（文化 4）年以降は鍛冶屋半軒となり，1882（明治 15）年まで存続した（藤原 2009）。生産施設は徐々に縮小されたようであるが，宮本鍛冶屋は，1694（元禄 7）年以前から 1882（明治 15）年の火災によって田儀櫻井家が宮本を去るまで，経営拠点としての役割を担った[(2)]。

田儀櫻井家は貞享から享保年間にかけて，宮本鍛冶屋周辺地域の奥田儀村・多岐村・小田村に加えて，神戸川中流域の吉野村・上橋波村・下橋波村・佐津目村・山口村・高津屋村に所在する鉄山の購入を進めた。たたら経営の基盤は，両地域にわたって整えられた。吉野鈩は，1713（正徳 3）年までは史料で確認できるが，いつ終了したのかは不明である（山﨑 2008）。これに続く鈩は，明らかになっておらず，次に史料にみえるのは山口村橋ケ原鈩である。操業の開始時期は明らかでないが，1766（明



第 115 図　田儀櫻井家が経営した鈩の位置

和 3）年 11 月まで稼働したことが知られる（藤原 2009）。山間部に立地する鈩は，木炭供給の関係から移転しながら操業するので，吉野鈩から橋ケ原鈩の操業終了まで 50 年余りの間に複数の鈩が稼働したと想定される。その候補となるのは，宮本鍛冶屋周辺地域の聖谷鈩・掛樋鈩と，神戸川中流域の朝日鈩である。

聖谷鈩は，発掘調査によって高殿鈩の製鉄炉地下構造が明らかになった（石原編 2008）。付近には 4 代の宗兵衛清矩が 1734（享保 19）年に造立した地蔵がある（松尾 2004）。掛樋鈩は，高殿鈩の製鉄炉地下構造が発掘されており，出土陶磁器と自然科学分析の結果から 18 世紀初め～中頃の構築とみられる（石原編 2008）。吉野鈩と聖谷鈩は，確認できる年代で 20 年ほどの差がある。吉野鈩が聖谷鈩に移転したかどうかは明言できないが，田儀櫻井家当主の銘をもつ地蔵の存在は聖谷鈩が後継の鈩であったことを示す。また，掛樋鈩は，発掘調査の成果からみると，聖谷鈩に先行または後出するものと考えられる。

朝日鈩は，伝承によると明治時代初期に鉄山経営が不振となり始めた頃に田儀櫻井家が建設した鈩とされるが（椿・桐原 1976），史料では確認できない。1872（明治 5）年の『高津屋村実地調査野取帳』によれば，鈩が所在する 343 番地は櫻井家所有ではあるが地目は「田」である。これに隣接する 348 番地は地目が「鍛冶職場」で，明治初期には鍛冶屋があったようだ。発掘で検出された高殿は，角打で 8 間・7 間の規模をもち，製鉄炉地下構造が明らかになっている。調査者は，出土陶磁器・自然科学分析の所見を踏まえ，文献調査などから享保から宝暦年間頃の操業とみており（杉原ほか編

1983），聖谷鈩・掛樋鈩と相前後する時期に稼働した可能性が考えられる。

田儀櫻井家は，17 世紀後半から 18 世紀半ばにかけて，山間部を中心にたたら操業を行った。その経営は，移転しながら稼働した鈩 1 箇所と本宅を構え拠点とした宮本鍛冶屋の協業で進められた。

（2）たたら経営の転換

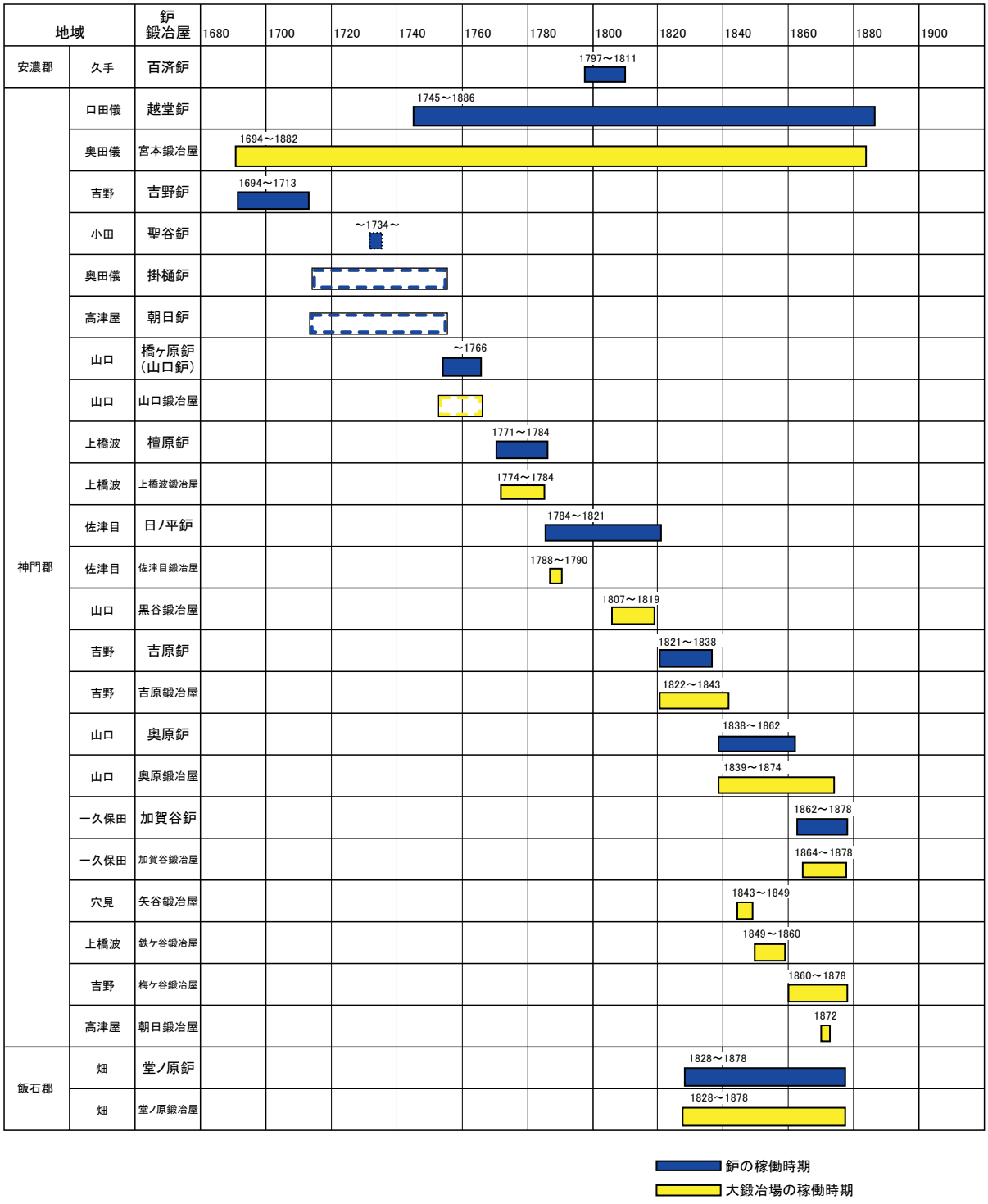
18 世紀後半になると，田儀櫻井家は沿岸部の口田儀村越堂鈩を買い取り，海のたたらと山のたたらを両輪とする特徴的なたたら経営を始める。また，山のたたらは，宮本鍛冶屋周辺地域を離れて，神戸川中流域を移転しながら操業し，付近には大鍛冶場が設けられる（第 116 図）。

田儀櫻井家のたたら経営は，当初は山間部を中心としたものであったが，口田儀で鉄を積み出したことから越堂鈩と関わりをもち，沿岸部にも乗り出すこととなった。越堂鈩は，「智光院過去帳」によれば，1745（延享 2）年には山内の存在が確認でき，それ以前から稼働したとみられる（鳥谷 2008）。1769（明和 6）年には田儀櫻井家の名義で操業が行われ，1771（明和 8）年に石見国邇摩郡横道村（大田市温泉津町井田）の弥平太より鈩を買い入れたが，それ以前から同家が経営に関わっていた可能性も指摘される（藤原 2009）。越堂鈩の立地は，水運を利用して砂鉄と大炭を搬入するのに適していた。1784（天明 4）年の「天明四辰九月鉄山困窮拝借願書之扣」によれば，砂鉄は因幡・伯耆及び石見浜田領から取り寄せたことがわかり，1808（文化 5）年の「年々見合帳」でも砂鉄は伯耆や付近の浜辺から，大炭は鰐淵寺山・鵜峠・鷺・杵築・口田儀のほか隠岐から調達されている（藤原 2009）。大量の原材料を水運で確保できたことにより，越堂鈩は山間部の鈩のように移転する必要がなく継続して操業され，1886（明治 19）年までは稼働したことが確認できる[(3)]。

越堂鈩が所在する口田儀は，山が海岸まで迫り，田儀川の河口が湊として利用される。その地形的な特徴は，西に境を接する石見国安濃郡・邇摩郡の沿岸部と類似する。安濃郡・邇摩郡には湊のある浦々に鈩が立地しており，その分布地域の東端が越堂鈩であった。これらの地域との関係の深さは，越堂鈩がもともと石見の経営者の所有であったことに端的に示される。田儀櫻井家は，1797（寛政 9）年には，安濃郡鳥井村（大田市鳥井町）の百済鈩も経営する。百済鈩は，久手海岸の笠ヶ鼻に立地し，1704（宝永元）年に同村の石田家が始めたとされる（細田 1977）。その経営が田儀櫻井家に移った経緯は不明であるが，1811（文化 8）年まで続いており（藤原 2009），この間，同家は沿岸部で鈩 2 箇所を操業した。

前述した神戸川中流域の山口村橋ケ原鈩は，1754（宝暦 4）年の「神門郡南方萬差出帳」に記載がある「山口鈩」とみられ，宝暦年間には操業を始めたようである[(4)]。この「差出帳」には「同所鍛冶屋」ともあり，「山口鈩」は近くに大鍛冶場を併設した（鳥谷 2008）。山口鈩に続くのは上橋波村の檀原鈩である。1771（明和 8）年に 5 代甚三郎順之が上橋波村の惣左衛門から鈩床と鉄山を購入して操業を始め，1784（天明 4）年まで稼働した。発掘調査によって高殿鈩の製鉄炉地下構造と鉄池 2 基が明らかになっており，18 世紀代の陶磁器が出土した（角田・宮本編 1997）。本床は，小舟甲との関係から構築し直されたとみられ，田儀櫻井家が檀原鈩を購入した際などに本床の補修が大掛かりに行われた可能性がある[(5)]。1774（安永 3）年には，同村内で上橋波鍛冶屋が操業され，檀原鈩の廃業まで続く（藤原 2009）。村名がつけられた鍛冶屋であることから，檀原鈩とは別の場所に設けられ

たようだが，協業が行われたとみられる。檀原鈩の後継として建設されたのは，佐津目村日ノ平鈩である。1784（天明4）年から稼働し，1821（文政4）年まで存続した。高殿鈩の製鉄炉地下構造が発掘されており，付近には6代櫻井幸左衛門義民の墓とされる墓石がある（大國・遠藤編 1987）。大鍛冶場は，村名がついた佐津目鍛冶屋が1788（天明8）年から1790（寛政2）年まで，山口村黒谷鍛冶屋が1807（文化4）年から1819（文政2）年まで稼働しており，やはり協業が考えられる（藤原 2009）。



第116図　田儀櫻井家が経営した鈩と大鍛冶場の稼働期間

日ノ平鈩は，1821（文政 4）年に吉野村吉原鈩へと移転した。これに伴い黒谷鍛冶屋も吉原鈩山内へと移されており，鈩山内に大鍛冶場が置かれた。吉原鈩は，1837（天保 8）年まで稼働したが，鍛冶屋は 1843（天保 14）年まで存続する。その後，鈩は 1838（天保 9）年に山口村奥原鈩，1862（文久 2）年に一久保田村加賀谷鈩へと移転した。大鍛冶場は，鈩の移転とその時期が一致するわけではないが，吉原鈩以降はいずれも山内に併設されている（藤原 2009）。

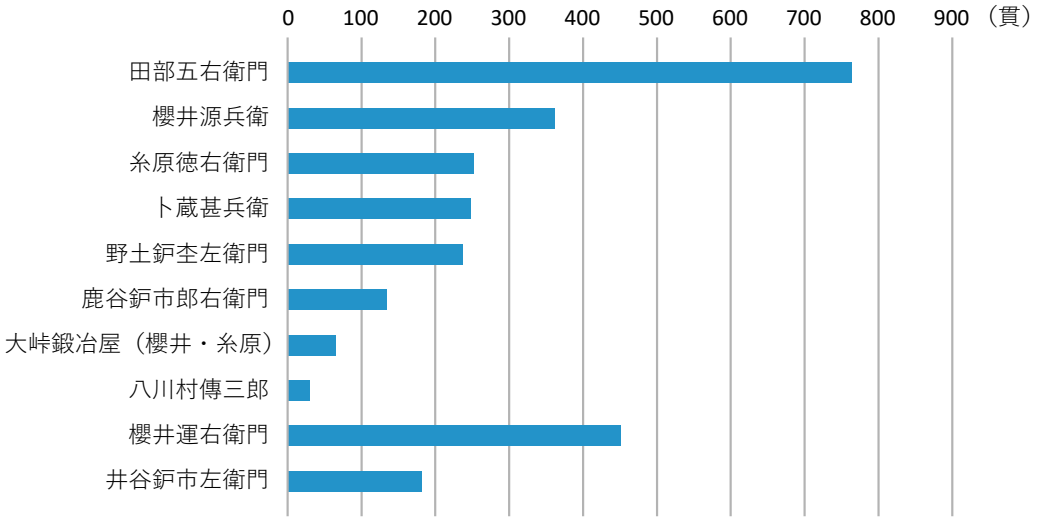
田儀櫻井家は，明和年間に海のたたらである越堂鈩と，山のたたらである神戸川中流域の鈩を所有し，これら鈩 2 箇所と宮本鍛冶屋による操業が行われる。安永期に入ると，山のたたらに大鍛冶場が設けられ，鈩 2 箇所と鍛冶屋 2 箇所の体制となった。

（3）たたら経営の拡大

19 世紀前半には，田儀櫻井家は新たに広瀬藩領飯石郡畑村の堂ノ原（堂ヶ谷）鈩で操業を始める。また，吉原鍛冶屋の移転に際して，大鍛冶場の増設が図られ，経営規模が拡大した。

1828（文政 11）年，10 代櫻井多四郎直敬と飯石郡吉田村田部佐一右衛門は，石見国安濃郡鳥井村の菊屋喜平太から堂ノ原鈩を共同購入する[(6)]。鈩をはじめ鍛冶屋・その他の諸施設，鉄山・鉄穴も買い入れたが，実質的には田儀櫻井家が経営した。1830（文政 13）年には鍛冶屋から出火して山内施設が全焼しており，資金難から広瀬藩の援助を得て再建される。他藩領である堂ノ原鈩の経営は，田儀櫻井・田部両家だけでなく広瀬藩領の鉄師を巻き込みながら進められたが，田儀櫻井家は 1878（明治 11）年まで関わった。操業は，田部家などにより 1887（明治 20）年まで続けられ（藤原 2009・2012），日露戦争の頃にも行われたことがわかる[(7)]。

吉原鈩に併設された吉原鍛冶屋は，鈩の移転後も 6 年存続した。吉原鈩を引き継ぐ奥原鈩は，鍛冶屋を併設したことから，この段階に大鍛冶場が増えることとなった。吉原鍛冶屋は，1843（天保 14）年に広瀬藩領飯石郡穴見村（雲南市掛合町）の矢谷鍛冶屋，1849（嘉永 2）年に上橋波村鉄ヶ谷鍛冶屋，1860（万延元）年には吉野村梅ヶ谷鍛冶屋へと移転した。このうち，梅ヶ谷鍛冶屋は，堂ノ原鈩の銑・鋼を仕入れ，割鉄を口田儀へ運んだことがわかっており，1878（明治 11）年までは操業が



第 117 図　たたら経営者 1 箇年の平均操業代銀（嘉永 3～安政元年）

確認できる（藤原 2009）。なお，伝梅ケ谷鍛冶屋金屋子神社の棟札や伝承によれば，1882（明治 15）年から地元経営者が新吉原鍛冶屋として数年，稼働したことが知られる（石原編 2010）。

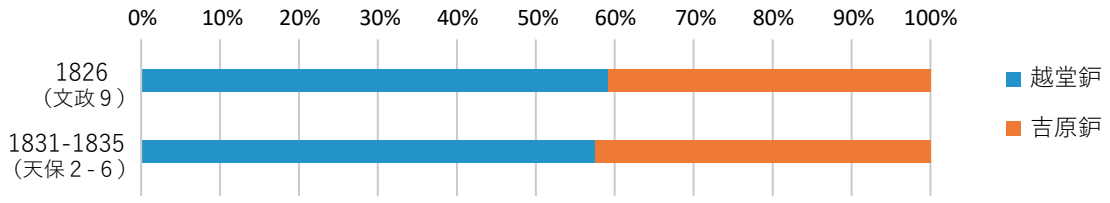
田儀櫻井家は，文政期には堂ノ原鈩・鍛冶屋を購入して山のたたらを増やし，鈩 3 箇所と鍛冶屋 3 箇所の体制とする。天保期には鍛冶屋をさらに増設して，鈩 3 箇所と鍛冶屋 4 箇所を経営するに至った。幕末から明治時代にかけて，田部家は鈩 5 箇所と鍛冶屋 8 箇所を稼働したが，田儀櫻井家の経営規模はこれに次ぐもので，仁多櫻井家の鈩 2 箇所・鍛冶屋 3 箇所，絲原家の鈩 1 箇所・鍛冶屋 2 箇所を凌駕する。1855（安政 2）年の「仁多・飯石・神門・大原四郡鈩鍛冶屋一ヶ年中出来物並代銀積目録」によれば，1850 ～ 1854（嘉永 3 ～安政元）年の 1 箇年平均で，田儀櫻井家は 450 貫余の操業代銀を記録し，田部家に次いで松江藩内では 2 番目の経営規模であった（第 117 図：鳥谷 2004）。

2　たたら経営における越堂鈩の位置

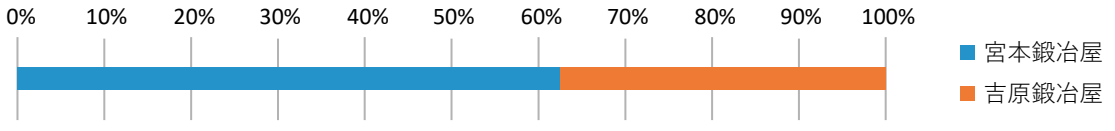
（1）田儀櫻井家の鉄生産における越堂鈩

越堂鈩は，1769（明和 6）年に田儀櫻井家が操業して以降，100 年余りにわたって稼働した。長期間にわたる生産内容が十分に把握できているわけではないが，断片的な資料から越堂鈩が同家の鉄生産において中心的な鈩であったことが窺える。田儀櫻井家は，1826（文政 9）年には越堂鈩と吉原鈩の 2 箇所で操業するが，越堂鈩は年間 68 代で 3,332 駄，吉原鈩は年間 50 代で 2,300 駄を記録する[8]。越堂鈩は，吹代数で吉原鈩に対し 18 代多く，同家の鉄生産量に占める割合は 59％である（第 118 図上）。1831 ～ 1835（天保 2 ～ 6）年の平均は，越堂鈩が 3,381 駄に対し吉原鈩は 2,494 駄余，鍛冶屋では宮本鍛冶屋が 654 駄余に対し吉原鍛冶屋は 393 駄余である[9]。鉄生産量のうち，越堂鈩は 57％，宮本鍛冶屋が 62％を占め，両者が経営の柱であったことがわかる（第 118 図下･第 119 図）。

田儀櫻井家は，明治時代初期には，越堂鈩・加賀谷鈩・堂ヶ谷鈩の 3 箇所を操業する。1870（明治 3）年は越堂鈩 73,826 貫・加賀谷鈩 17,131 貫・堂ヶ谷鈩 34,590 貫，1872（明治 5）年は越堂鈩 65,145 貫・加賀谷鈩 30,428 貫・堂ヶ谷鈩 32,702 貫で[10]，越堂鈩が 240 ～ 270t，加賀谷鈩が 60 ～ 110t，堂ヶ谷鈩が 120 ～ 130t 程度を生産した。田儀櫻井家の鉄生産量に占める越堂鈩の割合は，



第 118 図　文政・天保期の田儀櫻井家鈩生産状況



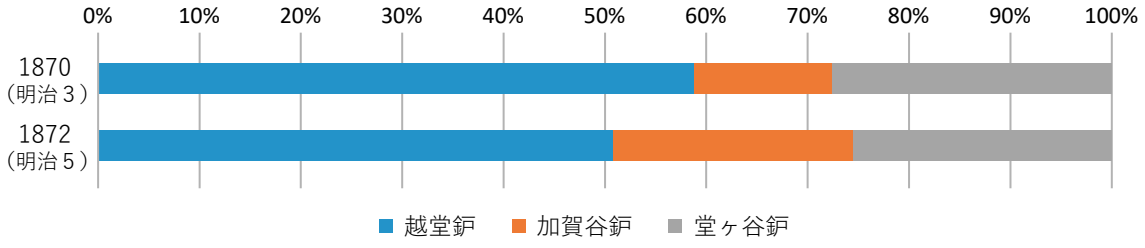
第 119 図　天保期の田儀櫻井家鍛冶屋生産状況

1870（明治３）年が 58％，1872（明治５）年では 50％で，文政期・天保期とさほど変化はないが，鉧が３箇所に増えていることからすれば，その役割は高まったようだ（第 120 図）。

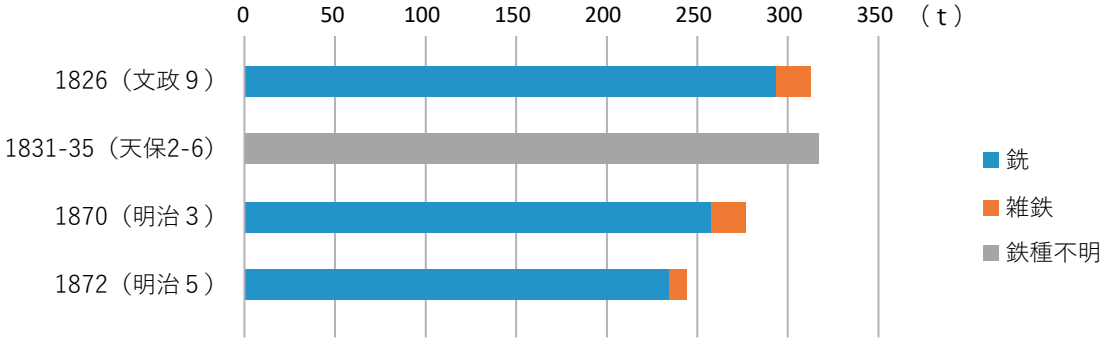
越堂鉧の生産内容は，1826（文政９）年は 3,332 駄のうち銑 3,132 駄・雑鉄 200 駄で，銑が 93％を占める（藤原 2009）。1870（明治３）年は 73,826 貫のうち銑 68,830 貫・鋼 4,996 貫，1872（明治５）年は 65,145 貫のうち銑 62,633 貫・鋼 2,512 貫で，銑は 93 ～ 96％である（鳥谷 2008）。１駄 25 貫で計算すると，文政～天保期は年間 300t 余，明治初期には 250t 前後の生産量があったが，銑の占める割合が 90％以上である点に変わりはない（第 121 図）。

越堂鉧の銑は，宮本鍛冶屋で割鉄に加工されるものと，そのまま売られるものがあった。1873（明治６）年，宮本鍛冶屋に搬入された地金（銑，鋼を含む）は，上半期の 10,043 貫のうち 4,926 貫（相良 2004），下半期には 14,006 貫のうち 6,858 貫が越堂鉧から送られた（鳥谷 2008）。宮本鍛冶屋が扱う地金 24,049 貫の中で，越堂鉧の銑は計 11,784 貫で，ほぼ半分に当たる。1870（明治３）年と 1872（明治５）年の史料には，田儀櫻井家全体の生産量と鍛冶原料となった銑・鋼の量の記録がある（鳥谷 2008）。1870（明治３）年には銑 114,283 貫が生産されており，鍛冶屋で割鉄製作の原料となったのは 81,140 貫である。このうち，加賀谷鉧と堂ヶ谷鉧から 45,453 貫 [10]，越堂鉧から 35,687 貫が調達されたとみられる。越堂鉧は，銑 68,830 貫を生産しているので，残りの 33,143 貫が銑のまま流通したこととなる。1872（明治５）年には越堂鉧の銑 62,633 貫のうち，10,562 貫が鍛冶原料となり，52,071 貫は銑として販売されたようだ。越堂鉧の銑は，２～５割程度が宮本鍛冶屋に送られて割鉄に仕上げられ，多くは銑のまま流通したことが想定される。

越堂鉧は，単価が高い割鉄 [11] の素材となる銑を宮本鍛冶屋に供給しつつ，単価が低い銑は湊に近い立地を活かして廻船によって大量に販売することで収益を確保した。その姿は，海のたたらと山のたたらを両輪とする田儀櫻井家のたたら経営を象徴するものといえる。



第 120 図　明治時代初期の田儀櫻井家鉧生産状況



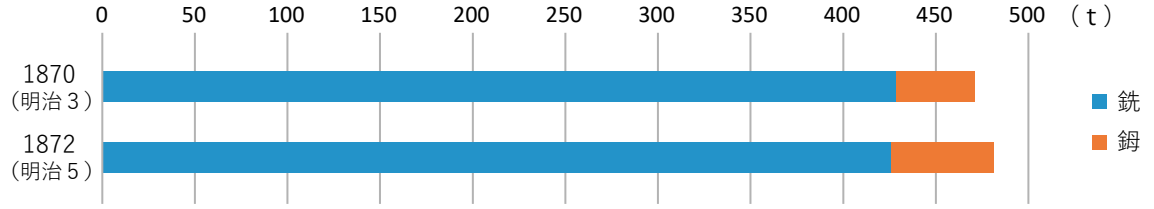
第 121 図　越堂鉧の生産量

（2）田儀櫻井家鉄生産の特色

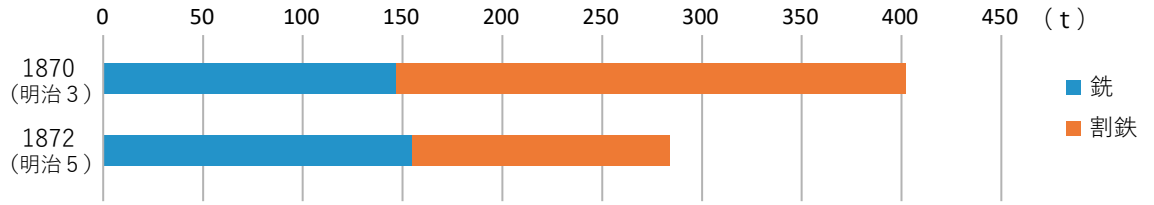
鉄の生産量は，1870（明治3）年に越堂鈩・加賀谷鈩・堂ヶ谷鈩の3箇所で銑・鍮合わせて125,547貫，1872（明治5）年には128,275貫を記録しており，年間470～480tに上る。生産内容は，1870（明治3）年が銑114,283貫・鍮11,264貫，1872（明治5）年は銑113,535貫・鍮14,740貫で，銑が88～90%を占め，残りが鍮となる（第122図）。加賀谷鈩は銑80%，堂ヶ谷鈩は銑82～91%と越堂鈩と比べればその割合は少ないが，田儀櫻井家が経営した鈩全体でみると銑は9割に達する。銑・鍮は宮本鍛冶屋，加賀谷鈩・堂ヶ原鈩の場合には山内の鍛冶屋にも持ち込まれて割鉄に加工された。鍛冶原料となった銑･鍮は，1870（明治3）年には90,642貫，1872（明治5）年では71,858貫と，年間269～340tにもなり，これは生産量の56～72%に当たる（鳥谷2008）。

一方，鋼はほとんど史料にないが，1871（明治4）年の加賀谷鈩で確認できる。正月から盆まで12代の操業で，銑226駄・鍮85駄・鋼48駄の計359駄が生産された（相良2007）。鋼は13%，1駄25貫で計算すると4.5tしかない。現在確認されている田儀櫻井家の史料では，鋼の記録はこれのみであり，その量からも例外的なものとみてよいだろう。

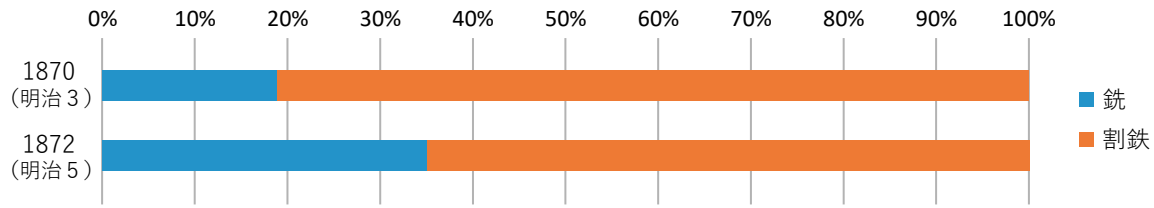
鉄類の販売量は，1843（天保14）年の櫻井家文書「当正月より盆迄御国鉄師方より銑鉄他他国江売捌高並直段書出目録」によれば，銑3,610束（1,805駄）・割鉄925駄が記録されており，田儀櫻井家は割鉄の2倍にあたる銑を売る。田部家・櫻井家・絲原家などの鉄師が販売した鉄類は，すべ



第122図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類生産量



第123図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類販売量



第124図　明治時代初期の田儀櫻井家鉄類販売状況

て割鉄であることから，銑の売買に特徴がみられる。また，販売先も奥出雲の鉄師は松江の鉄問屋を介して他国売りするのに対し，田儀櫻井家は大坂・兵庫のほか長州や北部九州など独自の販路をもっていたようだ（仲野 2008）。

田儀櫻井家は，1870（明治 3）年には銑 39,199 貫・割鉄 68,112 貫，1872（明治 5）年は銑 41,270 貫・割鉄 34,469 貫を販売した。銑は年間 150t 前後，割鉄は 130 ～ 255t に上るが，割鉄が販売量の 46 ～ 64％を占める（第 123 図）。販売額でみると，1870（明治 3）年は銑 3,210 両・割鉄 13,721 両，1872（明治 5）年は銑 4,400 円・割鉄 8,170 円となる。割鉄は単価が高いことから，販売額では 65 ～ 81％に上っている（第 124 図：鳥谷 2008）。前述した天保期には，銑の販売量は割鉄の 2 倍であったことから，明治期にかけて単価が高く収益性の良い割鉄を増やしたと考えられる。

田儀櫻井家は，出雲神門郡に本拠を置くという地理的な特性を活かし，18 世紀後半以降は沿岸部に立地する越堂鉧（海のたたら）と山間部を移転しながら操業する鉧（山のたたら）を両輪とした。主な生産品は，銑と割鉄で，次第に割鉄に軸足を移しながらも銑の売買を続けている。こうした経営は，専ら鋳物用の銑を販売した石東沿岸部や，銑は割鉄に加工･販売した奥出雲の鉄師とも異なっており，田儀櫻井家独特のものであった。

3　遺構からみた越堂鉧

（1）高殿

越堂鉧は，日本海沿岸に立地するという海のたたらの特性を活かし，田儀櫻井家の経営以前から 150 年近く稼働した。同じ場所で，長期間にわたって操業を続けるには，施設の維持管理が欠かせないが，越堂鉧では高殿がどのように維持されたかが明らかになった。

高殿は，一辺 19.5m の正方形で，周囲に 2 ～ 3 段の石垣がある。石垣にはかさ上げの痕跡があり，その下で古い暗渠施設が確認されたことから，3 度にわたって大きな改修が行われたとみられる。高殿の中央には，本床と小舟よりなる製鉄炉地下構造（床釣り）があり，これは古い床釣りを壊して，ほぼ同じ場所に再構築したものであった。鉧は，一定期間操業すると床釣りの防湿効果を保持するために，跡坪を掘り返して本床と小舟を乾燥させる照し焼を行う。長期にわたり稼働した越堂鉧の場合には，それだけでは十分ではなかったようだ。この新旧 2 段階の床釣り以前にも作業面は 2 面が確認されており，床釣りは計 4 度も造り替えられたとみられる。これを越堂鉧操業 1 ～ 4 期（第 3 章第 2 節）とすると，1 期が石垣下の暗渠施設，2 期が石垣古段階，3・4 期が石垣新段階に対応する。田儀櫻井家が経営を始め，施設を改修したのは 2 期のことであったらしい。また，田儀櫻井家文書「年々見合帳」によれば，1805（文化 2）年に高殿が全焼した記録が残っており（相良監修 2009），2 期から 3 期への建て替えは，この火災後の復旧として行われた可能性がある。

越堂鉧の高殿は，現存する唯一の高殿である雲南市吉田町の菅谷鉧（石塚編 1968）と平面形，規模がほぼ一致する。菅谷鉧を参考にすれば，高殿は東西方向に棟を向ける妻入りであったとみられる。発掘で検出された東辺の小鉄町（砂鉄置場），炭町（炭置場）の位置は，菅谷鉧のそれと一致する。調査が及んでいない西辺には，出入り口 2 つと，その間に土町（粘土置場）が想定できる。また，北辺

側で囲炉裏跡，南辺側では束柱礎石列が確認されているが，これらは村下座などと呼ばれた職人詰所にあたる[12]。押立柱は礎石の上に立てられ，正方形に配置されているところも共通する。

田儀櫻井家が経営した鈩の構造（第 37 表・第 125 図）を見ると，越堂鈩の高殿は一辺 19.5m と最も大きい。また，押立柱が根腐れしにくいよう礎石の上に立てることや，堅牢な石垣の上に建てられることなど，同じ場所で長期間操業するのを前提にして建設された高殿であった。これに対し，山間部の鈩は，20 年程度で移転しながら操業することが前提であり，越堂鈩と比較すれば，高殿の規模は小さかったようだ。17 世紀末に遡る吉野鈩(梅ヶ谷尻たたら跡)は，外柱列から平面形が長方形であったとみられ，長さ 14.5m・幅 11.8m である。押立柱は，地面に穴を掘って立てる掘立柱で，長さ 7.0 ～ 7.4m・幅 5.1m の長方形に配置されている。18 世紀代の朝日鈩は，外柱列などから長さ 14.5m・幅 12.5m の略方形に復原できる。押立柱は，やはり掘立柱で，その配置は 5.9 ～ 6.2m 間隔のほぼ正方形である。檀原鈩と日ノ平鈩は，外形は不明であるが，押立柱の配置と間隔は朝日鈩に近いことから，ほぼ同規模の高殿であったことが想定できる。

高殿の押立柱は，鳥取県日野町都合山鈩では出入り口側の間隔が狭く，奥側は広くなり，平面形は台形状となる（俵 1933)。これは，製鉄炉を壊して内部の鎚を出入り口から搬出する際に，押立柱がその妨げにならないよう間隔を狭めたものとみられ，製鉄作業が行われる高殿の大きな特徴といえる。しかし，田儀櫻井家が経営した鈩では，押立柱の配置が台形状になるものはなく，正方形または長方形のものしか確認されていない。銑を中心とした生産では，鎚が相対的に小さかったことから，柱間隔を狭めるほどの配慮までして搬出する必要がなかったのかもしれない。

（2）製鉄炉と湯溜まり

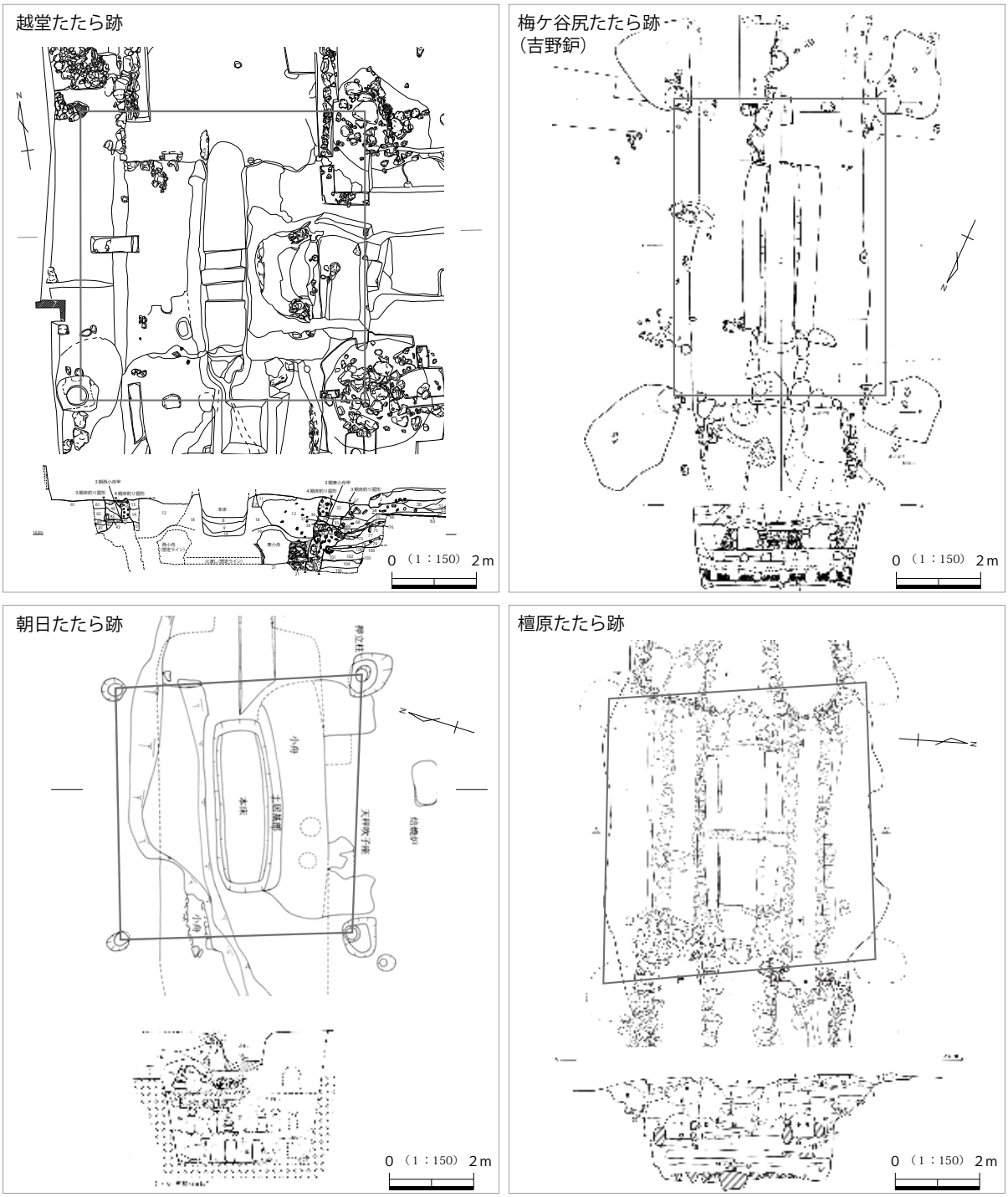
たたら吹製鉄の操業法は，炉内に鎚を成長させ鋼ができる鎚押と，銑の抽出を主体とする銑押に大きく分けられる。両者では，使用する砂鉄の違い，操業内容に加えて，製鉄炉の大きさにも違いがあった（上栫 2013)。製鉄炉は，本床側壁の上端（土居）に置かれる筋金を基準にして設定される。鎚押の鳥取県日南町砥波鈩では，この筋金と炉の中央の基準となる木製の中板を基に製鉄炉の外形が決められ，長さ 330㎝・幅 121㎝の範囲に造られた。一方，銑押の価谷鈩は，長さ 284.5㎝・幅 103㎝と，砥波鈩と比較すれば長さ・幅とも小さい（俵 1933)。炉内の幅では，砥波鈩 86㎝に対して価谷鈩 66.6㎝と，やはり 20㎝ほど狭い。銑押の価谷鈩が炉の幅を狭くするのは，炉内温度の上昇を図ったためである。砂鉄の還元性を高めて鉄とスラグの分離を促すことで，鉄と木炭の接触などにより吸炭を進め，銑の効率的な生成が意図された。

越堂鈩操業 4 期の本床は，土居間の幅が 114㎝である。製鉄炉は，土居に設けられる筋金の内側に構築されることから，炉底幅はこれより狭かったとみられる。その大きさを直接窺うことはできないが，炉内幅が相対的には狭く，銑押に適した製鉄炉が考えられる。田儀櫻井家が経営した鈩の本床土居間の幅は，吉野鈩（梅ヶ谷尻たたら跡）90㎝，聖谷鈩 114㎝，朝日鈩 115㎝，檀原鈩・日ノ平鈩 110㎝である[13]。吉野鈩は，幅が 90㎝しかなく，製鉄炉は幅がそれ以下の小形製鉄炉であったようだ。それ以外の鈩は幅が 110 ～ 115㎝あり，越堂鈩操業 4 期と同規模の製鉄炉が想定される。

越堂鈩は，生産量の 90％以上が銑であるところに特色がある。4 期の本床南端部に続く位置には，

第 37 表　田儀櫻井家が経営した釛の構造

釛名	高殿		押立柱	柱間		掘形			本床		
	長さ (m)	幅 (m)		長さ (m)	幅 (m)	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)
越堂釛	19.5	19.5	礎石	6.8	6.8	12.5	5	3?	485	114	100
吉野釛	14.5	11.8	掘立	7.0 ～ 7.4	5.1	12.6	4.1	2	400	90	70
聖谷釛			掘立						550	114	82
掛樋釛											86
朝日釛	14.5	12.5	掘立	6.1 ～ 6.2	5.9 ～ 6.2	9.2	4	3	360	115	110
檀原釛			掘立	6.6 ～ 6.8	6.2 ～ 6.5	14.6	6.3	2.6	550	110	90
日ノ平釛			掘立	6.2 ～ 6.4	6.2 ～ 6.7	12.5	6		320	105	



第 125 図　田儀櫻井家経営釛の押立柱と床釣り構造（本書第 21・34 図および各報告書から作成）

炉の基部から抽出した銑を受ける湯溜まりが設けられる。湯溜まりは，周囲が緩く立ち上がる皿状の土坑で，長さ 350㎝・幅 210㎝・深さ 40㎝である（石原編 2008）。銑の抽出作業は，江津市価谷鈩で報告されている。湯溜まり（湯場）は，径 100㎝・深さ 3 ～ 6㎝ほどの浅い土坑で，製鉄炉の端部から銑を流し込んで固化させた後，鎚で割り取ったという。銑の生産量 4.5t のうち，鉇に含まれるものは 337㎏に過ぎないので，湯溜まりに流し採られた銑は 93％に上る（俵 1933）。こうした状況からすれば，越堂鈩でも銑のほとんどは湯溜まりに抽出されたとみられる。

湯溜まりは，銑の生産には欠かせない施設である。その形態には，越堂鈩や価谷鈩のように略円形状の素掘りの土坑のものの他に，飯南町弓谷鈩，奥出雲町野土鈩，同宇根鈩では略方形または舟形で壁面に粘土を貼ったものが確認されている（第 38 表）。弓谷鈩の湯溜まりは，新旧 2 時期あり，新段階のものは両端が窄まる船形で，長さ 150㎝・幅 25㎝・深さ 14㎝である（田中編 2000）。野土鈩も新旧 2 時期で，新段階のものは正方形で一辺 100㎝である。深さは 50㎝とされるが造り替えが 4 回あり，最終時には 20㎝ほどであったようだ（杉原編 1992b）。宇根鈩は，造り替えが 5 回にわたっており，正方形または略方形で一辺 50 ～ 70㎝・深さ 5 ～ 15㎝である（杉原編 1996）。略方形または舟形の湯溜まりは型であり，ある程度定型的な形で銑の搬出が行われた可能性も考えられる[(14)]。

越堂鈩の湯溜まりは，周辺地域で確認されているものと比較すると，長さ・幅とも非常に大きい。出銑作業は，『鉄山必用記事』によれば，初回は 20 貫ないし 30 貫，2 回目は 40 貫，3 回目は 60 貫，4 回目は 80 貫，5 回目 100 貫以上，6 回目 120 貫以上，やりきり銑（最終出銑）では 300 貫以上とされる（館訳 2001）。出銑量は，操業の進行にしたがって変動があり，終盤ほど多くなったようだ。こうした出銑量の変化への対応は，越堂鈩の長さ 3.5m・幅 2.1m にもなる大形湯溜まりであれば容易であった。出銑量の少ない場合には，大形湯溜まりの中も銑を割り取る作業空間としつつ，多くなった場合でも銑が流し込める容量が十分であったからである。越堂鈩の湯溜まりは，専ら銑に力点を置いた生産のあり方をよく示すものと評価できる。

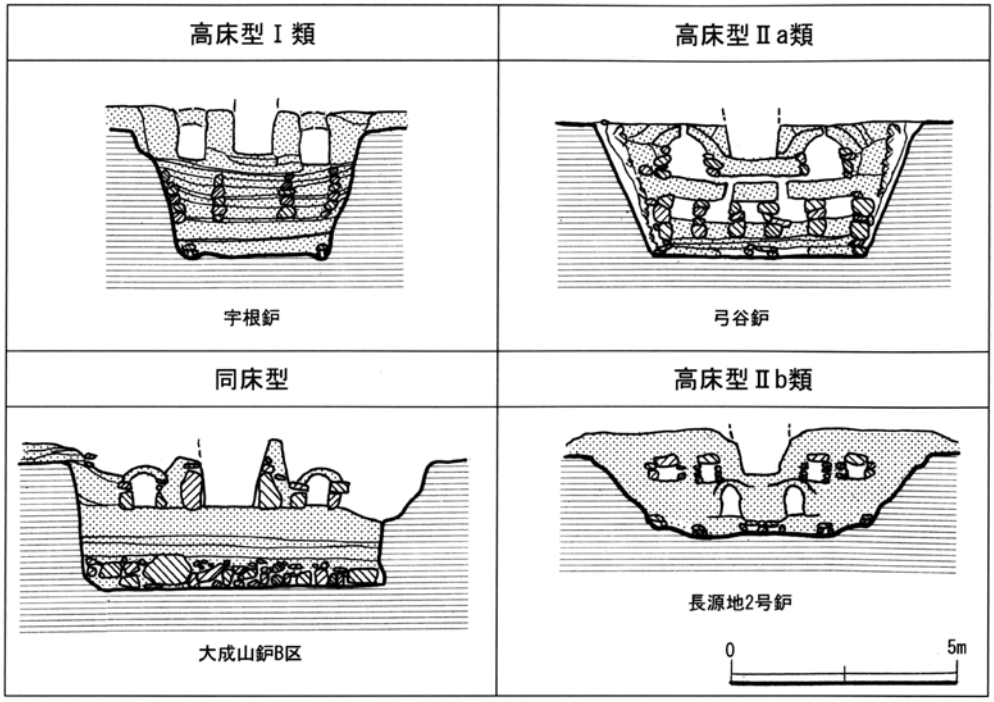
（3）製鉄炉地下構造（床釣り）

製鉄炉の防湿・保温施設である床釣りは，操業の成否を左右したとされる重要な施設である。その構造は，本床と小舟よりなる本床釣りの構造によって，本床と小舟の底面が同じ高さの同床型，本床底面を小舟底面より高くする高床型に分けられる。さらに高床型は本床底面を小舟の底面より高くするが，小舟の甲（天井）までには至らない高床型Ⅰ類，本床底面を小舟の甲と同じ高さにする高床型Ⅱａ類，本床底面を小舟の甲より高くする高床型Ⅱｂ類に細別される（第 126・127 図：角田 2014）。

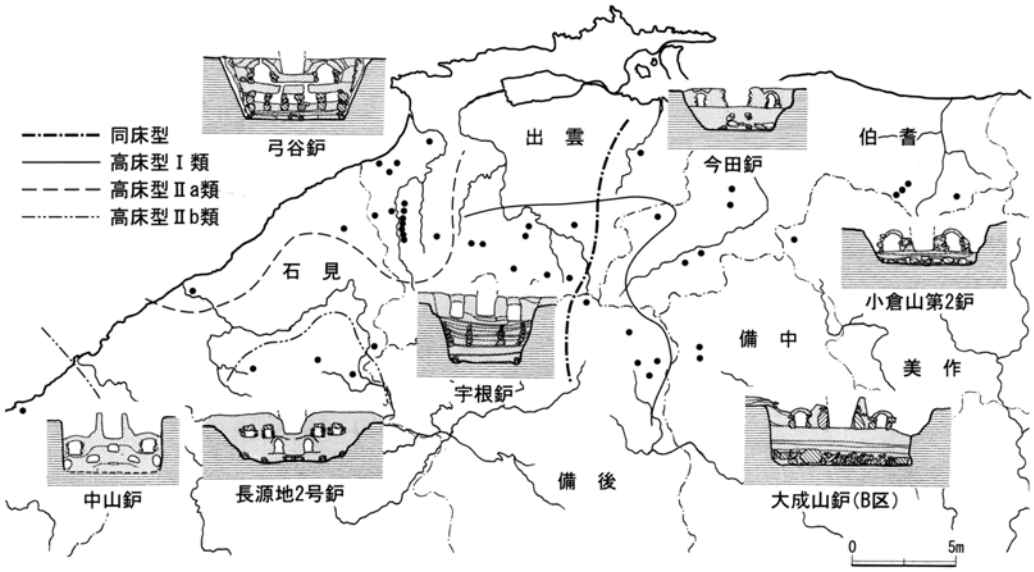
田儀櫻井家が経営した鈩の床釣りは，本床の底面が小舟の甲と同じ高さに造られ，すべて高床型Ⅱａ類である。神門郡，それから飯石郡の神戸川流域では，田部家などの鈩も高床型Ⅱａ類であり，製鉄技術が経営領域を超えて広く共有されていたことが窺える。この高床型Ⅱａ類に特徴的なのが，小舟の間を結ぶ「火渡し」である[(15)]。田儀櫻井家の鈩では，越堂鈩操業 4 期のほか，吉野鈩（梅ケ谷尻たたら跡），朝日鈩，檀原鈩で報告があり，その構造・機能は床釣りが全面発掘された弓谷鈩で詳細に明らかにされている（田中編 2000）。弓谷鈩における床釣り構築作業は，①掘形の底に伏樋を設け息抜き穴を立ち上げる，②伏樋を粘土床で密閉する，③坊主石を並べ石の間に燃焼材を詰める，④厚

第 38 表　湯溜まり規模の比較

鈩名	所在地	遺構名	平面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
越堂鈩	出雲市多伎町	SX01	略円形	350	210	40	
価谷鈩	江津市松川町		円形	100	100	3 ～ 6	
弓谷鈩	飯南町志津見	新	船形	150	25	14	
		旧			17	8	
野土鈩	奥出雲町高尾	新	正方形	100	100	50	4 基重複
		旧		120	90		
宇根鈩	奥出雲町三成	1 次	正方形	70	70		
		2 次	略方形	65	50	11	
		3 次			60	5 ～ 6	
		4 次	略方形	51	46		
		5 次	正方形	50	50	15	



第 126 図　高殿たたら地下構造の分類（角田 2014 より）



第 127 図　高殿たたら盛行期の地下構造に見られる地域性（角田 2014 より）

い粘土床を張る，⑤下段に合わせて坊主石を並べ燃焼材を詰める，⑥再び厚い粘土床を張って小舟を設けてその間を火渡しで繋ぐとともに，火渡しから下の燃焼材に火が回るよう火落とし穴を貫通させる，⑦小舟間に本床を設けるという順に進められた。床釣りの乾燥作業では，小舟間の火渡しから下に繋がる火落とし穴によって，坊主石間の燃焼材にも火が回る仕組みとなっており，本床釣りだけでなく，床釣り全体の乾燥が図られている。

越堂鈩操業4期の床釣りでは，小舟間に3本の火渡しがあり，土管製の息抜き穴も確認された。本床釣りより下は未調査であるが，弓谷鈩と同様に火落とし穴があり，坊主石の間が空洞となる構造や伏樋から立ち上がる息抜き穴が想定できる。火渡しは，吉野鈩（梅ケ谷尻たたら跡）と朝日鈩では5本，檀原鈩では3本あり，それぞれ坊主石（支柱石）を伴う空洞や息抜き穴があることから，同じ構造の床釣りと考えられる。このような火渡し，火落とし穴，息抜き穴を使った床釣の構築・乾燥法は，1825（文政8）年に石見那賀郡太田村（江津市松川町）の石田春律が著した『金屋子縁記抄』に記録されており（田中編 2000），石見東部沿岸地域にも展開した[16]。越堂鈩と堂ノ原鈩は，田儀櫻井家以前には石見安濃郡や邇摩郡のたたら経営者が操業しており，両者の関係を直接辿ることもできる。石見東部沿岸地域の発掘調査例がほとんどないため，遺構の比較検討はできないが，高床型Ⅱa類の床釣りは両地域の経営者，技術者の関わりの深さを窺わせるものといえる。（角田徳幸）

註

（1）1号炉は放射性炭素年代1660 ± 80，熱残留磁気年代1750 ± 15，2号炉は熱残留磁気年代1700 ± 20である（杉原編 1992a）。

（2）1878（明治11）年，田儀櫻井家の所有する鈩・鍛冶屋・山林は東京蓬莱社の所有となる（藤原 2009）。なお，火災の翌年にあたる1883（明治16）年には，安濃郡東波根村小原安右衛門・同亀右衛門が共同で大鍛冶場を再興し，1888（明治21）年まで操業したという（河上 1928）。

（3）越堂鈩は，1886（明治19）年4月付けで「製鉱所廃業願」が提出されている（加地 2006）。なお，1884（明治17）年頃，飯石郡下来島の永田富一郎が鈩を再興し，支配人戸谷善一郎らによって1897（明治30）年まで操業されたとも伝えられる（河上 1928）。

（4）春日家文書「神門郡南方萬差出帳」には，奥田儀村の奥田儀鈩・同所奥田儀鍛冶屋，山口村の山口鈩・山口鍛冶屋の記載がある。奥田儀村の鍛冶屋は宮本鍛冶屋，奥田儀村の鈩は掛樋鈩または聖谷鈩の可能性も考えられ，その場合は一時的にせよ山間部で鈩2箇所が稼働したことになる。

（5）檀原鈩の製鉄炉地下構造は，本床底面を小舟甲と同じ高さにする高床型Ⅱa類である（角田 2014）。高床型Ⅱa類は本床が小舟より高いため，同類の弓谷鈩（田中編 2000）・大槙鈩1号炉（勝部編 2001）など本床側壁が小舟甲の上に乗るように設けられる。これに対し，檀原鈩は本床側壁が小舟甲を垂直に切って造られており（第125図右下），本床を再構築したことが考えられる。

（6）堂ノ原鈩は，1792（寛政4）年頃から操業されたとみられる（藤原 2009）。1811（文化8）年には広瀬藩領の鉄師である能義郡布部村（安来市広瀬町）の家嶋家が操業したことが，金屋子神社に納められた棟札からわかる。菊屋喜平太は，1817（文化14）年に家嶋家から堂ノ原鈩を購入した。なお，堂ノ原鈩の名称は，田儀櫻井家の経営期に堂ヶ谷鈩と変更されたらしい（石原編 2010）。

（7）堂ノ原鈩金屋子神社の棟札よれば，田部家は 1904・06（明治 37・39）年にも操業した（石原編 2010）。

（8）田部家文書「文政九戌ヨリ天保四巳迄御用留」「仁多飯石神門大原四郡鈩鍛冶屋壱ヶ年中出来物並代銀積目録」による（藤原 2012）。

（9）田儀櫻井家文書「年々見合帳」「御米代年賦願書」による（鳥谷 2004）。

（10）島根県立図書館蔵「明治六年国費部松江藩引継雑款鉄山一件第一種文書科」による（鳥谷 2008）。加賀谷鈩と堂ヶ谷鈩には，銑の販売記録はなく，宮本鍛冶屋と山内併設の鍛冶屋で割鉄となった。

（11）1894（明治 27）年上半期の飯石郡吉田村における 1 貫当たりの単価は，鉄（割鉄）25 銭・鋼 23 銭・銑 8 銭 5 厘である。割鉄・鋼に対し銑は 3 分の 1 程度の価格で取引されており，史料が残る 1896（明治 29）年下半期まで同様な傾向が続く。割鉄の収益性の高さが確認できる（島根県 1966）。

（12）出入り口から製鉄炉の方向をみて，左が表，右が裏と呼ばれ，操業は表を村下，裏を副技師長格の炭坂が担当した。越堂鈩の高殿は，北辺側が表，南辺側が裏に当たる。

（13）掛樋鈩の本床は，側壁の一方が大きく破損するため，上端の幅は不明である。一方，底面の幅は 93㎝で，これは聖谷鈩とほぼ同じであり，土居間の幅は同様に 114㎝程度と推定される（石原編 2008）。

（14）飯南町角井の獅子谷遺跡では，金屋子祠の御神体であったと伝えられる板状の銑鉄が確認されている。これは，方形をした型に流し込まれたもので，2 辺が割り取られており，大きさは長さ 23.8㎝・幅 21.8㎝・厚さ 3.2㎝である（東山編 2002）。仮に 4 分割されたものとすれば，一辺 50㎝程度に復原できる。型に流し込まれた銑は，こうした形態で流通したことが考えられる。

（15）高床型Ⅱ a 類以外では，Ⅰ類の野土鈩で本床の下に型木 5 本を埋設して小舟を繋ぐ通気孔の報告がある（杉原編 1992b）。

（16）杉原清一は，伏樋・息抜き穴をもつ床釣りは石見中東部から神戸川流域で発展し，出雲仁多郡や備後北部にも広がったとする（杉原 2000）。

参考文献

石塚尊俊編 1968『菅谷鑪』島根県教育委員会

石原　聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会

石原　聡編 2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 19 ～ 21 年度の調査―』出雲市の文化財報告 12　出雲市教育委員会

上栃　武 2013「技術書からみた銑押し法の特徴」『たたら研究』第 52 号　たたら研究会　71 ～ 86 頁

大國晴雄・遠藤浩巳編 1987『日ノ平たたら跡発掘調査報告―近世高殿たたらとたたら文書―』大田市埋蔵文化財発掘調査報告 6　大田市教育委員会

角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂出版

角田徳幸・宮本正保編 1997『檀原遺跡・谷川遺跡・殿淵山毛宅前鈩跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4　島根県教育委員会

加地　至 2006「出雲鉄業組合の沿革と意義」『櫻井家たたらの研究と文書目録』奥出雲町教育委員会　171 ～ 195 頁

勝部智明編 2001『丸山遺跡・大槙鈩跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10　島根県教育

委員会
河上昌俊 1928『訂正増補　田儀村沿革史』
相良英輔 2004「田儀櫻井家のたたら製鉄業経営」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　39 ～ 48 頁
相良英輔 2007「田儀櫻井家のたたら製鉄業」『近世近代島根地方におけるたたら製鉄業の生産と流通　科学研究費補助金基盤研究 (c)(2) 研究成果報告書，平成 17 － 18 年度』島根大学　18 ～ 25 頁
相良英輔監修 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告 8　出雲市教育委員会
島根県 1966「明治十三年一月ヨリ月々産鉄景況表　田部控」『新修島根県史　史料編 6　近代（下）』386 ～ 387 頁
杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鈩』佐田町教育委員会
杉原清一編 1992a『梅ヶ谷尻たたら跡』佐田町教育委員会
杉原清一編 1992b『野土たたら跡』仁多町教育委員会
杉原清一編 1996『宇根たたら跡』仁多町教育委員会
杉原清一 2000「伏せ樋考」『製鉄史論文集　たたら研究会創立 40 周年記念』たたら研究会　283 ～ 300 頁
田中迪亮編 2000『弓谷たたら』頓原町教育委員会
館　充訳 2001『現代語訳　鉄山必用記事』丸善株式会社
俵　國一 1933『古来の砂鉄製錬法』丸善株式会社
椿　貞・桐原幹夫 1976「鈩」『佐田町史』佐田町教育委員会　302 ～ 348 頁
鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　19 ～ 38 頁
鳥谷智文 2008「越堂鈩・掛樋鈩・聖谷鈩の歴史的変遷」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会　106 ～ 115 頁
仲野義文 2008「越堂鈩の鉄流通について」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成 16 ～ 18 年度の調査―』出雲市の文化財報告 1　出雲市教育委員会　112 ～ 115 頁
東山信治編 2002『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡（1）―遺構・遺物編―』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 15　島根県教育委員会
藤原雄高 2009「田儀櫻井家の鈩・鍛冶屋の変遷」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告 8　出雲市教育委員会　101 ～ 111 頁
藤原雄高 2012「田部家と田儀櫻井家の共同経営―広瀬藩領堂ノ原鈩・鍛冶屋の事例から―」『田部家のたたら研究と文書目録（上）』雲南市教育委員会　176 ～ 194 頁
細田彌三 1977『鳥井町史誌』明福会
松尾充晶 2004「石造物からみた田儀櫻井家」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　85 ～ 124 頁
山﨑一郎 2008「松江藩領神門郡における田儀櫻井家の鉄山経営―十七世紀後期～十八世紀前期を中心に―」『たたら製鉄・石見銀山と地域社会』清文堂出版　29 ～ 51 頁

第８章　結　語

越堂鈩は，日本海沿岸部に立地するたたら場であり，田儀櫻井家の基幹的なたたら場として近世から近代にかけて操業された。2006（平成 18）年度に実施された越堂たたら跡の発掘調査では，製鉄炉地下構造の床釣りなどが見つかり（石原編 2008），その位置が『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）掲載の幕末から明治初年の越堂鈩山内建物配置図と合致したことが注目される。

2013（平成 25）年度から 2017（平成 29）年度には，高殿内とその周辺における遺構の残存状況を確認するために発掘調査が実施され，高殿関連の遺構が良好に残存する状況を確認した。今回の報告では，発掘調査や自然科学分析の成果を中心にまとめるとともに，文献史料の調査や関連する文書目録の整理，そして成果の総合的な検討や調査研究から田儀櫻井家が経営した越堂鈩の特質を明らかにすることができた。ここでは，今回の報告における主な内容を簡潔に整理して結語としたい。

１　田儀櫻井家と越堂鈩（第１・２章）

越堂鈩山内は 1745（延享２）年には形成されていたことが文献史料に記されており（鳥谷 2004），田儀櫻井家の５代目当主甚三郎順之が 1771（明和８）年に石見横道村の弥平太から買い請けたと考えられているが，文献史料では田儀櫻井家の名義による操業は 1769（明和６）年からとなっており（鳥谷 2008），1769 年以前から越堂鈩の経営に携わっていた可能性が高い（藤原 2009）。そして，少なくとも 1882（明治 15）年までは操業が続いているため（藤原 2009），文献史料で確認できるだけでも約 150 年間におよぶ長期間の操業が行われていたことが分かる。

田儀櫻井家は，本拠地を構えた宮本鍛冶屋を中心に多伎町奥田儀や佐田町内のほか，隣接する雲南市域や大田市域東部などの山間部にもたたら場や鍛冶場を設けて広く製鉄経営を展開した。これら山間部でたたら製鉄を営む一方で，越堂鈩や百済鈩といった日本海沿岸部に位置するたたら場を経営するなど，山間部と海岸部の両方でたたら場の操業を行うことが田儀櫻井家の製鉄経営の大きな特徴であり（角田 2014），たたら製鉄事業の経済的な発展を促進した独自の手法であった。その経営体制の中核を担っていたのが，田儀櫻井家の基幹たたらとして長期間操業した越堂鈩であり，また海岸部の越堂鈩に近接する田儀浦の海運であったと考えられる。

２　越堂鈩の操業年代と高殿内外の遺構・遺物（第３章・第５章第１節）

2013 年度から 2017 年度の越堂たたら跡の発掘調査では，たたら場の長期間にわたる操業のなかで複数時期に高殿や床釣りの改修が行われたことが判明し，それをもとに４つの時期（越堂鈩操業１～４期）に区分した（第３章第２節）。各時期に対応する操業面や遺構が見つかり，また出土遺物[(1)]や炭化物の測定年代を整理することで，越堂鈩の時期的変遷が明らかになった（第３章第６節）。

（１）１期の操業時期と遺構・遺物

１期は，現存する高殿石垣外側を廻るように配置された暗渠施設が見つかり，また高殿内には硬化

面が確認できた（第３章第３節）。それ以外にたたら場の操業を示す内容は確認できないが，１期の硬化面を形成する盛土内には砂鉄層や被熱した石積みが認められるほか，暗渠施設は続く２期以降も排水機能を維持しており，２期以降の高殿と同じ空間内でたたら場の操業が行われた可能性がある。

１期の硬化面を形成する盛土内からは，17 世紀末から 18 世紀後半の可能性がある陶磁器（第３章第５節第 48 図４）が出土したほか，高殿内からは 17 世紀末から 18 世紀中頃の陶磁器（第３章第５節第 48 図１・２，第 49 図 32）も散見され，また暗渠施設内の樹木や炭化物からは 17 世紀末から 18 世紀中頃の年代測定値が得られた（第５章第１節）。そのため，１期は 17 世紀末から 18 世紀中頃の操業年代が推定できる。それは田儀櫻井家が経営する以前の時期と考えられ，1745 年以前から操業が行われていた蓋然性が高い。

（２）２期の操業年代と遺構・遺物

２期は，自然石の高殿石垣とそれに対応する操業面が存在する（第３章第３節）。操業面は１期の硬化面上に盛土を施して形成され，砂鉄置場や炭置場が確認された。また，高殿建物を支えた方形の柱のほぞ穴が一部で認められる礎石列が高殿石垣の内側を廻る。高殿石垣と礎石列の間にある犬走り状の空間を覆う庇が高殿建物に付いていたと想定されるほか，炭置場上や２～３期の盛土からは燻し瓦（第３章第５節第 52 図 80・81）が認められ，高殿建物や周辺建物の一部に用いられた可能性がある。また，越堂鈩山内の通路石垣の根石とみられる石列が高殿南面石垣に対向する位置で見つかり，その延長上にある石垣は，積み直しなどを経て現在も里道石垣として利用されている（第３章第４節）。

１～２期の盛土からは 18 世紀中頃から後半頃の陶磁器（第３章第５節第 48 図５）が認められ，炭置場上面の炭化物や２～３期の盛土の時期を示す小舟甲上の炭化物の年代測定では，18 世紀中頃から 19 世紀初頭の測定値が得られている（第５章第１節）。そのため，２期の操業年代は 18 世紀中頃から 19 世紀初頭頃と推定され，田儀櫻井家経営以前から経営の前半期に対応すると想定された。

（３）３・４期の操業年代と遺構・遺物

３・４期の高殿石垣は，２期の自然石の石垣上に切石を増し積みして構築されている（第３章第３節）。また２期の操業面上に盛土が施されて３・４期の操業面が形成され，押立柱のほぞ穴が残る押立柱礎石や根固め石，束柱礎石列，囲炉裏跡などが確認される。３期の床釣りは掘形や小舟甲のみが残存しており，４期の床釣り構築時に削られていた。４期の床釣りは，本床や小舟，跡坪などの遺構の残存状態が良好であり，３・４期の操業面は共通しているが，４期に床釣りのみが改修されたと考えられる。なお，跡坪内の埋土からは釉薬瓦（第３章第５節第 52 図 89）が出土しており，たたら操業に伴う炉内再結合滓（第３章第５節第 64 図 182）にも釉薬瓦が付着するなど，高殿建物や周辺建物の一部に釉薬瓦が使用された可能性が高い。

石見焼の来待釉を施した赤瓦は，18 世紀末には成立し，19 世紀前半以降に各地に広がったと考えられ（熱田 2017），また江戸期の終わり頃から常滑焼などで生産が行われて幕末から明治初年以降に普及する土管（柿田 1992）が４期の床釣りに伴う息抜き穴に採用されたことを踏まえると，本床埋土内の炭化物の年代測定値（第５章第１節）が示した 19 世紀以降で，４期の操業時期は 19 世紀中頃から後半期と推定され，３期はそれ以前の 19 世紀初頭から中頃の操業年代を示す可能性が想定できた。

3　製鉄関連具・石造物の特徴（第４章）

今回報告した製鉄道具の打鍬および種鋤・釜がいや，信仰の対象であったと考えられる神像・初花は，田儀櫻井家のたたら場で村下や炭坂を務めた川上家が所蔵する製鉄関連具である。川上家は1744 ～ 1748 年（延享期）頃から越堂鈩山内に代々居住していたと考えられ（庄司 2009），これらの製鉄関連具は，越堂鈩を含む田儀櫻井家のたたら場の操業と関連が深いと推測される（第４章第１節）。

また越堂鈩山内の東側の亀山山麓には，如来坐像が鎮座している。背面には「願主／雲刕越道櫻井幸左衛門」と記されており，田儀櫻井家の６代目当主である幸左衛門義民が願主であったことが分かる。越堂鈩は 1771 年に５代順之が買い請けており，その後の６代義民が活躍した 18 世紀後半頃に如来坐像が造立された可能性がある（第４章第２節）。現在は越堂鈩山内を見渡せる場所に鎮座しているため，当時から信仰の対象となっていたことが想定される。

4　床釣りの地中レーダー探査の成果と意義（第３章第３節・第５章第３節）

今回の発掘調査は，床釣り上部の本床と小舟を含む本床釣り部分を対象としており，下部の下床釣りの詳細な構造は不明であった。そのため，掘削を伴わずに地下の構造の一部をある程度推定することが可能な地中レーダー探査を３・４期の下床釣りを対象に実施した。探査の結果，３箇所の高さで物性境界面を示す高い反応が得られた（第５章第３節）。これらは下床釣りに伴う構築面の一部である可能性が考えられ，反応のあった最下面の深さは，４期の床釣り掘形上面から概ね 3.04m 程度であった（第３章第３節）。この深さが床釣り掘形の床面を示していると仮定すると，朝日たたら跡や弓谷たたら跡の床釣りの深さ（杉原ほか編 1983，田中編 2000）と同程度であることが分かる。

さらに，田儀櫻井家のたたら製鉄経営で村下や炭坂を任された川上家の文書史料には，この頃にたたらの普請や床釣りの修繕を行った様子が具体的に示されている（鳥谷 2017）。そのなかで，床釣りの掘り下げは約 3.03m であると記録されており，今回の地中レーダー探査の測定値と概ね整合的であることが注目される。また，坊主石などの下床釣りの構築過程も文書史料に示されていることから（鳥谷 2017），こうした構造を持つ下床釣りが構築されていた蓋然性が高い。

5　文献史料の調査成果と鳥屋尾家新出文書（第６章・文献解題・文書目録）

（1）文献史料の調査成果

田儀櫻井家のたたら製鉄は，たたら場の発掘調査や自然科学分析のほか，関連する文献史料の調査によって具体的に明らかになる部分が多い。今回の文献史料の調査では，明治初期の越堂・宮本の景観復元とたたら経営の検討，19 世紀の出雲国の砂鉄輸送の展開，そして明治初期の田儀櫻井家の主要販売品となった稲扱の流通と廻船輸送の動向に焦点が当てられている。

明治初期の越堂・宮本の景観復元とたたら経営については，明治初期における実地調野帳や切図をもとに当時の越堂・宮本の景観復元を行い，『田儀村誌』（渡辺ほか編 1961）掲載の越堂鈩山内建物配置図の内容を検証している（第６章第１節）。また明治初年以降のたたら経営についても，田儀櫻井家

の経営再建の様子が具体的に明らかにされている。

越堂鈩の操業には，他地域からの砂鉄の調達が大きな役割を果たしており，田儀櫻井家の砂鉄調達の様相と出雲国での廻船を用いた地域間の輸送の展開について新たな史料から検討が行われた（第6章第2節）。19世紀前半に従来から砂鉄の主要調達先であった石見国浜田藩領からの輸送が困難となり，その代替措置として出雲国神門郡西園村での砂鉄の調達を開始する状況になったが，その背景には日本海沿岸地域での小型廻船による流通形態が存在していたことが示された。

明治初期における田儀櫻井家のたたら製鉄は，稲扱が販売主品目として生産されるようになり，田儀櫻井家の稲扱流通と廻船による輸送の詳細な状況について新たな稲扱関連史料をもとに検討された（第6章第3節）。そのなかで明治初年頃の大坂では，田儀櫻井家の稲扱が流通しており，販売圏は近江まで達していたことが確認でき，田儀櫻井家の稲扱の評判や品質ともに良好であった様子が窺える。また稲扱輸送の経路は，下関を中継拠点として九州や大坂へと出荷していたことが把握された。

（2）文献解題・文書目録（鳥屋尾家新出文書）

近世後期から明治初年に廻船業を経営した鳥屋尾家の新たな史料が近年確認された。そこには田儀櫻井家や越堂鈩に関連する史料が含まれており，また他地域の廻船問屋からの書状も多く認められる。それまで知られていた鳥屋尾家文書を含めて総数2,100点という膨大な文書史料となり，まとまった廻船業関係史料が稀少な現状から見て，近世から近代にかけての流通状況を読み解くうえで重要な史料群となる。

今回の報告では，鳥屋尾家新出文書を今後の調査研究に資する重要な基礎史料として位置づけて整理し，文献解題と文書目録を掲載することにより史料群の全体像を提示することができた。

6　長期間操業にみる越堂鈩の改修とその背景（第7章第1節）

越堂たたら跡の発掘調査は，たたら場の操業を示す高殿関連の遺構が見つかったほか，約150年間もの長期間におよぶ操業の様相が高殿と床釣りの造り替え痕跡として確認できたことが大きな成果であった。越堂鈩の改修とその背景について，今回の調査成果や文献史料の内容を整理して検討した。

1～2期の高殿の改修は，田儀櫻井家が本格的に越堂鈩の経営を担うことによる鉄生産の拡大や施設の拡充が意図された改修であった可能性を推測した。2～3期の高殿の改修は，19世紀初頭に高殿が焼失するが，早急に復旧して操業を再開させる必要に迫られて行われたと考えられる。3～4期の床釣りの改修は，老朽化に伴う床釣りの改修のほか，一時的に田儀櫻井家以外の経営体制になるなど生産体制の変化や，19世紀後半に田儀櫻井家の主要な販売品目が稲扱となる状況（第6章第3節）による取扱品目の変化などが関連した可能性が考えられた[(2)]。

これら越堂鈩の各時期の状況に共通するのは，高殿の別場所への移転や高殿・床釣りの抜本的な造り直しではなく，同じ場所で高殿や床釣りの改修が行われており，それまでの経済的・地理的基盤を維持しつつ，既存のたたら場の機能を最大限に活かすことで，高殿や床釣りの改修に伴う影響を最小限に抑えてたたら製鉄経営の安定化を志向したと思われる。

こうした越堂鈩の様相を踏まえて，越堂鈩と同様に長期間操業を行った恵口鈩（江津市川平町）と

宇根鈩（仁多郡奥出雲町）の事例を概観し，複数の高殿経営や床釣りの改修など，それぞれのたたら場の状況に応じた手法によって同一場所でのたたら場の操業を長期間維持した様相が確認できた。

7　越堂たたら跡出土砂鉄の分析成果と砂鉄流通の展望（第５章第２節･第７章第２節）

越堂たたら跡の発掘調査では，２期の操業面や各時期の盛土などで砂鉄が確認できた。これらを越堂鈩操業に伴う砂鉄試料として，朝日鈩の砂鉄置場で採取された砂鉄試料とともに，砂鉄の磁鉄鉱の形態分析や化学組成分析を実施し，また山陰地方各地の河川流域などで採取した砂鉄試料も比較試料として同時に分析が試みられ，それぞれの砂鉄試料の特徴が明らかになった（第５章第２節）。

こうした砂鉄における磁鉄鉱の化学組成分析の成果を援用し，越堂たたら跡・朝日たたら跡の砂鉄試料の時期的変遷を検討した（第７章第２節）。同時期の海岸部の越堂鈩と山間部の朝日鈩，そして越堂鈩の各時期で磁鉄鉱の成分に違いが生じる様相を把握した。この砂鉄試料の磁鉄鉱成分の時期的な変化と文献史料における砂鉄調達の変遷を照らし合わせて整理し，越堂鈩の砂鉄流通を展望した。

8　田儀櫻井家のたたら製鉄経営からみた越堂鈩の評価（第７章第３節）

今回の発掘調査の成果や文献史料の内容を盛り込みつつ，田儀櫻井家のたたら製鉄経営全体から捉えた越堂鈩の位置づけが考察された（第７章第３節）。江戸後期から幕末，そして明治初年頃の田儀櫻井家や越堂鈩の産鉄量が整理され，出雲国の神門郡に拠点を置いて山間部のたたら場の操業と海岸部に立地する越堂鈩の操業を同時に実現した田儀櫻井家の製鉄経営の特質とその実態に迫っている。

越堂たたら跡の発掘調査で明らかになった高殿の規模や構造について，田儀櫻井家が経営した他のたたら場（吉野鈩・聖谷鈩・掛樋鈩・朝日鈩・檀原鈩・日ノ平鈩）との比較検討によって越堂鈩の高殿の特徴が明らかになった。越堂鈩の湯溜まりについては，その規模が概ね判明している周辺地域のたたら場における湯溜まりとの比較が行われ，大形の規模を持つ越堂鈩の湯溜まりは，銑に力点を置いた生産のあり方を示していると評価された。また，製鉄炉地下構造である床釣りは，本床と小舟の位置関係から類型化されて地域的な特徴が示されており（角田 2014），越堂鈩を含め田儀櫻井家のたたら場の構造は高殿Ⅱａ類（本床床面と小舟甲の高さが概ね同一である造り）に該当し，この類型は石見東部沿岸地域の経営者および技術者との関わりの深さが反映されている可能性が示唆された。

越堂鈩は，日本海沿岸部に設けられた田儀櫻井家の基幹的なたたら場として長期間操業された。幕末頃の産鉄量の変遷（鳥谷 2011）から見ると，田儀櫻井家は出雲国の主要な鉄師のなかで一二を争うほどの産鉄量を誇っていたが，その製鉄経営を支えたのが越堂鈩の銑生産であった。今回，越堂たたら跡の全体的な発掘調査や文献史料の調査などが行われたことで，これまで調査事例が少なかった日本海沿岸部に立地するたたら場の具体的な様相とともに，越堂鈩を中心とした田儀櫻井家のたたら製鉄経営の実態についてもその一端が明らかになった。今後は，今回報告した越堂たたら跡の調査成果をもとに，田儀櫻井家のたたら製鉄の全体的な実態解明に向けて，多角的な視点から田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の調査研究を進めていくことが求められる。（幡中光輔）

註

（1）各時期の製鉄関連遺物を含めた出土遺物の特徴と時期的変遷は，第3章第5・6節にて詳細に報告している。

（2）なお，越堂鈩山内に代々居住して田儀櫻井家のたたら製鉄と関わりの深い川上家の文書史料には，1863（文久3）年に行われた床釣りの修繕の作業工程が具体的に記されている（鳥谷 2017）。この記録は越堂鈩の改修を記した可能性が想定され，その場合には，この作業記録が4期の床釣りの改修状況を具体的に示していると考えられる。

参考文献

熱田貴保 2017「来待釉赤瓦の成立」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター研究論集第17集　島根県古代文化センター　151 ～ 155頁

石原　聡編 2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成16 ～ 18年度の調査―』出雲市の文化財報告1　出雲市教育委員会

柿田富造 1992「[土管] 仕様の変遷―古代から明治まで―」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅴ　常滑市教育委員会　3 ～ 29頁

角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂出版

庄司幸恵 2009「目録解題　智光院文書」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8　出雲市教育委員会　194頁

杉原清一・田中迪亮・大谷昌武編 1983『朝日鈩』佐田町教育委員会

田中迪亮編 2000『弓谷たたら』頓原町教育委員会

鳥谷智文 2004「田儀櫻井家の沿革」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会　19 ～ 38頁

鳥谷智文 2008「掛樋・越堂・聖谷たたらの文献調査」『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書―平成16 ～ 18年度の調査―』出雲市の文化財報告1　出雲市教育委員会　106 ～ 111頁

鳥谷智文 2011「近世後期における出雲の鉄師」『たたら製鉄と近代の幕開け』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録　島根県立古代出雲歴史博物館　56 ～ 57頁

鳥谷智文 2017「たたら経営に携わる人々の特質―田儀櫻井家を事例として―」『たたら研究　特別号（60周年記念論文集）』たたら研究会　137 ～ 151頁

藤原雄高 2009「田儀櫻井家の鈩・鍛冶屋の変遷」『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』出雲市の文化財報告8　出雲市教育委員会　101 ～ 113頁

渡辺勝治・田中幸治郎・竹下秀雄・田中恒由編 1961『田儀村誌』多伎町役場

文献解題（鳥屋尾家新出文書）

1　鳥屋尾家文書と新出史料群の発見

鳥屋尾家（屋号：油屋）は，出雲国神門郡口田儀村（現出雲市多伎町口田儀）に居住し，近世後期から明治初期にかけて廻船業を経営した旧家である。同家の成立は近世初期に遡るようだが，廻船業との関係は近世後期から明治初期にかけての時期で，６代目の彦左衛門・７代目の浅右衛門・８代目の勝蔵の時代にあたる[(1)]。同家の廻船業は，300 石積程度の中型廻船を用い，日本海沿岸から瀬戸内海・北部九州方面を商売圏としたものであった。また，隣村の奥田儀村に居住した鉄師・田儀櫻井家の産鉄流通にも関与しており，鉄の商品流通との関係も指摘されている[(2)]。

このような廻船業の実態を明らかにしたのは，鳥屋尾家に伝来した約 500 点の史料群が整理・紹介されたことによる（以下，史料群 A と呼ぶ）[(3)]。史料群 A は仕切状と書状で構成されていること，いずれも廻船業に関する史料であることから，鳥屋尾家が廻船業を経営した，近世後期から明治初期にかけて蓄積されたものと指摘されている。こうした史料的性格から，鳥屋尾家文書は近世後期から近代における山陰廻船の実態を示す事例として注目されてきた[(4)]。

ところが，史料群 A が紹介された後，これとは別の史料群（以下，史料群 B と呼ぶ）が鳥屋尾家で発見された（現在は史料群 A・B ともに出雲市蔵）。この史料群 B を出雲市文化財課で確認したところ，鳥屋尾家の廻船業に関するものが多いのはもちろん，本書のメインテーマである，田儀櫻井家あるいは越堂釿に関する史料も含むことが判明した。そこで，史料群 B の整理作業と目録作成を実施することとした。

2　新出史料群（史料群 B）の概要

史料群 B は３つの収納容器に分けられており，その内訳は中性紙箱２箱と木箱１箱である。中性紙箱･木箱ともに、数点から数十点程度の史料を中性紙や中性紙封筒でまとめた状態となっていたが，史料を１点ずつ整理した痕跡はなかった。過去に整理の手が入った形跡があるものの，途中で整理作業を断念したものと推測される。こうした状況もあり，上記の整理がおこなわれる前の収納状況は不明である。

さて，史料群 B を整理して目録作成をおこなったところ，史料群全体の概要が明らかになった。まず，数量は約 1,600 点に及んでいる。この結果，史料群 A も含めた鳥屋尾家文書全体の点数は約 2,100 点という規模に膨れ上がることとなった。出雲国において，このような規模の廻船業関係史料群を有する事例がそもそも僅少という現状を踏まえると[(5)]，今回鳥屋尾家文書の全体像が判明したことは大きな意義があると考えられる。

また，史料はほとんどが書状と一紙物であることが判明した。鳥屋尾家の廻船業に関する史料，田儀櫻井家あるいは越堂釿に関する史料が多くみられるほか，他地域の廻船問屋からの書状も多い。特

に，越後国出雲崎の敦賀屋や，同国新潟の小川屋からの書状が散見される点は注目される。なお，廻船業に関する帳簿は表紙と裏表紙のみが現存し，中に綴じられていた料紙は失われている。

このように，史料群 B のさらなる分析はもちろん，史料群 A とあわせて検討することにより，鳥屋尾家の廻船業だけでなく，田儀櫻井家や他所の廻船業者との関係など，同家の廻船業をとりまく状況をより鮮明に掴みとることが可能になるだろう。

〔付記〕

本稿の作成にあたっては，中安恵一氏，藤原雄高氏，八幡一寛氏，春日瞳氏より貴重なご教示をいただきました。末筆ながらここに記して感謝の意を表します。

（中山玄貴）

註

（1）出雲市教育委員会編 2009『田儀櫻井家　たたら史料と文書目録』（出雲市の文化財報告 8）出雲市教育委員会

（2）仲野義文 2004「田儀櫻井家の産鉄流通について」『田儀櫻井家　田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』多伎町教育委員会

（3）前掲註（1）報告書所収，「鳥屋尾家文書目録」，前掲註（2）仲野論文。

（4）道重哲男・相良英輔編 2005『出雲と石見銀山街道』（街道の日本史 38）吉川弘文館

（5）出雲国において数千点規模の数量を有する史料群は，鳥屋尾家文書以外では出雲市大社町の藤間家文書が挙げられる（勝部眞人 2005『幕末維新期の出雲・大社地方における史的特質―大社町藤間家を中心として―』平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告書）。

目録凡例

- 本目録は，鳥屋尾家文書のうち，新たに発見された史料群（史料群 B）の文書目録である。
- 本目録作成にあたり，文書目録には箱番号と整理番号を付した。箱番号のうち，1 と 2 は中性紙箱に収納されていた史料，3 は木箱に収納されていた史料である。
- 整理番号は，各史料 1 点，1 冊，1 袋（一括）ごとに付した。この中に複数の史料がある場合は，史料 1 点ごとに枝番号を付けている。また，1 点ごとの番号が必要でないと判断した場合，点数を数え上げて数量欄に反映した。
- 原則として常用漢字を使用し，旧字体や異体字はできる限り新字体に改めた。
- 「而」，「ニ」，「者」や「𠮟」などはそのまま記した。
- 判読できない文字は□，虫損あるいは判読できない文字は■，複数の文字にわたって判読できない文字は［　　］で示した。
- 史料名は，原則として史料に記載がある表題を記した。史料に表題がない場合は，〔　〕で文書名を付した。また，各史料とも（　）内にその内容を要約して記した。
- 備考欄には，史料中に登場する印や，包紙・袋の文字情報，あるいは史料の一括状況等を適宜記した。

鳥屋尾家新出文書目録　（出雲市所蔵）

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
1-1	—	—	〔絵図〕（田儀川下流域の絵図）	神門郡奥田儀村庄屋　文七、年寄　重四郎、年寄　善左衛門	—	一紙（絵図）	1	
1-2	10月20日	—	〔書状〕（米仕切値段、相場などの報告）	松原屋小兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	
1-3	2月8日	—	〔書状〕（尊君様方へ寄宿する積りなどを通知）	松原屋小兵衛	御父上様	切継紙	1	
1-4	7年4月	—	記（酢の代金を領収した旨）	松原酢店（印）	鳥屋尾利太郎	切紙	1	印は「石見国／大森町／松原商店」。
1-5	正月20日	—	〔書状〕（年賀の挨拶）	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
1-6	7月23日	—	〔書状〕（角野屋の法事を欠席する旨など）	松原屋小兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	封筒入、上書「油屋浅右衛門様　松原屋小兵衛」、「尊下用書」。
1-7	12月5日	—	〔書状〕（去丑年取替銭の返済を催促する旨）	松原屋小兵衛	高見屋吉右衛門、高見屋新右衛門、沖屋与次兵衛、潮東屋四郎左衛門	切継紙	1	端裏書「雲州下古志村高見屋吉右衛門様、同神在沖村潮東屋四郎右衛門様　石州大森松原屋小兵衛　扣へ」。
1-8	天保9年2月	1838	乍恐以書附奉願上候（石州大田村大願寺本堂修復に関する金銭について）	大田南村百姓　題助	大森御役所	継紙	1	小破。
1-9	5月7日	—	〔書状〕（積下り荷物の販売状況などを報告）	春徳丸仁平	鳥屋尾御主人	切継紙	1	封筒入、上書「島根県管下出雲国　神門郡口田儀駅　鳥屋尾勝蔵様」、「尊下至急用」、裏書「羽後国庄内酒田港船場町　奥村七三郎様宅　春徳丸仁平」。
1-10	12月5日	—	〔書状〕（去丑年取替銭の返済を催促する旨）	松原小兵衛	高見屋吉右衛門、高見屋新右衛門、沖屋与次兵衛、潮東屋四郎左衛門	切継紙	1	封筒入、上書「松江市末次本町大橋館　鳥屋尾美登殿」、「親展」、裏書「大森　松原小兵衛」。
1-11	2月4日	—	〔書状〕（返金に関する件）	—	—	切継紙	1	
1-12	2月4日	—	目録（御樽・御肴料など）	松原屋内	油屋	切継紙	1	
1-13	—	—	〔書状〕（別紙浜田の件に関する旨）	—	—	切継紙	1	
1-14	辰3月朔日	—	覚（橋船の新造にかかる代銀を受領した旨）	備前屋喜兵衛（印）	幾徳丸卯重	切継紙	1	
1-15	5月晦日	—	〔書状〕（氏神社奉納品の相談など）	松原屋小兵衛	御父上	切継紙	1	
1-16	—	—	〔包紙〕	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。包紙上書「油屋彦左衛門様　松原屋小兵衛」、「尊下」、「亥二月十七日改（異筆ヵ）」。
1-17	2月4日	—	〔書状〕（みへを参上させる旨など）	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
1-18	—	—	〔一紙〕（帳面類の表紙、裏表紙など）	—	—	切紙	34	
1-19	午2月29日	—	長門行悉皆記	—	—	横半帳	1	
1-20	—	—	江戸道中記（江戸ゟ伊勢迄道法など）	—	—	横半帳	1	
1-21	未5月朔日	—	土州行悉皆記	彦左衛門、新三郎	—	横半帳	1	
1-22	午5月朔日	—	土佐ゟ大坂行道中記	—	—	横半帳	1	
1-23	巳10月15日	—	道中悉皆記	—	—	横半帳	1	
1-24	明治6年2月ヨリ	1873	御用留	副戸長　鳥屋尾勝蔵	—	横半帳	1	虫損大破。
1-25	明治9年1月吉日	1876	諸品売買記	油屋浅右エ門	—	横帳	1	虫損小破。
1-26	安政3年10月	1856	浪花太物繁栄諸国取引便覧	—	—	一紙	1	刷物。
1-27-1	—	—	納米［　］帳（米元受、米売却座など）	鳥屋尾吉蔵	—	横帳	1	虫損大破。
1-27-2	3月18日	—	記（金銭書上げ）	久七	本鳥屋尾	切紙	1	184丁目に挟まる。
1-27-3	明治37年10月	1904	明治三十六年度上納米預高（上納米書上げ）	中作人　佐々木喜助（印）	田儀町　鳥屋尾	切紙	1	綴痕あり。1-27-3～5は326丁目に挟まる。
1-27-4	—	—	キ（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
1-27-5	明治36年6月	1901	記（売却した米の代金を渡した旨）	高見甚次郎	鳥屋尾美登殿後見鳥屋尾吉蔵	切紙	1	
1-28	—	—	［　　］払帳（元請、払座など）	油屋［　　］	—	横帳	1	虫損小破。
2-1	子5月22日	—	目録（金銭書上げ）	大浦屋為十（印）	油屋勝蔵、同久八	切継紙	1	虫損小破、印は「雲州／大浦屋」。2-1～20はこよりで一括。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-2	巳5月18日	—	御買［　　］（田儀銑）	麦屋重蔵（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	虫損小破。
2-3	午9月15日	—	覚（金銭書上げ）	かちや健蔵（印）	油屋万蔵、小川屋御店	切紙	1	印は「北越／新潟／鍛冶屋」。
2-4	12月2日	—	〔書状〕（境港で陸揚げした米の扱いなどを通知）	治郎兵衛	油屋勝蔵	切継紙	1	
2-5	9月29日	—	〔書状〕（綿の取り扱いについて）	油屋彦左衛門	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	端裏書「幾徳丸勝蔵殿　油屋彦左衛門」、「無事」。
2-6	11月21日	—	〔書状〕（東村の忠左衛門と乙立村の与一兵衛へ金銭関連の証文を送った旨）	なかや貞助	油屋勝蔵	切継紙	1	端裏書「油屋勝蔵様　なかや貞助」、「急用」。
2-7	亥7月	—	覚（金銭と人名の書上げ）	太田屋与平	油屋	切継紙	1	
2-8	神在月20日	—	〔書状〕（油屋から預かっているものについて）	大居屋運蔵	油屋勝蔵	切継紙	1	端裏書「油屋勝蔵様　大居屋運蔵」、「用」。
2-9	正月29日	—	覚（種油代など書上げ）	（印：伊勢屋久治郎）	幾徳丸勝蔵、大野屋伝七	切継紙	1	印は「大坂長堀／白髪橋北詰／伊勢屋久治郎」。
2-10	巳5月23日	—	覚（辰秋揚置分鉄代など）	麦屋重蔵（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	虫損小破。印は「伏木／麦重」。
2-11	11月21日	—	目録覚（髪結代など）	石州屋七郎兵衛（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「尾道／石州屋／七郎兵衛」。
2-12	卯10月5日	—	覚（長割仕切手形分など）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「能州／所口／北野屋」。
2-13	26日	—	〔書状〕（紙入を栄太便で送ることを依頼する旨）	宮市郎	中勝蔵	切継紙	1	端裏書「中勝蔵様　宮市郎」、「用」。
2-14	巳5月21日	—	覚（仕切について金銭書上げ）	太田屋宗吉（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「越中／伏木／太宗」。
2-15	卯4月16日	—	覚（銑引当金など書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-16	酉4月20日	—	覚（黒中平瓦など仕切）	瓦や秀三郎	油や勝蔵	切紙	1	
2-17	9月20日	—	〔書状〕（源平を差し向けられた件ついて）	五郎蔵	油屋勝蔵	切継紙	1	端裏書「油屋勝蔵様　五郎蔵」、「用答」。
2-18	3月7日	—	〔封筒〕	山城屋作右衛門	幾徳丸勝蔵、同源平	一紙（封筒）	1	封筒入、上書「幾徳丸勝蔵様、同源平様　山城屋作右衛門」、「貴下要用」、裏書「三月七日」。
2-19	午4月13日	—	覚（鹿地鉄細代など金銭書上げ）	川口や吉三郎（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	
2-20	7月21日	—	〔書状〕（米の売却に関する旨）	櫻井内豊平	浅右衛門	切継紙	1	
2-21	亥2月27日	—	入用金（雑貨など書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。2-21～2-92が中性紙封筒入。2-21～52はこよりで一括。
2-22	亥6月28日	—	覚（木綿代を受領した旨）	大坂屋廣助	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「今中／大坂屋廣助」。
2-23	戌2月	—	覚（焚込、しい竹など預った旨）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	小破、印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-24	12月16日	—	覚（米代不足分の書上げ）	大嶋又蔵（印）	田儀油屋［　　］	切紙	1	小破。
2-25	10月3日	—	覚（広ふた代など書上げ）	油屋浅右衛門	下番所	切紙	1	
2-26	5月18日	—	〔書状〕（銑鉄の積み入れなどを通知）	櫻井内貞助	浅右衛門	切継紙	1	
2-27	—	—	覚（冨様などへの祝儀書上げ）	油屋浅右衛門		切紙	1	
2-28	6月17日	—	覚（金銭書上げ）	虎屋直兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「伯州／境津／虎屋」。
2-29	丑11月9日	—	覚（繰綿や米などの相場書上げヵ）	黒田屋千三郎	油屋	切継紙	1	
2-30	亥2月2日	—	覚（素麺代書上げ）	小豆嶋屋廣太（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「雲州／宇龍／小豆嶋屋」。
2-31	午9月20日	—	覚（金銭書上げ）	木屋四兵衛（印）	油屋勝蔵	切紙	1	印は「越後／新潟／木屋」。
2-32	亥10月5日	—	覚（木綿代として金銭を受け取った旨）	大坂屋廣助（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「今中／大坂屋廣助」。
2-33	—	—	覚（菓子代、みかん代など書上げ）	新蔵	中油屋	切紙	1	
2-34	11月14日	—	覚（金銭書上げ）	西村屋	幾徳丸	切継紙	1	
2-35	7月17日	—	覚（塩代を送った旨）	本奥屋宇左衛門	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-36	寅3月	—	仕出し覚（上々田7畝12歩）	枝塚	浅右衛門	切紙	1	
2-37	甲寅8月16日	—	覚（真綿売渡代金の書上げ）	金引屋友七右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-38	寅12月	—	覚（井上志儀の懸け戻し銭を受領した旨）	油屋浅右衛門（印）	佐市	切継紙	1	印は「雲州／田儀／油屋」。
2-39	戌正月24日	—	覚（酉利金受取状）	油屋浅右衛門（印）	大池善助	切紙	1	印は「雲州／田儀／油屋」。
2-40	8月20日	—	おほへ（「シ2升」を所望する旨）	角油屋右佐市	卯十	切紙	1	
2-41	辰8月18日	—	覚（仕切代銀を受領した旨）	櫻井（印）	浅右衛門	切紙	1	印は「宮本／鍛冶屋」。
2-42	12月9日	—	相庭（筑前米、肥後米などの相場報告）	大野屋伝七（印）	油屋浅右衛門、幾太郎	切継紙	1	継目剥離。印は「大坂／大野伝」。
2-43	子3月4日	—	覚（木綿代などの書上げ）	大坂屋廣助	油屋浅右衛門	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-44	—	—	送り状（他船の便にて黒砂糖などを送る旨）	幾徳丸内源平	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-45	5月23日	—	おほへ（鯡の注文を依頼する旨）	和田	油や浅右衛門	切紙	1	
2-46	子12月18日	—	〔書状〕（先日お立寄の礼と歳暮進上の旨）	大坂屋廣助	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　大坂屋廣助」、「尊下用書」。
2-47	8月10日	—	〔書状〕（小櫻屋利払出し銭についての報告）	貞助	浅右衛門	切継紙	1	
2-48	3月10日	—	〔書状〕（久村大野屋宇三郎の借用関係など）	小田村　荘左衛門	口田儀町　浅右衛門	切紙	1	
2-49	亥12月13日	—	覚（生麩など調達の依頼）	宮本（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	印は「宮本／［　　］屋」。
2-50	2月7日	—	覚（干菓子、羽釜代など受取証）	大浦屋為十（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／大浦屋」。
2-51	寅7月24日	—	覚（金銭書上げ）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／安来／笹千」。
2-52	亥2月14日	—	覚（操綿代の書上げなど）	岡本屋藤兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／今市／岡藤」。
2-53	—	—	覚（銭高と利の書上げ）	—	—	切紙	1	2-53～62はこよりで一括。
2-54	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡ヵ。
2-55	11月5日	—	覚（てんま代など書上げ）	船大工　新六	田儀　油屋	切紙	1	包紙入、上書「田儀油屋様　きつき船大工新六」。
2-56	—	—	〔一紙〕	—	油屋浅右衛門	切紙	1	断簡。
2-57	寅10月11日	—	覚（焚込、飛印代など書上げ）	木綿屋由右衛門	幾徳丸勝蔵、源平	切継紙	1	虫損小破、印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-58	寅7月10日	—	覚（鉄製品の取り扱いについて通知）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／安来／笹千」。
2-59	—	—	〔一紙〕（「南無大慈大悲観世音菩薩」）	—	—	切紙	11	綴痕あり、包紙入（こより3点同封）。
2-60	4月12日	—	〔書状〕（越中伏木における銑鉄の景気や米相場を報告）	幾徳丸幾太郎	油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏に鉛筆書で「476」とあり、継目剥離。
2-61	亥6月26日	—	覚（鍔代など金銭書上げ）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／安来／笹千」。
2-62	酉2月15日	—	覚（越銑、宮本櫻などを積み出す旨）	越堂御鑢	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	
2-63	正月2日	—	〔書状〕（年賀の挨拶）	西綿屋利右衛門	油屋浅右衛門、御同勝蔵	切紙	1	刷物。2-63～70までこよりで一括。
2-64	酉10月2日	—	相庭（三嶋米、三田米など）	敦賀屋	—	切紙	1	印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
2-65	正月5日	—	初相場（米、大豆など初相場と年賀の挨拶）	笹屋五郎兵衛（印）	油屋宇十郎、余人々御中	切紙	1	印は「うんしう／やすぎ／笹五」。
2-66	6月6日	—	当時相場（高田御蔵米、御天料米など）	信濃屋市右衛門	—	切継紙	1	
2-67	正月6日	—	初相場（中国新米、筑前新米など）	北風荘右衛門	—	切紙	1	小破。
2-68	正月5日	—	初相場（初相場と年賀の挨拶）	肥後屋武三郎（印）	油屋浅右衛門	折紙	1	印は「雲州／松江／肥後屋」。
2-69	子8月29日	—	当時相場（三田米、大豆など）	小川屋長右衛門	—	切紙	1	
2-70	—	—	相場（小割、銑など）	大黒屋安右衛門	—	切紙	1	
2-71	午年2月27日	—	覚（入銭などの書上げ）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／平田本町／市場西側／黒千改」。2-71～91まで紐で一括。
2-72	2月5日	—	〔書状〕（薬の服用方法など）	丘之舎元於	中油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「中油屋浅右衛門様　丘之舎元於」、「貴下要用」。
2-73	安政2年2月19日	1855	覚（木綿代を受領した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-74	閏2月	—	覚（瓦代など書上げ）	神原瓦屋浅蔵（印）	浅右衛門	切継紙	1	
2-75	12月	—	覚（油代など書上げ）	甫一郎	浅右衛門	切紙	1	
2-76	□10月11日	—	目録（金銭書上げ）	大浦屋為重（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／大浦屋」。
2-77	8月29日	—	覚（大工賃など書上げ）	堺屋佐次兵衛（印）	幾徳丸分	切紙	1	印は「堺佐」。
2-78	丑8月13日	—	〔書状〕（木綿の積み出し、春の運賃勘定など）	灘吉丸喜三郎	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-79	23日	—	〔書状〕（融通会所出金に関する旨）	文七	浅右衛門	切継紙	1	
2-80	丑11月6日	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-81	—	—	覚（亥上納人別、見米などの書上げ）	油屋浅右衛門	蔵本又右衛門	切紙	1	
2-82	酉12月15日	—	覚（織帆8本を受領した旨）	（印：菊屋藤兵衛）	幾徳丸	切紙	1	印は「現銀／長州／下之関／御□道具所／菊屋藤兵衛」。
2-83	巳3月8日	—	覚（うすそら色紋付など調達の依頼）	大坂屋熊十	油屋浅右衛門	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-84	卯10月16日	—	覚（切手せん代、粮米代など書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	虫損小破。
2-85	未11月8日	—	覚（真綿代書上げ）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「平田／黒田屋」。
2-86	午5月15日	—	覚（越の雪代など書上げ）	若さ屋嘉助（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「若嘉」。
2-87	未6月4日	—	覚（醤油、みりん代など書上げ）	京屋店	油屋勝蔵	切紙	1	
2-88	9月1■日	—	覚（金銭を送った旨）	［　　］吉（花押）	油屋浅右衛門	切紙	1	大破。
2-89	—	—	〔包紙〕	中川屋多七郎	油屋浅右衛門	切紙	1	包紙上書「大の伝様ニて　油屋浅右衛門様　中川屋多七郎」、「無事要用書」、裏書「■月十七日相認メ」。
2-90	閏2月11日	—	〔書状〕（幾徳丸源平の動向や銑相場などを報告）	大野屋伝七	油屋浅右衛門	切継紙	1	小破。
2-91-1	7月13日	—	覚（つるべ代など書上げ）	貞三郎	浅右衛門	切継紙	1	2-91はこよりで一括。
2-91-2	午7月	—	覚（金銭書上げ）	久手屋瀬蔵	油屋	切継紙	1	
2-91-3	午7月16日	—	覚（椀代などの書上げ）	ぬり屋彦市	御親方	切紙	1	
2-91-4	午7月	—	覚（金銭書上げ）	かじや平蔵	油屋	切継紙	1	
2-91-5	午7月	—	覚（金額と下女など人名の書上げ）	大田屋	中浅右衛門	切紙	1	
2-91-6	午7月	—	覚（打釘代などの書上げ）	かじや愛助	油屋勝蔵	切紙	1	
2-91-7	午7月	—	覚（金銭書上げ）	米四郎	下油屋	切紙	1	
2-91-8	午7月	—	覚（染直し代などの書上げ）	こんや清三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-91-9	午7月	—	覚（切手代などの書上げ）	油屋店武十郎	油屋彦右衛門	切継紙	1	
2-92-1	—	—	覚（作料などの書上げ）	下油屋木屋万平	油屋	切紙	1	2-92は切紙を貼り繋ぎ、巻子状になる。端から順に番号付け。
2-92-2	—	—	〔覚〕（とき桶、つるべ代などの書上げ）	貞三郎	浅右衛門	切紙	1	
2-92-3	子2月29日	—	覚（預り金の書上げ）	工屋庄九郎（印）	口田儀村　油屋浅右衛門	切紙	1	印は「石州／□川／［　　］」。
2-92-4	極月晦日	—	〔覚〕（「塩積久村行」代と小麦代の書上げ）	—	—	切紙	1	前欠。
2-92-5	22日	—	〔書状〕（金子借用のために使者を遣わした旨）	多次郎	油彦	切紙	1	端裏書「油彦様　多次郎」、「貴下」。
2-92-6	天保10年7月	1839	覚（新納屋平助の志儀銭を預かった旨）	本人鳥屋尾貞助（印）、受人高橋林八（印）	御鑪取次	切紙	1	
2-92-7	菊月18日	—	〔書状〕（上方行きの銑の取り扱いなど）	—	—	切紙	1	前欠。
2-92-8	—	—	覚（瓦代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
2-92-9	—	—	〔書状〕（幾徳丸源平の帰帆、北国で積み入れた米の取り扱いなど）	宮両人	出店彦左衛門	切継紙	1	後欠ヵ。端裏書「出店彦左衛門様　宮両人」、「用□」。
2-92-10	子7月10日	—	〔覚〕（金銭書上げ）	かわらや浅蔵（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	前欠。
2-92-11	亥極月26日	—	覚（金銭受取について）	大坂屋廣助（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「今中／大坂屋廣助」。
2-92-12	子7月8日	—	覚（米代の勘定が皆済した旨）	恵比須屋作平	油屋幾太郎	切紙	1	
2-92-13	子7月	—	覚（代金を受領した旨）	石見や理助	油や浅右衛門	切継紙	1	
2-92-14	子10月14日	—	覚（銑鉄下り銀を受領した旨）	越堂御釿（印）	浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-15	嘉永5年閏2月8日	1852	覚（扱苧代を受領した旨）	中灰屋喜代平（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「石銀／［　　］／中灰屋」。
2-92-16	閏2月14日	—	覚（瓦代を請求する旨）	瓦屋浅蔵（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-92-17	子4月28日	—	覚（代金を受領した旨）	越堂御鑪（印）	米原屋磯重	切継紙	1	印は「御鑪」。
2-92-18	子6月28日	—	覚（代銭を受領した旨）	越堂御釿（印）	浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-19	子8月2日	—	覚（鉄代受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-20	子7月30日	—	覚（銑鉄代を受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-21	7月21日	—	覚（鉄代を受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-22	子7月8日	—	覚（銑鉄代を受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-23	子7月12日	—	覚（銑鉄代を受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
2-92-24	子5月25日	—	覚（銑鉄代を受領した旨）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-92-25	子6月29日	—	覚（金銭を受領した旨）	口御釿所	浅右衛門	切紙	1	
2-92-26	2月5日	—	覚（瓦の枚数など書上げ）	神原　瓦屋浅蔵（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-92-27	子7月晦日	—	覚（仕切金を渡す旨）	［　］	油屋	切紙	1	
2-92-28	8月2日	—	覚（越後米仕切不足金渡し状）	但馬屋保右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-92-29	子7月12日	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-92-30	嘉永5年閏2月	1852	覚（志儀銭を預かった旨）	本人亀太郎（印）、他2名	油屋幾太郎	切紙	1	
2-92-31	嘉永5年閏2月	1852	覚（志儀銭を預った旨）	本人亀太郎（印）、他2名	勘助	切紙	1	
2-92-32	子2月26日	—	覚（大桶代書上げ）	中間屋半兵衛（印）	田儀　天徳丸升蔵	切継紙	1	
2-92-33	子2月21日	—	〔覚〕（丁持賃など書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	前欠。印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-92-34	—	—	入用目録（大樽拾丁御役銭など書上げ）	—	—	切継紙	1	後欠。
2-92-35	7月11日	—	覚（粮米代などを受領した旨）	番所	浅右衛門	切紙	1	
2-92-36	子4月23日	—	覚（仕切高の書上げ）	米原屋□十（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「□□／久村／□□□」。
2-92-37	酉3月13日	—	覚（金銭を受領した旨）	口御釿	浅右衛門	切紙	1	
2-92-38	亥12月24日	—	覚（久村川尻における人夫入用を請求する旨）	久村　忠右衛門	口田儀町　彦左衛門	切紙	1	
2-92-39	天保8年12月	1837	預申銭之事（工屋覚助仕立志儀の金銭を預かった旨）	取人奥田儀村　森山茂兵衛（印）、受人森山源六（印）	鳥屋尾卯十	切紙	1	
2-92-40	酉3月6日	—	覚（代金を渡す旨）	油屋宗助	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-92-41	酉3月6日	—	覚（入用代を請求する旨）	越堂御釿（印）	浅右衛門	切紙	1	印は「御鑢」。
2-92-42	嘉永2年3月18日	1849	覚（銑鉄代を受領した旨）	越堂御鑢（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	
2-92-43	嘉永元年3月28日	1848	覚（仕切銀を受領した旨）	越堂御鑢（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑢」。
2-92-44	亥12月	—	覚（餅米代などを渡す旨）	円左衛門	浅右衛門	切紙	1	
2-92-45	—	—	覚（扱苧代の書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
2-92-46	6月晦日	—	覚（金銭を渡す旨）	但馬屋保右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-92-47	2月18日	—	〔覚〕（口銭、御役銀など渡し状）	—	—	切紙	1	前欠。
2-92-48	亥7月	—	覚（作料、春慶塗代など金銭書上げ）	ぬり屋彦市	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-93	甲子7月11日	—	覚（蔵継米代の書上げ）	京屋四郎左衛門（印）	油屋久八	切紙	1	印は「越後／寺泊／京屋」。2-93～98はこよりで一括。
2-94	戌8月15日	—	目録（金銭を油屋へ持参する旨）	木津屋平左衛門（印）	油屋勝蔵、幾徳丸久八	切継紙	1	印は「温泉津／木津屋」。
2-95	丑正月15日	—	貫目覚（菊櫻印鉄などの書上げヵ）	中屋源兵衛（印）	幾重丸久八	横帳	1	印は「兵庫／中屋源兵衛」。
2-96	子9月6日	—	覚（重覆印代などを預かった旨）	（印：中屋熊次郎）	幾重丸久八	横帳	1	印は「長州赤間関／国分刻御所／中屋熊次郎」。
2-97	丑3月8日	—	覚（「御上焚込」代などの書上げ）	小山屋新兵衛（印）	幾徳丸久八	横帳	1	印は「金銀不用／大坂／□□新」。
2-98-1	壬戌3月21日	—	覚（梅香代などの書上げ）	木挽屋徳三郎（印）	田木津　幾徳丸久八	切紙	1	2-98はこよりで仮綴。上から順に番号付け。
2-98-2	3月10日	—	覚（金銭書上げ）	はし屋善四郎（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大坂／［　］／［　］所／はし屋善四郎」
2-98-3	—	—	仕切覚（白砂糖代など書上げ）	—	—	切紙	1	
2-98-4	3月4日	—	覚（源氏香代など書上げ）	近喜（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大坂／堺筋□□橋／［　］／近喜」。
2-98-5	3月8日	—	覚（飛切代の書上げ）	荒物屋市兵衛（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大坂／西横橋／瀬戸物商／荒物屋市兵衛」。
2-98-6	戌2月10日	—	覚（釘代など書上げ）	堺屋佐次兵衛（印）	幾重丸	切紙	1	印は「堺佐」。
2-98-7	—	—	覚（金銭など書上げ）	—	—	切継紙	1	後欠。
2-99	4月晦日	—	〔書状〕（米の売却に関する指示など）	小川屋店由五郎	小鉄屋幸三郎	切継紙	1	虫損小破。
2-100	卯8月10日	—	覚（金銭を渡す旨）	磯野屋七兵衛（印）	油屋卯重	切紙	1	
2-101	酉10月26日	—	覚（鉄製品代など書上げ）	川吉	卯重良	切継紙	1	
2-102	申5月4日	—	覚（金銭書上げ）	瓦屋和兵衛	石見　卯十良	切紙	1	
2-103	酉10月24日	—	覚（奥原*一印代など書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋卯十郎	切紙	1	
2-104	亥12月11日	—	覚（「吉原江戸形」、「上州京伝」などの金銭書上げ）	岩見屋甚之助	油屋卯重	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-105	12月11日	—	真綿質掛りおぼへ（真綿代銭の勘定）	大野屋伝七（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	
2-106	辰正月8日	—	覚（米、餅米代など書上げ）	大浦屋為十	油屋卯十	切継紙	1	
2-107	亥10月15日	—	覚（板代など書上げ）	板倉屋佐重	油屋宇重	切継紙	1	
2-108	酉10月晦日	—	覚（小菊7束）	川崎屋次郎右衛門（印）	油屋卯十郎	切紙	1	印は「能［　］／川崎屋／次郎右衛門」。
2-109	嘉永4年4月24日	1851	覚（柏崎福厳院様行きの金銭を預った旨）	敦賀屋多助（印）	油屋卯重	切紙	1	印は「越後国／出雲崎／敦賀屋」。
2-110	卯10月16日	—	覚（七丈物羽二重代など書上げ）	下和木屋林蔵	油屋宇治郎	切紙	1	
2-111	酉10月晦日	—	〔書状〕（小菊売却の件に関する報告など）	川崎次郎右衛門（印）	油屋卯十郎	切継紙	1	印は「能［　］／川崎屋／次郎右衛門」。
2-112	午12月8日	—	送り状之事（本玉黒砂など）	錫屋恒七	幾徳丸卯重郎	切紙	1	
2-113	酉4月19日	—	覚（金銭書上げ）	長嶺源兵衛（印）	油屋卯十郎	切紙	1	印は「長州萩／長嶺六郎右衛門／不用手形」。
2-114	7月21日	—	覚（二月差引銭、かつを代など書上げ）	卯十郎	御番所	切紙	1	
2-115	午12月10日	—	覚（堂嶋手拭、浅黄中代書上げ）	和泉屋茂兵衛（印）	幾徳丸宇十郎	切紙	1	
2-116	申正月28日	—	覚（木判と呉座の調達を依頼する旨）	宮脇屋運十（印）	卯十	切紙	1	
2-117	申正月19日	—	覚（代金を渡す旨）	岡本屋藤兵衛（印）	油屋卯十	切継紙	1	印は「雲州／今市／岡藤」。
2-118	4月21日	—	覚（千割代など書上げ）	川口屋吉三良（印）	油屋卯重良	切紙	1	
2-119	□月23日	—	覚（上醤油の調達を依頼する旨）	千飯店（印）	油屋	切紙	1	
2-120	午5月13日	—	覚（酒肴代など書上げ）	石宇（印）	小川屋御客様	切紙	1	印は「新潟／□□□／□宇」。
2-121	子8月22日	—	覚（金銭書上げ）	おりや嘉兵衛	小川屋様御客、卯重郎	切継紙	1	
2-122-1	12月10日	—	覚（黒朱子ぬい代書上げ）	大野屋伝七（印）	小櫻屋、幾徳丸卯十郎	切紙	1	2-112はこよりで仮綴。上から順に番号付け。
2-122-2	12月8日	—	覚（書物代書上げ）	河内屋八三郎（印）	幾徳丸宇十郎、東四郎	切紙	1	印は「［　　］町砂場／［　　］問屋／河内屋八三郎」。
2-122-3	12月10日	—	覚（白縮染物代書上げ）	大野屋伝七（印）	宮本、幾徳丸卯十	切紙	1	印は「大坂／大野伝」。
2-122-4	12月8日	—	覚（帯代など書上げ）	当麻屋徳兵衛（印）	宇重郎、大野伝	切紙	1	印は「当徳」。
2-122-5	12月2日	—	覚（裏打ち代など書上げ）	西川茂右衛門	大野屋伝七	切紙	1	
2-122-6	申12月4日	—	覚（塗物一組の代金書上げ）	（印：吉野屋清次郎）	幾徳丸卯十	切紙	1	印は「紀州出店／大坂唐物町御堂筋南／椀折敷等塗物凪所／吉野屋清次郎」。
2-122-7	12月7日	—	覚（金銭書上げ）	（印：紙屋覚兵衛）	幾徳丸卯十	切紙	1	印は「本家／大阪新町西口井戸之辻／御紅粉御白粉処／大ささ紅紙屋覚兵衛」。
2-122-8	申極月7日	—	覚（金銭書上げ）	（印：吉野屋清次郎）	幾徳丸卯重	切紙	1	印は「紀州出店／大坂唐物町御堂筋南／椀折敷等塗物凪所／吉野屋清次郎」。
2-122-9	申12月7日	—	覚（金銭書上げ）	（印：吉野屋清次郎）	幾徳丸卯重	切紙	1	印は「紀州出店／大坂唐物町御堂筋南／椀折敷等塗物凪所／吉野屋清次郎」。
2-122-10	12月10日	—	覚（花色縮代など書上げ）	大野屋伝七	幾徳丸卯十、松ヶ原	切紙	1	
2-122-11	11月30日	—	覚（金銭書上げ）	柳屋熊蔵（印）	大野屋伝七	切紙	1	印は「大坂／北堀江／三丁目／柳屋」。
2-123	未6月24日	—	覚（米沢様納銑代の不足分を預かった旨）	小川屋長右衛門（印）	油屋卯十	切紙	1	端裏書「油卯様」、印は「越後／新潟／小川屋」。
2-124	6月3日	—	〔書状〕（先に荷物を積み登る旨など）	小西屋甚六	油屋卯重	切継紙	1	
2-125	亥10月15日	—	覚（かつほり代など書上げ）	塩冶屋千四郎	田儀町卯十	切紙	1	
2-126	午■月13日	—	覚（中塩200俵などを受領した旨）	木綿屋由右衛門（印）	油屋卯十	切継紙	1	小破、印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-127	未3月11日	—	覚（金銭を渡す旨）	米原や弥助	油屋卯十	切紙	1	
2-128	亥3月22日	—	覚（金銭書上げ）	板倉屋佐十	油屋宇十	切継紙	1	
2-129	申5月■日	—	目録之覚（「銑仕切之表」などの代銭書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋卯十郎	切継紙	1	虫損小破。
2-130	未6月24日	—	覚（焼酎を受領した旨）	中村屋平次郎（印）	油屋卯十郎	切紙	1	印は「越後国／新潟湊／中村屋」。
2-131	巳11月29日	—	覚（熊手代書上げ）	岩伊（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	印は「岩田屋／伊兵衛」。
2-132	卯6月6日	—	売仕切（切素麺、青昆布、椎茸など）	虎屋直兵衛（印）	油屋宇十郎	切継紙	1	印は「伯州／境津／虎直」、2-132～145はこよりで一括。
2-133	申12月5日	—	送り状（塩など）	小山屋吉兵衛（印）	幾徳丸宇十郎	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-134-1	午8月6日	—	覚（金銭書上げ）	い□さや甚左衛門	宇重郎	切継紙	1	2-134はこよりで仮綴。上から順に番号付け。
2-134-2	8月10日	—	覚（金銭書上げ）	山田屋伝三郎	小川中御客	切紙	1	
2-134-3	—	—	覚（白米を受領した旨）	小川屋長右衛門（印）	油屋卯十	切継紙	1	印は「越後／新潟／小川屋」。
2-134-4	午8月9日	—	覚（金銭書上げ）	□清助	宇十郎	切紙	1	
2-134-5	午7月13日	—	覚（金銭書上げ）	桐油や孫七（印）	宇重郎	切継紙	1	印は「越後／新潟／［　］屋」。
2-134-6	午8月	—	覚（金銭書上げ）	かじや喜兵衛（印）	幾徳丸御船、小川屋御店	切継紙	1	印は「越後／新潟／鍛冶屋」。
2-134-7	午8月9日	—	覚（金銭書上げ）	北川惣兵衛（印）	宇重	切紙	1	印は「新潟／古四之町／北川」。
2-134-8	8月9日	—	覚（下駄代書上げ）	若狭屋利助（印）	宇丈右衛門	切紙	1	印は「越後／［　　］／若狭屋」。
2-134-9	午7月15日	—	覚（幾徳丸掛物の表具代書上げ）	表具師忠蔵	小川屋御客	切紙	1	
2-134-10	午6月23日	—	覚（弁慶膳代など書上げ）	室屋和兵衛	出雲之船　卯十郎	切紙	1	
2-134-11	午7月12日	—	覚（書物重代など書上げ）	北川惣兵衛（印）	宇重	切継紙	1	印は「新潟／古四之町／北川」。
2-134-12	午7月25日	—	覚（米代など書上げ）	北川惣兵衛（印）	宇重	切継紙	1	印は「新潟／古四之町／北川」。
2-134-13	午8月2日	—	覚（吸物膳代書上げ）	北川惣兵衛（印）	宇重	切継紙	1	印は「新潟／古四之町／北川」。
2-134-14	8月5日	—	覚（金銭書上げ）	吉田や佐五兵衛（印）	う重	切継紙	1	印は「越後／新潟／［　　］」。
2-134-15	8月3日	—	覚（金銭書上げ）	吉田や佐五兵衛（印）	幾徳丸う重	切継紙	1	印は「越後／新潟／［　　］」。
2-134-16	7月16日	—	覚（金銭書上げ）	吉田や佐五兵衛（印）	幾徳丸う重	切継紙	1	印は「越後／新潟／［　　］」。
2-134-17	午8月6日	—	覚（大工作料など書上げ）	大工　伊八	油屋御船、小川屋御みせ	切継紙	1	
2-135	酉10月晦日	—	目録之覚（鉄代など書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋卯十郎	切継紙	1	印は「志歩屋」。
2-136	酉10月28日	—	覚（鉄代など書上げ）	麦屋十兵衛（印）	油屋卯重	切継紙	1	印は「伏木／麦重」。
2-137	戌11月	—	会津御米俵印（俵印と数量の書上げ）	小川屋店	油屋卯十郎	切紙	1	
2-138	卯4月13日	—	覚（金銭書上げ）	室屋和兵衛（印）	石見宇十郎	切紙	1	虫損小破、印は「越中／高岡／室屋和兵衛」。
2-139	未8月	—	覚（品物の調達依頼）	出店甫一郎	油屋卯十	切継紙	1	
2-140	正月5日	—	〔書状〕（年賀の挨拶と初相場の報告）	大浦屋為重（印）	油屋卯十	切紙	1	虫損小破。封筒入、上書「口田儀村ニ而油屋卯十様　大浦屋為十」、「参人々御中」。印は「雲州／大浦屋」。
2-141	申5月朔日	—	覚（金銭書上げ）	釜屋権兵衛	油屋宇十郎	切継紙	1	
2-142	卯4月5日	—	覚（古手代など書上げ）	かしや忠治良（印）	油屋宇十郎	切継紙	1	印は「越中伏木／鍛冶屋／忠治良」。
2-143	卯4月4日	—	覚（大工作料など書上げ）	大工佐七（印）	油屋卯十良	切継紙	1	虫損小破、印は「越中／伏木／大工佐七」。
2-144	丁未6月24日	—	覚（鉄取合、木綿など書上げ）	出雲崎や得十（印）	油屋卯十郎	切継紙	1	印は「越後／新潟／出得」。
2-145	—	—	〔包紙〕	川崎屋次郎右衛門	油屋卯十郎	切紙	1	
2-146	正月2日	—	〔書状〕（年賀の挨拶と旧冬相場の報告）	米屋津右衛門（印）	雲州たぎ　油屋浅右衛門	切紙	1	印は「越後／寺泊／米屋津右エ門」。2-146～173は中性封筒に入。
2-147	安政3年12月12日	1856	覚（梅上30束などを預かった旨）	吉田屋文兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	2-147～173はこよりで一括。
2-148	卯11月14日	—	覚（金銭を受領した旨）	石州屋七郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「尾道／石州屋／七郎兵衛」。
2-149	7月8日	—	〔書状〕（上方の金子相場、買い積みに関する見通しなどを通知）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	前欠ヵ。
2-150	う8月19日	—	覚（縮引替過上かり代などを渡す旨）	織屋嘉兵衛（印）	小川屋様ニ而御客浅右衛門	切紙	1	印は「越後国／小千谷町／織屋」。
2-151	安政3年12月12日	1856	覚（鉄代銀を受領した旨）	吉田屋文兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	小破、印は「吉田屋」。
2-152	丑4月16日	—	覚（金銭書上げ）	松屋□蔵（印）	忠右衛門、常□	切紙	1	印は「松屋／［　　］／［　　］」。
2-153	大晦日	—	〔書状〕（百次郎借用銭を送った旨）	大井や運蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　大井や運蔵」、「貴下」。
2-154	閏3月11日	—	〔書状〕（出船予定、相場情報、焚込の送付を依頼する旨など）	油屋勝蔵	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-155	11月24日	—	〔書状〕（清右衛門から金銭借用の依頼）	父	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門殿　父より」。
2-156	正月5日	—	〔書状〕（年始の挨拶と初相場）	大浦屋為十（印）	油屋彦左衛門様余人々御中	切紙	1	虫損小破。
2-157	—	—	〔包紙〕	松原屋小兵衛	油屋浅右衛門	切紙	1	包紙入、上書「油屋浅右衛門様　松原屋小兵衛」、「尊下」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-158	慶応元年閏5月24日	1865	買仕切（木綿100反など）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	横帳	1	印は「売買仕切／雲州平田市場／綿木綿問屋／黒田屋千三郎」。
2-159	丑5月21日	—	覚（木綿の代銭を受領した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／平田本町／市場西側／黒千改」、虫損小破。
2-160	閏7月13日	—	覚（塩を送った旨）	さぬきや文七（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「田儀／讃岐屋」。
2-161	閏2月4日	—	〔書状〕（大阪表出帆にかかる積み入れ荷物など）	幾徳丸源平	油屋親方	切継紙	1	
2-162	卯2月9日	—	覚（金銭を送付した旨）	保右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-163	辰1月	—	覚（酒代の書上げ）	太田屋	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-164	19日	—	〔書状〕（新年の挨拶、逗留の案内）	大井屋運蔵	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　大井屋運蔵」、「貴下」。
2-165	10月17日	—	〔書状〕（銑鉄の取引状況、国元相場などを通知）	春繁丸多七郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-166	子1月5日	—	覚（金銭書上げ）	川口や吉三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「越中伏木／河口屋／吉三郎」。
2-167	寅1月	—	覚（酒代の書上げ）	太田屋店（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「［　　］／口田儀町」。
2-168	4月28日	—	〔書状〕（米や木綿の販売状況などを通知）	つるかや多助	油屋浅右衛門	切継紙	1	前欠。
2-169	21日	—	〔書状〕（犀角の調達を依頼する旨）	錦や豊平	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　錦や豊平」、「要用書」。
2-170	3月	—	覚（杵築惣上り目六、田儀残し、杵築売物についての報告など）	幾徳丸［　　］	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-171	7月24日	—	〔書状〕（上方方面の米値段下落の報告など）	油や彦左衛門	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	
2-172	卯2月5日	—	覚（代銭を受取した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「黒田屋」。
2-173	子2月20日	—	覚（砂糖代の不足について）	肥後屋武三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／松江／肥後屋」。
2-174	卯4月18日	—	目録之覚（銑、鉄などの金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	2-174～197までこよりで一括。
2-175	11月2日	—	覚（鉄製品の勘定について、不足分を通知する旨）	櫻井其市	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-176	卯5月15日	—	覚（越後縮上極上の代金を受領した旨）	織屋嘉兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「越後国／小千谷町／織屋」。
2-177	3月7日	—	〔書状〕（返金を依頼する旨）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　五郎蔵」、「尊下」。
2-178	嘉永4年4月11日	1851	覚（信濃屋市右衛門方への為替取組について）	川崎屋角助（印）	雲州田儀　油屋浅右衛門	切紙	1	印は「石州／鳥井／宝来丸」。
2-179	12月12日	—	〔書状〕（北国へ運賃積みをする荷物を、代わりに橋本屋国三郎が運ぶ旨を通知）	小西屋甚六	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-180	11月10日	—	覚（入金、入米などの書上げ）	喜市	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-181	卯正月11日	—	目録（金銭書上げ）	おけ屋伝蔵（印）	油屋勝蔵	切紙	1	印は「長州／赤間関／桶伝」。
2-182	安政2年2月9日	1855	覚（油屋浅右衛門様行の扱苧について、急送を依頼する旨）	小原　中灰屋喜代平	川合角屋、羽根田嶋屋、雲州口田儀油屋	切継紙	1	
2-183	2月3日	—	〔書状〕（新六が納める米について）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　五郎蔵」、「尊下」。
2-184	亥12月26日	—	〔書状〕（経済状況が厳しい旨）	清水円兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	虫損小破、端裏書「油屋　浅右衛門様　円兵衛」。2-184～185は折りたたまれて一括。
2-185	亥11月29日	—	〔書状〕（金銭を受領した旨）	上清水円兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	虫損小破、印は「朝■／上清水」。
2-186	12月26日	—	〔書状〕（算用の猶予願）	久五郎、弥吉	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　久五郎、弥吉」。
2-187	閏5月30日	—	覚（晒木綿代など書上げ）	塗屋粂一	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-188	12月12日	—	覚（金銭を送付した旨）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-189	亥6月28日	—	覚（木綿100反など仕切荷の書上げ）	大坂屋廣助（印）	田儀町油屋浅右衛門	切紙	1	印は「今中／大坂屋廣助」。
2-190	—	—	〔書状〕（越中伏木で積み荷を売り捌いた旨）	—	—	切継紙	1	後欠ヵ。
2-191	戌1月28日	—	覚（金銭書上げ）	井勢屋謙右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-192	大晦日	—	〔書状〕（先日御当用の札20匁を送った旨）	甫平	油や浅右衛門	切紙	1	端裏書「油や浅右衛門様　甫平」、「尊下」。
2-193	未11月11日	—	覚（長割代など書上げ）	川口屋吉三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-194	巳2月19日	—	覚（操綿代の差し引きについて）	山本屋伝右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-195	丑5月2日	—	覚（木綿代の書上げ）	敦賀屋多助（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「敦賀屋」。
2-196	正月5日	—	〔書状〕（年始の挨拶）	木佐新四郎	油屋浅右衛門	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-197	5月6日	—	〔書状〕（大浦における自船の状況について通知）	宮脇屋運十	浅右衛門	切継紙	1	虫損小破。包紙入、上書「同国而　浅右衛門様　宮脇屋運十」、「貴下要用」、裏書「従田儀町」。
2-198	丑12月	—	覚（油、石鯛代など書上げ）	—	油屋浅右衛門	切紙	1	2-198～216までこよりで一括。
2-199	12月27日	—	〔書状〕（下本家の金銭問題について）	いん京　円左衛門	あふらや浅右衛門	切継紙	1	裏書「あふらや浅右衛門様　いん京円左衛門」、「無□儀要用」。
2-200	巳5月10日	—	〔書状〕（奥原・鉄ヶ谷の鉄について、早急に積み送りを依頼する旨）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切紙	1	印は「能州／所口／北野屋」。
2-201	子10月9日	—	覚（金銭の差し引きについて通知）	川口や吉三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「越中伏木／川口屋／吉三郎」。
2-202	亥7月	—	覚（かま代の書上げ）	中奥屋喜兵衛	油や浅右衛門	切紙	1	
2-203	—	—	〔封筒〕	宮の秀三良	油屋勝蔵	一紙（封筒）	1	封筒入、上書「油屋勝蔵様　宮の秀三良」、「貴下要用兼」。
2-204	3月29日	—	〔書状〕（下関の相場などを通知）	貞助、豊平	浅右衛門	切継紙	1	
2-205	3月5日	—	〔書状〕（先日逗留した際の礼状）	松原屋小兵衛	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-206	寅12月10日	—	覚（金銭を受領した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／平田本町／市場西側／黒千■」。
2-207	12月27日	—	〔書状〕（各種取替金の取り扱いに関する旨）	たしまや保右衛門	あふらや浅右衛門	切継紙	1	
2-208	5月10日	—	〔書状〕（鉄製品相場や米の買い注文などを通知）	信濃屋市右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	前欠、脱落した端裏書が奥に貼付される。
2-209	10月10日	—	〔書状〕（幾徳丸勝蔵・源平の活動状況や操綿の作柄の報告など）	石州屋七郎兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-210	7月28日	—	〔書状〕（先日御注文の木綿を送ったこと、木綿屋由右衛門方の銀札に関する旨など）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-211-1	子7月12日	—	覚（大工作料などの書上げ）	大工九郎兵衛（印）	油屋船船頭	切紙	1	2-211はこよりで仮綴。
2-211-2	—	—	覚（板代の書上げヵ）	—	—	切紙	1	
2-211-3	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
2-211-4	子7月29日	—	覚（大工作料などの書上げ）	朴木屋善六（印）	岩見浅右衛門	切紙	1	印は「越中／伏木／朴木屋善六」。
2-211-5	7月13日	—	覚（金銭書上げ）	大工甚太郎	—	切紙	1	
2-211-6	子7月晦日	—	覚（鉄代書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-212	閏3月25日	—	〔書状〕（木綿代銭の支払いについて）	木綿屋由右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-213	4月29日	—	覚（鉄など仕切）	川口屋吉三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「越中伏木／河口屋／吉三郎」。
2-214	正月2日	—	〔書状〕（年始の挨拶、旧冬の相場）	紙屋吉郎右衛門（花押）	油屋浅右衛門	折紙	1	刷物。
2-215	丑12月	—	覚（油、石鯛代など金銭書上げ）	大工新六	油屋浅右衛門	折紙	1	
2-216	閏2月11日	—	相場（筑前米、同古米など）	大野屋伝七（印）	浅右衛門、幾太郎	切継紙	1	印は「[　　] 伝」。
2-217	7月	—	覚（醤油など金銭書上げ）	油屋卯十	御鈩清右衛門	切紙	1	
2-218	亥8月2日	—	覚（切手せん、粮米代など書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-219	辰4月27日	—	覚（堂の原鉄、可部屋鉄など請取状）	出雲崎屋伝七（印）	幾徳丸御船中	切紙	1	印は「越後／新潟／出伝」。
2-220	9月13日	—	〔書状〕（荷物を船便で送った旨）	大井屋運蔵	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　大井屋運蔵」、「用」。
2-221	丑11月14日	—	覚（燈印代、米代など書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-222	22日	—	〔書状〕（昨日、長居をした件について）	忠兵衛	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　越　忠兵衛」、「貴下」。
2-223	亥6月29日	—	覚（木綿の代銭を受領した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「黒田屋」。
2-224	亥7月6日	—	覚（木綿の代銭を受領した旨）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「黒田屋」。
2-225	正月29日	—	〔書状〕（但馬屋に払った金銭などについて）	名賀屋貞助	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　名賀屋貞助」、「尊下用」。
2-226	7月13日	—	〔書状〕（証文の名義変更に関する旨）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　五郎蔵」。
2-227	12月21日	—	〔書状〕（別紙証文を送った旨）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　五郎蔵」。
2-228	卯大晦日	—	覚（金銭と人名の書上げ）	喜右衛門	浅右衛門	切継紙	1	
2-229	12月13日	—	〔書状〕（宇龍から北国へ運賃積みする鉄について問い合わせる旨）	橋本屋国三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-230-1	天保7年8月	1836	借用銀子之事（返済の延引を詫びる旨）	松屋慶助（印）	油屋浅右衛門	竪紙	1	2-230は一紙で包まれる。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-230-2	天保6年7月	1835	覚（志儀銭を受領した旨）	□田屋免三良	油屋貞助	切紙	1	
2-230-3	申9月	—	覚（金銭書上げ）	茂市	卯十	切継紙	1	
2-230-4	6月27日	—	覚（梅が香代など書上げ）	嶋理	油屋彦左衛門	切紙	1	
2-230-5	7月12日	—	覚（銭差し引きの書上げ）	油屋彦左衛門（印）	但五郎	切継紙	1	
2-230-6	12月	—	覚（金銭書上げ）	小田かじや□右衛門	口田儀町中様	切紙	1	
2-230-7	7月28日	—	〔書状〕（買物御取替銭勘定の猶予願など）	松屋慶助	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。端裏書「油屋彦左衛門様　松屋慶助」、「無拠急要用」。
2-230-8	6月13日	—	〔書状〕（御取替銭の支払い猶予を願い出る旨など）	松屋慶助	油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　松屋慶助」、「急要用」。
2-230-9	7月28日	—	覚（麦代元利を送る旨）	山口　瀧蔵	宇十	切紙	1	
2-230-10	申7月28日	—	覚（金銭書上げ）	小嶋屋善平（印）	油屋与四郎	切紙	1	印は「石州／馬路／小嶋屋」。
2-230-11	申7月26日	—	覚（金銭書上げ）	紺屋廣三郎	卯重	切紙	1	
2-230-12	8月28日	—	〔書状〕（借用銭返済の猶予願）	木□屋啓助	油屋彦左衛門	切紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　木□屋啓助」、「貴答要用」。2-230-12～13は折りたたまれて一括。
2-230-13	—	—	〔副状〕（借用銭の返済延引を詫びる旨）	—	—	切紙	1	
2-230-14	6月27日	—	送り状（たばこ）	嶋理（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	印は「嶋理店用」。
2-230-15	6月27日	—	〔書状〕（約束のたばこを送る旨）	嶋屋理六	田儀油屋彦左衛門	切紙	1	
2-230-16	—	—	丙申暮割取立目録（高役、新川御用など）	庄屋佐六（印）	彦左衛門	切継紙	1	
2-230-17	9月8日	—	〔書状〕（大阪からの荷物について問い合わせ）	まつ屋慶助	油屋彦左衛門	切紙	1	端裏書「油屋彦左衛門　まつ屋慶助」、「要用」。
2-231	閏3月朔日	—	覚（白砂糖、黒砂糖などの相場書上げ）	肥後屋武三郎	油屋勝蔵	切継紙	1	2-231～244までこよりで一括。
2-232	正月27日	—	覚（椎茸、線香などの書上げ）	木綿屋由右衛門	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	
2-233	正月5日	—	〔書状〕（年始の挨拶と初相場の書上げ）	新屋直三郎（印）	油屋勝蔵	切紙	1	
2-234	正月5日	—	〔書状〕（年始の挨拶と初相場の書上げ）	笹屋千右衛門（印）	油屋勝蔵	切紙	1	
2-235	寅2月22日	—	〔覚〕（金銭書上げ）	伊久（印）	幾徳丸勝蔵、源十	切継紙	1	前欠。
2-236	15日	—	〔書状〕（訪問の都合を伝える旨）	大にしや	勝蔵	切継紙	1	端裏書「大上ニ而勝蔵様　大にしや方」、「貴下」。
2-237	11月6日	—	覚（茶の数量など書上げ）	佐渡屋米兵衛	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	
2-238	4月20日	—	覚（白米代、餅米代の書上げ）	川新	幾徳丸	切紙	1	
2-239	辰7月25日	—	覚（盆や鉢代など書上げ）	とまりや蔵之助（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「越後新潟／古四之町／泊屋」。
2-240	卯2月6日	—	覚（砂糖代の残金を送る旨）	幾徳丸内源平	油屋勝蔵	切継紙	1	
2-241	寅7月24日	—	別紙目録（仕切代受取状ヵ）	山本屋伝右衛門（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「雲州／安来／□伝」。
2-242	申2月8日	—	覚（織帆代の書上げ）	中屋安之助（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	
2-243-1	3月5日	—	覚（織帆代の書上げ）	姫路や吉兵衛（印）	生徳丸勝蔵	切紙	1	印は「兵庫新町／織帆仕入／姫吉」。2-243-1～3はこよりで仮綴。
2-243-2	寅12月22日	—	覚（飛切砂糖代の書上げ）	小山弥助（印）	幾徳丸	切紙	1	印は「大坂／備後町堺筋／砂糖所／小山弥助」。
2-243-3	寅極月20日	—	覚（上々打わん代の書上げ）	（印：万屋常七）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「大阪／現銀／卸小売／鍋釜金物所／立売堀高橋南詰／万屋常七」。
2-244	5月13日	—	覚（金銭を渡す旨）	□村屋柳三郎	田儀油屋	切継紙	1	
2-245	嘉永4年6月4日	1851	覚（4月14日差引分の金銭を渡す旨）	敦賀屋多助（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「敦賀屋」。2-245～267までこよりで一括。
2-246	—	—	〔一紙〕（「杉白五間六□五分」）	—	—	切紙	1	
2-247	12月	—	覚（醤油の調達を依頼する旨）	稲扱会所（印）	油屋勝蔵	切紙	1	
2-248	巳5月13日	—	〔書状〕（鉄と鋤について、追加の積み送りを依頼する旨）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「能州／所口／北野屋」。
2-249	午9月18日	—	覚（元金、利足などの書上げ）	いづ伝（印）	油勝	切紙	1	印は「新潟／いづ伝」。
2-250	丑5月10日	—	御買仕切（黒餅米、白餅米、越後大豆）	信濃屋市右衛門（印）	幾徳丸幾太朗	切継紙	1	端裏書「幾太朗様仕切」。印は「越後国／直江津／信濃屋」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-251	―	―	〔封筒〕	春磐［　　］	幾徳丸勝蔵	一紙（封筒）	1	封筒入、上書「長州下ノ関桶屋伝蔵様ニて　幾徳丸勝蔵様　春磐［　　］」、「大急要用書入」。端裏書「九月廿五日出し　ゟ大坂」、印「大野伝」。
2-252	10月18日	―	口換（証書の取り扱いについて）	［　　］三郎	鳥屋尾勝蔵	切継紙	1	虫損小破。端裏書「鳥屋尾勝蔵様　［　　］三郎」、「玉下御親披」。
2-253	未5月5日	―	覚（金銭書上げ）	河口や吉郎兵衛（印）	油屋勝蔵	切紙	1	虫損小破。印は「越中伏木／川口屋／吉郎兵衛」。
2-254	申2月12日	―	覚（上塩下目切直段約定書）	新屋新蔵（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「備後／糸崎／新屋新蔵」。
2-255	丑6月7日	―	覚（御茶代の書上げ）	柳三郎	幾徳丸勝蔵	切紙	1	
2-256	辰6月4日	―	売仕切（真綿代など書上げ）	内匠屋庄九郎（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「石州／西川／内匠屋」。
2-257	辰11月7日	―	覚（金銭書上げ）	（印：万屋常七）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「大阪／現銀／卸小売／鍋釜金物所／立売堀高橋南詰／万屋常七」。
2-258	寅10月	―	覚（ひせん薬、杉ようじなど調達の依頼）	油屋甫一郎	幾徳丸勝蔵	切紙	1	
2-259	午4月13日	―	目録覚（去年借用手形分の代金など書上げ）	太田屋宗兵衛（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「越中／伏木／太宗」。
2-260	2月8日	―	覚（別紙目録分の代金を受領した旨）	中屋安之助（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「兵庫／中屋安之助」。
2-261	安政6年11月21日	1859	目録之覚（かつお、数の子代などを受け取った旨）	石州屋七郎兵衛（印）	幾徳丸	切継紙	1	印は「尾道　［　　］兵衛」。
2-262	辛亥9月12日	―	覚（半天代、嶋草物代を渡した旨）	つるかや多助（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「敦多」。
2-263	巳7月8日	―	覚（鉄製品ヵに関する金銭書上げ）	川口屋吉三郎（印）	油屋勝蔵	切紙	1	印は「越中伏木／河口屋／吉三郎」。
2-264	子9月11日	―	売仕切（酒）	佐渡屋三郎左衛門（印）	油屋源兵衛	切継紙	1	印は「能州／福浦／佐渡屋」。2-264～267は折りたたまれて一括。
2-265	8月28日	―	売仕切（酒）	佐渡屋三郎左衛門（印）	油屋源兵衛	切紙	1	印は「能州／福浦／佐渡屋」。
2-266	子9月7日	―	売仕切（酒）	佐渡屋三郎左衛門	油屋源兵衛	切継紙	1	
2-267	子8月26日	―	売仕切（酒）	佐渡屋三郎左衛門（印）	油屋源兵衛	切紙	1	印は「能州　福浦　佐渡屋」。
2-268	―	―	〔包紙〕	幾徳丸浅右衛門	田儀　越堂御釿清右衛門	切紙	1	封筒入、上書「田儀越堂御釿清右衛門様　幾徳丸浅右衛門」、「無事用書」。2-268～275までこよりで一括。
2-269	12月21日	―	〔書状〕（利八取立銭を受領した旨）	櫻井　五郎蔵	油屋勝蔵	切紙	1	端裏書「油屋勝蔵様　櫻井　五郎蔵」、「貴答」。
2-270	12月19日	―	〔書状〕（下林に関する旨）	櫻井　五郎蔵	油屋勝蔵	切継紙	1	端裏書「油屋勝蔵様　櫻井　五郎蔵」、「要用答」。
2-271	弘化3年6月5日	1846	〔書状〕（卯十北行の買物代金を渡すよう依頼する旨）	宮本　豊平	ぬりや久免市	切継紙	1	包紙入、上書「ぬり屋久免市様　宮本　豊平」、「貴下要用」。
2-272	6月15日	―	〔書状〕（新潟における相場などを通知）	油屋勝蔵	因幡屋雄三郎、川崎屋林左久	切継紙	1	前欠。
2-273	亥5月14日	―	覚（米の数量書上げ）	口御鑓	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	
2-274	―	―	〔封筒〕	櫻井大太郎	油屋勝蔵	一紙（封筒）	1	封筒入、上書「油屋勝蔵殿　櫻井大太郎」、「無事要用書」。
2-275	―	―	儀定書之事（銑の値段が上昇しているいる旨）	―	―	切紙	1	下案ヵ。
2-276-1	2月19日	―	おほへ（金銭書上げ）	高瀬屋又左衛門（印）	あほしや清兵衛	切紙	1	印は「高瀬屋」。2-276はこよりで仮綴。
2-276-2	申2月18日	―	覚（肥後御蔵大豆など書上げ）	網干屋清兵衛（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「長州／赤間関／網干屋清兵衛」。
2-276-3	2月18日	―	覚（金銭書上げ）	（印：油屋五郎右衛門）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「現銀／長州赤間関／御船道具店／油屋五郎右エ門」。
2-276-4	2月18日	―	覚（金銭書上げ）	筑前屋重□□（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「□のは／長州下ノ関筑十」。
2-276-5	申2月8日	―	覚（金銭書上げ）	喜屋二平（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「喜屋二平／改仕入」。
2-276-6	申2月11日	―	覚（金銭書上げ）	（印：□□物屋伊兵衛）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「備後／尾道下長江町／［　　］／□□屋伊兵衛」。
2-276-7	申正月8日	―	覚（織帆代書上げ）	ひめじや吉兵衛（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「［兵庫］新町／［織帆］仕入／姫吉」。
2-276-8	正月30日	―	覚（さし下駄代など書上げ）	（印：若林屋儀助）	勝蔵	切継紙	1	印は「大阪あみだ池西門はじ／かめばし少ニ東へ入／若林屋儀助」。
2-276-9	正月14日	―	覚（金銭書上げ）	（印：和泉屋九兵衛）	勝蔵	切継紙	1	印は「大坂北堀江五丁目／黒金橋北詰角／和泉屋九兵衛」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-276-10	申正月20日	—	覚（金銭書上げ）	（印：［　］井）	勝蔵	切紙	1	印は「□服物／現銀かけねなし［　　］／大坂南御堂前□をは□や［　］／○に小［　］井」。
2-276-11	正月28日	—	覚（衣類の仕立て代など書上げ）	大のや	勝蔵	切継紙	1	
2-276-12	正月19日	—	覚（金銭書上げ）	（印：わかばやしや□吉）	御□	切紙	1	印は「大坂あみだいけ□□門はじ西角／わかばやしや□吉」。
2-276-13	正月9日	—	覚（衣類の仕立て代ヵ書上げ）	（印：阿波屋小三郎）	尾野伝様ニ而［御客ヵ］	切継紙	1	小破、印は「［　］正札／大坂新町西口／呉服太物所／阿波屋小三郎」。
2-276-14	正月18日	—	覚（金銭書上げ）	計屋久兵衛（印）	大野伝	切紙	1	
2-277	戌11月11日	—	相場（各種相場書上げ）	石見屋□右衛門（印・博多　石見屋）	来福丸源平	切継紙	1	
2-278	辰6月26日	—	覚（中背賃、問屋茶代などの差引書上げ）	淀江　問屋忠左衛門	田儀　幾徳丸源平	切継紙	1	
2-279	3月3日	—	覚（水砂糖の仕切銀を渡す旨）	山本屋伝右衛門（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「雲州／安来／山伝」。
2-280	丑11月13日	—	仕切状之事（たばこ65袋）	大野や伝七（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「［　　］伝。
2-281	閏2月21日	—	目録（銑、鉄など仕切）	桶屋伝蔵（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「長州／赤間関／桶伝」、虫損。
2-282	子閏2月7日	—	覚（白砂糖などの金銭書上げ）	中屋重助（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「兵庫／中屋重助」。
2-283	酉12月22日	—	覚（金銭を送付する旨）	木綿屋由右衛門（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。2-283～289までこよりで一括。
2-284	寅12月14日	—	目録（切出しなど金銭書上げ）	最上屋彦左衛門（印）	幾徳丸勝蔵、源平	切紙	1	印は「兵庫／最上屋」。
2-285	子2月13日	—	覚（素麺など仕切）	長嶺源兵衛（印）	油屋源平	切紙	1	印は「長州萩／不用手形／長嶺六郎右衛門」。端裏書「椎茸」。
2-286	子正月	—	覚（金銭をはり佐から受領するよう通知する旨）	浅右衛門	源平	切継紙	1	
2-287	戌11月2日	—	覚（金銭を受領した旨）	石州屋七郎兵衛（印）	幾徳丸源平	切紙	1	
2-288	11月6日	—	覚（金銭書上げ）	はり佐（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「難波橋／［　　］／播佐」。
2-289-1	酉2月21日	—	覚（代銭相済について）	佐野屋熊次郎	幾徳丸	切継紙	1	印は「長州／下ノ関／佐熊」。2-289-1～8はこよりで一括。
2-289-2	今月21日	—	覚（肥後大豆代の受け取りについて）	川口屋新介	幾徳丸源平	切紙	1	
2-289-3	—	—	仕切覚（杉板）	小山弥助（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「大坂／備後町堺筋／小山弥助」。
2-289-4	壬年2月4日	—	仕切覚（杉板）	小山弥助（印）	幾徳丸柳三郎	切紙	1	印は「大坂／備後町堺筋／小山弥助」。
2-289-5	閏2月3日	—	覚（金銭書上げ）	岩田屋作兵衛（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「大坂／金銀不用／岩作」。
2-289-6	3月6日	—	覚（金銭書上げ）	近江屋喜兵衛（印）	幾久徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「北堀江六丁目／近喜」。
2-289-7	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
2-289-8	子2月29日	—	覚（金銭書上げ）	はりまや佐七（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	印は「難波橋／［　　］／播佐」
2-289-9	2月29日	—	覚（金銭書上げ）	はり佐	幾徳丸源平	切紙	1	
2-289-10	子2月29日	—	覚（有田節代書上げ）	亀屋善兵衛（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「大坂鰹座／金銀不用／□□」。
2-289-11	2月29日	—	覚（飛切松葉代など金銭書上げ）	荒物や［正兵衛ヵ］（印）	幾徳丸卯十	切紙	1	印は「大坂荒神市仲間／西横堀呉服橋／荒物屋正兵衛」
2-289-12	子2月29日	—	覚（桶代など金銭書上げ）	小山屋吉兵衛（印）	幾徳丸宇十郎	切紙	1	印は「小吉」。
2-289-13	2月29日	—	覚（金銭書上げ）	天王山屋豊治郎	幾徳丸卯十	切紙	1	
2-289-14	閏2月朔日	—	覚（鍋代など金銭書上げ）	（印：冨屋幸助）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「大阪／阿弥陀池南門一丁西／鍋釜金物処／冨屋幸助」。
2-289-15	—	—	覚（金銭書上げ）	—	いくとく丸	切紙	1	
2-290	8月	—	〔書状〕（大森行きの件について）	豊平	彦左衛門	切継紙	1	端裏書「出店彦左衛門様　鉚所ゟ豊平」、「尊下要用」。
2-291	辰2月22日	—	覚（金銭書上げ）	野波屋重兵衛	彦左衛門	切紙	1	
2-292	4月23日	—	覚（金銭書上げ）	松江竪町　筆師忠兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
2-293	2月4日	—	〔書状〕（大田行の者に地布の調達を依頼する旨）	貞助	彦左衛門	切継紙	1	端裏書「彦左衛門様　貞助」、「尊下用」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-294	正月17日	—	〔書状〕（年始の挨拶）	こしや祖五郎	油屋彦左衛門	折紙	1	
2-295	亥12月16日	—	覚（金銭書上げ）	塩冶屋千四郎	彦左衛門	切継紙	1	
2-296	5月	—	覚（金銭書上げ）	ぬし屋彦市	油屋	切紙	1	
2-297	6月6日	—	覚（金銭書上げ）	大田出店	油屋	切紙	1	
2-298	午神在月	—	覚（菓子椀などの品目と数量の書上げ）	いなばや勘右衛門	油屋彦左衛門	切紙	1	
2-299	戌6月13日	—	覚（塩を渡す旨）	松ヶ原弥四郎（印）	口田儀町　彦左衛門	切紙	1	
2-300	正月28日	—	〔書状〕（村役人衆との協議の様子を報告）	小一右衛門	油屋彦左衛門	切継紙	1	虫損小破。端裏書「油屋彦左衛門様　越堂〆小一右衛門」、「内用」。
2-301	2月2日	—	〔書状〕（郡役人が松ヶ原へ逗留する件について）	長兵衛	彦左衛門	切紙	1	
2-302	10月19日	—	〔書状〕（入津のお礼など）	新屋半兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	前欠、裏に相場あり。
2-303	2月3日	—	〔書状〕（宮本御返金の件について、早速浜田へ飛脚を差し立てた旨）	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
2-304	未7月	—	目録覚（金銭支払いについて）	小土嶋屋七五郎（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	印は「雲州／宇龍／小豆嶋屋」。
2-305	2月1日	—	〔書状〕（先日会った時のお礼など）	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　松原屋小兵衛」、「尊下」。
2-306	11月23日	—	〔書状〕（積み荷の米を売り払う旨など）	三嶋屋亀右衛門	田儀町　油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏書「田儀町　油屋彦左衛門様　三嶋屋亀右衛門」、「用書」。
2-307	9月12日	—	〔書状〕（宮本屋旦那様の死去、浅黄木綿の仕入れなど）	松原屋小兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
2-308	4月14日	—	〔書状〕（先日のお礼）	油屋彦左衛門	こしや祖五郎	切継紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　こしや祖五郎」。
2-309	7月23日	—	覚（輸送代・酒代など書上げ）	指屋勇兵衛	油屋彦左衛門	切紙	1	2-310が挟まる。
2-310	7月2□日	—	覚（輸送代など書上げ）	西尾屋善五郎	指屋祐兵衛	切紙	1	
2-311	亥3月10日	—	覚（金銭書上げ）	綿屋茂助	油屋彦左衛門	切継紙	1	
2-312	□月14日	—	〔包紙〕	大浦屋為十	油屋彦左衛門	切紙	1	「口田儀浦ニ而」の墨書あり。
2-313	酉7月8日	—	覚（金銭の差引について）	利八	彦左衛門	切継紙	1	
2-314	巳11月28日	—	覚（手間賃・針代など書上げ）	備前屋喜兵衛（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	
2-315	申12月3日	—	覚（金五十両を受領した旨）	湯屋常七	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
2-316	申12月	—	覚（染め直し代など書上げ）	紺屋喜左衛門	田儀宇十	切紙	1	
2-317	未12月大晦日	—	覚（塩代書上げ）	文七	油屋卯十	切紙	1	
2-318	3月19日	—	送り状（箸代など書上げ）	はし屋吉四郎（印）	幾徳丸宇十	切紙	1	印は「植田耕耘堂」。
2-319	巳11月12日	—	覚（鉄代、素麺代など書上げ）	井原屋	卯十	切継紙	1	
2-320	酉5月23日	—	覚（釵代二十両の受領について）	笹屋千右衛門（印）	口田儀　油屋卯重	切紙	1	印は「雲州／安来／笹千」。
2-321	19日	—	〔書状〕（仲直りしたことなど）	—	宇十郎	切継紙	1	前欠。
2-322	卯4月19日	—	覚（金銭書上げ）	□□	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	
2-323	4月22日	—	覚（鉄代や塩仕切など、書面の通り渡す旨）	但馬屋保右衛門（印）	油屋卯十郎	切紙	1	印は「但馬屋」。
2-324	4月22日	—	覚（金銭書上げ）	但馬屋保右衛門（印）	油屋卯十郎	切継紙	1	印は「但馬屋」。
2-325	午盆切	—	覚（釘代など金銭書上げ）	かじや愛助	油屋卯十	切紙	1	
2-326	申12月	—	覚（焚き込み、火口など金銭書上げ）	油屋卯十郎	嶋屋千八	切紙	1	
2-327	4月13日	—	覚（伏木川口屋吉三郎の預かり手形受領について）	大栄丸幸三郎（印）	喜一郎、卯十郎	切紙	1	印は「石州／和江／小鉄屋」。
2-328	申正月27日	—	相場（相場表）	肥後屋武一郎	幾徳丸宇十	切継紙	1	
2-329	2月21日	—	覚（粕代を受け取った旨について）	米屋森右衛門（印）	油屋卯重	切紙	1	印は「雲州／口田儀／米屋」。
2-330	4月5日	—	口上（宇龍の新屋まで別紙の送付を依頼する旨）	—	油屋卯十	切紙	1	端裏書「油屋卯十様　田義」。
2-331	未11月	—	覚（書物代など書上げ）	油屋卯十	知光寺	切紙	1	
2-332	申5月23日	—	覚（金銭の取り扱いに関する旨）	安達由八（印）	卯十	切紙	1	印は「口田儀／御番所」。
2-333	11月18日	—	覚（金十両を受領した旨）	中屋源兵衛（印）	幾徳丸卯重	切継紙	1	印は「兵庫／中屋源兵衛」。
2-334	亥10月17日	—	〔通知〕（売り渡し代金について）	真脇屋久次郎（印）	春徳丸喜市郎	切紙	1	印は「宇出津／真脇屋／久次郎」、裏面「拾両入」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-335	巳正月晦日	—	覚（辰年に納めた米について）	蔵方喜右衛門（印）	新右衛門	切紙	1	
2-336	12月9日	—	送り状（大樽十挺）	小山弥助（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
2-337	12月9日	—	覚（帯代など書上げ）	当麻屋徳兵衛（印）	宇重郎	切紙	1	印は「當徳」。
2-338	正月5日	—	初相場（相場表と新年のあいさつ）	笹屋茂七（印）	油屋宇重	切紙	1	包紙入、上書「口田儀油屋卯十様　笹屋茂七」、「余人御中」。印は「雲州／安来／笹屋」。
2-339	3月15日	—	送り状（「切昆布」など）	あら物や半兵衛	幾徳丸卯十	切継紙	1	
2-340	12月4日	—	送り状（「本国黒砂糖」など品目書上げ）	寿ず屋常七	幾徳丸卯寿郎	切紙	1	
2-341	戌8月4日	—	覚（古手の売り払い代を渡す旨）	敦賀屋多助（印）	幾徳丸卯重	切紙	1	端裏書「油屋卯重様分」、印は「越後国／出雲崎／敦賀屋」。
2-342	9月29日	—	覚（田義鉄十束を受け取った旨）	西村屋中間　吉兵衛	幾徳丸宇十	切紙	1	
2-343	7月6日	—	覚（越後縮四反の代金書上げ）	おりや嘉兵衛（印）	御客宇重郎	切紙	1	印は「越後国／小千谷町／織屋」。
2-344	未2月22日	—	覚（線香、油粕などを預かった旨）	木綿屋由右衛門（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-345	10月7日	—	川送り状（「本国黒砂」十樽）	平野屋□兵衛	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	
2-346	午2月2日	—	覚（品目書上げ）	木綿屋由右衛門	油屋卯十	切紙	1	
2-347	午12月12日	—	覚（金十三両を受領した旨）	岩田屋伊兵衛	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
2-348	12月5日	—	送り状（飛切松葉代など書上げ）	荒物屋半兵衛（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	印は「大坂荒神市仲間／西横堀呉服橋／荒物屋正兵衛」。
2-349	12月9日	—	覚（金銭を受領した旨）	板倉屋佐十（印）	油屋卯十	切紙	1	印は「板倉屋」。
2-350	22日	—	〔書状〕（貴家様とは分からないようにして、一俵所望したい旨）	作右衛門	卯十	切継紙	1	
2-351	巳2月24日	—	覚（熊胆代の書上げ）	三野与兵衛（印）	北野屋又三郎	切紙	1	印は「黒□屋」。
2-352	未11月10日	—	覚（鉄ヶ谷の割鉄、極撰鉄の代銭を渡す旨）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	裏に「562」の鉛筆書き。
2-353	12月2日	—	覚（金銭書上げ）	勇三郎	浅右衛門	切継紙	1	
2-354	子7月13日	—	覚（鉄仕切について金銭書上げ）	佐渡屋三郎右衛門（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「能州／福浦／佐渡屋」。
2-355	6月6日	—	目録（米仕切などの金銭書上げ）	前田徳兵衛（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「長州萩／濱崎町／前田六左衛門」。
2-356	寅12月28日	—	覚（浅黄紋付など金銭書上げ）	松井屋弥吉郎	田義　浅右衛門	切継紙	1	
2-357	巳11月11日	—	〔断簡〕	神原　瓦や秀三郎（印）	口田儀　油屋	切紙	1	印は「［　　］／カンハラ／瓦屋」。
2-358	—	—	覚（扇子、提灯など品目書上げ）	油屋甫一郎	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	
2-359	12月21日	—	〔書状〕（金銭の勘定について）	大井屋運蔵	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-360	10月6日	—	〔書状〕（新造船の完成次第、荷物の運搬を依頼する旨）	貞助	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　貞助」、「尊下用」。
2-361	辰正月25日	—	□相場（初相場など書上げ）	吉田出店　与兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-362-1	正月2日	—	〔書状〕（新年のあいさつ）	大野屋伝七	油屋浅右衛門	切紙	1	包紙入、上書「雲州油屋浅右衛門様　大野屋伝七」、「余人御中」、「𠮷大坂」。2-362-2と共に一括。
2-362-2	酉正月5日	—	相庭書（米・大豆・小麦などの相場書上げ）	大野屋伝七（印）	—	切継紙	1	
2-363	卯7月	—	覚（金銭書上げ）	大田屋店（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-364	午4月29日	—	〔書状〕（木綿相場について通知）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-365	5月2日	—	覚（金銭書上げ）	板屋市兵衛	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-366	—	—	〔書状〕（あいさつ）	敦賀屋藤助（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「敦賀屋　出雲崎」。
2-367	10月4日	—	〔書状〕（幾徳丸が新潟で新米や数の子を積み込み、美保関で売り払ったことなど）	雄三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「タギ油屋浅右衛門様　圃雄三郎　貴下要用書」。
2-368	寅7月	—	覚（金銭書上げ）	こんや清三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-369	卯10月10日	—	覚（鉄製品の売り払い代金の書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-370	卯4月13日	—	覚（鉄製品代金書上げ）	渋九（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-371	11月	—	仕切覚（線香の代銀を渡す旨）	小豆嶋屋広太	幾徳丸寿平	切紙	1	
2-372	正月10日	—	〔書状〕（大池村小平太の金銭借用について）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-373	—	—	〔書状〕（幾徳丸の動向を、助四郎と小川屋へ伝えて欲しい旨）	—	—	切継紙	1	
2-374	卯12月28日	—	覚（平皿20人分の代金を送付する旨）	松井屋弥吉郎	浅右衛門	切継紙	1	
2-375	12月29日	—	覚（払い金の書上げ）	大居や運蔵	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-376	巳ノ6月11日	—	覚（金銭書上げ）	長三祢（印）	油屋	切継紙	1	印は「長州萩／不用手形／長嶺［　　］衛門」。
2-377	正月5日	—	〔書状〕（新年のあいさつ）	桶屋伝蔵	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-378	2月21日	—	〔書状〕（供養入用の支払いなど）	青龍寺	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　青龍寺」、「御用」。
2-379	9月3日	—	仕切覚（白砂糖の代銀を渡す旨）	小豆嶋屋広太	幾徳丸寿平	切紙	1	
2-380	卯5月17日	—	迫取先覚（瀬戸物代や茶代などの書上げ）	小川屋長右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-381	卯3月8日	—	覚（金銭書上げ）	肥後屋武三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／松江／肥後屋」。
2-382	8月10日	—	〔書状〕（多岐村山本玄令の志儀加入を通知）	貞助	浅右衛門、甫市	切継紙	1	
2-383	安政2卯年5月17日	1855	差引目録（金銭書上げ）	小川屋長右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「ヱチゴ／ニイガタ／大上小川屋」。
2-384	壬戌12月18日	—	覚（金銭書上げ）	新屋直三郎（印）	油屋浅右衛門、同忠兵衛	切継紙	1	印は「伯州／上道／新屋」。
2-385-1	寅3月19日	—	覚（線香代など金銭書上げ）	木綿屋七右衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」、虫損小破。2-385-2と共に折りたたまれて一括。
2-385-2	7月7日	—	当時相庭（木綿相場について）	髭屋権兵衛	笹屋千右衛門	切継紙	1	虫損小破。切紙貼付。
2-386	寅12月13日	—	〔書状〕（金銭のことについて）	米原屋儀十	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様」。
2-387	12月	—	覚（金銭書上げ）	油屋浅右衛門	石見屋林之助	切紙	1	
2-388	4月28日	—	〔書状〕（兵庫での相場が上がったことについて、別紙を参照するよう依頼）	春徳丸喜一郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　春徳丸喜一郎」、「尊下」。
2-389-1	子12月18日	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋［　　］（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。2-389-2とともに折りたたまれて一括。
2-389-2	子12月22日	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋［　　］（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-390	酉12月	—	覚（茶くみ、素麺代など書上げ）	油屋浅右衛門	奥屋喜平	切継紙	1	
2-391	卯7月18日	—	覚（可部屋印の鉄などの売り払い代金書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	後欠、虫損小破。
2-392	2月8日	—	〔書状〕（大池村丸屋助市の金銭借用に関する旨）	小平太	浅右衛門	切継紙	1	虫損小破。包紙入、上書「田儀町　油屋浅右衛門様　大池［　　］小平太　貴下要用書」。
2-393	2月15日	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-394	卯5月17日	—	覚（土瓶代など金銭書上げ）	土久（印）	浅右衛門	切紙	1	印は「北越／新潟／瀬戸物屋／土屋久七」。
2-395	丑7月7日	—	覚（金銭書上げ）	若さや嘉助（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「越後／新潟／若狭屋」。
2-396	甲寅6月6日	—	覚（木綿一疋の預かり証）	敦賀屋多助（印）、下代　与平次	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「敦多」。
2-397	寅正月	—	覚（金銭書上げ）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／安来／笹屋」。
2-398	午3月9日	—	覚（金銭書上げ）	真脇屋久次郎（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「真脇屋久次郎／宇出津」。
2-399	亥8月29日	—	覚（菓子折り代など書上げ）	いなさや嘉助	浅右衛門	切継紙	1	
2-400	午4月9日	—	覚（金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	
2-401	2月4日	—	〔書状〕（小田の寅屋に対し、「当家親方」へ返事を出すように依頼したこと）	幾徳丸源平	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-402	未11月12日	—	目録之覚（中割鉄代など金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-403	正月29日	—	覚（金銭書上げ）	大居屋	油屋	切紙	1	
2-404	卯8月22日	—	覚（塗物・大盃代など金銭書上げ）	泊屋茂兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-405	5月18日	—	〔副状〕（米仕切の入用代金について）	貞助	浅右衛門	切継紙	1	
2-406	卯2月9日	—	覚（砂糖代など金銭書上げ）	但馬屋保右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「但馬屋」。
2-407	未11月10日	—	覚（鉄代など金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	
2-408	卯10月6日	—	覚（手形代や利息など金銭書上げ）	真脇屋久次郎（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「真脇屋久次郎／宇出津」。
2-409	□5月17日	—	覚（金銭書上げ）	河野や店	浅右衛門	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-410	6月	—	〔一紙〕（二ノ宮神社へ海上安全祈念）	—	—	切紙	1	「幾徳丸浅右衛門船」。
2-411	子6月	—	入用目六覚（塩・鰹節などの品目と金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
2-412	□□27日	—	覚（素麺代など金銭書上げ）	長嶺源兵衛（印）	幾徳丸源平	切紙	1	印は「長州萩／長嶺六郎左衛門／不用手形」。
2-413	申3月14日	—	〔書状〕（木綿相場の下落を通知する旨）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門、同勝蔵	切継紙	1	
2-414		—	目録（金銭書上げ）	大野屋伝七（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「大坂／大伝」。
2-415	丑11月8日	—	覚（中川屋多四郎と幾徳丸源平から金銭を受領した旨）	—	最上屋彦左衛門	切紙	1	
2-416	正月2日	—	旧冬売留相場（相場の書上げと新年のあいさつ）	米屋津右衛門（印）	小倉屋久八	切紙	1	印は「越後／寺泊／米屋津右衛門」。
2-417	—	—	〔包紙〕	米屋津右衛門（印）	小倉屋久八	切紙	1	上書「たぎ小倉屋久八様　米屋津右衛門　余人々御中」、裏書「越後寺泊」。
2-418	慶応4辰年6月2日	1868	差引目録（鉄代など書上げ）	小川屋長右衛門（印）	油屋久八	切継紙	1	印は「越後／新潟／大上小川屋／金預不用」。
2-419	甲子7月11日	—	指引覚（米代、木綿代など書上げ）	京屋四郎左衛門（印）	油屋久八	切継紙	1	印は「越後／寺泊／京屋」。
2-420	酉10月26日	—	覚（筆代、なすび代、駄賃などの書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋卯十郎	切継紙	1	
2-421	12月	—	〔金銭書上げ〕	—	油屋茂市	切紙	1	
2-422	酉10月2日	—	〔書状〕（出雲崎の米価と古米の取引状況を通知）	敦賀屋多助（印）	綿屋善市	切紙	1	印は「金銀不用／越後国／出雲嵜／敦賀屋」。
2-423	辰9月7日	—	相庭（米、大豆などの相場書上げ）	桶屋伝蔵（印）	油屋	切継紙	1	印は「長州／赤間関／桶伝」。
2-424	3月30日	—	覚（金銭書上げ）	東屋	向川口屋	切紙	1	
2-425	7月27日	—	〔書状〕（日の延期を依頼する旨など）	—	—	切継紙	1	
2-426	卯拾月朔日	—	相場（三田米、大豆、繰綿など相場書上げ）	寺泊　米屋津右衛門	—	切継紙	1	
2-427	卯8月29日	—	当時相場（三田米、大豆、塩などの相場書上げ）	小川屋長右衛門	—	切紙	1	
2-428	亥3月22日	—	覚（酒代書上げ）	六□寺屋甚右衛門	川口屋吉三郎	切紙	1	
2-429	午7月12日	—	覚（金銭書上げ）	なだ屋与兵衛	あぶらや兼兵衛	切継紙	1	
2-430	29日	—	〔副状〕（北国で石数の足し上げをするため、御船屋へ石数の増加を依頼する旨）	甫一郎	勝蔵	切継紙	1	
2-431	8月11日	—	覚（浅右衛門の扱苧代金を立て替えた旨）	堂の原　健右衛門	名賀屋五郎蔵	切継紙	1	
2-432	天保7申年12月	1836	借用申銭之事（銭百貫文を借用した旨）	本人藤井玄尚、請人米屋多作	宮本山内保蔵	切継紙	1	
2-433	12月20日	—	〔書状〕（文兵衛、由兵衛の近況などを報告）	—	—	切継紙	1	
2-434	8月10日	—	当時相場（米、大豆、小豆などの相場書上げ）	小川屋長右衛門	—	切紙	1	
2-435	5月27日	—	〔副状〕（小志津湊の真脇屋へ銑を預け置いた旨）	—	—	切紙	1	
2-436	—	—	初相庭（繰綿、肥後米など相場書上げ）	敦賀屋多助	綿屋善市	切紙	1	包紙入、上書「出雲田儀綿屋善市様　敦賀屋多助」、「貴下」、裏書「越後出雲崎」。
2-437	—	—	覚（釘代書上げ）	かがや平蔵	中	切紙	1	
2-438	卯12月22日	—	〔書状〕（この書付と引き替える旨）	油屋浅右衛門	佐津目　松井屋	切紙	1	前欠。
2-439	—	—	〔志儀銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡ヵ。
2-440	11月28日	—	覚（鏡代書上げ）	（印：河内屋与兵衛）	幾徳丸	切紙	1	印は「大坂新町西山本町高橋筋／御鏡所／河内屋与兵衛」。
2-441	—	—	〔人名書上げ〕	—	—	切紙	1	
2-442	10月16日	—	〔書状〕（借用した書物について、返却が延引したことを謝る旨）	油屋勝蔵	但馬屋与七	切継紙	1	端裏書「波根浦但馬屋与七様　油屋勝蔵」、「貴答用」。
2-443	—	—	〔書状〕（下タ船の件を新納屋忠左衛門に頼んだ旨）	—	—	切紙	1	
2-444	7月3日	—	覚（金銭返済について、別紙目録を添えて送る旨）	但馬屋保右衛門（印）	中川屋	切紙	1	印は「但馬屋」。
2-445	子3月8日	—	相庭（米・大豆などの相場書上げ）	大野屋伝七（印）	—	切紙	1	印は「大伝」。
2-446	12月28日	—	〔書状〕（金銭の処理について通知する旨）	五郎蔵	浅右衛門	切継紙	1	端裏書「浅右衛門様　五郎蔵」、「尊下□」。
2-447-1	—	—	〔金銭書上げ〕（鯛代・あかみつ代など）	—	—	切紙	1	2-447はこよりで一括。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
2-447-2	辰12月	—	覚（皿代など書上げ）	こんや清三郎	油屋浅右衛門	切紙	1	
2-447-3	—	—	覚（四斗桶など書上げ）	貞五郎	浅右衛門	切紙	1	
2-447-4	辰3月	—	覚（金銭書上げ）	和田屋賀三郎	浅右衛門	切紙	1	
2-447-5	辰12月	—	覚（わに代など書上げ）	久手屋瀬蔵	油屋	切紙	1	
2-447-6	辰1月	—	覚（火打など書上げ）	かがや平蔵	中	切紙	1	
2-447-7	辰12月	—	覚（作料など書上げ）	助蔵	油屋	切紙	1	
2-447-8	辰12月	—	覚（金銭書上げ）	魚屋新四郎	油屋	切紙	1	
2-447-9	辰12月	—	覚（釘代、蔵の鍵、醤油代書上げ）	かじや愛助	油屋勝蔵	切紙	1	
2-447-10	辰12月	—	覚（鯛代、わかめ代など書上げ）	茶屋作平	下町油屋	切紙	1	
2-447-11	辰12月	—	覚（金銭書上げ）	大田屋久助	中油屋	切紙	1	
2-448	卯5月晦日	—	覚（金銭書上げ）	小山や新之助（印）	幾徳丸次兵衛	切紙	1	「写」。
2-449	—	—	売仕切（可部屋印、堂ヶ原印の鉄代書上げ）	—	—	切紙	1	
2-450	3月5日	—	初相場（相場の書上げと新年の挨拶）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／安来／笹屋」。
2-451	正月5日	—	初相場（相場の書上げと新年の挨拶）	虎屋直兵衛（印）	天徳丸運重	切紙	1	包紙入、上書「天徳丸運重様　虎屋直兵衛」、「余人々御中」。印は「伯州／境津／虎屋」。
2-452	3月13日	—	〔書状〕（日和次第に其地へ入船すること、下り荷物について、銑や釵を積み下ったことなど）	—	—	切継紙	1	
2-453	—	—	〔書状〕（田儀行きの書状を尾道の石州屋七郎兵衛方へ送るよう依頼する旨）	—	—	切継紙	1	
2-454	卯7月21日	—	〔書状〕（木綿の不足分を橋本屋の積み荷で補填した旨を通知）	黒田屋千三郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油」、印は「平田／■千改」。
2-455	明治13年2月29日	1880	記（塩代書上げ）	児玉清右衛門（印）	春徳丸仁平	切紙	1	印は「尾魚清」。
2-456	—	—	〔割鉄の数量書上げ〕	—	—	切継紙	1	
2-457	—	—	〔書状〕（銑・鋤などの売り捌き状況を報告）	—	—	切継紙	1	後欠。
2-458	寅7月	—	覚（金銭書上げ）	大田屋店	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-1-1	明治37年	1904	分検宅地家相鑑定図	頼冨実毅	鳥屋尾美登	一紙（絵図）	1	3-1は中性紙封筒に一括。
3-1-2	明治16年5月吉詳日	1883	〔邸宅絵図〕	静観堂	—	一紙（絵図）	1	
3-1-3	—	—	〔邸宅絵図〕	—	—	一紙（絵図）	1	
3-1-4	明治37年7月6日	1904	方鑑書（土蔵移築について）	頼冨実毅	鳥屋尾美登	竪帳	1	
3-2	3月6日	—	覚（可部屋印鉄、堂ノ原細割鉄などを送ったこと）	幾徳丸浅右衛門	川口屋吉三郎	切紙	1	3-2～14はこよりで一括。
3-3	3月6日	—	覚（可部屋印鉄、鉄ヶ谷印鉄、奥原印鉄を送った旨）	幾徳丸浅右衛門	麦屋十兵衛	切継紙	1	
3-4	辰5月3日		覚（可部屋印、奥原印の鉄など書上げ）	出雲崎屋伝七（印）	幾徳丸御船中	切紙	1	印は「越後／新潟／出伝」。
3-5	10月23日	—	当時相場（米・大豆など相場書上げ）	小川屋長右衛門	—	切紙	1	
3-6-1	3月3日	—	〔書状〕（幾重丸の動向、幾徳丸・幾重丸共に明日から順風次第出船することなどを通知）	幾得丸勝蔵	田儀町　油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「田儀町油屋浅右衛門様　幾得丸勝蔵」、「貴下要用書」、「三月三日認メ　従三保関」。3-6-2が挟まる。
3-6-2	—	—	〔副状〕（幾重丸の下り荷物の残りを、松江で積み廻る予定の旨）	—	—	切紙	1	
3-7	—	—	覚（小菊・平割の鉄代など書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-8	—	—	覚（鉄ヶ谷印・奥原印などの鉄書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-9	—	—	〔鉄の数量書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-10	—	—	覚（細割鉄代書上げ）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-11	—	—	覚（鉄ヶ谷の鉄代など書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-12	—	—	覚（鉄ヶ谷の鉄代など書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-13	—	—	覚（可部屋印・堂ノ原の鉄など書上げ）	—	—	切紙	1	綴痕あり。
3-14-1	3月6日	—	〔一紙〕（堂ノ原の鉄など送付について）	幾徳丸浅右衛門	川口屋吉三郎	切継紙	1	3-14はこよりで一括。
3-14-2	—	—	覚（氷砂糖代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-14-3	—	—	〔一紙〕（下書き）	—	—	切継紙	1	
3-14-4	—	—	〔鉄の数量など書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-14-5	—	—	覚（宮本鉄の注文に関する旨など）	—	—	切紙	1	
3-14-6	22日	—	覚（酒や肴代の書上げ）	年行司	水頭衆中ヵ	切紙	1	虫損小破、後欠ヵ。
3-14-7	—	—	〔品物の数量書上げヵ〕	—	—	切継紙	1	
3-14-8	—	—	〔品物の数量書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-15	4月28日	—	覚（小割付木と釜瓶方鍋釜荷について、積み戻しを依頼する旨）	幾重丸久八	油屋甫一郎	切紙	1	虫損小破、端裏書「幾徳丸久八様　油屋甫一郎」。
3-16	卯4月	—	〔書状〕（北陸地方の鉄相場が不景気である旨などを通知）	麦屋重兵衛	因幡屋清八	切継紙	1	
3-17-1	戌4月12日	—	覚（線香代など金銭書上げ）	幾重丸久八	桜井様御内　市郎	切紙	1	小破。3-17は仮綴。
3-17-2	［　］月朔日	—	覚（金銭書上げ）	佐の屋熊五郎（印）	［　　］丸久八	切紙	1	小破、印は「長州／下之関／佐熊」。
3-17-3	3月9日	—	覚（金銭書上げ）	（印：［　　］佐七）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大阪／［　　］／御石用足袋所／［　　］佐七」。
3-17-4	3月8日	—	覚（金銭書上げ）	近喜	幾徳丸久八	切紙	1	印は「大坂／［　　］／近喜」。
3-17-5	戌3月8日	—	覚（唐紙代書上げ）	小原屋伝兵衛（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大坂／□□／小原伝」。
3-18	寅12月	—	〔金銭書上げ〕（吸い物椀・醤油・酒代など）	浅右衛門	御釣清右衛門	切紙	1	
3-19	亥2月26日	—	覚（銑鉄積み出しについて、品目・数量の書上げ）	越堂御鑪	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	
3-20	—	—	〔封筒〕	伊勢屋治郎右衛門	雲州タキ　宮本運右衛門	一紙（封筒）	1	上書「雲州タキ宮本運右衛門様　伊勢屋治郎右衛門」、「要用」。
3-21	丑12月	—	覚（井ノ上良斎仕立志儀の金銭を預かった旨）	取人　油屋浅右衛門（印）	桜井勝之助	切紙	1	印は「雲州／田儀／油屋」。
3-22	—	—	〔一紙〕（こより）	—	—	一紙	1	
3-23	文久元年	1861	入金請取通（金銭書上げ）	越堂御鑪（印）	油屋浅右衛門	横帳	1	印は「口御鑪」。
3-24	寅12月24日	—	覚（手形引替えについて）	越堂御鑪（印）	油屋卯十	切紙	1	「明教寺様渡り」。印は「雲州／田儀／越堂御鑪」。
3-25	寅3月13日	—	覚（下り銀受取について）	越堂御鑪（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	印は「御鑪」。
3-26	—	—	〔書状〕（病気のため失礼した旨）	—	—	折紙	1	3-26～33まで包紙で一括。
3-27	辰11月8日	—	覚（金銭書上げ）	庄や徳左衛門（印）	新右衛門	切紙	1	
3-28	—	—	〔通知〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-29	丑12月19日	—	覚（巻紙一束の注文を依頼する旨）	油屋幾太郎	木屋米四郎	切紙	1	
3-30	—	—	ねん紙（作り方の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-31	寅12月	—	覚（鯛代など金銭書上げ）	茶屋作蔵	下油屋	切継紙	1	
3-32	子5月	—	おほへ（金銭代など書上げ）	かざりや定蔵	［　　］かや御宿御舟頭	切継紙	1	
3-33	寅12月	—	覚（かまぼこ代、茶代など金銭書上げ）	—	油屋	切紙	1	
3-34-1	明治9年3月24日	1876	地所売買願	売主大野秀三郎他行中代印長男大野美造（印）、買主鳥屋尾勝蔵（印）、副戸長加田亀五郎（印）、戸長錦織謙三郎（印）	島根県令　佐藤信寛	竪帳	2	3-34は仮綴。
3-34-2	明治9年3月24日	1876	地所名前替願	売主大野秀三郎他行ニ付代印大野美造（印）、買主鳥屋尾勝蔵（印）、副戸長加田亀五郎（印）、戸長錦織謙三郎（印）	島根県令　井関成良	竪帳	10	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-35	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	3	「混元丹三包」と書かれた袋に一括。
3-36-1	寅7月	—	覚（金銭書上げ）	原屋和平	油屋	切紙	1	3-36はこよりで一括。
3-36-2	2月11日	—	〔書状〕（ご主人様の御席について）	—	—	切紙	1	前欠。
3-36-3	—	—	〔書状〕（御地への入津について）	—	—	切紙	1	後欠。
3-36-4	—	—	売仕切	—	—	切紙	1	後欠。端裏書「油屋様分」、印は「伏木／太田屋」。
3-36-5	—	—	相場	—	油屋久八	切紙	1	後欠。
3-36-6	—	—	〔書状〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-36-7	—	—	〔書状〕（新年の挨拶）	—	—	切紙	1	後欠。
3-36-8	—	—	〔相場〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-36-9	—	—	〔副状〕（去秋分の差し引きを依頼する旨）	—	—	切紙	1	
3-36-10	寅12月	—	覚（金銭書上げ）	—	油屋浅右衛門	切継紙	1	断簡。
3-36-11	—	—	〔売仕切ヵ〕	—	油屋浅右衛門	切紙	1	前欠。
3-36-12	—	—	〔書状〕（境行きの便船で、貴公の荷物を境の新屋直兵衛方へ送ることを提案する旨）	—	—	切継紙	1	
3-37	午年	—	呉服小間物御通（金銭書上げ）	米原屋弥助	油屋卯重	切紙	1	包紙入。
3-38-1	—	—	〔一紙〕（越中伏木へ入津したが、商売状況が芳しくないことなどを報告）	—	—	切紙	1	3-38はこよりで一括。
3-38-2	—	—	覚（山城屋、藤間屋、因幡屋などの鉄代書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-38-3	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-38-4	—	—	飛切	—	—	切紙	1	
3-38-5	—	—	〔一紙〕（「母七廻忌悉皆記」）	—	—	切紙	1	
3-38-6	—	—	〔袋〕（薬袋）	丹波屋藤兵衛	—	一紙（袋）	1	
3-38-7	—	—	〔包紙〕（扇の包紙）	石見屋理助	—	切紙	1	貼紙「石見屋理助」。
3-38-8	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	切紙4枚に包まれる。
3-38-9	—	—	〔一紙〕（混元丹の効能書）	加州金沢 中屋彦右衛門	—	切紙	1	
3-38-10	—	—	覚（船や碇などの注文票ヵ）	—	—	切紙	1	
3-38-11	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-38-12	3月26日	—	〔書状〕（前欠により、本文のほとんどが欠落）	玉津屋重兵衛	油屋彦右衛門	切紙	1	前欠。
3-38-13	—	—	〔書状〕（佐渡にて破船の旨）	—	—	切継紙	1	
3-38-14	—	—	〔通知〕（米廻しの件について）	只蔵	油屋浅右衛門	切紙	1	
3-38-15	亥11月21日	—	覚（金九両送付の旨）	運兵衛	与四郎	切紙	1	
3-38-16	—	—	〔一紙〕（美保関出船後の動向について）	—	—	切紙	1	
3-38-17	酉12月	—	〔金銭書上げ〕	中の屋守右衛門	宇十	切紙	1	
3-38-18	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	
3-38-19	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-38-20	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	為四郎	五郎蔵	切紙	1	後欠、端裏書「□方五郎蔵様　□為四郎」、「貴下」、裏書「荒荒込入」。
3-38-21	—	—	〔包紙ヵ〕	—	—	切紙	1	
3-38-22	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-38-23	—	—	〔書状〕（前欠により、本文欠落）	—	—	切紙	1	前欠、印は「小田／土居屋」。
3-38-24	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-38-25	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-38-26	辰3月吉日	—	〔御札〕（「奉納　南無大慈大悲観世音菩薩」）	口田儀町　勝蔵	—	切紙	3	こよりで一括。
3-38-27	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-38-28	—	—	日和附（日和待ち日数の書上げヵ）	—	—	切紙	1	「浅右衛門船」。
3-38-29	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-39-1	—	—	〔袋〕	—	—	一紙（袋）	1	3-39はこよりで一括。
3-39-2	—	—	〔土地の面積書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-39-3	卯12月	—	覚（綿うちせん代など書上げ）	太市	油屋	切紙	1	
3-39-4	子12月	—	覚（徳利代など金銭書上げ）	浅右衛門	井せ屋	切紙	1	
3-39-5	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-39-6	—	—	〔一紙〕（「御末広」）	—	—	切紙	1	
3-39-7	—	—	〔たばこ代書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-39-8	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-39-9	—	—	〔御札〕（南無大慈大悲観世音菩薩）	—	—	切紙	1	綴痕あり、3-39-8に挟まる。
3-40-1	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	3	3-40は包紙とこよりで一括。
3-40-2	12月3日	—	覚（木しゃくし、併醤油を送る旨）	宮本	あふらや与四郎	切紙	1	
3-40-3	2月16日	—	〔書状〕（扱苧の取り扱いについて通知）	嶋屋六左衛門	田儀　油屋卯十	切紙	1	端裏書「田儀　油屋卯十様　嶋屋六左衛門」、「貴下至用」。
3-40-4	10月8日	—	覚（金銭書上げ）	寿屋	幾徳丸	切紙	1	
3-40-5	12月17日	—	覚（金銭書上げ）	（印：墨筆仕入所）	幾徳丸柳十郎	切紙	1	印は「大坂／本家未町堀四丁目楠本／出店いたち堀南入／墨筆仕入所」。
3-40-6	11月29日	—	覚（金銭書上げ）	野田屋茂兵衛（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	印は「大坂／野田茂」。
3-40-7	未10月8日	—	覚（金銭書上げ）	野田屋茂兵衛（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	印は「大坂／野田茂」。
3-40-8	10月9日	—	覚（金銭書上げ）	吉野屋清次郎（印）	幾徳丸卯重	切紙	1	印は「大坂／唐物町／御堂筋角／吉清」。
3-40-9	10月6日	—	覚（金銭書上げ）	（印：吉野屋清次郎）	幾徳丸宇重	切紙	1	印は「紀州出店／大坂唐物町／御堂筋角　［　］所／吉野屋清次郎」。
3-41-1	文政12年12月	1829	覚（小村惣左衛門仕立志儀の金銭を受領した旨）	本人油屋彦左衛門（印）、受人油屋茂市（印）	和田茂市	切紙	1	3-41は袋に一括。
3-41-2	文政13年3月	1830	借用申銭之事（銭七貫文の借用について）	本人安五郎（印）、受人恵平（印）	油屋宇十	竪紙	1	包紙入、上書「証文　安五郎」。
3-41-3	—	—	覚（薬の服用目安ヵ）	—	勝蔵	切紙	1	
3-41-4	—	—	〔一紙〕（包紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-41-5	天保7年7月	1836	覚（重助仕立志儀の金銭を預かった旨）	取人宮本山内　重兵衛（印）、受人同忠蔵（印）	鳥屋尾卯十	切紙	1	3-41-5～7が折りたたまれて一括。
3-41-6	天保7年12月	1836	覚（才坂村弥兵太仕立志儀の金銭を受領した旨）	取人林八（印）	風崎屋新助	切紙	1	
3-41-7	天保7年12月	1836	覚（才坂村弥兵太仕立志儀の金銭を受領した旨）	取人林八（印）	彦左衛門	切紙	1	
3-41-8	天保9年11月	1838	覚（祖右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	取人九兵衛（印）、請人良七（印）	小兵衛	切継紙	1	
3-41-9	天保5年11月	1834	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人六兵衛（印）、受人又右衛門（印）	右十	切紙	1	3-41-9～10が折りたたまれて一括。
3-41-10	天保5年11月	1834	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人六兵衛（印）、受人又右衛門（印）	右十	切紙	1	
3-41-11	天保7年12月	1836	覚（祖右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	取人十増（印）、受人仲右衛門（印）	岩三郎	切紙	1	
3-41-12	文政13年12月	1830	覚（右重仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人又右衛門（印）、請人喜太郎（印）	右重	切紙	1	3-41-12～15まで折りたたまれて一括。
3-41-13	天保2年12月	1831	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人彦助（印）、受人弥八（印）、本人友益（印）、受人九左衛門（印）	卯重	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-41-14	天保2年12月	1831	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人彦助（印）、受人弥八（印）、本人友益（印）、受人九左衛門（印）	卯重	切紙	1	
3-41-15	文政13年12月	1830	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人五右衛門（印）、受人喜太郎（印）	卯重	切紙	1	
3-41-16	天保10年12月28日	1839	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を受領した旨）	山根屋清三郎（印）	卯十	切紙	1	印は「神門一文／山根屋」。
3-41-17	正月朔日	—	覚（金銭書上げ）	高平屋市郎右衛門	口田儀町中　卯十	切紙	1	
3-41-18	天保8年12月	1837	覚（林八仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人□□村為右衛門（印）、請人林十（印）	卯十	切紙	1	
3-41-19	天保8年12月	1837	覚（一久保田又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	連名之内　本人喜八（印）、請人善四郎（印）	右十	切紙	1	3-41-19～20が折りたたまれて一括。
3-41-20	天保8年12月	1837	覚（一久保田又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	連名之内　本人又次（印）、請人丈兵衛（印）	右十	切紙	1	
3-41-21	天保4年12月	1833	覚（一久保田又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人銀兵衛、受人助四郎	右十	切紙	1	
3-41-22	天保3年12月	1832	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人利蔵（印）、受人佐五郎（印）	卯重	切紙	1	
3-41-23	天保3年12月	1832	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人利蔵（印）、受人佐五郎（印）	卯重	切紙	1	
3-41-24	天保6年12月	1835	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人善四郎（印）、受人伊平（印）、同太五郎（印）、本人礒七（印）、同甚右衛門（印）、同弥助（印）、受人林助（印）	右十	切紙	1	3-41-24～25が折りたたまれて一括。
3-41-25	天保6年12月	1835	覚（又右衛門仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人善四郎（印）、受人伊平（印）、同太五郎（印）、本人礒七（印）、同甚右衛門（印）、同弥助（印）、受人林助（印）	右十	切紙	1	
3-41-26	天保3年12月	1832	覚（志儀銭を受領した旨）	本人六兵衛（印）、受人甚四郎（印）	多儀町宇重	切紙	1	3-41-26～29が折りたたまれて一括。
3-41-27	天保6年12月	1835	覚（新屋六兵衛仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人朝原村八兵衛（印）、受人同村平八（印）	宇重	切紙	1	こよりつき。
3-41-28	天保4年12月	1833	覚（新屋六兵衛仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人喜一郎（印）、受人甚四郎（印）	宇十	切紙	1	
3-41-29	天保5年12月	1834	覚（新屋六兵衛仕立志儀の金銭を預かった旨）	本人□蔵（印）、受人喜左衛門（印）	卯十	切紙	1	
3-41-30	文政11年12月	1828	覚（志儀銭を受領した旨）	本人惣左衛門（印）、受人重左衛門（印）	右同人取次	切紙	1	
3-41-31	文政11年	1828	覚（志儀銭を受領した旨）	本人惣左衛門（印）、受人重左衛門（印）	茂市取次	切紙	1	
3-41-32	天保9年12月	1838	覚（吉野村六兵衛仕立志儀の金銭を預かった旨）	一久保田村　多助（印）	油屋卯十	切紙	1	
3-41-33	9月7日	—	覚（金銭書上げ）	佐伯や與八	幾徳丸勝蔵	切紙	1	
3-41-34	辰10月22日	—	覚（金銭書上げ）	紙長（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「紙長」。
3-41-35	11月21日	—	〔書状〕（仕切金の勘定について、伝言を依頼）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-41-36	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	3-41-36～37が折りたたまれて一括。
3-41-37	安政3年11月27日	1856	覚（素麺代不足分の借用）	幾徳丸勝蔵（印）	中屋源兵衛	切継紙	1	小破。
3-41-38	12月17日	—	覚（金銭書上げ）	桶屋茂兵衛	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	虫損小破。
3-42-1	—	—	〔袋〕	中灰屋四郎蔵	油屋浅右衛門	一紙（袋）	1	3-42は包紙で一括。
3-42-2	—	—	〔副状〕（商売状況と春吉丸が破船した旨を通知）	—	—	切継紙	1	小破。
3-42-3	—	—	覚（銑鉄の品目と数量書上げ）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-42-4	—	—	覚（茶代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-42-5	12月17日	—	〔書状〕（金銭の件などを通知）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-42-6	—	—	覚（米の数量と人名書上げ）	—	—	切紙	1	
3-42-7	辰3月15日	—	〔一紙〕（塩の代銭書上げ）	油屋浅右衛門	伴六	切紙	1	
3-42-8	—	—	覚（醤油の代銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-42-9	10月8日	—	送り状（木綿）	近喜	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
3-42-10	寅9月2日	—	覚（最上屋彦右衛門の手形代金）	大野や伝七	幾徳丸勝蔵	切紙	1	
3-42-11	辰11月	—	覚（金銭書上げ）	忠平	中様	切紙	1	
3-42-12	卯正月	—	覚（金銭書上げ）	角茂左衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-43-1	嘉永7年	1854	嘉永七申寅略暦	最上屋彦左衛門	—	切紙	1	刷物、小破。3-43はこよりで一括。
3-43-2	—	—	烏犀円効験并服法（薬の効能と服用方法）	加州金沢犀川片町　宮竹屋亀田伊右衛門（印）	—	切紙	1	
3-43-3	11月17日	—	〔相場〕（米・大豆など相場書上げ）	八店	松原小兵衛	切紙	1	
3-43-4	—	—	〔袋〕（烏犀円の袋）	鸞□堂	—	一紙（袋）	1	
3-43-5	—	—	〔封筒〕	—	—	一紙（封筒）	1	上書「越中伏木ニ而」、「油屋浅右衛門様」「仕切書在［　　］」。
3-43-6	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主行司	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。3-43-6～11はこよりで仮綴。
3-43-7	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主大新造	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。
3-43-8	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主六六六、三三三	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。
3-43-9	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主牡丹ノ花	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。
3-43-10	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主男女六人中間	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。
3-43-11	—	—	〔一紙〕（富くじ関連ヵ）	札主大黒印	—	切紙	1	裏面に印「杵築／小土地／木綿屋」。
3-43-12	—	—	〔包紙〕（御膳料）	油屋浅右衛門	—	切紙	1	
3-44	—	—	御売仕切（木綿の仕切状）	—	—	切紙	1	後欠。端裏書「油幾徳分」、印は「敦賀屋」。
3-45-1	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	3-45は包紙で一括。
3-45-2	12月4日	—	〔書状〕（払い高について通知）	夫方至附新蔵	諸払方	切紙	1	
3-45-3	—	—	懐中即功紙（薬の効能について）	越中富山　栄生軒	—	切紙	1	
3-45-4	—	—	〔袋〕（腹痛薬（「かさの下」）の袋）	雲州松江京橋通　小西屋治左衛門	—	一紙（袋）	1	
3-45-5	—	—	〔書状〕（商内物の状態など）	—	—	切紙	1	断簡、小破。
3-45-6	巳正月29日	—	〔通知〕（金銭書上げ）	黒田屋千三郎	大坂屋	切紙	1	前欠、小破。
3-45-7	辰5月27日	—	覚（鰤節・銑などの金銭書上げ）	山本屋伝右衛門	幾徳丸親方	切継紙	1	
3-45-8	—	—	覚（平割鉄の数量書上げ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-45-9	—	—	〔産鉄書上げ〕	—	—	切継紙	1	断簡。
3-45-10	—	—	覚（鉄ヶ谷の産鉄など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-45-11	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-45-12	寅12月	—	覚（かまぼこ代、ぶり代など書上げ）	久手屋瀬蔵	油屋	切紙	1	
3-45-13	卯5月17日	—	焚込砂糖積入手板	柳井屋重蔵（印）	幾重丸治平	横帳	1	印は「柳井屋重蔵／萬問屋」。
3-46-1	15日	—	〔書状〕（体調不良の旨を通知）	馬成	祭洋	切継紙	1	3-46は包紙で一括。
3-46-2	卯11月8日	—	覚（金銭書上げ）	畑屋治兵衛	山城屋作右衛門	切紙	1	
3-46-3	12月3日	—	〔書状〕（佐助殿への証文の件について通知）	—	—	切継紙	1	
3-46-4	丑閏5月	—	覚（料理の献立書上げ）	海士屋熊八	田儀　油屋	切継紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-46-5	12月4日	—	〔書状〕（安来での鉄の一件と境での繰綿の件を両日中に済まし、2・3日の内に出港したい旨を報告）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-46-6	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	3-46-6に3-46-7が入。
3-46-7	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-46-8	辰大晦日	—	〔書状〕（金四郎を通じて書類を差し出す件）	朝畑　佐一郎	油屋	切継紙	1	
3-46-9	正月3日	—	初相場（米、大豆などの相場書上げ）	虎屋直兵衛（印）	亀吉丸政右衛門	切紙	1	包紙入、「亀吉丸政右衛門様　虎屋直兵衛」、「参人々御中」、印は「伯州／境津／虎屋」。
3-46-10	8月25日	—	〔書状〕（輪嶋宮野屋へ仕切金を渡すよう依頼）	油屋勝蔵	真脇屋文次郎	切継紙	1	
3-46-11	5月26日	—	〔書状〕（御用向きと木綿相場について）	□七三郎	鳥屋尾源兵衛	切紙	1	封筒入。
3-46-12-1	4月2日	—	〔書状〕（他国の石灰を久村で改めを行う旨）	弥三右衛門	彦左衛門	切継紙	1	3-46-12-2が挟まる。
3-46-12-2	3月27日	—	〔書状〕（他国の石灰200俵を口田儀船で取り計らうことを許可する旨）	国府久馬	下郡権市、与頭弥三右衛門、与頭藤十	切継紙	1	
3-46-13	卯7月21日	—	〔書状〕（幾徳丸浅右衛門の荷物を観音丸国三郎が運送したことに関する旨）	黒田屋千三郎（印）	敦賀屋太助、御店衆中	切継紙	1	印は「雲州／平田本町／市場西側／黒千改」。包紙入、上書「越後出雲崎湊　敦賀屋太助様　黒田屋千三郎」、「書状在中」。
3-46-14	神在月朔日	—	〔書状〕（手紙を差し出すことについて）	（幾徳丸源兵衛）	春徳丸喜市、亀吉丸喜三左衛門	切紙	1	包紙が貼付、上書「松江灘町肥後屋御内　春得丸喜市様　幾徳丸源平」、「無拠大急用書」、裏書「神在月朔日」、「仍三保関」。
3-46-15	子11月24日	—	覚（金拾両と札壱貫百匁を受け取った旨）	油屋浅右衛門	木綿屋由右衛門	切紙	1	
3-46-16-1	天保7年12月	1836	覚（小豆嶋屋長右衛門仕立志儀の銭を受領した旨）	日野円助（印）、ぬり屋勝太郎（印）	大下才兵衛	切紙	1	3-46-16はこよりで仮綴。
3-46-16-2	天保7年12月	1836	覚（小豆嶋屋長右衛門仕立志儀の銭を受領した旨）	日野円助（印）、ぬり屋勝太郎（印）	油屋貞市	切紙	1	
3-46-16-3	天保7年12月	1836	覚（小豆嶋屋長右衛門仕立志儀の銭を受領した旨）	日野円助（印）、ぬり屋勝太郎（印）	讃岐屋茂三郎	切紙	1	
3-46-16-4	天保7年12月	1836	覚（小豆嶋屋長右衛門仕立志儀の銭を受領した旨）	日野円助（印）、ぬり屋勝太郎（印）	豆腐屋助四郎	切紙	1	
3-46-16-5	天保7年12月	1836	覚（小豆嶋屋長右衛門仕立志儀の銭を受領した旨）	日野円助（印）、ぬり屋勝太郎（印）	豆腐屋夫兵衛	切紙	1	
3-46-17	寅9月2日	—	覚（金銭受け取りについて）	堺屋佐次兵衛（印）	幾徳丸分	切紙	1	印は「堺佐」。
3-46-18	9月3日	—	覚（金銭書上げ）	（印：三河屋新助）	生徳丸	切紙	1	印は「大坂／山本町／高橋筋／三河屋新助」。
3-47-1	卯6月1日	—	覚（縞糸代など金銭書上げ）	灘屋源平	油屋御中	切紙	1	3-47はこよりで一括のうえ包紙入。
3-47-2	—	—	〔副状〕（熊谷家からの借用金返済に関する旨）	—	—	切継紙	1	
3-47-3	—	—	覚（越堂飼へ渡す代金や小桜屋調物代など書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-47-4	閏5月29日	—	〔書状〕（仕切一通を差し上げる旨）	—	—	切継紙	1	
3-47-5	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-47-6	15日	—	〔副状〕（北行き鉄を浅右衛門へ売却した旨など）	三郎兵衛	真一郎	切継紙	1	
3-47-7	11月28日	—	覚（金銭書上げ）	日野屋茂□	油屋与四郎	切紙	1	
3-47-8	正月18日	—	〔副状〕（桜井鉄の取り扱いを通知）	—	—	切継紙	1	小破。
3-47-9-1	6月29日	—	〔書状〕（定四郎が入手したアヒルの子を送る旨）	貞助	幾太郎	切紙	1	端裏書「幾太郎様　貞助」、「貴下用」。3-47-9はこよりで仮綴。
3-47-9-2	嘉永4年	1851	嘉永四辛亥略暦	大阪内平野町神明前　松浦	—	切紙	1	
3-47-10	—	—	〔一紙〕（反故紙カ）	—	—	切紙	1	
3-48-1-1	—	—	〔金銭書上げ〕（久村酒代など）	—	—	切紙	1	3-48はこよりで一括。
3-48-1-2	—	—	〔金銭書上げ〕（花代など）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-48-1-3	—	—	〔金銭書上げ〕（椎茸代など）	—	—	切紙	1	
3-48-1-4	—	—	〔金銭書上げ〕（各種品物代など）	—	—	切紙	1	
3-48-1-5	—	—	〔金銭書上げ〕（小麦・米代など）	—	—	切紙	1	
3-48-1-6	—	—	〔金銭書上げ〕（真綿代など）	—	—	切紙	1	
3-48-1-7	—	—	〔金銭書上げ〕（小麦・黒めん代など）	—	—	切紙	1	
3-48-2	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡、大破。
3-48-3	10月23日	—	〔書状〕（商売状況や波根但馬屋に借りた金子返済の件など）	—	—	切継紙	1	
3-48-4	正月2日	—	〔相場〕	敦賀屋太助（印）	油屋卯重	切紙	1	
3-48-5	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-48-6	辰7月17日	—	覚（金銭書上げ）	織屋加兵衛（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「越後国／小千谷町／織屋」。
3-48-7	酉4月15日	—	覚（金銭書上げ）	長嶺源兵衛（印）	油屋卯十郎	切紙	1	印は「長州萩／長嶺六郎右衛門／不用手形」。
3-48-8	—	—	覚（茶代・宿代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-48-9	—	—	覚（綿代・菓子代など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-48-10	—	—	覚（銑鉄ヵの品目と数量の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-48-11	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-48-12	12月4日	—	〔書状〕（源平からの伝聞）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-48-13	午3月16日	—	覚（金銭書上げ）	杉倉東屋（印）	油屋宇十	切紙	1	
3-48-14	—	—	覚（扱苧の金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-49-1	—	—	〔書状〕（白紙）	—	—	切紙	1	3-49はこよりで一括。
3-49-2	—	—	〔金銭書上げ〕（越後米代など）	—	—	切紙	1	断簡、綴痕あり。
3-49-3	7月9日	—	〔書状〕（金銭差し引きについて通知）	土居屋道蔵	油屋浅右衛門	切紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　土居屋道蔵」。
3-49-4	午7月	—	覚（金銭書上げ）	紺屋初助	田儀　中屋浅右衛門	切紙	1	小破。
3-49-5	4月21日	—	口上（銀札の相場について）	権左衛門	甫市	切紙	1	端裏書「甫市様　権左衛門」。
3-49-6	閏5月9日	—	〔書状〕（一向に日和がなく困却している旨など）	宮腰屋市三郎、ほんね勘次郎	橋浦　加賀屋兵右衛門	切継紙	1	端裏書「福浦　加賀屋兵右衛門様　宮腰屋市三郎、ほんね勘次郎」、「要用書入」、裏書「閏五月九日　わじまより」。
3-49-7	23日	—	〔書状〕（日々の出来事について）	—	宇十郎	切継紙	1	
3-49-8	—	—	〔書状〕	—	—	切紙	1	前欠。
3-49-9	—	—	〔書状〕	—	—	切紙	1	後欠。
3-49-10	8月26日	—	覚（金銭を送付した旨）	上屋助左衛門	口田儀町　油屋	切紙	1	
3-49-11	7月9日	—	〔書状〕（油屋入銭のうち、残額を通知）	九八郎	忠兵衛	切紙	1	
3-49-12	亥7月	—	覚（衣類代など金銭書上げ）	新屋礼助	中屋浅右衛門	切継紙	1	
3-49-13	5月3日	—	〔金銭書上げ〕	室屋和兵衛（印）	石見　宇十良	切継紙	1	小破。
3-49-14	未7月28日	—	目録（仕切金を渡したことを報告）	幾徳丸源平	油屋親方	切紙	1	
3-49-15	辰年	—	彦市殿志儀取立覚（志儀銭額と出資者の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-49-16	12月	—	〔金銭書上げ〕（釘・板代など）	大工　新六	油屋	切紙	1	
3-49-17	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-49-18	—	—	〔一紙〕（下案ヵ）	—	—	切紙	1	
3-49-19	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-49-20	—	—	家方混元丹之効能	加州金沢　中屋彦右衛門	—	切紙	1	
3-49-21	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	—	—	切紙	1	後欠。
3-50-1-1	—	—	〔金銭書上げ〕（牛売り代など）	—	—	切紙	1	綴痕あり。3-50は紐で一括。また、3-50-1はこよりで一括。
3-50-1-2	午12月21日	—	送り状（昆布三拾本）	はり佐	幾徳丸卯十郎	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-50-1-3	未8月20日	—	覚（金銭書上げ）	綿せん	卯十	切継紙	1	
3-50-1-4	—	—	覚（米弐俵分の金銭書上げ）	卯十	大田屋保平	切紙	1	
3-50-1-5	—	—	〔一紙〕（「弐歩弐束」）	—	—	切紙	1	
3-50-1-6	—	—	〔一紙〕（「弐歩三百文」）	—	—	切紙	1	
3-50-1-7	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-50-1-8	—	—	釜屋出見せ買物代（そうめん、下駄代など書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-2-1	戌9月8日	—	覚（金銭の収支書上げ）	甫一郎	浅右衛門	切紙	1	3-50-2はこよりで一括。
3-50-2-2	—	—	覚（鉄代など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-50-2-3	戊申2月7日	—	覚（金銭書上げ）	木挽屋信三郎（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
3-50-2-4	天保3年12月		覚（喜市仕立志儀の金銭を受領した旨）	本人　□子常磐	田儀村　茂一郎	切紙	1	
3-50-3-1	—	—	〔一紙〕（「併篠門」）	—	—	切紙	1	3-50-3はこよりで一括。
3-50-3-2	—	—	〔反故紙〕	—	—	切紙	3	
3-50-3-3	—	—	〔金銭書上げ〕（米代など）	—	—	切継紙	1	断簡。
3-50-3-4	戊正月28日	—	覚（志儀銭受け取りについて）	□□種吉	田儀　油屋彦左衛門	切紙	1	
3-50-3-5	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-3-6	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-50-3-7	丑年2月23日	—	覚（焚込代など金銭書上げ）	油屋浅右衛門	米原屋磯十	切紙	1	
3-50-4	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-50-5	酉年2月13日	—	覚（金銭書上げ）	嶋屋（印）	油屋甫市郎	切紙	1	
3-50-6	丑年1月24日	—	〔金銭書上げ〕	大□屋弥兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	前欠、虫損小破。
3-50-7	—	—	送状之事（下書きヵ）	—	—	切紙	1	
3-50-8-1	12月19日	—	〔書状〕（銭借用人の人柄に問題がない旨）	隠居　円左衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	虫損小破、端裏書「油屋浅右衛門様　隠居円左衛門」、「貴下」。3-50-8はこよりで一括。
3-50-8-2	—	—	〔書状〕（当所の入帆の際の売買について）	須福丸忠右衛門	油屋勝蔵	切継紙	1	後欠、端裏書「田儀油屋勝蔵様　須福丸忠右衛門」、「貴下用々」。裏面「松江より」。
3-50-8-3	—	—	〔一紙〕（「竹葉」）	—	—	切紙	1	
3-50-8-4	—	—	〔一紙〕（「金銭書上げの一部ヵ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-50-8-5	24日	—	〔副状〕（金銭の受け渡しを依頼する旨）	—	—	切紙	1	
3-50-8-6	未年7月14日	—	目録仕切（金銭書上げ）	佐渡屋三右衛門（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	虫損小破、印は「能州／福浦／佐渡屋」。
3-50-8-7	—	—	〔一紙〕（「御竹葉」、「十六嶋海苔」の墨書）	今出屋政四郎	—	切紙	1	
3-50-8-8	2月	—	覚（越後縮注文票）	桜井	浅右衛門	切継紙	1	
3-50-8-9	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-8-10	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-8-11	寅12月3日	—	覚（金銭書上げ）	但馬屋（印）	油屋	切継紙	1	
3-50-8-12	—	—	覚（たばこ代など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-50-9	未7月	—	〔金銭書上げ〕	かしや真蔵	油屋	切継紙	1	前欠。
3-50-10-1	未7月	—	〔金銭書上げ〕	なかや広平	油屋	切継紙	1	前欠。
3-50-10-2	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡。3-50-10-1に挟まる。
3-50-11	未7月	—	覚（金銭書上げ）	新蔵	油屋	切継紙	1	
3-50-12	8月6日	—	〔書状〕（金銀札相場の変動にかかる元利の支払いについて）	小桜屋只右衛門	但馬屋弥右衛門	切紙	1	こよりで結ばれる。
3-50-13-1	—	—	〔一紙〕（「但馬新五郎」）	—	—	切紙	1	断簡。3-50-13はこよりで一括。
3-50-13-2	—	—	〔一紙〕（鉄ヶ谷・奥原などの産鉄ヵ書上げ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-50-13-3	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-50-13-4	—	—	〔一紙〕（産鉄ヵ数量書上げ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-50-13-5	丑4月7日	—	覚（金銭書上げ）	宮本屋清右衛門	城崎屋九左衛門	切紙	1	
3-50-13-6	—	—	〔一紙〕（神仙宝寿円の効能書）	加州金沢上堤町　安田屋忠兵衛	—	切紙	1	刷物。
3-50-13-7	—	—	〔金銭書上げ〕（可部屋印鉄など）	—	—	切紙	1	
3-50-13-8	—	—	覚（米売払入用、人足賃など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠ヵ。
3-50-13-9	—	—	〔一紙〕（神仙宝寿円の効能書）	加州金沢上堤町　安田屋忠兵衛	—	切紙	1	刷物。
3-50-13-10	—	—	〔一紙〕（十二支の練習書きヵ）	—	—	切紙	1	
3-50-13-11	子6月28日	—	覚（釵、木綿の種類と数量の書上げ）	笹屋千右衛門	幾徳丸御舟中	切継紙	1	
3-50-13-12	—	—	〔一紙〕（神仙宝寿円の効能書）	加州金沢上堤町　安田屋忠兵衛	—	切紙	1	刷物。
3-50-13-13	5月10日	—	〔書状〕（銑の注文状況とそれにかかる対応について通知する旨）	笹屋千右衛門	油屋浅右衛門	包紙	1	元々未開封。包紙入、上書「三保関丸尾ニ而　油屋浅右衛門様　笹屋千右衛門」、「無拠要用」、「五月十日出し」。
3-50-13-14	—	—	〔金銭書上げ〕（信濃屋市右衛門分）	—	—	切継紙	1	
3-50-13-15	—	—	覚（醤油代、瓦代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-13-16	—	—	覚（宿代、橋賃、道中入用など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-13-17	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-50-13-18	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	—	—	切紙	1	後欠。
3-50-13-19	—	—	覚（算用代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-50-13-20	—	—	〔一紙〕（「一筆啓上」の墨書のみ）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-50-13-21	—	—	〔袋〕（「不換金」の墨書など）	—	—	一紙（袋）	1	
3-51	9月吉日	—	〔書状〕（去年の初穂納入についてお礼）	三村梶助大夫（花押）	—	切紙	1	刷物。封筒入、上書「鳥屋尾浅右衛門様　三村梶助大夫」。
3-52	9月吉日	—	〔書状〕（去年の初穂百文納入についてお礼）	三村梶助大夫（花押）	—	切紙	1	刷物。封筒入、上書「鳥屋尾浅右衛門様　三村梶助大夫」。
3-53	12月13日	—	〔包紙〕	幾徳丸勝蔵	雲州田儀町　油屋浅右衛門	切紙	1	上書「貴下要用」、裏書「十二月十三日」、「従大坂大伝」。印は「大野伝」。
3-54	—	—	〔包紙〕	真脇屋久次郎	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	上書「当用無□」、裏書「伏木ニテ」、「自宇出津ゟ」。
3-55	5月21日	—	〔書状〕（鳥屋尾幸吉の出港について、金銭の返済方法や帰帆予定時期を通知）	石見国大田村　楫野啓壱	出雲国神門郡口田儀村　鳥屋尾勝造	罫紙	1	封筒入、上書「貴下要書　平安」、裏書「五月廿一日発ス」、「□税済」。
3-56	亥正月7日	—	〔書状〕（田儀櫻井家と鳥屋尾家の間で土地を交換する旨）	井原屋小一右衛門	油屋茂市郎	切継紙	1	端裏書「油屋茂市郎様　井原屋小一右衛門」、「貴下要用」。
3-57	—	—	〔包紙〕	敦賀屋多助	豆腐屋助四郎	切紙	1	上書「雲州田儀豆腐屋助四郎様　敦賀屋多助」「貴下」。裏書「ゟ越後出雲崎」。
3-58-1	酉10月2日	—	〔書状〕（当地の作付状況、飯米の相場を通知）	敦賀屋多助（印）	吉出屋種市	切紙	1	元々は未開封。封筒入、上書「雲州田儀吉出屋種市様　敦賀屋多助」、裏書「ゟ越後出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。3-58-1に3-58-2が挟まる。
3-58-2	酉10月2日	—	相庭（三島米、三田米などの相場書上げ）	—	—	切紙	1	印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-59	10月7日	—	〔書状〕（鉄と木綿の需要状況と積み下り時期指定の連絡）	敦賀屋多助	豆腐屋助四郎	切紙	1	元々は未開封。端裏書「雲州田儀豆腐屋助四郎様　敦賀屋多助」、「貴下」、裏書「ゟ出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-60-1	酉10月2日	—	〔書状〕（当地の作付状況、飯米の相場を通知）	敦賀屋多助（印）	豆腐屋助四郎	切紙	1	元々は未開封。封筒入、上書「出雲田儀豆腐屋助四郎様　敦賀屋多助」、「貴下」、裏書「ゟ越後出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-60-2	酉10月2日	—	相庭（三島米、三田米などの相場書上げ）	—	—	切紙	1	印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-61	10月7日	—	〔書状〕（鉄と木綿の需要状況と積み下り時期指定の連絡）	敦賀屋多助	吉出屋種市	切紙	1	元々は未開封。端裏書「田儀津吉出屋種市様　敦賀屋多助」。「貴下」、裏書「𠮟出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-62	10月7日	—	〔書状〕（鉄と木綿の需要状況と積み下り時期指定の連絡）	敦賀屋多助	綿屋善市	切紙	1	元々は未開封。端裏書「田儀綿屋善市様　敦賀屋多助」、「貴下」、裏書「𠮟出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-63-1	—	—	〔書状〕（杵築より利銭が届かないことについて、しかるべき人を差し向けるように依頼）	—	—	切継紙	1	後欠。3-63は紐で一括。
3-63-2	—	—	覚（青昆布・椎茸代などの数量書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-63-3	卯12月20日	—	覚（金銭を受け取った旨）	庄屋　徳右衛門（印）	利平太	切紙	1	
3-63-4	—	—	覚（黒砂糖・氷などの数量書上げ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-63-5	27日	—	〔副状〕（酒売が甚だ不勘定の旨）	喜右衛門	宇十	切紙	1	虫損小破。
3-63-6	—	—	覚（火鉢・たばこ代書上げ）	銅屋十右衛門	—	切紙	1	
3-63-7	—	—	〔書状〕（上方・九州における鉄相場の報告など）	—	—	切紙	1	前後欠。
3-63-8	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	小豆屋又兵衛	煙草尾	切紙	1	後欠。端裏書「きづき　煙草尾様　小豆屋又兵衛（印）」、「貴下」、「𠮟大浦」。
3-63-9	—	—	覚（塩・椎茸代など書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-63-10	—	—	〔金銭書上げ〕（彦助へ渡す銭）	油屋卯十	—	切紙	1	
3-63-11	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-63-12	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-63-13-1	—	—	〔書状〕（先日はお世話になった旨）	—	—	切紙	1	下案ヵ。3-63-13-1～5が折りたたまれて一括。
3-63-13-2	—	—	〔書状〕（三保関より手紙を送る旨）	—	—	切紙	1	後欠。
3-63-13-3	—	—	〔書状〕（冬買した鉄の取り扱いに関する旨）	—	—	切紙	1	下案ヵ。
3-63-13-4	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-63-13-5	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-63-14	3月19日	—	覚（酒代・木次行飛脚賃など書上げ）	和泉屋喜助	御客	切継紙	1	
3-63-15	—	—	覚（瓦数書上げ）	—	—	切紙	1	
3-63-16	12月17日	—	〔書状〕（証書を送付する旨）	五郎蔵	勝蔵	切紙	1	
3-63-17	辰10月20日	—	〔金銭書上げ〕（椎茸代など）	木綿屋由右衛門（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「雲州／杵築／木綿屋」。
3-64-1	閏2月朔日	—	〔書状〕（御内々の内容について、他言無用の旨）	油屋彦左衛門	桜御主君	切継紙	1	端裏書「桜御主君様　油屋彦左衛門」、「内用」。3-64はこよりで一括。
3-64-2-1	11月4日	—	覚（膳代書上げ）	（印：吉野屋治兵衛）	作右衛門	切紙	1	綴じ紐つき、印は「大阪／八幡筋心斎橋西江入／万塗物道具／吉野屋治兵衛」。3-64-2-1～3が折りたたまれて一括。
3-64-2-2	11月20日	—	覚（金銭書上げ）	余十　利右衛門	油屋浅右衛門	切紙	1	
3-64-2-3	午正月10日	—	覚（金銭書上げ）	五郎蔵	浅右衛門	切紙	1	
3-64-3	巳6月2日	—	覚（鉄代書上げ）	［　　］右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	虫損小破、印は「雲州／安来／笹千」。
3-64-4	12月20日	—	〔書状〕（銑代の受け取りについて通知する旨）	釜屋九右衛門	河内屋八三郎	切継紙	1	端裏書「大坂新町砂場河内屋八三郎様　小ばま町釜屋九右衛門」、「大急用出し」、裏書「十二月廿日出　𠮟南都」、「たちん先払」。
3-64-5-1	辰7月	—	覚（金銭書上げ）	大和屋喜左衛門	浅右衛門	切紙	1	3-64-5はこよりで仮綴。
3-64-5-2	辰7月13日	—	覚（染代書上げ）	久村　大田屋久右衛門	中油屋	切継紙	1	
3-64-5-3	辰7月	—	覚（醤油代書上げ）	油屋浅右衛門	嶋津屋松太郎	切紙	1	
3-64-5-4	辰7月	—	覚（醤油代書上げ）	油屋浅右衛門	嶋津屋為十	切紙	1	
3-64-5-5	辰7月	—	覚（釘代など書上げ）	かじや平蔵	油屋	切紙	1	
3-64-5-6	7月13日	—	覚（金銭書上げ）	浅右衛門（印）	も左衛門	切紙	1	印は「油屋」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-64-6	3月5日	—	〔書状〕（石見国東部から出雲国西部における、積荷売り払い状況を通知）	幾徳丸源平	油屋幾太郎	切継紙	1	
3-64-7	丑9月6日	—	目録（鉄仕切、算盤代など金銭書上げ）	桶屋伝蔵（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「長州／赤間関／桶伝」。
3-64-8	午4月14日	—	覚（金銭書上げ）	室屋和兵衛（印）	［　］宇十郎	切継紙	1	印は「越中／高岡／［　］兵衛」。
3-64-9	—	—	〔書状〕（桜井へ出帆願を提出する旨）	—	—	切紙	1	前後欠。
3-64-10	未2月26日	—	覚（越中たばこ代書上げ）	幾徳丸勝蔵	但馬屋保右衛門	切紙	1	
3-64-11	卯6月6日	—	相場之覚（大豆・小麦などの相場書上げ）	肥後屋武三郎（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「［　］屋」。
3-64-12	午9月19日	—	覚（金銭書上げ）	小川屋店	油勝	切継紙	1	虫損小破。
3-64-13	午3月16日	—	覚（綿代書上げ）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切紙	1	印は「能州／所口／北野屋」。
3-64-14	午3月16日	—	覚（綿代書上げ）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	印は「能州／所口／北野屋」。
3-64-15	—	—	〔金銭書上げ〕（真脇屋・川口屋など）	—	—	切紙	1	前欠ヵ。
3-64-16	—	—	覚（卯重郎に関する金銭の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-64-17	辰正月	—	覚（表具代・重箱代など書上げ）	角茂左衛門	油屋勝蔵	切紙	1	小破。
3-64-18	—	—	覚（金銭書上げ）	みしまや	中川屋	切紙	1	
3-64-19	未7月14日	—	目録（鋼仕切など金銭書上げ）	三郎右衛門	油屋勝蔵	切継紙	1	虫損大破。
3-64-20	未7月14日	—	覚（金銭書上げ）	佐渡屋三郎右衛門	油屋勝蔵	切紙	1	虫損大破。
3-64-21	2月5日	—	口上（雲州行きの書状賃について）	伊勢屋治右衛門（印）	脇田屋多右衛門、御客衆中	切紙	1	印は「羽州／庄内／酒田／伊勢屋」。
3-65	—	—	一紙（剥離した貼紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-66	—	—	〔一紙〕（こより）	—	—	切紙	1	
3-67-1	巳7月12日	—	覚（竹代など書上げ）	越前屋（印）	［　］屋	切紙	1	印は「長州／越ヶ浜／越前屋」。3-67はこよりで一括。
3-67-2	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-67-3	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-67-4	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-67-5	丑8月	—	目録覚（金銭書上げ）	小豆嶋や広太（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／宇龍／小豆嶋屋」。
3-67-6	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-67-7	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-67-8	巳7月19日	—	〔金銭書上げ〕	志歩屋九郎兵衛	油屋卯十	切紙	1	前欠。
3-67-9	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-67-10	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	
3-67-11	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切継紙	1	
3-67-12	—	—	覚（才助・市三郎以下への払米書上げヵ）	—	—	切紙	1	
3-67-13	亥7月	—	覚（金銭書上げ）	油屋卯十	おふみ	切紙	1	
3-67-14	—	—	〔袋〕	—	—	一紙（袋）	1	
3-67-15	卯12月	—	覚（金銭書上げ）	太田や（印）	油屋	切継紙	1	小破、印は「口田儀町／大田屋」。
3-67-16	卯正月	—	乍恐口上（越の雪の模造品対策として、箱の裏に目印をつける旨を通知）	越後長岡　森橋台	—	切紙	1	刷物。
3-67-17	—	—	〔金銭書上げ〕（飯代、まこも代など）	—	—	切紙	1	
3-67-18	□月朔日	—	覚（金銭書上げ）	—	いくとく丸	切紙	1	
3-67-19	—	—	そん□物（盃・砂鉢などの品目と数量の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-68-1	正月9日	—	〔書状〕（新年のあいさつ）	長兵衛	小一右衛門	切継紙	1	包紙入、上書「宮本小一右衛門様　石橋屋長兵衛」、「貴下書」。
3-68-2	8月11日	—	〔書状〕（今月5日頃の米相場を報告）	幾徳丸源平	油屋親方	切紙	1	包紙入、上書「境□□屋ニて　油屋浅右衛門様　幾徳丸源平」、「有用事」。
3-68-3	巳6月6日	—	相庭（地蔵米・筑前米などの相場書上げ）	桶屋伝蔵（印）	油屋	切継紙	1	印は「長州／赤間関／桶伝」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-68-4	10月6日	—	〔書状〕（鉄・油などの商売の見込みを通知）	幾徳丸勝蔵	木村屋御主人	切継紙	1	
3-68-5	—	—	〔一紙〕（数字などの書き込み）	—	—	切紙	1	縫い針付きのため要注意。
3-68-6	申12月7日	—	覚（米代書上げ）	[　]	生徳丸	切紙	1	小破。
3-68-7	戌1月	—	覚（鉄代など書上げ）	石見や理助	油屋彦左衛門	切紙	1	
3-68-8	—	—	〔一紙〕（「木綿屋」の墨書あり）	—	—	切紙	1	
3-68-9	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-68-10	戌10月大晦日	—	覚（金銭書上げ）	山根小太郎	彦左衛門	切紙	1	
3-68-11	12月29日	—	覚（金銭書上げ）	油や彦左衛門	伝六	切継紙	1	
3-68-12	—	—	〔一紙〕（白米代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	小破。
3-68-13	3月17日	—	送り状（焚込の送り状）	野田茂	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
3-68-14	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-68-15	—	—	〔書状〕（女物の調達を依頼する旨）	[　]	油屋宇十郎	切紙	1	虫損小破。
3-68-16	—	—	〔一紙〕（書状の一部ヵ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-68-17	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-68-18	12月11日	—	おぼへ（算用の間違い分の差額について）	菊利（印）	大伝	切紙	1	印は「菊利」。
3-68-19	—	—	覚（幾徳丸、春徳丸が積み出す銑の数量書上げ）	清右衛門	—	切継紙	1	
3-68-20	正月	—	覚（取替金の書上げ）	出店甫一郎	本家	切紙	1	
3-68-21	—	—	〔一紙〕（備後福山における繰綿改方などの人名書上げ）	—	—	切紙	1	刷物。
3-68-22	申11月	—	目六（金銭書上げ）	清水屋多兵衛	油屋生徳丸	切継紙	1	
3-68-23	—	—	〔一紙〕（幾徳丸分の金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-68-24	3月15日	—	覚（金銭書上げ）	近江屋喜兵衛（印）	生徳丸	切継紙	1	印は「北堀江／六丁目／近喜」。
3-68-25	5月1日	—	覚（焚込・梅香代など金銭書上げ）	嶋屋仙八	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-69-1	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡ヵ。3-69はこよりで一括。
3-69-2	—	—	〔品目書上げ〕（添焼物、大鯛など）	—	—	切継紙	1	前欠ヵ。
3-69-3	11月20日	—	〔書状〕（油屋から金銭借用中の人々について、彼らから預かった伝言等を通知する旨）	隠居　円左衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「油屋浅右衛門様　隠居円左衛門」、「貴下要書」。
3-69-4	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-69-5	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	断簡ヵ。
3-69-6	—	—	覚（米の数量書上げ）	—	—	切紙	1	後欠ヵ、小破。
3-69-7	—	—	覚（「天下一」、「白飛」など数量と価格書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-69-8	巳5月	—	仕出し覚（金銭書上げ）	売人　長見為三郎	各様	切継紙	1	
3-70-1-1	安政3年12月13日	1856	覚（当辰冬売り銑の引替手形）	綿屋忠四郎（印）	大浦屋為重	切紙	1	印は「雲州松江／魚町／綿屋」。3-70-1は折りたたまれて一括。
3-70-1-2	安政3年12月	1856	覚（大浦屋為十分の鉄引替手形）	吉田屋文助（印）	吉田屋重兵衛殿取次	切紙	1	印は「雲州／松江／吉田屋」。
3-70-2-1-1	—	—	覚（源平分など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	虫損小破。
3-70-2-1-2	午12月	—	覚（金銭書上げ）	油屋甫市郎	油屋卯十	切継紙	1	3-70-2-1-1に包まれる。
3-70-2-2	申8月	—	覚（金銭書上げ）	甫一郎	浅右衛門	切継紙	1	
3-70-2-3	—	—	覚（金銭書上げ）	油屋甫一郎	油屋浅右衛門	横帳	1	虫損小破。
3-70-2-4	未10月9日	—	覚（檜皮代など書上げ）	（印：奈良屋徳兵衛）	幾徳丸	切紙	1	印は「大阪／阿波座願教寺前／槙皮おろし仕入所／奈良屋徳兵衛」。
3-70-2-5	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-70-3	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-70-4	未5月8日	—	覚（金銭書上げ）	□屋徳兵衛	出雲　勝蔵	切紙	1	虫損小破。
3-70-5	6月20日	—	〔書状〕（綿の仕入金の処理について）	彦左衛門	勝蔵	切紙	1	端裏書「勝蔵殿　彦左衛門」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-70-6	—	—	〔一紙〕（書状の包紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-70-7	—	—	〔書状〕（時候の挨拶部分のみ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-70-8	午12月	—	覚（金銭書上げ）	かじ屋平蔵	油屋	切継紙	1	虫損小破。
3-70-9	2月10日	—	覚（鯛代など書上げ）	多一	油屋	切紙	1	虫損小破。
3-70-10	—	—	〔一紙〕（金銭書上げの一部ヵ）	木綿屋由右衛門	［　］丸久八	切紙	1	断簡。
3-70-11	子4月19日	—	覚（鉄の数量書上げ）	渋屋九郎兵衛	幾徳丸御船中	切紙	1	
3-70-12	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	横帳	1	
3-71-1	11月16日	—	覚（積み荷の売却状況などを通知する旨）	源平	親方	切紙	1	
3-71-2	—	—	覚（板・釘代など書上げ）	—	たぎ油屋	切紙	1	
3-71-3	—	—	〔一紙〕（粉末入）	—	—	切紙	1	たばこヵ。
3-71-4	—	—	〔一紙〕（無二膏の効能書）	—	—	切紙	1	刷物。
3-71-5	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	2	
3-71-6	戌7月2日	—	覚（鉄代の金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛（印）	油屋卯十	切紙	1	
3-71-7	—	—	〔一紙〕（相撲赤膏薬の効能書）	式守蝸牛	—	切紙	1	刷物。
3-71-8	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-71-9	—	—	〔一紙〕（無二膏の効能書）	雨森良意（印）	—	切紙	1	刷物。
3-71-10	—	—	〔一紙〕（書状の端裏ヵ）	お□	おかた	切紙	1	断簡。
3-71-11	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-71-12	—	—	〔一紙〕（「堅地御塗箸」の袋）	—	—	一紙（袋）	1	刷物。
3-71-13	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-71-14	—	—	〔一紙〕（無二膏の効能書）	雨森良意（印）	—	切紙	1	刷物。
3-71-15	—	—	〔一紙〕（無二膏の効能書）	雨森良意（印）	—	切紙	1	刷物。
3-71-16	—	—	〔一紙〕（無二膏の効能書）	雨森良意（印）	—	切紙	1	刷物。
3-71-17	—	—	覚（鉄製品の数量書上げ）	—	—	切紙	1	
3-71-18	3月4日	—	覚（鉄製品代など書上げ）	油屋浅右衛門	笹屋千右衛門	切継紙	1	
3-71-19	亥6月5日	—	相庭（品物の書上げ）	（印：敦賀屋多助）	—	切紙	1	印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-71-20	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-71-21	—	—	〔金銭書上げ〕（繰綿、素麺代など）	—	—	切紙	1	
3-71-22	とら6月4日	—	当時相場（品物の相場書上げ）	信濃屋市右衛門	油屋	切紙	1	
3-72	—	—	〔一紙〕（こより）	—	—	切紙	1	
3-73-1	卯6月17日	—	覚（「枝香」1箱の代金を受領した旨）	石州屋七郎兵衛（印）	幾重丸治兵衛	切継紙	1	印は「尾道／石州屋／七郎兵衛」。3-73は仮綴。
3-73-2	5月27日	—	覚（金銭書上げ）	はしせん（印）	源兵衛	切紙	1	
3-73-3	5月28日	—	覚（椎茸、金山寺の代金など書上げ）	はりまや佐七（印）	幾重丸治兵衛	切継紙	1	印は「難波橋／［　］／はり佐」。
3-73-4	□月24日	—	覚（金銭書上げ）	尾又（印）	幾重丸治兵衛	切紙	1	印は「大坂／尾張又」。
3-73-5	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-73-6	5月29日	—	覚（金銭書上げ）	河内屋喜兵衛（印）	幾重丸治兵衛	切紙	1	
3-73-7	卯5月29日	—	覚（「源氏香」代など書上げ）	藤田屋万兵衛（印）	幾重丸治兵衛	切継紙	1	印は「大坂／新町西口／井戸廿一丁半西／藤田屋万兵衛」。
3-73-8	6月1日	—	覚（金銭書上げ）	荒物屋市兵衛（印）	幾重丸次兵衛	切紙	1	印は「大坂／西横堀／瀬戸物町／荒物屋市兵衛」。
3-73-9	う5月29日	—	覚（「本稀改」代の書上げ）	北甚（印）	幾重丸治平	切紙	1	印は「大坂／久宝寺橋ゟ五丁東／紀伊本町□□／北村屋甚兵衛」。
3-73-10	5月29日	—	覚（金銭書上げ）	（印：はしや善四郎）	—	切紙	1	印は「大阪／よとや橋筋／御箸楊枝所／はしや善四郎」。
3-74	子3月	—	記〔田反書上げ〕	坂根松太郎	各様	切紙	1	切紙3枚が仮綴。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-75-1	—	—	〔一紙〕（八月始二月切の利合書上げ）	—	—	切紙	1	
3-75-2	12月	—	〔一紙〕（紙代などを送付した旨）	浅右衛門	多七	切紙	1	前欠。
3-75-3	3月	—	覚（三月上旬の鉄製品相場ヵ）	—	—	切紙	1	
3-75-4	—	—	覚（金五拾両の差引）	—	—	切紙	1	後欠ヵ。
3-75-5	寅12月大晦日	—	覚（屋敷賃書上げ）	浅右衛門	おはん	切紙	1	反故紙ヵ。
3-75-6	寅大晦日	—	覚（素麺代の一部を支払った旨）	油屋宗助	油屋浅右衛門	切紙	1	小破。
3-75-7	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-75-8	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-75-9	—	—	〔書状〕（伝言の依頼など）	嘉平	釜屋藤右衛門	切紙	1	前欠。
3-75-10	—	—	口上（炭に関する書状の伝達についてなど）	—	—	切紙	1	後欠。
3-75-11	—	—	〔一紙〕（議定に関する旨）	—	—	切紙	1	
3-75-12	—	—	〔一紙〕（「十両弐歩弐束」）	—	—	切紙	1	
3-76	—	—	覚（さしみ代など）	—	—	切紙	1	後欠ヵ。
3-77	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-78	4月15日	—	覚（金銭書上げ）	菓子屋八郎右衛門	御客	切紙	1	小破。
3-79	明治辛巳年11月	—	日［　　］	鳥屋尾於奈加	—	切紙	1	年代は明治14年ヵ。
3-80	巳7月5日	—	覚（金銭書上げ）	室屋和兵衛	宗十郎、同［　　］	切紙	1	
3-81	—	—	〔書状〕（時候の挨拶）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-82-1	—	—	覚（木綿代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-82-2	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-83	—	—	〔一紙〕	油井分　紺屋貞三郎	下油屋	切紙	1	前欠。
3-84	8月23日	—	〔書状〕（境港での動向などを報告）	稲荷丸真蔵	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	
3-85	卯4月13日	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	小破。
3-86	—	—	覚（金水引、箱折紙の送り状）	—	—	切紙	1	反故紙。
3-87	4月	—	覚（金銭書上げ）	倉本屋	佐与吉	切紙	1	小破。
3-88	—	—	覚（辰納米代について）	庄屋只右衛門（印）	卯十	切紙	1	
3-89	—	—	覚（釘代など金銭書上げ）	蔵本屋	佐与吉	切紙	1	
3-90	—	—	〔袋〕	—	—	切紙	1	包紙入。
3-91	—	—	〔一紙〕（「御茶代」）	—	—	切紙	1	
3-92	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-93	12月22日	—	覚（上げずり木香代書上げ）	近長	大野屋伝七	切紙	1	小破。
3-94	12月24日	—	口上（金銭借用願）	弥助	兼兵衛	切継紙	1	端裏書「兼兵衛様　弥助」、「無拠用」。
3-95	—	—	〔田反書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-96	—	—	〔袋〕（「美和羅煙草」）	木挽屋徳三郎	—	切紙	1	
3-97	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	23	
3-98-1	—	—	〔書状〕（北陸方面での動向を報告）	幾徳丸内源平	油屋浅右衛門	切紙	1	上書「口田儀浦ニ而油屋浅右衛門様　幾徳丸内源平」、「御洞」、裏書「神在月一日　三保関ゟ」。3-98は包紙で一括。
3-98-2	—	—	〔書状〕（北陸方面での動向を報告）	幾徳丸内源平	油屋浅右衛門	切紙	1	3-98-1の続き。
3-98-3	—	—	〔米の数量書上げ〕	—	—	切継紙	1	小破。
3-98-4	亥11月14日	—	覚（帯直し代など書上げ）	松兵衛（印）	卯十	切紙	1	
3-99-1	—	—	〔一紙〕（混元丹の効能書）	加州金沢　中屋彦右衛門（印）	—	切紙	1	上書「幾徳丸卯重郎様　真脇屋久治郎」、「当用書」、裏書「伏木ニおいて［　　］出津」。3-99は包紙入。
3-99-2	—	—	〔袋〕（「御扇子」）	—	—	一紙（袋）	1	刷物。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-99-3	—	—	覚（醤油、木綿代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-99-4	—	—	〔一紙〕（「手形壱通」）	—	—	切紙	1	
3-100	—	—	覚（漆器など書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-101	午3月13日	—	〔産鉄書上げ〕（積み出す分の鉄）	越堂御鉋	幾徳丸卯十	切継紙	1	前欠。
3-102	—	—	〔一紙〕（「受取帳」）	—	—	切紙	1	
3-103	—	—	〔金銭書上げ〕（猩赤色の木綿など）	—	—	切紙	1	断簡。
3-104	—	—	〔書状〕（来訪を待っている旨）	—	—	切継紙	1	虫損小破。
3-105	亥4月晦日	—	当時相場（会津御米、大豆、小麦など）	小川屋長右衛門	—	切紙	1	包紙入、上書「越中伏木ニ而小鉄屋幸三郎様　小川屋店由五郎」、「尊下用書」、裏書「四月晦日 ゟ越後新潟」。
3-106	午正月11日	—	〔書状〕（神事関連道具の送付を依頼する旨）	原田屋文左衛門	町油屋卯重	切紙	1	小破、端裏書「町油屋卯重様　原田屋［　　］」。
3-107	—	—	売仕切（可部屋細割など）	—	—	切紙	1	
3-108	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-109	—	—	〔金銭書上げ〕（下ノ関つるべ、尾道足袋代など）	—	—	切継紙	1	
3-110	—	—	〔書状〕（能州和倉から、病気に関する報告）	—	—	切継紙	1	後欠。
3-111	—	—	覚（米と人名の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-112	7月朔日	—	〔書状〕（御宿殿方様の見舞い）	類助	源平	切継紙	1	端裏書「田儀ニ而源平様　宮本類助」、「貴下」。
3-113	—	—	〔一紙〕（日付の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-114	—	—	覚（銚手間賃など金銭書上げ）	かざ五（印）	油屋船御旦那	切紙	1	こよりつき、印は「［　　］銚五」。
3-115	11月19日	—	〔書状〕（借用金の返済に関する旨）	久村町　本□屋□三郎	口田儀町　油屋浅右衛門	切紙	1	
3-116	戌12月	—	仕出し覚（田反書上げ）	—	—	切紙	1	小破、切紙1通が挟まる。
3-117	未11月19日	—	覚（桧代書上げ）	—	石州屋	切紙	1	
3-118	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-119	巳9月27日	—	覚（金銭を受取した旨）	□や徳左衛門（印）	新右衛門	切紙	1	
3-120	—	—	〔書状〕（持出銭の取り扱いについて指示する旨）	—	—	切紙	1	
3-121	—	—	〔一紙〕（卯十分の産鉄積み出し状況について）	—	—	切継紙	1	
3-122	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-123	3月10日	—	〔書状〕（下ノ隠居様へ、入仏供養の案内を依頼する旨）	—	—	切紙	1	
3-124	—	—	覚（鉄製品や素麺などの数量と代銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-125	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-126	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-127	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	5	袋×3、一紙×2が一括。
3-128	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-129	—	—	覚（畑反書上げ）	—	—	切紙	1	
3-130	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	小破。
3-131	3月朔日	—	口上（素麺の追加送付を依頼する旨）	—	—	切紙	1	
3-132	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-133	子7月	—	覚（手間賃、魚代など書上げ）	えびす屋作平	下油屋	切紙	1	
3-134	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	反故紙。
3-135	3月28日	—	覚（銑の売り上げの分配ヵ）	—	—	切紙	1	
3-136	未5月10日	—	覚（酒肴代）	鶴屋伊助（印）	御客	切紙	1	印は鶴丸。
3-137	—	—	覚（素麺、砂糖などの数量書上げ）	—	—	切紙	1	
3-138	—	—	〔一紙〕（「弐拾両ニ又三両弐歩入」など）	—	—	切紙	2	
3-139	—	—	〔一紙〕（書状の端裏部分ヵ）	宮の善作	油屋勝蔵	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-140	3月21日	—	〔書状〕（昆布の取り扱いに関する旨）	—	—	切紙	1	
3-141	—	—	〔一紙〕（梅・菊などの墨絵）	—	—	切紙	1	
3-142	—	—	〔一紙〕（2つは刷物「善悪ゆめみやわせ」）	—	—	切紙	4	
3-143	—	—	〔一紙〕（書状の一部ヵ）	—	—	切紙	1	断簡。
3-144	3月22日	—	〔書状〕（商いのことや伝言などについて）	—	—	切紙	1	前欠。
3-145	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-146	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-147	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-148	辰極月	—	覚（綿打ち銭書上げ）	大黒屋太一	油屋	切紙	1	
3-149	—	—	〔封筒〕	松原屋小兵衛	油屋浅右衛門	一紙（封筒）	1	
3-150	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-151	12月14日	—	〔一紙〕（書状の一部）	—	—	切紙	1	前欠、内容部分のほとんどを欠く。
3-152	—	—	〔一紙〕（白紙と「覚」）	—	—	切紙	2	
3-153	—	—	覚（酒、醤油、茄子代など書上げ〕	—	—	切紙	1	虫損大破。
3-154	—	—	〔一紙〕（書状の一部）	—	—	切紙	1	後欠。
3-155	12月16日	—	覚（金銭書上げ）	角吉兵衛	勝蔵	切継紙	1	
3-156	6月17日	—	おほへ（醤油を所望する旨）	宮本　かじや愛助	中油屋	切紙	1	
3-157	—	—	覚（米、小豆代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠ヵ。
3-158	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-159	—	—	〔一紙〕（品物の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-160	—	—	〔一紙〕（品物の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-161	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-162	—	—	甫市分取立目録（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-163	—	—	覚（志儀銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-164	神在月13日	—	覚（米、大豆の受け取りについて）	小土嶋屋七五郎（印）	幾徳丸茂平	切継紙	1	印は「雲州／宇龍／［　　］」。
3-165	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	6	
3-166	—	—	〔金銭書上げ〕（出店釘代など）	—	—	切継紙	1	前欠ヵ。
3-167	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	大破。
3-168	巳12月27日	—	覚（人足書上げ）	釿良助	町中	切紙	1	
3-169	—	—	覚（米代など書上げ）	—	いく徳丸	切紙	1	
3-170	—	—	覚（藤間出銭の扱いについて）	文七	浅右衛門	切継紙	1	小破。
3-171	正月5日	—	〔書状〕（大池の伝六に関する証文の件について）	五郎蔵	浅右衛門	切紙	1	小破。
3-172	寅9月晦日	—	覚（扱苧の注文に関する旨）	宮本屋清兵衛（印）	幾徳丸油屋浅右衛門	切紙	1	小破、印は「越中／伏木／宮清エ」。
3-173	—	—	覚（扱苧代書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-174	亥9月15日	—	覚（酒代の不足金を支払う旨）	油屋浅右衛門	福田屋宇右衛門	切紙	1	印は「雲州／田儀／油屋」。
3-175	未12月	—	覚（かんざし代など書上げ）	油屋甫一郎	本家	切継紙	1	
3-176	9月6日	—	覚（金銭書上げ）	小豆嶋屋	口田儀源平	切紙	2	小破、一紙が挟まる。
3-177	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-178-1	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	3-178-2が挟まる。
3-178-2	11月17日	—	〔一紙〕（覚の一部ヵ）	大野屋伝七（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	前欠、印は「大坂／大野伝」。
3-179	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-180	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-181	未7月	—	〔一紙〕（作料など金銭書上げ）	桶屋貞三郎	油屋	切紙	1	小破、前欠。
3-182	未6月	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	紺屋礼助	中屋浅右衛門	切紙	1	前欠。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-183-1	—	—	覚（筍・草履代など金銭書上げ）	浅平	御家方	切紙	1	3-183はこよりで一括。
3-183-2	丑6月8日	—	覚（金銭書上げ）	大坂屋広助（印）	油屋、黒田屋千三郎	切紙	1	印は「今中／大坂屋広助」。
3-183-3	8月10日	—	覚（あんま賃など金銭書上げ）	川口屋庄右衛門	□印	切継紙	1	
3-183-4	6月21日	—	〔書状〕（三嶋氏のおくやみに関する旨など）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-183-5	6月13日	—	覚（金銭書上げ）	宮のや与三兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「能登国／輪嶋湊／宮野屋」。
3-183-6	亥7月	—	覚（釘、羽釜代など金銭書上げ）	かじ屋愛助	油屋	切継紙	1	
3-183-7	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-183-8	酉10月晦日	—	覚（金銭書上げ）	松□屋佐兵衛（印）	川崎屋次良左衛門	切紙	1	印は「□州／［　］／松佐」。
3-183-9	—	—	〔書状〕（楽太鼓に関する通知がない旨）	—	—	切紙	1	断簡。
3-183-10	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-183-11	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-183-12	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	綴痕あり。
3-183-13	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-183-14	正月8日	—	〔書状〕（商売の状況を報告）	久八	御主人	切紙	1	
3-183-15	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	後欠、小破。
3-184-1	—	—	〔書状〕（瀬戸内海方面における籾種の相場などを通知）	—	—	切紙	1	3-184-1～13はこよりで一括。
3-184-2	—	—	〔書状〕（素麺の注文依頼を受けたことについて）	—	—	切継紙	1	後欠。
3-184-3	寅7月19日	—	覚（鉄製品の書上げ）	越堂御鉋	幾徳丸	切紙	1	
3-184-4	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-184-5	5月	—	〔一紙〕（覚と売仕切）	幾徳丸久八	御主人	切継紙	1	「覚」は鰹節代などの書上げ、「売仕切」は糸桜・塩代の書上げ。
3-184-6	—	—	両徳志儀（両徳志儀に関する概要書上げ）	—	御仕法方	竪帳	1	
3-184-7-1	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-184-7-2	—	—	〔一紙〕（田畑の反数書上げ）	—	—	切紙	1	
3-184-7-3	—	—	〔一紙〕（「御多葉粉入」）	小川屋長右衛門	油屋卯十郎	切紙	1	
3-184-7-4	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-184-8-1	12月19日	—	〔書状〕（錦屋老人の持病について）	櫻井五郎蔵	油屋勝蔵	切継紙	1	3-184-2～3が挟まる。
3-184-8-2	12月20日	—	〔書状〕（安来や松江での商売に関する旨）	櫻井五郎蔵	勝蔵	切継紙	1	
3-184-8-3	20日	—	〔副状〕（数の子をどこで積んだかを尋ねる旨）	—	—	切紙	1	
3-184-9-1	—	—	〔書状〕（越中富山様の御買入の噂など）	—	—	切紙	1	断簡。
3-184-9-2	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-184-10	12月10日	—	〔書状〕（難病の件について）	—	—	切紙	1	小破。
3-184-11	—	—	〔畑反書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-184-12	—	—	〔畑反書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-184-13	戌8月15日	—	覚（酒代の書上げ）	信濃や（印）	油屋	切紙	1	印は「越後国／直江津／信濃屋」。
3-185	—	—	目録（仕切前銭の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-186	7月16日	—	〔書状〕（山林の仕出しの件に関する旨）	田中屋与兵衛	浅右衛門	切継紙	1	小破、端裏書「多儀町中ノ浅右衛門様　田中屋与兵衛」。
3-187	—	—	〔一紙〕（登龍丸の効能書）	江戸下谷御成道青雲堂英文	—	切紙	1	刷物。
3-188	卯8月19日	—	覚（火鉢代の書上げ）	仏壇屋反七（印）	幾徳丸	切紙	1	印は「新潟湊／古四□／仏壇屋」。
3-189	申12月6日	—	覚（金銭を受領した旨）	寿ずや常七（印）	—	切紙	1	
3-190	—	—	〔一紙〕（千家村の脇田近右衛門に関する件）	—	—	切紙	1	
3-191	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-192	—	—	覚（綿・油などの相場書上げヵ）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-193	—	—	〔書状〕（小山吉郎兵衛の出奔についてなど）	—	—	切継紙	1	
3-194	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-195	—	—	〔一紙〕（「麦屋重兵衛様」など）	—	—	切紙	1	
3-196	酉3月16日	—	覚（金銭書上げ）	岩井屋小三郎（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	
3-197	7月9日	—	覚（砂糖の数量など書上げ）	□崎屋藤助	□□西尾屋善蔵、今市脂屋□兵衛、久村伊藤屋丈太、田儀油屋彦左衛門	切継紙	1	
3-198	—	—	〔一紙〕（鬢付などの注文依頼）	下御番所（印）	卯十	切継紙	1	前欠。
3-199	寅7月	—	覚（金銭書上げ）	大和屋喜左衛門	中浅右衛門	切紙	1	
3-200	2月13日	—	〔書状〕（塩と砂糖の取り扱いについて、12日は波が高くて塩の積み入れが不可能だったことなど）	幾徳丸源平	油屋親方	切紙	1	
3-201	4月6日	—	〔書状〕（志儀帳取の件について）	吉原　豊平	油彦左衛門	切継紙	1	虫損小破。端裏書「油　彦左衛門様　吉原　豊平」、「貴下用」。
3-202	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-203	巳閏5月9日	—	〔一紙〕（雲州浅右衛門船について、小木湊への入港にかかる役銭の勘定）	小木御番所改内田□次郎（印）、岡村善八（印）、長島□之助（印）、定番松原為太夫（印）、潮見甚次（印）	深浦□□木西方浦舟頭衆	切紙	1	
3-204	10月	—	覚（品物の注文依頼）	円左衛門	勝蔵	切紙	1	小破。
3-205	—	—	覚（帷子弐反の注文依頼）	安蔵	幾徳丸	切紙	1	
3-206	—	—	〔一紙〕（反故紙カ）	—	—	切紙	1	
3-207	—	—	営業拡張広告（和洋金物販売）	玉山堂竹原熊太郎	—	一紙	2	刷物。「簸川郡今市中町山家小路東角ブリキ製鑵万和洋金物器械細工製造元祖」。
3-208	—	—	〔一紙〕（反故紙やこよりなど）	—	—	切紙	11	こよりで一括。
3-209-1	未4月13日	—	覚（作料や木代など金銭書上げ）	大工伊八	油屋御船、小川屋御見セ	切紙	1	
3-209-2	寅7月16日	—	覚（大豆代など金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋	切継紙	1	印は「小土地／木由」。
3-209-3	—	—	覚（菓子代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-209-4	寅7月13日	—	〔一紙〕（金銭書上げカ）	ぬり屋彦市	油屋浅右衛門	切紙	1	前欠。
3-209-5	3月23日	—	〔書状〕（此元へ御上がりを依頼したい旨）	—	—	切紙	1	前欠、端裏部分を欠く。
3-209-6	12月10日	—	覚（金銭書上げ）	浅右衛門	藤十	切紙	1	
3-209-7	申2月24日	—	覚（差引目録）	（印：富屋幸助）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	印は「大阪／阿弥陀池南門一丁西／鍋釜塗物処／富屋幸助」。
3-209-8	戌6月8日	—	〔一紙〕（金銭書上げカ）	—	油屋浅［　］	切継紙	2	断簡、大破。
3-209-9	丑6月晦日	—	覚（そうめん、扱苧代など書上げ）	工屋房一郎（印）	田儀　油屋卯十郎	切継紙	1	印は「石州／西川／内匠屋」。
3-209-10	9月22日	—	〔書状〕（船頭に対し、貴家への訪問を依頼した旨）	—	—	切継紙	1	前欠、小破。
3-209-11	子3月19日	—	覚（金銭書上げ）	久村町　米原屋磯十、中尾屋米十	幾徳丸卯十	切紙	1	虫損小破。
3-209-12	神在月11日	—	〔書状〕（荷物の売却ミスに関する報告）	得重丸藤兵衛、春重丸軍蔵	油屋勝蔵	切継紙	1	
3-209-13	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-209-14	—	—	〔一紙〕（書状の下書きカ）	—	—	切紙	1	
3-209-15	—	—	〔一紙〕（「大田」などの墨書あり）	—	—	切紙	1	
3-209-16	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	断簡、墨書部分は欠落。
3-209-17	—	—	〔一紙〕（「御番所」などの墨書あり）	—	—	切紙	1	断簡。
3-209-18	3月14日	—	〔一紙〕（書状の包紙）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門	切紙	1	印は「雲州／平田本町／市場西側／黒千改」。
3-210-1	寅12月13日	—	覚（ごま油の数量など書上げ）	伊久（印）	幾徳丸源平	切紙	1	3-210はこよりで一括。
3-210-2	卯10月27日	—	覚（仕切銀書上げ）	越堂（印）	清右衛門	切継紙	1	印は「御鈬」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-210-3	丑8月17日	—	覚（鉄の受領証ヵ）	大野や伝七（印）	—	切紙	1	後欠、虫損小破。印は「大坂／大野伝」。
3-210-4	正月4日	—	相場（相場表と新年の挨拶）	石州屋七郎兵衛	[　　]久吉	切紙	1	包紙入、上書「新名屋久吉様　石州屋七郎兵衛」、「余人御中」、裏書「正月五日」、「ゟ尾道」。印は「尾道／石州屋／七郎兵衛」。
3-210-5	11月12日	—	〔書状〕（貴家様の荷物の一部を、中多屋が金銭借用の担保とした件）	—	—	切継紙	1	
3-210-6	—	—	〔金銭書上げ〕（金銭や品物など）	—	—	切紙	2	虫損小破。
3-210-7	未7月	—	覚（酒代など金銭書上げ）	小豆嶋屋七五郎（印）	油屋□平	切紙	1	
3-210-8	巳7月9日	—	覚（鉄製品の書上げヵ）	太田屋宗吉（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	虫損小破、印は「越中伏木／太宗」。包紙入。
3-210-9	—	—	〔金銭書上げ〕（「三保関米代」などがみえる）	—	—	切継紙	1	
3-210-10	—	—	木綿口訳之覚（木綿の品目と数量書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-210-11	11月28日	—	〔書状〕（返済に関して通知する旨）	—	—	切継紙	1	
3-210-12	—	—	覚（銑の輸送に関する運搬分担の書上げヵ）	—	—	切紙	1	
3-210-13	—	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	断簡、小破。
3-210-14	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	小破。
3-210-15	丑7月	—	覚（金銭書上げ）	大野屋平助	田儀町　油屋	切紙	1	
3-210-16	10月19日	—	〔書状〕（返金に関する旨）	—	—	切継紙	1	前欠、小破。
3-210-17	—	—	〔一紙〕（書状の下書きヵ）	—	—	切継紙	1	
3-210-18	—	—	〔一紙〕（新潟湊に入港したことなど）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-210-19	—	—	金子差引覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-210-20	—	—	〔書状〕（自船と亀吉丸の動向、小桜屋が注文した縮紋付に関する旨）	—	—	切紙	1	
3-210-21	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-210-22	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-210-23	—	—	〔一紙〕（書状断簡）	—	—	切紙	1	断簡。
3-211	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-212	亥9月	—	頭書之覚（土地に関するもの）	松江　仲右衛門	—	切紙	1	
3-213	11月10日	—	覚（手拭地五反を見たい旨）	宮本	あふしや与四郎	切継紙	1	
3-214-1	—	—	〔書状〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-214-2	—	—	〔一紙〕（宿の広告ヵ）	[　　]金銅屋与兵衛	—	切紙	1	刷物、後欠。
3-214-3-1	—	—	〔封筒〕	富山□	卯十郎	一紙（封筒）	1	3-214-3は折りたたまれて一括。
3-214-3-2	—	—	〔封筒〕	[　　]	卯十郎	一紙（封筒）	1	
3-214-4	—	—	覚（木綿代など金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-214-5	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	小破。
3-214-6	嘉永4年	1851	亥年御通入	笹屋千右衛門	油屋卯十	一紙（袋）	1	
3-214-7	酉6月25日	—	覚（鉄の数量書上げ）	□本屋清右衛門、代小助	油屋宇十郎	切紙	1	
3-214-8-1	11月19日	—	覚（蓼代書上げ）	茅屋（印）	幾徳丸	切紙	1	3-214-8は折りたたまれて一括。
3-214-8-2	—	—	〔一紙〕（杉板代書上げ）	船屋文四郎	—	切紙	1	前欠。
3-214-9	丑11月14日	—	覚（金銭書上げ）	□□店	幾徳丸	切紙	1	
3-214-10	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-214-11	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-215-1	4月28日	—	相場（鯡粕、樺太新物鱒などの相場書上げ）	城下　山形や	—	切紙	1	元々未開封。包紙入、上書「但馬諸寄浦瀬戸屋政右衛門様　勢（帆印ヵ）幸徳丸治五右衛門」、「答下要用」、裏書「四月廿八日出し」、「ゟ箱館」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-215-2	4月28日	—	相場（小割鉄、鯡粕などの相場書上げ）	一〇印	—	切紙	1	
3-215-3	丑4月28日	—	〔書状〕（箱館における相場を送付し、新鱒・昆布の買い付けについて相談する旨）	幸徳丸治五右衛門	瀬戸屋政吉、幸徳丸吉平	切継紙	1	
3-216	—	—	〔書状〕（雲州の船手衆に但馬屋宛ての書状を託した旨を通知）	敦賀屋多助	但馬屋伝助	一紙	1	元々未開封。包紙入、上書「出雲松江八軒丁　但馬屋伝助様　敦賀屋多助」、「貴下」、裏書「ゟ越後出雲崎」。印は「金銀不用／越後国／出雲崎／敦賀屋」。
3-217	—	—	初相場（新年の挨拶と初相場）	虎屋直兵衛（印）	吉出屋甚平	一紙	1	元々未開封。包紙入、上書「吉出屋甚平様　虎屋直兵衛」、「余人々御中」。裏面に印「伯州／境津／虎屋」。
3-218	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-219	亥12月	—	覚（金銭書上げ）	かじ屋平蔵	油屋	切継紙	1	こよりつき、虫損小破。
3-220-1	12月22日		覚（金銭書上げ）	近喜（印）	幾徳丸勝蔵	切紙	1	印は「北堀江／六丁目／近喜」。3-220はこよりで仮綴。
3-220-2	12月22日		覚（金銭書上げ）	亀屋善兵衛（印）	幾徳丸源平、大野屋伝七	切継紙	1	印は「大坂鰹座／金銀不用／［　　］」。
3-220-3	寅12月22日		仕切覚（金銭書上げ）	小山弥助（印）	幾徳丸	切継紙	1	印は「大坂／備後町／堺筋／小山弥助」。
3-220-4	12月21日		覚（金銭書上げ）	小山新兵衛（印）	幾徳丸源兵衛	切継紙	1	印は「大坂／金銀／不用／小山新」。
3-220-5	12月21日		覚（金銭書上げ）	小山新兵衛（印）	幾徳丸源兵衛	切継紙	1	印は「大坂／金銀／不用／小山新」。
3-220-6	12月22日		覚（金銭書上げ）	□□□	幾徳丸源兵衛	切紙	1	
3-220-7	寅極月20日		覚（金銭書上げ）	（印：万屋常七）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「大阪／現銀／卸小売／鍋釜金物所／立売堀高橋南詰／万屋常七」。
3-220-8	12月19日		覚（金銭書上げ）	天王寺屋豊次郎（印）	幾徳丸源平	切継紙	1	印は「西横堀／京町橋／天豊」。
3-220-9	とら12月20日		覚（金銭書上げ）	北村屋甚兵衛（印）	幾徳丸源兵衛	切紙	1	印は「大坂／［　　］／北村屋甚兵衛」。
3-220-10	寅12月18日		覚（金銭書上げ）	はりまや佐七（印）	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	印は「難波橋／［　　］／播佐」。
3-220-11	12月21日		覚（金銭書上げ）	岩間屋作兵衛（印）	幾徳丸	切紙	1	印は「大坂／金銀／不用／岩作」。
3-221	—	—	覚（白土瓶、茶碗など数量書上げ）	—	—	切紙	1	
3-222	—	—	〔書状〕（麦十の経済状況とその影響など）	—	—	切継紙	1	反故紙ヵ。
3-223	—	—	〔書状〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-224	—	—	一目記帳（気候に関する記帳ヵ）	—	—	切紙	2	綴痕あり、虫損小破。
3-225	—	—	〔金銭書上げ〕（繰綿代など）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-226	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-227	—	—	覚（素麺代の受け取りについて）	—	—	切紙	1	
3-228	11月29日	—	〔書状〕（入金催促と喜三右衛門の仕切について）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-229	午年4月8日	—	〔金銭書上げ〕（鉄瓶、火鉢代など）	釜屋権兵衛（印）	油屋勝蔵	切継紙	1	前欠。
3-230	午年9月22日	—	〔一紙〕（雲州浅右衛門船の佐州尾戸浦への入船にかかる役銭の勘定）	尾戸浦目付役水品久三郎（印）、松ヶ崎御番所役竹村牧太郎（印）、竹本良蔵（印）、定番熊木寛七郎（印）	多田浦目附所	切紙	1	
3-231-1	—	—	〔一紙〕（松の寸法ヵ）	—	—	切紙	1	
3-231-2	亥11月17日	—	〔金銭書上げ〕	小山弥助（印）	［　　］	切紙	1	断簡、小破。印は「大坂／備後町堺筋／小山弥助」。
3-231-3	5月28日	—	覚（塩代など金銭書上げ）	古福屋和左衛門	油屋浅右衛門	切紙	1	
3-231-4	—	—	諸入用（炭・塩などの品目や金銭の書上げ）	—	—	切紙	1	こよりつき。小破。
3-231-5	—	—	〔数量書上げ〕	—	—	切紙	1	前欠ヵ。
3-231-6	午12月18日	—	勘定書（金銭書上げ）	（印：冨屋幸助）	幾徳丸宇十郎	切継紙	1	印は「大阪／阿弥陀池南門一丁西／鍋釜金物処／冨屋幸助」。前欠ヵ。
3-231-7	—	—	覚（鰹代などの金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。綴痕あり。
3-231-8	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-231-9	辰正月19日	—	〔金銭書上げ〕（塩、砂糖代など）	岩井屋権八（印）	幾徳丸卯十	横帳	1	
3-231-10	—	—	覚（数量書上げ）	—	—	切紙	1	小破。
3-231-11	—	—	覚（金銭書上げ）	姫ぢや吉兵衛（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	
3-231-12	10月7日	—	覚（金銭書上げ）	沢田（印）	油屋宇十郎	切紙	1	
3-231-13	未10月9日	—	覚（金銭書上げ）	志野屋清兵衛（印）	大野屋伝七	切紙	1	
3-231-14	未10月朔日	—	覚（縮代など金銭書上げ）	□屋徳兵衛	油屋宇十郎	切継紙	1	
3-232-1	—	—	覚（「米壱貫」などがみえる）	—	—	切紙	1	後欠。
3-232-2	—	—	〔一紙〕（来年7月に返済する議定の旨）	—	—	切紙	1	
3-232-3	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-232-4	—	—	覚（酒代など書上げ）	—	いくとく丸	切紙	1	
3-232-5	—	—	〔一紙〕（薬の品名と代銭の書上げ）	—	—	切紙	1	前欠。
3-232-6	12月28日	—	〔書状〕（五枚分の為替を受領した旨）	—	—	切紙	1	前欠。
3-232-7	卯8月	—	入日記（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-232-8	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	
3-232-9	—	—	覚（作料書上げ）	船大工文四郎	幾徳丸	切紙	1	
3-232-10	—	—	〔一紙〕（米の数量書上げ）	—	—	切紙	1	断簡ヵ。
3-232-11	—	—	覚（唐紙代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-232-12	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-232-13	—	—	〔木札〕（「油茂」の墨書あり）	—	—	その他	1	帳簿の見出しヵ。
3-232-14	閏5月	—	覚（餅、草履代など書上げ）	佐藤屋良助	幾徳丸	切紙	1	
3-232-15	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	小破。
3-232-16	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	小破。
3-232-17	—	—	〔一紙〕（「文化五　辰納御蔵通」）	蔵方喜右衛門（印）	—	切紙	1	断簡。
3-232-18	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-232-19	—	—	覚（「肥後市波」代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-232-20	正月16日	—	〔一紙〕	唐津や［　　］郎	石州　宇十郎	切紙	1	3-232-19の後半部分ヵ。
3-232-21	亥10月25日	—	〔一紙〕	宮本屋清右衛門（印）	岩見　油屋宇十郎	切紙	1	前欠、印は「越中／伏木／宮清エ」。
3-232-22	申2月8日	—	目録覚（源氏香代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠。
3-232-23	—	—	〔袋〕（「上三盆」）	—	幾徳丸	一紙（袋）	1	
3-233	—	—	〔一紙〕（大豆代など書上げ）	—	—	切紙	1	
3-234	—	—	覚（上方方面で支払う金銭の書上げヵ）	—	—	切紙	1	
3-235	子9月28日	—	覚（扱苧代など書上げ）	中灰屋喜代平（印）	油屋	切紙	1	
3-236	亥12月29日	—	覚（割賦米などの注文票ヵ）	宮本	与四郎	切継紙	1	
3-237	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-238	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-239	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	3	
3-240	5月6日	—	〔書状〕（鉄を川上筋へ送るにあたり、麦屋重兵衛への相談を依頼する旨）	吉印	あ印	切継紙	1	端裏書「あ印様　吉印より」、「五月五日」。
3-241	天保6年4月	1835	御釘通（釘代書上げ）	かじや利平	大工佐代吉	横半帳	1	
3-242	23日	—	〔書状〕（志儀に関する状況などを通知）	—	—	切継紙	1	虫損小破、前欠。
3-243	3月	—	覚（金銭書上げ）	［　　］や	油屋［　　］	切紙	1	後欠。
3-244	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	虫損小破。
3-245	2月12日	—	〔書状〕（渋紙と柿の運搬を依頼する旨）	豊平	浅右衛門	切紙	1	端裏書「浅右衛門様　豊平」、「要用」。
3-246	亥正月	—	覚（氷砂糖や尾道買物代など書上げ）	浅右衛門	才谷御釿	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-247-1	巳2月25日	—	借用書出（金銭書上げ）	—	—	横帳	1	小破。
3-247-2	—	—	〔一紙〕（土地売買について）	—	—	切紙	1	綴痕あり、小破。
3-247-3	—	—	〔一紙〕（土地売買について）	—	—	切紙	1	綴痕あり、小破。
3-248	卯4月7日	—	御売仕切（寅五月上置分の銑に関する売仕切）	麦屋重兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「伏木／麦重」、虫損小破。
3-249	卯4月17日	—	覚（鉄・釵代など書上げ）	川口屋庄兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「越中伏木／河口屋／吉三郎」。
3-250	卯4月■日	—	覚（細割代など金銭書上げ）	麦屋重兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「伏木／麦重」、虫損小破。
3-251	卯4月13日	—	覚（火鉢代など書上げ）	釜屋権兵衛	油屋宇十郎	切継紙	1	虫損小破。
3-252	卯4月17日	—	覚（可部屋細割など品目や金銭の書上げ）	麦屋重兵衛（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「伏木／麦重」、虫損小破。
3-253	卯4月18日	—	目録覚（鉄仕切代など書上げ）	太田屋宗吉（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「越中／伏木／太宗」。
3-254-1	戌閏8月14日	—	覚（鉄製品の注文票）	田中屋善助	麦屋十平	切紙	1	3-254-1～8はこよりで一括。
3-254-2-1	—	—	〔一紙〕（金銭の差引について）	—	—	切紙	1	3-254-2-1～2は折りたたまれて一括。
3-254-2-2	—	—	〔一紙〕（「渋九」分などの金銭差引について）	—	—	切紙	1	前欠。
3-254-3	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切紙	1	
3-254-4	閏8月12日	—	〔書状〕（航海の安全に関する鬮の結果を通知）	一宮山	幾徳丸	切継紙	1	小破。
3-254-5	—	—	〔一紙〕（書状の端裏ヵ）	青龍寺	多兵衛	切紙	1	後欠。
3-254-6	酉年10月24日	—	覚（堂原改菊、笹板平割などの金銭書上げ）	渋屋九郎兵衛	油屋卯十郎	切継紙	1	虫損小破。
3-254-7	戌2月26日	—	覚（金銭支払いの旨）	ハネ　但馬屋（印）	田儀油屋	切継紙	1	虫損小破。
3-254-8	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-255-1	7月2日	—	〔書状〕（富多屋の状況などを報告）	—	—	切紙	1	3-255はこよりで一括。
3-255-2	5月21日	—	覚（小豆受取の旨）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
3-255-3	—	—	覚（〆粕代など書上げ）	—	—	切紙	1	後欠
3-255-4	—	—	〔一紙〕（酒代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	前欠。
3-255-5	11月18日	—	〔書状〕（大黒丸の動向を報告）	—	—	切継紙	1	前欠。
3-255-6	—	—	〔一紙〕	善市	油や彦左衛門	切紙	1	3-255-5の端裏部分。
3-255-7	10月8日	—	〔書状〕（雷福丸、大黒丸、明神丸の動向、各相場について）	雷福丸源平	油屋彦左衛門、同卯重	切継紙	1	
3-255-8	神在月7日	—	〔書状〕（境浦での逗留の報告）	春久丸兵兵衛	あふらや彦左衛門	切紙	1	虫損小破。
3-255-9	7月8日	—	〔書状〕（塩・鰹の商売不調の報告）	新屋半兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
3-255-10	7月朔日	—	〔書状〕（三保関、境での動向を報告）	雷福丸源平	油屋親方	切継紙	1	
3-255-11	11月25日	—	〔書状〕（綿を一本欲しい旨など）	宮本内貞助	油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　宮本内貞助」、「尊下用」。
3-255-12	11月23日	—	〔書状〕（米相場の問い合わせに対する返答）	土肥屋隠居仁兵衛	油屋彦左衛門	切継紙	1	
3-255-13	11月12日	—	〔書状〕（博多での動向を報告）	雷福丸源平	油屋親方	切継紙	1	
3-256-1-1	戌4月12日	—	覚（帆、博多帯代など金銭書上げ）	幾重丸久八	油屋	切紙	1	3-256は包紙で一括。3-256-1はこよりで仮綴。
3-256-1-2	3月28日	—	覚（金銭を渡した旨）	□□屋喜兵衛（印）	幾繁丸久八	切紙	1	印は「備後／尾道／□□屋」。
3-256-1-3	戌3月24日	—	覚（畳代書上げ）	（印：畳屋庄兵衛）	幾重丸	切紙	1	印は「尾道／薬師堂／いなりまへ／畳屋庄兵衛」。
3-256-1-4	3月11日	—	覚（「極上本石灰」代書上げ）	灰十（印）	大野屋伝七	切紙	1	印は「大坂／堀江□橋／北詰西へ入／灰重」。
3-256-1-5	3月13日	—	覚（灯油代など金銭書上げ）	（印：伊勢屋久治郎）	幾重丸久八	切継紙	1	印は「大坂長堀／白髪橋北詰／伊勢屋久治郎」。
3-256-1-6	戌3月16日	—	覚（金銭書上げ）	大の伝（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「大坂／大野伝」。
3-256-1-7	戌2月29日	—	覚（織帆代書上げ）	ひめじや吉兵衛（印）	幾重丸久八	切紙	1	印は「兵庫新町／織物仕入／姫吉」。
3-256-2	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-256-3	辰12月	—	覚（金銭書上げ）	角茂左衛門	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-256-4	—	—	〔一紙〕（醤油代など金銭書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-256-5	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	断簡。
3-256-6	午7月11日	—	覚（生地代書上げ）	おりや嘉兵衛（印）	小川屋御客宇重郎	切継紙	1	印は「越後国／小千谷町／織屋」。
3-256-7	丑4月28日	—	売仕切（品目と金銭の書上げ）	大浦屋為重	幾徳丸久八	横帳	1	印は「雲州／大浦屋」、「写」。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-257-1	文政11年12月	1828	覚（志儀銭を預かった旨）	本人惣左衛門（印）、受人十左衛門（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。3-257は折りたたまれて一括。
3-257-2	文政11年12月	1828	覚（志儀銭を預かった旨）	本人惣左衛門（印）、受人重左衛門（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。
3-257-3	文政11年12月	1828	覚（志儀銭を預かった旨）	本人惣左衛門（印）、受人重左衛門（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。
3-257-4	文政11年12月	1828	覚（志儀銭を預かった旨）	本人惣左衛門（印）、受人十左衛門（印）	油屋彦左衛門	切紙	1	虫損小破。
3-258-1	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	3-258はこよりで一括。
3-258-2	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-258-3	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	2	
3-258-4	—	—	〔袋〕（「以仏印」）	—	—	一紙（袋）	1	
3-258-5	巳12月	—	覚（錫粉、醤油代など金銭書上げ）	油屋卯十	—	切継紙	1	
3-258-6	6月25日	—	覚（下駄代など金銭書上げ）	—	幾徳丸宇重	切継紙	1	小破。
3-258-7	5月朔日	—	〔書状〕（先日、宮本まで出向いた件について、その後の処置を尋ねる旨）	—	—	切紙	1	後欠ヵ。
3-258-8	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-258-9	酉8月	—	覚（金銭書上げ）	木綿屋由右衛門（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「杵築／小土地／木綿屋」。
3-258-10	丑7月	—	覚（金銭書上げ）	石見や理助	油屋浅右衛門	切紙	1	虫損小破。
3-258-11-1	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	3-258-11は包紙で一括。
3-258-11-2	7月27日	—	覚（碇、織帆代など金銭書上げ）	喜一郎	油屋	切紙	1	
3-258-11-3	7月12日	—	〔書状〕（商品の仲買に関する件について依頼）	—	—	切継紙	1	前欠、小破。
3-258-11-4	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切継紙	1	後欠、虫損小破。
3-258-11-5	—	—	覚（北国方面での船賃など書上げ）	—	—	切紙	1	
3-258-12	—	—	〔書状〕（幾徳丸の入津状況など）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。後欠。
3-258-13	子9月21日	—	覚（鉄製品の品目と数量の書上げ）	源平	親方	切継紙	1	
3-258-14	—	—	〔一紙〕（「覚」）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-258-15	11月11日	—	〔書状〕（買付に関して助言する旨）	仁兵衛	幾徳丸	切継紙	1	端裏書「幾徳丸様　山仁兵衛」、「用書」。
3-258-16	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-259	11月28日	—	〔書状〕（お礼する旨）	米原此□	油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏書「油屋」。虫損小破。
3-260	—	—	〔一紙〕（こより）	—	—	切紙	1	
3-261-1	—	—	〔書状〕（大坂での銑販売などを報告）	—	—	切紙	1	3-261はこよりで一括。
3-261-2	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-261-3	3月7日	—	〔一紙〕	—	—	切紙	1	断簡。
3-261-4	—	—	〔一紙〕（極三本、黒砂糖など品目と数量の書上げ）	—	—	切継紙	1	
3-261-5	—	—	〔一紙〕（「御祝儀」など）	—	—	切紙	1	反故紙ヵ。
3-261-6	—	—	覚（銑ヵなどの数量の書上げ）	—	—	切紙	1	
3-261-7	—	—	〔書状〕（種右衛門がいるうちに来訪を依頼する旨）	麻右衛門	たい助、□□□、□□□	切紙	1	小破、端裏書「たい助様　麻右衛門」、「よ□じ」。
3-261-8	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-261-9	—	—	〔一紙〕（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	虫損小破。
3-261-10	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-261-11	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	小破。
3-261-12	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-261-13	―	―	〔金銭書上げ〕（染地代など）	―	―	切紙	1	
3-261-14	2月29日	―	覚（醤油、そろばん代など書上げ）	油屋卯十	御卸清右衛門	切紙	1	虫損小破。
3-262-1	11月21日	―	〔書状〕（大黒丸の動向などを報告）	宮本内林八	油屋彦左衛門	切継紙	1	端裏書「油屋彦左衛門様　宮本内林八」、「貴下内用」。3-262はこよりで一括。
3-262-2	―	―	〔一紙〕（御札ヵ）	―	―	切紙	2	包紙入、上書「上　油屋浅右衛門」。
3-262-3	11月26日	―	〔書状〕（書状の送り届けを依頼する旨）	其市	浅右衛門	切継紙	1	
3-263-1	亥11月18日	―	覚（金銭書上げ）	小山屋吉兵衛（印）	幾徳丸宇十郎	切紙	1	小破、印は「［　　］／小吉」。3-263は仮綴。
3-263-2	―	―	仕切覚（焚込掛などの書上げ）	―	―	切紙	1	小破。
3-263-3	11月17日	―	覚（しら菊代など書上げ）	岩田屋［　　］（印）	幾徳丸卯重	切継紙	1	小破、印は「金銀不用／［　　］」。
3-263-4	亥11月17日	―	仕切覚（鉄製品ヵの金銭書上げ）	伊勢屋源［　　］（印）	幾徳丸浅［　　］	切紙	1	小破、印は「伊源」。
3-263-5	亥11月18日	―	覚（金銭書上げ）	近江屋喜［　　］（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	小破、印は「北堀江／六丁目／近喜」。
3-263-6	11月18日	―	覚（金銭書上げ）	錫屋常■（七）（印）	幾徳丸卯重郎	切継紙	1	小破、印は「錫常」。
3-263-7	亥11月16日	―	仕切覚（薩摩黒砂糖代など書上げ）	錫屋常■（七）（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	小破、印は「錫常」ヵ。
3-263-8	11月18日	―	覚（黒砂糖代など書上げ）	錫屋常七（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	小破、印は「錫常」。
3-263-9	―	―	覚（金銭書上げ）	［　　］	いくとく丸［　　］	切紙	1	小破。
3-263-10	11月16日	―	覚（金銭書上げ）	北甚（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	小破、印は「大坂／久宝寺橋𠮷五丁東／紀伊国町門ノ脇／北村屋甚兵衛」。
3-263-11	亥11月17日	―	仕切覚（藍玉代書上げ）	伊勢屋源助（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	小破、印は「伊源」。
3-263-12	亥11月17日	―	目録覚（金銭書上げ）	伊勢屋源助（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	小破、印は「伊源」。
3-263-13	11月12日	―	覚（金銭書上げ）	当麻［　　］	浅右衛門	切継紙	1	小破。
3-263-14	11月11日	―	覚（釜、竿鉛代など書上げ）	松［　　］	幾徳丸宇重	切継紙	1	小破。
3-263-15	―	―	覚（有田節、熊野節代など書上げ）	―	―	切紙	1	小破。後欠ヵ。
3-263-16	11月15日	―	覚（飛切松葉代など金銭書上げ）	あら物屋半［　　］（印）	幾徳丸卯十	切紙	1	小破。
3-263-17	亥11月15日	―	覚（金銭書上げ）	亀屋善兵衛（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	小破。
3-263-18	亥11月15日	―	覚（金銭書上げ）	天王寺屋豊二郎	幾徳丸卯十	切継紙	1	小破。
3-263-19	11月14日	―	覚（金銭書上げ）	はりまや佐■	―	切紙	1	小破。
3-263-20	亥11月14日	―	覚（金銭書上げ）	はりまや佐七（印）	幾徳丸卯十郎	切継紙	1	小破、印は「難波橋／［　　］／播佐」。
3-263-21	亥11月14日	―	覚（積み荷の数量ヵ書上げ）	はりまや佐七（印）	幾徳丸卯十郎	切紙	1	小破、印は「難波橋／［　　］／播佐」。
3-264-1	戌11月	―	覚（松葉帯代の書上げ）	荒物屋市兵衛（印）	幾得丸勝蔵	切紙	1	印は「大坂／西横堀／瀬戸物町／荒物屋市重兵衛」。3-264はこよりで一括。
3-264-2	4月5日	―	〔書状〕（金銭を送付した旨）	真脇屋久次郎	油屋勝蔵	切紙	1	
3-264-3	11月7日	―	〔一紙〕（書状の包紙）	新屋直三郎	油屋勝蔵	切紙	1	上書「雲州田儀町油屋勝蔵様　新屋直三郎」、「尊下要用」、「従伯境」。印は「伯州／上道／新屋」。
3-264-4	―	―	〔鉄製品の数量書上げ〕	―	―	切継紙	1	
3-264-5	―	―	覚（焚込代の書上げ）	山□	幾徳丸茂平	切紙	1	
3-264-6	6月11日	―	〔書状〕（宅野、仁万方面における商売状況）	―	―	切継紙	1	前欠。
3-264-7-1	―	―	覚（床材の書上げ）	―	―	切紙	1	3-264-7-1～2が折りたたまれて一括。
3-264-7-2	―	―	〔金銭書上げ〕	―	―	切紙	1	
3-264-8	6月9日	―	おほへ（越後縮の注文票）	但馬屋	油屋浅右衛門	切継紙	1	端裏書「たぎ油屋浅右衛門様　はね但馬屋内」、「まいる」。布片が縫い付けられる。
3-264-9	6月2日	―	〔書状〕（幾重丸久八の動向などを報告）	大浦屋為十	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	端裏書「幾徳丸勝蔵様　大浦屋為十」、「急用」。
3-264-10	巳閏5月22日	―	〔書状〕（先頃ご注文の木綿の件について）	黒田屋千三郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-264-11	―	―	〔一紙〕（書状の包紙）	油屋勝蔵	真脇屋■次郎	切紙	1	小破。
3-265-1	―	―	〔一紙〕（反故紙ヵ）	―	―	切紙	1	
3-265-2	―	―	〔一紙〕（「売仕切」など）	―	―	切紙	1	

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-265-3	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-265-4	6月18日	—	〔書状〕（たばこを所望する旨）	おりや善昨	あふらや幾太郎	切継紙	1	
3-265-5	10月24日	—	〔書状〕（積み荷に関する指示）	彦左衛門	幾徳丸勝蔵	切継紙	1	
3-265-6	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	8	巻かれて一括。
3-266-1	—	—	〔書状〕（春徳丸船印の奉納を依頼する旨）	喜一郎	油勝	切紙	1	端裏書「油勝様　喜一郎」。3-266はこよりで一括。
3-266-2	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切継紙	1	
3-266-3	—	—	〔金銭書上げ〕	—	—	切継紙	1	断簡。
3-266-4	—	—	〔一紙〕（酒田における相場書上げヵ）	—	—	切継紙	1	
3-266-5	正月5日	—	〔書状〕（新年の挨拶と相場）	笹屋千右衛門（印）	油屋浅右衛門	切紙	1	虫損小破、印は「雲州／安来／笹屋」。
3-266-6	2月30日	—	〔書状〕（商売状況の通知）	春徳丸喜一郎	油若君、幾重久八	切継紙	1	端裏書「油若君様、幾重久八殿　春徳丸喜一郎」、「急キ用書」、「大急キ乱筆御免」。
3-266-7	安政5年8月26日	1858	覚（角井鍛冶屋の小割鉄代を受領した旨）	奥原　真一郎（印）	油屋浅右衛門	切継紙	1	印は「奥原御鑪」。
3-266-8	—	—	〔副状〕（御主人様への伝言などを依頼する旨）	—	—	切継紙	1	後欠。
3-266-9	—	—	〔書状〕（坂田四兵衛が米を買い付けたことなど）	—	—	切紙	1	断簡。
3-266-10	—	—	〔書状〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	1	
3-266-11	10月20日	—	覚（梅香を調達して欲しい旨）	桜井店	勝蔵	切紙	1	
3-266-12	—	—	覚（金銭書上げ）	—	—	切紙	1	
3-266-13	—	—	〔一紙〕（白紙）	—	—	切紙	1	
3-267-1	—	—	〔一紙〕（反故紙ヵ）	—	—	切紙	2	3-267はこよりで一括。
3-267-2	—	—	〔一紙〕（「神社仏閣諸細工所」）	宮屋鳥居治郎兵衛	—	切紙	1	刷物。
3-267-3	正月5日	—	〔書状〕（新年の挨拶）	油屋浅右衛門、勝蔵	最上屋彦左衛門	切紙	1	
3-267-4	—	—	〔一紙〕（「餅柚へし」の袋）	石国大森町　福嶋屋元祐（印）	—	一紙（袋）	1	刷物。
3-267-5	11月23日	—	〔書状〕（出産祝いとして鯛二尾を贈る旨）	森山文七	鳥屋尾精之助	切継紙	1	包紙入、上書「鳥屋尾精之助様」、「尊下」、裏書「森山文七」。
3-267-6	5月5日	—	〔書状〕（小鉄屋が買い置いた米のうち、石田屋へ渡す分の扱いについて）	長久丸正平	小鉄屋幸三郎	切継紙	1	元々未開封。包紙入、上書「越後新かた小川屋長左衛門様内　小鉄屋幸三郎様　長久丸正平」、「極急用」、「五月五日」、「越中伏木𠮷」。
3-267-7	正月2日	—	〔書状〕（新年の挨拶）	大野屋伝七	木綿屋由右衛門	切紙	1	元々未開封。包紙入、上書「雲州きづき木綿屋由右衛門様　大野屋伝七」、「余々人々御中」、裏書「正月五日」、「𠮷大坂」。
3-267-8	9月17日	—	〔書状〕（大坂における銑や鉄の相場と、その売り捌き状況などを報告する旨）	幾重丸久八	桜井五郎蔵	切継紙	1	元々未開封。包紙入、上書「桜井五郎蔵様　幾重丸久八」、「尊下要用」、裏書「九月十九日認メ」、「従尾ノ道」。
3-267-9-1	9月19日	—	〔書状〕（大坂における銑や鉄の相場と、その売り捌き状況などを報告する旨）	幾重丸久八	御釻忠兵衛	切継紙	1	元々未開封。包紙入、上書「御釻忠兵衛様　幾重丸久八」、「尊下要用書」、裏書「九月十七日認メ」、「自尾ノ道」。
3-267-9-2	9月17日	—	覚（古米、大豆、綿などの相場書上げ）	—	—	切紙	1	
3-267-10	未4月11日	—	覚（米ヵの代銭書上げ）	若さや利助（印）	小川屋御客宇十郎	切継紙	1	
3-268-1	未4月11日	—	覚（鉄を預かった旨）	北野屋又三郎（印）	油屋勝蔵	切紙	1	小破、印は「能州／所口／北野屋」。3-268はこよりで一括。
3-268-2	午3月9日	—	覚（鉄製品代など書上げ）	真脇屋久次郎（印）	幾徳丸浅右衛門	切紙	1	虫損小破、印は「真脇屋久次郎／宇出津」。
3-268-3	3月26日	—	覚（鉢台や箪笥などの調達を依頼する旨）	甫一郎	勝蔵	切継紙	1	小破。
3-268-4-1	5月10日	—	覚（金銭を預かった旨）	米屋重助（印）	味方屋七兵衛	切継紙	1	小破、印は「越後／新潟／□田」。3-268-4は折りたたまれて一括。
3-268-4-2	午5月10日	—	覚（たばこぼん代の書上げ）	箪笥屋友七（印）	油屋勝蔵	切紙	1	小破、印は「新湊／古町通／四之丁東／箪笥屋」。
3-268-5	—	—	〔一紙〕（鉄製品の数量の書上げ）	—	—	切継紙	1	断簡ヵ。

整理番号	年代	西暦	表題	差出人・作成者	宛先	形状	数量	備考
3-268-6	辰12月17日	—	相庭（米、大豆などの相場書上げ）	桶屋伝蔵	油屋	切継紙	1	小破。
3-268-7	寅大晦日	—	覚（金銭の受領を依頼する旨）	甫一郎	浅右衛門	切紙	1	
3-268-8	正月22日ヵ	—	相庭（白砂糖、鰹代など相場書上げ）	肥後屋夫一郎	油屋浅右衛門	切継紙	1	
3-268-9	未7月6日	—	覚（種ヵを預かった旨）	丸屋善十（印）	幾徳丸浅右衛門	切継紙	1	印は「雲州／三穂関／丸善」。
3-268-10	8月29日	—	〔書状〕（喜三右衛門が当町で療養中の旨など）	大浦屋為十	油屋勝蔵	切継紙	1	虫損小破。
3-269	—	—	長峯鉄代目録（金銭など書上げ）	—	—	横半帳	1	
3-270	安政5年5月19日	1858	小取替覚帳（金銭書上げ）	小川屋長右衛門（印）	油屋勝蔵	横帳	1	虫損小破、印は「越後新潟／金預不用／小川屋」。
3-271	—	—	〔一紙〕（こより）	—	—	一紙	10	箱内に散乱していたこよりを一括。

図　版

遺跡周辺の遠景（南東から越堂たたら跡と田儀港を望む）

遺跡周辺の遠景（北西から越堂たたら跡と中国山地・三瓶山を望む）

図版 2　　遺跡全景（1）

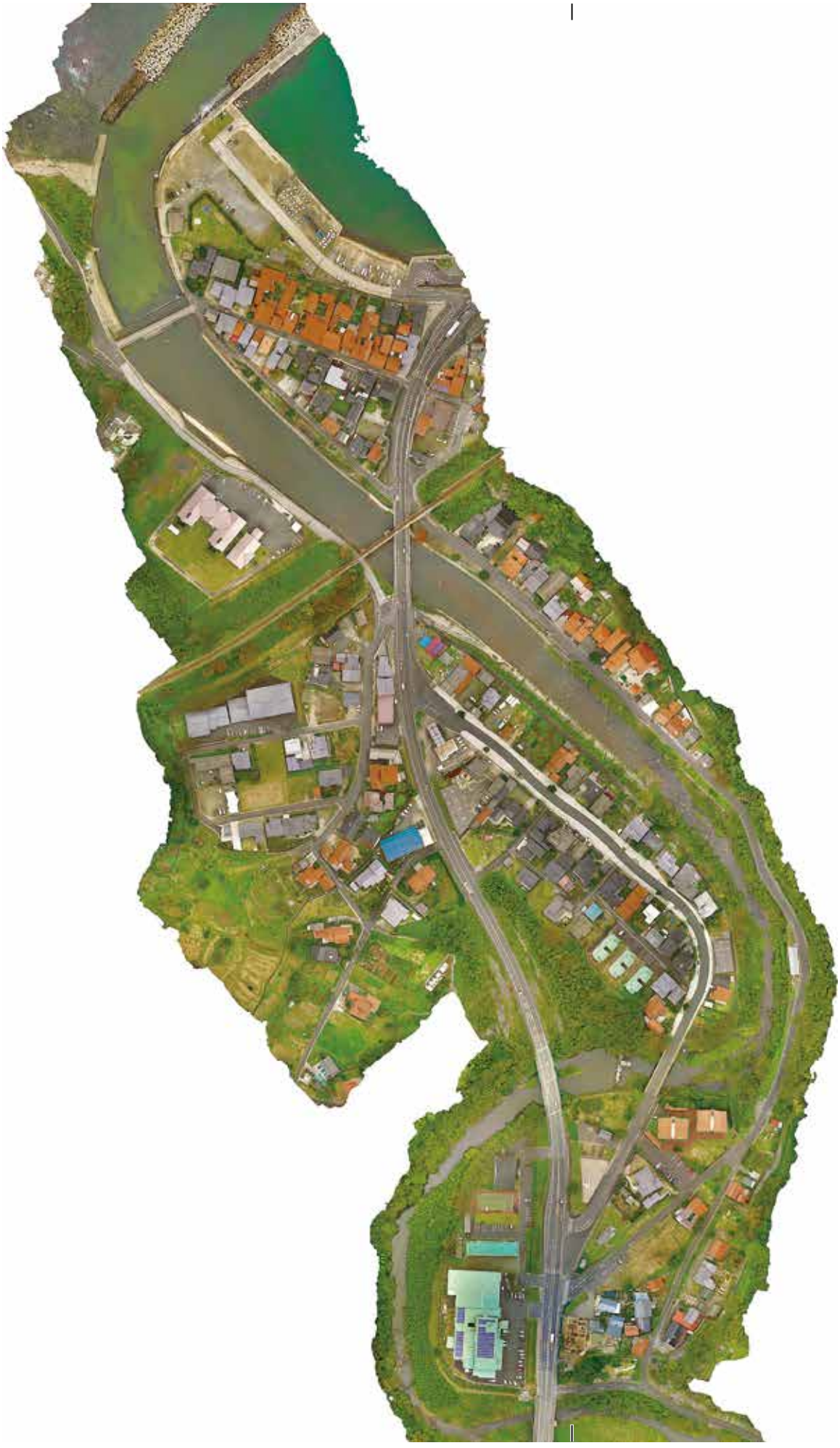
越堂たたら跡全景（南東から）

越堂たたら跡全景（北西から）

越堂たたら跡全景（南東から）

越堂たたら跡全景（北西から）

図版 4　　遺跡周辺全体図



越堂たたら跡と田儀川下流域周辺全体図（オルソ画像，上が北，越堂たたら跡はトンボの位置）

越堂たたら跡遺構全体図（オルソ画像，斜め左上が北）

図版 6　　高殿石垣

高殿北面石垣（北から）

高殿東面石垣（東から）

高殿南面石垣（南東から）

高殿南面石垣（西から）

高殿南面石垣（東から）

高殿北面石垣裏込め（C 区 2-2 トレンチ，南東から）

高殿南面石垣裏込め（高殿南 1 トレンチ，北西から）

高殿東面石垣裏込め（C 区 2-1 トレンチ，南西から）

高殿東面石垣裏込め（B 区北側トレンチ・C 区 1 トレンチ，北西から）

土層堆積状況（A・B 区東西横断トレンチ北壁，南東から）

土層堆積状況（A・B 区東西横断トレンチ東壁，西から）

土層堆積状況（C 区 2-2 トレンチ西壁，東から）

土層堆積状況（高殿南 1 トレンチ西壁，東から）

図版 8　　暗渠施設（1）

暗渠施設（北面石垣外側トレンチ，北から）

暗渠施設（北面石垣外側トレンチ，北東から）

暗渠施設（北面石垣外側トレンチ，北西から）

暗渠施設（東面石垣外側トレンチ，南東から）

暗渠施設（東面石垣外側トレンチ，南から）

暗渠施設（東面石垣外側トレンチ，東から）

暗渠施設（高殿南 3 トレンチ，南から）

暗渠施設（高殿南 3 トレンチ，南西から）

暗渠施設（高殿南 4 トレンチ，南から）

暗渠施設・高殿南面石垣対向石列（高殿南 4 トレンチ，南西から）

暗渠施設・高殿南面石垣対向石列（高殿南 2 トレンチ，南から）

暗渠施設・高殿南面石垣対向石列（高殿南 2 トレンチ，南西から）

高殿南面石垣対向石列（高殿南 2 トレンチ，北から）

高殿南面石垣対向石列（高殿南 4 トレンチ，北東から）

図版 10　砂鉄置場・炭置場・礎石列（1）

炭置場と礎石列（高殿南側，奥に高殿南面石垣対向石列，北から）

砂鉄置場（奥）・炭置場（手前）と礎石列（高殿北側・東側，北から）

砂鉄置場（右）・炭置場（左）と礎石列（高殿東側，西から）

砂鉄置場・炭置場の区画石列と礎石列（高殿東側，西から）

砂鉄置場と礎石列（高殿東側，西から）

炭置場と礎石列（高殿北側，北から）

炭置場（高殿北側，北から）

炭置場と礎石列（高殿南側，南から）

図版 12　押立柱

押立柱１礎石・根固め石（南から）

押立柱２根固め石（南から）

押立柱３根固め石（東から）

押立柱４礎石・根固め石（左に跡坪南側出入口の石敷，南東から）

押立柱４礎石（手前に跡坪南側出入口の石敷，南から）

押立柱４礎石・根固め石（左に跡坪南側出入口の石敷，東から）

押立柱４礎石に記された墨書文字「壹」（東から）

湯溜まり全体（南から）

湯溜まり土層堆積状況（2006 年度湯溜まりトレンチ，北東から）

束柱礎石列（高殿南側，北東から）

束柱礎石列（高殿南側，南東から）

束柱礎石（高殿北側，北東から）

囲炉裏跡（南から）

囲炉裏跡（中央）と束柱礎石（右）（北から）

図版 14　床釣り（1）

床釣り全景（北東から）

床釣り全景（南東から）

床釣り全景（南から）

本床・小舟（北から）

本床・小舟（南から）

床釣り構築状況（A・B 区東西横断トレンチ南壁，北から）

床釣り構築状況（A・B 区東西横断トレンチ北壁，南から）

東小舟内部煙道（北から）

東小舟内部焚口（南から）

息抜き穴（奥）・本床釣り床面（手前）（北から）

東小舟石壁と火渡し（南東から）

本床側壁（上）・東小舟石壁と火渡し（下）（東から）

図版 16　床釣り（3）

西小舟煙道出口（4期，北から）

西小舟内部煙道小口の甲（手前）と焚口（奥）（4期，北から）

西小舟甲上面（3期，A 区 1 トレンチ，北東から）

跡坪北側全体（北東から）

跡坪北側出入口（A 区跡坪トレンチ，南東から）

跡坪北側土層堆積状況（A 区跡坪トレンチ，北西から）

跡坪南側全体（北東から）

跡坪南側土層堆積状況（2006 年度跡坪トレンチ，北東から）

住宅跡背面石垣（左）・里道石垣（右）（西から）

里道石垣１（北から）

里道石垣２・３（北から）

山内北側石垣（南西から）

山内北側石垣（北西から）

田儀川沿いの水路跡（南西から）

越堂たたら跡（手前）と権現山（奥）（北西から）

図版 18　製鉄関連具（1）

製鉄道具（打鍬・種鋤・釜がい）

神像・初花

神像（上：正面　下：背面）

出土手水鉢（左上：正面　右上：背面　左下：左面　右下：右面）

図版 20　出土遺物（2）

出土陶器（1）（床釣り息抜き穴の土管）

48-13

48-14

48-9

48-23

48-19

48-25

48-26

48-27

50-64

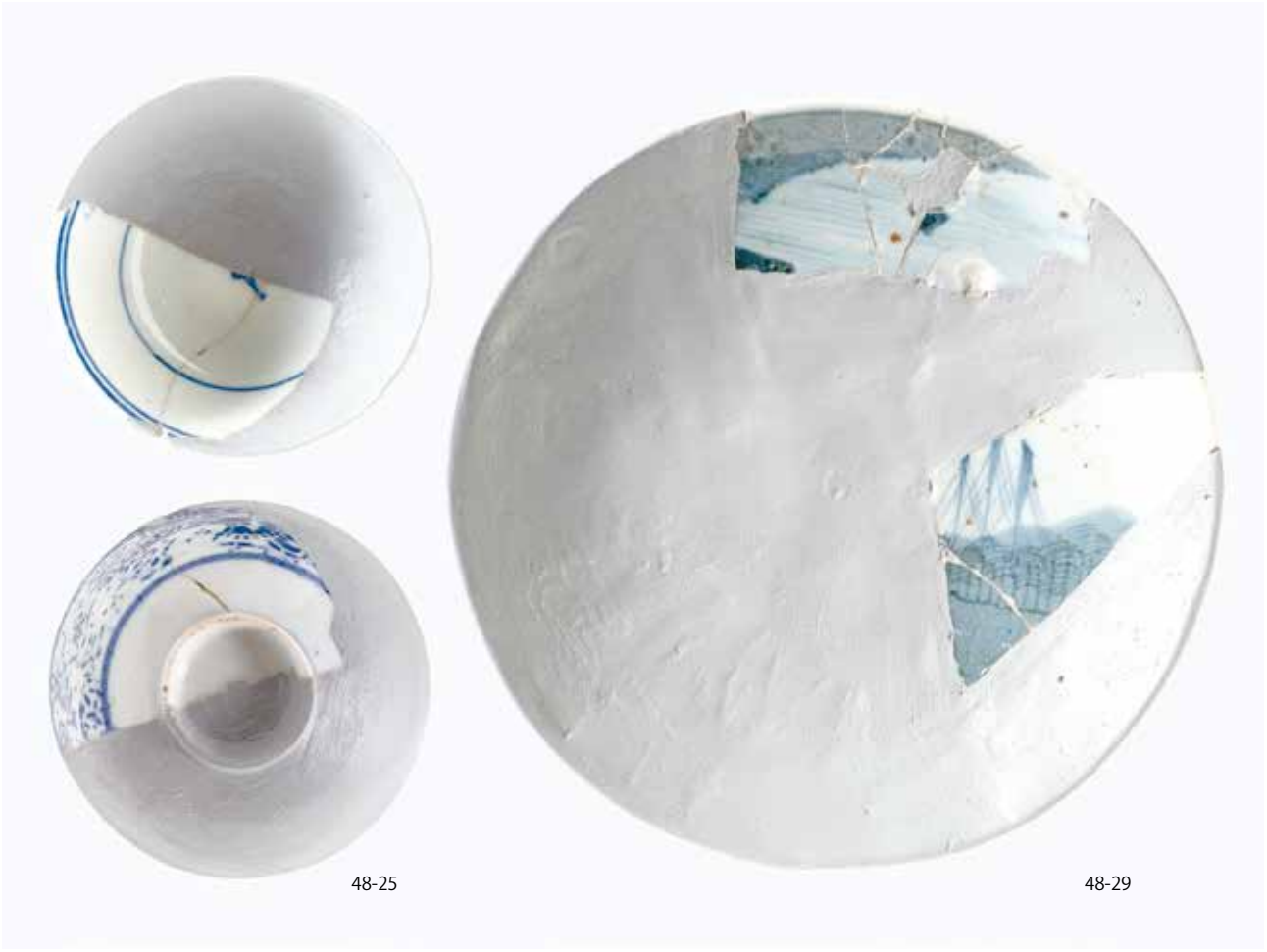
50-65

出土磁器（1）・陶器（2）

図版 22　出土遺物（4）

出土磁器（2）

出土磁器（3）

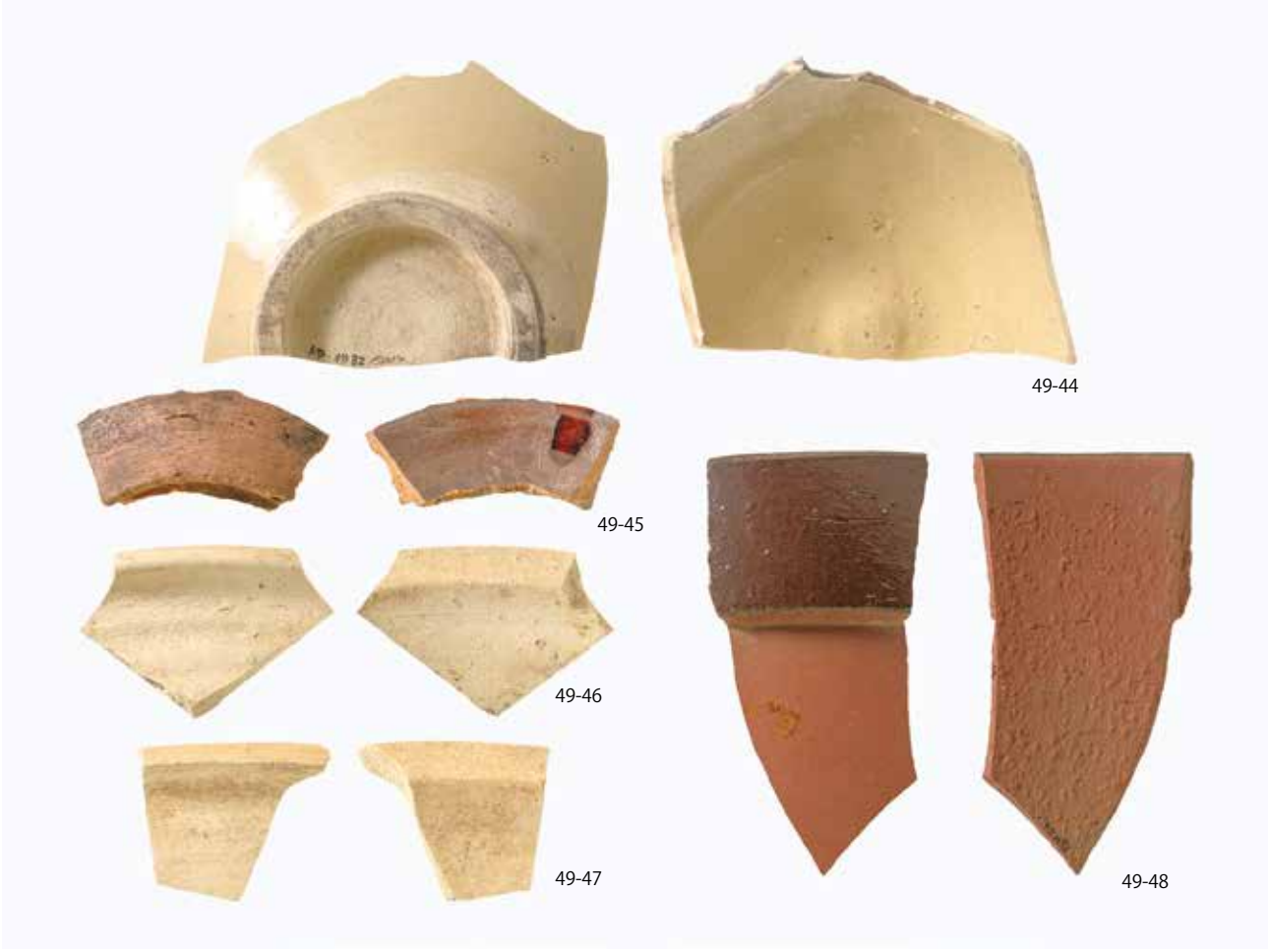


出土磁器（４）

出土磁器（５）・陶器（３）

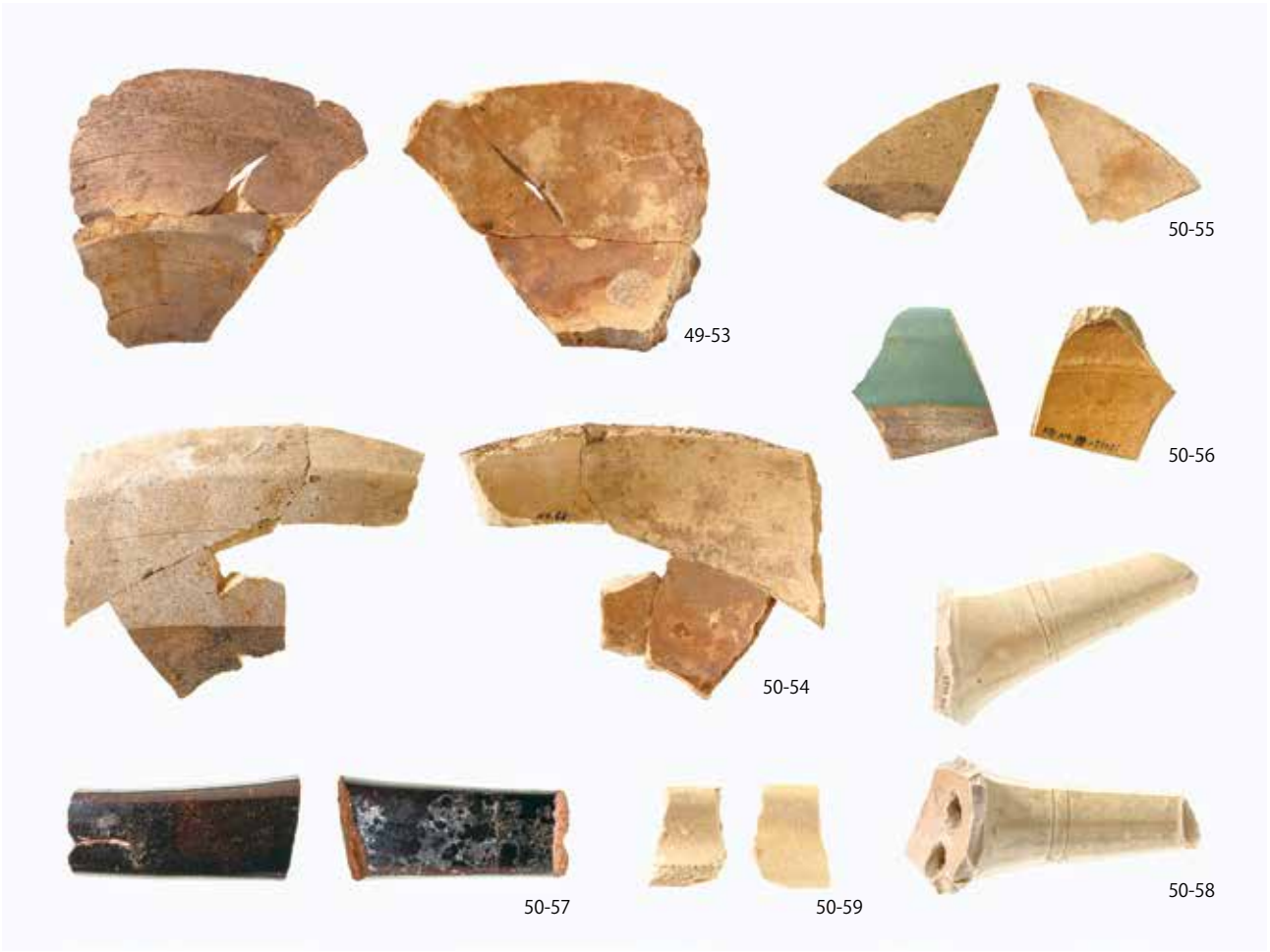
図版 24　出土遺物（6）

出土陶器（4）



出土陶器（5）

出土陶器（6）



出土陶器（7）

図版 26　出土遺物（8）

出土陶器（8）

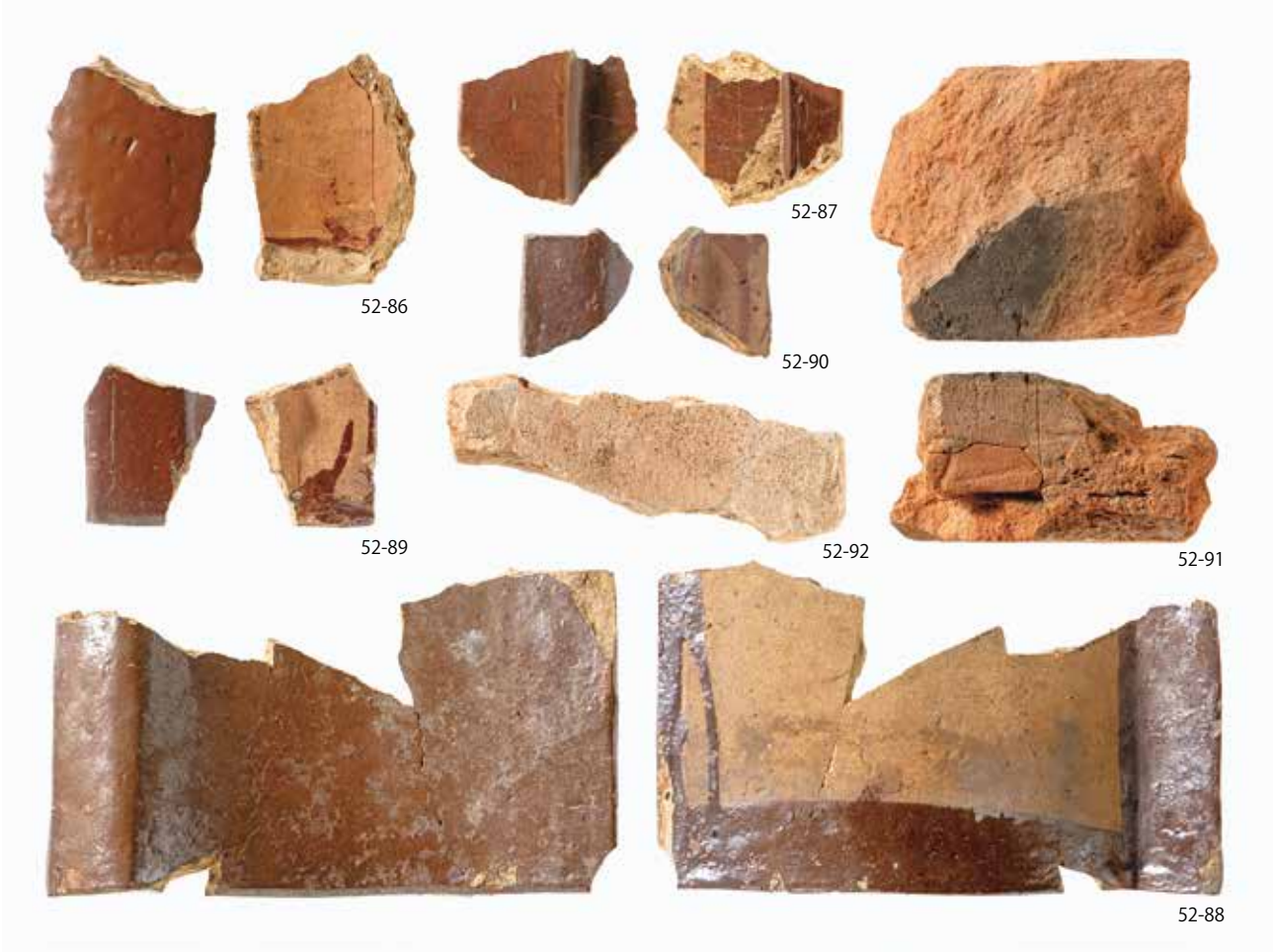
出土陶器（9）・土師質土器（1）・ガラス瓶・鉄製品（1）

出土陶器（10）

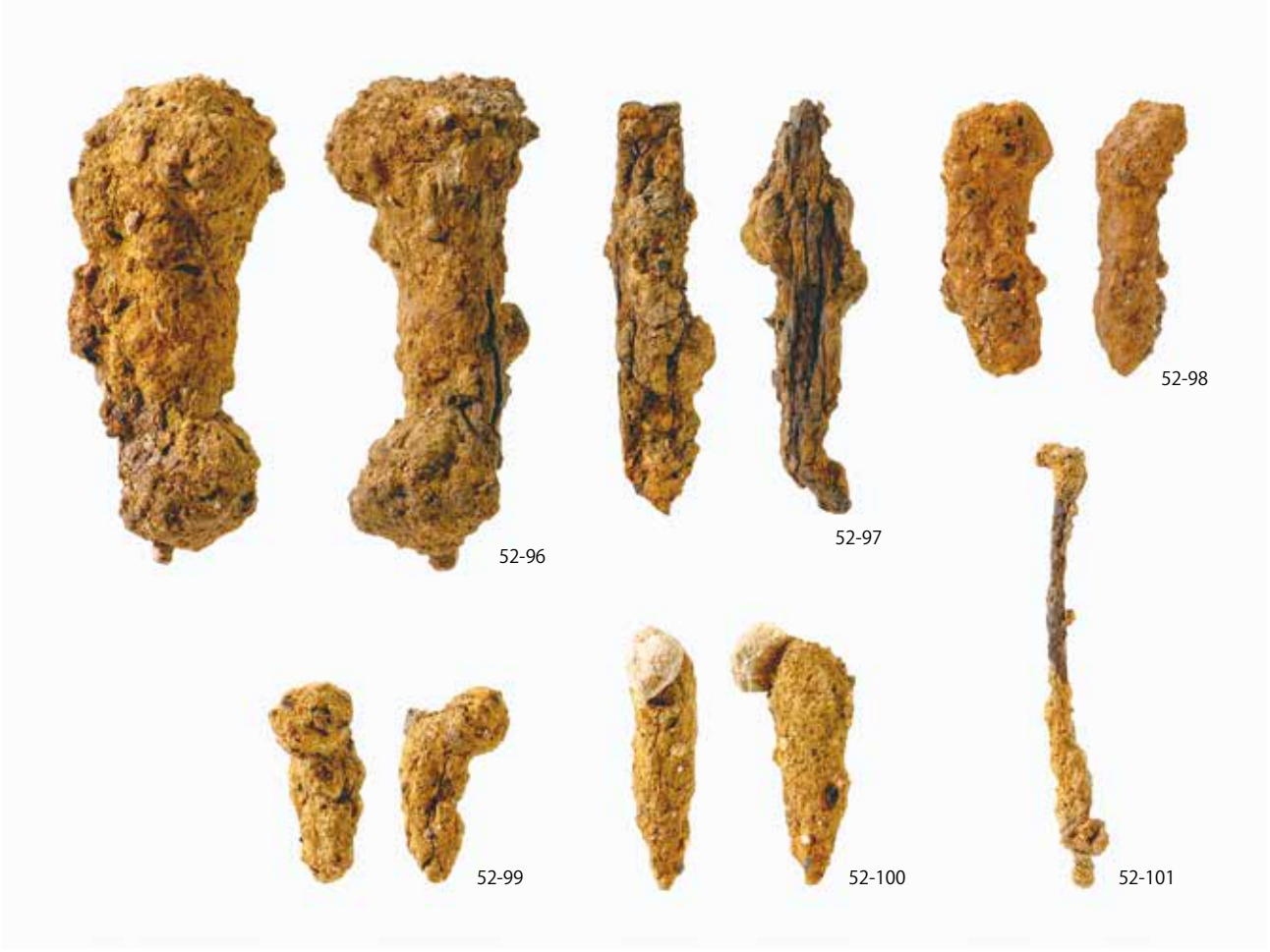
出土土師質土器（2）

図版 28　出土遺物（10）

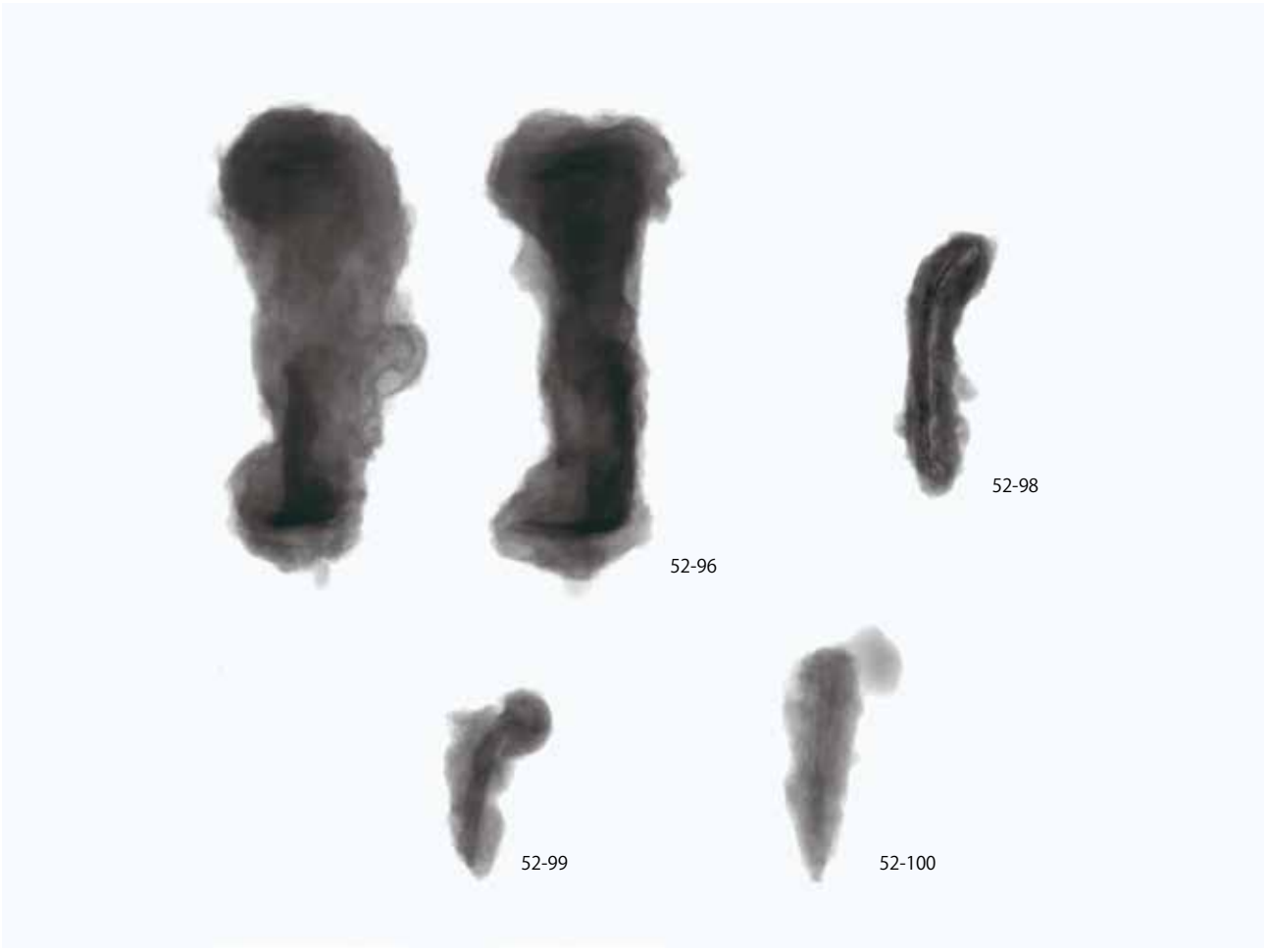
出土瓦（1）



出土瓦（2）・煉瓦・砥石

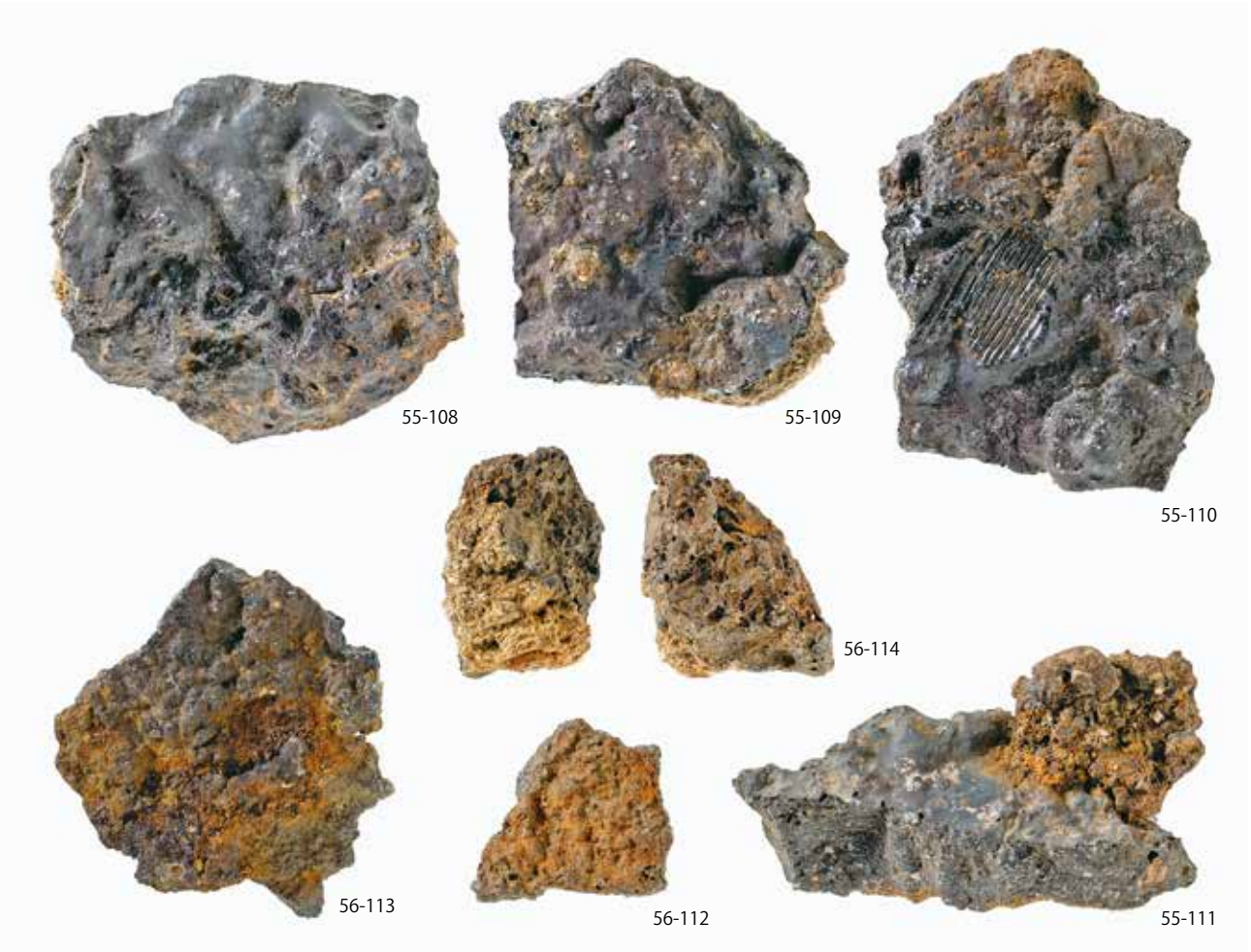


出土鉄製品（2）



デジタル X 線撮影（鉄製品）

図版 30　出土遺物（12）



出土炉壁（1）（上段・中段）

56-115

56-116

56-120

56-119

56-117

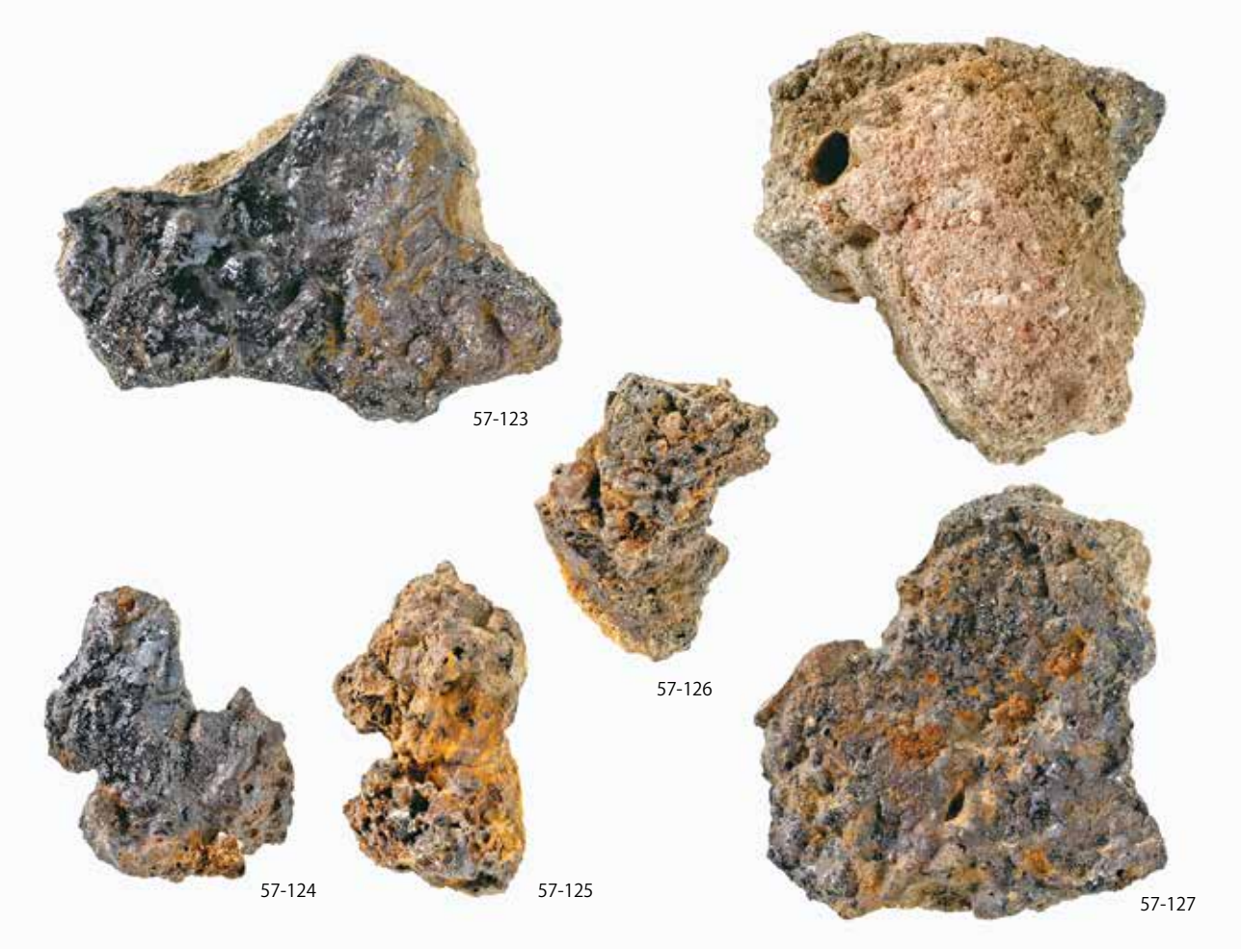
56-118

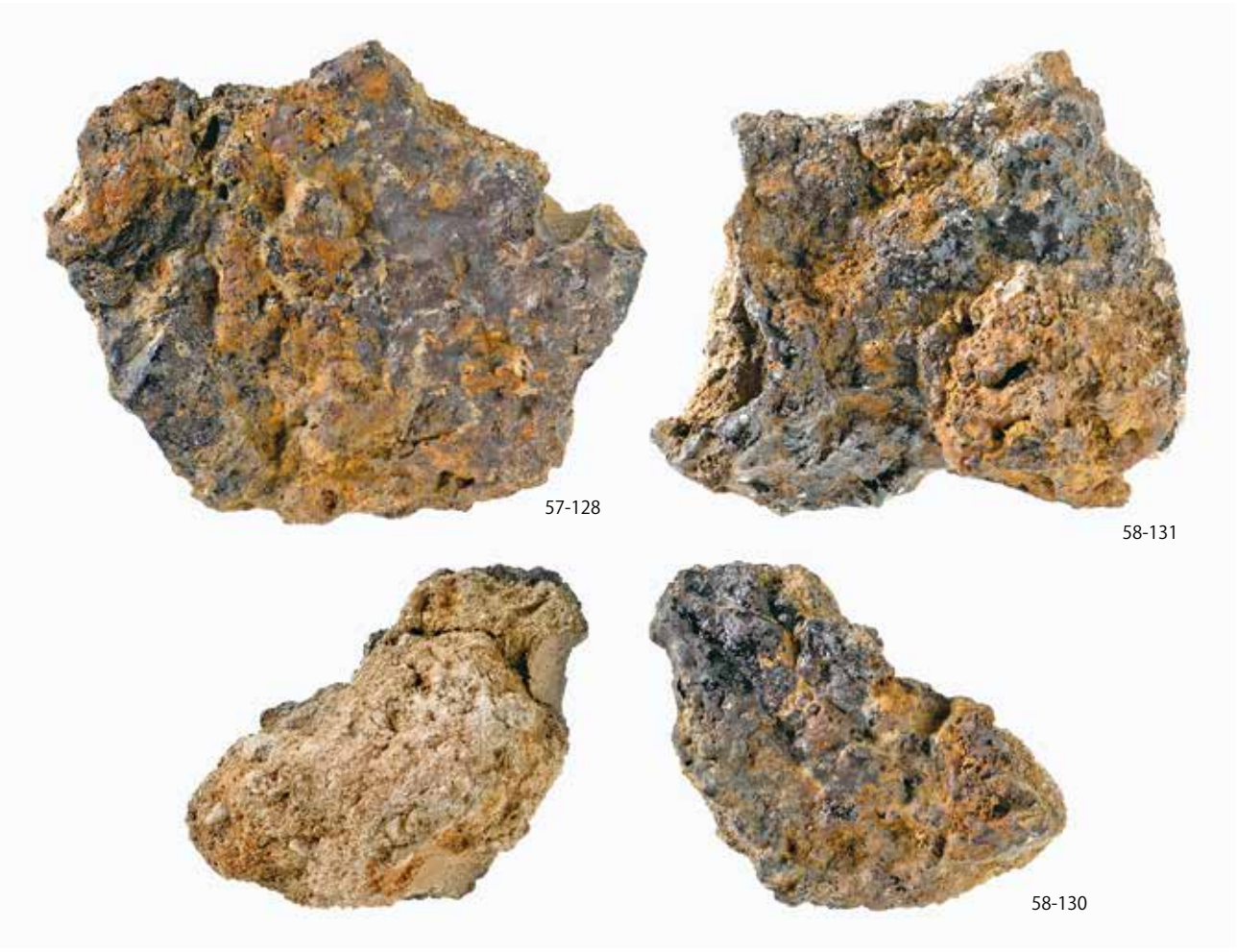
57-121

57-122

出土炉壁（2）（中段・下段）

図版 32　出土遺物（14）





出土炉壁（3）（下段）

58-132

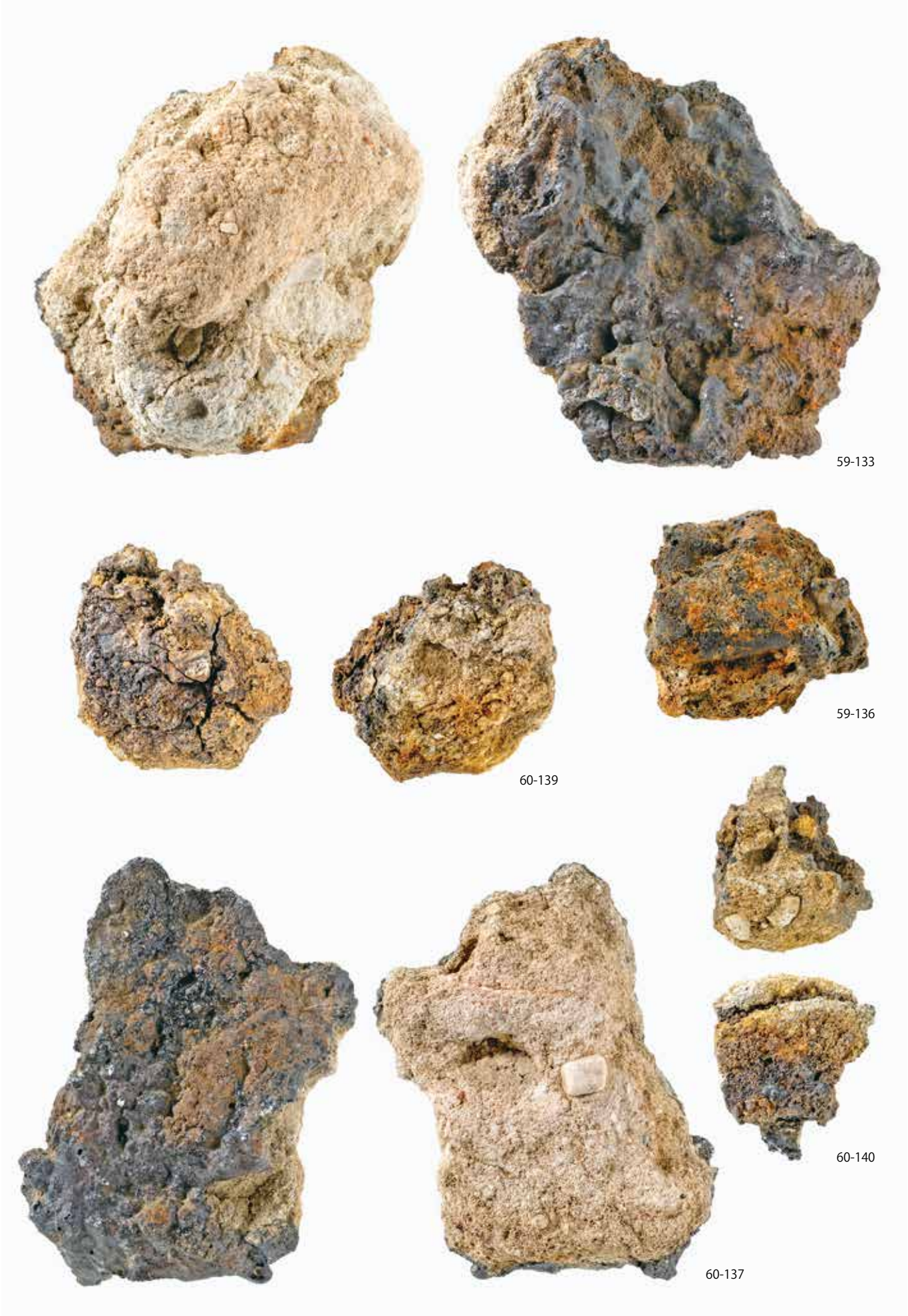
58-129

59-134

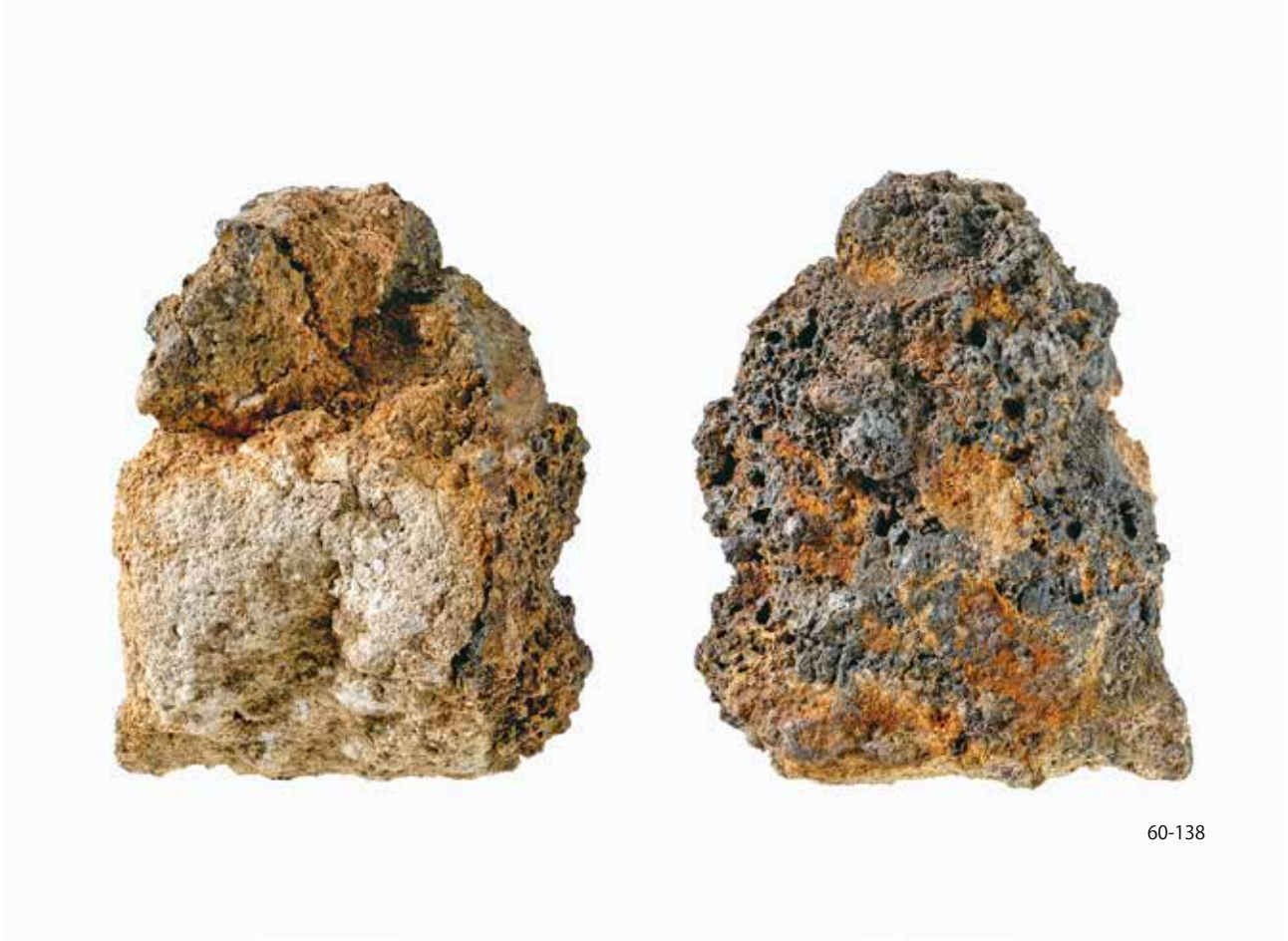
59-135

出土炉壁（4）（下段）

図版 34　出土遺物（16）

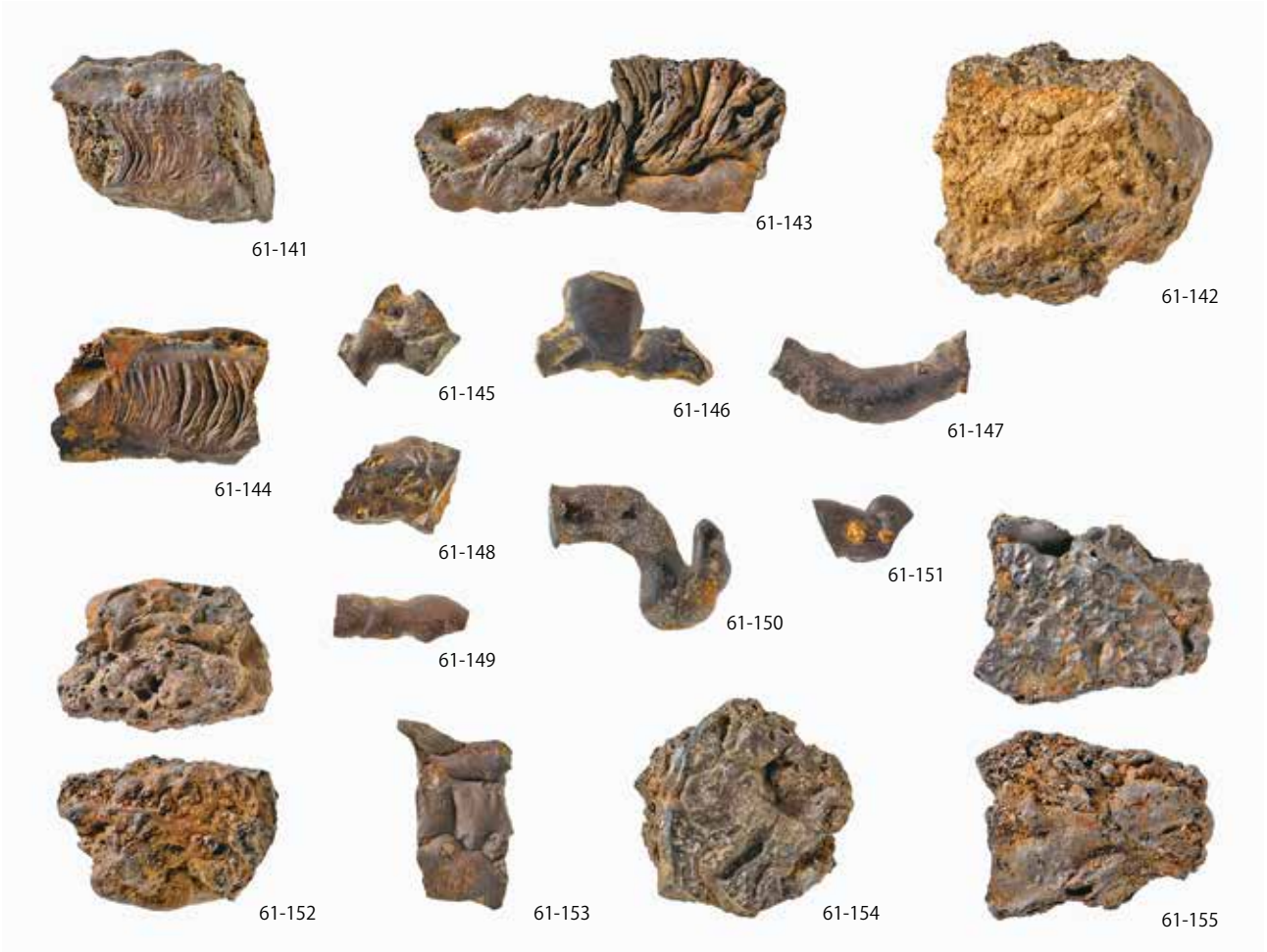


出土炉壁（5）（下段）



60-138

出土炉壁（6）（下段）



61-141

61-143

61-142

61-145

61-146

61-147

61-144

61-148

61-151

61-150

61-149

61-152

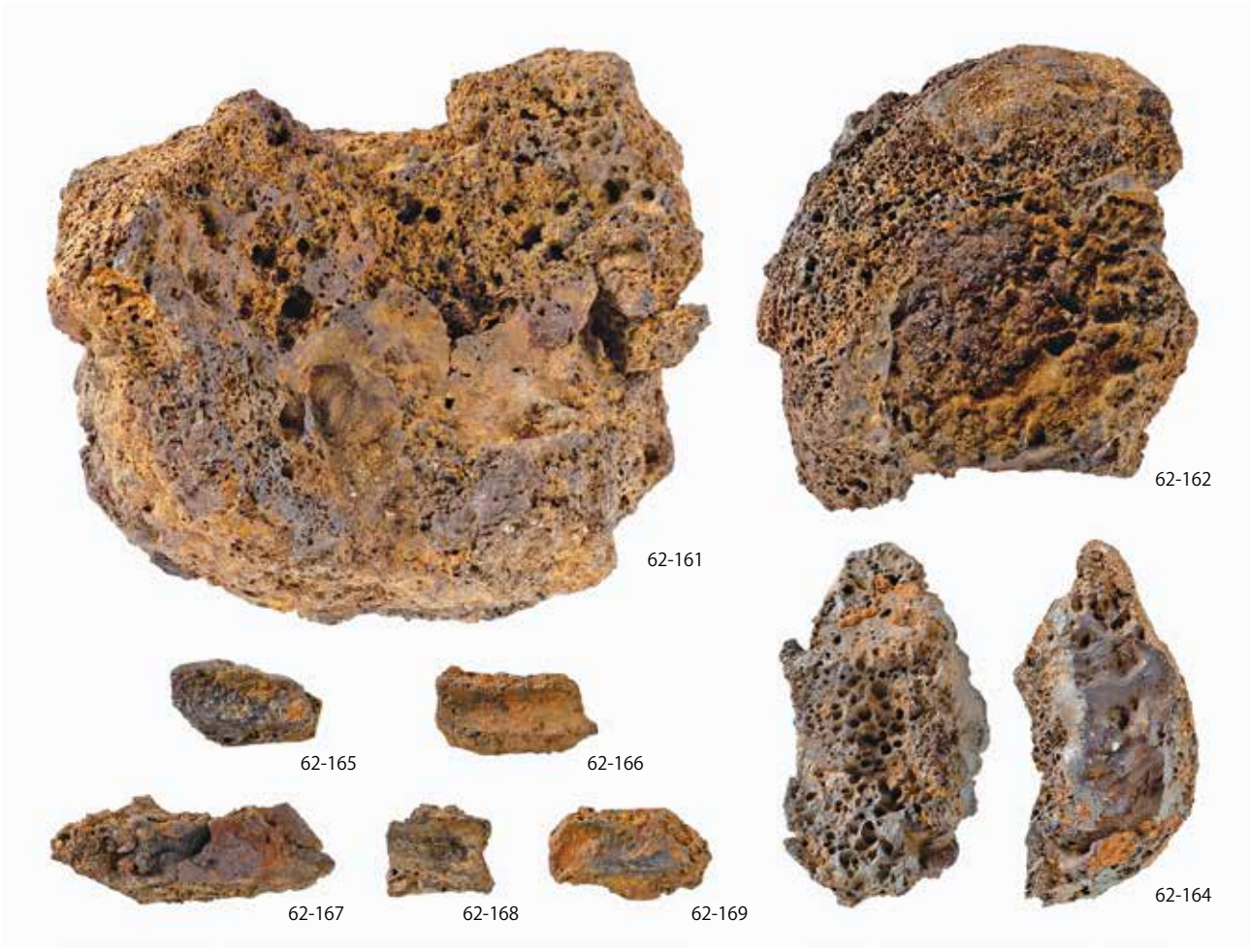
61-153

61-154

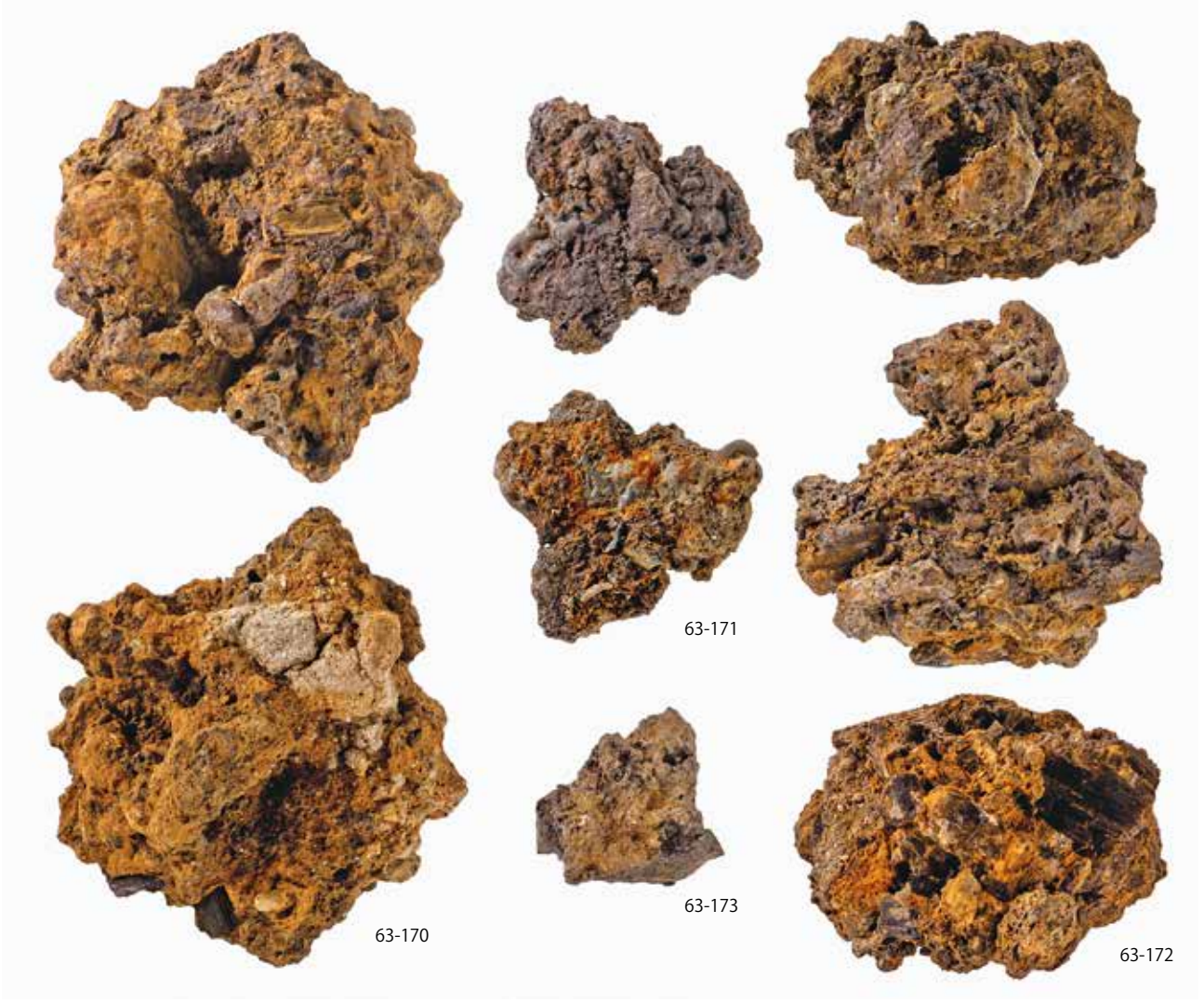
61-155

出土鉄滓類（1）（炉外滓）

図版 36　出土遺物（18）



出土鉄滓類（2）（炉外滓）



出土鉄滓類（3）（炉内滓）

図版 38　出土遺物（20）

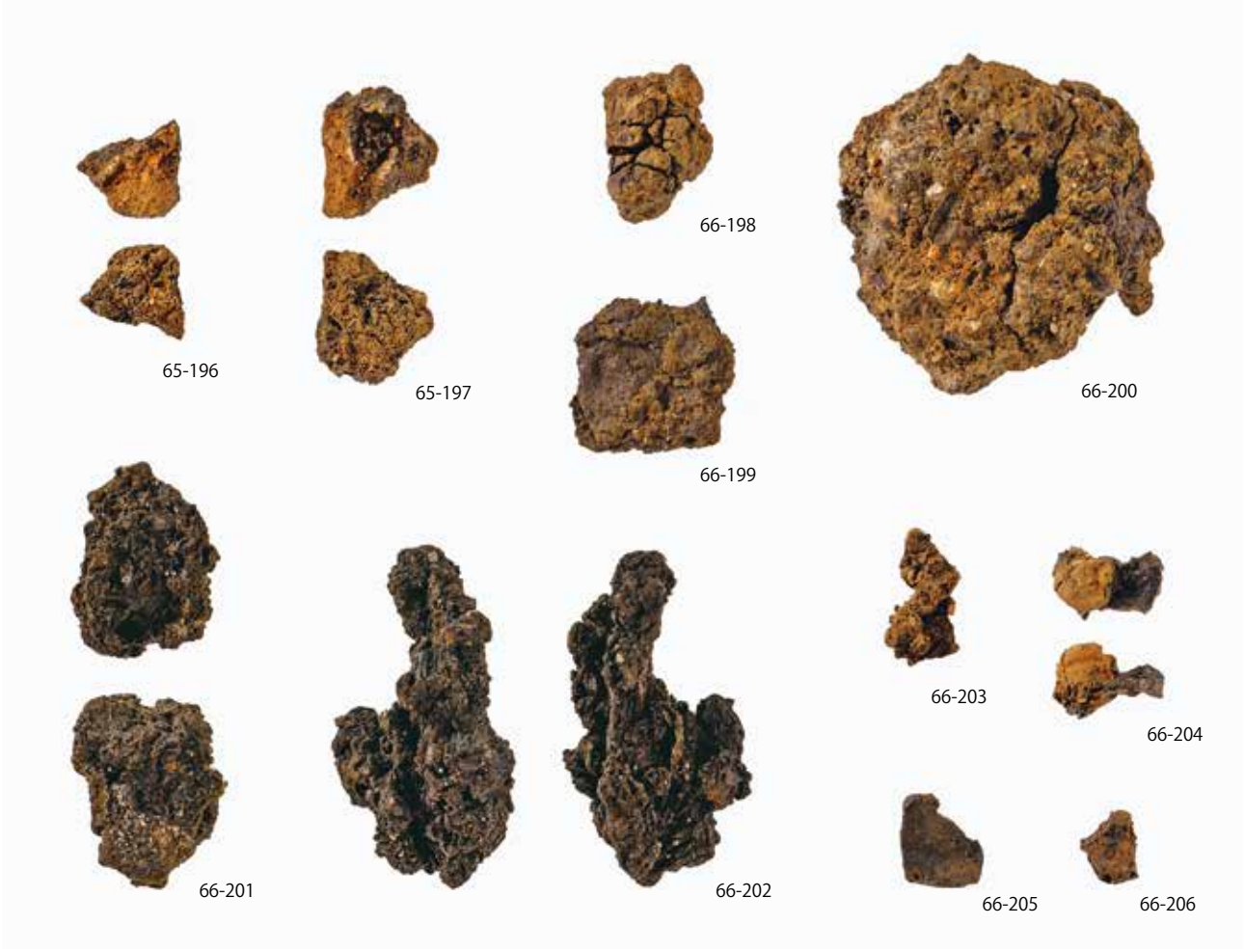
出土鉄滓類（4）（炉内滓）

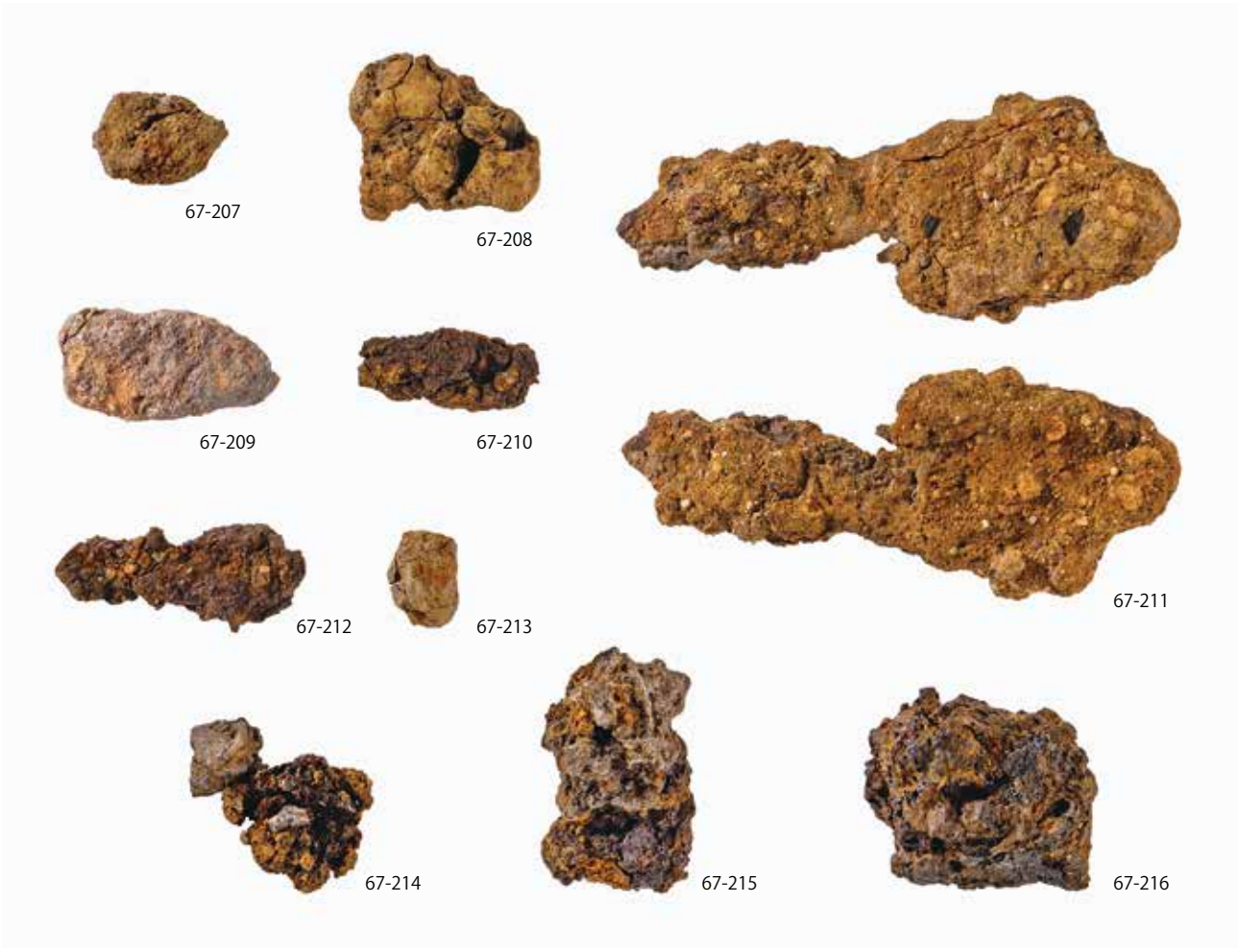
64-180
65-185
65-186
65-187
65-188
65-189
65-190
65-191

65-192
65-193
65-194
65-195

出土鉄滓類（５）（炉内滓）

図版 40　出土遺物（22）





出土鉄滓類（6）（炉内滓・鉄塊系遺物）

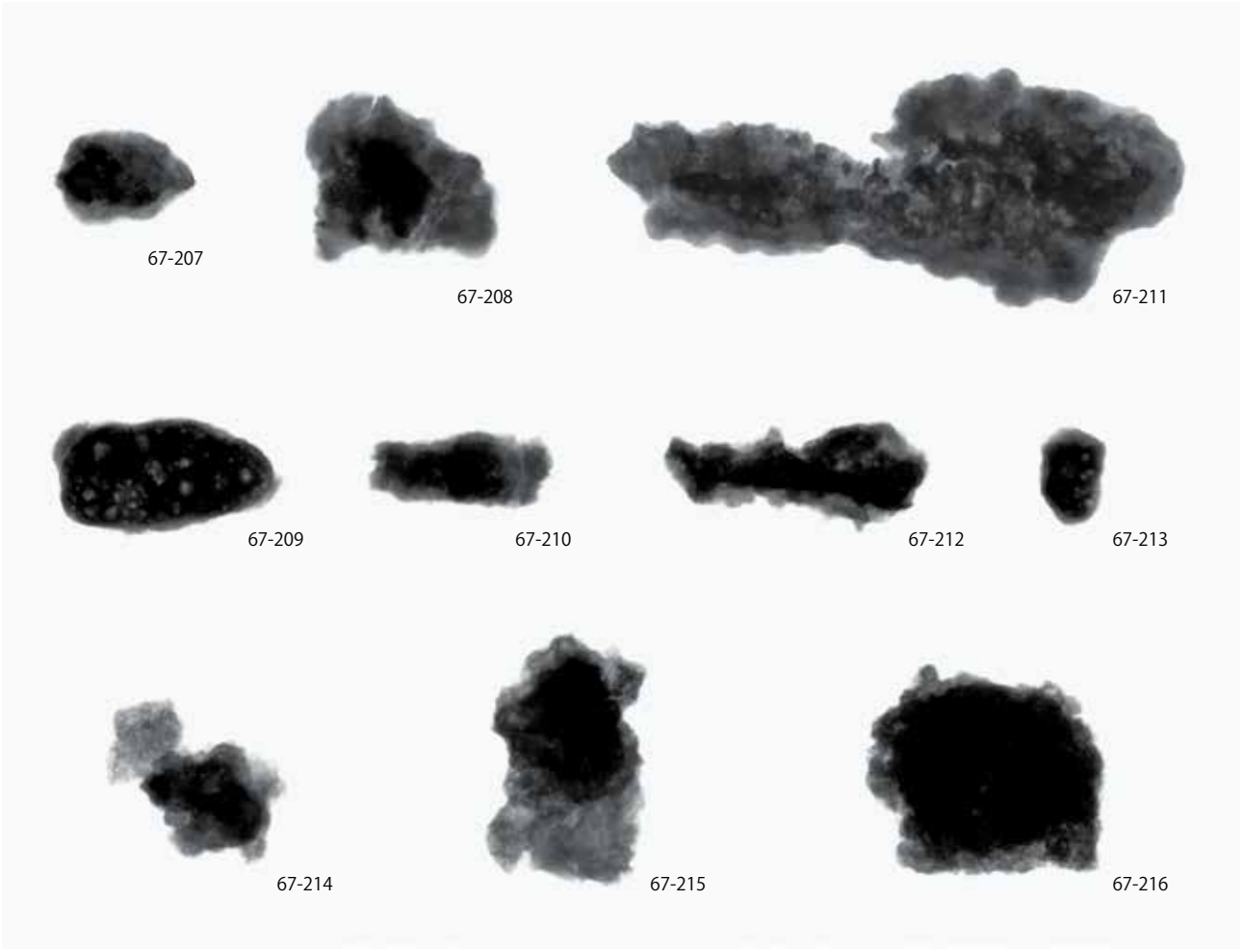
出土鉄滓類（７）（鉄塊系遺物）

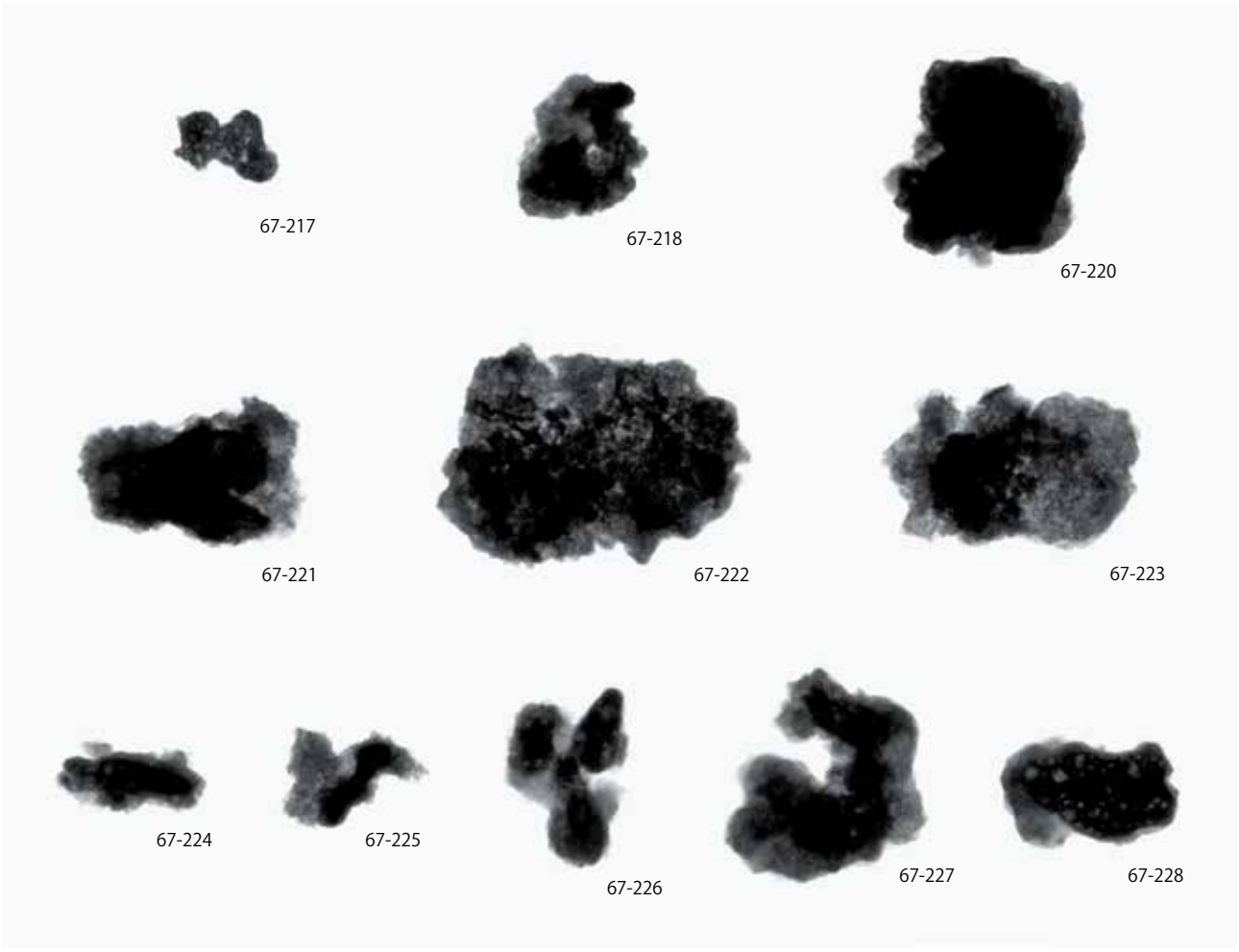
出土砂鉄

出土木炭

初花（製鉄関連具）

図版 42　出土遺物（24）





デジタル X 線撮影（鉄塊系遺物）

報告書抄録

ふりがな	こえどうたたらあと
書　名	越堂たたら跡
副書名	発掘調査と文献調査・文書目録
巻　次	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	50
編著者名	幡中光輔（編）　角田徳幸　中山玄貴　春日　瞳　渡辺正巳　奥中亮太　鈴木瑞穂
編集機関	出雲市市民文化部文化財課
所在地	〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760 番地　TEL（0853）21-6618
発行年月日	2022（令和 4）年 3 月 28 日

ふりがな		コード		北　緯	東　経	期　間	面　積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
こえどう越堂たたらあと跡	しまねけんいずもし島根県出雲市たきちょうくちたぎ多伎町口田儀 910 番 51 外	32203	c 17（島根県遺跡地図）	35° 15′ 53″	132° 34′ 55″	20131120 ～ 20170627	約 367㎡ 要　因 保存目的の内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
越堂たたら跡	製鉄遺跡	近世 近代	高殿石垣・操業面 暗渠施設・礎石列 砂鉄置場・炭置場・石列 押立柱礎石・囲炉裏跡 製鉄炉地下構造（床釣り）	陶磁器 土師質土器 瓦・ガラス瓶 鉄製品 製鉄関連遺物	高殿や床釣りに複数時期の改修痕跡が見つかり，長期間にわたる操業実態を確認。

要　約

越堂たたら跡は，現在の島根県出雲市多伎町に所在し，日本海沿岸部に立地するたたら場跡である。越堂釛は出雲市多伎町周辺を中心に製鉄業を営んだ田儀櫻井家の基幹たたらとして操業され，田儀櫻井家が経営する以前の時期を含めると，少なくとも約 150 年間という長期間にわたり稼働していたことが文献史料から確認されている。

今回の越堂たたら跡の発掘調査は，高殿内とその周辺を対象に遺構の残存状況を把握するために実施した。調査では高殿石垣や押立柱礎石，砂鉄置場や炭置場など高殿内部の遺構が良好に残存することを確認した。また複数のたたら操業面や硬化面が存在し，それに伴う高殿や床釣りの造り替え痕跡が見つかるなど，複数時期にたたら場が改修された状況が認められ，長期間操業におけるたたら場の実態が明らかになった。

文献史料の調査では，明治初期の越堂釛山内の景観復元と田儀櫻井家のたたら経営の検討が試みられた。さらに，田儀櫻井家の越堂釛操業の要となる日本海沿岸地域の砂鉄輸送の展開や，明治初年頃の稲扱の生産と流通についても新たな史料などを踏まえて詳細に追究され，田儀櫻井家のたたら製鉄経営の実態解明が進んだ。

また，越堂釛に近接する田儀浦などを中心に，近世後期から明治初期にかけて廻船業を営んだ鳥屋尾家の新たな史料群が近年発見された。そこには田儀櫻井家や越堂釛に関する記載内容が多く含まれており，この史料群を鳥屋尾家新出文書として文献解題と文書目録を掲載し，今後の調査研究に資する重要な基礎史料として位置づけた。

こうした調査の成果を踏まえ，長期間操業にみる越堂釛の改修の背景や砂鉄流通の展望，そして田儀櫻井家のたたら経営からみた越堂釛の位置づけを総括した。

出雲市の文化財報告 50

史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査整備報告書Ⅱ

越堂たたら跡

―発掘調査と文献調査・文書目録―

2022（令和 4）年 3 月 28 日

編　　集　　出雲市市民文化部文化財課
〒 693-0011　島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL（0853）21-6618

発　　行　　出雲市教育委員会
〒 693-8530　島根県出雲市今市町 70 番地
TEL（0853）21-6874

印刷・製本　　柏村印刷株式会社